
Magical Trigger

k i d

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c a l T r i g g e r

【Nコード】

N 6 5 3 1 H

【作者名】

k i d

【あらすじ】

「あの戦い」から一年という時が過ぎた：青年は「デビルハンター」として悪魔を狩り続けていたが、ある日飛ばされ辿り着いた世界に待ち受けていたのは新たな戦いだった：いつもとかわらぬ時、いつもとかわらぬ日常、全ての始まりは偶然ではなく必然だったのかもしれない：

【この小説は“ DevilMayCry4 ”から一年の歳月が経った世界から“ 魔法少女リリカルなのはStrikerS ”の世界に来たネロとダンテが主人公の作品です。ネロが原作よりも大人しい

性格になっていますが、そちらにも理由があります。余談ではありますが、ネロがミッドチルダに来て7日間の物語であり、“（Devil May Cry《stories MID-CHILDRA》”へと続きます】

E p i s o d e . . 0 \ p r o l o g u e 〈序章〉 \ (前書き)

わからない事だらけですが、よろしくお願いします。

Episode 0 (prologue (序章))

ある一室の電話からベルが鳴り響いていた。

ある人間が受話器を取るなり一言、少し面倒臭そうに言葉を発する

「Devil Must Die」

何度か返事を返すと、メモ帳にペンを走らせ受話器を置くと、コー
トを羽織りながら歩き出した。

「さあて…。仕事だ！」

背中に身の丈近い剣を背負い、大型のリボルバー銃を腰のホルスタ
ーに突っ込むと、外へ歩き出す。

ガレージの中にあるバイクに乗り、エンジンをかけると一人の女性
が声を掛けてきた。

「あら、ネロ！？ どうしたの？」

「キリエ…わるいな。仕事が入った」

キリエと言う女性の問い掛けにネロと言う男性が返答すると、彼女
は少し残念そうに顔を伏せた

「また悪魔なの…？」

不安と心配が混ざったような目でネロを見つめた…

「大丈夫だよ。外に出なきゃならないけど明日には戻るさ」

ヘルメットとゴーグルを着けながら、軽い口調で返した。

「だけど…」

「大丈夫だよ。すぐに帰ってくる」

キリエに心配を掛け無いように、口調は先程と変わらないが芯の強い眼差しを向けた

それに納得すると、バイクのアクセルを吹かしながら、もう一言だけ付け加えた

「行ってくるよ、キリエ。」

その言葉に彼女も応えた

「行ってらっしゃい、ネロ。」

今回の仕事は悪魔の討伐。

仕事内容はいつもと変わらないが、彼らが住んでいる《フォルトウナ》と言う都市は、外界と離れた島国であり、外に出る仕事となると船を出さなければならぬ…

船を降り、バイクを走らせ数時間後…。目的地に到着。

家を出たのは昼間だったが、夕日がもうすぐ沈む所まで来ていた。

「座標は…ここであってよな…」

バイクから降りながらメモ帳の座標と地図を交互に見比べた。辺りを見回したが、瓦礫の山と廃屋が一つあるだけ。

誰も住んでいる気配はないが、とりあえず向かってみようと、ドアノブに手を掛けようとした時、グローブを着けた右腕が疼いた。

すぐにそれを察知して、ドアから後方へ飛び退くと、先程まで自分がいた場所がドアごと切り刻まれた

「なるほど、そうきたか……。悪魔らしいな！」

Episode..1 Devil Hunt 〈悪魔狩り〉 〈前書き〉

《黒》の名を持つ若き騎士は《赤の女王》と《青い薔薇》を携え、
魔の軍勢と踊る…

Episode 1 Devil Hunt 〈悪魔狩り〉

「C'mon（来いよ）！」

レッドクイーン
大剣の柄に手を掛けながら挑発の言葉を放つ。

すると、廃屋の中からズタ袋を着たカカシの手足に大鎌が取り付いた様な化け物が数体出て来た。

「なんだ？ ザコ悪魔の掃き溜めか？」

拍子抜けした様に言った瞬間、スケアクロウ悪魔が一斉にネロに飛び掛かる。

大抵の人間ならば恐怖で動けない様な状況でも、彼は臆する事なく自分もスケアクロウの方に突っ込んで行った。

大鎌と剣がぶつかりあうが、即座にその大鎌を押し切りつつ、剣の柄を捻る。瞬間、剣が炎を噴き出しながら2体のスケアクロウを斬り裂いた。

剣の推進力に身を任せながら、奥にいた悪魔に間合いを詰めると、剣を逆手で持ち替えながら柄を捻り、悪魔を殲滅していく：

レッドクイーン
大剣に搭載された《イクシード》と言う機能は、剣の柄をバイクのアクセルの様に捻る事で剣から推進剤を噴き出し、斬撃を上げるものである。

だが、この《レッドクイーン》はネロ専用に改造を施しており、並の人間では扱えない程に凄まじい推進力を持っていた。

「Crash（壊れろ）！」

最後の一体になったスケアクロウに斬撃を浴びせ、剣を背負う。

「これで終わりか？」

腕を組み、何もない空間に一言呟く：

だが、廃屋の中に潜んでいたスケアクロウが奇襲を仕掛けようと、飛びかかるが、

「Be gone（失せな）！」

既に分かっていたようにその左手には愛銃の《ブルーローズ》が握られており、引き金を引いた瞬間、縦に並んだ二つの銃口から弾丸が発砲された。

スケアクロウは無惨にも弾丸に貫かれ、辺りにズタ袋と白濁した体液をぶちまけ消滅。

左手で数回銃を回転させ、腰のホルスターに納めると、悪魔が湧いて出て来た廃屋に目を向け： 今度は包帯を巻き、グローブを着けた右腕に目を向ける。

「これで本当に終わり…みたいだな」

一步、また一步と廃屋に近づき、中に入ってみる。予想通り中は荒れ果てており、人が住める状態ではなかった。

何も無いことに納得し、外に出ようとした時：ふと足を止めた。

振り返ると棚の一ヶ所から赤い光が見えた。

僅かにだが、自分の右腕もそれに呼応する様に疼く…。

呼び寄せられるかのように《それ》に近づき、右手で手に取って見た。

大きさは掌に乘るくらいの赤い宝石。

「なんだ…これは…？」

次の瞬間、ネロの体は光に包まれ…消えた…

E p i s o d e .. 2 〽 異界へミッドチルダ〽 〽 (前書き)

魔石に導かれし者…

これは新たなる戦いの幕開け…

今、若き騎士が異界の地へと辿り着いた…

Episode..2 異界へミッドチルダへ

「ぐっ……、ううつ………」

目を覚ますと、辺りは見たこともない土地だった：

確かに、今回の仕事は初めて来た土地だったが荒廃した地面と瓦礫、廃屋しかなかったはずが、森の中に横たわっていた。

自分の周囲には廃屋の木材や瓦礫が散らばり、幸い自分が乗って来たバイクもあった。

体を起こし、服についた埃を祓うと倒れたバイクを起こしながら、取り敢えずこれまでの事を思い返した

悪魔の討伐に来て謎の石を手に取り、その石が光を放った所で記憶が途切れていた。

(そうだ!!！)

はっとし、ぼーとしていた意識が明細になっていく。

「あの石!」

右腕の袖を捲り、グローブと包帯を取ると、そこには人外の異形の右腕があった：

外殻のようになり、手の甲から肘の付近まで亀裂が走り、同時に青白い光をぼんやりと発していた。

指先も爪が尖っており、まさしくそれは《悪魔の右腕》：

右腕に意識を集中し、《赤い宝石》のイメージを浮かべると、掌の上に《それ》は出現した。

「こいつのせいかな？」

その宝石を見詰めながら一人考えてみるが一度溜め息をつくともう一度右腕の中に《レリック》を吸収する

「取り敢えずここが何処かな……!? まさか魔界……じゃないかな？」

空を見上げると、満天の星空と月と思われる大きな星が二つ。更に、近隣の惑星らしき星も存在した。

コートの懷から時計を取り出すと、時刻は18時前だった……確か悪魔と戦っていたのは17時半くらいのはず……。夕方だったが、まだ日が沈むまで一時間はあったはずだったが、日は沈みきっていた。

何より、周囲の様子からここが自分のいた土地……、それどころか自分のいた世界では無いことを直ぐに察する。

今までに幾多の悪魔と戦ったが、流石に魔界にまでは来たことはなかった。

不幸中の幸いにも、バイクは壊れていなかったので取り敢えず移動して人を探すことにした。

「頼むから魔界ってのは無しにしてくれよ……」

バイクで夜風を切りながら眩き、元いた場所を後にした

夜も更けており、とにかく安全に寝れる場所を探す。
コンパスは持ってきていたが、バイクの下敷きになり壊れていた。
そもそもコンパスが使えるかどうか分らない世界では宛にはできなかった。

結論として、川を見つけ下流に向かうことにした。
運良く川はすぐに見付かった。

バイクから降り、川の水をすくうと一口飲んでみる。
昼にフォルトウナを出てから何も口にしていなかったから、少し気分を落ち着かせる事が出来た。

口を拭うとそこに腰を降ろし、空を見上げるが、ここが異世界であることは認めざるを得ない…

「フォルトウナでもこんな星は見られなかったからな…。」

異世界なのは間違いないが、星空を見ると不思議と不安が消え、気持ちも楽になった。

「朝になったら誰かいないか探してみるか…。」

剣を地面に突き刺し、もたれ掛かり瞼を閉じた。

(キリエ…)

まどろむ意識の中、恋人とも姉とも言える女性の名前がよぎる……………

Episode..3 Devil Bringer〈悪魔の右腕〉（前書き）

異界の地にたどり着いた若き騎士は、遂に二人の魔導士と騎士に遭遇する…

Episode..3 Devil Bringer 〈悪魔の右腕〉

目を覚ますと日は昇り、朝になっていた。

時刻を確認すると、まだ朝の5時…。早く寝た分早く起きれたという事だろう。

地面に突き刺した剣を抜くと背中に背負い、昨夜考えた“川を下流に向かい、人を探す”という案を実行する為にバイクにまたがる。

エンジンをかけ、道らしい道を進んで行くと、人が踏み固めて作ったと思われる道に出る事が出来た。

少し荒れているが、そこだけ草が生えておらず、微かに靴の跡も残っていた。

少しばかりの安堵感を得ることができ、バイクを走らせる。

バイクを走らせること数時間が経過…

新たな問題が発生した。

「嘘だろ…」

ガス欠…

わけも分からない世界にいたと言うのに、一気に気分は最悪の状態に落ち込む。

人も見付けられず、食料も確保していない上に、ガス欠という状況…。最早、大きな荷物でしかない。だが、仮にもここ一年の間自分と共に悪魔狩りに向かう際に乗って来たバイクを手放す訳には行かなか

った。

この道の先に人がいる事を信じ、バイクを押しながら足を進める。

更に歩くこと数時間：

ようやく人がいると思われる景色が目に入ってきた。

数キロはあるが、おそらく教会だろう。

本当の意味で安心し、一度足を止め時計で時刻を確認する。

時刻は16時を回った所：

もうすぐ日が沈む所まで来ていた。

「やっぱり、ずれてるのか？」

昨日、この世界に来たときの時間は時計では18時：

今は16時で日が沈む手前：

（ざっと考えて2時間の誤差かな…！？）

時計の時間を進めて懐にしまい、再び歩き出した。

早い所誰か見付けて休みたい。と言うより、何か口にしないとまずい…。

疲労と空腹が重なり、一層グロッキーな状態になるが、尚も足を進める。

先程時計を確認した時間から約一時間：

教会と思われる場所にだいぶん近付いてきた

(もう少し…)

この調子なら後1〜2時間もすれば着くだろう…

足を休めず進んで行くと、不意に足を止める…

(なんだ…？ この感じ…)

異様な不快感に包まれ、バイクのスタンドを立てる。

辺りを見回してみるが、人の気配も、悪魔が現れる際の右腕の兆候も感じられない…

(嫌な感じだな…)

脳裏に言葉がよぎった瞬間、木の影から何かが飛び出して来た。

咄嗟に背負った剣を構えて《それ》を弾き飛ばすが、更に複数の《もの》が襲い掛かってくる

「チイツ!!」

即座に回避しながらも距離をとり、自分を襲った《もの》の正体を確認した。

木の影から出て来たのは、機械状のボディに複数の目を持つカプセル型やボール型のもの。《ガジェットドローン》と呼ばれる機械兵器だった。

「見ない顔…て言うのもなんだけど、何か用か？」

右腕の反応も無いことから悪魔では無い事はわかるが、友好的では

ない事も感じる…目と思われる機関から青いビームを放ち、同時にボディから複数のアームもネロ目掛けて迫ってきた。

「マジかよ!?!」

空中に跳び上がりビームをかわすが、今度はアームが一気に迫って来る。

だが、難無く^{レッドクイーン}大剣で弾き飛ばしながら着地し、武器を拳銃^{ブルーローズ}に切り替え、試しに二回発砲する。

計四発の弾丸が2体のガジェットドローンに命中し、ショートした後爆発を起こした。

「なんだ!?! 案外脆いな?」

拍子抜けし、武器を再度レッドクイーンに切り替え、ガジェットドローンとの距離を詰める。

ビームとアームをくぐり抜け、正面のガジェットドローンに刃を突き立てる…

ボディの反対側まで刃が貫通し、ショートしながら火花を散らす、そんな事は御構い無しに剣の柄を捻り《イクシード》を発動させる。

「^{クレイジー}Crazy!!」

炎を噴き出しながら頭上に向かって剣でボディを引き裂き、そのままの勢いで周りのガジェットも薙ぎ祓う…

木や地面に叩き付けられ、ショートしたまま動かなくなるものや、爆発し、鉄屑になるなど様々だ。

「Too easy! チヨロいな この程度か!？」

不敵に笑ってみせるが、更にガジェットドローンが湧いてくる。

「なんだ!？　　こう言う所は悪魔と一緒にか？」

先程と同じ様に、ビームとアームが混合した攻撃を繰り返してくるが、回避しながら距離を取り、ブルーローズのリボルバーの中の空薬莖を捨て、すぐに懷からクイックローダーにはまった弾丸を装填する。

ガジェットドローンに目を向けると、何やら青白い光を放ち、フィールドの様なものを形成していた。

「あれは…?」

一瞬、疑問が浮かぶが取り敢えず撃ってみる事で様子を見ようと結論が出た。

弾丸がガジェットに命中すると、先程と変わらずに爆発。しかも、周りのガジェットを2体巻き添えにしながら…

「何だよ!？　　何も無しか？」

つまらなそうに言うのと、銃をしまい、レッドクイーンに手を掛ける。

「じゃあ…遠慮はいらねえな!!」

爆炎に包まれ、周囲の状況が把握出来ないガジェットに向かって右腕を突き出す。

「オラァアアッ!!!」

グローブと包帯で隠したままの《悪魔の右腕》がガジェットのパデ
ィに突き刺さり、内側のケーブルやらを引きちぎる…
更に、追い討ちに右腕が貫いた穴にレッドクイーンを突き刺し、イ
クシードを発動させ瞬く間に破壊する。

そんな事を暫く続けていると、気が付けばガジェットドローンを全て
破壊していた…

文字通り

“破壊”…

ただ壊しただけ。

「終わったか…」

鉄屑の山に目を向け、もう一言付け加える。

「:Too easy」

彼からしてみれば「チョロい」の一言でしかなかった。

再び目的地の教会らしき建物に向かってバイクを押そうとした時、
再び妙な感覚を感じた…

先程のガジェットドローンとは別の感じ…

この気配は確かに“人”だった。
だが、何処から感じるのか特定出来ずにいる。

(どこだ…?)

周囲を見渡すが誰もいない。

ガジェットドローンとの戦いで辺りの木々は薙ぎ倒され、地面の草も焼けていた。

(まさか!?)

不意に空を見上げると、確かに“人”がいた。

呆気にとられたが、どうやら此方に視線を向けており、地面に降り立つ。

「時空管理局：機動六課ライトニング分隊隊長、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。先程の戦闘の一部始終を見させて頂きました。」

金髪を二つに束ねたツインテールに黒い服装…白いマントを羽織った女性が喋ると、隣にいる彼女と同一年くらいの桜色の髪を一つに束ねたポニーテールに濃い桜色の服装に淡い桜色のジャケットを羽織った女性が続いて喋り掛けてきた…

「同じく機動六課ライトニング分隊副隊長のシグナムだ…。悪いが御同行願おうか」

二人が喋り終わると、よく事態が呑み込めていない頭で考えてみた。

この世界に来て丸1日が経過…

誰か人を見付けると言うのが第一目的だったが、訳のわからない機

械兵器に襲われ、終いには得体の知れない初対面の人間…と言っても空を飛んでいたから人間かも分らないが、出てくるなり“御同行”と来たもんだ。
協調性に欠け、皮肉屋のネロにとっては、“はいそうですか”と納得出来ないでいた。

「嫌だっって言ったらどうする？」

不敵に笑いながら返答すると、シグナムもすぐに言葉を返す。

「そう言うわけには行かなくてな…。先程のガジェットとの戦闘で貴様が使っていたのはデバイスではなく質量兵器のようだな… 戦闘力に関しても目に余る所がある。それに…」

シグナムが喋っている最中にフェイトが一步前に出て彼女の代わりに喋り出した。

「それに、あなたが戦ったガジェットドローンはロストログアの反応の有る物に襲い掛かって来るものです！ あなた… まさかレリックを！？」

二人が真剣に話している最中にネロはふと、後ろに目を向けた。

（ガジェット…ドローン、ねえ…）

自分がさっき戦った鉄屑と化した機械兵器の名前を知るが、別に興味も何も沸くわけではない。

「あの、申し訳ございませんが私達と一緒に…」

フェイトが極力相手の気分を害さない様に必死になり説得を試みるが当の本人：ネロ自身は全く聞いていなかった。
一応は聞いていたが、最早聞き流している状態。

遂に痺れを切らし、後ろにいたシグナムが前に出てきた。

「貴様、聞いているのか!？」

元々、凜とした声だったが更に強い口調で声を上げる。

流石にネロも二人の方を向き、左手を耳に当てながら喋った。

「What did you say (何か言ったか)?」

挑発以外の何物でもない一言にシグナムは愛剣^{レヴァンティン}を抜いた。
神速の勢いでネロとの間合いを詰め、抜刀の一閃を浴びせようとするが、

「なに!？」

「Not so bad…」
やるじゃないか

レヴァンティンの一撃はネロのレッドクイーンによって止められる。

「シグナム!？」

慌てた様子でフェイトが話しかけて来るが、

「テストロッサ、これ以上は無駄だ。気絶させてでも連れて行く!」

即座に芯の強そうな声で制する。

「なるほど…そう来るか…」

「元より貴様が来る気がないからだろう？」

「それもそうだな」

短い会話を済ませると、再び剣と剣がぶつかり合う。

「何だ！？ あの時機械壊した事怒ってるのか？ 悪いけど、損害賠償なんか払わないぞ！？」

「そんな事はどうでもいい！ 貴様の所持している《ロストログリア》を此方に渡してもらおう！ あれは貴様の様な者が持っていていい物ではない！！！」

互いに距離を取り、構えながら相手の様子を探る…

（コイツ… 本当に女か？ 腕力も剣の腕もかなりのものだな…）

（リミッターが付いているとはいえ…私と互角に戦うとはな…。だが！！）

「レヴァンティン！！ カートリッジロード！！！」

「シグナム！？」

フェイトが止めようとするが、魔力を込めた弾丸はすでに排莢され、レヴァンティンの刀身に炎を纏う。

「紫電！」

「おい…」

「一閃！！」

「くっ！」

（マジかよ！？）

炎の斬撃が自分に向かって一直線に突っ込んで来ることを察知し、ネロはレッドクイーンの柄を限界まで捻り、イクシードを発動。正面からぶつかる。

「ぐううつつ！！！」

「はああああああっ！！！！！！！」

剣と剣、炎と炎のぶつかり合いの中、先に悲鳴を上げたのはレッドクイーンだった…

レヴァンティンの刃が刀身に食い込み、徐々に亀裂が走る。

「ぐっ！！？」

遂にレッドクイーンの刀身が叩き折られ、ネロの手から吹き飛んだ。

「あああああ！！！！」

レヴァンティンの勢いは止まらず、刃がネロの胴体目掛けて飛び込んで来る…

(まずい!!)

フェイトはソニックムーヴを使おうとするが、何かがおかしい。

「え？」

一度動きかけたフェイトが止まり、声が漏れる。彼女の目に映るのは、レヴァンティンの刃がネロの体の前で止まっている光景…

「……ッッ…！」

「貴様…!!」

いや、正確には止められていた。ネロが肺の中を満たしていた空気を振り絞るように呻き、彼の目前にいるシグナムが口を開く。

「……シグナムの剣を…防壁も無しで止めた…？」

「…その腕は!？」

呟くように言ったフェイト。彼女と同じく…いや、それ以上にシグナムの顔に驚愕と動揺の様子が見られるが、そんな事は構わずにネロが喋り出した…

「まさかコイツを使うとはな…。アンタ…大したもんだよ…」

レヴァンティンの刃を受ける瞬間、右腕を盾にして受け止めていた。僅かだが、ネロの息が上がっている…

レヴァンティンごとシグナムを振り払うと、右腕の袖を捲り、残っ

た包帯も取り外しながらフェイトとシグナムの方に目線を戻した。

二人ともさっきよりも慎重になりながら距離を取っている。

「……何だよ？」

「その腕…」

ネロの言葉に、まず最初に思い浮かんだ言葉をシグナムは返した。

「お喋りはあんまり好きじゃないんだがな…教えてやるよ。コイツは《悪魔の右腕》さ！」

「悪魔の右腕!？」

動揺しながらも、フェイトは目線をネロと右腕に向けていた。

「ふざけるな!!！」

声を張上げ、剣を構えながら距離を取りつつシグナムも言った。
彼女からしてみれば、戦いの最中にネロがふざけているとしか見えないだろう。

現に、さっきからふざけた調子だ。

「ふざけてなんかいねえよ…ちょっと甘く見てたけどな…」

先程と雰囲気が変わり、真剣な眼差しをフェイトとシグナムに向ける。

「そーいや、まだ名乗って無かったな…」

「なに？」

緊張した空気の中、ネロは思い出した。
シグナムも構えを崩さないまま聞き返す。

「ネロだ！」

「…え！？」

突然その男が発した言葉の意味が分からず、フェイトが一瞬緊張の糸が切れ、キョトンとした顔で聞き返した。

「俺の名前だよ！ アンタ達さっき名乗ったよな！？ だけど俺はまだ名乗ってなかったからさあ？」

緊迫した状態のシグナムも少し呆気にとられるが、目の焦点はネロに合ったままだ。

「アンタがフェイトで、こっちはシグナムで良かったよな！？」

ネロはフェイトに語りかけながら右手の親指をシグナムに向けている。

「は…はい」

よく状況が分かっているが、取り敢えずフェイトは返事を返した。
彼女の返事を聞きながら、折られたレッドクイーンの方へと歩み寄る…

左手で拾い上げ、まじまじと見た後に深い溜め息を吐き、自分のいた場所に戻って来た。

「アンタ… 剣士か？」

腕を組んだまま、シグナムの方を向いた。

その目は先程のふざけた様なものではなく、真剣そのもの…
シグナムもすぐにそれを察し、

「私は誇り高き古代ベルカの騎士… 剣の騎士、シグナムだ!!」

「騎士…」

ネロは“騎士”と言う言葉に一瞬だけ反応した。だが、すぐに頭を切り替え自分も名乗り返した

「ネロだ!! 特に肩書きみたいなものはねえ! 強いて言うなら…」

少し考えた後に、ある言葉を付け加えた。

「デビルハンター悪魔狩人だ!!」

「デビルハンター？」

よく意味が分からずにネロの言った言葉をフェイトは口にする。

「そうさ… 例えば…」

拳を握り締めると、ネロの隣に巨大な青白い右腕が出現する…

「こんなヤツなんかな！」

ネロが右腕を突き出すと、シグナムとフェイトの間を縫い、フェイトの背後にいた死神の様な悪魔^{メフィスト}を無理矢理引き寄せた。

本来、メフィストは体の周りを黒い霧で覆っており、この霧を吹き飛ばさなければ本体にダメージを与えられない。だが、ネロはデビルブリンガーで掴んだ瞬間、メフィストを地面に叩き付け、その霧を吹き飛ばしながら自分の方に引き寄せた。

霧が覆っている時は死神の様だが、その霧を剥ぎ取られると本体は蠍の様な外見の臆病な悪魔だった。

「それは…」

動揺して喋れないフェイトの代わりにシグナムが聞いて来た。

「言ったろ？ コイツが…」

メフィストをデビルブリンガーで掴んだまま、右腕に力を込める…

「悪魔だよー!!」

凄まじい勢いでメフィストを地面に叩き付けると、すぐに そこには何も無かった様にメフィストの死体は消滅した。

「これで分かっただろ？」

ネロはフェイトとシグナムの方を向き直るが、二人は未だ警戒した

ままデバイスを構えていた…

Episode..4 似た者同士へ剣と剣とでくく (前書き)

《赤の女王》を打ち破りし炎の魔剣を携えし烈火の将…

その者を前に若き騎士は己の中に眠る《魔剣》を呼び起こす…

Episode..4 似た者同士へ剣と剣とでく

悪魔はすぐ^{メフィスト}に消滅し、そこには何も無かった様にただ一人の男が立っているだけだった：

「これで少しは分かっただろ？」

フェイトとシグナムの方を向き、ネロは手首を2、3回振るうと両腕を組み直した。

「あなた… あのアンノウンの事を知っているのですか!？」

突然フェイトが口を開き、悪魔を《アンノウン》と呼びながら聞いて来た。

「アンノウン？」

「あなたが今倒した未確認体の事です!」

(ああ…そうか…)

悪魔の事を知らないとなると、どうやらここは魔界ではない事は分かった。

仮にここが自分のいた世界だとしても、フォルトウナならまだしも外界の人間で悪魔を知っている者は少なかった。

「貴様が倒した未確認体…アンノウンはつい最近になって確認されるようになったものでな。 どうやら何か知っているようだな？」

シグナムが依然として構えながら聞いてくるが、ネロは面倒な奴らに捕まったとでも思う様に頭を掻いた：

「さっき言った通り、コイツ達は悪魔だよ。それ以外の何者でもない：俺はコイツ達を狩っているだけだ」

「コイツ“達”か…。やはり知っているようだな：それなら尚更一緒に来てもらおうか！」

溜め息を吐くと、一つの提案が思い浮かんだ

「じゃあ、こう言うのはどうだ！？アンタが俺に勝ったら連れて行く！俺がアンタに勝ったら見逃すってのは！？」

「え！？」

「なに？」

フェイトとシグナムはネロの言葉に咂然とした。

「悪くない条件だろ？　なんなら2人共相手にしてやってもいいけどな？」

「あなた…何を言って…」

「いいだろう」

フェイトが喋っていると又してもシグナムが割り込んだ。

「シグナム!? …しかし…」

「お前がさっきからその様子では奴を止められんだろう… 元より私は敗けるつもりはない…」

現にフェイトはロストロギアやアンノウン… 悪魔。更には《悪魔の右腕》やらで平静を保てないでいた。

そんな彼女を上空に待機させ、シグナムは鞘から愛剣^{レヴァンティン}を抜き、ネロと向かい合った。

「あんた一人か? 別に2人でもよかったんだけどな?」

「犯罪者に言われる筋合いはない… 貴様も素手で私に勝つつもりか?」

シグナムの問いかけにフツと笑うと、右腕に意識を集中させる… 自分のもう一つの剣… 《閻魔刀》のイメージを浮かべる…

右腕から青白い光を放つと、そこには白い柄に細刃で反りのある剣… 俗に言う“日本刀”が握られていた。

《閻魔刀》を出現させると、再びシグナムの方を向き直した。

「これでおあいこ… だろ?」

閻魔刀を肩に担ぎながらシグナムに返した。

(魔力は感じるがデバイスとは何処か違う…)

「まさかそんな事も出来るとはな… それも悪魔の力か?」

シグナムの“悪魔”という言葉に反応するが、ネロは平静を装いつ返す。

「まあ：　そう言う事だな。それよりも始めていいのか？」

「いつでも来い」

シグナムが言った瞬間、ネロが速攻で二人の間合いを詰めた。

「シッ！！！」

「ぐうっ！！！」

二人の剣がぶつかり合いながら剣を弾いたと思えば、直ぐにまた剣がぶつかり、更に弾いてはぶつかる事の繰り返しが行われた。

神速の剣がぶつかり火花を散らしていると、お互いにちが明かかないと察し、再び距離を取った。

あれほどの剣技のぶつかり合いがあつたにも関わらず、二人の息は乱れていない。

それどころか、集中したまま次の剣を打ち込む為に相手の隙をうかがっていた。

（このままじゃ終わりそうにないな…）

（さっきの剣よりも斬撃もスピードも上か：　ならば！）

（（一撃で終わらせる！！））

二人とも、次の行動に移るべく構え直す：

「レヴァンティン！　カートリッジロード！」

【Explosion】

レヴァンティンの電子音と共にカートリッジが排莢され、刀身に炎を纏う：

「紫電一閃！！」

斬撃がネロに迫るが、低い姿勢で閻魔刀を構えたまま動こうとしない

「はああああっ！！！！！！」

シグナムとの距離も次第に近くなる：

（まだだ…）

目を瞑ったまま姿勢を崩さずに動かない：
遂にレヴァンティンの刃が自分の間合いに入ってきた。

その瞬間に目を開き、右腕に渾身の力を込め閻魔刀を振るう。ネロの持つ刀の刀身に青白い光を纏い、一見すれば質量差の大きく有利な筈のレヴァンティンと互角に渡り合う。

「なっ！？」

シグナムは勝負を終わらせる筈の太刀が止められ、一瞬動揺が走る。だが、ネロは間髪入れずに勢いを止めず、閻魔刀の一閃に続いて斬り返しながらさらにまた一太刀、体を回転させながらまた一太刀とレヴァンティンに打ち込み、シグナムを押ししていく：

「なにっ！？　ぐうっ！　うっ！！」

互角の状況から次第にシグナムが劣勢に追い込まれて行く：

「おおおおっ!!!!!!!!!!」

尚も閻魔刀の斬撃は止まず、レヴァンティンに刃を打ち込む。

「D u s t t o d u s t（塵は塵に）∴」

最後の斬撃を打ち込んだ瞬間、レヴァンティンがシグナムの手から弾き飛ばされた∴

「しまっ∴!」

シグナムが手を伸ばすが、到底届く距離ではない漏れた言葉もネロが首に突き付けた閻魔刀の刃によって遮断される。

「俺の勝ちだな。悪いけど見逃してもらうぜ?」

そこには先程の刀を振るった時の様な真剣な顔ではなく、勝ち誇った∴年相応だが子供の様に笑った顔だった。

目をネロに向けると、口を開いた。

「確かに敗けは認める∴　だが2、3聞きたい事がある」

「何だよ?」

突き付けていた刀を引き、シグナムと向き直る。

彼女も目線だけではなく、体ごとネロと向き合った。

二人の戦いが終わったのを確認し、上空にいたフェイトも地上に舞い降りる。まだオロオロしている事から、状況が呑み込めておらず、

シグナムの事が心配だったのだろう。

「アンノウン…《悪魔》と言っていたな？ 奴らの事を知っているのか！？」

シグナムの最初の問いかけにネロも彼女の目を見て、言葉を返した。

「別に何でも知ってるわけじゃない。アイツらは《悪魔》、それだけだ」

「なに？」

有りのままの応えに納得出来なかったシグナムが聞き返すが、更に話を続けた。

「さっきの悪魔は《メフィスト》っていう下級悪魔だ。霧状の衣を纏っている間は攻撃も効かないし、壁や地面にも潜り込めるそれなりに厄介な奴だね…」

話し続けながら闇魔刀を地面に突き刺し、フェイト達の後方…その上空に目を向け、右腕を突き出す。

青白い巨大な右腕が空にいた“何か”を掴み取った。

「普段は2～3体で行動…！」

デビルブリンガーで霧状の衣は剥ぎ取られ、地面に赤くて巨大な蠍の様な生き物が落ちてきた。

体は人間の大人と同じ位の大きさだが、三人を見るなり警戒し、後退りで逃げようとするが…

「本体はこの通り臆病な奴で… 衣を剥いても暫くしたら元に戻るからすぐに潰すんだよ!」

逃げ惑うメフィストをデビルブリンガーで無理矢理引き寄せ、地面に叩き付ける。

甲高い悲鳴を上げ、メフィストの死体と体液も消えて行った…

「どうした?」

何事も無かった様にフェイトとシグナムの方を向き、聞いてみるが二人とも啞然とした表情でネロを見ていた。

「あの…、ネロ…さんで宜しいですよね?」

顔が少しひきつったままのフェイトが今度は聞いてきた。

「ああ。呼び捨てでネロでいい」

ネロの返事を聞いて、無言で頷くと息を飲み、口を開いた。

「あなたは…《デビルハンター》だと言いましたよね…? アンノウン…、つまり悪魔を狩っていると言う事ですよね?」

「そうだけど?」

平然としながら返事を返し、喋り続けた。

「俺の故郷じゃ、毎日って言うくらい現れるけどな。デビルハンターを始めたのは一年位前だけど、悪魔と戦い始めたのは…そうだな…、三年位前だな」

ネロの言葉にフェイトとシグナムの二人は顔を見合わせた。

「…どうした？」

二人は顔を見合わせた後、ネロの方を向き直り口を開いた。

「あなたが《悪魔》と呼ぶアンノウンは、私達の方では最近になって確認される様になったものなんです…」

「故郷ではよく目にすると言ったな… 他のアンノウンの事にも詳しい様だな？」

言葉が切れ、三人の間は沈黙に包まれる。

（こういうのは苦手だ…）

極端におしゃべりやだんまりが苦手なネロにとっては、早くここから居なくなりたい気持ちだった。

「あの！」

「えっ!？」

突然大声を出したフェイトに驚き、思わず飛びのきそうになるが、彼女は気に止めずに話し続けた。

「最後に… 一つだけ宜しいでしょうか…」

「な…何だよ？」

つい数分前までの動揺や困惑の表情はなくなり、強い眼差しでネロを見つめ：

「あなたはロストロギア：《レリック》を所持しているんですか！？」

「レリック？」

地面に突き刺したままの閻魔刀を抜き、右腕が光を放ちながら吸収して行く：

自分からすれば当たり前の事の為、その動作の中でフェイトに聞き返した。

「ロストロギア古代遺物：それ事態は複数存在しますが、私達が探しているのは赤い宝石の様な《レリック》と言われる物です」

赤い宝石：

ネロの脳裏によぎったものは、やはり一つしかなかった。

「貴様が持っているのは間違いなさそうだな：」

シグナムがネロを睨み付けるが、フェイトがそれを手で制した。

「テストロッサ！」

シグナムがフェイトに詰め寄るが、無言で首を横に振り、ネロと向き直る：

「あなたが持っていると思われるレリックは本当に危険な物なんで

す。渡して頂けませんか!？」

フェイトの丁寧な口調だが、強い目に何かしら罪悪感を感じさせられ、再び頭を2、3回掻いた後に自分の敗けを認め、溜め息を吐く。

「分かったよ： ことの事か？」

右腕から青白い光を放つと共に赤い宝石：《レリック》が出現する。そのレリックをフェイトに手渡すと、再び彼女が口を開く：

「ありがとうございます。話の分かって頂ける方で安心しました。」

受け取ったレリックに何かしらの処理を施していると、後ろにいたシグナムが今度はネロに話し掛けてきた。

「しかし、これを何処で：？」

先程の様な強い口調ではなく、思案する様な問いかけに：

「いや：いつもみたいに悪魔を狩って帰ろうと思ったら見つけたんだよ。そしたらこんな所に：」

「こんな所？」

ネロの言葉が引っ掛かり、彼に聞き返した。

「妙な所だよな？ 月は二つあるし、夜だけじゃなくて昼間にも他の惑星^{ほし}も見えるし？」

ネロの話を聞き、フェイトとシグナムは彼が何者なのかすぐに察した：

「あなた…もしかして…、次元漂流者…？」

「何だよそれ？」

聞いたことのない言葉に首を傾げていると、右腕が疼くのを感じた。

「まずい、伏せろ！！」

ネロが突然大声を出し、フェイトとシグナムの方へ跳ぶ。

急な事態に反応出来ず、二人はネロに押し倒される事で地面に伏せた。

「貴様！ 何を！？」

シグナムが問うが、聞く耳を持たずに襲ってきた《もの》の正体を見据える。

赤くて細い槍が十本…正確には赤い指を伸縮させ、ネロ達を襲ってきた悪魔だった。

《ファウスト》…メフィストの上位悪魔に分類され、霧状の衣や、伸縮する指の攻撃、本体は臆病な蠍の外見と言う所は一緒だが、今は白い体に総髪…頭に黒い帽子を被った様で、体の大きさも攻撃頻度、凶暴性も上だった…

「チッ… アイツらが居るって事は“コイツ”も居るの忘れてたな…」

体を起こし、ファウストと向き合う…

即座にデビルブリンガーで衣を剥ぎ取ろうとするが、体も大きな分、衣の一部しか剥ぎ取れない。

「面倒なやつが来やがったな…」

不意に呟くと…

「あなた！　それ！？」

フェイトがネロの方を見ると、左肩と左腕の二ヶ所から血が流れていた。

二人を庇った際にファウストの指で切られたのだろう。

「ああ、これか？　大したことねえよ。かすり傷だ」

彼は平然としながら流し目でフェイトを見る。

「助けて…くれたのか？」

今度はシグナムが少し動揺しながら聞いて来るが、今彼女は自分のデバイス《レヴァンティン》が無いため、下手には動けないでいた。再度ファウストの方を向き直り、彼は拳を握る。

（こんな時に…　厄介なのが来やがったな…）

一人思考錯誤を繰り返す。物理攻撃が効かないこともないが、メフィストやファウストには効果が乏しい。

デビルブリンガーで衣を剥ぎ取ろうにも、時間が掛かる。

銃を使おうにも既に弾切れ。弾が有ったにしても《チャージショット》を使えば一気に衣を剥げるが、チャージの時間に攻撃されては御仕舞いだ。

「よし…」

たどり着いた答えは一つ。

(使うしかねえか…)

右手を見つめ、ファウストに視線を戻した。上空から嘲笑っている様に見えるが、いつでも攻撃を仕掛けてくれるだろう。

深く息を吸い、ネロは地面を蹴り…ファウストめかけて跳んだ。

フェイトとシグナムが叫ぼうとするが…

それよりも先に、ネロの発した言葉によって掻き消される。

ネロの瞳から真紅の光を放ち、全身に纏った青白い光がファウストの指を弾き飛ばす…

彼はファウストの目の前に跳び上がると、右腕を天に向かって突き上げ…叫んだ。

「Wake up (目覚めろ)!!」

周囲に衝撃波が飛び、ファウストの衣も瞬く間に消し飛ばすが…

フェイトとシグナムが目にしたのは、理解し難いものだった。ネロの瞳からは赤い光を放ち、背後には青白い…悪魔の姿が浮かび上がっていた。

臆病な白い蠍と化したファウストを青白い悪魔が右腕で鷲掴みにし、落下の速度を利用して地面に叩き付ける。

「Get lost (消えろ)!!」

先程と同じ様に、声が二重に重なりエコーが掛かった様な声で喋り続ける…

だが、思いの外ファウストはしぶとく、生きていた。
何とか逃げ出そうとするが、惨め以外の何者でもない。

「「Show down（終わりだ）…！」」

デビルブリンガーで落ちていたレヴァンティンを引き寄せ、ネロが
左手で握り…

ファウストに背を向ける様な格好になり、レヴァンティンの刃先を
地面に付ける。

微かに見えたフェイトとシグナムの顔は混乱と…恐怖の混じったも
のだとすぐに分かった…

これ以上 二人に顔を見られなくなかったからか、すぐに行動に出
る。

切っ先が地面に付いていた状態から大きく振りかぶり、途中で背後
の悪魔が振るう閻魔刀とレヴァンティンの刃が交差して、青白い斬
撃がファウストを襲う…

「「Cry out now（泣き叫べ）…！」」

X字状に交差した斬撃が逃げるファウストを一瞬でこの世から消滅
させた。

ファウストを倒したのを確認すると、手からレヴァンティンを落と
し…

それに続き、背後の悪魔も、瞳から放っていた赤い光も消えていた。
ネロはそのままうつ伏せに倒れ、意識は暗闇の中に沈んで行く。

耳に届いていたフェイトとシグナムの声が次第に遠くなって行き、
彼はそのまま意識を沈め、眠りについた…

E p i s o d e . . 4 〽似た者同士へ剣と剣とで〽〽（後書き）

なんやかんやで、第5話まで書いてきました。

思いの外 小説を書くのは大変ですが、何かしらのご要望や意見がありましたらお願いします。

E p i s o d e . : 5 \ C h u r c h **〈聖王教会〉** **〵 (前書き)**

夢に見たのはかつての己…

愛する人を守る為に彼は力を欲した…

Episode.:5 Church〈聖王教会〉

暗闇の中に俺はいた…

「キリエ！ 逃げろ！！」

『あれは…』

俺の体は宙に浮き、目の前には見覚えのある光景が広がっていた

あれは一年前…

俺の右腕がまだ《悪魔の右腕》になる前の頃のものだった

「キャアアアツツ！！！！」

スケアクロウの大鎌がキリエに迫る中…

「キリエエエエツツ！！！！！！」

叫びながらキリエとスケアクロウの間に昔の俺が飛び込んだ。レッ
ドクイーンで防御するが、大鎌は俺の右腕を掠め、血が飛び散る…

「ぐうううっ！！」

痛みに顔を歪めながら、レッドクイーンでスケアクロウを叩き切る
が、まだ周囲に残っていたスケアクロウの群れが一斉に俺とキリエ
に飛び掛ってくる…

『キリエ！』

俺は咄嗟に叫んだ。

スケアクロウの大鎌が襲い掛かるが、その瞬間昔の俺の瞳から真紅の光が放たれる…

目を開けていられないほどの光が周囲を包み、目にかざした手をどけるとスケアクロウの姿はなく、昔の俺とキリエが横たわっていた…

正直、あの時の事はあまり覚えていない…

ただ夢中だった。

彼女を…キリエを守りたいと…

あの時、倒れた俺は夢の中でただ願った。

願い続けた…

力が欲しい…

キリエを守る為の力が欲しいと…

彼女を守る為の力を俺にくれ…

その為なら悪魔に魂を売ったとしてもかまわない…

『そしたら、こんな事になっちまったな…』

右腕を見つめながら呟く…

すると、何もない暗闇の空間に一筋の光が射してきた。

眩しくてよく分からないが人の形をしていて、手を差し出してくる。

『キリエ…?』

彼女かどうかは分からないが、《人》らしきものの手にネロも右腕を伸ばし、掴む：

すると、周囲の暗闇に包まれた空間は光に包まれた：

そこでネロは目を覚まし、自分の体に目を向けた。ベッドに寝た状態で上着は脱がされ、左肩には包帯が巻かれ傷の手当てもされていた。

更に左腕にも点滴をされている。

（ここは…？）

ベッドから降り、窓から外を眺めると、礼拝堂らしきものが見えた。

（もしかして…俺が目指してた教会か？）

確かに、遠くの方には自分が通って来たと思われる山や森が見えた。そこでどうして自分がここにいいのか気付き、ハツとする。

「あいつらは！？」

振り返るが、背後には誰もいなかった：

窓から離れ、壁にかかった時計に目を向けた。

おそらくは英字。時刻は夜中の2時を回った所のようにだ。

「6時間も寝てたのか？ 今日はずっと寝た筈なんだがな…」

自分に少し不甲斐なさを感じながら鼻でフツと笑ってみせる。点滴を外し部屋の外に出てみると、病院特有の長い廊下が続いていた。窓から見えた景色を頼りにしながら歩き続けると、一度外に出て目的地…礼拝堂に着いた。

やって来たのは気まぐれだが、礼拝堂の中に入ると奥にある何かしらの宗教の崇拝する、いわゆる“神様”の石像の前で片膝をつき、強く握った右手の拳を左手で包み込む様に握る。

お祈りなんてするガラじゃないことは分かっている。一度自嘲気味に笑うネロだが、気まぐれからか、彼はそうしたい気分だった。

（キリエ…）

今の自分に出来ることと言えば、彼女の事を祈るぐらい…。違う世界に飛ばされ、帰る方法も分からない以上、ネロは祈り続けた。

だが、お祈りの最中に右腕が疼き、ネロもそれを感じ取ると即座に立ち上がった。

礼拝堂の外に出ると、広い中庭まで歩を進め止まる…

「出て来いよ！ いるのは分かっている！！」

誰もいない中庭にネロの声が木霊する…

だが、すぐに《それ》はネロの前に現れた。

「今回は“トカゲ”か…」

地面から飛び出して来た人と蜥蜴が融合した様な悪魔アサルトを見ながら呟く。

一体が現れると立て続けに二体、三体…計六体のアサルトが地上に飛び出して来た。

《アサルト》は魔帝が人界に侵攻した際に作り出した“ブレイド”
と言う悪魔が進化をとげた強襲型の悪魔だ。

ブレイドと攻撃パターンや複数の群れで行動するという所は同じ。
腕には盾を取り付け、頭にも兜を被り、明らかにスケアクロウより
も上位の悪魔である事はうかがえた。

最初の二体がネロに飛び掛かるが後方へ回避、更にそこへ一体のア
サルトが鋭い爪を突き立てるが、右腕で受け止める。

「危ねえな… ちゃんと爪の手入れはした方がいいぜ？」

アサルトの腕を掴んだまま地面に数回叩き付け、仲間の元へと投げ
返す。死んだわけではないが、暫くは動けそうにないだろう。

残った三体が左右と上空から襲い掛かるが、今度は引くことなく右
腕に力を込める…

アサルトの爪が目の前に来た所で右腕を正面に向かって突き出した。
デビルフリンガー
青白い右腕によって三体のアサルトが吹き飛ぶが、正面のアサルト
をデビルフリンガーで引き寄せ、そのまま跳び上がり空中で数回振
り回しながら地面に叩き付ける。

だが、ただ叩き付けたのではなく、先程投げ飛ばした戦闘不能状態
のアサルトの顔面に目掛けて叩き付けた。

遠心力が加わり、二体のアサルトは互いに顔を打ち付けられると悪
魔の鮮血が飛ぶ…

「あとは…」

残りのアサルトは四体。

背後から呻き声が聞こえるが、ネロは気にも止めずに他のアサル
トの方を向き直した。

確認するまでもなく、頭を打ち付けたアサルトは頭蓋骨が砕け、血
も体も蒸発し始めていた…

仲間の死を確認すると、アサルトは互いに顔を見合せたかと思えば、
一斉に地面に潜り込んだ。

「なんだ？ お得意の強襲作戦ってわけか？」

呆れながら手を腰に当て、ネロはその場から動こうとしない…
数秒の間…沈黙が続き、風の音だけが聞こえる

（そろそろだな…）

ネロが腰に当てた手をだらんと下げると、突然地面からアサルトが
飛び出して来た。

軽やかなサイドステップでかわすと、ネロは自ら空中に浮かぶアサ
ルトの中に飛び込む。

だが、右手には閻魔刀が握られ、攻撃態勢に入っていた。

強襲が失敗したアサルトは反撃が出来ず、気付いた頃には閻魔刀の
刃が迫り…

閻魔刀の一閃でアサルトは斬り捨てられ、悪魔だった肉塊に変わる…

ネロは閻魔刀の刃に付着した血を振り払い、鞘に納める…

だが、右腕が疼くのを感じ振り返ると、取り残したアサルトが飛び
掛かって来ていた。

(まずい!!)

闇魔刀を抜こうとするが、間に合うかタイミングは際どい…

だが、後方から飛び込んで来た光が一瞬でアサルトを二つに分断し、他の仲間と同様に体が蒸発し始める。

アサルトを分断した光をよく見ると人間だった…

おそらく、数時間前に遭遇したフェイトやシグナムと同じタイプの“人間”なのだろう。

両手にはトンファーと剣を組み合わせた様な武器を持っていた。

その人がこちらを振り返り、雲の合間から月明かりが照らすことによって顔や服装が確認出来た。

赤髪のショートカットに上は緑色の袖無しのタイツ状の服…下はよく分からないが、腰布を着けていた。体型から察するに女だろう…

「…助けてくれた事には感謝するが何者だ？ この教会の人間か？」

この世界に来てまだ分からない事が多いが、取り敢えず傷の手当てとアサルトを倒してくれた事の礼のつもりで話しかけた。

「聖王教会の騎士…シャツハ・ヌエラです。余り勝手に動いてもらっては困りますので病室に戻って頂けますか？」

(やっぱり女か…)

声を聞くと改めて自分の勘が当たった事を確認する。

しかし、それよりもまた強制的に連れて行かれる様な事態になっている事に気付き、つい溜め息が出てくる。

規則やルール：

こういう何かに縛られるのは嫌だったが、助けてくれたのには違いないから渋々 言うことを聞くことにした。

「分かったよ。戻るし、刀仕舞うからさ…それこっちに向けるのやめろよ…」

シャツハはトンファ―型のデバイス《ヴィンデルシャフト》を依然構えたままだった。

いつでもネロが攻撃を仕掛けてもいいようにしているのだろうが、閻魔刀を右腕に吸収すると彼女も構えを解き、騎士甲冑から修道女の服装に戻る。

「それでは参りましょうか」

「おい！」

シャツハの切り替えにも驚いたが、そんな事よりも他に聞きたいことがあったから思わず呼び止めてしまった。

「どうかしましたか？」

「いや！ だってあんた、さっきと服違うし…」

シャツハはネロの質問に少し考えるが、合点が行ったように返答した。

「ああ、あなたは確か次元漂流者でしたね!? でしたら知らないのも無理はありませんね」

次元漂流者という言葉がどうも引っ掛かっていた。
確かフェイトとシグナムが言っていた:

「先程私が着ていたのは騎士甲冑と言って、防護服の様なものです。そしてこちらが私のデバイスの《ヴィンデルシャフト》でして:」

「おい! あいつらはどうなった!?!」

シャツハはネロにデバイスの説明をしていたが、フェイトとシグナムの事を思い出し、彼女の肩を掴み詰め寄る。

「えっ?」

「俺と一緒にいた二人だよ! 時空管理局とか機動六課とか言っていたフェイトとシグナムって二人!」

突然詰め寄られ、少し困惑していたがすぐに応えた。

「騎士シグナムとフェイト執務官でしたら今日は帰られましたけど: また明日お見えになるそうです」

揺さぶられながら話していたが、それを聞くとネロも自分がシャツハに詰め寄っていた事に気づき、彼女の肩から手をどかした。

「あ: 悪い:。あいつら無事か?」

「はい。大した怪我もございませんし、それに…」

無事な事を知り、安心するがシャツハの話は終わっていないかった。

「あなたに感謝していましたよ。助けて頂いたと」

「いや…俺はただ…」

シャツハの話を聞き、少し照れているのを隠そうとしながら鼻を掻く。

「シャツハ、夜も更けているのですからそのくらいにはいいかですか？」

ネロとシャツハが声のした方を振り返ると、金髪の女性が此方に向かって歩み寄って来ていた。

「騎士カリム!？」

シャツハがカリムと呼んだ女性は物腰の柔らかそうな口調で：

「お客人も怪我をしているのですし、休ませてあげないといけません。あなたもこんな時間に起きてはお体にひびきますよ？」

ネロはカリムと言う女性がシャツハの上司か何かである事を察し、暫く二人の会話を眺めていた。

「あの…申し訳御座いけません…。それとカリム、貴方も何故こんな時間に？」

「ええ。外が騒がしくて目を覚ましたら貴方たち二人が中庭にいる

のが見えたので、こうして来たというわけですよ」

本当に申し訳なさそうにしながらシャツハはカリムに謝っていた。おそらく彼女は怒っていないのだろうが、あの口調では正直ネロにも怒っているのかどうか分からなかった：

シャツハが謝り続けていたが、カリムもいまだに頭を上げないシャツハに少し困った様子で数分の会話の末、ようやく彼女の頭を上げさせた。

「あなたはネロで宜しかったですよね？」

唐突に聞いて来たので少し返事が遅れるが、カリムに言葉を返した。

「ああ。あんたは：」

「私は聖王教会の騎士カリムです。あなたの事はフェイトとシグナムから聞きました」

ネロが喋ろうとする前にカリムが粗方の紹介を終える。

少し唾然としたが、面倒な事を話さなくてすんだ事に納得した。

「取り敢えず部屋に戻って休んで下さい。話は朝になってからで構いませんから」

カリムという女性の事はよく分からないが、ここは彼女の言葉に賛同する事にした。

「そうだな：」

ネロは呟く様に彼女に言葉を返した後、空を見上げる：

「そうさせてもらおうよ…」

空はまだ夜の世界に包まれ、二つの月が優しく照らしていた…

E p i s o d e : 6 \ V a l u a b l e A r t i c l e 〈大切なもの〉 (普

何のために彼は戦う…

何故、彼はそうする…

それは悪魔から人間の持つ大切なものを守るため…

Episode 6 Valuable Article 〈大切なもの〉

既に朝日は昇り、太陽は今日の始まりを教えていた。

聖王教会の中にあるとある一室では、銀髪の男と金髪の女性がテーブルに置かれた朝食をとっている。

金髪の女性：カリム・グラシアの隣には彼女の秘書であるシャツハ・ヌエラが顔を引き吊らせたまま向かいに座る者を見ていた。

食べ方が下品というわけではないが、銀髪の男：ネロは一昨日から何も食べていなかったせいか、テーブルの上にある料理を次々と口に運ぶ。

「あの： そんなに慌てて食べなくても：」

シャツハが警告しようとした瞬間に予想通りネロはムセた。

「ああ、だから言ったのに：」

シャツハは水の入ったグラスを渡すと、ネロは一気に水を飲みほし一旦落ち着いた。

ようやく満足したのか、手を止め呼吸を整える：

「まあ、シャツハ。良いじゃありませんか。 余程お腹が空いていたのでしょう？」

にこやかに微笑みながら隣にいるシャツハを見ると、再びネロの方を向く。

ネロもようやく落ち着くと話し掛けてきた。

「それで？ 俺はこれからどうなるんだ？」

この世界のことはまだ分からなかったが、取り敢えず自分のいく末を聞いてみた。

「そうですね… あなたは次元漂流者ですから管理局からは丁重な扱いを受けられると思います」

カリムは相変わらずの物腰が柔らかそうな口調で返答する。

「次元漂流者ね… 昨日から思ってたんだが何だよそれ？ そこにいるシャッハとか言うやつも、フェイトとシグナムって言うやつも言ってたが？」

ネロが聞き返すと、カリムと隣にいるシャッハも少し心配するような顔をした後、説明をはじめた。

「そのままの意味です… 次元の漂流者。つまりあなたは今いる世界とは別の世界から来た人間と言う事です」

カリムに続き、シャッハも説明する。

「あなたの様に別の次元に飛ばされる人間を保護するのが私達の役目です」

「保護ねえ…」

二人の説明が終わると不意に口から言葉が漏れた。

「あの： 混乱しているかもしれませんがご安心して下さい。あなたは私達が必ず元の世界にお返ししますので！」

ネロを氣遣ってか、シャツハは彼を勇気づけようと少し大きな声を出す。

突然出した少し大きな声にカリムとネロはシャツハに顔を向けた。二人ともキョトンとした顔をしている。

「す：すみません：」

自分が大声を出した事に気付き、顔を赤くしながら少し俯いた。その様子にカリムはクスツと笑うと、話を戻す。

「彼女の申しした通り、安心して下さい。あなたの様な人を助けるのが管理局の者の役目です。それに：」

「さっき“私達”って言ったよな？ て事はあんたもその管理局の人間か？」

カリムの話が終わる前に口を挟んだ。

「はい。私は聖王教会の教会騎士団所属の騎士ですが、管理局の方にも籍を入れておりますので」

説明を終えると「なるほど」と、納得し再び話に耳を傾けた。

「それで今後のあなたの事についてですが、こちらの聖王教会と機動六課の方であなたを保護するという形になります」

カリムの言葉を聞いて思考が止まった：

（機動六課…？）

頭の中でこの言葉が残響を残し、木霊する…

（昨日会った…フェイトとシグナムってやつらもそんな事言ってたよな…？）

「ネロ？」

カリムの声に彼は我に帰る。

「ちょっと待てよ！？　今、何て言った？　もしかして機動六課って言ったか？」

カリムはネロの言葉に少し首を傾げながら応えた。

「はい。そう申しましたが…どうかなさいましたか？」

隣にいるシャッハもネロがどうしてそんなに慌てているのか理解出来ないでいるように首を傾げていた。

「まさかとは思うけどフェイトとシグナムって二人はそこにいるんじゃない…。何か隊長とか言ってたけど…」

恐る恐る聞いてみる。

頼むから違うと言ってほしい…だが、彼の期待は裏切られた。

「ええ。お二人とも六課の方です。あなたとお話なさったそうですね？　でしたら話は早くて済みます」

胃の中にある物が込み上げてきそうになるが、それよりも状況を整理した。

ここまでの説明では、ネロは異世界から来た次元漂流者であり、昨夜機動六課のフェイトとシグナムと遭遇。

“御同行”されそうになり、そこでシグナムと戦い、勝利（レッドクイーンが破損）

悪魔との戦いで負傷：

傷も浅く、直ぐに回復したが今度は《アサルト》との戦い…ここでシャツハに助けられ、その後カリムにも会った。

そこで、夜中の言葉を思い出してしまう…

——また明日お見えになるそうです

確かシャツハがそう言ってたはず…

恐る恐る聞いてみた…

「まさかとは思うけど… フェイトとシグナムってやつらがここに来るんじゃない…」

「そうですね。もう少しでお見えになります」

相変わらず微笑みながら穏やかな口調でカリムは言う。

「おい、ちょっと待てよ！ もう少し？ いくら何でも急だろ！？」

ネロは椅子から立ち上がりシャツハに歩み寄る。
シャツハもネロに少し慣れた為か普通に応えた。

「はい。9時にはお見えになりますね」

その応えを聞き、改めて昨日の事を思い出す…

成り行きだった女性が刃を突き付け、得体が知れないとはいえ失礼な態度を取り、《悪魔の右腕》まで見られてしまった。

ネロは頭を2、3回掻くと、元の椅子に座る。

「どうかなさいましたか？」

シャツハが気遣って聞いてくるが…

「何でもない…」

と、一言だけ言った。

顔を上げ、カリムとシャツハの方を向くと溜め息混じりに聞いてみた。

「いま何時だ？」

カリムの目の前にホログラムの様な画面が浮かび上がり、何かしらの文字が動いている。

時刻と思われる数字らしき文字の端の方には秒針代わりの数字が一定のリズムで動いていた。

「今は…8時20分を回った所ですね」

（あと40分もないのかよ…）

そんな事を考えていると、カリムの前にもう一つの画面が浮かび上

がり…

「お見えになりましたよ」

と、にこやかに言った。

「え…誰が…」

ネロは恐る恐る聞く。

分かっていたが、予想通りの答えが返ってきた。

「六課の方です」

「早くないか!? まだ…」

言い終わる前にドアが3回ノックされた後、茶色のローブを羽織った人間が三人入って来た。フードで顔は見えないが、部屋に入るとローブを脱ぎ、三人の内の二人は見覚えのある顔だった…

三人の中でも一番小柄な茶髪の女性がカリムとシャツハに挨拶をしていると、二人がこちらに歩み寄って来た。

「昨日は失礼しました。時空管理局、機動六課から来ました。フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

フェイトが右手を差し出して来たが…

「昨日と服が違うな…」

率直な意見を言いながら、包帯を巻いた右腕を背中に回した…彼女もそれを察し、今気付いた様に左手を差し出す。

「あの： 私達の不手際でして：申し訳ありませんでした。 お怪
我の方は大丈夫ですか？」

上着の黒いノースリーブから見える包帯を巻いた左肩に彼女は目を
向ける。

「大した事ねえよ： もう治った」

最低限の会話をしながらフェイトの差し出した左手にネロは握手を
せずに応える：
その目線の先にはシグナムがいた。

「あの： それどういう：」

「そのままの意味だよ」

フェイトが喋り終わるより前にネロが言い終えた。

「俺の剣と銃に：バイクはどうした？ 見当たらないんだがまさか
： 処分なんてしてないよな？」

フェイトが困惑していると、後ろにいたシグナムが前に出て来た。

「あれはこちらで押収している。バイクは返すが：貴様の質量兵器
は返すわけにはいかない」

自分の私物の現状を聞くと聞き返した。

「質量兵器？ 昨日も言ってたが何だよそれ？」

「魔力を使わない： 火薬や化学など魔力によらず大量破壊を生み出す兵器の事です」

いつの間にかネロの隣に来ていたフェイトが説明をする。

「ちょっと待てよ！ あんた達が持ってたやつは違うのかよ！？」

「私達が使っているのはデバイスと言う物だ： 魔力を使い、物理破壊は出来るが人体にはダメージを与えないように設定されている」
ネロが反論を試みるが、あっさりと返されてしまう。

「それに…」

彼女の話はまだ終わっていなかった：

「その《右腕》の事と刀の事もあるからな…」

話が終わると二人は睨み合いになっていた。

「シグナム？ ほら、ネロ…さんも？」

フェイトが二人を止めようとするが、いつ戦闘になってもおかしくはなかった。

「二人とも！ ええ加減にしいや？」

三人は振り返るとカリムとシャツハ…もう一人の女性がこっちを見ている。

茶髪の小柄な女性がネロに近づき、先程のフェイト同様に手を差し出して来た…

「古代遺物管理部、機動六課部隊長の八神はやてです」

喋り方に少し訛りがある女性：八神はやてが話し掛けて来た。差し出して来たのは右手だが、ネロはそれに応えようとしない。

「部隊長？ あんたがか？」

（冗談だろ？）

ネロの顔にはそう出ていた。

すると、ネロの右手を強引に引っ張り握手を交わす。

「そうです。 どうぞよろしく」

握手を出来たのに満足したのか、ネロの右手を放した。

少し呆気に取りられながら、はやてをまじまじと見た後に口を開いた。

「分かったよ…。 で？ その部隊長さんが何の用だよ？ まさか俺にか？」

まだはやてが部隊長だと言うことに納得出来ずに言うが：

「貴様！ 主はやてに無礼は許さんぞ！！」

隣にいるシグナムが声を張り上げる。

「主？ こいつがか？」

ネロは鼻で笑いながらはやてを指さすと、その瞬間シグナムがネロの胸ぐらを掴む。

「貴様…！ これ以上我が主を侮辱すれば…」

「やってみろよ…」

部屋中に緊迫した空気が漂う。

「シグナム！」

はやての言葉にハツとし、ネロの胸ぐらを放した。

「申し訳ございません… 主はやて」

「あかんよ？ 怪我人なんやし。それに助けてくれたんやろ！？」

感情的に行動に出た事をはやてに謝り、ネロから一步離れる。

「ごめんな？ この子真面目過ぎるからもう少し楽にする様に言っとるんやけど、許したって下さい」

昨夜にカリムとシャツハのやり取りを見たが、どうもはやてとシグナムの関係はそれ以上の物だった。

「別に気にしてねえよ。怪我だってもう治ってるんだし…」

「え？ でも昨日…」

はやてが言い終わるよりも前にネロは左肩の包帯を引き千切った。
そこには確かに昨夜あった筈の切り傷の痕は残っておらず、まるで
怪我などしていない様。

「言っただろ？」

今度は部屋中に沈黙が流れるが、それを掻き消す様にははやてが口を
開く。

「まあ：立ち話もなんやし一回みんな座るか？」

全員はやてに促され、椅子に座りつくと本題に入った。

「話カリムから聞いたと思いますが、ネロさんは元の世界に戻る
まで私達機動六課と、ここ聖王教会で預かる事になりました」

はやてが話し続けるが、ネロは頬杖をつき、面倒臭そうに話を聞い
ている。

「あなたがいた世界の座標が特定出来れば帰す事が出来ますが、し
ばらく時間が掛かりそうなので：」

「なあ：」

はやてが話していた最中だったが、ネロが割り込んだ。

「《アンノウン》がどうか言ってたよな？」

ネロが流し目でシグナムを見ていたが、その言葉を聞き話を切り換

えた。

「アンノウン… あなたが言っている《悪魔》という未確認体がつい最近になって多数見られる様になりました…。姿形は様々ですが、ガジェットと違い見境なく人間を襲い…殺害するというものです」

「だろうな…」

分かりきっていた事を知らされると、今度はネロが話し始めた。

「悪魔ってのはな、そう言うもんなんだよ。やる事なんて“破壊”と“殺戮”の二つしかない。上位の悪魔なら言葉も話せるし、知能も高いがそれでもやる事は同じだ…」

フェイトがふとネロの右腕を見ると、拳を握り締め、包帯の間から青白い光が漏れていた。

「昔っから同じなんだよ…。何百年も何千年も経とうが同じだ…。アイツらのやる事なんてな…」

拳を握る力が強まり、更に青白い光も強さを増す…

「ネロ…?」

全員がネロの話を聞いている中でフェイトが呟いた。

だが、誰にも聞こえない様な大きさの為か一人も気付かない。

「だから俺はアイツらを倒すんだよ…」

突然、ネロが立ち上がると右腕を中心に眩い光を放つ。

「俺の魂が叫ぶ… もっと力を…！ 彼女を守る為の力を…！」

右腕の包帯は吹き飛び、ネロの手には闇魔刀が握られ…

瞳は赤い光を放ち、体に青白い光を纏っていた。

「ネロ…！」

フェイトが叫ぶとネロも正気に戻った。

「…っ…うっ…！」

左手を顔を当てながらも落ち着きを取り戻し、ネロの目と体から放っていた光も消える。

だが、気が付けばいつの間にかシグナムとシャツハがデバイスを構成していた。

「シグナム！」

「シャツハ！」

はやてとカリムの声に二人は振り返るが…

「シグナム？ あかんよ」

「シャツハ… お止めなさい」

その言葉にシグナムとシャツハは何か言おうとするが、二人とも無言で首を横に振った。

「ネロ… 大丈夫…?」

フェイトが近付き、心配して聞く。

「……ああ…」

若干呼吸が乱れたまま、ネロは閻魔刀を左手に持ち替え、右腕から出現した黒い鞘に刀を納める。

「質量兵器がどうか言ってたよな…」

ネロはそのまま閻魔刀をテーブルの上に置き深く息を吐いた後、言
った…

「こいつはあんた達に預ける」

フェイト達には未だに状況が分からなかった。

「あの… なんでなん!? 別にそこまでせんでも…」

「俺みたいな奴にこんな物持たせてるわけにはいかないだろう?」

口調はいつも通りだが、拳を握り締め… 俯いた目線の先には閻魔
刀があった。

はやてとカリムは互いに顔を見合せると無言で頷き…

「ネロさん…」

「……何だ？」

闇魔刀からはやてに目を向けるが… その目には何か大切なものを無くしてしまった様な目だった。

「私達は何もあなたの物を取り上げようとは思いません。預かっている物もお返しします…。だから…」

そこで一度区切り、再び口を開いた…

「私達に力を貸して下さい！」

はやてが深く頭を下げた。

「はやて!?!」

「主？」

フェイトとシグナムが同時に言うが、カリムも続く。

「私からもお願いします。はやてに力を貸してあげて下さい」

カリムが頭を下げると、それにシャツハも続き頭を下げる。

ネロは状況が呑み込めないでいたが、頭を数回掻き、溜め息を吐いた。

「やめろよ。頼むから頭を上げてくれ！ それに何だよ急に!?!」

人に頭を下げてもらった事など無かったネロは焦りながらはやて達

の頭を上げさせる。

「お話した通り… 最近ではアンノウン… “悪魔” による事件が多発しています。悪魔の事を知っているあなたの力をお借りしたいんです」

はやては立ち上がり、ネロの方へ近付くと閻魔刀を手にとった。

「その為ならあなたに必要な物を… 何よりあなたの大切な物を取り上げたりしません…！ だから…！」

「分かりきった事言うなよ」

はやての差し出した閻魔刀を受け取りながら喋り続ける…
よく見ると、はやての目には涙が溜まっていた…

「こっちだって見てみぬフリする訳には行かねえんだよ…」

右腕が眩い光を放ち、閻魔刀を吸収する…

「ネロ…さん…？」

はやての目からは一筋の涙が流れていた…

「それでは決まりですね？」

奥にいるカリムが言うと、ネロも腕を組み直した。

「そうだな…」

ネロは聖王教会から機動六課に移動する事になった。

上着とコートを羽織り、一日だが世話になった聖王教会を見渡す。

「それじゃ、行こか？」

はやて達が車に乗る準備を終え、ネロを呼ぶ。

「それではネロ、お元気で」

「体には気を付けて下さいね？」

シャッハとカリムの声に立ち止まり、振り返る…

「ああ。元気でな」

別れの挨拶を済ませ、はやて達の方へ歩き出した時だった…

「あなたに神の加護を…」

カリムの声だった…

本当にネロを気遣ったの言葉だろう。

「神…か…」

ネロは歩きながら呟いていた。

ネロを乗せると車は走りだし、聖王教会を後にした…

Episode..7 銀髪の男へもう一人の悪魔狩人◇◇（前書き）

レリック
魔石に導かれし者…

その者は《黒》の名を持つ若き騎士と同じく銀色の髪をしていた…

ミッドチルダ
異界にもう一人の悪魔狩人が降り立った…

Episode..7 銀髪の男へもう一人の悪魔狩人◇

ミッドチルダの首都クラナガンの付近に存在する廃棄都市：

ビルや地面も荒れ果て、人影のない場所に乾いた風が吹き抜ける。

突如、空間に亀裂が走るとバチバチと音が鳴り響く：

次第に音は大きくなり空間が湾曲して行くと爆風をおこし、周囲の瓦礫を吹き飛ばした。

地面に半径十メートル程のクレーターが出来上がり、土埃の中に微かに確認出来たのは人影：

「何だ？」

男性特有の低い声が聞こえ： 土埃が風で吹き飛ぶと、その《男》の姿が確認出来た。

銀髪に赤いラバーコート：手には身の丈近い両刃の大剣を持っていた。
る。

《男》は、巨大な蜘蛛の悪魔サイクロプスの頭に突き刺した剣を抜き、辺りを見渡した。

「：何処だ、ここ？」

背中に剣を背負いながら、焦った様子もなく歩き出す。

《サイクロプス》の死体が土に還って行くが、《男》もふと足を止めた。

振り返ると、《サイクロプス》だった土の塊の中から赤い光が発している。

男は静かに歩み寄り、《それ》を手にとってみた。

「悪魔が宝石泥棒か？」

それはまさしく《レリック》だった。

「世も末だな…」

溜め息を吐きながら《レリック》をポケットに仕舞うと、《男》は再び歩き出す。

「適当に動いてりゃ誰かいるだろ」

あたかも世界中から人間が居なくなった様な場所でその《男》は何の宛のない言葉を口にして…

大きく背伸びをすると、一度深呼吸し再び歩き出した…

だが、遥か数百メートル離れた廃棄ビルの中から数体の《ガジェツト・ドローン》がその《男》を見ていた…

場所は変わり、ネロに移る。

「で、これからどうするんだよ？」

フェイトが運転する車の中でネロは口を開いた。

彼は聖王教会から機動六課の方で預かる事になり、その機動六課の部隊舎に向かっていた。

だが、車の中では沈黙が続き、先程から隣にいるシグナムが目を瞑ったまま腕を組み、ピリピリとした空気を醸し出している。

「ああ、ごめんな。細かい話は六課に着いてからするつもりなんや

けど…、取り敢えずこの資料に目え、通しといて」

助手席にいるはやてが浮かび上がった画面を指で操作すると、ネロの前にも同じ様な画面が出て来た。

よく分からない文字だらけで操作に困っていると、はやてがそれに気付き再び何かしらの操作をする。

すると、画像のデータが順番に並び端の方には小さい文字が書かれていた。

「日付ごとにまとめたアンノウンの画像データです。指で触れば拡大画像が出てきますんで、取り敢えず見て下さい」

はやてが説明を終えると、試しに画像を触ってみた。言われた通り、画像は確かに《悪魔》のものだった…

画像の中にはフォルトゥナでも見た事のある悪魔や、実際に見た事はないが書物でなら見た事のある悪魔など様々だ。

順番に画像を見ると、ネロはある画像で手を止めた。

蜘蛛の様な外見に蠍の様な尻尾を持ち、火球を吐いている悪魔…

四足歩行の下半身に上半身は人間というケンタウロスの様な悪魔が二体一緒に映っていた…

二体とも体からは炎を噴き出し、周囲を燃やし尽くくそうとしている所の画像…

「どうした？」

隣にいるシグナムが聞いて来たのに驚き、急いで他の画像に切り換

える。

(まさかな…)

見たばかりの画像の事を気にしながらも、余計な考えを打ち消す。

ケンタウロスの様な悪魔：《ベリアル》の事をネロは知っていた。
一年前：フォルトウナでの戦いで、ネロはベリアルを魔界に送り返した。

その後、再び出現するが《最強の悪魔狩人》との戦いでベリアルは敗れ、この世から消滅した：

ネロは先程の画像の悪魔はおそらくベリアルと同種の悪魔なのだろうと思う、思案するのを止める。

だが、急いでとばした画像の中に最も目を通しておかねければならないものがあった事にネロは気付いていなかった：

その画像は酷くブレていたが、人型の： 白い体に二枚の翼を持つ、まるで“天使”の様な悪魔の画像があった事に：

一通り画像に目を通すと、外の景色を眺める。

今は細い道路を通っており、周囲は海に囲まれていた。

(あの画像の悪魔…)

ネロの頭の中には《ベリアル》に酷似した悪魔の事が引っ掛かっていた。

一度溜め息を吐くと、何気無く聞いてみる。

「なあ、いつぐらいから悪魔が出てくるようになったんだよ？」

「最初の目撃例は二週間前です。でも二、三日前から急に増大して…」

「二、三日？」

その言葉が頭に引っ掛かり、聞き返した。

確かにデータの終わりの方は格段に画像が多かった…

ネロがミッドチルダに来たのが二日前…

悪魔の目撃件数と襲撃件数が増え始めた頃とほとんど同じである。

（悪魔と異世界に古代遺物のレリックか…）

前方に何かの建物が見えてきた。

「ほら！ 六課の隊舎が見えて来ましたよ！」

「はやて。狭いんだから、はしゃぐと危ないよ？」

はやてが助手席からネロの方に乗り出し、隊舎の方を指さしている
と、運転席のフェイトが微笑みながら言う。

（嫌な感じがするな…）

ネロも六課の隊舎を見ながら一人、今後の事を考えていた。

ちなみに、隣のシグナムが助けてもらった礼を言えなかった事を引

きずっているなど、この時点では誰も気付いていなかった。

場所は戻り：

《レリック》を拾った《男》は相変わらず廃棄都市の中にいた。

急ぐ様子もなく、辺りを見渡しながら：　まるで観光気分で歩いている。

すると突然足を止め、後ろを振り返ったが：

勿論、人影などありはしない。再び歩き出そうとすると、《男》目掛けてあらゆる方向からガジェットの青いビームが襲う。

ガジェットの放ったビームは《男》に直撃し、土埃が巻き上がる。一体のガジェットが《男》から《レリック》を奪おうと近付くが、飛び出して来た両刃の剣に貫かれ、そのまま地面に叩き付けられると爆発した。

爆風で土埃が吹き飛ぶと、ガジェットのビームが直撃した筈の《男》は無傷：

「シヨボいな。玩具ならもつと頑丈じゃなきゃ駄目だろ？」

不敵に笑いながら皮肉を言うのと、背中に剣を背負い直す。

ビルの中からガジェットが《男》を見ていたが、突如《男》の姿が消えた。

辺りを見回したり、赤外線や紫外線：生命反応で《男》を探すが何処にも見当たらないでいた。

「どこ見てんだよ？」

突然聞こえてきた声に反応し、ガジェットが声のした方を向くと《男》が立っていた。

ガジェットがすぐにビームを放つが《男》は避ける様子もなく、構

えを取ると周囲にバリアの様な障壁を形成し、ビームを吸収する。

いくらビームを撃っても効かないことから、複数のアームによる攻撃に切り替えるが：

《男》も構えを解き、アームをかわしながらガジェットとの距離を詰めて行く：

「あんたからのプレゼント…確かに受け取ったぜ？」

ガジェットと《男》との距離は二メートルを切っていた：

「こいつは俺からの御返しだ。遠慮しないで受け取れよ？」

拳を振りかぶり、おもいつきりガジェットのボディに叩き込む。

「Release（返すぜ）！！」

防御した時のガジェットのビームを蓄積させて生まれたエネルギーを打ち込み：

そのエネルギーはガジェットを貫き、その先のビルまでも崩壊させた。

残りのガジェットが目を光らせ、電気信号でコンタクトを取ると、崩壊したビル：もとい《男》から離れようとする。

「逃げる気か？」

そこには既に《男》が回り込み腕を組んで立っていた。

残った四体のガジェットが二手に別れ、逃走を試みるが：

《男》は、

“やれやれ…”

と、言った顔で首を振った後に背中の剣を抜く。

「Freeze（動くな）！！」

大剣をブーメランの様に投げると、大きく弧を描きながら二体のガジェットを破壊した。

だが、《男》の視線は残りの二体に向けられ、コートの下…腰のホルスターから二挺の大口径銃を抜く。

右手に銀色の銃…左手に黒の銃を握ると腕をクロスさせ、狙いを定め…

撃ち出された二発の弾丸は容易くガジェットのボディを貫き、爆発させる。

《男》は数回銃を回転させた後、腰のホルスターに納めた。

丁度戻って来た剣を華麗にキャッチし、背中に背負う…

ビルの中から出ると、自分が壊した建物やガジェットの残骸に目を向けるが、すぐに歩き出す。

ガジェットが炎上する音と…

《男》の鼻歌とブーツの固い音しか聞こえない空間にもう一つの“音”が聞こえた。

それは、微かに聞こえる程の《男》の呟き声だった…

J
a
c
k

ジャックポット
p
o
t
:!
「」

E p i s o d e . : 8 \ F i r s t M i s s i o n へファーストミッションへ

闇の勢力は人知れずに影の中を蠢く…

だがその存在は時として爪と牙を剥き出しにする…

Episode.8 First Missionへファーストミッション

「ささ、こちらです」

車から降りるとはやてに連れられ機動六課の部隊長室まで案内された。

部屋の中には茶色の髪をサイドアップで一つに束ねた女性と赤毛の髪を後ろで二つに分け、三つ編みにした少女がソファアーに座っていた。

「おつかれ、はやてちゃん」

「お帰りはやて」

茶髪の女性と赤毛の少女がはやてに声を掛ける。

はやてとネロに続きシグナムが部屋に入るとドアを閉め、三人もソファアーに腰を下ろした。

「初めまして、機動六課スターズ分隊隊長の高町なのはです。お話はフェイト隊長とシグナム副隊長から聞きました。宜しく願います」

茶髪の女性、高町なのはが左手を差し出してきた：

ネロはそれに応えようとしないが、隣のシグナムに肩を小突かれたので渋々手を差し出す。

「あたしはスターズ分隊副隊長のヴィータだ：」

なのはとネロが握手を交わすと赤毛の少女、ヴィータが口を開いた。だが、はやて達の外見的な年齢はネロとさほど変わらなかったが、このヴィータという少女は外見年齢は7〜8歳程度：

どうせ手を引っ込めてもまた同じだろうと思い、ネロはヴィータに左手を差し出すが：

「なんだよ、右手じゃねえのか？」

その瞬間部屋の空気が固まった。

ネロも手を引っ込めるとソファーに腰を下ろす。

はやて達は何も言わなかったが、目線を変えたり眉が吊り上がったりとしていたので、アイコンタクトでも取っているのだろうとネロが思っていると、再びヴィータが口を開く。

「あたしはゼッター認めねえ！ 悪魔だの何だのワケ分かんねー事言ってる上にはやてを泣かせる様な奴なんかゼッターに認めねえからな！！」

ヴィータは身を乗り出すと、ネロの胸ぐらを掴んだ。

ネロはシグナムの方を見ると、

『どっかで見た光景だな？』

とでも言うような顔をした。

それに彼女も小さい溜め息を吐くと席を立ち、ヴィータの腕を掴む。

「ヴィータ： もう止める。主の前だぞ」

「放せよ！ シグナムだって言ってたじゃねーかよ、こんなやつ信用出来ないって。なんで止めんだよ！」

「そこまで言った覚えはない、見極めると言ったんだ」

シグナムはヴィータの言葉に冷静に対処。

「ヴィータちゃん、シグナムさんの言う通りだよ。落ち着いて」

「ヴィータ、ええ加減にせんとウチも怒るで？」

はやてが言うとうとうやく手を放し、腰を下ろした：

「ごめんはやて…」

ヴィータが落ち着いたのにはやて達が一安心する。

するとネロが、

「完全にデジャブだな」

と言った。

その言葉にはやてとなのは半分困った様な顔で笑ったが、自分の事を言われているのに気付いたシグナムは顔が真っ赤になってしまふ。

「右腕の事はみんな知ってるのか？」

「知っているのはカリムとシャツハ、ここにいる私達と…」

はやてが応えているとドアが開き…

「はやて、お待たせ…」

車を止めてきたフェイトが部屋に入って来るが、ヴィータが睨み付けて来たので、動きが止まる。

「…フェイト隊長の七人です。」

「おつかれテストロッサ」

不機嫌だというのがあまりにも分かりやすかった。

「えと… ヴィータ、睨まないでよ…」

「睨んでねーです、元々こーゆー目付きです」

フェイトの言葉に思いっきり棒読みで返した。

「うう…、なのは…」

「にやはは…、今のヴィータちゃんご機嫌斜めだからね。まあ、フェイトちゃんも座りなよ。まだ始まってないから」

なのはがフェイトを慰めソファーに座らせる事で、ようやく機動六課の隊長陣が全員揃った
席順は奥からなのは、ヴィータ、フェイト。向かいがはやて、ネロ、シグナムの順で座る。

「いやー、これで隊長陣は揃った事やし本題入ろかー」

はやてが手を叩きながら言う。全員がそちらを向いた。

「最近出没しているアンノウンに対策する為、ネロさんに協力して頂く事になりました。尚、今後の任務ではネロさんにも戦闘・調査に同行して頂きますがその事に関しては構いませんね？」

「ああ、構わねえよ。やる事はちゃんと…」

その時、突然警報が鳴り響いた。

はやての前に画面が浮かび上がり、誰かと会話をする。指示を出す。

「ネロさん、悪いけど早速なのはちゃん達と出動してもらえん？」

はやてが躊躇しながら言ってきた：

「悪魔か!？」

「いや、廃棄都市区画でかなり強力な魔力反応が感知されたんやけどな… その付近から破壊されたガジェットが見つかったんよ。悪魔とは関係ないと思うんやけど…」

「行くよ。どうせやるんなら早い方がいいだろ？」

ネロが立ち上がると肩を回した後に首の骨を鳴らす。

「それじゃあ、なのは隊長とフェイト隊長はフォワード陣と出動。シグナムとヴィータは待機、ネロさんはなのは隊長達と一緒に出動して下さい」

ネロがなのはとフェイトと部隊長室を出ると、屋上に向かう途中で

さっきから気になっていた事を聞いてみた。

「本当に部隊長だったんだな…」

「信じて無かったんですか？」

フェイトが聞いて来るがそれはスルーして、次の疑問を言う。

「そういや何でヴィータってやつ、はやてが泣いた事知ってたんだよ。教会の所から俺達一緒にいたよな？」

「ああ、それは念話を使って話したんです」

「念話？」

フェイトの言った事を聞き返した。

「思念通話と言って、直接相手の頭に念じて話す事です。簡単に言うとテレパシーみたいなものと言えればいいでしょうか…」

（なんでもありだな…）

と思うが、

「それなら分かりやすいな」

と返した。

言った所で丁度 屋上に辿り着きドアを開けると、ヘリの前に人が四人待っていた。

正確には その四人がなのはとフェイトを待っていたのだろう。なのはとフェイトが来ると敬礼し、二人に続いてヘリに乗り込んだ。

四人とも若く、見た目は全員子供だろう。

オレンジの髪を二つに束ねた少女と青い髪にショートカットの少女はネロと同じ年くらいだが、後の二人は明らかに年下だった。

ヴィータより少し年上くらいの赤髪の少年とピンク髪の少女がこっちを見ている。

時折フェイトとなのはの方を見ていた事から、思念通話とやらで話しているのだろう。

「みんな此方はアンノウン事件に協力して頂くネロさんです。今日から六課の一員として動いて頂くからみんな順番に挨拶して」

なのはが説明を終えると、端から順番に挨拶を始めた。

「スターズ4、ティアナ・ランスター二等陸士です。この度は宜しくお願いします」

「スターズ3、スバル・ナカジマ二等陸士です」

オレンジ髪の少女、ティアナ・ランスターが敬礼して来ると隣の青い髪の少女、スバル・ナカジマも敬礼をして来た。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「同じくライトニング4、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。此方は飛竜のフリードリヒです」

赤髪の少年エリオとピンク髪の少女のキャラが堅苦しい挨拶と共に敬礼してくる。

ちなみにキャラの膝の上には白い生物（竜）フリードリヒが乗っていた。

「ネロだ…」

最低限の返事をしたが四人とも立ったまま座ろうとしない。

おそらくネロがまだ喋ると思っているのだろうが、協調性・社交性ともほぼ無いに等しい彼はそれ以上語らなかった…

「え…：それじゃあ今回の任務なんだけど、内容は先程発生した魔力反応の発生地点の調査になります」

「現場には破壊されたガジェットも確認されてるし、気を付けてね。あと、みんな座っていいよ」

フェイトが促す事でみんな座るが、ネロは窓から外を眺めていた。

：

数分後、ヘリは廃棄都市区画に入ると、魔力の発生地点から少し離れた所に着陸。

先にスバル達が降りると最後にネロも表に出ようとするが、フェイトと“ライトニング”と言っていたエリオとキャラがこちらを見ていた。

「あの、ネロさん… 来たばかりで接し方に戸惑っているのかも知

れませんが、気軽に構いませんから…」

「そうだな…」

フェイトの隣をすれ違い外に出る… エリオとキャロの二人もネロの背中を見ていると、何か言いかけたがその前に言葉を続ける。

「それよりやる事あるだろ？ 早く行こうぜ。もうなのは達、だいたいぶ先に行っちゃまってるよ」

ネロが言った通り なのは達《スターズ分隊》の三人はだいたいぶ先を行き、フェイト達を呼んでいた。

「あと前にも呼び捨てで良いって言ったし、畏まったふうに話さないでくれよ。なんか調子が狂っちゃまう」

フェイト達がネロの後を着いていくと、振り返らないまま言ってきた。

「ですが！」

エリオの言葉にようやく振り返るが、うんざりした顔をしている。ヴィータとはえらい違いだと思ったが、正直ネロにとっては彼女の方が話しやすかった。

「エリオでいいよな？ その敬語も禁止だ」

「あの…」

「禁止だ」

「…はい」

返事を聞くと再び歩き出す。

なのは達は強力な魔力が感知されたと言う、発生したと思われる地点にいた。

爆発した跡…それより軽く隕石でも堕ちた様な場所に全員が集まる。

「ここがそうだね… それじゃあ二人一組に別れて調査始めるよ。
スバルとティアは向こうのガジェットの残骸をお願い。エリオとキ
ャロは倒壊したビルとその近くのガジェットを、私達はこの付近を
調べるから」

なのはが指示を出し調査を始める。

ネロはクレーターの中心… コンクリートの上に何故かある土を右
手に取りそのまま握ると額に当てる…

その様子をなのはとフェイトが黙って見つめるが、ネロが突然立ち
上がり、握っていた土を捨てた。

「当たり前だ」

「「え？」」

ネロの言った事が分からず二人同時に聞き返す。

「ここに、あの《レリック》ってやつがあったんだよ」

「そんな事まで分かるんですか？」

「微かに感じたただけだが…間違いない。しかも悪魔が持ってたみたいだな」

ネロはクレーターから這い上がると、コートと膝に着いた汚れをはたきながら応える。

「あの土塊…元は悪魔だったものだよ。要するに死体みたいなものだ」

悪魔の知識のない二人に手短に悪魔の情報を教える。

「悪魔の中には人界に来る為に何かしらの媒介を使うものもいるんだよ。形のある物に憑依したり、形のない物に形を与えたりしてな。コイツもそうさ」

「じゃあ…あのガジェットはその悪魔の持っていたレリックを奪いに来た所で戦闘になり、他のガジェットがレリックを回収したか…」

「誰かがガジェットと悪魔を倒してレリックを持って行った…て事かな？」

「さあてね？　そこまで詳しくはわからねえよ。それをこれから調べるワケだし…」

なのはとフェイトがレリックの行方を推測していると、ネロの右腕が疼いた…

勿論包帯とグローブを着け、袖をのばしていたが、その下では悪魔の気配を感じ取り青白い光を放つ…

（まずい！ あの方角には…）

悪魔の出現する場所も感じ、走り出すと共に叫ぶ。

「なのは！ フェイト！ あんた達は遠くの二人を助けに行け！！」

「なに？」

「どうしたの！？」

走り出したネロの考えがなのはとフェイトには分からないが…

「悪魔だ！！ 早くしろ！！」

「「え！？」」

「早く！！」

「う、うん！」

「フェイトちゃん！」

ネロの尋常じゃない様子に二人はバリアジャケットを纏い、空に飛び上がる…

その頃、倒壊したビルに埋もれたガジェットの残骸を調査していたエリオとキャロの後ろに影が忍び寄っていた…

E p i s o d e . : 8 \ F i r s t M i s s i o n へファーストミッションへ

キャラ崩壊が酷くなってきた気がします…

ですか、それでも執筆は続くでしょう

意見や指摘があったらコメントお願いします。

E p i s o d e : 9 〉 F r i e d r i c h 〉 〈 白銀の飛竜 〉 〈 前書き 〉

小さき飛竜は主と友を守るため地獄からの使者を退ける…

主はそれに応え飛竜に本来の姿を与える…

Episode..9〈Friedrich〉〈白銀の飛竜〉

『エリオ、キャロ！　すぐにそこから離れて！！』

「フェイトさん！？」

フェイトから念話が入ってきたのにキャロが聞き返すと、エリオにも念話が入ってきた事からキャロの方を振り向く。
だがキャロを見たときのエリオの顔には驚愕の色が走っていた。

「ストラーダ！！」

【S o n i c M o v e】

エリオが叫んだ瞬間に彼のデバイス《ストラーダ》から電子音が鳴り響き、キャロを抱えて倒壊したビルから離れた。

「エリオ君！？」

エリオの行動に動揺していたが、エリオは自分達がいたビルの影を睨み付けていた…

キャロもエリオの目線の先を見ると、そこにはボロボロの布をコートの様に羽織り大鎌を持った異形の化け物が二人を見ていた…

既に大鎌は降り下ろされていたが、仕留め損ねた獲物に再び狙いを定め二人にゆっくり歩み寄って行く…

「ありがとう、エリオ君…」

助けられなければ、今頃あの大鎌の餌食になっていた事をエリオに

礼を言うが、彼はキャロを庇う様な位置で異形と睨み合いを続けた：

『二人とも大丈夫！？』

『フェイトさん、《アンノウン》に遭遇しました。報告の中にもあった个体です』

【Set Up】

フェイトから入ってきた念話を返すと右腕の腕時計型のアームドデバイス《ストラダー》が再び電子音を発する。

エリオの体が光に包まれると、茶色の陸士服から赤い服に白いロングコートのバリアジャケツト：手には腕時計から槍の形に変わったストラダーがあった。

「ケリュケイオン！」

【Stand By Ready, Set Up】

それに続きキャロも自分のブーストデバイス：二つの宝石に翼の付いた手首飾り型の《ケリュケイオン》を起動させ、ピンク色の服に白いローブと帽子を被ったバリアジャケツトを纏う：

ケリュケイオンも手の甲に丸いクリスタルを付けたグローブの形に変わり、二人は化け物と対峙する。

「エリオ君…」

目の前の化け物：もとい《悪魔》に少し怯えながらエリオに話し掛けるが、彼女の隣で羽ばたいている飛竜フリードリヒも唸り声を上げていた。

「大丈夫だよ、キャラ： ガジェット以外のアンノウンと実際に戦うのは初めてだけど、すぐに終わらせる！」

キャラをこれ以上不安にさせない為にストラーダを構え、悪魔に突っ込んで行く。それに傲慢を司る悪魔《ヘルⅡプライド》も鎌を大きく振りかぶるがモーションが大きく、降り下ろすよりも前に槍がその体を貫いた。

「やった！」

《ヘルⅡプライド》の体は元の“塵”に戻り、先程までいた異形は存在しない様だった：

「非殺生設定なのになんで：」

エリオが声を漏らしながら言う悪魔だった塵を手取る。

キャラも悪魔がいなくなった事で安心してエリオに近づき、デバイス《ケリュケイオン》を起動させた。

【目撃例が最も多いタイプです。しかし、戦闘を行ったとのデータはありません】

ケリュケイオンが悪魔のデータを出す、情報が少ない事からすぐに喋り終わる。

「非殺生設定で倒せるって事はガジェットみたいに生き物じゃないって事かな：？」

「多分ね： それより早くフェイトさん達と合流しよう。ここにいちやまずいしね」

エリオとキャロがフェイト達と合流しようと歩き出すが、突然フリードリヒが唸り出した。

「どうしたのフリード？」

落ち着かないフリードを抱き寄せるが、それでもフリードは何もない前方を睨み唸り声を出し続けていた。

キャロがなだめようとするが一向に落ち着かず、ついには彼女の腕から飛び上がり一層に凄まじい唸り声を上げる…

「フリード！ どうしたんだよフリード！！」

「なんだか様子がおかしい…」

エリオとキャロの声も届かず、唸り声が激しさを増し、遂には何もない前方に向かって火球を吐き出す。

だが、何もないはずの空間から飛び出してきた“何か”に火球が当たると、その“何か”が火に包まれた。

フリードの行動と現れた“何か”という突然の事態に困惑するが、よく見れば火に包まれた“何か”は今倒したばかりの《ヘルⅡプライド》だった。

「このアンノウンさっきの…」

キャロが振り返るが後ろには塵の山があるだけ…

「出て来るのが分かったの！？」

エリオがフリードに聞くが未だに唸り続けている。すると今度は何もない空間ではなく、エリオとキャロの方を向き唸り声を上げる。

(まさか！)

事態を察し、エリオとキャロが振り向くと同時に空間に亀裂が走り、ガラスが割れる様に《空間》が飛び散るとそこから《ヘルⅡプライド》とは違う悪魔が飛び出して来た。

服の様なものは着ておらず、その悪魔は赤みがかった白い体に刃がノコギリ状にギザギザになった大鎌を手に行っていた：

【Protection】

嫉妬を司る悪魔：《ヘルⅡエンヴィー》が迫る中、キャロは咄嗟にシールド型魔法を発動するが、受け止めたはずの刃が次第に食い込んで行く：

エリオはストラダからカートリッジを排莢し、斬りかかると悪魔の鮮血が飛ぶが、《ヘルⅡプライド》よりも耐久性が高く、一度絶叫を上げるが鎌から手を離さずに更にシールドに食い込まれる：

「キャロ！！！」

刃がキャロの顔前まで迫っていたが、その鎌を手にした悪魔《ヘルⅡエンヴィー》の姿が飛び込んで来た黒い影に弾き飛ばされた。

「ネロさん！？！」

《ヘルⅡエンヴィー》に飛び蹴りを食らわせたようでキャロとエリ

オの間にはネロがしゃがみこんでいるが、彼は二人に目もくれずにシールドに食い込んだ大鎌を取り悪魔に向かって行く。

蹴り飛ばされた《ヘルエンヴィー》が体勢を立て直そうとして顔を上げた瞬間にネロが手にする自分の鎌によって首を切り落とされた。

首を切り落とされた《ヘルエンヴィー》は声を出せず： それを見ていたエリオとキヤロは声を出すことも出来ずにいるが、空を飛ぶフリードだけが唸っている。

「あの：」

「大丈夫か？」

エリオが声を掛けようとするネロが振り返るが、その姿を見て身が固まる。

キヤロもエリオの後ろで怯えていた：

「：どうした？」

二人に平然とした顔で聞きながら、ネロは顔についている血を拭う。

「いえ： それよりもありがとうございます」

「礼なんかいいよ、早いとこフェイト達と合流するぞ」

鎌を一度振るい、刃に付着した血を振り払うとそのまま肩に担ぎ歩き出す。

（ザコだが数が多いな：）

悪魔の反応を包帯とグローブで隠した右腕で感じ取ると突然振り返るが、エリオ達もビクッと反応して立ち止まった。

「おい、あっちの方は確か…」

「スバルさんとティアさんが向かった方角です」

ネロの指差した方向の先にスバルとティアナが破壊されたガジェット
の調査をしている場所がある事を教えるが、エリオの返事を聞く
と小さい舌打ちをした後に頭を数回掻き急ぎ足で歩き出した。

「お前ら走れるか！？」　ちょっとヤバい事になりそうだ」

早く悪魔を倒したい所だが、年端も行かぬ子供を二人も置いてきば
りにするわけにはいかなかったので聞いてみる。

「え…　どういう事なんですか？」

「説明は後回しだ。お前らの仲間と…隊長達が今のと同じ様なやつ
らに襲われているかもしれない。簡単に言えば“緊急事態”だ」

「フェイトさん達ですか！？」

「でも隊長のお二人もスバルさん達も今まで戦って来ましたし…」

「ガジェットとだろ？」

ネロが返すと同時に、エリオとキャロ…　飛んでいるフリードの動
きが止まる

後ろの足音が止んだのに気付きネロも歩くのを止めるが、今度は振り返らないまま話し出す：

「いいかよく聞け： アイツらは機械じゃないがまともな事も考えちゃいねえ。手負いの獣が何して来るか分からないのと同じなんだよ」

エリオとキャラは黙ってネロの背中を見ていた：

突然現れた得体の知れない男に自分が信頼と尊敬する人達と自分達の戦いを否定された様な気がしていたからだ。

それに悪魔の首を切り落とした時の姿が何よりも恐怖と不信感を煽っていた：

「…あるか？」

「え…」

エリオは余計な感情にとらわれ途中から話を聞いていなかったが、突然の問い掛けにハッと我に返った。

「なにがですか…？」

エリオが少し警戒しながら聞き返す。

「いや… 今言っただろ」

「何か守りたいものはあるか、って」

キャラが耳元で聞き逃した言葉を小声で伝えると、エリオは一度息

を飲み、静かに… 一歩だけネロに近付いた。

「…ありますよ」

「私にもあります」

その言葉を聞くとネロも途中まで振り向き、横目のまま二人の少年と少女、小さな飛竜を見据える。

ネロはようやく振り返ると、エリオとキャロと同じ目線までしゃがんだ。

「ならいい。理由があるならそれだけで十分だ」

笑いながら頭を撫でられたのに呆気に取られたが、それよりもヘリの中にいた時も、話し掛けてもまともな言葉を返さない無愛想な男がこんなふうに見えるのかと、エリオとキャロは驚いていた。

「お前も同じか？」

フリードはまだ少し警戒していたが、その言葉を聞き…

「キュク」

と、返した。

唸っていても見た目同様にまだ子供なのだろう。

思いの外可愛らしい鳴き声を聞き、フツと笑うと立ち上がった。

「よし！ それじゃあ、さっさと行って、さっさと終わらせるぞ」

「ケリュケイオン！」

キャラが胸の前で腕を交差させると、彼女のブーストデバイス《ケリュケイオン》から光が放たれ、足元には正方形の端に円が取り付いたピンク色の魔方陣が広がり、キャラを中心にゆっくり回転し始め…

「基は清き奔る白き閃光… 我が翼となり、天を翔る…」

光の強さが増して行き、同時にフリードまでも光に包まれる。

「来よ、我が竜フリードリヒ！ 竜魂召喚！！」

キャラが詠唱を終えると、光の中から巨大な竜が現れた。だが、姿形は確かにさっきまでそこにいたフリードが巨大化したものだと分かった。

「すごいな…」

「ネロさん、乗って下さい！」

キャラがそう言うが、フリードはまだ威嚇していた。

下手をしたら噛みつかれるどころか火でも吐いて来そうな程に…

「あー…」

ネロは鎌を持っていない左手でフリードに触ろうとするが、唸り声どころか吼えられてしまった。

「やっぱり止めとくよ。追いつくから先に行きな」

「でも！」

「守りたいものがあるんだろ？ だったらそれ守れよ」

やっと諦めるとキャロが手綱を取り、フリードが大きな翼で羽ばたき飛び立つ。

体長も10メートルはあったが、翼を広げた姿は改めて本なんかに出てくる“竜”だと確認させてくれた。

「すみません。本当はいい子なんですけど、まだ警戒してるみたいで…」

「見りゃ分かるよ。あんだだけ主人を守ろうとしてたんだからな」

ネロが担いだ鎌を降り下ろし、少しずつ歩き出す。

「僕達は先に行きます。ネロさんも気を付けて下さいね」

フリードの羽ばたきが大きくなり、高度と速度も上がりネロとの距離が遠くなっていく中でエリオが言うが…

「敬語止めろって言ったろ。さん付けもな…」

小さくなって行く白い竜を見届けながら鎌を大きく振るうと、空間を突き破り現れた悪魔を切り裂き…

「どうしてみんな、ああなのかねえ？」

次に上半身だけ仰け反ると、左右から飛び出した鎌が空振り、間拔けな悪魔が2体自滅した。

「お前らはどうだ？」

ネロが振り返ると、空間から… 地面から次々に悪魔が湧き出てきた。

「まあ、下級悪魔なんかが喋れるわけねえか…」

飛び込んで来た悪魔に蹴りを入れると塵に戻るが、次から次へと襲い掛かって来る…

「そう慌てんなよ？」

複数の悪魔を斬ると共に《ヘル・エンヴィー》から奪った鎌を捨て、右腕のグローブと包帯を取り《悪魔の右腕》を露にする。

「遊びに付き合ってやる… 一分も持たないだろうけどな!!」

《デビルブリンガー》で地面を殴ると土埃を巻き上げ、その中にネロと悪魔は見えなくなった…

E p i s o d e : 1 0 \ T h e S e v e n D e a d l y S i n s へ七つの

地獄には傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、貧欲、暴食、色欲の地獄がある
という：

元は人を罪に導く可能性のある欲望や感情だったが、その地獄に堕
ちた者達の魂は悪魔へと変わり、人間を直接地獄に引きずり込もう
とする：

「あれがドクターの言ってた人？」

廃棄都市区画の中にあるビルの屋上で薄紫色の髪の少女が一人立っていた。

少女の前にはホログラム状の画面が浮かび上がり紫色の髪に金色の瞳の男が映り少女の問い掛けに応える…

【そうだよルーテシア… 彼が私の捜しものだよ】

画面の男がルーテシアという少女に返すと、歪んだ笑みを浮かべる…その笑みは不気味であり、何処か人を見下している様にも感じられた。

「ドクターの新しい玩具がどんどん減ってるみたいだけど…」

ルーテシアの指先に乗るほど小さい虫の様な召喚虫が偵察して来た情報インセクトを伝えると、男は又しても歪んだ笑みを浮かべる…

【構わんよ、どうせ増える事だしあれは実験台だ。彼等の力を見るためのね】

画面を見ずにルーテシアは遠くの方を見詰め、静かに口を開いた…

「まだ送ってほしいものはある？」

【済まないね。あれだけの数の悪魔を転送してもらったのに… それじゃあ1つだけいいかな？】

少女の優しさに感動しているとは思えない様だったが、その言葉を聞きルーテシアにある画像を送る。

【君には本当に感謝しているよ： その悪魔を転送したら帰っても構わないからね】

「うん。でもまだしばらくはここにいますから：」

画面が消えると、ルーテシアが《ケリュケイオン》に酷似したデバイス：《アスクレピオス》を起動させると、足元に正三角形の魔法陣が展開し紫色の光を放つ：
すると、何処からか現れた死神の様な悪魔が光に包まれ姿を消した。

「ねえ： ガリユーはどう思う？」

アスクレピオスから飛び出した黒い球体に頬を当てながら問い掛けた：

「そうだね： でもドクターの頼みだから」

再び遠くを見詰めると： 呟いた。

「普通とは少し違う人なんだって：」

：

同じく廃棄都市区画の中：

悪魔の群れに囲まれたネロが両手に鎌を持ち、一体の悪魔を踏み付けていた。

（閻魔刀を使うまでもないな…）

踏み付けた悪魔に鎌を突き刺すと悲鳴を上げて元の塵へと返って行く。

それを見ていた残りの悪魔が少しづつ後退りしですが、ネロが一気に間合いを詰め、三体の悪魔を切り捨てる。

「逃げんなよ…」

近づく死の恐怖を振り払う様に悪魔は鎌を振るうが、目の前の狩人は臆さずに向かって来る…

「D u s t t o d u s t（塵は塵に）…」

右手の鎌を投げ、数体の悪魔を塵に返し…

「A s h e s t o a s h e s（灰は灰に）…」

左手の鎌で取り囲む悪魔を無に返し、大きく振るい、剣風で塵と砂埃を吹き飛ばす。

既に悪魔は消え、鎌を手にした銀髪の男がいるだけだった。

「向こうも派手にやってるみたいだな」

スバル達がいる方角の傾いた廃棄ビルから爆音に近い音がこちらまで聞こえていた。

それを聞くとネロも大鎌を捨て、右腕に包帯を巻き、そこに向かって

て走り出す。

(……気のせいか……)

妙な感覚を感じたが、今はそれどころではなかったので余計な考えは捨て、彼は走るスピードを上げる……

…

『ティア、そっち行つたよ!』

スバルが右腕に装着したデバイス《リボルバーナックル》で砂を吐き出す暴食を司る悪魔《ヘルⅡグラトニー》を殴り飛ばし砂に返すと、取り残した悪魔がティアナに迫っていた。

『分かってるわよ!』

ティアナも自分のデバイス《クロスミラージュ》の銃口を残りの《ヘルⅡグラトニー》に向ける。

二丁の銃からオレンジの魔力弾を打ち出し難無く悪魔を砂に返した。

「やったね、ティア!」

「このくらいで喜んでどうすんのよ」

スバルがティアナに駆け寄りはしゃぐが彼女は冷ややかに返した。

「うゝ、ティアもうちょっとこう……」

長年付き合っているパートナーに軽く突き放されへこんでいるスバ

ルに目もくれずに《クロスミラージュ》の銃身部分を捨て、予備のカートリッジが入っている銃身を取り付ける。

「出来て当然でしょ？ あれだけなのはさん達にしごかれてるんだし」

スバルに近付き背中合わせの状態でクロスミラージュを構える。

「そうだけどさあゝ…」

スバルもリボルバーナックルからカートリッジを排莢すると、手首部分の二つのスピナーが凄まじい速さで回転を始め、互いに逆回転していたスピナーが止まるとカートリッジが収まったりリボルバーを装填する。

すると突然、何処からか雄叫びが聞こえ…

「来るわよ？」

空間が割れるように出現するタイプの悪魔と違い、白いローブを羽織り、刃先が角ばった鎌を持った悪魔が瓦礫の山の上に現れた。

「行くよ相棒！！」

【All Right, Buddy】

スバルの言葉に彼女のもう一つのローラーブーツ型のデバイス《マッハキャリバー》が応えると、ウィングロード先天魔法を展開し周囲に水色の魔力で形成された道が広がる。

「ロードカートリッジ！！ リボルバァァァァァー…！！」

「クロスファイアー……！」

スバルはウイングロードを駆け巡り、出現した悪魔に向かって突き進み、ティアナは笑いながら切り込んで来る悪魔に照準を定め：

「シュー……ッットッ……！」

拳から打ち出した衝撃は、怠惰を司る悪魔《ヘルⅡスロース》に、展開された複数の魔力弾は色欲を司る悪魔《ヘルⅡラスト》に着弾すると、悲鳴を上げながら元の砂と塵に返って行った。

「……終わったみたいだね？」

【周囲に敵はいません】

辺りを見回すと、スバルのデバイス《マツハキャリバー》が電子音で返す。

「ほら行くわよ！ データにあったアンノウンだったし、エリオ達が教えてくれたから良かったけどまだいるんだから」

ティアナが空を見上げるのに吊られスバルも目を向けると、桜色と金色の閃光が降り注いでいた。

『そっちはどう！？ フェイトちゃん』

『数は減ってるのは確かだけど、次から次に出て来るよ』

念話で返しながらカートリッジを排莢すると足元に金色の魔法陣を展開させ、フェイトの周囲に電撃が走り出すと彼女のデバイス《バ

ルディツシュ・アサルト」のリボルバーが高速回転の後にコッキングを行う。

「フォトン ランサー!!」

フェイトが構えたバルディツシュから10発の魔力弾を放ちなのは、
の方を振り向くと彼女の周囲に桜色の魔力弾が無数に浮かんでいた。

『なのは!』

「アクセルシューター!!」

なのはも誘導射撃魔法を発動させ桜色の魔力弾を下級悪魔に放つ…

「レイジングハート、後どのくらい?」

【数は不明、依然増え続けています】

なのはのデバイス《レイジングハート・エクセリオン》が応えるが、
その言葉を聞き表情が曇った。

『なのははどうする? これじゃキリがないよ』

『取り敢えず持ち堪えるしかないよ。エリオとキャロは?』

目線を反らすと白い飛竜が火球を吐き、悪魔を塵に返していた。
よくみれば、その背中には手綱を取るキャロと槍を手にしたエリオ
が乗っている。

「フリード、ブラストレイ!」

キャロの指示によりフリードが火球を吐き出す。

それに続きエリオも後方のビルに降り立ち、黄色い正三角形：《ベルカ式》魔法陣を展開しストラーダを構える。

「キャロ！」

「ケリユケイオン、ブーストアップ！」

キャロのケリユケイオンが光を放ち、ストラーダの射出力を上げると一直線に悪魔に突っ込む。

「スピーア・アングリフ！」

【S p e e r A n g r i f f】

「いっけえええっつー！ー！ー！」

ブーストにより加速を上げたストラーダの刃が無数の悪魔を塵に返すと、再びフリードの背中に飛び乗った。

「キャロ、平気？」

「うん： ちょっと初めての任務の時みたいに怖かったけど、もうなんともないから」

最初の内は未確認体^{アンノウン}の悪魔にうまく対処出来なかったが今の二人は冷静さを取り戻していた。

『エリオ、キャロ！ そっちの状況はどうなってる！？』

『フェイトさん、こちらは片付きました』

『でも 途中でネロさんと別行動に： 後から合流すると言ってたんですけど…』

フェイトの念話にエリオとキャロが応えていると、遠くから微かに聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「エリオ君、あれ！」

キャロの指の先には走って来るネロがいた。
フリードにネロの方に近付く様に指示を出す、未だに警戒を止めない。

「ネロさん、大丈夫ですか!？」

「見れば分かるだろ。残りの悪魔はどのくらいだ？」

思った以上に距離が離れていたらしくネロの息が上がっていた。
フリードを着陸させるとエリオが飛び降り、キャロもその後にはフリードから降りる。

「悪魔…?」

エリオが何の事か分からない顔をしながら言うと、隣のキャロも同じ様な顔をする。

「あ： いや、アンノウンはどうなった？」

アンノウンと言う言葉でようやく反応し、ネロの問い掛けに応えた。

「大分倒したはずなんですけど キリがないんです」

「それじゃあ何処かに呼び寄せているやつはいないか？ とにかく湧いて出て来ている場所を見つけれ」

乱れた呼吸を整えながら言うのと微かに感じる悪魔の気配を頼りに走り出した。

ネロの背中を見送るとエリオとキャロは再びフリードの背に乗り、空に飛び上がる。

『フェイトさん、ネロさんと合流出来たんですけど何処かに行っちゃいました』

『アンノウンが出て来る場所があるって言ってたんですけど…』

「出て来る場所…？」

二人の念話を聞くと空から見渡してみるが、それらしい場所は特定出来なかった…

（何処だ…）

ネロは微かな右腕の疼きを感じながら走っていると、急に足を止めた。

見上げると、ビルの中から悪魔の悲鳴と人の声が聞こえる。

（あの声… ティアナと…スバルって言ってた二人だな…）

右腕の疼きや状況からティアナとスバルの二人が優勢である事を察

し、悪魔が湧いている場所を見つけようとするが先程感じた妙な気配を感じた：

咄嗟に振り返り、辺りを見回すが悪魔の気配も影もない。

再び足を進めようとするが又しても妙な：誰かに見られている様な感覚に晒される。

そうこうしていると突然ビルの中で何かが爆発した：

ガシエットの爆発とは違う：明らかに異様な爆発と共に右腕の疼きが一層大きくなる。

「おい！！」

無意識に叫びながらビルに飛び込み、爆発の起きた四階を目指し部屋に飛び込むと、ネロが目にしたのは異様な光景だった。

憤怒を司る悪魔：《ヘル||レイス》が二十体近く大広間に密集していた。

「ネロさん！？」

部屋の隅の方にいるスバルが声を出す。

ティアナが負傷しスバルが肩を貸していたが、それでも彼女は左足から血を流しながら手にした銃型のデバイスを悪魔に向けるが、下手に撃てば爆発するのは分かっているから撃てないでいた：

「そっちに行くからじつとしてろ！！」

ネロの近くにいた《ヘルⅡレイス》が鈍重な動きで背中に担いだ爆弾を地面に叩き付けると凄まじい爆発を起こすが、爆炎の中に突っ込み他の《ヘルⅡレイス》の間をかい潜りながらスバル達の方に駆ける。

「どうした、やられたのか!？」

次々に爆発が起きるが、スバルとティアナの所まで辿り着き話し掛ける。

「大丈夫です… これくらい…」

「ティア！」

ティアナが言おうとするが、その途中で苦悶の声を漏らした。

傷はそれほど深くはないだろうが、ここから走って脱出するのは不可能だろう…

《ヘルⅡレイス》の動きは他の悪魔よりも非常に鈍くジリジリと三人に近付いて来るが、このままではまたあの爆発に巻き込まれるのが明確だった。

「ちょっと目、瞑ってろ」

「え？ あ…」

「いいから目を閉じてろ、開けるなよ！ 二人ともだ!!」

「は、はい！ ほら、ティアも！」

「分かってるわよ…」

ネロの張り上げた声にビクツと反応し、スバルとティアナが目を開じたのを確認すると右腕の包帯とグローブを取り払う。

拳を握り締めると共に出現した《デビルブリンガー》で壁を殴ると部屋全体が揺れ、壁にヒビが入る…

更に力を込めると《デビルブリンガー》が巨大化し、《悪魔の右腕》《》からも強い光を放つ。

二発目の拳を殴り付けると再び部屋が揺れ、壁に大穴が開いた。目的を果たしすぐに右腕の袖を伸ばしグローブを着ける…

「目え開けろ、飛ぶぞ！」

「え!?!」

「ちょっと待…」

スバルとティアナを脇に抱えたと開けた穴から外に飛び出した。

着地の瞬間に抱えた二人の分の衝撃が足に響いたが、自分達の飛び降りて来た穴を見ると案の定、《ヘル||レイス》達が同じ様に飛び降りようとしていた。

「あんた何考えてんのよ!　ワケ分かんないわ、いきなり飛び降りるなんて!?!」

「ティア、今はそれどころじゃ…」

足の痛みが怒りで麻痺しているのか、ティアナがネロの胸倉を掴んで来る。

もはや敬語ではなくなっていたが、元より敬語で話して欲しくなかったからその事はそのままスルーしてティアナの持つデバイスに目を向けた。

「これ借りるぞ」

ティアナから《クロスミラージュ》を一丁借りる（半ば有無を言わずに取る）と、そのまま悪魔に銃口を向ける。

「あんたいい加減に！」

「ティイイイアアアアアアア…」

勝手な行動ばかり取るネロにキレかけているティアナをスバルが羽交い締めで止めているが、ネロは耳に入らない程集中していた。

（ちよつとくらい無理もきくだろ…）

左手で持ったクロスミラージュにグローブを着けたまま右手を沿える…

すると、クロスミラージュが二発のカートリッジをロードすると銃口に青白い魔力弾が収束され始めた。

《悪魔の右腕》は隠していたにも関わらず明らかに異常な程に魔力を込められ、風が竜巻の様に銃口を中心に吹き荒れ…

「ブッ飛びな…」

引き金を引くと反動で体が大きくのけ反り、魔力を圧縮した魔力弾

が《ヘルレース》に着弾すると連鎖的に爆発し、ビルが倒壊し始めた。

「うわ…」

「これやばいんじゃない？」

スバルとティアナがネロの行動とビルの倒壊に啞然としていたが、突然ティアナの体が持ち上げられた。

「ボサツとするな、走るぞ！」

「ええっ！？　ちよっ…！」

「は、はい！」

ティアナがネロに抱き抱えられ顔を赤くしながら慌て、スバルもネロの後に続きマツハキヤリバーで駆けて行った…

E p i s o d e . . 1 1 \ T h i r d P a r t y 〈第三者〉 \ (前書き)

謎の勢力が現れし時、狩人は気まぐれな風のように、そして獰猛な
獣の様に動き出す

Episode..11 Third Party〈第三者〉

「見つけた！」

フェイトが上空から悪魔を殲滅しているとビルの中から大量の悪魔が湧き出ていた。

「バルディッシュ！」

【ZANBER Form】

カートリッジを排莢。バルディッシュの矛先にある斧の部分がスライドし、正面から二つに分かれ、柄の部分が収納されながらも刀身が魔力で形成された巨大な金色の大剣へと変わる。フェイトは《ザンバーフォーム》のバルディッシュで下級悪魔を切り裂きながらビルの中に飛び込む。

「あれは…！」

中にいたのは貧欲を司る悪魔《ヘルグリード》：

巨大な棺を地面に突き立て悲鳴とも絶叫とも思える声を出し、地面から次々に亡霊の様なものを呼ぶと、その亡霊達が塵や砂を媒介にして自分の体を手に入れていた。

【未確認の個体です】

フェイトに悪魔達が襲い掛かるが、彼女の魔力刃によって切り裂かれ遂に《ヘルグリード》の所まで辿り着き剣を叩き付ける。

《ヘルグリード》も地面に刺した棺を振り回すが、あっさりとバ

ルディツシュのザンバーに切り裂かれ塵へと返って行った：

『なのは、呼び寄せていたアンノウンを倒したけどどうなってる！
？』

『増えてるからまだ呼んでるのがいるみたいだよ。私もそれっぽい
の見つけたから行ってみる』

フェイトが《ヘルⅡグリード》を倒したが、数カ所に配置された他の
《ヘルⅡグリード》が未だに悪魔を呼び寄せ続けていた。

「行くよ、バルディツシュ！」

【Yes Sir】

フェイトが大剣を振るい、悪魔を塵と砂…そして何かの液体に返す
と再び空に舞い上がった。

「あの悪魔がエリオとキャロの言ってた…」

フェイトが切り裂いた悪魔の中にいた《ヘルⅡエンヴィー》を見て
いたが、すぐに液体に変わり蒸発してしまった。

【あのアンノウンも確認例がありません】

フェイトの呟いた言葉にバルディツシュが低い電子音で応えたが、
これ以上悪魔を増やさない為に飛行速度を上げフェイトは金色の閃
光となり姿が見えなくなった…

…

同じく廃棄都市区画の中にあるビルの中に隠れる様に悪魔を呼び寄せている《ヘルⅡグリード》にネロが魔力弾を撃ち込もうと走っていた。

《ヘルⅡグリード》は近付けさせまいと棺を振るうが、その棺を踏み台にしてネロが跳び、《クロスミラージュ》を悪魔の眉間に突き付ける。

「あばよ…」

収束された青白い魔力弾が《ヘルⅡグリード》の頭を撃ち抜き塵へと返した。

「足の怪我は大丈夫か？」

ネロがクロスミラージュを手の上で回しながらティアナとスバルに歩み寄り声を掛けるとティアナが申し訳なさそうにしていた。

「傷も浅いしした事ありません。さっきはすみませんでした…助けに来てもらったのにあんな事言ってしまったて…」

ティアナが足の怪我にハンカチを当てていると、ネロがポケットから包帯を取り出し差し出す。

「使え。古いやつだけど、ないよりはマシだろ？」

古い包帯…悪魔の右腕を隠す為に使っていた物をティアナが受け取ると、彼女はまた「すみません」と言った。

今度はスバルがティアナの足に包帯を巻くのを手伝いながら話し掛けて来る。

「でも、ネロさんのおかげで本当に助かりましたよ。あそこで助けてもらわなかったら危ない所でしたし、私達 ガジェット以外のアンノウンと戦うの初めてだったんですよ」

「…データにもあったアンノウンだったから大丈夫だと思ったんですけど、このザマです…」

ほとんど怪我のないスバルが明るい声で言うが、ティアナは暗い声だった。

悪魔相手に人間が十分戦ったのだからあれでも上出来だと思ったが、落ち込んでいるティアナを元気付けようと何か言おうとしたが中々言葉が出て来ない。

「別に気にする事じゃないさ。誰でも上手く行くワケじゃないし失敗だってする」

取り敢えず思い浮かんだ言葉を言うと、指で回していたクロスミラージュをティアナに渡し、辺りを見回してみると影も…右腕の兆候も感じなかった。

「なのは達に連絡取れるか？ こいつ、安全な所まで連れて行かないきゃならないからな」

遠くに見える白い竜、なのはとフェイトと思われる人影を見ながら言うが、スバルが不思議そうな顔をしている。

「なんだ、どうかしたのか？」

スバルが見詰めていると、《ヘルレイス》の爆発の中を走って来た事を思い出し顔を触ったり、体を見回すが特に問題はない。

強いて言うなら、服に細かい傷や焦げ跡があったぐらいだ。

「いや、ネロさん… 念話は使えるんじゃない？」

「使えるわけないだろ、あんなの」

ティアナの怪我を心配してくれていたネロがもう冷めた態度に戻った様にスバルは感じたが、少し納得出来ないように聞いた。

「え！？ でもさっき魔法使ってたし念話くらい…」

「魔法？」

スバルの言葉を聞き返した時、右腕が疼いた。

即座に振り返り辺りを見渡すが悪魔の姿は見えない…

「ネロさん？」

スバルが聞いて来るが急いでティアナを抱き上げた。

「ちょっ！ 大丈夫ですもう歩けますから！！」

「舌噛むから喋るな、急いでここから離れるぞ」

ティアナがネロの腕の中で暴れていたがそんな事を気にしているような状況ではなかった。

「どうしたんですか！？ もうアンノウンもないみたいだし、焦らなくても…」

スバルが喋っていると何処からか鐘の音が響いて来た…
廃棄都市区画の中に鐘を鳴らす場所などないのにその音色は酷く不
気味で、頭の芯まで響いてくるようだった。

すると鐘の音に続き、地を揺るがす様な悲鳴が聞こえて来る…

「え…」

ネロとスバルが足を止め、辺りを見回すとまだ鐘の音は鳴り止まず
悲鳴もどんどん大きくなり、何かが三人に近付いていた。

「間に合わねえな…」

舌打ちの後に呟くと右腕も悪魔の気配を感じ取り、グローブと袖の
間から青白い光が漏れ出す。

ティアナも辺りを見回していたが袖から漏れる青白い光に気付いた…

「あの…」

「急ぐぞ」

ティアナが何か言おうとしたが、その前に割り込み走り出した。

スバルも着いて来るが、鐘と悲鳴は一層 大きくなる…

「あの、ネロさんってアンノウンに詳しいんですね！？エリオと
キャロも助けられたって言ってたし、本局か地上部隊に出来た新し
い機関か何かから来たんですか？」

スバルが聞いて来るがネロは何も応えずに走り続ける。

何て応えれば良かったか分からなかったが、今はスバルとティアナを離れた安全な場所に運び、悪魔から遠ざける事と、悪魔の気配を感じる事を考えていた。

（またこの感じか…）

右腕の疼きが増して行く中、時折感じた妙な気配に気付き、焦りと苛立ちが込み上げてくる。

遠くにいるのは達がこちらに向かって来ていたが、悪寒に近い感覚と共に右腕の疼きが危険を知らせ…

「跳べ！！」

咄嗟の叫びにスバルの反応が遅れるが、ネロの言葉通りに跳び上がると空間から大鎌が飛び出して来た。

「アンノウン！？」

スバルが鎌の飛び出した所を見ると、空間が水面の様に波打ち鎌を手にした悪魔が姿を表す…

「マジで出て来るとはな…」

「あのアンノウンも知ってるんですか？」

抱かれているティアナがネロを見上げるが、彼はかなり険しい顔をしていた。

死神の様な悪魔…《ヘルⅡヴァンガード》がゆっくりと空間から出

て来ると、ネロ達の方をゆっくりと向く。

《ヘルⅡヴァンガード》は“七つの地獄”の住人を守り管理する“地獄の番人”だが、その姿は正しく《死神》だった。

ネロも《ヘルⅡヴァンガード》の事は書物で読んだくらいしか知らなかったが、

“七つの地獄”の住人…《セブンⅡヘルズ》達を管理する悪魔が書物の通りであったからすぐに対処出来た。

だが、この悪魔の出現量と妙な感覚が彼の警戒心を強めていた…

「おい、スバルとティアナで合ってるよな？」

「は、はい！」

「そうですけど…」

ネロは視線を《ヘルⅡヴァンガード》から外さずにティアナを降りし二人を庇う様に立つ。

《ヘルⅡヴァンガード》もジリジリと距離を縮めながら近付いていた。

「俺が時間を稼ぐから逃げろ」

「そんな事出来ません!!」

「私達も戦います！」

スバルとティアナが言うことを聞かないでいるが、死神との距離はもう3メートルもない。

「足手まといになるだけだ！」

舌打ちの後にネロが二人を無視して《ヘルⅡヴァンガード》に飛び込んだ。

スバルとティアナにしてみれば、デバイスも持たない人間が素手でアンノウンと戦うなど無謀に思えた。

彼女達の予想通り、ネロは《ヘルⅡヴァンガード》と取っ組み合いの状態からビルの中に投げ飛ばされてしまう。

「があっ!!?」

壁に叩き付けられ苦悶の声を漏らしながら立ち上がり、入って来た入口を見ると死神がこちらを見ていた。

骸骨の様な顔には目などあるとは思えなかったが、確かにネロを見ていた…

「リボルバアアアアアア…！」

遠くから甲高い金属音をたてながらスバルの声が聞こえた…

「キャノンツツ!!」

《ヘルⅡヴァンガード》に後ろから強力な拳を叩き込むが、一度悲鳴を上げ、体から黒い霧を撒き散らしただけで大したダメージを与えられなかった。

「うわあああああ!!?」

振り払われスバルが吹っ飛ぶが、マツハキャリバーがウイングロー

ドを展開し彼女を守った。《ヘルⅡヴァンガード》がビルの中に入ると、入口を塞ぐ様に赤い根が張ったような壁が広がる。

「ネロさん!!」

スバルがリボルバーナックルで赤い壁を殴るがびくともしない。

「スバル! どいて!!」

ティアナがクロスミラージュで魔力弾を撃つが効果がない。

「AMF...!? いや、違う!」

突然、赤い壁から手が飛び出しスバルとティアナを襲うが、二人が離れると赤い手も再び入口を塞ぐ様に戻った。

「スバル! ティアナ!」

「なのはさん、大変なんです! ネロさんが中に閉じ込められちゃったんです!」

「アンノウンも一緒です。あの壁は近付くと攻撃して来る上にこちらの攻撃は効きません... 見た事の無いものですが、多分結界系の魔法だと思います」

なのは達がようやく来た時にはスバルが慌て、ティアナが比較的冷静だが少し焦りながらなのはとフェイトに状況を説明した。

「早く助けないと! ネロさんデバイス持ってないみたいだし...」

「なのはさん！ フェイトさん！」

エリオとキャロも声を掛けるがなのはとフェイトは助けに行く様子はなく赤い壁を見詰めている。

『フェイトちゃん…』

『今は待つしかないよ…』

なのはとフェイトが念話で話していると、ビルの入口を閉ざしていた赤い壁がガラスの様に碎け散り、フェイトが中に入った。

「ネロ…」

部屋の中央には銀髪の男が膝を付き天井を見上げていたが、フェイトが声を掛けようとした瞬間絶句する…

部屋の壁は刃物で切り付けた様な跡が無数に刻まれていたのだから…

「ネロ！」

フェイトがネロに駆け寄ると、彼に外傷は無かったが服はボロボロになり、切り付けられた跡があった。

「フェイト…？」

ネロがフェイトの存在に気付くと朧だった意識を取り戻し自分の体を見回す。

「俺…どうなった！？ 何があったんだ！！」

立ち上がると突然フェイトに詰め寄り、彼女の肩を掴んで揺さ振る。ネロは自分に何が起きたのか分からず混乱していたが、フェイトは落ち着かせようと彼の手を取った。

「落ち着いて、私が来た時にはもうアンノウンもいなかったんだよ。ネロも何ともないから」

フェイトが話している最中もネロの息は酷く乱れ、一瞬瞳が赤くなりかけたがようやく落ち着くと、右手を掴んでいたフェイトの手を退けた。

「悪い…」

冷静さを取り戻すとボロボロになったコートを脱ぎ、右腕を隠す様に腕に巻き外に出た。

入口付近ではなのはとスバル達が心配そうにネロを見ると話し掛ける。

「大丈夫？」

ネロの浮かない顔を見てなのはが聞くが、その言葉に…

「平気だ」

と応えた。

「ネロさん…」

「怪我は…」

スバルとティアナが言うが…

「一張羅がダメになったくらいだ」

と言った。

「あの…」

「アンノウンは…」

エリオとキャロが話し掛けるが…

「倒した」

と最低限で返した…

「帰るぞ…」

あまり口を開かないネロの姿は何処か悲しく…暗いものだった…

…

「そっか…負けちゃったんだ…」

同じ頃、ネロ達のいる場所から離れた廃棄都市区画のビルの屋上でルーテシアの指にインゼクトが情報を伝えると、少女は静かに口を開いた。

「…！」

ルーテシアが振り返り後ろを向くと、そこには銀髪に赤いラバーコート、背中に大剣を背負った男が腕を組み無言で立っていた。

「いつからいたの？」

「今来たばかりだよ。こいつは嬢ちゃんのだろ？」

男の指にはルーテシアのインゼクトが摘まれている。

それを見るとルーテシアの表情が変わり、心なしか睨んでいるように思えた。

「レディに聞くのも何だが… あのエ魔を送り込んで来たのは嬢ちゃんか？」

ルーテシアは男を見詰めたまま無言で立ち…

静寂な空間には男の声とインゼクトの羽音だけが聞こえる…

「応えたくないならそれでいい。ところで…」

インゼクトを解放すると、見えない《何か》が男を襲って来た。

「俺の後ろにいるのは何だ？ エ魔じゃないみたいだな」

見えない刃が男を襲うが全て紙一重でかわし、ルーテシアと距離を取ると、見えない《何か》が姿を表した。

光学迷彩の様に周囲に溶け込んでいた《それ》は、黒に近い灰色の体に尾を生やし、顔には四つの目。爪や肘などは鋭利に尖り、首に

は赤いマフラーを巻いていた。

「ガリユー、もういいよ…」

ルーテシアが黒い何かを《ガリユー》と呼ぶと、《それ》は無言で頷き、腕から生やした刃を仕舞った。

赤いコートを着た男には、ガリユーと呼ばれた存在に耳があるように思えなかったが、どうやらルーテシアの言葉にはちゃんと反応し、理解しているらしい。因みに口もあるようには見えない。

「なんだ、やらないのか？ 嬢ちゃんはまだしも、掛かって来るならそっちのやつはOKだぞ」

「私達はもう帰るから…」

男は剣も銃も抜かずにファイティングポーズと軽快なステップを取ったが、ルーテシアとガリユーの足元には紫色の魔法陣が広がる。

「なんだ！？ 子供がお家に帰るにしてはまだ早い時間だろ？」

男は大袈裟なそぶりですげながら言うが、ルーテシアは光に包まれ消える前に静かに口を開く。

「バイバイ…、魔剣士さん」

その言葉を聞いた瞬間、男の眉がピクツと吊り上がったがルーテシアとガリユーの姿はもう何処にも無かった…

男は頭を掻きながら溜め息を吐き、ルーテシアが見ていた方向を眺

めると、廃棄都市の中には誰も使っていないビルと道路しか無かったが、男は目を細め遠くを見た。

（あの感じは…）

男は目を瞑り、先程感じた感覚を思い出そうとしたが、もうそれは感じられず止めていた息を吐き出す。

「坊や…か？」

男は首を傾げていたが、分からない事が多くこれ以上余計に推測するのは止めた。

（まあ…、少なくとも人はいたんだしいいかな）

男はまた鼻歌混じりに歩き出し、ルーテシアの言った《魔剣士》という言葉を思い浮かべながら不敵にフツ…と笑うと、呟いた…

「刺激があるから人生は楽しい… そうだろ？」

空を見上げると、悪魔が現れたとは思えないような雲一つない青空が広がっていた…

Episode..11 Third Party〈第三者〉 (後書き)

さあ、第11話まで来ましたが戦闘シーンはごちゃごちゃしすぎてよく分かりませんね：

元々は9話～11話の内容が一話にまとめるはずだったんですが、思ったよりすごい事になってしまいました。

ちなみに悪魔の体液を媒介にする悪魔《ヘルⅡエンヴィー》が外に現れた事を疑問に思った方々がいましたが、その理由も第10話（それとこれからの話）に書いてます

キャラ崩壊とストーリー崩壊が進むかもしれませんが、よろしくお願ひします

E p i s o d e . . 1 2 \ R e t u r n 〈 帰 還 〉 \ (前 書 き)

ただ彼はひたすらに戦い、ひたすらに生きる事しか出来なかった…

自分の事は自分である様に、今までそうして来た様に…

Episode..12 Return〈帰還〉

廃棄都市区画の道を歩く男が一人出会った少女の事を考えながら右手で顎の無精髭を触る

『あの嬢ちゃんが悪魔を呼び出してたってのは信じられないが…事実みたいだな。一人…って言うのも微妙だが何よりこんな所にいるのも可らしいからな』

何かの音に歩くのを止め振り向くと、一台のヘリが少し離れた所を飛んでいた
ヘリの窓から見えた顔に首を傾げ眉をしかめる

「ネロ？」

不意に口から漏れた言葉と、先程感じた《もの》を持つ男が同一だった事に気付き、突然吹き出すと大笑いを始めた

「こいつは傑作だ！　ワケの分からない場所に飛ばされて悪魔と謎の嬢ちゃんに坊やまでいるとはな！」

腹を抱えて爆笑し終わると息を整え、当てのない道を再び歩き始めた

「これだから止められないんだよ…」

思う存分に笑ったにも関わらずにまた笑みがこぼれそうになっている

「人生ってのはな」

赤の男は一人納得しながら歩き続ける…

『ティア』

『何よ？』

ヘリの中では誰も口を開かず沈黙が続いていた
到底話をするような雰囲気ではなく皆が…正確にはネロ以外の六人が
念話で話していた

『ネロさんに何か言いなよ』

『無理に決まってるじゃない、さっきだってロクに口聞かなかった
んだから』

悪魔との戦闘も終わり、六課に帰るヘリの中にネロが最初に取り込
んだが座席に座るなり目を閉じたまま眠った様に動かない
なのはとフェイトはネロに何かあった事を察していたが、それ故に
話し掛けなかった

『でも助けてもらったお礼もちゃんとやってないしさ、なんかこ
ーゆーの苦手だもん』

スバルが念話で言いながらティアナの肩を突いた
さっきから同じ事の繰り返しでしつこいスバルにイラッと来て立ち
上がりそうになるが、自分を抑え込み、呆れた様に溜め息を吐く。

『分かったわよ…。良いですよね?』

『そうだね、そういうのはちゃんといた方がいいし』

『疲れてるみたいだから手短にね?』

ティアナが一応なのはとフェイトの承諾を取ると席から立ち上がり、
奥の席にいるネロに近寄る

『僕も…』

『私も言います』

ティアナとスバルがエリオとキャロの前を通る時に二人が立ち上がり、
なのはとフェイトを見た

『じゃあエリオとキャロも』

『四人で…フリードは?』

フリードはキャロの腕の中で未だネロを警戒していた

「ほら、フリード。ダメだよネロさんはいい人なんだから。ね?」

「フリード、一緒にお礼言おうよ」

キャロとエリオが宥めた事でフリードが警戒を緩めるとスバルがそれを見て微笑み、ティアナはやれやれと言った顔をする。
こうして四人と一匹がネロの前に並んだ

「ネロさん、先程は助けて頂きありがとうございました」

「私もティアアも感謝しています。傷付いてまでそこまでしてもらったんですから」

「僕もです。ネロさんのおかげで今回の任務を成功させる事が出来ました」

「私もあそこで助けてもらわなかったらどうなっていたか…」

「キュ」

言われた通り簡潔で手短に、なによりも誠意を込めるがネロの反応はない

『ティア…』

『やっぱりまずかったんじゃない？』

『寝てるんですかね？』

『最後のアンノウンを倒した後も様子が変でしたし…』

ヘリの中は更に気まずい空気が流れるが…

「別に…」

再び包まれた沈黙を破ったのはネロだった。彼の言葉に頭を下げたままの四人と一匹が恐る恐る顔を上げる

「礼が貰いたくて助けたわけじゃねえよ…」

又しても気まずい空気に包まれる。ここまで社交性がなく、捻くれている様ではこれから上手くやって行くのは難しいと感じた。スバル達がなのはとフェイトを見たが、二人も何て言えばいいか困っていた

「ただ助けたかった…、それだけだ」

その言葉を聞き、スバル達の顔に明るさが戻り、なのはとフェイトも顔を見合わせる

『きつと不器用なだけなんだよ。みんなも立ってないで座ろ?』

ネロという人物が少し分かったような気がしたが、立ったままの四人を又してもフェイトが座る様に促したが先程とは座席が変わっていた。

ネロの隣にはティアナ、その隣にスバル、向かいにはエリオとキャロが座る形になる

「何で変わってんだ…?」

「いいじゃないですか」

「私達の親睦を深めるという事で」

ティアナとその隣のスバルが笑いながら言う。

「そうですよ、ネロさんも僕達と一緒に戦うわけなんですから」

「仲良くやって行きましょう」

「キュク」

エリオとキャロに続き少し警戒を解いたフリードが言う

ネロは気恥ずかしそうにしながら頭を2、3回掻くと壁の方を向いてしまった

スバル達は、やはり人付き合いの苦手なだけで根はいい人だと思うと微笑み、ハッチの付近にいるのはとフェイトも吊られて笑みがこぼれてしまった

『やっぱりこういうのは苦手だ…』

…

「そう言えば腕は大丈夫ですか？」

スバルが何気なく聞いた一言で場の空気が固まってしまった。

「…あれ？」

ティアナがスバルを睨み付けエリオとキャロも「それはまずい」と

顔に出ていた。フリードでさえ、

「キュ」

と鳴き、空気を読めと言う様子。

『バカスバル、何言ってるのよ!』

『え!? でもさっき怪我しちゃった事言っただし…』

『状況考えなさいよ!!』

あたふたしているスバルをティアナが一喝するがエリオとキャロまでもが駄目だしする…

『スバルさん…それはまずいですよ』

『ネロさん、ずっと壁向いたまま右腕を押さえてますし』

皆が気遣ってネロをそっとしておかねばならないのに、自分はタブーに触れた。その事に漸くスバルは気付いた。

額からダラダラと汗が滲み出て来そうな状態でなのはとフェイトの方を振り向くと、二人も目をつむり同時に溜め息を吐く。

『なのはさくん…、フェイトさくん…』

『スバル…』

『多分大丈夫…、かな?』

哀願するスバルをなのはとフェイトは持て余していたが、

「大した事ねえよこんなの、怪我の内に入らねえ」

と、ようやく壁を向いていたネロがスバル達の方を向いた。
事実怪我はしていない。

「これくらいでいつまでも引きずってどうするんだよ」

態度もそうだが、気遣い方までも不器用なネロにスバルは申し訳なさそうにしていた。

「すみませ…」

「一々謝るなよ、敬語とさん付けも止めろ…っていつても聞かないだろうな」

スバルが言い終わる前に今まで言いたかった事を言うが、足を組みまた壁の方を向いてしまった。

キョトン顔のスバルの向かいのエリオとキャロ、なのはとフェイトは苦笑いをしている。

「良かったね、スバル」

「そっちの隊長さんなんかは無理して付けてるしな。ぎこちなさすぎるだろ？」

クスツと笑っていたフェイトに思ってもない流れ弾が当たる。
その瞬間フェイトの顔が赤くなるが、まだ弾は止んでなかった…

「それはっ！」

「その通りだろ？教会の時もさっきもそうだよな。無理矢理すぎだろ、あれ」

顔の赤さが増し、湯気まで出そうだったがなのはが宥める。

それを見ていたフリードがやれやれと言っている様だったが、自分もキャロに宥められていたのはもう忘れていた。

ネロも壁を向いたまま小馬鹿にした様に鼻で笑っていたが、コートを巻き付けた右腕をきつく押さえ微かに震えていた。

ティアナがそれに気付いたが声を掛けられないまま時間が過ぎる。

突然の協力者、アンノウンを知っている、デバイスとバリアジャケツト無しでの戦闘、ビルの壁を破壊、魔法を知らないような口ぶり、袖の間から見えた光…

ティアナが思案するが謎は深まり結論には辿り着けないでいた。

だが突然ネロが立ち上がり、窓から外を見る。

彼の行動に仰天したが、ネロは何かを捜すように外を見ていた。

「ダン…テ？」

ネロが不意に口から漏らしたある人物の名前にティアナは首を傾げたが、ネロはすぐに座ってしまった

『まさかな…』

微かに感じた気配に、

「あいつがいるわけない」と考えた。いくら何でもそれはないだろうと。

再び右腕を押さえながら…

『フェイトちゃんどう思う？』

『やっぱりさっきのは無理に振る舞ってたのかな…』

なのはとフェイトが右腕を押さえ込んだままのネロを見詰める。

『自分に何があったのか知らないみたいだし、怪我もないのにあの様子…』

『強がってても不安なんだよ…、コントロールが効かなくなる時もあるし右腕も見られたくないんだろうね…』

フェイトは目線を自分の手に落とした。

両手とも人の手… ネロの右手のような異形の手ではない。《ヘルⅡヴァンガード》のいなくなった部屋で自分の肩を掴んだ時のネロの手は微かに、だが確かに震えていた…

『あの時…』

咄嗟にネロの右手を掴んだ自分はこれ以上彼を不安にしていけない…、彼を助けてあげないといけないと思ったのかもしれない。

『…フェイトちゃん？』

いつの間にかフェイトは自分の右手を握り締め、その拳を左手で包む様に握っていた…

『ごめんなのは…』

我に返ると共に拳を開いたが、余程強く握り締めたのか手は赤くなっていた。

『ネロさんの事考えてた？』

『ちょっとね…』

笑ってみせるが何処かぎこちないものだった

『困っている人は放っておけない、だね？』

『そんな所かな』

自分に光をくれた少女と、彼女と友達になりたいと願った少女は今を生きながら共に道を歩み続けていた…

E p i s o d e . : 1 3 \ F a i r y へ小さな妖精 \ (前書き)

戦いを終えた騎士に待っていたのは、思いもかけない物と出会った…

Episode..13〈Fairy〈小さな妖精〉〉

「なんだよそれ？」

六課に戻るとネロは部隊長室に呼ばれ、はやてが何かが入っている箱を机の上に出した。

「まあ、開けてみて下さい。取り敢えずネロさんのお祝いって事で」

言われた通に開けてみると、中に入っていたのは見覚えのある茶色い服…

陸士の制服だった

「おい…」

「服もあないになってしまった事やしこれで我慢して下さい。それにあれやったら目立ってしまうんで」

「祝いて…」

「六課の一員として」

急に陸士服を渡されて状況が飲み込めなかったが、確かにあのままでいるわけには行かないと思い、服を着替える。

「おう、似合っとなりますね。予備の服持ってた部隊員のなんですけどサイズも合っとするみたいやし」

「いや…お前…」

着てみたもののネロはぎこちなさそうにしていた。ちゃんとした服など着ずにいつも動きやすい服か、武器を隠せる服だったのでカッチリした服は苦手だった。

「あら、ネクタイは…」

「付けねえぞ」

「でも」

「だからしねえって」

「締めた方が…」

「しねえって言ってるだろ…」

ネロとはやてがそうこうしていると、部隊長室のドアが開いた。咄嗟にネロは包帯もグローブも着けていない右腕を上着と左腕で隠そうとするが、入って来たのは見覚えのある顔が二人、そして…

「はやてちゃん」

体の大きさが30センチ程の小人だった。

「フォワードのみんなものはさん達も準備出来て待ってますよ」

小人は宙を浮き、はやての前に来たが、ネロは呆然としている。

「そう言えば紹介がまだでしたね。ライン、ネロさんに自己紹介し

て」

「はいです」

宙に浮いたまま小人はネロの方を向いた。

淡い青…まるで青空の様な髪に同じく青い瞳。髪にははやてと同じリボンを着けていた。

「はじめまして。機動六課部隊長補佐及びロングアーチスタッフ、リインフォースツヴァイ空曹長です」

リインフォースと名乗った小人が明るく言うが、ネロは軽くフリーズしていた。

「おい」

「リインが挨拶してんじゃねーか」

一緒に入って来たシグナムとヴィータが言うが…

「妖精…?」

と、呟いた。

「リインはうちの家族で八神家の末っ子です」

「末っ子?」

右腕を隠したままはやての方を向くが、そのように言われてもわけが分からなかった。

「それと右腕ならばれてるぞ」

リインを初めて見る生き物のように（現に小人だが、そもそもネロは妖精や小人など見た事ない。まあ、当たり前だが。）見ていると、シグナムが口を開いた。

「え…」

「ヴィータが喋ってしまっただけ」

一同がヴィータを見るが、相変わらず彼女はネロを睨んでいた。フリード以上に警戒しているのか、まだネロを認めていないよう。

「デメエ…」

「フンッ！」

ネロがヴィータに詰め寄ろうとするがはやてに止められ、ヴィータもそっぽを向いてしまった。

「安心しろよ。フォワードの奴らには喋ってねーし、知ってるのは後シャマルとザフィーラだけだから」

「ヴィータ…」

シグナムがヴィータの肩に触れようとしたが、その手を振り払われてしまった。

ネロがまだ詰め寄ろうとするが、一歩引いた後に一度舌打ちをした。

「…誰だよその二人？」

上着で右腕を隠すのは止めたが、今度は背中の方に右腕を回してしまふ…

部屋中に緊迫した空気が流れるが、はやてが口を開いた。

「シャマルとザフィーラもうちの家族です。その…すみません…」

喋るなり「すみません」と言ってしまった。

はやては本当に申し訳なさそうにしているが、ここで「お前ら、謝ってばかりだな」など言ったら流石にまずい。

おそらくシグナムとヴィータが襲い掛かって来ると思い、言わないでいた。

「もういいよ、言っちゃったのなら仕方ないだろ」

落ち着きを取り戻し、深く息を吐く

ヴィータは悪びれない様子でまだそっぽを向いていると、ネロが左手の指を順番に折り曲げていた。

「どうしたんですか？」

リインが聞いて来るが…

「俺の右腕知ってるの何人だっけ？」

「リインを合わせて十人ですう！」

何故かリインが応えた。さながら子供の様に明るく。

ネロがまたしても舌打ちしそうになったが、我慢して代わりに溜め

息を吐く。それでは代わりになっていないが。

「ベラベラ喋らねえようにそいつに釘刺しておけよ、たく…」

「テメーがそんな腕してるからワリィんじゃねーかよ」

一度は落ち着いたネロがまた詰め寄りそうになるがはやて達が制した。

「ヴィータ、そんな事言ったらあかんよ？　うちも怒るで」

「だってはやて…」

ヴィータがまだ何か言いかけたが、はやての目を見た後にシュンとしてしまった。

その光景はまるで母親と子供のよう。

「ゴチャゴチャしてしもうたけど、それじゃ行こか」

「待てよ、俺はこのままか？　包帯とかないのかよ」

ネロの呼び止めに部屋を出ようとしたはやて達が足を止めた。

今のネロは服の袖を伸ばしただけで悪魔の右腕は隠しきれていない状態だった。

「ああ、それやったら医務室にありますんで。誰かネロさん連れてったってくれん？」

「それじゃアリインが案内するですう」

はやての隣にいるリインが軽快に言うが：

「アタシも行く！」

ヴィータまで名乗り出て来た。

「ヴィータちゃん： 私一人でも：」

「リインとこいつ二人きりにするわけにはいかねーだろうが」

ヴィータが睨んで来るが、ここまで恨まれているのは心外だった。

「ヴィータ：」

「いいだろ、はやて」

はやてがしつこいヴィータに呆れながら言うが、彼女もこればかりは譲るつもりはなかった。

引きそうにないヴィータに流石にはやても折れてしまい承諾する。

「しゃあないな： まあ、医務室にはシャルもおるし： そんなに警戒せんでええと思うけど」

「別に俺はどっちでもいいけどな」

はやても溜め息が出そうになっていたが、ネロは冷ややかに言った。

「それじゃあうちらは先に会議室に行ってますんで、ネロさんはリイン達と後から来て下さい」

「ヴィータ、少しは信用してやれ」

会議室を出た後にはやてとシグナムと別れ、廊下に残されたのはネロとヴィータと…

「それじゃあ行きましようか」

リインの三人だ。

宙を浮遊しながら先陣をきるリインにネロとヴィータが続く。

「リインになんかしたらただじゃおかねーからな」

「何もしねえよ…」

ネロの後ろからは強烈な視線と殺気がビシビシと感じられていた。

「ヴィータちゃん、ネロさんをどうしてそこまで目の仇にするんですか？ はやてちゃんもシグナムも信じているのに悪いですよ」

「うるせーな、アタシの勝手だろーがよ」

リインが後ろを向きながら浮遊して言うがヴィータはあっさりと返す。

「確かにちょっと怖いし、無愛想で不良みたいですけど根は良い人ですよ。シグナムもフェイトさんも、スバル達も助けてくれたんですしね」

ネロにとっては、ヴィータよりもリインの方がさりげに酷いように感じられていた…。

「顔も男前ですよ。いい体してますし、強い男ってモテますよね。恋人とかいるんですか？」

終いには調子に乗ってなんか言って来る始末。

（なんなんだ、コイツは…）

その後も武器は自分で作ったのかとか、歳や趣味、なんでネクタイ締めていないかとか聞いて来たが、彼は全て無視した。

「あ！ 着きました」

結局リインは部隊長室から医務室に行くまでの間、喋っていた。

ヴィータは気疲れしているが、しつこい質問攻めに合ったネロも同じだろう。

「シャマル。入るですよ」

「あら、リインちゃんにヴィータちゃん。そちらは…」

「話したネロってやつだよ」

医務室にいたのは金髪でセミロングの女性だった。はやて達と同じ陸士服の上に白衣を羽織り、歳ははやてより少し年上くらいだろう。

「あら、じゃあシグナムとフェイトちゃんが昨日会ったって言う…」

「今日から六課の一員ですよ」

「協力だろ…」

シャルとリインが談笑しているがネロがボソリと言った。

「右腕は… えっと…」

ヴィータから話は聞いていたが、シャルは何と言えば良いか迷っていた…

ネロは隠せていない右手の部分はポケットに突っ込んでいる。

「聞いてんだろ？ 包帯くれよ」

単刀直入に欲しい物を言うのと左手を前に出した。

「あの… 私が巻きましようか？」

「いいよ… 自分でやるから」

シャルがそう言うが、ネロは断り手で包帯を渡すように促すだけ…

「…くれよ」

少しの間沈黙が流れたが、ネロがうんざりした様に口を開いた。

「テメー！ シャルの優しさ踏みにじってんじゃねーよ、さっさと包帯巻いてもらえよ！」

痺れを切らしたヴィータが後ろから蹴ってくる…

近付けさせたくないのかどうかはつきりして欲しい。

「そうですよ、素直に受け取るべきです。女の人を泣かしちゃ駄目ですよ」

「ヴィータちゃん、踏みにじるって程じゃないけど… 私泣いてないから」

シャルも困ったように言うと、向かいではネロが蹴られた跡の汚れを叩いている。

「それでいいですか？」

「……わかったよ…」

一応はネロに承諾を得ようとする、ネロ本人も仕方なくそれを認めた。

「早くしてくれよ、見られたいものじゃない」

また溜め息を吐きながらポケットから右手を出し、上着を脱ぐとシヤツの袖を肩の所まで捲り上げた。

シャル達がその腕を見た瞬間、言葉を失う…。

「…やっぱり自分でやるよ」

「あ…、ごめんなさい。ちょっとその何て言うか…、話は聞いてたんだけど…」

ネロがシャルから包帯を取ろうとするが、シャルがその包帯を両手で包み自分の方に引き寄せた。

「そうですよ、個性的な腕ですね」

リインが言うがフォローになっていないだろう。

「ネロさんも溜め息ばかりしてたら幸せが逃げちゃいますよ」

「そんなのとつくに逃げられてるよ」

リインの言葉に自嘲するように鼻で笑うと、右斜め後ろに移動したヴィータも右腕を見ていた。

彼女からは…、誰から見てもネロの右腕は悪魔と変わらないだろう。現にネロでさえ《悪魔の右腕》と名付けていたのだから。

「…怖いかな？」

シャルが包帯を巻いていると、ネロが唐突に聞くが、彼女も何て応えればいいか悩んでいた。

「…だろうな」

ネロはまた自嘲気味に鼻で笑う。

「…元からこういう腕だったんですか？」

シャルが控えめに聞いた。

「いや、突然こうなったんだよ。ある日突然な…」

彼女の問いに静かに応えた。

右腕を見詰めながら静かに…。

「自分でも分かんねえよ…、何でこうなっちまったのかな」

その話を後ろのリインとヴィータも黙って聞いていた。

「右腕がこんなふうになった時は不安じゃなかったんですか？ 自分が… その…」

「悪魔か？」

シャルが躊躇していた言葉をネロは平気で口にした。

「あの… 私！」

「事実だろ？ どっからどう見てもな」

シャルが触れてはいけない事に触れてしまったと思うが、その前にネロが割り込んだ。

「何にしろ俺が望んだ事なんだよ。まさかこんな事になるとは思わなかったけどな…」

話している間、ネロは悲しい目をしていた…。

正面にいるシャルはもちろん、斜め後ろにいたヴィータとリインにもそれは分かる。

「…それより手、止まってんぞ。やっぱり自分でやるよ」

「あ！」

ネロの話を聞くのに夢中になりいつの間にかシャルは包帯を巻くのを止めていた。

「ごめんなさい、すぐに終わるから！」

慌てて巻く作業を再開するが、気付けばまだ肘の所にも来ていなかった。

話を聞いていなければとつくに終わっていただろうが、今更仕方のない事だ。

（俺も何で初めて会ったやつにこんな話してんだよ…）

「あの…」

ネロは、また自嘲しながら鼻で笑いそうになっていたが、声のした方を振り向いた。

「私じゃうまく言えませんが、落ち込まないで下さい。私達はネロさんの味方ですから」

声の主はリインだった。

「おい、リイン！ それアタシも入ってんのかよ！？」

隣のヴィータが声を張り上げたが、リインは当たり前のように返す。

「もちろんですう。ヴィータちゃんもいるに決まってるじゃないですか」

「ふっざけんなよ！ なんているんだよ！ つーか、勝手に決めん

な!!」

「えー、いいじゃないですか。ネロさんがかわいそうですよ」

「知るかよ、そんなの!」

「ヴィータちゃんは素直じゃないから困りますですう」

「なんだと!?!」

軽い口喧嘩になっていたが、その様子をネロがキョトンとした顔で、シャルが困った顔で見ていた。

本気の喧嘩ではないが、包帯を巻く作業を中断してシャルが仲裁に入る。

「ちょっと…、ごめんなさいね…?」

「ああ、どうぞ」

シャルが喧嘩を止めている間にネロが包帯を巻き始めるが…

「俺もあんな子供に慰められるようじゃまだまだだな…」

と、また自嘲しながら呟いていた。

「あー、ネロさん聞こえましたよ。ラインは子供じゃないですからね!」

あれだけ騒いでいたのに聞こえたらしくラインがネロの前まで近付

いて来た。

ヴィータはまだ騒いでいるが、シャマルに遮られている。

「じゃあ何だよ？ 妖精か何かか？」

冗談まじりで部隊長室で言った事を言うが、

「違いますよ、リインは子供でも妖精でもないです！ マイスターのはやてちゃんが作ってくれたユニゾンデバイスですう！！」

小さな指をネロの鼻に突き指すが、彼は全然ピンと来ない。

「ユニゾン…デバイス…」

「そうです！」

リインの言った事を復唱するが、やはり全然分らない。

「リインフォース… ツヴァイ…、だっけ？」

「リインでいいですよ！」

また無邪気に笑いながら言うが、こういう所が子供らしいが言ったらまた怒るだろうから言わなかった。

「よろしくですよ」

「…あ、ああ…」

小さい手を差し出して来たので、ネロは左手の人差し指を差し出し

たが…

「あ！　そう言えば、はやてちゃんは右手で握手したってシグナムが言っていました」

思い出したように宙を舞い、包帯を巻き終わっていないネロの右手の人差し指に触れた。

…

「…遅いなあ…」

フォワードのスバル達が会議室に揃っていると、はやてがボソリと呟いた。

「確かに時間が掛かってますね…」

隣のシグナムも言うど…

『はやてちゃん大変！　リインちゃんが！！』

「シャル！？」

突然はやてにシャルから念話が入った…

『どないしたんや！？』

『とにかく来て！　シグナムも…！』

シヤマルから念話が切れると、はやてとシグナムが席から立ち上がった。

「どうしたんですか？ 八神部隊長、シグナム副隊長も」

「何かあったんですか？」

「みんなはちょっと待っというて、すぐ戻るから」

スバルとティアナが聞いて来たが、はやてとシグナムは急いで会議室から出ていった。

「何かあったのかなあ」

「ただ事じゃなかったみたいだけど…」

なのは達も心配する中で、スバルとティアナが顔を見合わせて言う。

…

「ほな、始めよか」

数分後、会議室には髪と服がすごい事になったはやて達が戻って来た。

E p i s o d e . : 1 4) D i s t r u s t へ不信へ (前書き)

その者の心の在処はどこにあるのだろうか…

Episode..14〈Distrust〉〈不信〉

「えー、それじゃあ今回の会議は最近目撃され始めた《アンノウン》についてです」

はやてが真剣な顔で言いながら乱れた髪と服装を整えてた。

同じくシグナム、ヴィータ、リイン、そしてネロも同じである

「特にここ数日の間に数は急増、事件也多発しています」

ようやく髪と服を整え終わり、それと同時に部屋の灯りが消え、壁の画面にアンノウン： 《悪魔》の映像が出てきた

「うちら機動六課はガジェットとレリック以外にもこのアンノウン、《悪魔》も相手にしなければあかん事になったわけやけど： 誰か質問とかある？」

饒舌に喋っていたが、唐突な話で場のみんなは少しの間黙ったままだった。

「あの：」

離れた席にいたエリオが挙手しているのに気付き、はやてが質問を許可した

「なんや？ エリオ」

「あの： そのアンノウン、悪魔って言う名称なんですか？ ネロさんもさっき言ってたみたいなんですけど」

「いや、別に決まったわけやあらへんよ」

「え!？」

はやてに平然と返されてしまい、エリオが驚いていたが、その隣のキャロやスバルとティアナも同じだ。

「どういう事なんですか、部隊長？」

「まあまあ、その事についてはうちより詳しい人がおるしな。ネロさん」

映っていた悪魔の映像を見ていたネロがはやての声に反応し、振り向くとみんなが自分を見ているのに気付いた。

「なんだ？」

「みんなに説明お願いします」

はやてが促したが、やる気が感じられない声だった…

「うちもよく分からん事ばかりやし、取り敢えず知ってる事とか、なんか情報みたいなんでいいんで頼んます」

「了解…」

重い腰を上げると、画面の前に移動するが声に覇気が無かった。

「そう言っても大した事教えられねえぞ。俺の経験と書物で見た事

のある悪魔くらいしか分からねえからな」

相変わらずの口調で悪魔の説明を始めた。

「あー… コイツはヘルⅡプライドって言う下級悪魔だな。塵を媒介にして現れるヤツだけど特に言う事はねえ、次」

「ちよっ…ちよっと、ネロさん！」

やる気0、ならびに適当に説明を終えたがエリオが呼び止めた。

「あの、もっと詳しい情報とかはないんですか？ 大雑把って言うか…」

「俺も書物で見たくらいだから良く知らねえよ。実際に見たのは今日が初めてだ」

「初めて!？」

「そうだよ」

「初めてであんなふうに戦えたんですか!？」

「別に大した事ねえだろ、あんなザコ相手なら。あの程度でビビってんのか？」

エリオが声を上げたが、ネロが平然といつもの口調で返す。
だが、やはり他のみんなも何か言いたげだった。

「あれでも弱い方だったんですか…」

「当たり前だろ、他にいた奴らも同じだからな。あ、最後のは違うか…」

ヘルⅡエンヴィー達の画像を飛ばし、一気にヘルⅡヴァンガードの画像に切り替わる。

その姿は正しく死神だった…。

「確かヘルⅡヴァンガードって言う悪魔だな。あの場所にいた悪魔達を管理…、それと護るのがコイツの役目…。次に行っていいか？」

相変わらずの適当な説明を終えると、みんなの方を振り向く。
案の定予想していたが、スバルやティアナが手を挙げていた。

「また質問か」

「宜しいですか？」

「どうぞ…」

最初に質問して来たのはティアナだった。

「ずっと気になってたんですが、何でそんなにアンノウン… 悪魔に詳しいんですか。最近になって現れたのに…」

言ってくるとは思っていたが、まさかこの場で聞かれるとは思っていなかった。

何て言えばいいかし考えた後にはやての方を見ると…

「それはネロさんが次元漂流者だからや」

『はやてちゃん!?!』

『はやて!』

有りのままの事を言ったのになのはとフェイトも驚いていた。

『しゃあないやろ、事実なんやし。それ言うたらうちらも管理外世界から来とるんやし』

『いや、私達とは状況が違うから…』

『本当なんですか、八神部隊長!?!』

はやてとなのはが念話で話していたが、ティアナが割り込んで来た。

『不味いんじゃないんですか、次元漂流者に… しかも民間人ですよ!』

『本人も協力してくれる言うとし、民間人って言うには少し違うからなあ…』

「おい、今念話で話してたか?」

はやてとティアナがネロの声に反応し、念話が途絶えた。

質問して来たティアナが黙っていたのや周りの様子から察しが付いている。

「いや、でも民間人をこんな危険な事に巻き込むのは…」

「別に問題ないだろ。俺がやるって言ってるんだから」

当たり前の事のように言うが、ティアナは少し困惑していた。

「こっちだって前から相手してるんだ。あんた達よりはアイツらの事を知ってる」

「あの…どのくらい前からなんですか…」

「狩りの経験は一年、悪魔の相手は三年って所だな」

あれだけの戦いをした上に、戦い方もデタラメにして大胆。且つ的確なやり方は到底素人とは思えなかったが、その言葉に驚いた。

「三年!？」

「一々驚くなよ」

「そんな前からなんですか!？」

ティアナやスバルがうるさいから正直話するのが面倒になって来たが、ネロは約束した以上は話を続けた。

「何か問題あるか？」

「いえ…ネロさんのいた世界はそんな前から大変な事になっていったんだと思って…」

「大した事になってねえよ、普通に暮らしてる。まあ、悪魔の事を知ってる人間は限られてるけどな」

「限られてる？」

「俺の故郷のやつなら知ってるが外界の人間なら大抵は知らない」
一通りの会話を終えると画面の方を向き、悪魔の話に戻ろうとしたが、

「相手にし始めたのは三年前って… 幾つだったんですか？」

「14」

さらっと応えた。

「14!？」

（うるせえな…）

「ああ」

取り敢えずは質問に応えたが、彼が苛ついて来ているのが分かる。

「じゃあ今は…」

「17だよ。文句でもあるなら言え」

感情が態度にも出て来た。

「…ありません」

「あの…、外界って言うのは？」

ティアナは黙ったが、代わりにスバルの質問。

「俺の故郷は他国と遮断された島国なんだよ。もういいか？」

「狩りは始めて一年って言ってましたけど…」

エリオが聞いて来るが無駄なお喋りは嫌いな為か、遂には舌打ちしてしまった。

「俺の仕事で悪魔専門のハンターって事だよ、そっちの経験は一年しかないって事…」

しつこい質問にうんざりしているのは明らかだが、まだ終わりではない。

「14歳から相手をしてたっていうのは…」

「もういいだろ、そんなどうでもいい話はさあ。お前なんかの方がもっと若いだろ、幾つだよ？」

「……10歳です…」

喋る気まで失せてきそうだったが、流石にエリオもそれを察して最後の方は声が小さくなってしまった。ようやく質問もなくなった事で安堵感か、それとも疲れからかネロが溜め息を吐く。

「逸れちまったけど話を戻すぞ。で、次のやつは…」

再び悪魔の話を続けていた所で、前に見た2体の炎を噴き出してい

る悪魔の所で適当だった説明が止まった。

「さてと、こいつなんだが…」

みんなはまた適当に話すのではないかと思っていたが、ネロは口を開けたまま何と言えはいいか考えていた。

「どうかしましたか？」

「なんて言うかな…」

かつて自分が戦った悪魔に酷似した悪魔の映像を見ていると聞いて来たはやての方を向くが、やる気のない顔ではなくネロは真剣な顔をしていた。

「こいつとは戦ったって報告には書いてたな…」

真剣な顔は持続したまま、静かに話を続けた…

「局員の話では砲撃も効かなかったらしいんですけど…」

「体の周りの炎がバリアみたいになってんだろうな」

フェイトが口を挟んで来たが、ネロが冷ややかに返す。

「この後コイツどうなったんだ。死んだか？」

またネロは平然とすごい事を言ったが、フェイトの表情は曇ったまま…。

「…いえ、何でもすぐに消えちゃったみたいです… 死傷者も大勢出てしまったようで…」

会議室が重苦しい空気に包まれていたが、最初に口を開いたのはネロだった。

「誰かコイツと話したってやつはいないのか？」

ネロがケンタウロスの様な悪魔を親指で指差していた。

「話した？」

ティアナとスバルがキョトンとしていたが話を続ける。

「名前は名乗ったか？」

「そういう情報はありません。ただ…」

フェイトが顔を少し附せている… はやてやなのはもう少し困惑しているようだった。

「…どうした？」

「ある言葉を繰り返して言ってたらしいんです…」

はやてが自分の前に浮かび上がった画面を操作すると、大画面には“Sound Only”と表示され、酷く雑音が混じり聞き取りにくい、2体の悪魔が叫んでいる“言葉”が聞こえた…。

「スパ―ダ…」

ネロの口から呟くように漏れる。

「やっぱり知っとるんですか？」

はやてが音声の再生を止めると、全員がネロを見ていた。
あれだけうるさかったのに、よく聞こえたものだと思ったが、念話でも使えば分かるのだろうと思ひ話を続けた。

「俺の世界のおとぎ話だよ、《伝説の魔剣士》の名前だ」

「魔剣士…」

「おとぎ話がなんの関係があんだよ！」

シグナムとヴィータが言ったが、ネロはそのまま話を続けた。

「…二千年前に人界に悪魔が侵攻した時に一匹の悪魔が反逆し、悪魔の軍勢と戦ったと言われている」

「くっだらねえな！」

ネロが話してる最中にヴィータが興味無さげに言うが…

「同感だ」

と、ネロも鼻でフツと笑いながら言った。

「続けるぞ。その悪魔はたった一匹で戦い続け、魔界の帝王すらも

打ち倒し自らの強大な力と共に魔界を封印したらしい」

「そのお話に出てくる悪魔が…」

なのはが口を開いたが、

「伝説の魔剣士…、スパーダ」

ネロは何故か深い溜め息を吐きながら、頭を数回掻き椅子に座ってしまった。

「テメーも下らねえって言ってたじゃねーかよ！ そんな話信じてんのかよ」

「俺の故郷の領主だった逸話が残ってるんだよ」

ヴィータが釈然としない様子で言ったが、ネロが面倒臭そうに返した。

「それに悪魔も言ってるんだから本当なんだろう。アイツらにとっては反逆者だからな」

「でも二千年も前の事なんだし…」

「死んでるっていいたいのか？」

「そりゃ… まあ…」

フェイトは当たり前の事を言うが、ネロは不敵に笑ったままでいる。

「なんでも中世の：4～500年前までは俺の故郷にいたらしいが…、ひょっとするとまだ生きてるかもな？」

冗談のつもりで言うが周りは真剣に聞いていたらしく、みんなの視線が痛く感じた。

「まあ、この話はこれで終わりだ」

再び大画面の悪魔の説明に戻るが、相変わらずやる気のないものだった。

（まあ： スパーダはともかく息子なら：）

説明している最中にもネロの脳裏にはある男の姿が横切った。

銀色の髪に真っ赤なコート、身の丈近い大剣と二丁銃。

（あと、あの軽口：）

あの男はどんな時でも平然とした様子。ふざけた態度も崩さなかったが、そこがムカつくようで嫌いにはならなかった：

「で、こいつは：」

画面に映ったある映像を見てネロの動きが固まった：

「あ、すみません。それも悪魔かどうか分からなかったんやけど、目撃した人の話やったら“天使”みたいやっただ言うらしいんやけど…、どう思います？」

はやてがネロに聞いてみたが返事は返って来なかった。それ所か彼は画面を見たまま振り返らないでいた。

「あの、どないしたんですか？」

再びはやてが声を掛けるが返事は返って来ない。

『はやて！』

『フェイトちゃん！？』

ネロは拳を握り締め、画面の“天使”を睨み付けているのに逸早く気付いたのはフェイトだった。

『不味いよ！　またあの時みたいに！！』

フェイトやはやて達が駆け寄ろうとした時、ネロが拳をほどきフェイト達の方を振り返った。

「…何してんだよ」

「え…つと…」

「いや…こちらは…」

フェイトとはやてが席から立ち上がっているのに気付いたが、二人もネロが何とも無いのに何て言えばいいか考えていた。

今朝の聖王教会の時の様にまた自分では力を抑えられずにいると思ったが、今回はそんな事にならなかったのにフェイトとはやては安

心した。

「続けて下さい…」

はやてとフェイトの二人が座ると、彼は再び悪魔の説明を始める。

…

「と言うわけで俺が知ってるのはこのくらいだ」

悪魔の説明を終え、座るとフェイトが話し掛けて来た。

「お疲れさま。緊張した？」

「…すげえ面倒だった」

はやてが何か話してるが、ネロはこのまま眠ってしまいそうな勢いだった。

「疲れてる？」

「こういう話聞いと眠くなってくるんだよ…」

頭を2、3回搔くと頬杖を突き、ダルそうにはやての話を聞いている。

「歳は17歳って言ってたけど…」

「はやてがさつきからチラチラ見てるぞ。私語とかしてたら怒られるだろうな」

しつこかったから適当に巻き、後ははやての話を聞いているだけだった。

フェイトはまだ何か言いたげだったが、「後にしろ」と言い、時間は過ぎて行く。

「ほんならこれで会議を終わります」

「みんなさっきのアンノウンとの交戦をレポートにまとめてね」

「はい」

はやての話は終わったが、なのはトドメの一言を受け、フォワードのみんな（ティアナ以外）が重い空気に包まれていた。

「あの… ネロさん、ちょっといいですか？」

最後まで椅子に座っていたネロの前に来たのはリインだった

「…さっきは悪かったな、あんな事になっちゃって」

「デメー！！ リインに近付くんじゃねえよ！！」

ネロとリインが話しているとヴィータがリインを遠ざける。

「だから言ったらはやて！ 信用出来ねえよ、こんなやつ！」

「ヴィータ止めろ。あれは事故だとシャルもリインも言っていた

だろう」

「嘘だ！ あんな話聞いて油断したアタシが馬鹿だったよ！！」

未だヴィータはネロを認めようとしないう所か、ますます不信感が大きくなっていった。

「大体なんだよ、あの話も！ 自分も下らねえって言ってるくせにちゃんと話してんじゃねえか！ あれも嘘臭えじゃねえかよ！！」

「ヴィータ…」

はやても困っていたが…、

「別に信じなくてもいいぞ。俺だって信じて無かったからな」

ネロは相手を挑発する様な口調で続けた。

「別に信じてもらいたくて話をしたわけじゃない。なんと無くだ」

「ネロ！」

「ちょっと心配だから行ってくるね」

ネロが会議室を出た後をなのはとフェイトが追って行き、残ったのははやてとシグナム、ヴィータとリインの四人。

「あかんやろ？ ヴィータ」

「だってはやて！ あいつは…！」

「リインも気にしとらん言うとするし、ええやろ？」

「でも！！」

ヴィータは言い足りないようだが：

「ヴィータ、過ぎた事をいつまでも言うな」

「そうです。そうやってはやてちゃんを困らせるのは良くない事ですよ！」

シグナムとリインにも言われてしまった。

「あれは私のやった事ですし、ネロさんは悪くないです。」

明るい笑顔で気にしてない様に言うが、それを見ているとヴィータは何とも言えない気持ちが入み上げて来た。

「みんなあいつの味方かよ！ アタシはもう知らねえからな！！」

「あ、ヴィータ！」

「待てヴィータ！」

「ヴィータちゃん！！」

呼び掛けたがヴィータは振り返らずに行ってしまった。

「ヴィータ…」

はやてが後を追って行こうとしたが、これ以上何て言えばいいか迷っていた。

「仕方ありません、ちょっと行って来ます」

シグナムがヴィータの後を追ひ会議室から出ると、残されたのははやてとリインの二人…。

「はやてちゃん…」

「…ヴィータは真っ直ぐなコやからね。今は無理でも、きっとネロさんの事信じてくれるやろ…」

リインを肩に乗せると、はやて達も会議室を後にした。

Episode..15）間見えぬ思い（小さな騎士）（前書き）

《小さな騎士》と《黒い騎士》…

その姿はかつての己と重なる…

Episode..15（間見えぬ思いへ小さな騎士）

「ネロ！」

会議室を出たネロをフェイトが呼び止めようとしたが、彼は一行に止まらずに歩き続ける。

自分がヴィータにあそこまで嫌われる筋合いは無いが、何処となく気に食わなかった。

「待ってってば！」

フェイトが後ろから右手を掴んで来た事によりようやく歩くのを止めた：

正確には咄嗟に掴んで来た彼女の振り払ってしまった

「あ…」

「悪い…」

ネロの行動に驚いたフェイト、反射的に振り払ったネロ

お互いに何と言えいいか分からずに廊下に立ち尽くす：

「フェイトちゃん…」

少し後ろではなのはが二人を見ていた

二人とも何も言わずに向かい合っているだけの所に彼女は入り込んだ

「こんな所にいるのもなんだしお散歩でもしよつか？」

勇気を出して取り敢えず言った言葉に少しの間があった。
フェイトもネロも何も言わないでいる。

「今日は色々あったし、外の空気でも吸って落ち着いたほうがいい
と思って」

またセリフを付け足すが、二人とも動かない。

『あちゃゝ…』

なのはの顔が自然と苦笑いに、額からも汗が出そうになっていたが…

「そうだな…」

口を開いたのはネロだった。

右手をポケットに入れ、なのはを見る…

「さっき外から帰って来たばかりだけど… 案内してくれよ」

「でも驚いたな。ネロさん私達より年下だったんだ」

場所は六課の隊舎内の廊下から外に移る…

「同じ年くらいだと思ってたのにね」

なのはとフェイトが並んでいる隣ではネロが辺りを見渡しながら歩く。

「老けてるって言いたいのか？」

ネロが二人を見ずに海を眺めながら言った。

「いや、そう言うわけじゃなくて… 何て言うかな？ えっと…」

「背も高いし大人っぽいって意味だよ」

なのはがオロオロしているとフェイトが助言したが、ネロはまだ海を見たままだった。

「そいつはどうも…」

やる気のない返事を返すが、先程からずっとこの調子だった。何か思い詰めたままの様子で歩くのも遅く、時折溜め息も吐いている。

『ネロさん、どうしたのかな？』

『色々あったから頭の中整理してるのかな。まだミッドに来て2日らしいし…』

ネロが立ち止まると、なのはとフェイトも歩くのを止めた。ネロは遠くを眺めたままだが、空は日が傾き茜色に染まりかけている。

「なあ…」

「なんですか？」

突然ネロが口を開いた。

その言葉になのはが聞き返す

「敬語は止めろよ。何度も言ってるし、大体あんたの方が年上なんだろう？」

ネロが流し目で見えるが、なのはもどう言えば良いか迷っていた。

「えと、じゃあ… どうしたの？」

考えた末に言ったセリフにフェイトがクスツと笑っていた。

「それでいいだろ？ フェイトよりはマシだな」

「ええっ!？」

「言いにくいクセに無理矢理言ってるからな。いい加減に呼びたいように呼べばいいだろ？」

「も、もうその話は!!」

フェイトが赤面しているのをネロがからかい続けているのを見てなのはも笑わずにはいられなかった。

笑われているのに気付いたフェイトが今度はなのはににじみ寄る。

「な、なのは! 笑ってないでなんとか言つてよ! ネロずつこればっかかり言うんだから!」

「あはは… ごめんごめんフェイトちゃん。 つい…」

しばらく見ていた為ようやく笑いが出たが、涙が出る程可笑しかったのだろう。

指で涙を拭っている

「なんだか仲の良い恋人みたいだったから…」

「こ、恋人!？」

フェイトの顔がまた赤くなる

「みんなもそう言うと思うよ?」

「えっ！　ちよっ、なのは！！」

フェイトの顔が更に赤くなるが、それを見ていたネロが今度は笑っていた。

「え？　ええっ！？」

なのはもそれに吊られてまた笑い出してしまった。

「二人ともなんでそんなに笑ってるの！？」

二人の間ではフェイトが一人取り残されている

「ねえってば！」

「へえ… そんな事が…」

既に空は茜色に染まりついていた…

あの後ネロはなのはとフェイトに十年前のプレシア・テストロッサ事件、闇の書事件の話を聞かされた。

当時まだ9歳の子供がそんな事件を解決させたのは少し信じられなかったが、自分が話した《スパード》の話も彼女達にとっては同じだろう。

「うん、まあね」

「そんなこんなでフェイトちゃんともはやてちゃんとも友達になったんだ」

二人とも少し気恥ずかしそうにしていた…

自分の過去の話人を聞かせたのだからそう感じるのも無理ない事だ。

『ヴォルケンリッター… 鉄槌の騎士ヴィータ、か…』

ネロは空を見上げてみると、おもむろにポケットから右手を出した。袖を伸ばしグローブに隠された《悪魔の右腕》を黙って見詰める…

『主を守る守護騎士ね…』

拳を握るとギシッ、とグローブから音がした

『夜天の王はやて…』

シグナムやヴィータ、シャマルとザフィーラ、そしてリインが何よりも大切に思っている存在。

その逆も同じだろう

シグナムとヴィータが見せたはやてに対する思いがどれ程のものか分からないが、自分にとっての“彼女”と同じくらい大切なもののだろう。

「どうかした？」

なのはもすっかり敬語ではなくなっていたが、その言葉に反応し、彼女を見た。

「いや… なんて言うかな…」

どう言おうか考えたがうまく言葉が出て来なかったから、ネロはそのまま無言だった…

「ネロ？」

なのはが聞いて来るが、一度彼女を見た後に再び右腕を見詰めると躊躇いながら口を開いた…

「俺は…」

二人やはやて、シャマルやリインの時もそうだか心が安らぐように… 安心出来るように感じた。

医務室ではつい右腕の事を話してしまったが、この人達には自分の事や“一年前”の事を話しても良いのかもしれないと思えた。

だが…

「おい、テメー!!」

三人は大声の聞こえて来た方を振り向いた。

うさぎのぬいぐるみ等の装飾のある赤い服装と帽子、柄の長いハンマーを手にしたヴィータがそこにはいた…

「ヴィータちゃん!？」

「ヴィータ…?」

ヴィータは宙を舞い、なのは達の前に降りた。着地すると同時にハンマー型のデバイス《グラフアイゼン》を肩に担ぐ。

「ヴィータちゃん、何で騎士甲冑!？」

「コイツと勝負しに来た」

なのはを見ずにヴィータはネロを睨んだまま言った。

「アタシはテメーなんか認めねえ…」

グラフアイゼンをネロに突き付け静かに言う…

「ヴィータ！」

「ヴィータちゃん、待って！」

『すまん。なのは、テスタロッサ…』

『『シグナム』さん！？』

なのはとフェイトの頭の中にシグナムの声が響いて来た。

『どういう事なんですか？』

『主や皆を守りたい一心が感極まってしまっている。私が何を言っても聞く耳持たん状態でな…』

『でもこれ不味いんじゃない？ はやては…？』

『主の許可は取ってある。気を済ませる為にはこうするしかないと言うのが話し合った結果だ』

よく見れば隊舎の玄関からシグナムがなのは達の方に歩み寄って来ていた。

『やらせてやれ』

再びネロとヴィータを見ればまだ先程と同じ体勢のままだった。ヴィータはネロを睨み付けたまま、ネロの目からはやる気が感じられない。

「勝負しろよ。アタシが二度と減らず口叩けないようにしてやるか

らさあ…」

そうは言うがネロは頭を2、3回掻き…

「売られた喧嘩は買う方だが…なんで俺がこんなガキ相手にしなきゃならねえんだよ」

喋るのも面倒臭そうだった。

「誰がガキだ!!　そうやって逃げんのかよ、腰抜け!!」

「そっちこそ誰が腰抜けだって?」

ヴィータがグラーファイゼンをおもいつき振りかぶり、地面に叩き付けようとしたがネロの頭上に突き出した右腕によって止められた。

「準備は出来ているようだな」

気付けばシグナムがすぐそこまで来ていた。

なのはとフェイトは狼狽しているがヴィータは激しく、ネロは静かな闘気を発している…

場所は再び変わりトレーニング場…

「それじゃあ設定は廃棄都市区画、時間制限なしの勝負、勝敗はK
Oか降参するまでね？」

「分かった…」

「了解…」

なのはが説明を終えるとネロとヴィータが静かに…、いつでも動けるようにしていた。

二人の周囲が何もない殺風景な場所からホログラムの様に廃棄都市の建物や地面が出来上がる。

「本当にこれで良かったんですか？」

「仕方あるまい、ぶつかり合えば互いの思いも分かるだろう…」

「私達みたいに？」

浮かび上がった画面を操作しているなのはの後ろでシグナムとフェイトが話し合っているが、フェイトはこの模擬戦に反対だった。

確かに今まで戦い、ぶつかり合う事で通じ合って来たがどうしても乗り気にならないままだった。

「今のヴィータには逆効果だと思います。話し合いとかもっと他に…」

「二人ともいい？」

喋っている最中になのはの言葉に遮られた

「いつでも行ける」

「ソッコーで終わらせてやるよ」

なのはの前に浮かぶ画面には上着を脱いだネロとヴィータが映っていた。

他の画面は少し遠くから二人を映しているもの、空から映しているもの等いくつもあった。

「じゃあ行くよ。レディー…」

ヴィータがグラーフアイゼンを構え、地面を強く踏む。
ネロは右腕の包帯とグローブも取らないまま棒立ち…

「ゴー！」

合図と共にヴィータが前に出た。

「であああー！ー！ーっ！！」

目標を定め、グラーフアイゼンのハンマーが地面を砕いた。

無論、本当の目標はネロだったが彼は紙一重でそれをかわし、何の構えも取っていない。

「チィッ！」

地面にめり込んだハンマーを横にいるネロ目掛けて振るうが、これ
もかわされてしまった。

「マジでやるのか？」

「あたりめーだ！！」

勝負は引き受けたネロが一応聞いてみた。

売られた喧嘩を買ったわけだが、今になってはやる気が失せかけた
状態だ。

再び自分目掛けて来たハンマーをかわすと、サイドステップでネロ
とヴィータの間には数メートルの距離が出来る。

「アイゼン！」

【Schwalbe fliegen】

自分のデバイスの名を呼ぶと、ヴィータの前に拳大の鉄球が出て来
るとそれを掴み、空中に放り投げた。

「いけええっーーーー！！！！」

振りかぶったグラーフアイゼンで鉄球を弾き飛ばすと、凄まじい速度でネロ目掛けて飛んで来た。

サイドロールでかわすが、彼はまだやる気を見せない。

立て続けに鉄球が飛んで来るが今後は黙ったまま右腕を突き出し、鉄球を止めた…

「なに！？」

思いがけない行動にヴィータが狼狽するが、ネロは無口無表情のまま鉄球を投げ返した。

ビュン！ と、凄まじい風切り音の後に風がヴィータの頬をかすめる…

直後に轟音と共にヴィータの後ろにあるビルが倒壊し始めた。

鉄球を投げ返した事によりネロの左足が一步前に出ていたがヴィータは後ろの崩れたビルに目もくれずに次の行動に移る…

「アイゼン！」

【Explosion】

グラーフアイゼンのハンマー部分の片方に鋭いスパイク、反対側にはロケットのような噴射機構のある形に変わった。

【Raketen Form】

「ラケーテン！」

グラーフアイゼンがカートリッジを排莢すると噴射口から推進剤を噴き出し、ヴィータを中心に回転を始める…

「ハンマァアーーーーーッ！！！」

ハンマー投げの応用で遠心力と加速のついたグラーフアイゼンの推進力に身を任せヴィータがネロに突っ込む…

『イクシードに似てるな…』

《ラケーテンフォルム》を見たネロが率直な事を考えているが、もう鋭いスパイクがすぐそこまで迫っていた。

だが、ネロは焦らずに地を蹴り、跳び上がる。

「逃がすかああーーーーー！！！」

「チッ…」

グラーフアイゼンの噴射口が切り替わり、空中で無防備なネロに狙いを定めると命中した瞬間、ビルの壁に大穴が開き周囲が砂埃に包まれた。

「借り物の服が台無しだろ…」

だがヴィータの攻撃はネロの右腕により止められていた…

グローブは消し飛び、陸上服が埃で汚れているが彼は冷静なまま。

「クソッ！」

冷静に対処出来ていないのはヴィータ

今度はヴィータが距離を取ると《ラケーテンフォルム》から元の《ハンマーフォルム》に戻す

「今度はこっちの番だな…」

袖を捲り上げ残りの包帯を取ると、《悪魔の右腕》をあらわにした。拳を握ると、右腕に走った亀裂からユラリとした光が漏れだす…

「しっかり構えとけよ…」

静かに言うのと腰を落とし、右腕を顔の横に引き付けるように構えた。ヴィータも両手でグラーファイゼンを持ち、臨戦態勢に入る。

「ぐあっ!!?」

ネロの姿が一瞬消えたように思えば、ヴィータはいつの間にか外に吹き飛ばされていた。

ネロの攻撃は実に単純…拳で殴っただけ。

狙いはヴィータ自身ではなく彼女のデバイスだったが、瞬間的に防壁魔法を発動した事でヴィータもグラーファイゼンも無傷のままだ。

「あれが…」

「うん…」

「悪魔の右腕だそうだ」

モニターに映るビルの大穴から外を見ているネロの姿には彼の右腕

も映っていた。

なのは達は二人の戦いを見守り緊急時にはいつでも行けるようにしていたが、ネロの右腕を見たのはもう少し顔をしかめた。

フェイトとシグナムから話を聞いたが、彼女が実際に《悪魔の右腕》を見たのはこれが初めてである。

「アイゼン！」

【G i g a n t F o r m】

カートリッジを二発排莢するとハンマー部分が数倍巨大なハンマー…《ギガントフォルム》に切り替わる。

「ギガントハンマアアーーーーー!!!!!!」

大穴から自分を見ているネロに巨大化したハンマーを叩き付けようと、一気に距離を詰めるが…

ガキンッ、という何かにぶつかった音のみがしてヴィータの渾身の一撃は止められていた。

ハンマーの先の部分…、ネロの胴体と顔は見えないが、そこからは青白い光が発している。

「オオオオオッー…!!」

「うあっ!？」

ギガントハンマーを止めた《デビルブリンガー》でグラーファイゼンごとヴィータを地面でも壁でもない空中に投げ飛ばす。

空に放り投げられたヴィータが体勢を立て直すが、ビルの大穴にネロの姿は何処にもない…

「…！ あいつ… どこに！？」

辺りを見渡すがネロの姿は見えない。

だが、突然ヴィータに衝撃が襲った。

グラーフアイゼンが防壁魔法を発動するが、頭上では自分目掛けて拳を叩き付けようとして攻撃を妨げられたネロがいる…

「ううっ… ぐっ！」

魔力を注ぎ込み防壁の強度を増すが…

「Break（砕けろ）！！」

遂に防壁が砕けてしまった…

《デビルブリンガー》でヴィータの体を鷲掴みにすると、そのまま地面に着地する。

「離せ！ テメェツ！」

ヴィータが必死で体を振るが《デビルブリンガー》で固定され、抜け出せないでいた。

「終わりだ。降参しろ」

短く、言いたい事をはっきり言うが彼女が降参するとは到底思えない。

「もう止めろ…」

「ふざけんな!!」

まだ《デビルブリンガー》から逃れようと抵抗を続ける…
聞こえるのは怒号と苦悶の声だけ…

「アタシは敗けるわけには行かねえんだよ…」

固定された《デビルブリンガー》の指が動き、時折ギリツ、と音を
立てた。

「テメエなんか… テメエには…!」

遂に《デビルブリンガー》の呪縛から逃れ、ヴィータが再び空に舞
い上がった。

「ギガントオオ…」

グラーフアイゼンのハンマー下部分がコッキングし、カートリッジ
を排莖する。

「ハンマアアーーーー!!!!」

長い柄が大きくしなり、巨大なハンマーが津波の様に襲い来る…

「ネロ!」

「ヴィータちゃん!」

モニターで見ていたフェイトとなのはが叫ぶがシグナムは黙ったまま…

「ぶち抜けええー！ー！ー！！！！！」

ハンマーを叩き付けた瞬間、今までにない土煙を巻き上げた。ヴィータは息を荒げ、なのは達もただ見守るしかない。

「やった…か…？」

息が荒いままのヴィータが小さく呟いた…

だか背後に感じた気配にハッ、として振り向くと土煙がまだ晴れていない中にネロがいた…

体は無傷だが服の汚れと瓦礫の破片でズボンとシャツはボロボロ…

「デメツ…！」

グラフアイゼンを振るおうとしたがその前に腕を掴まれ、そのまま捻り上げられてしまった。

「ううっ！」

抵抗するが逆に自分の腕が悲鳴をあげ、苦悶の声を出す…

「今度こそ本当に終わりだ…」

静かに言った言葉…どこか彼女を哀れんでいるようにも聞こえた

「まだ終わりじゃ…！」

「そこまでだ」

ネロを睨み付けていたヴィータが声のした方を向くとそこにはシグナムがいた。

既に騎士甲冑を纏って空に浮いていたが、降りて来るとネロとヴィータに近付く…

「シグナム、なんで止めんだよ！ アタシはまだ！」

「今のお前ではこいつには勝てない…」

ネロがヴィータの腕を放すと、今度はシグナムに食って掛かった。

「必死になるのは悪くないがお前からは怒りしかない感じられない。現に動きが全て読まれていた」

「うっ…」

シグナムの言っている事は正論だった…

ヴィータの攻撃は感情に任せたもの、ネロを倒す事に固執するあまりに強力だがダメージは与えられなかった。

「なんだよ…」

ヴィータが手を握り締め、体も震えていた

「ヴィータ…」

「触んじゃねえ!!」

シグナムが肩に触れようとした手を乱暴に払いのけ、すぐに立ち去ろうとしたが…

「おい、忘れてるぞ!」

ネロの声に立ち止まった。

左手にはヴィータの騎士甲冑の帽子を持って…

「大事なモンなんだろう、これ?」

帽子を差し出した

なのはとフェイトに聞いた話では、はやてに買ってもらった大切なうさぎの人形の装飾のある物らしく、彼女の所まで持って行こうとしたが…

「うるせえよ… テメエなんか!」

歩み寄って来ていたネロの所まですぐに駆け寄り帽子を取り返した。帽子を手にするなりヴィータはトレーニング場から去り、姿も小さくなると思えなくなった…

『あいつ…』

最後の言葉が微かに震えていた…
顔も附せていたが、おそらく泣いていたのかもしれない…

「くっ…」

ヴィータの姿が完全に見えなくなるとネロが片膝を付くように崩れた。

「すまん、無理をさせてしまった。大丈夫か？」

「平気だよ… これくらい…」

そうは言うが言葉は途絶え途絶えで、体力も限界だった。

「立てるか？」

シグナムが手を貸そうとするがネロは自分の力で立ち上がろうとする…

「くそ…」

体には力が入らず、片膝を付いたまま顔をうつ伏せたまましていると結局シグナムに肩を貸してもらった事になってしまった。

「女に助けられるようじゃ俺もヤキがまわったな…」

「そう言うな、私では不満か？」

「別に…。これで二度目だろ…？」

自重しながら言うが、喋るのも辛そうにしていた。
前に聖王教会にシグナムとフェイトに運んでもらったと思っていたが、その事と今の事を考えながら口を開く。

「悪い…」

「すまなかった…」

二人の言葉が重なった…

E p i s o d e . . 1 5 〱 間見えぬ思い へ小さな騎士〱 〱 (後書き)

この小説読んでいると何だかヴィータが嫌なキャラに見えますね…
ヴィータファンの方々ごめんなさい。

いましてそこは我慢して頂けると幸いです。

Episode..16）歪み〈蠢く影〉（前書き）

《小さな騎士》と《黒い騎士》…

ぶつかる思いと心は二人を遠ざける…

一方で見えない影の中では《赤》と《黒》の狩人を狙う者が動き出そうとしていた…

Episode..16 歪み へ蠢く影 へ

「なんでアンタが謝るんだよ…」

「騎士としての礼儀だ… 無理に付き合ってもらったからな」

ヴィータとの模擬戦を終えたネロは疲労が重なり、シグナムに肩を貸してもらい歩いていたが、身長はネロの方が高い為か彼女でも少し苦労していた。

「俺が引き受けただけだ。アンタが悪いわけじゃないさ…」

「私はヴォルケンリッターの将だ。ヴィータを止められなかった責任もある」

ネロは息も絶え絶えで下を向いたまま…
シグナムは前を向き、彼を見ずに言った。

「そうかよ…」

いつもなら

「だったらアイツの首に紐でも付けておけよ」と、皮肉でも言っていたかもしれないが、流石にそんな余裕は無かった。

「お前も引き受けただけと言うなら何故謝る？」

今度はシグナムが聞いて来た

「なんとなくだよ…」

下を向いたままのネロがポツリと言ったが、その言葉にシグナムが呆れた様な顔をしていた。

「また“なんとなく”か？　すぐにそれだな」

「いいだろ、別に…」

「謝る気持ちがあるなら…今こうして私の力を借りている事に対してか、それともヴィータに対してのどちらだ？」

「…どっちもかな」

「そうか…」

最後の一言の前に少しの間があった…
シグナムの問いに何と応えようと考えたのか、疲弊した中で言った
適当な返事…いや、本心だったのか…

「左肩は何ともないのか？」

会話を終えたかと思ったが、唐突にシグナムが聞いて来た。

「何がだよ？」

言ってる意味が分からずに聞き返してしまっただが、彼女は少し思い詰めた顔をしたが、再び口を開いた…

「お前が私と…テストロッサと初めて会った時に負った傷の事だ。
あの時お前は私達を庇って…」

「怪我だって治ってるし過ぎた話なんかしてんじゃねえよ…」

ネロが面倒臭そうに言いつたが、その前に小さい舌打ちが聞こえたような気がした。

「だが…」

「この話は終わりだ。頭の中切り替えろよ?」

シグナムがまだ言おうとしたが、話を終わらせた。

「しかし無茶もいい所だな… ヴィータ相手にバリアジャケットもデバイス…あの“刀”も無しに…」

「ガキに刃物突き付けろって言うのか?」

しばらく歩き続け、ようやく上着を脱いで来た場所まで辿り着いた。そこは先程シグナムがなのはとフェイトが二人の戦いを見ながら待機していた場所である。

「私ならいいのか?」

「アンタが俺の剣壊すし、素手で戦うのかとか言うからだろ?」

「その事は… そもそもお前が挑発するから…」

「いい経験になったな。 “簡単に挑発に乗らない事” って」

ネロの呼吸の乱れも無くなり口数も少し増えたが、それと同時にいつもの調子に戻りはじめていた。

「貴様…」

上着を拾うが、後ろではシグナムがレヴァンティンの柄に手を掛けているのに気付いていなかった…
彼女も愛剣を抜こうとする手を理性で止めるのが精一杯だろう。

「何してんだ？」

振り向けば自分を斬ろうとしている衝動に駆られているシグナムがいた…

「貴様をレヴァンティンの落ちない錆にしようとしている自分を止めるのに抵抗している所だ…！」

「ご苦労な事だな」

一瞬シグナムの額に青筋が浮かぶが、なんとか自分を取り戻しレヴァンティンの柄から手を離れた。

「貴様の心配をした私が馬鹿だった…」

“お前” から“貴様” に格下げされていたが、そんな事は気にしないでいた。

「あ、そう言えば初めて会った時にカリムとシャツハのいる教会に運んだのあんたとフェイトか？」

「そうだが… どうした？」

「助けられた時の礼とか言ってなかったからな」

忘れていたわけでは無いが、中々言うに言えなかったが、いざ言うとなると大変で言葉に詰まったが…

「当たり前的事をしたまでだ。あのまま放っておくわけにいかんだろうし…それより自分でこの話は終わりだと言ったくせにな」

シグナムがフツ、と笑うがネロの方は顔が赤くなっていた。

「なんだ、お前でも照れるのだな」

「うるせえ…」

視線をシグナムから反らす、ネロの顔は赤いままだった…

「具合でも悪いのか？」

シグナムが気遣って聞くがネロは完全に顔をそむけてしまった。

「と、とにかく帰るぞ！ こんな所にいるのもなんだし腹も減ったからな！」

「どうした急に…」

ネロに近付くが、今度は顔どころか体ごと背を向けた：

「いつもの服に戻れよ、あの茶色の軍服みたいなやつ！」

「陸士服の事か？」

「多分な！」

何故そんなに慌てた口調だったのか分からなかったが、取り敢えずネロの言った通りに騎士甲冑から陸士服に戻した。

「戻ったが… どうかしたのか？」

「いや… 別に…」

ようやくシグナムの方を向いたが、まだ少し顔が赤かった。彼女もネロには分からない所が多いと思っていたが、大抵こんな事を言う時は何か考えている時だと分かった。

「言いたい事でもあるのか？」

「いいからとつとと行くぞ！」

上着を右腕に巻き付け、シグナムより先に歩き出した。

「疲れていないのか？ 朝もあんなで昼には任務に出て、帰って来ればヴィータに…」

「行くぞ！」

「可笑しなやつだな…」

言い終わるより前に言われたが、シグナムもネロの後ろを着いて行く

「医務室のあれだが…」

シグナムが口を開くが、ネロは何も言わずに歩き続ける…

「気にする事はない。リインも自分のせいだと言っていた」

話を続けるが、ネロは黙ったまま…

「…あの疲労はヴィータとの模擬戦でのものではなくその時のものだろう？」

いくら話し掛けても何も返す様子はない…

よく喋るのか、冷めているのかよく分からないやつだと思ったが、その後二人は会話する事なく歩き続けた…

「ちくしょうっ…！」

六課隊舎裏：

ヴィータが騎士甲冑から陸士服に戻り、拳を木に打ち付けた。彼女からしてみれば、主をたぶらかしていると思っていたネロとの模擬戦に負け、悔しさと自分の不甲斐なさに駆られていた。

リミッターが付いているとはいえ、自分があのような男に負けるはずが無い、負けれないと思っていたが結果は違った：

「なんでだよ…」

自分の攻撃は全てかわし、更には止められてしまいネロも自分を倒す気は無かった。

“ 降参しろ ”

ヴィータの脳裏にネロの言葉が横切る：

打ち付けた拳を強く握り、食い縛った歯からギリツ、と音を立てる。

「ふざけんなよ…」

掌に爪が食い込み、微かに震えていた：

「クソッ！」

再び拳を木に打ち付ける：

「ヴィータちゃん…」

少し離れた後方から心配で彼女を着けて来たのはとフェイトがいた。同僚にして大切な仲間を慰めようにも二人は戸惑ったまま：声を掛けるにしても今のヴィータには神経を逆撫でするだけだ。十年來の間柄ならば分かりきっている。

「なのは、やっぱり言った方がいいよね？　このままってワケには…」

「…」

「なのは？」

フェイトが話し掛けるが、なのはは何も言わずに思い詰めた顔をしていた：

「なのはってば！」

肩を揺さぶられると、ようやくなのははハッ、と我に返った。

「ごめんね、私がちゃんとしてたらヴィータちゃん…」

「なのはのせいじゃないよ。私も止められたのにしなかったんだから…」

少し顔を附せたなのはにフェイトも自分にも責任があると言ったが：

「なにしてんだよお前ら」

いつの間にかヴィータが二人の前に来ていた。声のトーンから不機嫌な状態である事にはすぐに気付いたが、それ

よりも先程まで離れた所にいたヴィータが目の前にいた上に、まだ慰めの言葉を言う心の準備もまだだった事ですぐに対応出来なかった。

「ヴィータちゃん、あの…」

「まさかアタシに負けた事気にするとか、アイツの事認めてやれとか言いに来たのか？」

先程までの様子とは違いヴィータは落ち着いていたが、到底ネロを許しているようには見えなかった…

「言っておくけど認めねえからな、あんなやつ」

なのはとフェイトとすれ違い、隊舎の玄関の方に向かう…

「確かに知りもしない人とすぐに協力するなんて難しい事だよ!? だけどネロの事、信じてあげても…」

「もう呼び捨てで言うくらい仲良くなったのかよ?」

小さな背中から聞こえて来たのは、また不機嫌だという事を伝えていた…

「ヴィータ、彼は次元漂流者だし…」

「だからなんだよ?」

ヴィータが振り返るが、彼女の青い瞳を見た二人は一瞬動きが止まった。

かつて見た事のある鋭い眼孔と開いた瞳孔…

なのはとフェイトはまだ何か言おうとしたが、その前にヴィータはすぐに行ってしまった…

しばらく歩き辿り着いた隊舎玄関前…

「ヴィータ…」

赤毛の少女と桜色の髪の女性、銀髪の男が鉢合わせの状況でシグナムが呟くように言ったが、本人…ヴィータは銀髪の男…ネロを見ていた。

「なんだよシグナム、口でうまい事言ってお前も結局ソイツの味方かよ？」

開き直ったようにも思えたが、内心では違った…

彼女からして見れば得たいの知れない部外者に助けられ、挙げ句には自分との勝負に割って入ったかと思えば二人で歩いている有り様だった

「私はただ…」

「主を守るのが守護騎士の役目とか言ってたクセに、すっかり腑抜

けちまってざまあねえな」

シグナムが何か言おうにもヴィータは聞く耳持たず、ネロは黙ってただ二人を見ていた

『ずいぶんとひねくれたヤツだな…』

頬を搔いた後に先に玄関から入ろうとしたが…

「コイツが一番怪しいじゃねえか。何であんなにアンノウンの事詳しいんだよ？」

「自分の世界には昔からいたと言っていただろうが」

「それも嘘かもしれないねえだろ？ アンノウン…あの《悪魔》とか言う奴等とつるんでんじゃねえのか？」

それを聞いた瞬間、ネロの足が止まった…

「悪魔が人間の為に戦った？ バツカじゃねえの！？」

嘲笑しながら言ったのにネロも途中まで振り返り、流し目でヴィータを見る。

「そうやってはやてやみんなを騙してんだろ」

「ヴィータ！」

「ひょっとして… てか、自分でも言ってたよな？ “悪魔” だつて」

ヴィータが“悪魔”と言った事で彼女に詰め寄ろうとしたがシグナムに止められてしまった。

「口がすぎるぞ…」

「シグナムだってそう思ってたんだろう？」

「違う！ 私…」

シグナムが言うのよりも前にネロは彼女の腕をどけ、先に隊舎の中に入ってしまった。

上着で隠した右腕を左手で抑えながら…

「ネロ…」

シグナム… そして後から来ていたのはとフェイトは彼の背中を見ているしかなかった…

言うのよりもネロの歩く速さの方が上だったからそうするしか出来なかった…

所変わり廃棄都市区画…

「…にしても何もねえな」

瓦礫と化した道路をもう一人の銀髪の男が歩いていた。
何時間も歩き続けているが、人ツ子一人いる気配はない。

遠くには昼間には分からなかった街の灯りが見えるが、敢えてそこへは向かわずに相変わらずの観光気分であいていたが、流石に暇と空腹でそれにも飽きてきていた。

「こんな事なら坊やと合流しておくんだったな…」

腹の虫が鳴いたのと共に溜め息混じりに言ったが、すぎた事を言っても仕方の無いこと…

『いや、あの嬢ちゃんってのも…』

悪魔を召喚させていたと思われる少女“ルーテシア”の事を思い出した。

が、あのような子供…ましてや敵かもしれない少女に飯を奢ってもらうのも気が引け、彼女の隣にいた“ガリユ”と呼ばれた異形の事も思い出し、この事は忘れる事にした。

「はぁー…」

銀髪の男が大きく溜め息を吐いていた頃…

「あ！ ネロさん一緒に夕食でも…」

「いない…」

「腹減った」

スバルがネロを誘ったのに短く応えて早歩きで去り、銀髪の男が腹を抑えながら言う。と腹の虫がまた鳴いた。

薄暗く広い部屋でルーテシアと話していた紫色の髪と金色の瞳の男が巨大な二つの画面に映し出されている映像を見ていた…

「すばらしい…！」

【例のハンターですか？】

「ああ。実にすばらしい！ 興味深いよ…！」

【悪魔の力を持つ者…】

「ただの悪魔ではないよ、ウーノ。彼らは…」

艶やかな薄紫色のウェーブが掛かった髪と金色の瞳の女性…『ウーノ』の映像が映っている画面に男が目線だけ向けて言ったが、直ぐ

に巨大な二つの画面に目線に戻した。

【ハハッ！】

銀髪と赤いコートの男が大剣を《ヘルⅡヴァンガード》の大鎌を笑いながら斬り上げると、その勢いと共に跳び上がった。

今度は落下と共に大剣を叩き付けるべく《ヘルⅡヴァンガード》の顔面目掛け降り下ろすが、大鎌で受け止められる…

【オオオオオッ！！！】

大剣と大鎌がぶつかり火花が飛び散る。

《ヘルⅡヴァンガード》の鎌の刃は魔力で形成されている為、男と大剣が空中で止まるが…

【Cut Off（掻っ斬れ）！！】

鎌の刃が砕け散り《ヘルⅡヴァンガード》の体を縦に真っ二つに切り裂かれ、黒い霧となり消えて行った所で映像が終わる…

もう一つの画面では…

【テメエ…】

壁に叩き付けられたネロが地面に附せた状態から立ち上がろうとしていた。

《ヘルⅡヴァンガード》の後ろには赤い手が蠢く結界で唯一の出入

口を塞がれたネロが無慈悲な死神と向き合う。

死神が悲鳴のような雄叫びを上げると鐘の音が広い部屋に響き、《ヘルⅡヴァンガード》の姿が消えてしまった：

ネロが辺りを見渡していると右腕が疼き、跳ぶとその直後に横の空間から現れた死神が耳障りな声で笑い鎌を振り回しながら突進してきた。

ネロが着地した頃には《ヘルⅡヴァンガード》は空間に飛び込み、姿を消した：

電気や灯りがなど無い部屋にネロの息づかいと外で騒いでいるスバルやティアナの声が聞こえる：

右腕に疼きを感じ、サイドロールで出現すると共に振るう鎌をかわすが、再び右腕が疼いた。

咄嗟に振り返った瞬間に出現した他の《ヘルⅡヴァンガード》の鎌がネロの左肩に突き刺さる：

だが、向き合っていたもう一体の《ヘルⅡヴァンガード》の鎌がネロの右肩に食い込む：

【がっ…！】

苦悶の声を微かに漏らしたが、右腕がまた疼いた直後に正面に出現した《ヘルⅡヴァンガード》の鎌がネロの胸を切り裂いた：

【あ…！】

三本の鎌で空中で磔にされたネロの体から血が滴り落ちるが：

「見たまえウーノ」

画面に目を向ける男は薄ら笑いを浮かべる。
ウーノも黙ってその映像を見ていた。

礫状態のネロ…

右手の指がピクツ、と動くと袖の間から青白い光が漏れ出す。

次の瞬間、部屋中が光に包まれ《ヘルⅡヴァンガード》も吹き飛ばされていた…

【…を】

ゆっくりと歩くネロ…

体にはまだ鎌が刺さったまま

【もっと…らを…】

体に纏った青白い光が炎のように揺らめき鎌の刃にヒビが入り…
瞳から放つ赤い眼光を見た《ヘルⅡヴァンガード》が硬直する…

【もっと！ 力をおーーーーー！！！】

凄まじい叫び声で大気が震える…
体に刺さった鎌も砕け、右腕の袖が吹き飛ぶと《閻魔刀》が握られていた…

【アアアアアアーーーーー!!!!!!】

深く沈んだ構えで《閻魔刀》を振るうが、《ヘルⅡヴァンガード》との距離は離れすぎている。
到底斬れる距離ではないが…

【これは!?!】

「驚いたかい？」

空間が湾曲したかと思えば、けたたましい音がし… 《ヘルⅡヴァンガード》が一体消えた…

【これが“魔剣”の力…!】

「そう…。そして…」

画面の中ではネロが叫び続け、刀を振るっている…
いや、肉眼では振るっているのかさえ判別出来ない程の速さだった。

【You're going down(跪け)…!!】

右腕が微かに動いているように見えるが、周囲には斬撃を飛ばす一閃の度に風が吹き荒れる…

証拠に次々と空間が湾曲し、その後には金属音が鳴り響き、死神が悲鳴を上げる。

「闇を切り裂き喰らい尽くす刀だ!!」

男が言った頃には既に《ヘルⅡヴァンガード》の姿は無く…

部屋の壁には空間を切り裂いた傷跡が残り、その傷を付けた張本人…呼吸が乱れたままのネロが一人だけいた…

深い姿勢から立ったかと思えば闇魔刀を横薙ぎに一振り…

影から出て来た《ヘルⅡヴァンガード》を両手で持っていた鎌ごと切り裂く…

【すごいものですね】

「なんでも… 触れるもの全てを切り裂く程に鋭い刃を持つらしい。まるで…」

男がウーノの映る画面を見た。

先程よりも歪んだ笑みで。

【今の彼自身… ですか?】

「その通り」

ウーノがネロを見る目は危険なもの…人外の獣を見ているような目だった

【がっ!!】

荒い息のままおぼつかない足取りで歩くネロの体に電流が走った。
体がビクン、と反応した後にまた電流が走る。

【あぁっ！　ぐっ…　があ…　あっ！】

体が仰け反り、天井を見上げるような状態のまま電流が走り抜ける…

【あ…】

最後に大きくビクン、と反応した後に右腕が閻魔刀を吸収し、体と
瞳の光が消えた。

そのまま膝を着いた直後にフェイトがネロに駆け寄る…

【彼女はプロジェクトFの遺産でしたね…】

「ああ…」

そこで画面に映っていたネロの映像は途絶えた。

男は歪んだ笑みのまま話続ける…

「欲しい…」

男が笑い出すと両手を大きく広げ、天を見上げた。

「欲しいなあ！ あの手、是非とも欲しいよ！」

画面に映るウーノはただ黙って男を見ていたが、二人の戦いぶりに小さく呟く…

【魔剣士… スパーダ…】

広い部屋には《無限の欲望》の名を持つ男の高らかな笑い声が響いていた…

E p i s o d e . : 1 7 (D e a t h S c y t h e 〈死神の鎌〉) (前書き)

《赤》の狩人に迫り来る影…

それは地獄からの使い…

そして暗躍する闇の住人…

Episode..17 Death Scythe〈死神の鎌〉

機動六課部隊舎内の一室…

そこでネロはベットに寝そべり右腕を見詰めていた。

証明の灯りにかざした右腕に影はかからない…

何故なら青白い光を絶え間無く発しているのだから

“あの《悪魔》とか言う奴等とつるんでんじゃねえのか？”

頭の中では自分に不信を抱く少女の声が響いていた…

“悪魔が人間の為に戦った？”

掌を返し、今度は手の甲を見詰める。

掌は全体が青白い光を放っているなら…

“バツカじゃねえの！？”

手の甲は茶色の外殻がグローブの様な形をしている。

第二関節から指先、手の甲の中心から肘先まで走る亀裂から青白い光を放つ。

「悪魔…」

爪と肘は尖り…

「悪魔の右腕…」

自分が名付けた体の一部の名を呟きながら、左手で右手の親指と小指の付け根にある棘を触った。

“自分でも言ってたよな？ 《悪魔》だって”

右腕に意識を集中させて出現させた《閻魔刀》の鞘から少しだけ抜き、刃を見詰めた：

鏡のように美しい銀色の刃に映った自分：

『スパーダが振るった魔剣… 閻魔刀…』

刀を納め、右腕が《閻魔刀》を吸収すると目を伏せた

同時刻、廃棄都市区画の中…銀色の髪に赤いラバーコート、大剣を背負った男が歩き続けていた。
周りには電灯などありはしない。

灯りと呼べるものは遠くに見える街の灯りと星の光だけ

『どうしたものかな…』

マイペースにノロノロと歩いていたが足を止め、街の方に目を向けた。

『悪魔と謎の嬢ちゃんに坊や…　それでワケの分からない所…』

空を見上げれば近隣の星と月が二つ

自分の故郷（と言うより世界）では見られない光景にフツ、と笑ってしまふ…

『まあ、此処が何処かはいいとして…』

また腹の虫が鳴いた。

『飯を何とかしないとな』

普段からロクな物など食べずにいる借金と金欠生活だが、何時もならツケもきいたし、少なくともそこは何とかなった。

しかし、自分の知らない土地で所持金は雀の涙程度。

ポケットの中の通貨が使えるか分からない上に、此処ではツケなどきかないだろう。

『どうするかな…』

そんな事を考えながら、男は一気にコートの中…腰のホルスターに納めた銃を抜き発砲した

「こちとら腹の虫の相手してんだよ…」

左手に握られた黒い大型拳銃の銃口からは煙が昇り、空葉莢が落ちた音の直後に黒い塊が地面に叩き付けられた。

「そんでついでにお前らも相手しろってか？」

落ちて来たのは死神、いや魔女と言った方が良さそうか
手には巨大な鋏を持ち、黒いマントを来ているようだが体などあり
はしない…

仮面は弾丸で撃ち抜かれていたが、高笑いを上げながら消えて行く。

男は倒した悪魔…《シン シザース》から目を離し空を見た

そこは地獄から迎えに来た《死神》達が飛びかう光景

「人の都合も考えねえヤツにはお仕置きだな。そう言うのは嫌われるぞ」

死神達は高笑いを上げ、男を見下ろす…

「降りて来いよ？ 俺がマナーって言うもんを教えてやる」

銃をホルスターに戻し、両手で催促したが死神は来る気配は無く笑い続ける…

「そうかい… 来ないってんなら…」

男は挑発が通じない事で諦めると、背負った大剣の柄に手を掛け…

「こっちが行くよ」

瞬間に男の姿が消えたかと思えば、一瞬で魔女と死神の頭上に現れた。
シン シザース サイズ

男は剣を両手で持ち大きく振りかぶる。

「Let's rock（派手に行くぜ）！！」

呆気にとられた《シン シザース》の仮面が碎けると、違う魔女に狙いを変えた。

男の周りにいるのは魔女が一体と死神が二体。無論、他にまだ十体以上いる

「ハアッ！！！」

腰を捻りで体を回転させながらの一振り。右隣のシザースの仮面を割るがまだ二体残る。

背後の二体…《シン サイズ》が大鎌を振るうが…

「Dull（鈍い）…」

剣を逆手で持ち、刃で背中を庇うと左手で銃を抜き発砲…

一体になったサイズの鎌を弾くと、死神の無防備な仮面に再び発砲した。

「次はどうだ？」

地面に着地すると他の死神達を見た。

男は相変わらずの調子で息一つ乱れていない。

「Hey! What's up!（おい！ どうした！）お仲間がやれたんだぜ？ 来いよ！」

再び挑発するが襲って来ない。

いつもなら激情し、自分を殺そうとするはずだが…

「C'mon(来い)！」

すると突然自分の周りに赤い電流が走り、檻のように形成され閉じ込められた。

「あら？」

この結界に見覚えはある。

かつて戦った事のある悪魔が作り出すものだという事に。

地面から飛び出して来た牛の頭蓋骨を持つ悪魔の鎌をかわすと距離を取った。

だが、結界の広さは精々三メートルの三角錐：　すぐに結界にぶつかってしまう。

結界を作った悪魔：《デス　シザース》の巨大な鋏をかわし、時には剣で弾くが：

「おっと！」

結界の外にいる魔女と死神が鋏と鎌を振るう。

自分が下手に動けないのを良いことにここぞ言う程に執拗に攻撃して来た

「lonlじゃなかったのか？」

本来なら《デス　シザース》は単体で行動し群れる事はない。

だが、今は違う。《シン》達と共に自分の命を刈り取ろうとしているのだから。

「経験もアテにならないな…」

流石に部が悪いとしか言い様が無い。

《デス シザース》の仮面を大剣で切りつけた事により、仮面に赤い炎を纏い凶暴性が増し、地面や結界の外からは絶えず鋏と鎌が襲う…

「うおっ！ ハハッ、こっちだよ！」

サイドロールとステップでかわすが、背後の《デス シザース》が大きく鋏を広げると突進と共に迫る

「危ねえ…」

殺気を感じ、大剣で鋏が閉じる前に止めるが《シン サイズ》の鎌が頬をかすめた。

「どいつもこいつも…」

鋏を弾き飛ばすと頬の血を拭う
すると頬の傷がすぐに塞がった…

「俺は腹が減ってんだよ…」

真剣な顔つきに変わり、剣を構えると刀身に赤い光を纏う…

「つまり！」

一瞬で《デス シザース》の首を切り飛ばすと結界が砕け散った

「機嫌が悪いって事だ。分かるよな？」

男を閉じ込め自分達を守っていた壁が無くなると死神達が一斉に空に舞い上がった。

男が言っているのも口上でしか無い： 現に空腹だが、それよりも悪魔を狩る事を生業とし、悪魔を憎む気持ちの方が遥かに上である。

「遊びはここまでだ。そろそろ終わらせるぞ」

大剣を地面に突き刺すと腰の銃を抜いた：

E b o n y（黒鍵）とI v o r y（白鍵）：

彼の為に最高の銃職人が設計とパーツを揃え、彼自信が組み上げた相棒。

通常の拳銃よりも巨大にして肉厚な銃身を持つ双銃だ：

それは一瞬の事だった：

時間にして一秒もあるか無いかという程の一瞬：

秒間十数発に及ぶ彼の圧倒的な連射速度に追い付けるはずが無いのだから

「一丁上がり！」

男は愛銃を指で回した後、軽やかに腰のホルスターに納めた。

仮面を割られた魔女と死神は地面に叩き付けられ、又は空中で黒い霧のように霧散して行く：

「締めはアンタだ」

見上げたままの空に浮かぶ黒い影を見た。
他の死神達よりも巨体を持つ死神に…
デス サイズ

「ずっとそこで見物してたんだろ？」

《デス サイズ》は《シン》や《デス》の名の付く悪魔の中でも最も高位の悪魔である。

「こっちも体が暖まった所だ。掛かって来いよ！ 見てるだけってのも暇だろ？」

突き刺した剣を肩に担ぐと、《デス サイズ》も空間から大鎌を出現させた。

「そうこなくっちゃな！」

不敵に笑い、男は地を強く蹴った。
剣と鎌がぶつかり金属音が鳴り響く。

「やっぱあいつらのボスなだけにちったあ骨のあるヤツだな！？」

鎌を弾き、凄まじい空中乱舞… “荒れ狂う大気”となり、猛攻に入る。

「Aerial Rav^{エリアルレイヴ}e!!!」

人間離れした神速の剣技により《デス サイズ》が劣勢になるが空間から三本の大鎌が飛び出して来た。

咄嗟にそれをかわすと《デス サイズ》から離れ地面に降りた。

「ムチャクチャだな…」

《デス シザース》の時とは違い、単体で戦っては来たが明らかにおかしい…

《デス サイズ》は三本の鎌を地面に突き刺し、一本の鎌で戦う悪魔。残りの三本を使うのは自身の身に死が迫った時だけのはず。劣勢にこそ追い込まれはしたが、地面に始めから鎌を突き刺さず空間から呼び寄せた。

『どうも妙だ…』

昼間に戦った《セブンⅡヘルズ》の時にも感じていた事…

異常な数の悪魔、本来なら外に現れるはずの無い《ヘルⅡエンヴィー》、そして今…《シン》の悪魔は群れこそするがこれも数が異常。《デス シザース》までも《シン》と群れ、《デス サイズ》までも戦い方が違う…

『まさか!?!』

昼間に会った少女の事を思い出しハッ、と周囲を見渡した。

灯りの無い廃棄都市の中では人影など見えない。

感覚を研ぎ澄めますが…

「チツ、途端にこれかよ…」

隙を突いたとは思えない《デス サイズ》の攻め
どうやら自分にあの少女を探させないようにしているとしか…

『匂うな…』

可笑しすぎる。人間が悪魔を操っているとは思えないが何か裏があるとしたか…

四本の鎌を振り払うと《デス サイズ》と距離を取った。

だが、今度は打ってかわって先程と比にならない猛攻。四本の鎌が不規則に襲う…

「ぐっ！ この…うあっ！？」

剣を手から弾き飛ばされるとそのまま《デス サイズ》に踏みつけられ身動きが取れない

「野郎…」

銃を抜こうとするが右手を、続いて左手を紫色に輝く鎖で封じられた。

「なに！？」

たて付けに両足までも鎖が結び付く。

過剰に巻き付き締め付ける鎖に力を込めると少しずつヒビがはいるが、《デス サイズ》が自分の命を刈り取るべく大鎌を振りかぶった…

「チッ…」

小さく舌打ちをするが刃はそこまで迫る…

「調子乗んなよ…」

男の体に赤い電流が駆け抜けけると胸から放った“雷”が《デス
イズ》を吹き飛ばし、そのまま天に向かって駆け昇った…

「「掃き溜め相手に大サービスだ」」

それは異形…

「「上級悪魔だかなんだか知らねえが…」」

そこに立つのは赤い悪魔…

「「これで終わりだ…」」

二重にエコーの掛かった声で…

「「ハアアア…！」」

手を差し出して呼び戻した大剣を両手で持ち、引き付けるように構える：

刀身に赤い光を纏い、凄まじい魔力が駆け巡る：

「Break down（砕け散れ）！！！！！」

繰り出された必殺の突き《スティングー》に込められた真紅の魔力が螺旋を描いて地面を抉り：大気を焼き：空間を歪める

「ふう：」

落雷と共に元の人間の姿に戻ると大剣を背負った。

跡形も無く消えた《デス サイズ》も含めて悪魔はいない

「動くな」

男の背後にいる者に言った一言：

「やっと見つけたぜ？」

振り返るとそこにいたのは昼間に会った少女だ。ルーテシア

隣にいたガリユーと呼ばれている人型の召喚獣が彼女を庇うように前に出て来る。

「昼はさっさと帰っちゃったのにこんな時間にお外にいていいのか？
ママが心配するぞ」

それを言った瞬間、ガリユーの腕から鋭利な爪が飛び出すがルーテシアが制した。

彼女を見ると無言で首を振っている…

「ガリユー… 下がって…」

促すと飛び出した爪を収納し、一步下がった。

人でも悪魔でも無い異形の生物と少女のやり取りを見ていたが、少女が男を見た。

「こんばんは… 魔剣士さん…」

「俺は魔剣士なんて大層な肩書き、名乗った覚えはないぞ」

男と少女は向かい合い静かに言葉をかわす。

「でもあなたはスパイダの子供なんでしょ…？」

「俺の事をご存知か… 嬢ちゃん何者だ？」

「私はドクターから聞いただけだから詳しくは知らない…」

「ドクター？」

首を傾げる。

すると自分と少女の間にホログラム状の画面が浮かび上がった。

【ごきげんよう… いや、はじめましてか。どうだったかね？ あ
の悪魔達は】

画面に映っているのは紫色の髪に金色の瞳を持つ男：

「あんたがドクターか？」

【いかにも： みんなからはそう呼ばれているよ】

「あの悪魔はあんたの仕業か？ あんなので俺を倒せるとでも思ってたのかよ？」

画面の男の口が吊り上がり、歪んだ笑みを浮かべる：

【勿論思ってたのではないさ。あれはほんの小手調べだよ】

銀髪の男の眉がピクツ、と反応した。

【いくら上級悪魔と言えど君にとっては他愛の無い相手だと知っているとも。だから少し細工させてもらったよ】

「どうりで可笑しいわけだ…」

【怒ったかね？】

「別に…」

ポーカーフフェイスで画面を見詰め腕を組む…

「本気で悪魔を操れると思ってんのか？ やめとけ。ロクな事ねえぞ」

【ほお… そう思っているようだね…】

「なに…？」

睨み付けた先にある画面の男は一層に笑みを歪める…

「どう言う事だ!？」

【さあ… どう言う事だろうねえ…】

人を見下した態度でいるのに苛立ちが込み上げそうになるが平静を装った。

【いずれ分かる事さ。君の“魔人”の姿も見れた事だし… これで良しでしょう】

「ムカつくやつだな」

【よく言われるよ…】

この男には皮肉も挑発も通用しない
異様な雰囲気画面越しに伝わって来た

「ドクターとか言ってたが… 本名くらいあるんだろ？ 名前くらい名乗るのが礼儀ってもんだ」

【君からそんな言葉が聞けるとはねえ…】

一言一言が一々間にさわる…

【私の名はジェイル・スカリエッティ】

腕を広げ高らかに名乗った画面の男：“ジェイル・スカリエッティ”

「ジェイル：スカリエッティ：」

【ああ。そして君の名前は：】

そこでスカリエッティは一度区切り：

【ダンテ：！】

強調した銀髪の男：“ダンテ”の名が画面の中で木霊する。

「テメエなんかに名乗った覚えはねえんだがな」

ダンテの眼光に一瞬、スカリエッティの中に“恐怖”と呼べる感覚が駆け抜けた。

【君の事なら知っているよ。伝説の魔剣士^{スパイダ}の息子だと言う事も！
便利屋^{デビルメイクライ}を営み悪魔狩人^{デビルハンター}を生業としている事もねえ！！】

「そこまで知ってるとはな：」

ルーテシアも黙ってダンテとスカリエッティの話を聞いている。
彼女はスカリエッティからダンテが《スパイダ》の息子、自分の“探しもの”としか聞いていなかった。

【勿論：もう一人のスパイダの血族の事も知っているよ：】

「坊や…ネロの事か？」

聞き返すとスカリエッティが呆れた顔をしていた…
相変わらずの見下した目で…

【おや、分かっていたのかい。流石だね】

「ここは何処だ？」

ダンテの目付きが鋭くなり、再びスカリエッティに“恐怖”と言う
感覚が駆け抜ける…

【お気づきだとうろが此処は君のいた世界じゃない。《ミッドチル
ダ》と言う異世界だ】

「異世界…」

【驚いたかい？】

スカリエッティが聞くが、ダンテは鼻で笑った

「驚く必要なんかあるのか？」

彼に取っては聞くだけ聞いただけ。

場所など重要ではない。

彼はかつて《魔界》にすら行ったことのあるのだから…

重要なのはそこではない。悪魔を利用している者がいると言う事…

ダンテはそっぽを向いて歩きだした

【もう行ってしまうのかい？　もう少し話していたかったんだが…】

「デメエと話す事なんか何もねえよ。じゃあな」

【ではごきげんよう。ダンテ…】

スカリエッティの映っていた画面が消えた…

「ごきげんよう…　魔剣士さん…」

ルーテシアもそれに続き足元に魔方陣が広がる

「嬢ちゃん、悪魔に関わるのはよせよ？　あいつともな」

振り返らないまま言った言葉にルーテシアが静かに返した…

「約束だから…。私はドクターに協力する代わりにお母さんを助けてもらうって…」

それにダンテも足を止めた…

「病気か何かか？」

「そんなところ…　起きるのを待ってるんだ…」

それを聞くと再び歩を進めた。

「親は大事にしろよ…」

ダンテは振り向かないまま手をひらつかせ歩き続ける

「あ！ それと俺は魔剣士じゃ…」

また《魔剣士》と言われた事で振り返るが、もうルーテシアもガリユーはおらず、彼女の紫色の魔力光の名残が微かにあっただけだった。

『行っちゃったか…』

この世界に迫り来る悪魔の影、それを我が物としようとする“ドクター”と呼ばれる男、彼に協力する少女

再び歩き始めると空を見上げ…

「ジェイル・スカリエッティ…」

あの男の名を口にした。
ポツリと呟くが…

「うるせえな…」

また鳴いた腹の虫を黙らせるべく腹を叩いた。

Episode..17 Death Scythe〈死神の鎌〉（後書き）

さあ、第17話まで来ましたよ！

今回はダンテメインの話です。今まで散々引っ張って“男”だの“銀髪の男”だの呼んでましたが、ようやく名前で言えましたね。

ダンテならあのくらいで魔人化する必要はなかったんでしょうが、書きたいばかりにやってしまいました。もっと引っ張った方が良かったですかね？

串刺しシーンを要求してくれた方もいました。自分も今回の話でそうしようかと思ったんですが、それは引っ張ろうと思います。

それでは次回のお話をご期待下さい。

E p i s o d e . : 1 8 \ T o m o r r o w ^ 明日に向けて \ (前書き)

己と自分を信頼してくれる人との交流…

今は無理でも『鉄槌の騎士』が彼を信じてくれる日を願って…

Episode..18 Tomorow〈明日に向けて〉

ネロはベッドで寝そべり左腕で目を隠していた…

『悪魔…』

ヴィータに言われた言葉が頭の中に残り離れない。

自分で言うのは平気なくせに人から言われるのは辛いものだった

「チッ…」

舌打ちをしてしまったが気が晴れるわけではない。

部屋に入ってどれ程の時間が過ぎただろうか…

数分… 数十分… 数時間かもしれない。

するとドアをノックする音が数回し、聞き覚えのある声がした。

はやての声だ

「どうぞ…」

上体だけ起き上がると

「失礼します」と言い入って来た。どうやら彼女一人らしい

「シグナム達から話聞きました… ヴィータが失礼な事言ってしまったみたいで…」

はやてが申し訳なさそうに言うがネロは目を背けてしまう…

「気にしてねえよ…」

そうは言うがどう見ても気にしているのは明らかだった。
ネロの様子からはやてもすぐに察しがつく

「あの子、強い口がキツイ所もあるけど許したって下さい。
ウチにも責任ありますし…」

「だから気にしてねえって言ってんだろ…」

更に体まで背けてしまった…
それを見てはやてもよほど彼には堪えたものなのだと思いますネロの傍
まで寄り…

「座ってもええですか？」

と、言って来た。

ネロも目だけ向け、

「座りゃいいだろ…」と言う。疲れているわけではない。
誰とも話したくないだけ

「ヴィータと模擬戦する許可出したのはウチやって知ってます？」

「シグナムから聞いたよ… アンタと二人で決めたんだろ？」

はやてがベッドに腰を下ろして話すがネロはまだ顔を会わせない

「ネロさんの事認めてくれへんみたいやし、戦って二人の気持ち
ぶつけ会えば少しは分かってくれる思おったんですけど… 返っ
て悪くしてしまいましたね」

ネロを見て話すが彼は此方を見てくれない…

「教会での事覚えてます？」

「今日の事忘れるワケねえだろ…」

はやてが突然話を切り替えた。これ以上彼に嫌な事を思い出させない為に

「ウチ嬉しかったんですよ？ 初対面なのに手え貸してくれる言ってくれたんに。」

「悪魔が絡んでのに無視出来なかったからな…」

はやては明るい声だがネロは暗い声で話す

「あん時にウチ泣いてしもたんですけど… それが原因ですよね…」

「それだけじゃねえよ…」

はやてが少し恥ずかしがりながら言うところ今度はネロが話し始めた

「悪魔が現れ出したのと俺がコッチに来たは殆んど同時期だ。俺は他の世界から来たって事だし… そりゃ部外者は信用出来ねえだろ？ それに医務室じゃ“あれ”だ…」

話しながら目を右側に向けた。

絶えず光を放つ《悪魔の右腕》に…

「右腕もこんなだしな… 俺は…」

「ネロさん？」

拳を握り締め、喋っている途中にはやてが割り込んだ

「なんだよ…」

「コツチ向いて下さい」

自然と出した小さい溜め息の後にはやての方を向くと額に一瞬電流が走った。

何が起こったか分からずキョトンとしていたが、どうやらデコピンされたらしい。

「それ以上言うたら怒りますよ？ さっきから聞いっとたら自分の事、悪う言っただけですよん。一人で抱え込むもんちゃいますよ！？」

はやてがネロの鼻先を指差すが彼はまだ状況が飲み込めないままだった。

「ヴィータの事はウチに責任があるんやからネロさんが気にする事はあらへん！ そこん所はまだなんとかなるんやから」

湿った雰囲気から一変し、はやてが言うがネロはまだ何か言いたげだった：

「おい…」

「はい、この話は終わり。過ぎた事をほじくり返さんで頭ん中は切り替えた方がええんやろ？」

はやてを見ると、彼女の目の強さに身を引いてしまった

「シグナムから聞いたんですよ？」

ネロが言ったセリフの後に不敵に笑ってみせたはやてに溜め息を吐き、これ以上言っても無駄だと理解させられた。

「分かったよ…」

不満げに言うが、それを聞いたはやても

「よろしい」と言い満足げだった。

「まあ、切り替えるゆう事で…」

少し間を開けると…

「預かってる物なんですけど…」

「…どうかしたのか？」

はやてが話すのを躊躇っているが、取り敢えず聞いてみた。

「いや、何て言いますか…」

「言えよ。俺のもんだぞ？ 知る権利あるだろ。後、敬語やめろ」

自分の剣と銃、バイクの事が気になっていたが、先程から敬語で話すはやてに注意も付け足した。

「確かにネロさんの方が年下やけど、もう馴染んどるみたいやし…

えーと、それで預かつとるもんなんやけど…」

口では言っても少しはタメ口で話す努力はしているようだ。ぎこちないが…

「バイクは問題ありません…　せやけど武器の方が…」

また言葉に詰まってしまった。

「“質量兵器”　ってやつか？」

「えと…　はい…」

フェイトとシグナムから聞いた話ではこの世界では魔力を使い、物理破壊は出来るが体にダメージの残らない《デバイス》と言う物を使っていると聞いた。“非殺傷生設定”とかならば問題ないらしいが、ネロの剣と銃はそんな生易しい物ではない。立派な“質量兵器”である。

「この世界じゃ問題なんだろう？　まあ、元々ヤバい代物だけどな」

口では平然と言えるが、自分の愛剣と愛銃を手離すのは流石に不安を感じた。

だが、彼女から返って来たのは意外な言葉で…

「いえ、返す事は出来ます。ただちよつとなんて言うか…」

まだ躊躇っていた。言いたい事はハッキリしているのだろうが、さつきから目をチラチラ動かしている。

「なんだよ？」

「やっぱりあのまま返すってのはあかん言う事なんですけど…
っだけ方法が…」

「言えよ」

「そうですか？ それじゃあ…」

はやてが決意を固めて言った。

「あの剣と銃、《デバイス》として改造してもええですか!？」

言っている意味が分からない

「え？」

思わず聞き返してしまったが…

「せやからあの剣と銃を《デバイス》に改造してええかって話なんやけど…」

脳内処理が追いつかないが、要するにこう言う事だろう。この世界では“質量兵器”は危険な物であるから持たせるワケには行かないので、《デバイス》としてならば問題ないと言う事。

「無理強いはしません。せやけど、使うんやったらそうした方がええって言うか：あのままってワケには行かんし：あ！ 勿論普通の銃としても機能するようにしときますんで：その：」

「つまり返す方法がそれしかないからそうしろって事だろ？ で、本人の許可を取ろうって？」

慌てていたはやてだが、脳内処理が出来たネロが呆れ顔で辿り着いた結論を言う

「そう言う事です…」

「また敬語になってんぞ」

一人舞い上がっていたはやてに頭を掻きながら冷ややかに言った。

「その… すみません…」

「謝るなよ… それしかないってんなら仕方ないだろ」

こののやつは一々謝るのか？と思ったが、疲れがどっと出たらしく、はやては大きく深呼吸した。

「それじゃあ武器のデバイス化はよろしい言う事でええんですね？」

確認の為に聞いて来るが…

「だから良いって言ってるだろ」

しつこいはやてにまた溜め息が出そうになったが、彼女は何処か嬉しそうだった。

「まだ何かあるのか？」

つい聞いてしまった

「いやな… これでネロさんもウチらの仲間入りしたみたいでつい…」

自分はいくまでも“協力者”なのだが、今の彼女を見ていると言おうに言えなかった。

「そいつは良かったな。コッチも光栄だよ」

「ホンマ!？」

皮肉のつもりで言ったが真に受けたらしい：

「いやゝ、なんやシグナムとティアナの話やったらデバイス使えとったみたいやし、もしかしたら才能とかあるんやないんかな？ 初めて魔法使ったとは思えんぐらいのもんやったらしいし：」

淡々と話続けるが、自分でも銃を射つ感覚だったのでどうやったかなんて知らない。ただ夢中だった：

それにシグナムの《レヴァンティン》の件は魔法ではない。自分の振るう剣の斬撃と背後の悪魔の振るう《閻魔刀》の斬撃を組み合わせ、殺傷能力を上げた物：《マキシマム ベット》と言う技だが、はやて達から見れば魔法と変わらないだろう。

ネロの思い描く《魔法》と、この世界の《魔法》はあまりにもかけ離れている。

「その“魔法”ってのがこの世界じゃ当たり前って事なんだろう？ 俺はどうやったかイマイチ覚えてないけどな」

頭を掻きながら言ったが、はやては割り切りがいいのかどうかよく

分からない。

多分、ネロの気を紛らわそうとしているのかもしれない。
それはそうだろう： 家族であるヴィータにあんな事があったのだから：

「ああ、誰でも使えるワケちゃいますよ。使えん人もおるし、ズバル達みたいに魔法は使えても空は飛べへん言う人もおるから」

「へえ…」

随分と使い勝手の悪いものだ

「銃の方は直ぐに出来る思うんですけど、剣の方は折れてしもうとるから少し時間が掛かるかもしれない… 幸い折れたのは切っ先の方やったけど、刀身とフレームの強化も必要やし…」
「直って使えるんならそれでいい」

自分の物が帰って来るのが分かり、キツパリと言った。

まだやる事があるのに使い慣れた武器無しで戦うのはキツイ。

《闇魔刀》と《悪魔の右腕》はあるが、“非殺傷設定”など便利なものはありはしない。

《闇魔刀》は、まだ完全に使いこなしているワケではないし、《悪魔の右腕》に到っては人に見られたくないものだ。

「やっぱり嫌ですか？」

「何がだ？」

「自分の物が返って来る言うてもデバイスになってもうとりますし

…」

ネロの思い詰めていた顔を見てはやてが聞いて来た。
嫌と言うわけではない… ただ、この先の事を考えていただけだ。

「良いって言ってるだろ。使えるもん使わなきゃ損するからな」

ネロの返事を聞いたはやてが

「分かりました」と言い、腰を上げた。

立ったと言っても小柄な為、ネロの目線から少し高い位置にいるくらいだ。

「デバイスの事はウチがスタッフに言うときますんで。ネロさんは明日に備えて休んどって下さい。後でシグナムが食事持って来る思いますんで」

「いいよ… 腹は減ってないし、もう遅いだろう？」

「でもまだ8時過ぎくらいやし…」

はやての前に画面が出て来るが、やはり訳の分からない文字だ。
少し英字に似ているが

「…まだそんな時間か？」

持っていた時計も押収されていたので時間が分からなかったが、
“まだそんな時間”らしい。

「戻って来て一時間も経ってませんよ？ それに食べへんかったら後でお腹空くやろうし、遅うなってから食べたい言われてもウチが

困りますんで」

笑ってみせたはやてに『コイツには勝てそうにないな』と思ってしまった。

「それじゃあウチは行きますんで… 明日はよろしゅう頼みますよ？」

「分かったよ…」

手を振り部屋から出て行ったはやてを見送ると、また溜め息を吐いてしまう。

再びベッドに寝そべり《悪魔の右腕》を見詰めた。

「“魔法”ねえ…」

機動六課部隊舎の廊下…

「主、お疲れ様です」

料理を乗せたトレイを持ったシグナムとはやてが鉢合わせになった。

「ちゃんと渡しといてな。ネロさん落ち込んだるみたいやったけど、食べれるもん食べさせんとあかんし」

「はい」

「嫌や言うても“食べへんかったら損する”とか言うたら食べる思

うから」

「はい。そのように…」

一礼するとシグナムがネロの部屋に向かおうとしていた足を止めた…

「そう言えば先程“雷”が落ちたようでしたが？」

「雷？」

はやてが首を傾げた。

「はい。二度程」

「天気は晴れのはずやねんけど… 音も聞こえへんかったし」

「ええ。ニュースでも何も言っていませんでした… ただ…」

「どないしたん？」

シグナムの表情が曇り、はやてが聞き返した。

「気のせいだと思いますが… 一度目は“落ちる”のではなく、“登っている”ように見えました」

自分がどうかしていると思い、シグナムが苦笑いを浮かべる。

「すみません、何ともない話でしたね」

「ええよ、気にせんで。じゃあネロさんにそれ渡しといてな？」

「はい。失礼します」

再び一礼し、シグナムが歩き出した。

ふと、窓の外を見るが雨雲も無く雷鳴も聞こえない。

『どうかしているな…』

自分の見た“雷”は錯覚だと思いフツ、と笑うとネロの部屋に向かった…

Episode..19〈失言へ調子に乗るのも程々に〉〈前書き〉

今回はシリアス小説のくせにギャグの話になっています。

作者が書いていたらいつの間にかそうなっていました。
申し訳ございません。

作者は戦闘シーンが書きたいそうですが、そう言うわけには行かないし、このままだとマンネリ化する恐れがある為にやりました。

キャラ崩壊が果てしなく酷いので無視して構いません。

Episode..19〈失言へ調子に乗るのも程々に〉

「…きろ…」

誰かの声が聞こえて来た。

「…ネロ…だ…」

次第に声も大きくなりだす

「起きろネロ、朝だぞ。いつまでも寝てるつもりだ？」

ハッ、として目を覚ますとネロを起こしたのはシグナムだった。

「なんだよ…」

起き上がり彼女を見た。陸士服を来ている訳だが、一つだけ気になる事がある。

それは…

「…なんで剣、持ってたんだよ？」

シグナムは《レヴァンティン》を待機状態からデバイスモードにして柄に手を掛けていた。

既に構えは取っており、いつでもネロを斬れる状態である。

非殺傷設定だが。

「主に貴様を起こすように言われてな。こうして来た訳だが… 中

々起きる気配を見せなかったの…」

「腹が立ったから俺を“落ちない鏑”にしようとしたってワケか？」
ベッドから出ると大きく背伸びを一度… 吐息と共に背骨が鳴る。

「いや、こうすれば確実に起きると思っ…」

「もう少しマシな起こし方あるだろ」

今度は首の骨を鳴らすが、“貴様”と言っている時点で不機嫌なのだと分かった。

昨晚、ネロの部屋に夕食を持って来た時は“お前”と言っていたのだが、今は“貴様”に変わっている。

ヴィータと模擬戦が終わった後に皮肉を言った時も機嫌を損ねてしまい“貴様”呼ばわれされたが、恐らくネロを起こしに来たものの起きないものだから剣を抜こうとしていたのだろう…
流石にそれはないが。

「で、今何時だ？」

「朝の5時前だ」

「5時!？」

残っていた眠気が吹き飛び、思わず聞き返してしまった。

「ちよっ… 早いだろ!？ 5時って、お前…」

激しく狼狽えるネロに…

「六課の一員になる以上は訓練はしておいた方がいい。安心しろ、デスクワークはしなくていいそうだ」

平然と言うシグナム。《レヴァンティン》を待機状態に戻したが、心無しか笑っているよう…

「だから俺…」

「主に感謝する事だな」

ネロは“協力者”なのだが、心の中では『はめられた!?!』と思っ
てしまう。

陸士服を貸してもらい（模擬戦でボロボロ）、食事と寝床も頂いた。
上手い話があるわけ無いのだが、やはり言ってしまった約束（しかも悪魔絡み）なので、断る訳にはいかない…

「分かったよ…」

まだ言いたい事はあるが、少々観念すると上着を羽織り、右手をポケットに入れる。

「じゃあ、はやての所に…」

「主ならまだ寝ているぞ」

部屋を出ようとした所で足を止めた…

「でもあいつに俺を起こすように言われたって…」

「昨夜にな」

当たり前のように言っただけのけるシグナムに舌打ちしそうになるが、

自分を落ち着かせる。

「じゃあ医務室に…」

「シャマルも起きていないぞ」

「おい！ こいつどうするんだよ！？」

行きたい場所と欲しい物があるのに、どちらにも行けない…包帯も手に入らないと言う事で、ポケットから出した《悪魔の右腕》をシグナムに見せつけた。

「包帯もないし、グローブなら吹き飛んじまったからないぞ」

拳を握り、青白い光が漏れ出した後に再び右手をポケットに突っ込んだ。

「ああ、包帯なら昨日の内に貰っておいたぞ」

「…早く言えよ」

シグナムが思い出したように包帯を差し出して来たのを乱暴に取り、右腕に包帯を巻く為に着を脱ぎ、シャツの袖を肩まで捲り上げるのをシグナムが黙って見ていた。

「まだ何かあるのか？」

視線が気になり彼女に言うが、シグナムは目を附せてしまう…

「昨日ヴィータに言われた事だが… すまなかった… 私の責任だ…」

「気にしてないって言ってるだろ」

ようやく口を開いたかと思えば、またその話だった。いい加減にして欲しいのだが、言っても彼女は止めない

「聞け。始めて会った時に私はヴィータと同じ事を…」

「悪魔…」

話し終わる前にネロが言ってしまった。シグナムが声のした方を向くと、包帯を巻く作業も中断して右手を見詰めるネロがいる…
一年も同じ事を続けている為か、肩の下からもう手首の近くまで巻き終わっていた

「事実だろ？」

自嘲しながらシグナムを見るが、彼女は言葉に詰まっていた…
何と言えば良いか分からない。

「違う」と言うべきか… だが否定のしようが無い。

「この話、終了」

ネロは残った右手に包帯を巻き始め、無理矢理話を終わらせる。

紺色のトレーニングウェアに着替えて昨日模擬戦をしたトレーニング場に来たが、まだ誰もいない…

「それで？」

腕組みしてシグナムを見た。

昨日は早く寝たとはいえ、朝の5時に起こされたので無愛想〓不機嫌なようにも思える

「いつもなら寝てる時間だぞ？ 軍隊じゃあるまいし…」

呆れ顔で言ったが、部隊舎から小さな人影がこちらに近付いて来た。

「あ！ シグナム副隊長、ネロさん、おはようございます！」

「おはようございます」

最初に来たのはエリオとキャロ：シグナムと同じ《ライトニング分隊》に属する二人。

元気よく挨拶してきたエリオに続いて言ったキャロの隣ではフリードがパタパタと羽根を飛ばたかせ宙を飛んでいる

「ああ、おはよう。二人とも昨日はご苦労だったな」

シグナムが返すが、ネロは二人と一匹を見据えて…

「よく起きたな」

第一声の言葉がこれだ…

「はい。日課ですし、これも仕事の内ですから」

皮肉の言葉も真面目に返されてしまった。

「よくやるよ… 俺なんてコイツに叩き起こされたってのに」

「な！？ 貴様！！」

左手の親指をシグナムに向けて言うと、シグナムが胸ぐらを掴んで来た

「お前も気を付けろよ？ まあ、その子なら大丈夫だろうけどな…」
「大体いくら言っても揺すっても起きない方が悪いだろうが！」

ガクガクと揺さぶられるネロを見ているエリオとキャロの顔が赤かった。

ちなみに“その子”は言うまでもなくキャロの事である

「コエーよな～？ いきなり斬りかかって来るし…」

「だからあれはお前が悪…！」

「あの一…！」

まだネロを揺さぶっていたシグナムが声のした方を見ると、スバルとティアナが立っていた。

普段の凜とした姿と一変したシグナムにティアナも困惑している

「なっ… スバル！？」

ようやく胸ぐらから手を離すが、シグナムの顔が赤くなっていた。
スバルとティアナが来る前にエリオ達が出たが、この二人と一匹はカウントされていなかったのかどうかは定かではない。

「ち… 違うぞ？ これは…」

「まだ何も言ってますんけど…」

慌てふためくシグナムにスバルが言うと、今度はボフン！、と擬音と湯気が出そうになっていた。

後ろではネロがニヤニヤしながらシグナムを見ている…

「言ったろ？ 簡単に挑発に乗るなって」

ニヤケ顔のままシグナムの背中を見ていると、ワナワナと震えている…

「貴様…」

偉くドスの効いた声がした…

彼女の前にいるフォワード陣の四人と一匹の顔が青ざめ、顔が“恐怖”の色に染められる…

「まあ、これからは…」

突然ネロの頬にシグナムの拳がめり込んだ

「ぐほおっ！！」

勢いのままに後方に倒れるが、まだ終わりではない

「ちよっ！？ 待て… やめろ！ がっ！ いてっ！！ おい、お前！ げほっ！！！」

馬乗り状態で激しい連打が打ち込まれる…

「副隊長！？ あのだ…」

スバルが止めようとしたが、殺意の込められた眼光を向けられ…

「なんでもありません…」

シュンとしてしまい、割って入るのを止めた…

ネロの脳裏には初めてダンテと会った時の記憶がフラッシュバックし… 『あいつもこんな感じだったのかなあ…』 と考えていた

結局、数分後に来たなのによってネロは助けられたとか。

Episode..19〈失言へ調子に乗るのも程々に〉（後書き）

読んで頂いた方、本当に申し訳ございませんでした。

調子に乗りすぎでした…

早く次の話を書けよとか、ダンテ出せよとか言いたい事はあると思いますがネタに尽きたわけではありません。

強いて言うなら、頭がパンクしそうです（ケータイの打ちすぎで）

今週中に次の話（真面目なの）を書くつもりですので、この話は無視してそちらの方を読んで下さい（この話読んでたらそれは関係ないけど…）。

E p i s o d e . : 2 0 \ S h a m B a t t l e 〈模擬戦〉 (前書き)

《黒い騎士》の中に眠る可能性…

戦いの中でその力は目覚めて行く…

Episode..20\Sham Battle〈模擬戦〉\

「それじゃ始めるよ」

朝の訓練を始めて二時間が経過。

フォワード陣にまじってネロも一緒に（半ば無理矢理）やっているわけだが、訓練と言っても基礎的な体力作りと魔力弾をかわすなどのつまらないものばかり…。いい加減愚痴も溢しかけそうになっていたが、後ろで見ているシグナムが睨んでいる為にそれは言えなかった。

言えばまた彼女の鉄拳とレヴァンティンの餌食だろう。

「ネロも準備いい？」

「いつでもどうぞ」

訓練の締めはなのはの撃ち出す魔力弾と砲撃をかわしながら彼女のバリアを貫き、ダメージを与えるかバリアジャケットまで攻撃を到達させるか、制限時間の間彼女の攻撃を耐える事。

「“それ”の調子どうですか？」

隣にいるティアナが聞いて来た。

“それ”とはティアナが以前に使っていた《アンカーガン》の事。

「ああ。“魔法”の使い方も大体分かったよ」

先日の任務の時にティアナが現在使っているデバイス《クロスミラーージュ》でネロは普通に銃を撃つ感覚で魔力弾を撃っていた。

訓練が始まる時にネロがデバイスを持っていないと言うので改造中の《ブルーローズ》の代用として《アンカーガン》使っている。

「でも、すごいですね。あの短時間でここまで魔法を使えるようになったんですし」

無論、最初から魔法が使えたわけではない。

：

アンカーガンを受け取り試しに引き金を引いてみたが、撃鉄が打ち付ける時のカチッ、という銃独特の音がしただけだった。

それもそのはず、カートリッジも入っていなかったから。

ティアナからカートリッジを受け取り、銃身部分を外して中に入れて再び引き金を引くが何の反応もない。

『あれ？』

『出ませんね』

ズバルとティアナが首を傾げ、魔法のアドバイスをしてもらい再び引き金を引くがまた音がするだけ：

『魔力を出すって感じです』

ズバルが言うが何の事かサッパリだ：

『それで分かるわけではないでしょうが！ 意識を集中させてデバイス

に魔力を込めるて言うか： 昨日やった感じでやってみたらどうですか？』

ティアナの説明により言われた通りにやってみると二門の銃口の先に青白い魔力弾が出来上がった。

ちなみにこれが出来たのは訓練を始めてすぐだが、完全に使いこなせたのは十分程後である。

「睨むなよ…」

現実に戻れば、後ろからビビシと感じる視線（殺意）を送っているシグナムがいる。訓練中ずっとこうだ…

：

『そう！ いいですよ、それで撃ち出すんです！』

作り出した魔力弾を撃ち出すべく《アンカーガン》の引き金を引き、青白い魔力弾が射出された

『やりましたね』

『一発撃つのにこのザマだけだな』

魔力弾が飛んで行くのを見送りながら大きく息を吐いた。

《クロスミラージュ》、《アンカーガン》は銃口が二門あるが、二発の弾を撃ち出すわけではないらしい。あくまで縦に並んだ銃口から一発ずつ弾を撃つものようだ。

ブルーローズ
ネロの銃も銃口が二門あるが、これは二門の弾をほぼ同時に撃ち出すもの。

デバイスではない普通の銃としての《ブルーローズ》も使いこなすのに少し苦勞したが、“魔法”はただ撃鉄を起こして引き金を引くのは違うのだから違う意味で苦勞した。

『コツは掴めましたか？』

『いや、サッパリだな』

先程と同じように魔力弾を撃とうとするが今度は出て来ない：

『まあ： 始めたばかりですし』

ネロが引き金を数回引くが音しかない：

『焦らないでやりましょう。まだ訓練初日ですし』

“初日”とは六課の一員に含まれていると言う意味なんだろうが、ネロは敢えて無視した。

『出ねえな：』

銃身部分を外し、中のカートリッジを見るが、まだ空薬莖にはなっていない。つまり魔力は残っていると言う事になる。銃身部分を戻して引き金を引くが、また音しかない。

『ダメか：』

ふと、遠くにいるシグナムを見た：

彼女は人にものを教えるような人ではないらしい。みんなの訓練を見ているだけなのだが、朝の早くから叩き起こされてマウントポジションを取られたネロに闘気（殺気）が込み上げて来る…

『ネロさん？』

ネロはゆっくりと《アンカーガン》をある方向に向けた…
ティアナもその先を見る…

『魔力を…』

ポツリと呟き…

『撃ち出す…！』

『ええっ！？』

銃口の先にシグナムがいる事に気付いたティアナが止めようとする
がもう遅い…

無意識なのか、上達したのかは分からないが青白い魔力弾が収束され、撃ち出された。

その先にいるシグナム目掛けて…

『シグナム副隊長…！』

ティアナが念話を飛ばすが、魔力弾はシグナムに向かって飛び…

『ティアナ？』

それに気付いた彼女がティアナの方を向いた瞬間： 彼女の顔の頭一つ分隣を魔力弾が通り抜けた。

『何考えてるんですか!!』

ティアナがネロに詰め寄るが、彼は呆然としたまま動かない。まさか本当に撃てるとは思っていなかったようだ。

『聞いてるんですか!?!』

それに察しが付かないティアナはまだ詰め寄るが、

『やべ…』

遠くから感じる殺気を感じ取ったネロの口からそう言葉が漏れる。

『シグナム副隊長、大丈夫ですか!?! なんか今、魔力弾が… あれってもしかして…?』

シグナムの一番近くにいたエリオが心配して駆け寄るが、彼女の様子にそれ以上近付くのを止める…

『あの…』

『どうやらアイツは…』

首から下げていた剣のアクセサリーを外す…

『副隊長…?』

『私を怒らせるのが好きらしい…』

アクセサリーの待機状態だった《レヴァンティン》がデバイスモードになり、構えた。

『レヴァンティン!!』

シグナムの呼び掛けに応え《レヴァンティン》が起動し、彼女の身を騎士甲冑を纏わせる。

『それまづいですよ!』

エリオの静止も聞かずに彼女は自分に魔力弾を放ったネロの方に飛び掛かる…

『使い方もロクに分かんないのに…!』

『おい、あれ…』

ネロの指差す方にティアナも目を向ける。

微かに聞こえて来る怒りと殺意の込められた掛け声、振りかぶった剣、桜色の人影…

『シグナム副隊長!?!』

『バカ! 離れろ!』

ティアナを突き飛ばした瞬間、桜色の剣鬼と化したシグナムの愛剣^{レヴァンティン}が地面を切り裂く。

『何しやがる!!』

『それはコッチの台詞だ!!』

間髪入れずに打ち込んで来る太刀をかわすが、完全にブツ飛んでい
るシグナムは聞く耳持たない。

『マジで出ると思わなかったんだからしょうがねえだろ!!』

『レヴァンティン!!』

【Schlang Form】

遂にはカートリッジまでロードし、《レヴァンティン》の刀身が別
れて複数の刃を持つ鞭^{シユランゲフオルム}…連結刃に変わる。

『非殺傷設定とか言うのだから別に当たっても…!!』

『ならこれも問題ないと言う事だな…』

《レヴァンティン》が生き物のようにうねりネロを襲う。

『受けてみる!! 飛竜一閃!!』

中距離攻撃が可能となった《レヴァンティン》の刃がネロに迫るが…

『この…!!』

青白い魔力弾を瞬時に収束させて撃ち出すが、真っ二つに切り裂か
れた。

『うあ!?!』

連結刃をかわすが、執拗な攻め（殺気を込めた）は止まない。
彼女の気を鎮めるのに一番手っ取り早いのは“レヴァンティンの落ちない鏑”になる事だが、それは御免だ。

『おい!?!』

『はあああああつっ!!!!!!!!!!』

天駆ける竜となった《レヴァンティン》の刃がネロに再び迫る中…

『話を!?!』

ネロは《アンカーガン》を強く、しっかりと握った。包帯で隠した《悪魔の右腕》を《アンカーガン》に添えずに…

『聞け!?!!』

風を纏った青白い魔力弾を撃ち出した。

昨日の任務の時に撃ち出したものと同じものだが、今回ののは《悪魔の右腕》を使っていない。

これがネロの初めて使う“魔法”なのだろう。

『なに!?!?!』

魔力弾によって弾き飛ばされた刃が宙を舞う中、ネロはその連結刃を掴み取った。

『あれはわざとじゃねえって…!』

『銃口は私に向けていたのだろうが!!』

【Schwet Form】

否定は出来ない。その通りだから。

言い訳は通用しない。

《レヴァンティン》の刃が連結刃から元の長剣形態シュベルトフォルムに戻ろうとするが、ネロはそれをさせまいと刃から手を放さない。

だが、それが出来ないとなるとシグナムは自らネロとの間合いを詰め、《レヴァンティン》の鞘を振るい、連結刃を掴むネロの右手を弾いた。

《シュベルトフォルム》に戻すと剣を鞘に納め、構えるとカートリッジを排莖し…

【Explosion】

『紫電一閃!!!!』

『またそれかよ!』

刀身に炎を纏った一閃がネロを襲うが、サイドロールでギリギリの所でかわし、シグナムの背後を取った。

『つつ!!』

《アンカーガン》をシグナムに向けて引き金を引くが、またカチツ、と言う音しかせずに魔力弾は出ない…

『げっ!?!』

狼狽えながらシグナムの太刀をかわし、距離を取った。

『おい！ 何で出ねえんだ！？』

『カートリッジ使っちゃったからじゃないんですか！？』

巻き込まれないように木の影に隠れたティアナが叫んだ。

銃身を外して中を見ると、カートリッジは魔力を消費し、空葉莢になっている。

『その“カートリッジ”とか言うのくれ！！』

ティアナがカートリッジを投げるが、シグナムの振るう《レヴァンティン》に弾かれてしまった。

『デメッ！！』

ネロに“魔法”を使わせない為にもそうはさせるつもりなど更々ない。

相変わらず剣を打ち込んで来るのをかわすのが今のネロに出来る精一杯の事。

《悪魔の右腕》と《閻魔刀》は使えるが、これ以上誰かに見られたくはない。離れた所にいるスバル達も此方に来るのも時間の問題だ。

『よし！』

ようやくカートリッジを拾う事に成功し、《アンカーガン》の中に詰め込む。再び青白い魔力弾が銃口の先に収束させるが：

『二人ともそこまで！』

声にハッ、としてそちらを見た。

声の主はなのは： 彼女は昨日の任務の時に見た白いバリアジャケットを纏っている。

『それ以上やったら怪我なんかじゃすみませんよ』

あれだけネロに剣を振るっていたシグナムも動きを止めた。
ネロの話は聞かないでもなのはは別らしい：

『シグナム副隊長、やり過ぎです』

『う…』

感情任せになっていたのに気付き、シグナムが黙ってしまった。

『ネロも銃は人に向けて撃ったりしないでしょ？』

『しょうがないだろうが』

『デバイスじゃなくて本物の銃でもそれ言える？』

それを言われてはネロも何も言えない。

『使えるようになったんだ』

『え？』

『魔法。さっきの見てたよ』

見てたのなら止めてほしかったが、試しに《アンカーガン》を握る

左手に意識を集中すると、魔力弾が収束された。

『さすがだね。短い時間で… レヴァンティンを止めれるくらい強力な魔法だったよ』

『そこから見てたんですか!?!』

ティアナが大声を出した。

全く人が悪いものだ…

『早く止めてくださいよ!』

『ごめんごめん。でも良かったね』

なのはがにつこりと笑う。

その先にいるネロは《アンカーガン》を見詰めたまま…

『これが… “魔法”…』

呟いた…

『は…い、それじゃあ訓練再開するよ…。皆戻って…』

余韻に浸る間もなく訓練が再開された。

丁度スバルやエリオが来た所だったが、心配は無駄な事に終わってしまった。

ネロも“魔法”が使えるようになったと言う事でやらされる羽目になりながら…

：

それから約二時間が経過、現在に至る。制限時間五分以内になのはバリアを貫きダメージを与えるか、バリアジャケットまで攻撃を当てるか奮闘しているのだが、残り時間は四分を切った。

「当たれ！」

ネロが誘導操作弾をかわし、魔力弾を撃つが思いの外なのはバリアは強力で中まで攻撃は達しない。

「クソッ」

トレーニング場の設定は廃棄都市区画、今の所は誰も撃墜されていないが、ティアナ曰く、“五分間耐えるのは無理”らしい。

逃げ隠れするのは嫌だが、それが今やっている訓練の“ルール”だ。ネロは真面目に訓練などしない。いつもやっているのは悪魔との戦いのみで、その中で自分の腕を磨いて来た。強いて言うなら“戦い”Ⅱ“訓練”。

「あれは反則だろ……」

ビルの影に隠れて魔力弾から身を守るが、砲撃と誘導操作弾の雨が迫り、すぐに移動した。

ティアナやスバルも戦っているが、そう上手くはいかない。

以前の訓練の時はチーム一丸で協力しあった結果、バリアを貫いてなのはバリアジャケットまでエリオの《ストラーダ》の攻撃が到達したとの話だ。

「キャロ!!」

「は、はい!」

安全な場所からみんなをサポートしながらフリードに指示を出していたキャロの所までネロが辿り着き…

「《ブーストアップ》とか言うの出来るか!？」

キャロは前に出て戦うのではなく“竜召喚”と言うレアスキルを持つ《召喚魔導師》であり、《ブースト系魔法》を使うのにも長けているらしい。

「バリアが強すぎて俺の“魔力弾”が効かない。ブーストを貫けるやつ撃ち込むぞ」

カートリッジを排莢し、新たなカートリッジを《アンカーガン》に込めた。

「分かりました。ケリュケイオン、ブーストアップ!」

【Boost up “Barret power”】

《ケリュケイオン》のクリスタル部分にピンク色の英字が浮かび上がり、キャロの足元に《ミッドチルダ式魔方阵》が展開され…

「よし…」

《アンカーガン》に魔力が注ぎ込まれ、只でさえ強力な魔力弾の威力が更に上がる。

「かなり強力になってますんで…」

「気をつけろって?」

暴風が吹き荒れる魔力弾が暴れるのを抑えながらキャロを見た。

『どうもこの子は俺の事を心配しているらしい』と思ったが、それは不要だ。

ネロが無茶をやるのはいつもの事…

「はい!」

風が吹き荒れているので片手でバリアジャケットの帽子を抑え、もう片手で目を守るキャロが声を掻き消されないように言うのを見てネロはフツ、と笑ってしまった。

「どっかの誰かさんとは大違いだな…」

遠くでフォワード陣の模擬戦をモニターで見ているであろうシグナムの事をぼやきながら狙いを定めた。

まだダメージどころかバリアが無傷のなのはに照準を定めて。

「行くぜ…!」

魔力を込めた…

「Fire!!」
ファイア

初めて使った“あの”魔法を使った。

「ぐっ!!」

「ネロさん、大丈夫ですか!？」

《チャージショット》をも上回る反動により仰け反るところか後方に飛ばされてしまい、キャラがネロに駆け寄った。

「何ともない」と言っても彼女には関係なく気に掛ける。

「どうだ、当たったか!？」

「えと… あれです!」

まだ魔力弾は命中していない。
だが、それを確認するなりネロは走りだした。

「ネロさん!？」

「隠れてろ! 遠いって言うてもなのはが撃ってくるぞ!」

彼女も強力な魔力弾が迫っているのに気付き、ネロに向けて誘導射撃^{シューター}魔法を撃って来た。

《アクセルシューター》よりも弾数も誘導精度も上な為、それをかわし、時には撃ち落としながらなのはに駆けて行く。

『みんな離れて下さい! 大きいのが行きます!』

ティアナ、スバル、エリオの頭の中にキャラの飛ばした念話が聞こえて来た。

『キャラ?』

『この魔力反応…』

『ネロさんですよ!』

シグナムに向けて撃った魔力弾を近くで見ていたエリオの声がフォワード陣の頭の中に響いた。

ティアナもそれは見ていたのだが、迫り来るのを見たのはこの中ではエリオだけ。

『ブーストで威力も上がってます!』

『下手したら僕達も巻き込まれますよ! 早く隠れて!!』

フォワードの中でも年下のキャロとエリオの二人がかなり慌てていた。

『あれそんなにヤバいの!?!』

『そうですよ! でなきゃシグナム副隊長もあんなに怒りません!』

ティアナの問いにエリオが即答したが、ブーストが加わったネロの魔力弾はもう着弾寸前…

『来ます!!』

すぐにエリオ達三人はビル影に隠れ… 魔力弾がなのはのバリアに着弾し… その瞬間凄まじい暴風が周囲に吹き荒れた。

「ううううっ…くっ!!!!」

なのはもバリアの強度を上げるべく魔力を注ぎ込むが、徐々にひびが入り出す。

「レイジングハート!!」

【All right, my master】

彼女のデバイスから電子音を放ち、何とか踏みとどまった。

「ネロは!?!」

此方に走って来ていたネロを見るが、まだ彼との距離は開いている。キャロのブーストを使ってまた“あれ”を撃たれる事はないが、このままにしておくのは良くない。先に叩いておかねばならないと判断し、彼女の周りに桜色の魔力弾が配置され：

「デivainシューター!!!!!!」

【Divine shooter】

三十以上ある誘導弾がネロ目掛けて撃つが、彼の動きは止まらない。臆する事などせずに《アンカーガン》を使って応戦する。

「そんな!?!?!」

遂になのはの真下まで辿り着き跳び上がった。

だが、なのはのいるのは地上六メートルを越える。

いくらネロの身体能力が高いと言っても届く距離ではないが：

「Air Hike!!」
エアハイク

空中に身を乗り出したネロの足元に《ミッドチルダ式》とも《ベルカ式》と違う魔方阵が浮かび上がり、それを踏み台にして更に高く跳び… 拳をバリアに打ち付けた。

「うううおおりいいやああっ!!!!!!!!!!」

渾身の力を込めた右拳の連打に時折回し蹴りも組み合わせたラッシュにより、バリアに入ったひびが広がって行く…

「ううっ… くっ、うっ！」

「あああああー！ー！ー！！！！！」

強烈な拳と蹴りの連打によりひびはバリア全体に広がるが…

【Acceler shooter】

レイジングハートが《アクセルシューター》を発動させ、辺りに複数の魔力弾が広がり、ネロに迫ったその瞬間… ネロの瞳が赤く染まる…

【Shoot!】

「チィッ！」

桜色の魔力弾が着弾したかと思えたが、ネロはというと様子はない。

《アクセルシューター》とぶつかった青白い“何か”がガラスのようには砕け散っているが、ネロは空中で新しいカートリッジを込め、なのはに狙いを定めて打ち出した…

「じゃあ朝の訓練はこれまで。みんなご飯にしよう」

「」「はい、ありがとうございました!」「」

フォワードの四人は敬礼するが、ネロは下を向いたまま何も言わなかった。

「どうしたの?」

心配してなのは聞いて来た。

「さっきのやつ…」

ネロが腑に落ちない様子でやつと口を開いた。
先程の訓練の結果なのだが…

「勝ったのに嬉しくないの?」

バリアを貫き魔力弾を撃ったネロ達、フォワード陣の勝利で終わった。
た。

最後の魔力弾はなのはに当たらず、彼女の顔のすぐ隣を通り過ぎた

のだが。

「確かにあんな無茶な戦い方は良くないけど、最後のあれ… わざと外したんでしょ？」

あの距離ならば外す事… ネロならば尚更だが、あの魔力弾を撃った時のネロの強張った顔を見れば可笑しかったのは明らかだった。自分に向かって撃たれようとされていたのはが一番良く知っている。

「俺は…」

なのはに目を会わせないまま包帯を巻いた右腕を見た。

《アクセルシューター》と相殺させた青白い“何か”は魔法ではない… あれはネロの中にある悪魔の力を瞬間的に引き出したもの…

「ほら、何をやっている」

ネロの頭に固い物が当たり、鈍い音がした。

「痛って！」

振り向けばそこにいたのはデバイスモードで鞘に納まったままの《レヴァンティン》を手にしたシグナム。

大事な愛剣をそんな事に使うのはどうかと思う…

「何すんだよ…」

「らしくないな。いつものように軽口でも叩けないのか？」

頭を擦りながら言うが、今はそんな気分ではない。

「いいだろ…」

シグナムから目を背け…

「「別に」…」

そう言うのが分かっていたシグナムの声とネロの声が重なった。
シグナムを見れば、彼女は不敵にフツ、と笑っている…

「すぐにそんな事を言うのはお前の悪い癖だな」

そう言われてしまい、ネロが舌打ちした。

「それと舌打ちと溜め息もだ」

カチンと来て彼女に詰め寄りそうになってしまったが…

「それでこそ“いつも”のお前だな」

言われて詰め寄ろうとしていた足を止めた。

シグナムのペースに飲まれていたが、どうやらネロを励ます代わりにやったらしい。二時間前の細やかな仕返しにも思えたが。

「さあ、朝食でも取りに行くか」

「おい…」

後腐れなく隊舎の方に歩き出したシグナムを見送り、『はやてと同

じで分からないやつだ』と思ったが、なのはやスバル達と共に腹を満たすべく、朝食を取りに隊舎の食堂に向かう…

E p i s o d e . : 2 1 \ M o r n i n g ^ 一 日 の 始 ま り < \ (前 書 き)

朝の始まりとは一日の始まり…

それは平凡な一日の始まり…

Episode..21\Morningへ一日の始まり\

早朝の訓練を終えて機動六課部隊舎の食堂。

「あゝ、お腹空いた」

「あんたいつでもそれよね」

現在朝の七時を既に回り、スバル達が朝食を取りに来た。
彼女達以外にも他の部隊員達もいる。

「いいじゃん。何時もの事なんだしさ」

スバルが朝食を乗せたトレイを持ち、数人座れるテーブルのティアナの隣に座った。

「ホント… 訓練校からの付き合いだけどよく食べるわねー」

「えへへ。」

スバルの食事は並みではない。

ゆうに常人の数倍の量の料理がトレイの上に乗っていた。

「でも、さっきのすごかったよね。ホントになのはさんのバリア貫
いちゃったし」

「まあね。キャロのブーストがあったけどやってのけちゃうんだか
ら」

話題は先程の訓練の話。

ネロもフォワードに混じって参加したわけだが：

「でも最後のはちょっとやり過ぎだったよね？」

「そうね： あれじゃネロさんこの前の私みたいに：」

スバルが少し顔を引き吊らせ、ティアナの表情が曇る

「あ： ごめん：」

「いいわよ、あれは私が悪かったんだから」

遡る事十日程前： ティアナが模擬戦で訓練通りに戦わなかったことと、無茶な訓練をしていたことでなのはに報復を受けたのを思い出させてしまったと思いスバルが謝った

「あれ、そう言えばネロさんは？」

「チビッ子達と一緒に後から来たはずだけど：」

「ネロさんでしたらあそこに：」

辺りを見回しネロが何処にいるか探しているとエリオがスバル達の所にやって来た。

後ろにはキャロとフリードもいる。

「あそこ？」

言われるがままにエリオが顔を向けている先を見た。

そこは：

「…なんであんなトコにいるの？」

ネロが座っていたのは食堂の端の席。二人しか座れない小さなテーブルで一人寂しく食事をしている。

「食事を受け取ったらすぐにあっちの方に行っちゃったんです」

「一応誘ったんですけど断られて…」

「キュー」

チビツ子の二人と小さな竜が申し訳なさそうにしていた。

「一人で黙々と食べてるよ」

「しょうがないわね…」

スバルが遠くにいるネロを見ているとティアナが立ち上がった

「ティアナ？」

「ちょっと行ってくるわ」

「行ってくるって…」

「ネロさんのトコよ」

それを聞いた瞬間、スバルがガタン！、と音を立て席を立ち上がった

た。

「ずるい!!」

「何がずるいのよ!! てか、離れなさい!!」

血相を変えて抱き着くスバルをティアナは引き剥がそうとするが、やたら騒いでいるのにエリオとキャロどころか周りの部隊員も見ていた。

「ティアがネロさんを狙ってる!!」

「別に狙ってないわよ!! これから一緒にやってかなくちゃいけないんだし、一人にさせるわけには行かないから呼びに行くだけよ!!」

引き剥がそうと抵抗を続けるが力はスバルの方が強い。
腰に絡み付いた両腕がギリギリと締め付ける。

「うそだ!!」

「うそじゃないわよ!! ちょっと、苦し…」

エリオとキャロがスバルを止めようとするが、10歳の子供二人では無理だ。

スバルに何を言っても聞く耳持たない状態でティアナが一つの提案を持ち掛けた。

「じゃあ… あんたが行って来なさいよ…」

「えええっ!?!」

苦し紛れに出した案にスバルの手が緩んだ。
言われた途端にスバルの顔が赤くなる

「そんなに言うならアンタが行ってくればいいでしょ? 私はこちらにいるから」

「ちよっ… ティア〜!」

ようやくティアナから離れたかと思ったが、今度は座ったばかりの彼女の肩に抱き着いた。

「一緒に来て〜」

「まったく… 馴れ馴れしいくせにこういうのは気が小さいんだから…」

スバルは前向きで人当たりのいい性格だが、意外と内気な所もあり、付き合いの長いティアナは顔に手を当て溜め息を吐いた。

「分かったから手を離しなさいよ… たくっ…」

一度座ってしまったがまた立ち上がり、二人でネロのいるテーブルに向かった。

「僕達も行きましょうか?」

「そう何人で押し掛けたら向こうも迷惑よ。アンタ達はそのままでいいから… まだ食べてないでしょ」

エリオとキャロも一緒に行こうとしたが、ティアナの言った通りまだ二人と一匹は食事に手をつけていない

「じゃあ行ってくるから」

ティアナとスバルの後ろ姿をエリオ達が見送り…

「失礼します」

ネロがいる所にやって来た。

大きな食堂といっても来るのに時間はかからない。

「何かようか？」

ネロはフォークを置き、手を止めてティアナとスバルを見た。

スバルは若干緊張していたが、ティアナはフォークを持っていた包帯を巻いた右手を見た後に目を戻し…

「一緒に食事でも…」

「断る」

言われる事が分かっていた為、言い終わる前に簡潔に返答した。

さっきもそくさと端のテーブルに向かう時にエリオとキャロ言われたが、それも振り向かないまま断った。

「でも…」

「断る」

更に早い段階で断る

「一人で食べてたら寂しいですよ？」

「別に寂しくないね」

ティアナの後ろにいたスバルが出てくるが、それもすぐに返してフオークを手に取り食事を再開した。

「ご飯はみんなで食べた方がおいしいですし！」

「もう旨いよ……」

いい加減しつこいのにうんざりして返事をするのにも面倒になってきたが、突然テーブルに手を叩き付けられた事によりネロはやむなく食事を中断して顔を上げた：

「私達はチームなんですから一人だけ仲間外れみたいな事させるわけにはいかないんです」

「そんなの慣れてるよ……それよりチームって……」

「良くありません！」

ティアナが大きな声を出したのにネロは目を丸くし、隣にいるスバルはびくつき恐る恐る声を掛けた

「ティア……」

「さっきもあんな無茶やらかして本番で大変な事になってからだったら遅いんですよ!？」

「ティア〜…」

「何よ!!」

「みんな見てるよ〜…」

食堂にいる部隊員全員がこちらを見ていた。

ようやくそれに気付いたティアナが我に帰り…

「と、とにかく来て下さい!」

どさくさに紛れてネロのトレイを持ち、自分のいたテーブルまで駆けて行った

「あいつ、いつもああか?」

食事を取られてしまったので仕方無くフォークを持ってネロが立ち上がりながらスバルに聞くが、彼女も困っていた

「いえ、そうじゃないんですけど…」

頬を掻いて何と言おうか考えていたスバルの隣を素通りしながらネロが歩き出し…

「あ! 待って下さいよ〜、ネロさ〜ん」

すぐにその後をスバルが追いかける

「あの… そのトレイ…」

「もしかしてネロさんのですか？」

ティアナがエリオ達の所に戻って来た：

「しょうがないでしょ、こうでもしなきゃあの人来ないだろうし」

ネロのトレイを持って。

自分の通った後を見れば、銀髪の青年と青い髪の少女がこちらに歩いて来ている。

「しくじった…」

ティアナの微かな呟きがフリードには聞こえたが、よく意味が分からずに

「キュク〜？」と鳴き、首を傾げた

談笑や雑談していた部隊員達も歩く銀髪の青年を見ていた。

一部には昨夜見掛けた者もいたが、改めてその姿に目を見張った。

180以上ある長身、整った端正な顔立ち… 歳はまだ19〜20に見えるが実際はもっと若い。

その中でも何より目を引くのが：

「俺のメシ取るなよ」

右腕に巻いた包帯：

指先から肩の所まで巻かれたそれは、下にあるであろう肌を見せないように隙間なく巻き付けてある。

「すみません…」

右手をテーブルに付きながら座ったネロをティアナ達は見詰めた…
包帯で隠した右腕…《悪魔の右腕》に

「まあいいけど…」

自分のトレイを引き寄せネロは食事を再開した。
取り返したら元のテーブルに戻ろうかと思ったが、また来られたら面倒だったのでそれはよした。

「私もびっくりしたよ。ティアの行動力」

「あんたよりはマシでしょ」

「ほめられた」

「褒めてない！」

二人のやり取りを無視してネロは黙々と食事を続ける
うるさいのは苦手なので早くこの場から立ち去りたい気持ちで彼は
いっばいだ。

『スバルのやつ… ほんととは私一人で行くはずだったのに…!!』

ティアナが手に持ったフォークを握り締めギリギリと音を立ててい

るのに気付いていたのはフリード一匹だけだった。

「どうしたの？ フリード？」

「具合でも悪いのかな？」

キャロとエリオが心配しているがそうではない。

沸々と込み上げる闘志と嫉妬を感じ取って震えているわけだが、話せないうえに、話せたとしても言えないだろう。

『ちよつとスバル！』

『なに？』

食事を再開したティアナがスバルに念話で話すが、イラついている

『ネロさんと何話したのよ！？ こっち来る時に話してたでしょ！』

『大したことじゃないよ。自分は協力してるだけとか、勝手に加えるとか言ってたくらい』

能天気の話すが、まだティアナは詰め寄る

『本当でしょうね！？』

『本当だよ。ティア焼いてんの？』

『焼いてない！！』

『やっぱり狙ってた？』

『うっさい!!』

無理矢理念話を終わらせたが、ティアナの様子からエリオ達もフリードが震えていた理由に察しがついた。
口で話していたのではないが、表情に出ているのだから。

「何だ？」

「え!？」

視線に気付き、ネロがティアナを見た。
突然聞かれたので彼女も言葉が見つからない：
スバルに嫉妬していたのもあるが、今見ていたのは彼の右腕

「怪我されてるんですか：？」

昨日初めて会った時から右腕は袖を伸ばし、グローブをしていたのでネロの右腕がどうなっているのかは知らない。
任務が終わった後もボロボロになったコートで隠し、

「怪我はしていない」と言っていたが：

「あー：」

今度はネロの方が言葉に詰まる。

《悪魔の右腕》などと言えるわけがない。
他に何か言い訳を探したが：

「これは：」

何もない。

刺青をしているとでも言おうと思ったが、返って見たがるかもしれない。

酷い火傷をしているとでも考えたが、それは怪我以上に気まずくなる。

そうこう考えている間に：

「昨日のヴィータ副隊長とした模擬戦の時ですか？」

思いも掛けない所からその言葉が出て来た。

「え…」

『馬鹿スバル!!』

即座にティアナが念話を飛ばす

『なんでその話すんのよ!』

『でもみんな知ってるし…』

『副隊長が負けちゃった話なんかするもんじゃないでしょ!？ ああ… やっぱり見てる…』

他の席でシャルと朝食を食べていたヴィータがティアナとスバルを睨んでいた。

よく見れば二人の足元に青い大きな犬（狼）がトレイに乗った料理を食べている

『やばく…』

『あんたのせいだからね…』

ヴィータの目を見ればこの後の訓練のメニュー量が増えるのは明らか

『え？ 私！？』

『私は副隊長いるのわかってたから言わなかったのにあんたが話しちゃったからじゃない！』

「おい…」

念話で話している間にネロが聞いて来た

「何ですか？」

「何処まで知ってる…」

彼はフォークを置き、真剣な目でティアナとスバルを見詰める

「その… 昨日の模擬戦の事ですか？」

「そうだ…」

黙って食べるか話しても適当にしか返さない男が急に真顔になっていたのに一同は焦った

「最初から見てたのか…？」

左手で右手で作った拳を握り締める…

昨日はコートと陸士服の袖が長かったから良かったものの、今はトレーニングウェア：フォワードのみんなと同じ紺色の半袖。スバルとティアナは白の半袖なのだが：

「えっと… その…」

感じるヴィータの視線を気にしながらなかなかティアナは言おうとしない

「言え…！」

感じる視線を上回るネロの碧眼から放つ鋭い眼孔によりビクツ、となったがすぐに口を開いた

「見てたわけじゃありません： お二人が模擬戦をした時は部隊長に誰もトレーニング場に近付かないように言われていましたんで…」

静かに喋りながら時折、ネロの右腕を見た

「他の部隊員も見ません。ただ、すごい音がしましたし、副隊長の様子が昨日からおかしかったから…」

昨日の任務の時に自分に包帯を貸してくれたが、抱き抱えられていた時にグローブと袖の間から漏れていた青白い光：

「ネロさんが副隊長の少し先に隊舎の中に入って来ましたが： その時に右腕を押さえてたんで模擬戦で怪我をしたんじゃないかと思っただけです…」

「…そうか」

話終えたティアナを見て一度安堵する

「あの…」

「古傷だ…」

「え…？」

言おうとした前にネロが小声で聞こえる最低限のボリュームで言う

「古傷だよ…」

言うなり食事を再開して、それが終わるとすぐに立ち去ってしまった…

『嘘じゃないしな…』

一年前… 最愛の人を守る為にネロは右腕を負傷した。

怪我事態は軽傷であったが、それが原因で右腕が悪魔化…《悪魔の右腕》となった

《悪魔の右腕》になった以降も右腕には包帯を巻き、グローブやギプス等で隠して来た

『はやての所にも行くかな…』

食堂を跡にしてネロははやてのいるであろう部隊長室に向かう

朝日と小鳥の囀りが今日の始まりを皆に知らせながら…

E p i s o d e . : 2 1 \ M o r n i n g へ 一 日 の 始 ま り \ (後 書 き)

さあ、第21話まで来ましたね。

現時点はS t r i k e r Sで言うところの9話と10話の間ですね…

自分の頭の中ではネロはダンテより頭半分背が低いという設定（ダ
ンテは190以上、ネロは180～190）です。

前にも書きましたが、ネロは17歳と言う設定になっています。

それでは次回もお楽しみに。

E p i s o d e . : 2 2 \ D e s i g n e r 〈創造する者〉 (前書き)

《赤の女王》と《青い薔薇》の帰還まで残り数日…

戦いの日は刻一刻と近付いていた…

Episode..22 Designer〈創造する者〉

食堂を出たネロははやてがいるであろう部隊長室に向かった。
途中ですれ違う部隊員は彼に見とれていたが、見慣れない顔だから
というわけではないだろう

『さてと…』

歩く事、数分後…

「はやて、いるか？」

部隊長室の前でドアをノックするが返事は返ってこない。

「おい」

再びノックするがやはり返ってこない。

『居ないのか？』

「ネロさん。」

はやてが居る気配がない為、そこから去ろうとするが、誰かに呼び
止められた。

聞き覚えのある明るい舌足らずの声
振り向けばそこにいたのははやての部隊長補佐であり、家族でもあ
るリン

「はやてちゃんが呼んでますよ。」

自分が呼びに来たのに肝心のはやてはいなかったが、向こうから呼びに来たようだ

「俺も会いに行こうと思ってた所だよ」

「みたいですな。」

リインと一緒に歩く（リインは飛んでいるが）ネロの姿にまたしてもすれ違う人は皆、二人（一人と一騎）を見ていた
視線が姿だけでなく右腕にも注がれていたのは彼にとって堪えたが、ここで気にしていたら余計に辛くなるように思え、なるべく人と視線を会わせないようにし：

「着きました。」

やって来た部屋のドアが開き、リインとネロが入ると居たのは探していたはやてとブラウンの髪に眼鏡を掛けた女性：

「あ、おはようございます。昨日はよう眠れました？」

はやてが挨拶して来たが：

「シグナムに叩き起こされたよ：　しかも後でボコボコにされた」

「あはは。そりゃ大変でしたな」

「笑い事じゃねえよ、斬られそうにもなったんだぜ？」

「でもそれ、ネロさんが悪いんやろ？」

知っていたのだろうが、黙ってしまったネロを見てはやてが悪戯っぽく笑う

「まあ、お喋りはこのくらいにして呼んだワケなんやけど： シャーリー」

「はい！」

二人の会話が終わるのを待っていたシャーリーと呼ばれた眼鏡をかけている女性が敬礼する

「メカニックデザイナーのシャリオ・フィニーノです。宜しく願います」

ネロは敬礼して挨拶してきた女性を黙って見ていた。

「気軽に“シャーリー”って呼んで下さい」

「こっちこそよろしく」

シャーリーが笑みを浮かべて言うが、そこはスルー。

「用件は？」

はやての方を向き、自分と呼んだ理由を尋ねた。

ネロは人数の多い所にいるのが嫌ではやての所に行こうと思ったが、向こうから御呼びがかかったというのには勿論何かあるはず。

「そうそう、預かってる剣と銃の“デバイス化”の事で御呼びした

んです」

シャーリーが浮かび上がったキーボードを叩くと、出て来た前の画面にはネロの剣が映し出され…

青い光を放つ大きな試験管のようなものの中に銃が出現した。

試験管に近付いて見た《ブルーローズ》は元の形と一緒だが、画面の中の《レッドクイーン》はシグナムとの戦いで刀身が叩き折られていた。

幸い折れたのは切っ先寄りの方であつたが…

「改めて見るとハデにやられたもんだな…」

折られた時は夜だったので暗かったが、映っている自分の剣は白い背景の前にあるので破損状態がよく分かる。

折られた部分は溶解されたように溶けていた。

「そちらは本局の方で修理とフレームの強化、及び改造中です。終わるに一週間はかかるそうで…」

画面を見詰めたままのネロを見てシャーリーが喋るのを中断した。自分の武器があんな事になっていれば彼も落ち込んでいると察しての配慮だ

「一週間…」

呟いたネロの後ろ姿にはやて達は慰めの言葉を掛けようとした時、ネロが

「やれやれ…」と言った様子で首を横に振りながら小さく息を吐いた。

「あの…」

「一週間すれば直るんだな？」

シャーリーが何か言おうとしたが、ネロは特に気にした様子ではなかった。

「はい… それだけあれば…」

シャーリーがキョトンとした顔をしていたが、その言葉を聞いて「じゃあいい。」と言って、大きな試験管の中にある銃を見た。

「でも早くしてくれよ？ あれがなかったらキツイからな」

左手を試験管のガラスに当て、顔をはやて達の方に向ける。

「必ず。それとそちらの銃の方でしたら後四日もあれば出来ます」

ネロの顔を見たシャーリーが自信ありげに言った。

「せやけどやっぱり才能あったみたいやなあ。早速魔法使えるようになったらしいやん？」

「みたいだな」

「聞いたで。なのはちゃんのバリア壊したんやろ？」

「ティアナに無茶やるなって言われたよ」

頭を掻きながら面倒そうに応えた。

ネロは嫌な事を思い出したような顔をしている。

バリアにダメージを与えられたのはキャロの協力があったし、《アンカーガン》はティアナが貸してくれた。最も、そのティアナに先程怒られたばかり。

しかも、一瞬とは言え“悪魔の力”も使ってしまった。

「確かに無茶はよおあらへんよ。あの子もついこの前やかしたばっかやしな？」

はやてが隣にいるシャーリーを見た。

彼女もそれに苦笑してしまう。

「そうですね… やっぱり自分がやっちゃったからそういうのに敏感なんじゃないですかねえ？」

二人のやり取りを見ているネロには何の事か分からなかった。

「何だ？ あいつ何かしたのか？」

「あのですね…」

頭の上に“？”が出ているネロの前に来てリインが耳打ちする。

「マジで…？」

「はい。」

十日程前にあった事を聞いたネロは驚き、そして引いていた…
今度ははやてとシャーリーを見るが、二人とも何と言っているのやらというカンジだ。

「人の昔話とかあんまするもんじゃないぞ」

「いえ… あの時のティアナを見てたらこうするしかないって思っ
て…」

八年前になのはの身に起きた事とティアナの事にも驚いたが、それ
よりも気になったのが…

「それよりアイツ、結構おつかねえんだな」

「なのはちゃんの事？」

「他に誰がいるんだよ」

なのはがティアナにした事だ。
あれはティアナの魔法がどれだけすごいものか教える為にした事だ
が、正直やり過ぎだと思った。

「人は見掛けによらないって言うのは本当だな。顔はああなのに」
はやて達三人（二人と一騎）は同僚にして部下、上司がそう言われ
ているのにまた苦笑する

「くしっ！」

「どうしたの、なのは？ 風邪？」

「いや… ただのくしゃみ…」

食堂にいるのはがくしゃみをし、フェイトが心配していた。

「誰か噂でもしてるのかな？」

「多分…ね… くしっ！」

噂と言うよりも悪口に思える…

「まあ、そう言わんといて。ティアナが心配やったからやったんやし、一番辛かったんはなのはちゃんなんよ？」

自分のようになってほしくなかったからこそ、なのはがそうした事にはやてがフォローする

「ネロさんももう無茶なんかしちや駄目ですよ？」

リインも言うが、ネロは

「はいはい…」と適当に返した。

「それで改造って言ってたけど、どんな事するんだ？」

「ベースになっている元の銃から簡易デバイス式にやって行きます」

「簡易？」

聞いてみたがよく分からない。

「今ネロさんが持っているティアナの《アンカーガン》も簡易デバイスです」

「これか？」

ネロが腰に差していた《アンカーガン》を抜いて指先で回す。

「彼女が自分で作ったそうですよ」

「へえ： 自分で作ったのかあいつ？ 俺と一緒にだな」

指先で回すのを止めてグリップを握る。

「一緒にって：」

「俺も《ブルーローズ》は自分で作ったんだよ」

《アンカーガン》をまじまじと見詰めながら言った。
それを聞いてシャーリーも驚いたのだろう。
椅子から立ち上がり、声を上げる。

「作った!？」

「うわ： びっくりした：」

いきなりガタン！、と音を立てたのにネロも驚き、ようやくシャーリーを見た。

「この銃、ご自分で作ったんですか!？」

「いや：“つくった”って言っても改造だぞ？」

詰め寄るシャーリーにネロも引きぎみになる。

「でもすごい銃ですよ！？　これ！！」

浮かび上がった画面を操作すると、青い光が消えて中からネロの愛^{ブルー}銃^{ローズ}が出て来た。

シャーリーがそれを取り…

「昨日少し見させてもらいましたけど、ホントすごいです！　リボルバータイプの銃なのに銃口が二門ありますよね？　ティアナの《クロスミラージュ》は私とリイン曹長で作ったんですけどね…」

突然シャーリーが興奮して饒舌に喋り出した

「おい…」

「あれも銃口は二門にしたんですけど、この銃は一度に二発の弾丸が撃てるようにしてありますよね！？　これって一度に撃ち出す二発の弾丸でターゲットによりダメージを与えるって事で…」

取り敢えず声を掛けるが耳には入っていない…

「あ！　でも、計算してみたら反動が大きすぎて普通の人には使えないような物だってわかったんですけど…」

「おいて…」

「名前は《ブルーローズ》って言ってましたよね！？　ご自分で作

ったって事はやっぱり名前もご自分で付けたんですか？ 意味は“青い薔薇” って意味ですけど…」

「シャーリー！」

ネロが呼んだ彼女の愛称が耳には入ったのか、やっとシャーリーが現実の世界に戻って来た。

「すみません…」

我に返ったシャーリーが顔を赤くし、シュンとしてしまった。

「また人は見掛けに寄らないってのが分かったよ…」

一度溜め息を吐き、《アンカーガン》を腰に差すと左手でシャーリーが持っている《ブルーローズ》を受け取った。

「元にした銃がどんなだったかは覚えてねえよ。改造しすぎて忘れちゃった」

愛銃の《ブルーローズ》を見回す

「銃口が二門あるのは確かにダメージをより多く与えるってのもあるが… 二発とも同時に出来るってワケじゃない。僅かに時間差をつけて一発目で敵の装甲を破壊… 悪くても亀裂を入れて…」

銃の説明をしながらリボルバー部分を外し、シリンドラーの中を見るが弾は入っていない

「時間差のある二発目で装甲を貫通…」

リボルバーを戻し、撃鉄を起こす：

「目標を破壊す…」

「わー！！ ストップ、ストップ！！」

銃口を壁に向くて引き金を引こうとした時、突然シャーリーに止められた。

「なに慌ててんだよ…」

何故そんなに慌てているのか分からない

「弾は入ってないんだし…」

「いや、でも…」

シャーリーの様子が何処かおかしいのにネロとはやて、リインも首を傾げる

「あ！ ほら、今は改造中ですし！」

やたら焦っているシャーリーに

「ああ： なるほど…」と言って《ブルーローズ》を返した。

彼女も受け取るとガラスのの中に戻し、再び青い光が灯った。

「危なかった」

「何か言ったか？」

「いえ、何も！」

額の汗を拭いながら小声で言ったのが聞かれてしまい、またあせっている。

どうも変だと思ったが、《ブルーローズ》から離れてはやての前まで行く

「本当にあいつで大丈夫か？」

「安心して下さい。シャーリーは“デバイスマイスター”の資格も持つとるし、こういうのにかけてはスペシャリストですよ？」

はやてが自信ありげに胸を張って言ったが不安だ。

「でも、やっぱりネロさんが自分で作ってあげたんですね。ブルーローズとレッド…」

《ブルーローズ》の前にいたリインがネロとはやての前まで飛んできたが言葉に詰まってしまった。
難しい名前ではないのに

「いや、レッドクイーンは俺が自分で作ったわけじゃないぞ。俺専用で作ってもらったんだ」

画面に映る折れた愛剣を見ながら今度は《レッドクイーン》について語りだす

「柄を捻ってエンジンを起動…更にレバーを引くことで搭載された《イクシード》システムを発動させて斬撃を上げる…」

画面から目を離し、はやてトリインの方を見た。

二人とも静かにネロの話を聞いている

「ただ《レッドクイーン》は極端に出力を最大まで上げてるから俺以外のやつは使えないけどな」

《ブルーローズ》をガラスの中に戻し終えたシャーリーの方を見ながら腕を組む

「あっちの終了状況はどうなってる？」

「昨夜の内に本局に送られましたが… 報告ではその燃焼機関と思われる部分は無傷でしたからそこは問題ありません。改造よりも刀身の方が時間が掛かるそうで…」

画面を操作すると、新たに映し出された画面に修理状況と思われる文章が出て来るが、ネロには何と書かれているのか分からない。

「民間協力者の質量兵器をデバイスに改造。要請者、時空管理局機動六課部隊長、八神はやて。修理及び改造期間は…」

文章を読んでいたはやてが読むのを中断した

「シャーリー？ 終了予定日が四日って書いてあるんやけど？」

それを聞いた瞬間シャーリーの体がビクツ、と反応した。

「えと… 私が調整してあげようと思って！ それに三日足して一週間って事です！」

先程からやたら彼女の様子がおかしいのにネロとリインも首を傾げた。

「あー、なるほどな。実際にネロさんに合わせたろう言う事やな？」

「そうです！」

はやてが合点がいったように左手と右手を合わせるが、ネロとリインは何か彼女の引き吊った笑みに違和感を感じた。

「ということで《ブルーローズ》と《レッドクイーン》の事は私に任せて下さい！」

「あ…ああ…。それじゃ頼むよ」

まだ焦ったままのシャーリーに武器もといデバイスの事を任せてはやて達と一緒に部屋を出た。

「危ない危ない…」

部屋で一人きりになったシャーリーが額の汗を拭い、安堵の息を漏らす

「ああ、それと言い忘れたけど…」

「きゃあああああっつ！！！！！！」

突然入って来たネロに心臓が飛び出しそうになる程シャーリーが驚き、飛び退いた

「びっくりさせないで下さいよ…」

「こっちがビビったよ…」

明るいのかうるさいのか激しい女性だとネロは思ったが、シャーリ―はまだ心臓がバクついている

「あれ… それは…？」

「え？ あ…！」

先程とは違う画面が出ていたので指差すと、シャーリーが慌ててそれを消した。

「《ブルーローズ》の改造データとかか？」

「はい！」

初対面と違い、さっきからこの調子だ

「なんか“AI”とか書いてたように見えたんだが…」

「気のせいです！」

「そうか…」

改造の事は任せてあるのでそれ以上聞くのは止めた

「何かあったら言えよ？ もとは俺が作ったんだし」

「はい！ そうします！」

「後、出来たら《レッドクイーン》の出力を上げてくれ。今のままじゃ厳しくなりそうだから」

“この子達”の事は任せて下さい！」

要件は済んだので部屋を出ようとした所で足を止めた

「この子達？」

「こっちの話です！」

『変なやつだな…』

無言で手を上げて出て行ったネロの後ろ姿を見送り、シャーリーは今度こそ彼が戻って来ないのを確認すると、浮かび上がったキーボードを打ち始めた。

「やっぱり勝手にやつちゃうのはまずかったかな」

打ち込まれた画面には“インテリジェントデバイス”、“アームドデバイス”と書かれた下にネロの銃と剣…二つの指輪の画像が映っていた。

彼女はそれに“インテリジェントデバイス《ブルーローズ》”、“アームドデバイス《レッドクイーン》”と打ち込み、背伸びをすると再びキーボードを打ち始めた。

Episode..22\Designer〈創造する者〉（後書き）

第22話、感想はどうですか？

シャーリーやり過ぎですね。やっちゃうの！？
簡易デバイスじゃないのみたいな？

ガッツリ改造するみたいですネ。

はやてに内緒でまづいんじゃないですかね。

それでは次回もお楽しみに！

E p i s o d e . . 2 3 〈軌道修正へ全てを元通りに〉 〈前書き〉

調子に乗ってしまい、すみませんでした。

Episode..23〈軌道修正へ全てを元通りに〉

ある部屋の一室では眼鏡をかけた女性が正座、その前には青い髪の小人が宙に浮いたまま腕組みし、頬を膨らませていた。

「シャーリー？」

「はい…」

リインが膨れっ面のまま正座させているシャリオ・フィニーノの名を呼ぶ…

「私が何で怒っているのか分かってますよね!？」

「もちろん承知しております…」

シャーリーがますますシュン、としてしまい俯く
よく見ればリインの額には青筋が浮かび上がり、顔をヒクつかせていた。

「勝手にネロさんの物をインテリジェントデバイスとアームドデバイスにしようとしちゃ駄目じゃないですかあ!!」

「うう…」

リインが小さい手で《ブルーローズ》の入っている大きな試験管のような物のガラスを叩いた。

小さい手（リインの身長は約30センチ）なので音は大きくないが、シャーリーを叱るにはそんな音でも十分だった。

「はやてちゃんも私も言いましたよね！？　後で元に戻さなくちゃいけないし、ネロさんも余計な事はしないで欲しいって言ってたから手っ取り早く出来る“簡易ストレージデバイス”にしようって！」

「はい：　そうおっしゃいました：」

シャーリーが下を向いたままリインに目を合わせようとしない：

「さっきから様子が変わだと思って戻って来てみれば：！　大体、私が昨日手伝うって言った時に“一人でやる”なんて言ったのも変わだと思いましたよ！」

「いや：　その：」

「シャーリーなら簡易デバイスなんてすぐに出来るはずなのに、四日も掛かるなんてのも引っ掛かりました！」

「なんて言うか：」

「人の物、許可もなく自分の好きなように改造しようなんて！」

「メカニックの心意気と言うか、何と言うか：」

シャーリーがビクビクしながら弁解の余地を探すが、リインが彼女をキッ！、と睨み付ける

「何か言いましたか？」

弁解など出来るはずもなく、

「いえ… 何も…」

余計に落ち込むだけ

「まだAIは組み込んでないんですよね？」

「はい…」

言えるはずもない。

自分も最初は言われた通りに簡易ストレージデバイスに改造しようとしたが、頭の中に声が響いて来たなんて…

『銃は《インテリジェントデバイス》に、剣は《アームドデバイス》にしろ！』と突然何処からか聞こえて来たなど。

それが葛藤の末に辿り着いた作者の結論の声などと…

「ネロさんも“変な事したら眼鏡を叩き割る”って言っていました。」

「えええっ！！？」

余談だが、《ブルーローズ》は“自由奔放な女性”、《レッドクイン》は“貴意の高く、無茶な事を言う女王様タイプ”で、ネロの事を“マスター”ではなく“ネロ”と呼ぶような性格のAIを考えていたらしい。

作者が一番無茶苦茶だ。

「はやてちゃんも笑いながらOKしました。」

「部隊長が！？」

「笑ってましたが、本当に余計な事したら“ シャーリー、眼鏡をネロさんに渡して” って言うでしょう。」

「そんなっ…!」

シャーリーがいつの間にか涙眼になっていた。

「で？ 改造は何処までしてるんですか!？」

まだ怒っているリインが聞く。

「実はほとんど終わってます… 後はネロさんのデータを取って微調整をするくらいしかありません…」

その言葉を聞き、リインが溜め息を吐く。

メカニックとしては腕がいいが、勝手な事をするのに呆れながら。

「それでネロさんが撃とうとした時、あんなに慌てたんですね？」

「はい…」

《ブルーローズ》が入っている青い光の灯ったガラスに手を当て、シャーリーの方を見た。

「シャーリー…」

「はい…」

彼女も反省しているようなので、これ以上叱るのはかわいそうと思

い、優しく声を掛けた。

「もう怒ってませんから、顔を上げて下さい。」

附せていた顔を上げ、リインを見る。

最早泣く寸前だ。

「私も手伝いますから。ね？」

「リイン曹長……」

正座したままのシャーリーにリインが手を差しのべた。

「それじゃあ、一緒に頑張って行きますか。」

「はい！」

やっと立ち上がったシャーリーがハンカチで涙を拭く。

既に目の周りは赤くなっていた。

……作者の予告……

と言う事で、《レッドクイーン》と《ブルーローズ》はAI機能の無い“ストレージデバイス”に改造と言う事にしようと思います。通常時はネロが填めている指輪と同じ、スパーダを模した指輪と薔薇を模した指輪になっていて、バリアジャケットはネロの思考を読み取って作られる物にしようと思います（予定は黒いロングコートを羽織ったカンジです。ネロの普段着てる紺色の服とは違います）最低限に言葉は喋れるように、“セットアップ”とか技名は言える

ストレージデバイスにしようと考えています。

「リイン曹長…」

「はい？」

「眼鏡を叩き割るってのは本当ですか？」

「あれは嘘ですよ。」

「ですよ〜！ 私、本気にしちゃいましたよ！？」

「本当は“ぶちのめす”って言ってました。」

「え…？」

「さあ、がんばるですよ〜！」

「あの… リイン曹長？」

真実は作者の意図により闇の中に葬られた…

Episode..23〈軌道修正へ全てを元通りに〉〈後書き〉

本当にすみませんでした。

イメージを壊してしまった事を深くお詫び致します。

また無茶をやらかすと思いますが、何とか出来る事ならやります。

とりあえず、《レッドクイーン》と《ブルーローズ》は意思の持たないストレージデバイスということにして（レッドクイーンはリボルバーナックルと同じ、非人格型のアームドデバイスの方がいいですかね？）、待機状態は指輪型、普通の服だったら危険ですのでバリアジャケットは纏うということにします。

迷惑を掛けてすみませんでした。

E p i s o d e . : 2 4 〈 B l u e R o s e 〔青い薔薇〕 〉 (前書き)

始まったデバイスと化した愛銃の調整：

再び彼に疑惑の心が芽生える事になるとは知らずに：

Episode..24 Blue Rose〈青い薔薇〉

「調整？」

「はいです。」

午前の訓練を終えて食堂で昼食を取っていたネロの所にリインとシャーリーがやって来た。

「《ブルーローズ》の改造最終段階と言う事で、本人のデータを取りたいんですう。」

またティアナなんかに食事に誘われたら面倒だったから、わざと時間をずらして食べていたのだが、疑問が浮かび手を止めた。

「四日かかるとか言ってなかったか？ 随分早いな」

それにシャーリーがさっきからやたらビクビクしていてネロの方を見ない。

喋っているのはずっとリインだ。

「シャーリーの腕が良いって事ですよ。ねえ、シャーリー？」

「は、はい！」

後ろで震えていたシャーリーの縮こまった体の背筋が伸びた。

「さっきからどうしたんだ？ そいつ？」

「何でもないですよ。シャーリー、《ブルーローズ》をネロさんに渡して下さい。」

「ど… どうぞ…」

何かに怯えたシャーリーが震えた手で指輪をネロに渡した。

薔薇の花を模した銀色の指輪… 花の中心には青いクリスタルが埋め込まれている。

「持ち運びが楽に収納機能を着けておきました。《アンカーガン》と同じ簡易ストレージデバイス、カートリッジシステムを搭載したものです。」

リインが淡々と説明する中、ネロはまじまじと指輪型で待機状態にある《ブルーローズ》を見回す。

「午後の訓練はそれを使って下さい。朝と午前のデータは取ってますがまだ戦闘に向いてはいませんので、後でシュミレーションのデータを取って調整すれば正式にお返しします。」

「了解…」

《ブルーローズ》をズボンのポケットに入れ、去って行くリインとシャーリーの背中を見送ると食事を再開した。

午後の訓練を開始…

トレーニング場では廃棄都市区画に設定され、荒廃した道の真ん中

ではネロが佇んでいた。

「ネロさんのデバイスですか？」

「そう」

彼のこれからも始まるデータ採取を見学していたエリオの隣にいるフェイトが応えた。

他のフォワード陣は勿論、なのはとヴィータ、シグナムにデータを取りに来たシャーリーがいる。

「最終調整を兼ねてデータを取るから、私達はここで見学ね」

フェイトが微笑むが、ヴィータはずっと見据えるような目で見ていた。

「それじゃあ始めます！」

シャーリーが浮かび上がった画面を操作すると、地面に展開された魔方陣から《ガジェットドローン》が出現した。

【ガジェットの数はI型10機、II型5機。全機撃墜か捕縛するかがクリア条件です】

ネロの前にある画面に映ったシャーリーが説明をするが、ネロはうんざりしたように頭を掻く。

「ようは倒しゃいいんだろ？」

【まあ… そう言う事です】

シャーリーが苦笑していたのは見なかったが、今は目の前にいる目標を見詰めた。

初めて戦ったカプセル型のガジェットドローンと、エイのような平たいボディで空を飛んでいるガジェットドローンを…

【始めます！】

ポケットに閉まった指輪：《ブルーローズ》を待機状態から銃の形に戻すと…

【レディー…】

リボルバー部分を外し、受け取ったクイックローダーに納まったカートリッジを装填し…

ガチン！、とりボルバーを本体に戻す

【ゴー！！】

開始早々、ネロが《ブルーローズ》を発砲、魔力弾を射出した。狙ったのはガジェットI型

「いきなり！？」

見学していたスバルが彼の行動に驚くが…

「え…」

「うそ！？ A M Fをこんな簡単に！？」

予想を越える事態にティアナも驚いた。

青白い二つの魔力弾はガジェットの出すAMFなど関係ないように容易く撃ち抜き、I型を一機破壊した。

AMFとはAnti Magic アンチマジックフィールド link Fieldの略称で、効果範囲内の魔力結合を解除し、魔法を無効化させる高位防御魔法でフィールド系魔法に分類されるものである。

「AMFを貫けるくらい強力な魔法!？」

キャロも驚きを隠せないが、戦っているネロ本人は二機目のガジェットに狙いを定めて走り出していた。

ガジェットの青いビームが飛び交う中、恐れもせずに3体のガジェットが固まっている中に飛び込む。

「ハアアッ!!!」

中央にいるガジェットに撃ち込み、穴の空いた部分に跳び蹴りを一発。

右隣のガジェットに拳を叩き付けると、左手で握った愛銃をもう一機のガジェットに向けて発砲。

殴り飛ばされたガジェットの黄色いカメラアイが点滅し…

そこには機械兵器（自分）に銃口を向ける銀髪の男が写っていた。

ガジェットがショートし爆発を起こす前に後方に跳び、他のガジェットを見る。

『これで4…』

《ブルーローズ》の撃鉄を起こし、狙いを定める…

「あと11…」

眩きと共に銀色の銃から魔力弾を撃ち出した

「すごいね…」

「うん…」

ガジェットとの模擬戦を見守るのはとフェイトも息を飲むようなものだった。

ガジェットのスピードと反応速度は最高に設定されている…

だが、ネロはそんな事はものともせずに次々とガジェットを破壊。

残りのガジェットはI型が3機とII型が5機

「私も驚きましたよ。加減なんてしてもらったら困るなんて言うんですから？　いきなりガジェット15機なんて無茶だと思ったんですけど…」

遠くに見えるのはガジェットに向かって駆け抜けるネロ。

自分に当たる青いビームにだけ魔力弾を撃ち込み、ガジェットに飛び掛かった。

《ブルーローズ》を発砲するが、魔力弾は撃ち出されない。

「チッ！」

分かった事として6発のカートリッジで撃ち出せる魔力弾の数は18発。

一度に撃ち出すのは2発なので、実質9回発砲出来る事になる。

「うらああああああああっ！…！」

弾切れを起こし、即座に作戦を変更して右拳で殴り付けた。

包帯で《悪魔の右腕》を隠しているとはいえ、その力は驚異的なもの…。ガジェットボディを貫き、出ているアームを掴むとそのままおもいっきり振り回し、ビルに叩き付ける。

「これで！」

右手でアームを掴んだまま残り7機になったガジェットの内の一機に残骸と化したガジェットを投げ飛ばしながら腰に取り付けたクイックローダーを空中に放り投げた。

《ブルーローズ》のシリンドラーの中から空葉莢を捨て、空中で外れたカートリッジをリボルバーに装填する。

ガジェットがアームとビームで応戦するが、投げ飛ばされた残骸が盾になってネロまで攻撃は届かない。アームで弾き飛ばした頃には青白い魔力弾が迫り、又してもガジェットを一機破壊した。

「9…」

一機になったI型のガジェットを見る。

不敵に笑った顔はシュミレーシヨンの機械の心にさえ“恐怖”という感情を植え付けさせていた…

逃げるI型を追おうと走り出すが、空から降って来たII型のビームにより遮られる。

『後回しにしようと思ってたんだがな…』

牽制に一度発砲するがビルの中とは違い、縦横無尽に飛び回るII型は鮮やかにネロの魔力弾をかわした。

「すばしっこい…」

《ブルーローズ》を放り投げ、左手から右手に持ち変えた。

II型が一斉にビームを発射するが、ネロは意識を集中させる…

『どいつにするかな…』

ただ闇雲に撃ってはかわされるのは分かりきっている。

いかに強力な攻撃でも当たらなければ意味がない。

『良さそうなのは…』

撃鉄を起こすと、銃口に青白い二つの魔力弾丸が収束され始める…
しかし、ガジェットの本のビームもそれと同じくして迫る…

『いないな…』

狙いが定まらず、仕方なく引き金を引いた。

風を纏った魔力弾を撃ち出し、ガジェットのビームに応戦する。

青の光線と魔力弾がすれ違い、ガジェットのビームは地面に着弾、
ネロの魔力弾はII型の一機に着弾し… 爆風を巻き起こし、周囲
に金属片を撒き散らす。

その破片がガジェットの内の一機に突き刺さり、破壊された。

「ハッ！」

自然と溢れた笑みが嘲笑に変わる…

これで残りはI型が一機、II型が三機。
今になって物足りなさを感じ始めていた。

力をセーブして銃と体術しか使っていないにも関わらず、撃墜したガジェットの数は一機。

残りたったの四機、半分などとくに過ぎている。

再び魔力弾を撃ち出すが、散開されてしまい、三方向に別れる。

「ちょこまかすんなよ…」

《ブルーローズ》を左手に持ち直し、空を見詰める。

その隙を突こうとしてビルの影に潜んでいたI型のガジェットに発砲… 残るはII型が三機。

『場所が悪いな…』

ビームをかわしつつ応戦するが、このままでは弾切れを起こす

「あれ？」

「ビルの中に入っちゃった…」

スバルとデータを取っていたシャリーの口から漏れた。

画面にはネロがバックステップでビームをかわし、魔力弾を撃ちながらビルの中に飛び込んだネロが映っていた。

だが…

「あそこ！」

フェイトの指の先を皆が見る

そこには…

「ネロさん!？」

「クロスファイアシュートですか!？」

「違う!」

キヤロとエリオの目にはティアナの使う“クロスファイアシュート”に見えたが、彼女は否定する。

ネロは左手で持った《ブルーローズ》に右手を添え、彼の周囲には青白い魔力で形成された湾曲した刃が六つ展開されていた。

「魔力値、増大!!」

シャーリーが叫びながら、なのは達の前にあるモニターを見た展開された湾曲刃が回転を始めて、《ブルーローズ》の銃口に収束された魔力弾も凶暴性を増し：

【Summoned Swords（幻影刀）…!】

画面を通して音声が伝わる。

【Fire!!!】

引き金を引いた瞬間、ネロの体が大きく仰け反った。

先に撃ち出された魔力弾に続いて幻影刀が一本一本、時間差をつけながら大きく弧を描きガジェットを襲う：

魔力弾はかわされてしまったが、弾頭の軌跡に吹き荒れた暴風はガジェットの動きを止めるには十分で、安定性を失った所に幻影刀が突き刺さり、そのままガジェット2機は不時着：後になり幻影刀も碎け散って行く

【ターゲット全機撃墜、シミュレーション終了です！】

ネロの前に出て来た画面に映ったシャーリーが模擬戦の終了を告げるが、何も応答しないまま彼はビルから降りて行った。

「すごいですね、ここまでやるなんて！ あの戦闘能力と魔力なら少なくともAAAランクはありますよ！」

戦闘データを記録しながらはしゃいでいるシャーリーだが、ヴィータ以外にもなのは、フェイト、シグナムも険しい顔をしていた…

『最後の“あれ”って…』

なのはがフェイトに念話を飛ばす
最後に使った《幻影刀》は早朝の模擬戦でアクセルシューターを相殺させた“もの”の正体だった。

『うん…』

フェイトがなのはの方を見る…

『殺傷設定だな…』

目を瞑ったシグナムが後ろを向き、部隊舎の方に歩き出した。
端で見ていたヴィータの目には彼がどう写っていたのかは誰にも分からない…

Episode..24 Blue Rose〈青い薔薇〉（後書き）

～第25話予告～

フォワード陣に与えられた一時の休日：

「いや、悪いな？ 6日も何も食ってなかったもんでよ」

巡り合ったのは《赤の男》：

「やっぱりコイツがなきゃな」

調整と修復を終え、《黒の騎士》の元に戻って来た《赤の女王》：

「生体… ポッド…」

運命の歯車は動き出す…

E p i s o d e . : 2 5 \ W i n d へ気まぐれな風◇ \ (前書き)

彼はまるで風のように現れた…

Episode..25 Wind〈気まぐれな風〉

《ブルーローズ》の調整を終えて3日。スバル達と午前の訓練を終えて食堂で昼食を取っていた。いつもならティアナやスバルが食事に誘って来るのだが、今日はその心配はない。
なぜなら…

「今日はみんな、一日お休みです!」

訓練の第二段階を終えたスバル達は午後の訓練は休みと言う事で、みんな街に出掛ける事になった。
誰にも邪魔される事も、わざわざ時間をずらして食べる必要もない。
何より今日は…

「あ、いたいた!」

「直ったみたいだな」

《レッドクイーン》が修復を終えてネロの元に返って来る日だ。
ネロを見付けたはやてが駆け寄って来る。後ろにはリインとシャーリーも一緒だ。

「お待ちかねでしたやろ?」

「まあな…」

はやてが上着のポケットから取り出した指輪を受け取った。
指輪はネロが左手の人差し指に填めている指輪と同じ形… 銀色に
“彼のコートの両肩にあった掠れて消えかけていた紋章”と同じデ

サインになっている。

「今までのデータがインプットされていますからすぐに使えますよ。ご要望がありましたらまたシャーリーがネロさんに合わせて調整してくれます」

「はい！」

リインの後ろにいるシャーリーが相変わらず変だが、それは気に止めない。

「早速使ってみていいか？」

「ええですよ。シャーリーもええやろ？」

「大丈夫です！」

待機状態の《レッドクイーン》を握り、椅子から立ち上がった。シャーリーは何かに怯えているようだが、返事はやけに早い。

「お疲れ様です！」

トレーニング場に向かう途中で赤いバイクに跨がるティアナとスバルに顔を合わせた。

二人共、普段着ている陸士服ではなく私服。街に行くのにいつもあの堅苦しい服を着ているほうがどうかしているかと思ひ、取り敢えずは返答した。

「せいぜい楽しんで来いよ。滅多にないんだろ、こういうの？」

「ええ、まあ…」

「ネロさんは行かないんですか？」

ティアナがぎこちなく笑うが、後部座席に乗っているスバルが聞いて来た。

「行かねえよ。世話になって金もないし、知らない土地で何しろって言うんだ？」

「あー、そうですね… あははは…」

今度はスバルがぎこちなく笑う。
頭を掻こうとするが、ヘルメットの上からでは意味がない。

「良いバイクだな。お前のか？」

「いえ、これはヴァイス陸曹のです」

3日前はやてに無理矢理、自己紹介を六課の人達にさせられたのだが、その時に名前と歳しか言わず、すぐに行ってしまった。

その後に《ブルーローズ》をいじっていた所に専属ヘリパイロットのヴァイス・グランセニックと言う男が会いに来た。

初日の任務の時も彼が操縦していたらしい。

「ああ、あいつか…」

やたら話し掛けて来たヴァイスの事を思い出していた。

17歳には見えないだの、もっと肩の力を抜けただの、そんな調子じや誰も寄り付かないぞだの言ってきたが、大体は聞き流した。

「そう言えば格納庫に黒いバイクもあったみたいですけど…」

頬に指を当てていたティアナに、はやてが微笑みながら教える。

「それはネロさんのやで」

「そうなんですか？ 見ないものだと思ったんですけどどうりで」

「やたらゴツいやつやろ？」

ティアナとはやての間にはそのバイクの持ち主であるネロがいるのだが、ティアナとスバル、はやてにリインが談笑と会話が終わるのを待たずに彼は歩き出した。

その後を追って会話に参加していなかったシャーリーも歩き出す。

「何処行くんですか？」

「こいつの試運転だよ！」

左手に持っていた《レッドクイーン》が指輪から元の大剣の形に変わり、彼は片手で素振りしている。

「えっ!？」

今までの喋らなかったシャーリーが声を上げ、歩を止めた。それにはやて達も首を傾げる。

「どないしたん？」

「うそ…」

体が小刻みに震えるシャーリーの肩にはやてがポン、と手を置いた。

「バイクも凄かったけど、デバイスもまたゴツいわねー」

「わー、ホントだ！ シグナム副隊長の《レヴァンティン》より大きい」

ティアナとスバルも振り返って、歩いて行くネロの姿を見ていた。

「あんな軽々と…」

指差すシャーリーの指が震えていた。

ワナワナと驚愕していた彼女にはやては益々頭に？が浮かぶ。

「ホンマにどないしたん？」

「だって…」

息を飲み、何とか自分を落ち着かせようとするが殆ど効果は無い。

ようやく出て来た言葉にその場にいた全員にまで彼女の心情が伝染する…

「あれ40キロ以上あるんですよ…！」

聞いた瞬間にシャーリーからネロに視線を戻した。

横薙ぎの素振りの次は空中に頬り投げて逆手に持ち変えた。

斜めに斬り上げたかと思えば持ち手を戻して縦一文字に一振り…

「40キロ…?」

「はい…」

はやてとシャーリーが顔を見合わせた。
互いに信じられないようなものを見たと言う顔。

「あんたあそこまで出来る…?」

「無理… かな?」

引き吊った顔のティアナに苦笑しながら頬に一筋の汗が流れているスバル。

「わく! すごいですうく!」

ズレているのか好奇心が勝っているのか分からないが、リインだけがはしゃいでいた。

…

「…にしても凄かったわねー。 ホントに何者かしら?」

「ホントホント! 40キロのデバイス左手一本だもんね!」

「そうね。それはさておきチビツ子二人の“あれ”…」

あれからスバルとティアナは街にやって来たわけだが、先程会った

エリオとキャロの事を思い出し、違う意味で気に掛けていた。

「シャーリーさんが考えたデートプランの事？」

シャーリーがエリオとキャロの為に今日のデートプランを考えたらしいが、内容は食事に映画鑑賞、更には夕焼けを眺めると言う何とも言い難いものだった。

午前の内にか前々から考えていたのかは分からないが、二人を気遣っての結果である。

「時間まで細かく指定してたみたいよ」

「シャーリーさんらしいね。いいんじゃない、楽しければさ？」

「そりゃそうでしょうけど…」

楽天的なスバルに一度溜め息を吐き、空を扇いだ。

「大丈夫だよ。あの二人しっかりしてるし！」

「あんたと違ってね」

隣で騒いでいるスバルを無視してはエリオとキャロはまだ10歳。心配になるのに無理はない。

『私も結構過保護なのかな…』

「ティア聞いてる〜!？」

「はいはい、聞いてるわよ」

先にスタスタと歩くティアナを追って行くスバル。
一方その頃のエリオとキャロは：

『エリオ君…』

『なに？』

シャーリー考案のプラン通りに食事中。ミッドチルダ首都クラナガ
ンのあるファミリーレストランに来ている。
本来なら二人で食事をしているはずだが：

『お金大丈夫？』

『平気だよ。ちゃんとあるし、これくらいなら』

4人座れるテーブルで二人は隣通しで座っている。
予定と違い2人テーブルで向かい合って食事をしているはずだが、
彼等の向かいに座っているのは：

『よく食べるね…』

『うん…』

「なんだ？」

銀髪タンテの男

「え？」

「さっきからチラチラ見てたし、俺の顔に何か付いてるのか？」

現在のダンテの服装は肘の少し先まである黒い革製の上着、下は内股だけ赤いいつもの黒いラバーパンツ。

「いえ、そうじゃなくて…！」

「ずいぶんお腹が減ってらしたんだと思ってまして…」

焦って両手を振るエリオと、フォローするキャロ。

「いや、悪いな。6日も何も食ってなかったもんでよ」

「6日!？」

「そんなに!？」

驚くのに無理は無い。

「ああ。ホントに悪いな？」

「いえ! そんな事ありません!」

「どんどん食べて下さい!」

促されるままにダンテは次の注文を出す。

既に彼の周りどころかエリオとキャロのエリアにまで食べ尽くしたピザの皿とストロベリーサンデーのグラスが多数。

遡る事10分前…

スバルとティアナの二人と別れたエリオとキャロが街中を歩いていたのだが、キャロがタチの悪い若者にぶつかってしまった。

「おい、テメー!!」

「あの… すみません!」

勿論故意ではない。だが、相手はタチが悪い上に三人組…

「何処見てやがる!!」

「あの…」

「すみません! 本当にわざとじゃないんです!」

対処が通じずに狼狽えるキャロ。エリオが助けようとするが…

「んだとこのガキ!!」

話を聞くような相手ではなく、エリオとキャロは三人に囲まれてしまった。

民間人相手に管理局の魔道士が魔法を使うわけには行かない。

気も短く、早々と手を出そうと男が拳を振り上げた。

『ソニックムーヴ…!』

エリオはソニックムーヴを発動させようとしたが、拳を振り上げた男の動きが止まった。

「な… なんだテメーは!?!」

190センチ以上ある銀髪の男が腕を掴んでいた。

チンピラの男が必死で振りほどこうとするが腕は全く動かない…

「ガキ相手に手え上げようとしてるお前の方こそ何だ？」

銀髪から覗く碧眼に射ぬ抜かれた様に男の体が硬直した。

「ウラアア！！！！」

チンピラの一人がダンテの腹に蹴りを入れるが微動だにしない。
それどころか…

「グアアアア！！！！」

蹴った男の方が吹っ飛び、右足を抱えて転げまわった。

「オイ！！！！」

腕を掴んだ男を睨んだままもう一人には眼もくれない。
拳がダンテの顔面にめり込むが…

「があああ！！！！ 痛っ… うあああっ！！！！」

殴ったチンピラの男がその場に踞ってしまった。
エリオとキャロには何が起きているのか分からない。
ダンテは最後に残ったチンピラの目をみたまま。

「おい…」

「ヒイツ！」

声を掛けると、男は何とも情けない悲鳴を上げた。他の二人に何が起こったか見ていなかったはずだが、この男には睨むだけで十分。

「こいつら連れてとっとと帰れ！」

手を離すと男はへたりこみ、尻餅を突いてしまった。そこで仲間の二人がどうなっているのかようやく気付いたようで、また情けない悲鳴を上げる。

「うあ… うわああああー！ー！ー！！！！！！」

仲間を置き去りにしてチンピラは逃げて行った。
エリオとキャロは勿論、周りにいた人達が一瞬沈黙する…

「大丈夫か？」

安否を確かめるべくしゃがみこんだ銀髪の男を二人は見詰めた。
銀色の髪… 歳は30代半ばから後半程だが、端正な顔をして…
口の周りと顎には髭が伸びきっている。
服装は上下共に黒… 背中には身の丈近い“長い何か”が赤いラバーコートで包まれている。他にも何か入っているのか、ぶつかる音が時折していた。

「は、はい！ ありがとうございます」

「ありがとうございます！ 助けて頂いて！」

キャロとエリオが二人揃って頭を下げた。

（親の教育がいいんだろうな…）

一人納得しながら、

「気にするな」と言う。

丁度そこに近くにいた地上部隊の陸士が通り掛かり、うずくまりの
たうち回るチンピラ二人を見てダンテが連行されそうになったが…

「機動六課所属、エリオ・モンディアル三等陸士であります！　こ
の方は僕達を助けてくれたんです！」

「同じく機動六課所属、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！
この人は何もしてません！」

エリオとキャロ、一般市民の証言からダンテの無実は証明された。
チンピラ三人にインネンを付けられた二人の子供を偶然通りかかっ
た男性が助けたという事、彼は殴り掛かろうとしていた男の腕を掴
んでいただけで手は出していないという事。

根強いエリオとキャロ、一般人のお蔭で彼は連行されずにすんだ。

「「本当にありがとうございました！」」

エリオとキャロがまた頭を下げるが、ダンテは後ろを向き手を振っ
て去ろうとしたが…

「待って下さい！」

「せめてお礼に何か…！」

それを聞いた瞬間にダンテの動きが止まった。

二人は知らない。知るはずがない。

彼がここ数日何も食べていない事に…

昨日まで廃棄都市の中にいたわけで、大剣と二丁拳銃、ホルスターを羽織っていたコートで隠し、こうして街にやって来たという事に…

「どうかしたんですか!？」

急いでダンテにエリオとキャロが駆け寄る。

彼の中では意地とプライドをかけて葛藤が繰り広げられていた。

いくらなんでも、こんな子供に“メシを奢ってくれ”とは言えない。今、まさにギリギリの状態だが、何とか足を前に動かそうとした時に腹の虫が鳴いた。

「お腹空いてるんですか!？」

「お礼に食事でもどうですか!？」

何か言おうとしたが、それよりも前に近くのレストランの中に連れ込まれてしまった。

「何食べます?」

「いや…」

「すみません、ピザ一つ!」

断つてでも外に出ようとしたが、メニューの中にあるピザの欄をチラチラ見ていたのを察してエリオがピザを注文した。

「待て…！」

ダンテが掠れた声でウェイトレスを呼び止めた。

「お嫌いでしたか？」

「だったら他のを…」

「そうじゃない…！」

エリオが再びメニューを広げるが、ダンテが呼び止めた理由はそこではない…

「ピザはオリーブ抜きで…！」

空腹が勝ったようだ。

…

「いや、本当に悪いな？」

僅かな時間で何皿、何杯のピザとストロベリーサンデーを平らげた。

「いえ、気にしないで下さい」

「でもこれは結構するだろ。給料貰ってるとか言ってたが大丈夫か？」

ダンテが6杯目に突入したストロベリーサンデーを口に運びながら会計の紙を見る。

違う世界の文字なので何と書かれているのか分からないが、食べた分… 子供が大金を持っているとは思えないが…

「ああ、これくらいでしたら大丈夫です」

平気で言っただけのけるエリオに複雑な感情が芽生え、つい笑ってしまった。

「大したもんだな。さっき言ったが本当に働いてるみたいだし、礼儀もしっかりしてるよ」

「いえ…」

「それほどでも…」

二人とも照れているが、実際にその通りだ。

「俺の知り合いにガキで働いているやつがいるんだがな？ まあ、ガキって言ってもお前らより歳上だが… そいつがまた礼儀がなくてよく…」

頬杖を突いて愚痴り出したダンテを二人は何とも言えない顔で聞く。初対面はクールな人だと思ったが、極限まで空腹だったらしく、今は饒舌になっていた。

「いきなり顔面にドロップキックだぞ？ あれは効いたな…」

スプーンをくわえて天井を見上げた。

両手は固定された長椅子の背もたれ上部に掛けていたが、組んだ足が椅子に立て掛けてあるコートに包んだ大剣に当たった。

「それでその後はタコ殴りだよ？　タコ殴り！」

「あの…」

エリオが気になり、ついに口を開いた。

「どうした？」

話を中断してエリオを見た。キャロも何か言いたげ。

「お仕事は何をしてらっしゃるんですか…？」

「あー…」

何と言おうか考えて顎と口周りの髭を触った。

「自営業かな…」

嘘ではない。

悪魔を狩るのが専門で、普段は便利屋をしていると言うのは気が引けた。

「その中身は…」

「こいつか？」

キャロの目線の先…　ダンテの隣にある剣と銃とホルスターを包ん

だコートに目を向けた。

「こいつは…」

余計に言えるものではない
何と言おうか考えている最中に、異様な感じ…そして、遙か遠くから爆発音が聞こえて椅子から立ち上がった。

「どうかしました…」

「わりい、急用だ！」

剣と銃を包んだコートを持ち、急いで店の外に出ると駆けて行った。

「あの！」

エリオが後を追おうと店の外に出たが人も多く、ダンテの姿は何処にもなかった。

「エリオ君…」

「行っちゃったみたいだよ…」

店の中に戻り、会計を済ませた二人はダンテの去って行ったと思われる方向を見詰めた。

いくら人が多いとは言え、彼のすぐ後に店を出たのに見失うとは思
いもしなかった。

「不思議な人だったね…」

「うん…」

反対方向を向き、エリオとキャロは互いの手を握る…

「まだ名前も聞いてなかったのに…」

日はまだ高い…

青空に広がる雲のように、吹き抜ける風のように気まぐれな男に二人は思いを馳せて…

Episode..25 Wind〈気まぐれな風〉（後書き）

～第26話予告～

「あそこか！」

始まった戦い…

「みんな！ 短い休日は楽しんだ？」

新たなる戦い…

「レリック反応が1つ… もう1つ!？」

再会は再び…

「よお。また会ったな？」

それは運命か…

E p i s o d e . : 2 6 \ R e d Q u e e n 〈赤の女王〉 (前書き)

《黒い騎士》に太刀打ち出来る者などいない…

彼と対等に戦えるのは《同じ血》を持ち者だけ…

Episode..26 Red Queen〈赤の女王〉

《レッドクイーン》がネロの元に返りガジェットと模擬戦を始めた。最初のはやとリインもシャーリーと一緒にいたのだが、何やらカリムの所に用事があるとかで行ってしまったのだが：

「すごい…！」

レッドクイーンの試運転としてガジェットとの戦闘を始めて僅か一分：

「剣一本でここまで…！？」

ネロの要求したガジェットの数は30機。全てI型だったのだが、彼はレッドクイーンのみでガジェットを殆ど撃墜させた。残りのガジェットは筈か4機。

【ハハッ！】

シャーリーの前に浮かぶモニターには笑いながらガジェットを斬り裂く銀髪の男が映っている。

ガジェットに囲まれては薙ぎ払い、離れば隙を与えずに斬り込む。やっと壊れた愛剣が戻って来たのが嬉しかったのか、彼は調子を取り戻していた。

【うらああっ…！】

ビームを撃ち出そうとしていたガジェットに正面から剣を突き刺し、そのままガジェットの上に乗ると柄を捻り《イクシード》を発動さ

せる。

炎を噴き出しながら残りのガジェット2機に体当たり…衝突する。
最後のガジェットを破壊すると、ホバークラフトと化していたガジェット
の勢いに任せてネロは身を投げ出す。

「危ない!!」

難無く着地した彼に爆発したさいに金属片が飛んできた。
シャーリーが思わず叫ぶが…

【B l a s t（吹き飛ば）！】

それは要らぬ心配。

ネロは容易く金属片を斬り飛ばし剣を背負う。

「見てるか？」

【はい！】

ターゲットを全て撃墜し終えたネロが遠くから此方を見ているシャーリーに目を向ける。

戦闘中ずっと見ていたのは知っていたが、あれだけ距離があれば疑いたくなる。

【感想は？】

「え？」

突然聞いて来たのにシャーリーが戸惑った。

「正直、驚きました。あなたがここまですごいなんて…」

シャーリーのいる所まで歩いて行くネロの姿が映るモニターを見ずに、キーボードを打ちながら応える。

「先日も見させてもらいましたけど… レッドクイーンは使用者の魔力を消費して起動させるストレージデバイス。あれだけイクシードを使っていたのに息一つ上げないなんて…」

シャーリーの前に新たな画面が出て来る。

そこには先程記録したガジェットと戦っているネロの姿が映っていた。

テスト開始からいきなりガジェットの群れの中に飛び込み一閃… 一瞬にしてガジェットを分散させる。更には間合いを詰めて斬り上げ… 自分目掛けて降り注ぐビームに怯みもせずに駆け抜けて行く姿… イクシードを使つてのガジェットを3機同時破壊… イクシードを応用しての攻撃を回避しているもの等。

「さっきのやつか？」

「きゃあああああ!!」

データの記録に夢中になっていた為か、ネロが来ていたのに気付かずいきなり声を掛けられたシャーリーが悲鳴を上げた。

「…びっくりさせないでくださいよ」

「こっちが驚いたよ…」

シャーリーは胸を撫で下ろしてデータの記録を再会する。

どうも様子が変わったと思い、ネロは取り敢えず彼女に聞いてみた。

「何でいつも驚くんだ？」

「なんでもありません！」

「俺が話し掛けた時だけ妙に反応してるように感じるんだが…」

「き、気のせいです！」

ネロはやっぱりシャーリーの様子が変わったと思い首を傾げ、シャーリーは安堵の息を吐く。

『やっぱり変だよな…』

シャーリーはネロのレッドクイーンとブルーローズを勝手にインテリジェントデバイスに改造しようとした事でリインに叱られてしまったのだが、その時に“余計な事したらぶちのめす”とネロが言っていたとリインに吹き込まれていた。

無論、彼は余計な事をしないではいいとは言ったが、“ぶちのめす”とまでは言っていない。

『まあ、いいか…』

そんな事はどうでもいいと思い、深く考えるのは止めた。

ネロが機動六課に来て5日が経つ。フォワード陣に混じって彼も訓練しているのだが、先日の模擬戦の後に《幻影刀》を使ってしまった事をシグナムから聞いたはやてがネロの所にまで来て、それは使わないようにと言った。

あの時、ネロは無意識に幻影刀を使ってしまっていた。本来なら《

デビルトリガー』の発動中でなければ使えない筈の技が使っていた。彼も自分でもどうやったか覚えていないのだが、デバイスを通して使う“魔法”と違い、“悪魔の力”を使う技には非殺傷設定など通しない。

《幻影刀》、《悪魔の右腕》、そして《闇魔刀》：

いずれも悪魔の力を使うものばかりだ。ネロも約束として使わない：

少なくとも模擬戦闘と対人戦闘ではそうすると言った。

闇魔刀はデバイスではなく“刃物”であり、悪魔の右腕に到っては人に見られたくないもの：

『キリエ：』

頭の中で最愛の女性の名を呼んだ。

すぐに帰ると言って外界に出たが、ネロがミッドチルダに来て一週間が経過している。

常に彼女の身を案じているが、それは向こうも同じだろう。

キリエにとってネロは弟とも恋人とも言える関係だが、それゆえに心配しているはず。

フェイトとはやてによれば、現在もネロのいた世界を搜索中らしく、まだ時間が掛かるらしい。

早く帰りたいのだが、はやてとの約束：。しかも悪魔絡みの事件という事で途中で放り出すわけにも行かなかった。

ネロが戦う最大の理由はキリエの存在にある。

彼女のおかげで自分はこうしていられる：。自分は戦える：

彼女のような優しい人を守りたいと思った。

もし、彼女がいなくなれば自分も存在している意味も無くなる：

拳を握り締め、革の擦れる音がした。

ヴィータと戦った時に吹き飛んだグローブの代わりにはやてがくれた新しいグローブだ。

右手を見詰めていると、シャーリーとネロの前に新しい画面が出て

来た。

緊急事態を知らせる警告音も鳴り響いている。

「大変です！！ 市街地内部でレリックと思われる物を持っている少女を保護したとの情報が入りました！」

浮かぶモニターには英字らしきものが書かれているが、ネロにはやはり読めない。

「至急現場に向かうようにとの事です。ネロさんも向かって下さい」

「俺も？」

シャーリーが振り返るが、ネロは自分も行けと言われたので首を捻った。

「あなたも六課の一員なんですよ！？」

またこれを言われてしまった。

自分はいくまで協力者なのだが、渋々了解して屋上で待機しているヘリに向かう。

「この子がそうか？」

シャマルと共に行くと、現場にはぼろ布を羽織った5〜6歳くらいの少女の足には鎖で繋がれたケースがあった。

休暇を貰って街に遊びに来ていたスバルやティアナももう来ていた。

「はい。でもレリックの入っているケースがもう一つあったみたいなんですけど…」

最初に幼女を見つけたのはエリオとキャロらしい。

ネロの問い掛けにエリオが応えた。

街に行くのに置いてきぼりだったフリードはネロ達と一緒に後から来たので今は二人の隣で羽をパタパタと羽ばたかせ飛んでいる。

「ここまで来る途中に落としたみたいね。あなた達はレリックの確保に行つてちょうだい。あなたは…」

シャルが気を失っている幼女の応急処置をしていた最中に、突然ネロが待機状態のブルーローズをデバイスモードに戻し発砲した。青白い二発の魔力弾はスバルとティアナ、向かい合っているエリオとキャロの間を縫って狭い裏路地の奥にいる“何か”に命中する。

「え？」

「何!？」

彼の取った行動に思わずスバルとティアナが声を上げた。

路地の向こう側にいたのは“スケアクロウ”

狭い中を何体ものスケアクロウがひしめき合い、此方に迫って来る。

「“こいつ”の相手に丁度いい！」

ネロはフォワードの四人の間を跳び、ブルーローズを右手で持ち替えるとレッドクイーンをデバイスモードにして悪魔の群れに斬り掛かった。

イクシードを使えば楽に倒せるが、あの炎は半端ではない。イクシードを使わずにスケアクロウを蹴散らし、後方に飛んだ。

「お前らは下に行け!!」

右手で持ったブルーローズから風を纏った魔力弾を撃ち出しながらスバル達に言う。

「ネロさんは!?!」

「こいつらの相手だよ!」

飛び掛かって来たスケアクロウを切り捨て、残りの悪魔達を近付けさせないように応えた。

「分かりました。みんな行くわよ!」

ティアナの掛け声に四人は自分のデバイスを起動させ、目映い光の中でバリアジャケットを纏う。

「行ってきます!」

「そっちはお願いします!」

「行こう、キャロ!」

「あの… 気を付けて!」

「キュク」

マンホールから飛び下りたスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、そしてフリードを見送り、シャルの所に駆け寄る。

「行くぞ!!」

「は、はい!」

本当はネロもスバル達と一緒に行くと思ったのだが、団体行動は苦手であり、こんな悪魔だらけの所に女性と子供だけにはさせられなかった。

幼女を抱えるシャルを庇うように急いでビルの屋上に着陸しているへりに向かう…

「何の音だ?」

一方では既に下水に降りていたダンテが足を止めた。

エリオとキャロに飯を奢ってもらっていたが、遠くから聞こえた爆発音のした方へ行ってみた。

「爆発か?」

彼が来た頃にはトラックが横転し、積み荷の部分が壊されており、近くには残骸と化したガジェットが数体あった。

積み荷台から何かを引きずったような跡が地面にあったので、それを辿ってこうして下水に降りたのだが…

突然、ポケットの中に入れていたレリックが赤く光出した。

これはダンテが悪魔を倒した時に悪魔の体中から出て来た物。

レリックから魔力が感じられたので、ダンテもこれはただの宝石ではないと分かっていた。

だが、ここ数日の間にレリックの魔力は衰え、ただの赤い宝石へと変わりつつあったのである。

「何かに反応してるのか…?」

その魔力が消えかけていたレリックが今再び魔力を取り戻していた。ダンテが持つレリックの赤い光が何かに反応するように点滅している。

レリックの反応を頼り歩き、ダンテは狭い下水路から広い空間に出た。

そこには少女の落としたレリックケースを持ったキャロ、奢ってくれたエリオの他にスバル達もいる。

「おいおい！ 見た顔だと思ったら！」

ダンテの声に気付き皆が彼に注目した。

「あなたは！」

「あの時の！？」

エリオとキャロは驚きで思わず大きな声を出す。

しかし、ダンテと再会したのが驚いているだけの理由ではない。ダンテの持っているレリックの方が驚きの大きい理由だ。

勿論、近くにいたスバル達も彼と彼の持っているレリックに目を向ける。

「よお。少年！」

彼女達がこんな場所にいるのを気にも止めないでダンテは近付く：

「また会ったな！」

広い空間に銀髪の男の威勢のいい声が響き渡った：
ダンテ

Episode..26 Red Queen〈赤の女王〉（後書き）

～第27話予告～

「何であなたがレリックを!?!」

再会…

「こいつの事か?」

《赤い魔石》を持った《赤の男》…

「パーティーの始まりだ!!」

彼もまた悪魔を狩る者…

E p i s o d e . : 2 7 〱 廻り合い 〱 悪戯な再会 〱 (前書き)

ついに交わりを迎える狩人と魔導士…

Episode..27〈廻り合い〈悪戯な再会〉〉

「どうしてあなたが…」

エリオの目線の先にあるのはダンテが手にしてあるレリック
キャロの持つてあるレリックケースに反応するように光を放ち続け
ていた。

「さっきはメシありがとよ」

エリオの問いに返さずに彼はゆっくりとエリオとキャロの所に近付
く…

ここは下水の中と言う事で、水溜まりを踏む旅にパシャツと音を立
てた。

「なんかあったみたいで気になって食後の散歩がてら来たんだが…」

「止まって下さい!!」

叫び声によりダンテは歩くのを止めた。
声を放った女性に目を向ける…

「陸士108部隊のギンガ・ナカジマです。そのレリックをこちら
に渡して下さい」

前に出て来たのは腰程まである長い青の髪に緑の瞳を持つ女性…
ギンガ・ナカジマ

「ギン姉!」

彼女の後ろにいた妹のスバルが前に出て来ようとするが、それを手で制す。

「生体ポッドのあったトラックの付近にいた人の証言では銀髪の男性がいたと言う目撃情報があります。その上レリックを持っていたとなれば私達と一緒に来て下さい」

「レリック？」

何の事を言われているのか分からずに首を捻る

「あなたが持っている物です！」

「これか？」

ダンテが持っていたレリックをこれよがしに見せ付ける

「こいつはこの前手に入れたもんだが： 上のトラックの事なら俺は関係ないぞ。来たときにはもうあぁなってた」

レリックをポケットに仕舞い、手を頭の後ろに組んで再びエリオとキャロの方に近付く

「まあ、それはいいとして…」

ダンテが背負っているコートで隠した“長い何か”を手にした瞬間に場にいた全員が構えを取る

「俺はこっちが相手だ！」

コートで包んだままの剣をキャロの顔前に突き出す。
一瞬で距離を詰められた事で誰も反応出来なかったが、狙いはキャロ自身ではない“見えないもの”だ。

「あれは!?!」

光学迷彩で見えなかったものが姿を表す。

黒い体に四つの目、赤いマフラー… 以前廃棄都市の中で会ったルーテシアと一緒にいた彼女の召喚獣^{ガリユ}

「こっちもしばらくだな… 出て来ていきなりこんな嬢ちゃん狙うとはやってくれるじゃねえか」

ガリユの腕から伸びた爪を払い除けてキャロの前に出る。

「あゝあ… どうしてくれんだよ、これ？」

剣をコートに包んだままやったので、ダンテの赤いラバーコートが引き裂かれてしまった。

「あの…」

「何だ？」

キャロにはコートの中に隠してある物が目に入った。
微かに見える銀色の刃…

「その中身って…」

キャラが言い終わるより前にダンテはコートをおもいつき取り除いた。

赤いラバーコートを羽織り、空中に飛んだホルスターに収まった銃を腰に装着させる

「俺の！」

最後に落ちて来た大剣を掴み、大きく一振り。

剣が風を斬る音が聞こえた

「仕事道具だよ……！」

後ろのキャラを一度見て、前に向かい合っている黒い異形に向き直す。

「奇襲とはやってくれるな。レディには優しくするもんだぞ？」

そうは言ってもガリユーは言葉を返さない……返せないのである。

話せない以上、行動で示すしかない。

彼は構えを取り、対峙する。

目の前にいる“赤の男”に……主人の探しているレリックを持った少女の前にいる男に……

「おっと？ やる気みたいだな？」

ダンテもふざけた調子で剣を肩に担いだ。

「それじゃあぼちぼち……」

ダンテは一步ずつ静かにガリユーに近付き……

「始めるか！」

一瞬、一人と一体の姿が消えた。

だが、スバル達の周りでは目で追いきれない程の速さでぶつかり逢いが繰り返られ、けたたましい金属音と火花： 足元の水溜まりが弾け、柱が削り取られる

「速い！！」

声を漏らしたエリオでさえも追いきれない。

ダンテとガリユートのスピードはどんどん上がり、火花と金属音の間隔も短くなる。

「どうする、ティア！？」

「とにかくレリックを… キャロ！」

「はい！」

早くその場を離れようとしたスバル達の前に紫の衝撃波、赤い炎が降り注ぎ道を塞がれた。

「きゃあああ！！」

「何！！？」

「上から？」

悲鳴を上げたキャロにエリオが駆け寄り、スバルとティアナ、ギン

ガが上を見上げた。

そこにいるのは紫の髪の少女ルーテシア。彼女の隣にはリインと同じくらい小さな体の赤い髪の小人…

「おい、ガリユー!!」

ルーテシアの隣で宙に浮かぶ小人がガリユーを呼んだ。

ガリユー自身はまだダンテと戦いの最中だが、その呼び掛けに応じてすぐにルーテシアの隣に着地する。

「無理すんなよ! 足止めだけでいいって言っただろ? あいつには勝てねえってルールーも言ったんだから」

「アギト、行こ… ガリユー、大丈夫…?」

アギトと呼ばれた赤髪の小人、ルーテシアの声をガリユーは無言で頷く。

よく見ればガリユーの体は傷だらけで肩で息をしていた。

「なんだ、もう終わりか?」

一方でガリユーと戦っていたダンテは息一つ乱れていない。剣を背負うとガリユーの隣にいるルーテシアに目を向けた。

「よお、謎の嬢ちゃん! また会ったな。いい子がこんな所に来るもんじゃないぜ?」

ルーテシアとダンテの間にいるスバル達には何が起きているのか分からずに困惑している。

突然現れたレリックを持っていく謎の男… 召喚獣と召喚士にリイ

ンと同じと思われるユニゾンデバイス

「ごきげんよう… 魔剣士さん…」

「だから俺は魔剣士じゃないって言ってるだろ？」

うんざりしながら頭を掻く銀髪の男と召喚士の少女にスバル達は警戒を止めない。

「今日は悪魔は呼ばないのか？」

「悪魔!？」

それを聞いた瞬間、エリオがダンテを見た。

彼もエリオを見てふざけた様子で話す。

「何だ？ 悪魔をご存知か？」

「あなたこそ何で… まだ僕達しか知らないはずなのに…!」

一通り会話を終えると再びルーテシアに視線を戻す。

「それはいいとして… こんな場所に何のようだ？ 俺みたいに散歩か？」

「私はレリックを探しに来ただけ… もう手に入ってたけど…」

ルーテシアの手にはキャロが持っていた筈のレリックケースがあった。

先程吹き飛ばされた時に彼女が拾ったのだろう。

「待って!!」

慌ててキャラがルーテシアに駆け寄るが紫の衝撃波によって阻まれる。咄嗟にキャラも防壁魔法を使うが防ぎきれずに吹き飛んだ。

「キャラ!!」

「おっと!」

エリオがキャッチするよりも前に赤い影が彼女を受け止める。

「大丈夫か?」

「:すみません:」

受け止めたキャラを下ろし、顔だけルーテシアに向けるが、もうそこにはいなかった。

「すぐ行っちゃうな:」

やれやれと首を振り、立ち去ろうとした時、背中に何かを突き付けられた。

「動かないで下さい」

居たのはティアナ
手にしたクロスミラージュを向けられているか、ダンテは驚きなどしない。

「あなたの持っているレリックを渡して下さい」

「今度はこっちが相手か？」

振り返った姿にティアナが強張る。

二丁のデバイスの銃口はダンテの胸と頭に狙いを定められたまま

「動かないで下さい！！」

ティアナの言うことを聞かずにダンテは小さな溜め息を吐いて：

「俺は本当に女運が悪いな…」

そう言うところルーションシアが去って行った方に歩き出した。

「悪いが構ってる暇はない」

手をひらつかせて去ろうとするダンテにティアナが魔力弾を撃ち出すが、もうそこに人影はなかった。

「外がヤバそうだ！！ 早くお前らも出た方がいいぞ！！」

広い空間にダンテの声が響く

すると、突然広間全体に地響きで揺れ始めた。

「逃げるわよ！」

「ギン姉！！」

すぐにギンガとスバルがウイングロードを展開させて天井を突き破

り、ティアナやエリオとキャラも着いて行く。

『ティア…』

『何？』

『さっきの子… あの人の事…』

スバルの頭の中ではルーテシアがダンテに発したある言葉が離れなかった

『前にネロさんが言ってた…』

『ネロさんの世界の…』

無論、ネロから話を聞いたエリオとキャラの頭から離れない言葉…

『あの人の事… 魔剣士って…』

『まだ分からないでしょ？ 本人も否定してたんだし』

余計な事を考えさせないようにティアナが強制的に念話を終わらせる。

「魔剣士…」

不意に呟いたキャラをフリードが心配そうな顔で見詰めていた…

Episode..27〈廻り合い〈悪戯な再会〉〉(後書き)

〈第28話予告〉

「それこっちに渡して！ 危ないものなんだよ！？」

魔石レリックを求める者…

「推定オーバーSランク！？」

狩人が動く…

「ハッチ開けろ！！」

危機が迫る中で…

Episode..28 Red〈狩人と騎士と〉〈前書き〉

《赤の男》には《鉄槌の騎士》がああ青年に近いものだと感じた…

確かに二人は最も似て、最も遠くにいる存在なのだろう…

Episode..28〈狩人と騎士と〉

「大丈夫か？　この子？」

ネロはシャルと共にレリックケースが鎖で足に繋がれていた少女を連れてヘリの中にいた

「外傷はないみたい。でもちゃんとした処置が出来る所に行かないと」

屋上に待機させていたヘリが飛び始め、その場から離れ始める。

「何でこの子がレリックを？」

「分からない…　そこはまだ…」

戻って来たレッドクイーンの試運転中に無理矢理彼も呼ばれたのだが、思っていた事を聞いた。

だが、シャルも少女がレリックを持っていた理由など分からない

「とにかくここから離れるわ。ヴァイス陸曹、お願い」

【はいはい！】

シャルの前に出たモニターのヴァイスが応える。

「フォワードの…　スバルやエリオ達の方は？」

「ちょっと待って…」

シャルが違う画面を出す、黒い映像を映し何も映らない。

「スバル！ ティアナ！」

応答するようにシャルが言うが、何の返答もない。

「どうした？」

ネロが目を細めるが、シャルは慌てた様子

「変なの… 応答しないし…」

すると突然、ヘリが急に速度を上げた

「きゃあああああ！！」

シャルが悲鳴を上げ、椅子から落ちそうになった所にネロが駆け寄り、彼女と横になっていた少女を受け止める。

「ヴァイス！！」

ネロが叫ぶと、彼の前に出て来た映像のヴァイスも慌てた様子…
必死で操縦していた所のものだ

【すまねえ… 前に突然…！ くっ！】

ただならぬ様子と右腕の疼きで窓から外を見た。

ヘリの外にはメフィスト、ファウスト、ヘルⅡヴァンガード、シン
サイズ、シン シザース、デス サイズ、デス シザースが30

体以上が取り囲むように宙を舞う光景

「ハッチ開けろ!!」

【なっ!?!】

ネロの声にヴァイスが呆氣に取られた

【正気か!?!】

「あまりまえだ!」

不安定に飛行している中で彼の言っているのはとても正気の人間が口に出るものではない。

それでもネロは迷いなど見せずに後方のハッチの方に近付いて行く
「早くハッチを開けろ!! あいつらからは逃げ切れない、迎撃する!!」

強い言葉にヴァイスも、

【分かった… 操縦はまかせろ! 後ろは頼むぜ!】

ネロを信じてハッチを開けた。

「シャル!! その子離すなよ!!」

「はい!」

シャルが自分と少女にシートベルトを着け、離れないように抱い

ているのを確認しながらネロもいっばいに伸ばしたシートベルトを腰に巻くと手すりを掴み、左手でブルーローズを握る。

【振り落とされんなよ！】

ヴァイスの声に小さな笑みを浮かべると、撃鉄を起こし魔力を収束させ：引き金を引き、青白い二発の魔力弾が射出された。

一方で廃棄都市区画の中：地上では巨大な甲虫《地雷王》の触角の部分に集まった電流が地面に伝わり凄まじい轟音の響きと共に地面が沈下させた。

地下にいた時に感じた地響きの正体は《地雷王》が発生させたもののだが、ルーテシアはガリューと共に黙って見ている。
唯一アギトだけがそれに顔をしかめていた

「ルーラー、やりすぎじゃねーか？ レリックはこっちにあるけど、あいつら死んじまうかもしれねーぞ？」

「これはあくまで足止め：魔剣士さんも魔導士もこのくらいじゃ死なない：」

一応は心配していたアギトにルーテシアは相変わらずの無表情で冷やかに返した。

アギトもその返答ぶりに少し引ききみ

「だろうけどさ：あと何でいつもあの男の事、《魔剣士》って言うんだ？ 変態科学者もナンバーズの奴らも“赤い狩人”^{ハンター}って言うってただろ？」

「俺もそこは疑問だな」

腑に落ちないアギトの話に付け足すように聞こえた声の方を振り向くと、地下から上がって来たダンテが立っていた。

大剣を背中に刺して何時もの赤いラバーコートを着ているが、背中の部分はガリユの爪によって大きく引き裂かれている。

「デメエ…！」

ガリユがルーテシアの前に、アギトも構えて警戒する中でダンテは一步一步ゆっくりと近付く

「別に何と言おうが勝手だが… 俺は魔剣士じゃ…」

言い終わる前に背後から地面を突き破り濃い青と水色のウイングロードに登り、青髪の少女が二人駆け巡る。

濃い青のウイングロードをギンガが《ブリッツキヤリバー》で、水色のウイングロードを妹のスバルが《マッハキヤリバー》で走る

「あっちも出れたみたいだな」

ウイングロードを駆ける二人を見ながら歩く

飛び込んで来たガリユを剣で応戦するが、その姿はあまりにも悠々とまるで自分に襲い掛かるものなどいないようだった

「下がれ、ガリユー!!」

ルーテシアの隣にいる少女の姿をした赤髪のユニゾンデバイス、アギトの両手には真っ赤な炎が灯り、大きさも温度も上げながら燃え

たぎる

「猛れ炎熱っ！！」

アギトの手の炎が一気に巨大化し、

「烈火刃っっ！！！！」

ダンテ目掛けて投げ付けた。

彼も避ける素振りなど見せずに歩み続ける。

炎は着弾し、目標の周囲を高温で包み込んだ。

「よし！今のうちに……」

振り返った瞬間、アギトの動きが止まった。

ルーテシアの首筋にはオレンジ色の刃が突き付けられ、ガリユーの体にもピンク色の光を放つ鎖^{チェイン・バインド}が巻き付いて身動きを取れなくなっている

「動かないで」

幻術で姿を消していたティアナが姿を表した。

ルーテシアの首に魔力刃を突き付けたのは彼女で、今のクロスミラージュは形状が変わり、グリップをカバーするようなナイフ《ダガーモード》になっている

「手荒でごめんね……でもそれ本当に危ないものなんだよ」

ルーテシアは目だけをティアナに向ける。

今度はバインドで動けずエリオにストラダーダを突き付けられている

ガリユー、下手に動けないアギトを見た

足元に魔方阵を広げているキャロは炎に包まれたダンテを気にしている

無言のままレリックの入ったケースをティアナに渡すと、空を見上げた

『スバル！』

『何！？』

ウイングロードを駆けるスバルとギンガが向かったのはネロの乗っているヘリ

デバイスの情報からヘリの周りには無数のアンノウン《悪魔》が取り囲んでいる事を知り、応援に向かっていた。

『ヘリの方はどうなってる！？』

『もう少し… あ！』

スバルの目にしたのは後方のハッチからブルーローズで応戦するネロ

魔力弾は悪魔の顔面に命中し消滅して行くが、まだかなりの数がある

『見えた！』

リボルバーナックルのスピナーが高速で回転を始め、ギンガを見た。彼女も左腕に装着した白いリボルバーナックルのスピナーが回転している

姉妹と言うだけに念話をするまでもなく以心伝心しているようだ

「行くよ、ギン姉!!」

「行くわよ、スバル!!」

左右に別れると、悪魔の顔面に互いの拳を叩き込んだ
悲鳴と笑い声を上げながら消滅して行く悪魔から次の狙いを定めて
動く

「廃棄都市区画内での破壊行為、及び危険魔法の使用で…」

バインドで腕を縛られたルーテシア、ガリユー、アギトの前にいる
ティアナ

アギトはずっと睨んでいるが、ルーテシアは目を瞑って慌てた様子
は見せない

『やべーぞ、ルールー。でかい魔力がこっちに近付いてる』

アギトが念話を飛ばすが何も応えない

『おい、聞いてんのかよ、ルールー?』

「こいつらか?」

そうこうしている内にスターズ分隊副隊長のヴィータが舞い降りた。
そばにはリインもいる

「ヴィータ副隊長!」

「わりい、来る途中に出くわしたアンノウンに邪魔されて遅れちま
った」

グラフアイゼンを肩に担ぎ、ルーテシアに近寄る
彼女はまだ平常心のままだ

「話は聞いてると思うがお前らを逮捕…」

「おお！ また真打ち登場か？」

声のした方を向くと、そこにいたのはダンテ

「なんだよテメーは？」

「ただの一般人だ」

「ただ一般人がこんな所にいるわけねーだろうが！！」

「そっちこそただの子供には見えないな」

ダンテの減らず口にヴィータが詰め寄ろうとするが…

「いつの間に！？」

「さっき炎に包まれたはずじゃ！？」

驚き、声を上げたのはキャロとエリオ

「まあな。なかなか暑かったぜ？ おかげでコートが完全にダメになったけどな」

ガリユーの爪で引き裂かれた上に、アギトの炎によって自慢の赤い

コートは焼け焦げて所々黒ずんでいた

炎の中にいたはずの男が道路脇に腰掛けていたのにはティアナ、エリオ、キャロ以外にもアギトも驚いている
ただ一人を除いて…

「そんなのだおでもいい！！　おい、テメー！　ID見せろ！」

「そんなもんじゃない」

「ざけてんのか！！」

「無いものはない。あるのはなけなしの金と後…」

ふざけた態度でいるダンテに苛つくヴィータ

ダンテがポケットをあさり、右のポケットから数少ない所持金を見せ、左のポケットから赤い光を放つレリックを見せるがすぐに仕舞う。

それを見たヴィータもグラーフアイゼンを構えた

「そう言えばその人もレリックを持ってます！」

思い出したようにエリオの声を聞きながら警戒を止まない

「何だ？　やっぱりまずいもんなのか？」

相手の様子など気にせず歩くダンテ

だが、ヴィータが振りかぶったグラーフアイゼンを一気に叩き付け、地面にヒビを入れる

「礼儀がなってねえな？　嬢ちゃん見てると“あいつ”を思い出す

よ」

間髪入れずに振るう鉄槌をかわし、話を続ける

「うらああああー！ー！ー！！！」

「いきなり襲い掛かって来る所とか…」

グラーフアイゼンが空を切り、風切り音が聞こえ…

「無鉄砲で！ 直情的で！ 口の悪い所とか… な！！！」

全ての攻撃をかわし、地面に叩き付けた所のグラーフアイゼンの槌の部分を踏み付けて押さえた

「このっ！！！」

ヴィータが手に力を込めるがびくともしない

「動け…！」

遂にはグラーフアイゼンごとダンテを振り上げた。

だが、その力を応用してルーテシアとティアナの前まで跳ぶ

「てなわけで… 危ないもんだから止めとけてさ」

ルーテシアを見ながら言ったのに、その場にいた皆が呆気に取られた。

危害を加えるのではないかと思っていたティアナやエリオ、リインに投げ飛ばしたヴィータ、縛られているガリユーとアギトでさえそ

う思ったが…

「よく分からないが… 確かに魔力は感じるな…」

「え？ あれ!？」

いつの間にか持っていた筈のレリックケースはダンテの手に。
ケースを開けて手にしたレリックを太陽にかざして見ている。
一見すればただの赤い宝石… しかし、実体は下手をすれば世界を
滅ぼす事が出来る程危険な代物

「止めないよ…」

その言葉を聞き、皆が顔をしかめる。

「おいおい、強情だな？」

呆れ顔のダンテ
後ろから自分の脳天目掛けて振るわれたグラーフアイゼンを剣で受
け止める

「それより…」

バインドで縛られたままルーテシアがダンテに近寄る
攻撃の意思はないようだが、ティアナが万一の為にデバイスをダン
テとルーテシアの両方に向けた

「逮捕はいいけど… 大事なヘリは放っておいていいの…？」

それにティアナやヴィータも我に帰った

スバルとギンガが向かったとは言え、慣れない相手で場所も空中、数も多い

「あなたは… また守れないかも…」

「テメー!!!」

微かに動かした顔の先にいたヴィータ
突然彼女が激情し、ルーテシアの胸ぐらを掴む

「おいおい、おっかねえな」

声を荒げた赤い服を来た少女を見ながらの言葉。いつもと同じでマ
イペースだが…

「何だ…?」

込み上げて来る違和感…
何とも言えない感じ…

「遠くから…?」

彼の研ぎ澄まされた超感覚が教える…
危険が迫っていると…

「魔力反応!?!」

同じく危険を察知したヴィータもルーテシアの胸ぐらを掴んだまま
遠くを見る
微かに見えるビルの屋上から発せられるオレンジの光…

「照準は…　へり!？」

ティアナの見た先にあるのはネロとシャマル、レリックを持っていた少女を乗せたへり
近くにいた筈の悪魔も一斉に離れ、へりの近くにいたスバルとギン
ガも離れ始める

「推定…　オーバーSランク!？」

クロスミラージュの情報からどれ程の危機的状況かダンテには分からないが、ただ事ではないのが分かる

「あの感じは…」

微かに感じた魔力…

へりの中から感じるものにダンテは覚えがあった。
それは…

「黒い魔剣士さんがあのへりに乗ってる…」

「チッ！　やっぱりか！」

自分の感じていたのは正しかったと悟り、ダンテが駆け出す。

「あの！　ヴィータ副隊長!!」

ダンテに続いてヴィータが…
赤い二つの影が疾走する

「坊や!!」

「シャル!!」

ダンテが地を蹴り、ヴィータが飛び… 叫んだ。
いくら二人でも距離が離れ過ぎている。

遙か遠方から発せられたオレンジの光は収束され、
へり目掛けて撃ち出された…

Episode..28 Red〈狩人と騎士と〉〈後書き〉

〜第29話予告〜

「ネロさん!」

「スバル!？」

駆け付けたのは青髪の少女と…

「あなたがネロさんですか？」

彼女と同じ髪と瞳の色をした少女…

E p i s o d e . : 2 9 \ B l u e **〈黒騎士と魔導士と〉** **（前書き）**

駆け付けた姉妹の魔導士…

三者の放つ青い光は魔を迎え打つ…

Episode..29〈Black Knightと魔導士と〉

「行くよ、ギン姉!!」

カートリッジロードし、背後から悪魔の顔面に拳を叩き付けた。

死神は悲鳴と笑い声を交えて消え去って行く。

悪魔に取り囲まれたヘリの助けに駆け付けたスバルとギンガ

「ネロさん!!」

開いた後方のハッチからブルーローズを手に青白い魔力弾を撃つネロ
悪魔は縦横無尽に飛び回り、自分は後方しか相手が出来ていなかった為、まだ悪魔の数は多い。

「スバル!!」

空中に足場を作ったウインググロードに乗ったスバルを見ながら新しいカートリッジを装填する。

「前の相手してくれ! 後ろは俺が!!」

リボルバーが回転し、二発のカートリッジをロードして風を纏った魔力弾を撃ち出した。
だが、

「またかよ!!」

容易くがされてしまい、悪魔達は嘲笑う。

「クソッ!!」

シートベルトで落ちる事はないが手すりを掴んでいた右手を離し、ヘリの壁に打ち付けた。殴った影響で一瞬ヘリが揺れるが、ネロは気に止めずに魔力弾を撃ち続ける。

「あの… ネロさん？」

「何だよ!？」

スバルが戸惑いながら聞くが、彼はどうも怒っていた。撃ってはかわされて一更に命中しない為、苛立ちが込み上げている

「大丈夫ですか？」

「見りゃ分かるだろ!!」

イライラは最高に達するのは目の前に感じた。

「ちょこまかしやがって… おい!!」

いつの間にかスバルの後ろにいた悪魔が気配を消して大鎌を振りかぶっていた。

ブルーローズの引き金を引こうとするが、魔力弾を打ち出すよりも前に死神の仮面が叩き割られた。

「ギン姉!!」

「スバル、ぼさっとなしの!」

ギンガがスバルに駆け寄り、彼女よりも色濃い青のウイングロードを駆ける。

「う、うん。じゃあ前は私とギン姉が…」

水色のウイングロードを駆け、スバルが前に出た。

ギンガが蹴りを、スバルが拳を死神目掛けて叩き付ける

同じ廃棄都市区画：

遙か離れたビルの上で二人の少女がいた。

一人は栗毛の髪を後ろで結った少女：茶色のマントを身に付け、手には巨大で長い“何か”を持っている。

判別しようにも布を巻いているので何を包んでいるのかはわからない。

その少女の後ろでは茶髪の髪を二つに結った少女が座り込んでいる。枠の無い眼鏡をかけて、何やら楽しげに足をパタつかせていた。

「始まった…」

栗毛の少女が静かに口を開く。

顔は無表情だが、長い後ろ髪とマントが風で靡き…目に内臓されたカメラが音を立てた。

「このおおおおお！！」

スバルのリボルバーナックルから凄まじい金属音と火花を放ち、デスサイズの鎌とぶつかる。右手が塞がった状態から左手で持った鎌を振るうが、斬るよりも前にマッハキャリバーで蹴り飛ばし二発のカートリッジを排莢する。

「一撃いつ！ 必倒おおおっ！」

左手に収束させた魔力をデス サイズの顔面に押し付け、死神が悲鳴を上げる

「デイベイイイーーーーーン……」

拳とぶつかりあっていた鎌にヒビが入り……

「バスタァアアアアーーーーー！！！！！」

無理矢理押し切り、収束させた魔力スフィアに右拳を叩き付けた。デイベインバスターの斜線上にあったデス サイズの仮面……更に後方にいた悪魔もろとも巻き込み黒い霧になり、無に返す

「はああああっ！！！」

ギンガも悪魔との戦闘があつたらしく、ネロのもたらした情報をスバルから聞き、慣れた様子で悪魔を迎え打つ。

鎌をかわし、受け流しながら的確にシン シザースの仮面を破壊した。

「やるな…… あいつら……」

魔力弾をメフィストの顔面に撃ち込み、シャマルの前にあるモニターに目を向ける。

「あなたのおかげよ。情報がなかったらこうは行かなかったわ」

眠ったままの少女を抱きながらシャルがぎこちなく笑う。
ヴァイスも悪魔の攻撃を避けながらヘリを操縦しているので中は酷く揺れていた。

「なのはちゃんが鍛えてるんだし、ギンガは… もう一人の子はスバルのお姉さんなんだし」

「へえ、あいつ姉妹いたんだ。どおりで似てる… ワケだ!!」

ポケットからカートリッジの収まったクイックローダーを取り出し、シリンダーの中に込めて迎撃を再開した。

「安定してないんだし喋ると舌噛むぞ？」

シャルを見ないまま言うが、彼なりに気を使っているのだろう。

「クソッ…!」

舌打ちの後に小言を漏らした。
いくら撃ってもキリがない。

今は悪魔の相手をしているのでイラついていたのだが、彼はもう一つ気に掛かっている事があった。

『ダンテ…!』

右腕がその存在を覚えてくれる…
彼がいるという事を…

「きゃあああっつ…!!」

振り向けば壁を通り抜けた赤い針が10本。
その先はシャルと少女に向けられている
壁から姿を現したファウストが赤い指が二人に迫るが…

「離れな！」

ネロが右手でファウストの頭を掴み、ブルーローズの銃口を押し付ける。
体を覆っている霧を取り払わない以上はファウストに攻撃は効かない。

無闇に撃てない以上にとった最善の選択はゼロ距離射撃。

周りに被害は及ばず、彼の取ったファウスト相手に最も効果的な方法…

至近距離で撃ち込んだ魔力弾はファウストの頭に命中、すぐにヘリの外に投げた。

「爆^はぜろ…」

投げ飛ばされたファウストが再びヘリ目掛けて赤い指で攻撃を仕掛けようとしたが、眩きと共にファウストの頭が爆発する。

撃ち込んだのはただの魔力弾ではない。上限いっぱいまで注ぎ込んだ魔力がファウストの体の中を駆け巡り、時間差で爆発を起こさせたのだ。

「銃があればチョロいな」

不敵に笑ってみせた顔を見てシャルは呆気にとられている。

ネロが六課に来てまだ数日

彼の力量はどれ程のものか彼女は知らない。

ガジェットのような機械相手よりも悪魔と戦っている時の彼の姿は

心無しか生き生きと： 何処か楽しんでいるようにも見えた。

「外も大分片付いたみたいだな？」

先程よりも疼きは小さくなっている。

外で戦うスバルとギンガのおかげである事を分かりながらそれを口にした

「もう殆んどがやられてる…」

「あゝらゝ、流石は魔剣士の血族。管理局の魔導士もやるみたいねえ？」

栗毛の少女に続き、眼鏡を掛けた茶髪の少女が猫なで声で言う。

「そろそろ潮時だ…」

栗毛の少女がマントを取り払い、手にしていた物から布を外した。
現れたのは巨大な狙撃砲： 長さは2メートルを超える程ある

「ディエチちゃん？ よく狙ってねえ？」

猫なで声で言う少女の方を向かずに栗毛の少女“ディエチ”は遙か遠方にいるへりに狙いを定め、目の中のスコープが機械的な音を立てる。

「分かってるよ、クアットロ。空気も澄んでよく見える…」

眼鏡を掛けた猫なで声の甘ったるい声で喋る少女“クアットロ”に返しながら『イノメスカノン』に魔力を注ぐべく、足元にオレン

ジ色の歯車が複数交差した魔方阵のようなもの… 《テンプレート》を展開させる

『はあゝい、ルーお嬢様…?』

クアットロが立ち上がり、ティアナ達に捕まっているルーテシアに念話を送る

『クアットロ…』

『もうすぐそちらに迎えが行きますんでそのまま置いて下さゝい。あと、チビ騎士とスパイダの息子を足止めさせる為に私の言う通りに言って下さゝい』

『分かった… それとレリックは9番だったよ… 私は持ってなくて魔剣士さんが持つてる…』

ルーテシアの探しているレリックは11番。ダンテが最初に持っていたレリックも、今持っているレリックも彼女の探しているものではない。

一応は情報を送ると、クアットロが口元を歪めて笑う

『レリックはもういいとドクターから通信がありました。それじゃあ私の言う通りにチビ騎士に言って下さゝい』

そして、クアットロの言う通りにルーテシアが言葉を発する…

『「あなたは… また… 守れないかも…」』

後ろで喋っているクアットロの言葉は魔力を《イノーマスカノン》に充填させていたディエチの耳にも入っていた。

だが、彼女は目標通り、ネロが乗っているへりに銃口を向けたまま

「なあ… 本当にやっちゃっていいのか？」

魔力を注ぎながら一応はクアットロに尋ねた。

「いいのよ。聖王の器も黒騎士もこのくらいじゃ死なないから。悪くても死体… 最低でも遺伝子情報が手に入ればいいし」

「了解…」

ディエチの足元に展開されたテンプレート之光が強まり、イノーマスカノンの銃口からも強い光を放つ

「IS… 《ヘヴィバレル》…」

目標をへりに向け…

「発動…！」

引き金を引き、巨大な砲撃から凄まじいオレンジの魔力砲が放たれた…

Episode: 29 〈黒騎士と魔導士と〉 (後書き)

〈第30話予告〉

「高エネルギー反応!？」

迫る危機…

「やるしかないか…！」

決断の時…

「ネロさん… それ…？」

露になる《悪魔の右腕》…

E p i s o d e . : 3 0 〈 Silver Wolf 銀狼 〉 (前書き)

獣が狩りを始める時、己の持つ牙と爪こそが最大の武器にして最大の防衛…

鼻で臭いを嗅ぎ付き、耳は音を聞き分け、鋭い眼光は目標を射抜く…

Episode: 30 Silver Wolf 〈銀狼〉

「ネロ!!」

フェイトが叫ぶ

「くっ…! どいて!!」

ヘリを守るべく飛び込もうとしていたなのはの前には無数の悪魔が立ち塞がり、行く手を阻む

【八神部隊長! ヘリが!】

「誰か間に合わへんの!？」

【駄目です! 推定オーバーSランク魔法、誰も…】

はやてが広域魔法でガジェットを破壊し、急いでネロとシャマルが乗っているヘリに向かいながらバックヤード陣のアルトと通信を取るが、今の現状は厳しい… 厳しすぎる

【間に合わな… ああっ!!!】

放たれたオレンジの砲撃がヘリに直撃し、爆煙と爆音に包まれた…

「IS… 《ヘヴィバレル》…」

ディエチの見据える先にあるヘリ。

【魔力反応!?!】

【大きい!?!】

悪魔と戦っていたヘリの前にいるギンガとスバル。

ディエチの目には映った二人の姿が届き、声も聞こえる。

彼女達と対峙していた悪魔が一斉にヘリから離れた。

ギンガとスバルに恐れをなしたのではない。元々これが作戦… ディエチの魔力チャージが終わるまでヘリを足止めするのが目的だった。

だが、その作戦も終了。

なぜなら…

「発動…!」

ディエチの収束された魔力が固有武装から撃ち出された。
イノーマスカノン
凄まじい光が一直線にターゲットであるヘリに突き進む

「シャマル!!」

仲間であり、主はやての守護騎士である彼女の名を叫ぶヴィータ
手を伸ばした先には魔力砲撃が着弾しようとしているヘリがある。

「…」

同じく駆け出していたダンテが足を止めた…
諦めたのではない…

「坊や…」

見詰める先には煙に包まれたヘリ…

彼には分かる。感じるのだ… 彼は… “ネロ”は死んでいないと…

「…どうなってやがる…」

ヘリを操縦していたヴァイスは恐る恐る目を開ける。

周囲は煙に包まれているが砲撃は着弾したわけでも、墜落… 死んだわけでもない。

「ネ…ロ…?」

唯一何が起こったのか見ていたのはシャルだけ

彼女は意識の無い少女を抱いたまま、ネロの背中を見ていた。

彼は“右腕”を前方に突き出し無言で立っている。

《悪魔の右腕》からは青白い光を放ち続けていた…

…

『大分減ったな…』

時は遡り、砲撃が撃ち出される前…

ネロは溜め息を吐きながらリボルバーの中から空薬莢になったカー

トリッジを排莢するが、強力な悪寒と右腕の疼きを感じ取った。

右の窓から見える微かなオレンジの光…

どんどん強さを増して行く。

『うそだろ…』

構えていたブルーローズにカートリッジを装填しようとしていた右手には物を掴む感触は無い。

ポケットの中にあつたカートリッジを全て使い果たしていた。急に呼ばれた為か持っていたカートリッジの数が少なく、悪魔相手に弾切れを起こしてしまった。

これも悪魔の作戦。近距離ではなく、遠距離から戦う事でカートリッジを使い果たさせるというのもそうである。

『ネロさん!!』

ウイングロードを駆けるスバルがネロの前に来た。

開いたハッチの所にいるネロが険しい目付きでブルーローズにを腰に突っ込む。

『悪魔が急に離れて…』

慌てるスバルを見ずに彼はゆっくりと腰に巻いたシートベルトを外す…

『スバル…』

ネロが見ているのは遥か遠くにある光…

険しい顔のまま静かに口を開いた…

『早く離れろ…』

『え!?!』

落ち着いた口調… 目線の先には包帯を巻き、グローブを着けた右腕

『でも!!』

『スバル!』

スバルの所に来たギンガが早く離れるように促す。

『あなたがネロさんですか!? 話は聞きました。出来るか分かりませんが私とスバルで防壁魔法を使ってヘリを守ります!!』

『やれるか分かんねえ事ならするなよ…』

ギンガの話を聞きながら右手に嵌めたグローブを外す

『早く離れろ!!』

足元に青と水色のベルカ式魔方陣を展開させていたギンガとスバルがビクツと反応し、後ろを振り向いた。

『時間がねえ!!』

ネロは肩の部分の包帯の結び目に手を掛けて包帯をほどき始める。

『ネロ! あなた… まさか!?!』

後ろにいたシャルの方をゆっくり振り返り、小さな笑みを浮かべた。

『そのまさかだよ…!』

結び目をほどき、《悪魔の右腕》が露になる…

だらんと下げていた右腕を斜め左上に斬り上げ青白い魔力を込めた斬撃を飛ばし、ディエチの砲撃とぶつかりあう。

オレンジの巨大な砲撃と青白い小さな三日月型の斬撃…

余りにもネロの方が不利に思えた…

衝突の瞬間、凄まじい爆発にシヤマルも手で目を覆ったが、片方の目には指の間から微かに見えていた。

《閻魔刀》を瞬時に左手に持ち変え《悪魔の右腕》を前方に突き出すネロの姿が…

…

「どうおう、ディエチちゃん？」

「黙って… 今、確認中…」

クアットロの言葉を冷ややかに返しながらディエチがイメーカーカスカノンを肩で担ぎ、爆煙に包まれたヘリを見詰める。

次第に煙が晴れて行き、そこから見えて来たのは巨大な青白い右腕…

【クレドの“盾”が役に立ったな…】

聞こえて来たのはネロの声。

着弾したと思っていた砲撃は掻き消され、青白い巨大な《デビルブリンガー》に衝撃は防がれた。

アイギスの盾…

あらゆる邪難と災害から守ると言われる力を秘めた盾である。

デビルブリンガーが消え、ネロも閻魔刀を右手に持ち直した。

「そんな!？」

ディエチの目には再び刀を構えたネロの姿が見えた。

大きく振りかぶり、顔の前にある右腕には青白い光が纏われ…
腕で隠れて見えない口の代わりに見えた青い瞳が赤に染まる…

【らぁあっ!!!】

「えっ!？」

横薙ぎの一閃により飛ばされた斬撃。

狙いは直線上にいるディエチとクアットロ… だったが、距離も離れすぎている為か命中せず、ディエチとクアットロのいる隣のビルに直撃。

一本のビルを破壊するだけでは留まらず、次々に倒壊させて行く。

「逃げるわよ、ディエチちゃん!!」

クアットロもネロの力が想像以上だったのか慌ててイノームスカノンを構えたままのディエチに駆け寄る。

ディエチは瞳から赤い光を放ち、右腕に青白い光を纏ったネロの姿に釘付けになっていた。

【外した…】

再び右腕から強い光を放ちながら構えを取り、今度は左手も柄に添えて両手で持つ。

「ディエチちゃん!」

「わあっ!!?」

何回読んでも返事をしないのでディエチの肩に手を置いたクアットロ。

ようやディエチも我に返ったのだが、咄嗟にイノームスカノンをクアットロに向けてしまった。

「ちょ、ちょ… ちよっと! 何するのよ!」

「え… あれ… クアットロ?」

呼び掛けると銃口を向けられてしまったのに焦るクアットロから狙撃砲を下ろすディエチ。

「いきなりお姉さまに何するつもり!?」

「ごめん…」

顔を附せたディエチが立ち上がり、クアットロの隣に来る。

あの自分を向けられた瞳に射ぬかれて僅かな間だが、彼女は身動きも取れなかった。

「と、とにかく! 足止めは悪魔に任せて私達は帰るわよ。お嬢様はセインちゃんが迎えに行っだし、管理局が来る前に私達は…」

突然遠くから聞こえた銃声に続き、弾丸がクアットロの髪を掠めた。片方の髪止めが弾き飛び、屋上の壁に鉛弾がめり込む。

「え?」

二人は遠くを見た。

ディエチは目に内蔵されているカメラをズームにし、ヘリを見る。

【適当にやったけど、やっぱり当たんねえなー】

ヘリの後部ハッチにいる銀髪の男が担いだ刀をトントンと軽く肩に打ち付ける。

【…にしても…】

ネロが目線を下に落とす。

【マジで撃つか？ まあ、この距離でもあいつには関係ないだろうけど…】

ネロの顔の先にディエチも目を向ける。

そこにいるのはもう一人の銀髪の男^{ダンテ}

左手に持った黒い銃の銃口から煙が上がっていた。

【かわいい顔してやる事はえげつねえな？】

ダンテが撃鉄を起こして銃口を自分に向けられているのに気付き、ディエチの身に戦慄が走った。

「こっちに気付いてる…！」

隣のクアットロが慌てふためいているのを知ってか知らずかディエチが呟いた。

【坊やも当たるかもしれないのにあんな事しやがって…】

引き金を引き、音速で飛び出した弾丸がディエチの持っているイノ
ーメスカノンに命中する。

「あ…」

【俺は外さないけどな！】

ディエチが不意に声を漏らした頃には弾き飛んだイノーメスカノン
に次々に弾丸が命中し、一瞬で使い物にならなくなった。

【ハッ！】

次に釘付けになったダンテの姿がディエチの目に映る。

クアットロには見えていないが、二人とも呆然と立ち尽くしていた。
ディエチは今回の任務はヘリの狙撃と聖王の器と黒騎士ネロの捕獲とし
か聞いていなかった。まさか黒騎士ネロと赤い狩人ダンテに意識を持って行か
れるとは…

「附せて！ もうすぐ迎えが来るってドクターが言ってたわ！」

クアットロに無理矢理頭を抑えられ身を屈めるディエチ

彼女の中では混乱が渦巻いていた。

銀髪の二人には自分の居場所が… 少なくとも一人には完全にばれ
ていた。

（拳銃でこんな距離まで正確に撃つなんて…！？）

狙撃に失敗し、更には反撃まで許してしまった彼女に獰猛な獣二匹

が目を光らせる…

E p i s o d e . : 3 0 〉 S i l v e r W o l f 〔銀狼〕 〔後書き〕

〈第31話予告〉

「狩りの時間だ！」

「普通撃つか？」

「お前と違ってヘマはしないんだよ」

「そうかよ…」

二匹の獣が動き出す…

Episode..31\Again〈運命の再会〉\（前書き）

《魔剣士》の血は二人を引き寄せる…

その再会は運命にして、これから始まる戦いの本当の幕開けを教えるものだった…

Episode..31(Again)〈運命の再会〉

(ありえない！)

ディエチは混乱していた。

彼女がいるビルの上からダンテのいる所まで余りにも距離が開きすぎている。

だが、彼は拳銃一丁で正確にイノーマスカノンを撃ち抜いた。

「まさかこれほどなんて…！」

ディエチと一緒にいるクアットロも驚愕しながら不意にそう漏らす。彼女はディエチと違い、スカリエッティからスパードの血を引くダンテとネロの話を聞いていたが、二人の実力は予想を遥かに越えるものだった。

ディエチのISと互角の威力の斬撃を放ち反撃したネロ、クアットロの髪止めを弾き《イノーマスカノン》を破壊したダンテ。

(これが…)

俯き未だ混乱したままのディエチの肩を掴んだままのクアットロがヘリを見た。

(スパードの力…！)

遠方に見える小さなヘリは何もなかったように飛び続けている。

(すごい…！)

先程までの驚愕と恐怖は歓喜に変わる…

「さてと…」

ネロは《閻魔刀》を下ろし、ヘリの下… 地上を見た。

いるのは自分が世話になっている機動六課の前線フォワードメンバーのティアナ、エリオ、キャロ、フリード、ヴィータにリイン。ダインとバインドで縛られた紫の髪の少女と黒い人型の異形に… リインと同じくらい小さな小人の赤い髪の少女。

「あの…」

つい忘れていたスバルがウイングロードの上を駆けてネロに近づく。何か言おうとしているようだが、彼女を見た瞬間にネロは反射的に右腕を背中に戻した。

（チッ…!）

心の中では後悔している。

ああするしかなかったとはいえ、《悪魔の右腕》を見られた。隠し通すのは無理なことだと分かっていた事だが、一週間も経たない内に知られてしまった。

「ネロ…さん…」

スバルが必死で言葉を見つけようとしていた所にギンガも駆け寄る。二人の目は隠しきれしていない上腕の部分に向けられていた。ネロも彼女達を見ないまま左手で二の腕を掴む。

「その腕…」

「おい!!」

勇気を振り絞って言おうとしたスバル。

だが、突然声を張り上げたネロの言葉によって遮断されてしまった。彼が今見ているのは目の前にいる姉妹でも、後ろにいるシャルでも、地上でヘリを見上げているティアナ達……ましてや自分を睨んでいるヴィータでもない。

「ダンテ!!」

ネロが見ていたのは遂に再会を果たした《赤の男》ダンテ。

「よお、坊や！ 久しぶりだな？」

ダンテも左手に持った銃を肩に当て、右手を挙げて軽く挨拶する。

「いきなり撃つなんて何考えてんだよ!!」

ネロが左手で右腕を押さえたままヘリのプロペラが回転する音に声を掻き消されないように叫んだ。

「そう言うそっちこそ何考えてんだ？ ヘリを守ったのは分かるが、その後のやつは余計だぞ！ 下手すりゃ向こうに当たってたかもしれないんだぜ？」

ダンテもヘリの方に近付きながら声が届くように声のボリュームを上げる。

「ただの警告だよ!! 　まだやるってんならこっちも反撃するって

意味でな!!」

「俺にはカッとなって反撃したように見えたがな?」

ティアナ達はその様子を黙って見続けていた。

言いたい事は山ほどあるが、下手には動けない。まだ何が起こるか分からないし、拘束したルーテシアから離れるわけには行かず、ただ二人の会話に耳を傾けていた。

「あんたこそ銃なんか撃ちやがって反撃じゃないのかよ!!」

「俺はその警告とやらをして怒らせちゃったかもしれない嬢ちゃん達に本当の意味で警告しただけだよ! 動けば撃つ、撃つなら容赦しないって意味で向こうの武器を壊させてもらった!」

「嬢ちゃん!?!」

それに反応し、ネロはヘリから飛び降りた。

地上から20メートルの位置を飛んでいた所から彼は躊躇なく身を下ろす。

バリアジャケット無しで無茶もいい所だった。

今しがた目の前にいたネロが突然動いたので反応に遅れたスバルとギンガが手を伸ばそうとするが、当の本人は難無く着地してダンテに歩み寄る。

「嬢ちゃん“達”な?」

「そうじゃない!」

我を忘れてか、ダンテの前だからか、ネロは右腕を隠さなかった。

少し苛つきながらダンテと向き合う。

「女がやったのか!？」

「ああ。まだ若い： 坊やと同じ年くらい： いや、もっと若いな」

ダンテは銃をホルスターに仕舞い、腕を組むと顎でディエチとクアットロがいるビルをさした。

「二人とも茶色の髪でさっきのをぶっぱなしたのは長い髪を後ろで束ねた嬢ちゃん、もう一人は髪を二つに束ねて眼鏡かけた嬢ちゃんだ」

「分かんねえよ：」

ダンテがそう言うがネロには全く分からずに眉を吊り上げる。

「だからあれだよ!」

「“あれ” じゃ分かんねえよ!」

苛つくネロに溜め息を吐き、組んでいた腕をほどく。

「あのビル分かるだろ？ あそこの屋上に二人いるじゃねえか」

「ビルは分かるけど見えないって言ってるだろ」

ダンテが指さす先にネロが眉間にシワを寄せて見詰めるが、彼の肉眼では確認出来ない。

「見えない」なんて一度も言っていないだろ？」

ネロを見ながら小馬鹿にしたように鼻で笑っていた。
それに彼もつい舌打ちしてしまう。

「悪魔じゃないんだしマジになるなよ。相手は人間だぞ？ まあ、俺は女運が悪いつて事でやられる前にやっちゃまえ…ってのはやり過ぎだから武器を使い物にならなくさせてもらった」

「人間？」

「そうだ。やっちゃまうのはまずかったからそうしたんだが… やっぱやり過ぎたか？ 油断したら酷いめに会ったのが大抵は悪魔と女絡みの事ばっかだったし、流石にまた“あんな事”になるのは俺も勘弁だったんだが…」

昔の事を考えながら左手で顎と口周りの無精髭を触る。

「やっぱやり過ぎたか？」

「かもな!？」

ダンテはネロを見たが、ネロは遠くのビルを見たまま応えた。

（人間？ …て事は“魔法”か？ でもさっきは確かに…）

彼には疑問が残っていた。

ディエチの《ヘヴィバレル》を察知した時に確かに右腕が疼いていた。

彼も砲撃して来たのは悪魔だと思っていたのだが、どうやら違うら

しい。

“あの” ダンテが言うのだから間違いないのだろう。

「あの！」

声をした方を振り向く。

そこには空中から地上に降りてきたスバルがいた。
後から姉のギンガも彼女の後ろに降りて来る。

「二人はどお言った関係で……」

「よお、嬢ちゃん！ 俺の倅せがれの新しい友達か？」

「誰が倅だ……！」

ダンテが突然意味不明な事を言ったのでネロも即座に否定する。

「なんだよ？ 軽いジョークだろ？」

「冗談なんかいつてる場合じゃないんだよ……！」

ダンテの胸ぐらを掴み、頬をひくつかせながら溜め込んだ怒りが爆
発寸前のネロ。

それにダンテも手を振って「わかったわかった」と言い、ネロも乱
暴に掴んだ胸ぐらを離した。

「親子？」

「だから違う！」

「でも似て…」

「似てない！」

スバルとギンガの言葉も全力で否定すると、まだ苛つきながら頭を掻いた。

「お父さんなんですか？」

少し離れた所にいるエリオの言葉に過剰に反応すると、鋭い眼光で睨み付けた。

「そうじゃねえだろうがっ！！！」

急な展開に飲み込まれていた全員が叫んだ少女… ヴィータの方に注目を集める。

彼女は目線の先にいる二人の銀髪の男にズカズカと歩み寄るとグラ―フアイゼンを突き付けた。

「言いたい事は山ほどあるが単刀直入に言う！ テメーらナニモンだ！！！」

「ただの一般人」

「ざけんな！！！」

ふざけた調子のダンテに今度はヴィータが怒りをぶつける。

「テメーもソイツもタダモンじゃねーって事ぐらいわかってんだよ！ テメーもソイツと同じ…」

ネロの右腕とダンテの存在を忘れていた皆が本当の問題を思い出した。

同じ銀髪をした男、一人は若く《悪魔の右腕》を持つ男。もう一人は謎に包まれた《赤の男》

【悪魔の血を引く者だ…】

それに誰よりも早く気付いたのはダンテとネロだった。
ヴィータやスバル達も声が聞こえてからその存在に気付く。

「あれは!？」

「アンジェロ…」

新たに現れたアンノウン…悪魔の存在に気付けなかったギンガにネロは静かに…そして込み上げる怒りを何とか隠そうとしながら言った。

「アンジェロ!？」

「アルト アンジェロ… 高位の天使って意味だ…」

聞いて来たスバルにアルト アンジェロを睨みながらネロは応えた。
《閻魔刀》を握ったままの《悪魔の右腕》からはぼんやりとした光が刀の柄を握り締めるのと共に強い光へと変わる…

「天使ってのは見かけだけで実際は鎧に悪魔の魂を閉じ込めたものだ… やっぱり“あれ”の正体は“こいつ”か!」

ネロの勘は正しかった。

前に会議室で目にした“酷くぶれた二枚の翼を持つ白い天使のようなもの”の正体はアンジェロだった。

「おい、テメー！！ 指揮してるやつ！ 名前くらい名乗れよ！」

【ああ… 君にはまだ名乗ってなかったね？ はじめまして。私の名は…】

アルト アンジェロを操縦（指揮、憑依）していた者が名乗るよりも前に一発の銃声が響いた。

【おやおや、相変わらずだね？ ダンテ】

アルト アンジェロが見ているのは天に向かって手にした白い銃を
アイボリー
発砲したダンテ

「映像の次はエンジェルさんか？」

ダンテの雰囲気が変わった。

つい先程までのふざけた調子ではない。

そこにあるのはネロと同様に悪魔を睨み付け、“狩人”の姿に切り替わった彼の姿だ。

「スカリエッティ！！」

《アイボリー》の照準を何もない空から天使の姿をした悪魔へと切り替え…銃声の後に排出された空薬莖が地面に落ちた…

Episode..31〈Again〉〈運命の再会〉 〈後書き〉

〜第32離予告〜

「ネロさん… その腕…」

「話は後だ…」

《悪魔》と化した右腕…

「手荒いね？」

「これが俺のやり方だ!!」

それは天使…

「坊や! 行くぞ!」

《黒い悪魔》の血族が《白い天使》を迎え打つ…

Episode..32〈Angelo へ天使〉〈前書き〉

それは天使…

美しい白い身と翼を持ったその存在は、誰もがそれを天使だと錯覚させる…

偽りの天使は数多の犠牲と実験によって造られた悪魔であると知っているのは、嘗て“神”に立ち向かい、汚れた魂を持つ悪魔と化した人間を打ち倒した二人の狩人だけ…

Episode..32〈Angelo へ天使〉

「スカリエッティ!？」

フェイトがネロ達のいる廃棄都市に向かう途中、彼女の隣には現地の映像が届いていた。

はやても民間地区に向かっていたガジェットを蹴散らし、悪魔を振り切ったのはも向かっているらしく、レリックを持っていた男はネロの知り合いで“ダンテ”と言う名前らしいとエリオとキャロの念話で聞いていた。

【悪魔なんかに来させないで直接来たらどうだ!】

モニターに映るダンテはアイボリー拳銃を白い天使に向けていた。

フェイトは最初、あの鎧は新しいアルト アンジェロアンノウンかガジェットの類いかと思ったが、ダンテとネロの会話、聞こえる声から察するにアンジェロを操縦しているだけらしいと気付いた。

【私は忙しくてね… こうして君と話しているわけだよ】

【はつきり言ったらどうだ?】

撃鉄を起こし、引き金に指を掛ける…

【びびって来れないだけだろ!】

引き金を引いた瞬間、一発の弾丸が天使に向かって撃ち出された…だが、スカリエッティの操縦するアルト アンジェロが素早い動きでかわし、ダンテ目掛けて飛び掛かった。

剣を手にして柄の部分を持ち、炎を噴き出す：

【無視してんじゃねえよ…】

ダンテが銃を仕舞い、背負う大剣を抜こうとした瞬間、一人と一体の間に銀髪の男が割り込んだ。

《悪魔の右腕》を露にし、《閻魔刀》を握るネロ

「ネロ？」

フェイトは驚いた。エリオの念話からネロの様子が変だと聞いてはいたのだから…

遠くでダンテと話していた時もみんなに右腕が見られないように体で隠していたが、今は隠そうともせずにアンジェロの振るう剣と自身の剣をぶつかり合わせていた。

【これはこれは… すまないね。忘れていたわけではないのだよ？
少し彼と…】

【はあああっ！！】

スカリエッティの話を聞こうとせずネロは振り払う。

【よりもよって俺の前にその姿で来るんじゃないか！！】

画面に映るネロはアンジェロに向けて睨み付けていた。

【知っているよ。君が悪魔の中でもこの“アルト アンジェロ”が嫌いだというのは。だからこれで来たんじゃないか】

アンジェロは我を忘れて斬り掛かる太刀をかわし、余裕で話続ける。

【思い出すのだろうか？ 彼女を連れ去られた時の事を… この悪魔が憎いと…】

再び発砲された弾丸によってアルト アンジェロは砕け散り、そこには肩で息をしているネロだけが取り残されていた。

【らしくないぞ】

発砲したダンテの左手には黒い拳銃エボニーが握られている。銃口からは煙が上り、ホルスターに納めると一步一步、ネロに歩み寄った。

【向こうのやり方だろ？】

ダンテが言った頃には、何とか落ち着いたネロが《閻魔刀》を右腕に吸収し、ゆっくりと振り返る。

「ネロ…」

フェイトは少し顔を附せた。

この映像は六課にいるバックヤードのみんなも見ている。

ネロが右腕を見られたくないと知っていたが、とにかく今は早くみんなと合流しようと思い、スピードを上げて廃棄都市に向かった。

「ネロさん…」

近くにいたスバルがネロを… ネロの右腕を見ていた。

彼ももう見られてしまったのは分かっていたが、反射的に右腕を背中に戻す。

「その腕…」

彼女の隣にいるギンガも戸惑いながら聞く。

ネロはギンガと先程初対面したばかりだが、この世界に来たばかりの時も、フェイトとシグナム… ダンテも初対面の時に右腕を見られた。

「これは…」

何とか言おうとした時に突然、右腕が光り疼き始めた。

疼きを感じるのはへりに向かって魔力砲撃して来たビルの方角。

「坊や！」

ダンテも悪魔の気配を感じ取り、二丁の拳銃を構える。

「話反らしてんじゃねえよ！！ さっきのやつと会ってみたいだな！？」 悪魔の血を引くって言ってたし、やっぱテメーも…！」

ヴィータがダンテとネロに詰め寄るが、二人は遠方にあるビルだけを見て話を聞いてはいない。

「魔力反応です！」

突然後ろのティアナが叫んだ。

その瞬間に巨大な球体がネロ達を目掛けて飛んで来たが…

「シッ！！」

瞬時にネロが悪魔の右腕で“球体”を弾き返した。

「な… なんだ!？」

ヴィータが呆気にとられるが、ネロとダンテはまだビルの方を見ている。

「おい…」

「来やがったな…」

ネロは険しい顔付きになり、ダンテは小さく息を吐いた。
ビルの向こうから現れたのは“白い天使”が数十体… 推定でも100体はある。

「さっきの!？」

「いいや… 違うやつだ…」

スバルが思わず声を上げるが、ネロが《レッドクイーン》を手にして静かに応える。

現れたのは黄色掛かった白いボディに剣を持つアルト アンジェロではない。

槍を手にした青み掛かった白のボディの天使達だ。

「ビアンコ アンジェロ…」

ネロは剣を地面に突き立てると、柄を捻ってイクシードを発動…
凄まじい轟音が響き、真っ赤な炎が噴き出す。

「ザコの集まりさ！」

高速で銃を連射するダンテが言うと、ネロが一気に駆け出した。

「はぁあっ！」

ネロは正面からアンジェロとぶつかり、剣と槍が火花を散らす。

その槍を右手で無理矢理奪うと、空中で無防備な天使にそれを突き刺し、柄をおもいっきり捻った。

槍からは青い炎が推進剤と共に噴き出し、後ろにいる他の天使に向かって打ち出した。

「ハハッ！」

一方でダンテも銃を連射して天使を迎え打つ。

マシンガン並の高速連射によって天使達はただの鎧の残骸に変わり、砕けた鎧からは白い光りが立ち登って行った。

「撃ちすぎるなよ！」

「そっちこそ前に出過ぎだ！」

離れていたネロが一旦下がり、ダンテの隣に並ぶ。

「あと何発だ？」

「カートリッジは四つ。各銃に二つだ」

ダンテは弾が切れたカートリッジを捨てて新たなカートリッジを装填した。

今ので20体程は倒したが、まだまだいる。

「隊長達がこっちに向かってるみたいです」

「私達も！」

スバルが前に出て、ティアナが魔力弾を撃ち出すが：

「AMF!？」

オレンジの魔力弾はアンジェロの前で掻き消されてしまった。

「何だそりゃ？」

「魔法を消失させるフィールドなんだとさ…」

「魔法？」

首を傾げたダンテにネロがレッドクイーンを背負いながら教えた。

「この世界のやつらはそう言ってるらしい。ティアナ、カートリッジくれ」

右腕を隠したまま左手をティアナに差し出した。

「切れちまったんだよ。早く」

ネロに促され、ティアナがカートリッジを手渡した。

やはり悪魔の右腕を見たのは衝撃的なのだろう。

渡して来た手が震えていた。

「これが…！」

カートリッジを腰に刺していたブルーローズのリボルバーの中に込め…

「魔法だってさ…！」

隠していない右手で持ったブルーローズかの銃口に凄まじい暴風が吹き荒れる青白い魔力弾が収束され始める。

「すげえな！ 俺達の技に似てるが…！」

ダンテが風に負けないように大きな声を出す、後ろにいるティアナやヴィータ… それ所か離れているエリオとキャロ、着陸していたヘリの所にまで風が吹き荒れている。

皆が思わず手で目を覆っていたが、何ともないのはネロとダンテだけ。

ダンテが喋り終わるのも待たずにネロは魔力弾… いや、魔力砲を撃ち出した。

「きゃあああああっ…！！！」

吹き飛ばされそうになったティアナの手をダンテが掴みつつ、彼はネロの撃ち出した魔力砲の斜線上… アンジェロを見詰めた。

暴風を纏った青白い砲撃は天使を薙ぎ払い、一瞬にして消滅させる。

「すげえ！」

ダンテがティアナの腕を離して思わず笑ってしまっている。

「包帯を外した右腕で使ったのは始めてだったけど… カートリッジ全部使っちゃったな…」

空になったカートリッジを捨て、今度はブルーローズを指輪の状態に戻す。

「そんな事も出来るのかよ!？」

「さっきは戻すの忘れてたけどな」

また驚きながら笑っているダンテにネロは冷ややかに返した。
残りのビアンコ アンジェロの数は約50体。
消し飛んだとはいえ、まだ数は多い。

「来るぞ!」

ネロが再びレッドクイーンに手を掛け、ダンテが銃を構えた。

「ネロ!」

聞こえた方を向くと、なのはが舞い降りて来た。
現場に向かっていた彼女が一番近かったらしく、ネロの前に出て来る。

「私が一気に…」

なのはの持つデバイス、レイジングハートがシューティングモードに切り替わり、桜色の魔力スフィアを収束し始めるが…

「え？」

桜色の光が突然消えた。
空を飛んでいたリインも突然飛行が出来なくなり、後ろにいるスバル達も何やら慌てている。

「広域範囲にAMF反応です！ 魔力結合が出来ません！」

リインが慌て、なのはもティアナも魔力弾が撃てなくなってしまった。

『なのは！』

『フェイトちゃん、来ちゃだめ！ かなり高濃度のAMFが張られてる！』

フェイトがなのはに念話を飛ばすが、ジャミングが入るかのよう
に届く声は掠れていた。
フェイトもネロ達がいる場所までもう少しの所に来ていたのだが、
迂闊に手を出せなくなってしまった。

「どうした？」

何とも感じていないのはネロとダンテの二人だけ。
なに食わぬ様子でいる。

「魔力が結合出来なくて…」

「使えるじゃねえか」

試しにレッドクイーンの柄を捻り、イクシードを発動させた。
イクシードは魔力を消費して使える物に改造されていたのだが、それになのが驚いた。

「使えるの!？」

「そうみたいだな? それと…」

不敵に笑いながら悪魔の右腕を突き出した。
青白い《デビルブリンガー》がティアナやエリオ達の間を縫って伸びて行く。

「うわああああっ!!?」

突然地面から飛び出して来た少女をデビルブリンガーで掴み取る。

「セイン…」

緑掛かった水色の髪を肩くらいまで伸ばした少女“セイン”がルーテシアを助けに来たのだが、それは脆くも失敗した。
ルーテシアが静かにセインの名を呟く…

「ああ、屋上にいた嬢ちゃん達もあんな服来てたな？」

ダンテが思い出したように言うが、ネロはデビルブリンガーで掴んだセインを自分の方に引き寄せる。

「随分とぶつとんだカッコしてやがるな…」

彼女の格好を見たネロが眉を吊り上げた。

ちなみにビルの上屋にいたディエチとクアットロもセインと同じフ
イツトスーツのような物を来ているのだが。

「たく… このやつらはみんなこうか？」

やたらスカートの丈が短いわ、へそを出しているわ、足は見えてい
るわ、この世界の女はどうかしてるんじゃないかと思い、セインか
ら顔を背けてデビルブリンガーで掴んだままの彼女をダンテに渡し
た。

「持ってる」

「俺がか？」

「撃って来たやつ仲間かもしれないだろ？ 捕まえとけ」

セインを無理矢理ダンテに渡すと、ネロは左手にレッドクイーンを
… 右手には出現させた閻魔刀を握った。

「あいつらは俺が片付ける！！」

向かって来ていたアンジェロの中にネロが飛び込んだ。

「やれやれ…」

セインを腕で担いでいるダンテが頭を搔く。

面倒な事は嫌だったので近くにいたなのはに近寄り…

「後は頼む」

「え？」

セインをなのはに任せて背負っている大剣を抜いた。

「坊やならこれくらい何ともないだろうが： 色々と話たい事がある」

ダンテが剣を逆手に持ち変え、刀身に赤い魔力を纏い始め：

「^{ドライブ}Drive!!」

赤い魔力を込めた斬撃をアンジェロ目掛けて飛ばした。
赤い刃はネロの前にいる天使を破壊する。

「おい！」

ネロが振り返るが：

「俺もまぜろよ！ こんな楽しそうなパーティーに除け者にするなんてあんまりじゃないか!？」

ダンテは剣を持ったまま大袈裟に手を広げて言う。

それを見た皆が哑然としていたが、ダンテがなのはを見て、

「それじゃよろしく！」

なのはが捕まえているセインを一度見た後にダンテも駆け出した。

(なんなんだよ…)

スカリエッティからダンテとネロの事を詳しく聞いていなかったセインは驚愕する。

（何者なんだよ…！ あいつら！）

セインを含めたなのは達の目には信じられない光景が映っていた。無数の天使に向かって剣を振るい、銃を撃つ二人の男が…

一人は若い銀髪の男。

片刃の大剣と刀の二刀流で斬り裂き…

もう一人は中年の銀髪の男。

銃を撃ち、両刃の大剣で叩き斬る…

「はああああああああっ！！！！！！」

二人の声が重なり、天使を打ち倒す。

それは鬼神のごとき強さ…

いや、天使を殺す悪魔の姿…

「でかいの来るぞ！」

残り20体になったアンジェロ達が一カ所に集まり、円のような陣営を取った。

その円の中心に先程飛ばした球体と同じ… それ以上に強力な魔力を収束させた球体を飛ばそうとしている。

「任せろ！！」

ネロが左手を前に差し出し、右手を握り締める。

青白い魔力で形成されたデビルブリンガーがただでさえ大きいというのに、今は通常の三倍近い大きさになっていた。

「ネロさん!!」

後ろのエリオが叫ぶが…

「うりゃあああっ!!」

撃ち出された魔力球をギリギリまで引き寄せ、デビルブリンガーで殴り返した。

凄まじい勢いで返された球体が魔力を使い過ぎたアンジェロ目掛けて着弾、天使から残骸へと変わる。

全ての悪魔を倒し終えて振り返った時、突然飛び込んで来た影がなのはが捕まえていたセインを奪った。

エリオにストラダーダを突き付けられていたガリユーも一瞬の隙を突いてルーテシアを救出。

「新手か!？」

ネロ、そしてダンテが空を見上げる。

ショートカットの紫髪に金色の瞳を持つ、外見的にネロより歳上の女性がセインを脇に抱えて空を飛んでいた。

服装から察するにセインの仲間だろう。

「トーレ姉!」

抱えられているセインが助けに来てくれた喜びと驚きを込めて言った。

トーレと言う女性の肘と太股の部分には紫色の羽のような物が二枚ずつ高速で羽ばたいている。

「引き上げるぞ」

「ディエチとクア姉は!？」

「待機させていたアンジェロに救出させた。ドクターはレリックと聖王の器は諦めると言っていたが、まだ奪うチャンスはある」

帰還しようとしていたトーレの所に一発の銃弾が撃たれたが、それを羽で切り裂き、地上にいるダンテとネロを見た。

「出て来ていきなり退散か？ いい女がこれだけ揃ってるのによ？」

ダンテの銃は二丁共に銃口から煙が出ていた。

「いい反応だ」

ダンテが言って瞬間、セインを担いでいるトーレの左肘の羽が碎け散った。

二丁同時に発砲したのだろう。

「トーレ姉!！」

「くっ…!」

（私でも反応出来ない程の弾道だど!？）

トーレが険しい顔になるが、スカリエッティからダンテの実力を聞いていた彼女は部が悪いと思い、すぐに飛び去って行った。

「おい!」

「坊や！」

ネロがトーレとガリユーを追おうとしたが、ダンテが肩を掴み止めた。

「嬢ちゃん達の方が先だ」

ダンテが顎で指した先にいるのは達は膝を突き、ティアナとキヤロは今にも倒れそうになっていた。

「大丈夫か？」

「す… すみません…」

息を上げ、声が絶え絶えのなのが言う…

「わりい、平気か？」

「私達は… それより他のみんなを…」

一瞬、スバルとキングの瞳が金色に見えた気がしたが、

（気のせい…か？）

ネロは一度首を捻っただけでエリオ達の方に向かった。

「おい、嬢ちゃ…」

「触んじゃねえ!!」

ダンテがヴィータに近付こうとしたが、彼女は突然グラーフアイゼンを振るい、ダンテを振り払った。

「シャル！！」

ヴィータがグラーフアイゼンを杖代わりにしてヘリの方に向かうが、シャルが気を失ったままの幼女を抱いて出て来た。

「私は平気よ。みんなの手当てをしないと…」

よたよた歩くシャルが倒れそうになったが、近くにいたネロが受け止める。

だが…

「デメエエエっ！！」

シャルに触れたネロに激情し、AMFも消えた為かヴィータが飛び掛かる。

「シャルに触んな！！」

グラーフアイゼンを振り回すヴィータの攻撃を易々とかわしていたが…

「なっ！？」

「ぐううっ！！」

ネロが突然ヴィータの攻撃をかわすのを止め、わざと受けた。ハンマーの槌がネロの左肩にめり込み悲鳴を上げる。

「ネロ!!」

「ネロさん!!」

シャルとスバルが叫ぶが、ネロとヴィータは向かい会ったまま沈黙していた。

「これで満足か…?」

彼女の気を沈める為にはこうするしかないと思い、ネロの取った行動にヴィータは勿論、シャルやスバル達までも困惑していた。

「なんで…」

「やる事があるだろ…」

混乱しているヴィータから離れて、ネロはシャルと共にヘリの中に入り込む。

「相変わらずの無茶ぶりだな?」

ヴィータの隣に来たダンテがマイペースに言う。
場の空気を読まない彼には驚くばかりだが、

「ダンテ!」

「何だ?」

「来いよ!!」

姿を見せないネロの声がへりの中から聞こえて来た。

「みんなに話す事がある！！ あんたもこのままブラブラしてるわけには行かないだろ！？」

それに若干顔を渋めるが、確かにワケの分からない世界でこのままにいるわけには行かず、どうやら飯を奢ってくれた少年とも知り合いらしいので、ダンテもへりの中に乗り込んだ。

「来いってさ？」

大袈裟に腕を広げる彼の姿にスバル達がまだワケの分かっていなかったが、外にいるスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリードがへりに乗る。

「ヴィータちゃん…」

最後に残っていたヴィータなのはトリインが寄るが、彼女はまた突っ立ったまま。

「何でだよ…」

彼女には理解出来ない事ばかりだ。いや、実際はなのは達もそれは一緒だ。

突然現れた銀髪の青年、悪魔の力を持つ男、主をたぶらかしている男、自分を打ち負かしたあの男：

「ワケ分かんねえよ…」

出会った赤の男、悪魔の血を引く男、AMFの中でもネロと共に平然と戦った男：

「なのは！」

AMFが消えた事により、しばらくしてフェイトがなのはとヴィータの前に降りて来た。

「フェイトちゃん！」

「ごめん… 犯人は逃がしちゃったみたいで、私が行った頃にはもういなかったみたい」

フェイトが申し訳無さそうに言うが…

「ヴィータ。帰ろう？」

なのはから念話で聞いていたのか、撃ち震えるヴィータに優しく手を差し伸べ、へりに向かった。

Episode..32(Angelo 天使) (後書き)

話を詰め込み過ぎました…

これにて第一章が終わり、次回から第二章の始まりです！

色々ありますが、楽しみと不安で待っていて下さい！

〈第二章前幕予告〉（前書き）

序章を終え、二人の狩人に待ち受けるものは…

第二章前幕予告

再会を果たした《魔剣士》の血族。

闇に光をもたらす魂を受け継ぎし紅き狩人。“反逆”の魔剣を携え、“黒鍵と白鍵”なる双銃を操り、華麗に舞う。

殲滅の蒼魂を引き継ぎし黒の騎士。近代の恩恵を受けし“赤の女王”と、“不可能と奇跡”の銀銃を持ちて、魔道なる隻腕に“人と魔を分かつ刀”を宿す。

ある者は正義を貫き、魂の叫びに従い…

未知なる魔石に導かれ、“魔”を断ち斬るべく己が剣を振るう。

新たに生まれし物語は、次の段階に進むために…

〈第二章前幕予告〉（後書き）

すみません。前に書いた第二章の予告を消して、新しいのを載せました。

理由は、最初に予定してた展開からかなり変更したからです。考えもなしに予告とか書くものじゃありませんでした：

誠に勝手ですが、了承して頂けたら幸いです。

E p i s o d e . : 3 3 \ S e c o n d S t a g e 〈第二章開幕〉 (前書き)

再会した銀髪の男…

まだ問題は多いが、若き騎士に安らぎを…鉄槌の騎士に信じてみよう
とさせる心を…

そして、無限の欲望は天使と共に…

Episode.: 33 Second Stage 〈第二章開幕〉

数分前の廃棄都市区画…

「あら…」

ディエチとクアットロのいるビルの数階のとある部屋の中に人影があった。影が掛かり、姿は確認出来ないが、声から察するに女性であろう。

ネロの放った青白い魔力刃がガラス戸のない窓の外を横切り、拍子抜けした声を漏らす。

「ふうん…」

指を頬に当て、もたれ掛かっていた壁から離れると、彼女の周りにいるアンジェロ達の目から青い光が灯った。

「あれがスカリエッティの言ってた子ね。じゃあ、やっちゃって」

女性が指示すると、ビアンコ アンジェロ達が槍を構え、手にしていた盾が背中に装着し翼へと変わる。

窓から外へ出て行ったアンジェロ達を見送ると、女性が指を弾き空間に黒い渦が出て来た。

「スパイダの血族…」

窓から射す日が女性の姿を照らし出す…

「面白くなりそう…!」

薄紫の長い髪を束ね、薄い緑のリボンで結っていた女性がクスツと笑い、渦の中に消えて行った…

「大丈夫!？」

アンジェロを全て破壊したネロはヘリの中で椅子に座っている。隣には彼を心配するシャルマが、向かいには未だに気を失ったままの少女が眠っていた。

「平気だ…」

ヴィータの攻撃を受けた左肩に手を掛けたまま言うが、

「痛っ!」

痛みで体に電流が走り、顔が歪む。

仮にも相手は《鉄槌の騎士》の異名を持つ守護騎士ヴィータ、リミッターとAMFの負荷があったとは言え無茶をした。

「待って、今手当てを…」

「必要ない…」

シャルマが応急措置の為に救急鞆に手を伸ばすが、ネロはその手を右手で掴んだ。

一瞬、シャルマがビクツと反応するが、彼も無意識にやってしまったのですぐに手を放す。

「悪い…」

ネロは少し顔を附せるが、目を瞑ると意識を集中させ、右腕から青白い光がぼんやりと放ち始める。

「このくらいならすぐに済む。あんたは何もしなくていい」

青白い光は炎の様に揺らめき、微かに風が吹いていた。

青白い魔力がネロの右腕から全身に渡り包み込む。

「デビルトリガーの応用か？」

シャルが声のした方を向くと、そこにいたのはダンテ。

「これが一番手っ取り早いだろ」

「まあな」

ダンテの声にネロは眉を少し動かして反応したが、目は開かないまま話し続ける。

「どんな傷もたちどころに治る…」

青白い光が消え、ネロが目を開いた。小さく息を吐き、頭を壁に当たってダンテを見る。

「難儀なもんだねえ？」

「まったく…」

ダンテがネロの向かいの席… 幼女の隣に座って話を続ける。

先程は色々あった上に、再会したネロがヴィータのグラーファイゼンをまともに受けたのだが彼は笑っていた。

ネロも《デビルトリガー》の力を使い、肩の傷が癒えたのを確認しながら言う。

良くて打ち身、悪くて骨折のレベルだった傷が瞬く間に治ったのはシヤマルも驚いた。

彼女は治療魔法も出来るのだが、あれだけの短時間では流石の彼女でも無理である。

だが、目の前にいるネロは何事も無かったかの様に肩を回し、引き吊った顔から微かな笑みを浮かべて話していた。

「無茶もいい所だな？ あの嬢ちゃん、見掛けによらず結構パワフルだぜ？」

「知ってるよ」

腕を背もたれの部分に掛け、足を組んで話すダンテと、開いた足の膝に肘を突いて話すネロ。

「デビルトリガーもそんなに使うな。あれは魔力の消費が激しい」

「俺はあんたと違って体は普通の人間と大差無いんだよ」

ダンテの言葉にネロはムスツとしていた。

事実、デビルトリガーはかなりの魔力を消費する事で発動出来るもの。己の中に眠る“悪魔の力”を解き放つ事で自身が《魔人》と化するのだ。

「この一年の間にいろんな事があったが…」

人の気配を感じハッチを見た。

「あの…」

「ネロさん…」

外からネロを見ているティアナとスバルがおどおどし、ヘリの中に入って来ない。

後ろにいるエリオとキャロも入ろうとせず、彼女の隣で飛んでいるフリードに至っては唸り声を上げ今にも火を吹こうとしていた。

「その腕…」

スバル達の後ろにいるギンガも戸惑いながら言うと、ネロはバツの悪そうな顔をして左手で右腕を掴んだ。

半袖な上に包帯もコートもない。悪魔の右腕を隠せるものなどないが、

「使うか？」

向かいにいるダンテが既にボロボロの赤いラバーコートを脱ごうとしていた。

脱ごうとしていると言っても手を襟に掛けている状態であって、ネロも見られた事での諦めとプライドからそれを断った。

「いいよ…」

「どこ行くんのだ？」

突然ネロが立ち上がり、ヘリの中に入ろうとしないスバル達の方に

歩き出した。

ダンテが取り敢えずは聞いてみたのに彼は立ち止まり振り返る。

「歩くぞ」

「は？」

唐突に言ったのでダンテが思わず聞き返した。

「お前が来いって言ったんだろ？」

「気が変わった」

「そりゃないぜ？ こちとら6日も野宿するわ、腹が減って死にそうだわ、悪魔の相手してくたびれてるってのによ」

呼ばれて来たのに、ネロの言った言葉にダンテが愚痴り出す。

ネロも険しい顔になり、ダンテに近付くと彼の胸ぐらを掴んで乱暴に自分の方に引き寄せた。

「あいつらを見ろよ…！ 化け物を見る目だ…！」

眉間にしわを寄せ、ネロはスバル達を流し目で見る。

彼の声はダンテ所かシャル、そしてスバル達にまで聞こえていた。

「あの怯えた目を… 俺達は人間じゃない！ 悪魔だ！」

自分の体に悪魔の血が流れている否定しようのない事実、人間でありたいと願う必死の叫び…

一年前にキリエは彼を受け入れてくれた。

だが、心の支えを失った彼に再びその思いが重圧となつてのしかかる。

「なに言つてやがる…」

呆れたようにダンテは溜め息を吐くと、今度はネロの胸ぐらを掴んで引き寄せる。

「お前は人間だ。悪魔じゃない」

いつもならふざけた態度でいるのも今回ばかりは真顔になっていた。

「誰よりも人間らしいやつだ」

ダンテがようやく服から手を放すと、ネロはハッチの方を見た。まだみんな入ろうとしないが、いつの間にかなのはとヴィータ、リインもいる。

「話す事があるんだろ？」

口を開いたヴィータがまだ少し警戒しているように言う。最初にヘリの中に入り、席に着いた。

と言つてもダンテとネロから一番遠いハッチ付近の席だが。

「お話…聞かせてくれるかな？」

スバル達が振り向くと、彼女らが道を開けて次にヘリに入つて来たのは。

ネロとダンテの前に来たのに彼は目所か顔まで背けて無意識か故意か腕を隠す。

「おおっと！ さっきの美人さんか？」

もういつもの調子に戻ったダンテにネロが舌打ちをする。
なのはも二人を見て苦笑してしまった。

ダンテの突飛な発言に少し顔が赤くなっている。

「ど…どうも…。ネロもいい？」

「ああ…」

「元々話すっていったのは坊やだしな」

「あんたも話したい事あるんだろ？」

「俺はお前個人にだ」

なのはの顔を見ずにネロは応えながら席に着く。

ダンテがネロを見ながら組んでいた足を組み直して言った。

「ダンテさんでよろしかったんですよね？」

「ああ」

なのはがダンテを、ダンテはなのはを見ながら言う。
スバル達もようやくヘリの中に乗るとハッチが閉まった。

「あなたも悪魔の事をご存知のようで…」

「まあな」

ヘリのプロペラが回転し、離陸を始める。

ヘリの中にいる皆は黙って二人の会話を聞いていた。

「ネロと知り合いみたいですし…」

「ああ。親子だからな？」

「おい！！」

なのはとダンテの会話にネロが割り込んだ。

また言われた思ってもいない言葉に立ち上がり、再び彼に詰め寄る。

「デメエ！！」

「いやゝ、反抗期は終わったと思ってたんだがまだ続いてるみたいだな？ まいっちまうよ。これだから年頃ってやつは…」

ネロはまたダンテの胸ぐらを掴み、ブンブンと揺さぶる。

「そうそう！ その少年！」

まだ揺さぶり続けられたままのダンテがエリオを指差した。

湿った空気が一変し、奥の方では気温が上がって行く中でエリオに流れ弾が飛ぶ。

「話したよな？ 人の顔面に蹴り食らわして俺をボコボコにしたやつ」

「え… ええ…」

エリオが戸惑いながらもダンテに応える。
隣のキャロやスバル達までも困惑していた。

「それがコイツだ」

揺さぶられたままダンテはネロを指差した。

右腕はもろにみんなに見られているが、今は気に止めないでいる。

「お父さんにですか!？」

「今、何だった!」

エリオに過敏に反応し、ネロは彼を睨み付ける。

「そうだよ。その時の坊やにして俺の息子のネロだ」

「違う!!」

「歳は…」

そこでダンテが言葉に詰まる。

みんなも何と言うのか黙っていたが…

「いくつだっけ？」

知りもしないくせに言ったのに思わずこけそうになった。

その波は座っているシャル、なのはとヴィータにまで及ぶ。

「17だよ!! 知りもしないくせに言うな!!」

揺さぶりが激しくなる中でネロが言う。

「17？ 老けてんな」

ダンテの余計な一言に揺さぶりが更に激しくなり、ネロの右腕が強い光を放つ。

「ちょ、ちょ！ ストーーーーップ！」

「ネロ！」

振りかぶった腕をなのはが両腕で掴み、ダンテとネロの間にフェイトが飛び込む。

「止めて！」

「ダンテさんも！」

二人に押さえ込まれるネロをダンテは馬鹿にしたようにニヤニヤ笑って見ていた。

「これまた美人の姉ちゃん発見！」

立て掛けた剣に手を添えてダンテはフェイトを見る。すぐに何でも言う彼にフェイトは顔を赤くしていた。スバル達は“あのネロ”が完全に手玉に取られていたのに驚きつつも呆れている。

「また心臓に剣、ブツ刺して磔にしてやろうか！！」

「あん時みたいに油断ならしてねえぞ。そっちこそ今度は叩っ斬ってやろうか？」

なのはとフェイトに加わりシャルの三人に押さえ込まれたネロが吠え、ダンテは大剣の切っ先をネロに向ける。
一瞬なのはとフェイトが驚くが：

「磔！？」

「心臓に剣って…」

「二人の間に何があったんですか！？」

いい加減に会話に入って来たティアナ、スバル、エリオ。

「二人とも止めて下さい！」

「へりまで揺れてますから！」

壁に手を当てて言うキャロとギンガ。

「あのさあー！！」

騒いでいる空間に金属がぶつかる鈍い音によって皆の注目は一点に集められた。

ヴィータがグラーファイゼンを足元に突き付け、唯一真面目な状態にいる。

「話なら六課に帰ってからゆっくり聞きたいんだけど」

グラフアイゼンを胸前で担ぎ、ヴィータが目を瞑った。

「ヴィータちゃん…」

隣にいるリインが静かに呟く。

「勘違いすんなよ。テメエらを認めたわけじゃねえ」

「またまた」

目を開かないまま付け足す。

リインがニコニコ笑いながら言うが、

「何か言ったか…?」

片目を半分開き、リインを見た。

口調はいつもの不機嫌そうなものだが、8年来の間柄にあるリインはこれ以上言っではいけない。下手をしたら彼女の逆鱗に触れると思う、それ以上言わなかった。

「だってさ…」

ダンテも剣を引っ込め、椅子に深く座った。

ネロも落ち着きを取り戻し、ようやくなのは達も彼から離れる。

『ヴィータちゃん…』

『ネロの事、信じてくれるの?』

『ちげーよ！ 見極めるだけだ！』

なのはとフェイトが飛ばした念話を投げやりに突き飛ばしシグナムと同じ事を言うと、そこからは一方的に念話を切った。

なのはとフェイトは少しホッとした顔になり、ネロとダンテに目を向ける。

二人共同じ銀髪。

少し似ているような気がしたが、言ったらネロが怒ると思いフェイトは言わないでいた。

「何見てんだよ…」

「ううん。何でもない」

ネロがフェイトを見るが、彼女は少し嬉しそうにしながら言った。正直、自分では彼を助けてあげられないかもしれないと感じていたが、ダンテと再会したネロは心無しかいつもより明るく見えた。

（良かった…）

フェイトが小さく微笑みを浮かべ、ヘリは六課の隊舎へと向かう…

「ただいま」

「おや… 戻ったかい？」

薄暗い部屋の中で廃棄都市の中にいた女性がスカリエッティの所に来ていた。

周りには動かないアンジェロは勿論の事、数多くの悪魔達が動かずに沈黙を続ける。

「なんで私にやらせてくれなかったのよ？ アンジェロなんかじゃあの二人に勝てるワケないじゃない」

薄紫の髪の女性がスカリエッティの隣まで来ると、彼の肩に手を掛けて不満げに言う。

「ドクターから離れなさい」

「いいよ。ウーノ」

部屋の奥から出て来た女性、ウーノが彼女を侮蔑するような目で見ていたが、スカリエッティは気にしていない様子で咎める。

「まだこれからだよ… 悪魔の指揮は君に任せる」

「またそれ〜？」

女性はスカリエッティから離れると、部屋の中央で頭の後ろで手を組んでクルクルと回る。

「口には気をつけなさい。この方は…」

「私を造った人って言いたいんでしょ？」

落ち着いた口調のウーノの方を向き、女性が回るのを止めた。緑の瞳の奥底は底が見えない程の闇を潜めているように感じ、ウーノの顔が少しだけ険しくなる…

「ちゃんと分かっていますよ〜」

また回り始め、部屋の影の中へと女性の姿は消えて行った。
それを確認すると、ウーノは張りつめた糸が切れたように肩の力が抜けて小さく息を吐く。

「本当に彼女で大丈夫なんでしょうか…？」

「そうだね。性格には難があるが、彼女のおかげで悪魔を指揮する事が出来る…」

スカリエッティの前に出て来たモニターには意味不明な文字が並んでいたが、彼は歪んだ笑みを浮かべて見詰めている。

「何より… 彼女は唯一“帰天”に成功した実験体だ」

「はあ…」

ウーノが符に落ちない顔でスカリエッティの隣までやって来る。

「残りの“天使”達ですか？」

「ああ…。2体目はもうすぐだよ！ これで操れる悪魔の数が増える…！」

顔をしかめるウーノ、喜びにうち震えるスカリエッティが黄色い光を放つ生体ポッドに目を向けた。
中にいるのは金髪の女性…

「彼ももうすぐ目覚める…」

その奥にある黄色い光を放つ生体ポッド：

中には体が3メートル近くある白い体に二本の角を頭から生やした“虫”のような悪魔がいた。

「彼を目覚めさせてよろしいので？」

「彼の頭脳のおかげでここまで来れたんだ。お礼はしないとね」

「もし何かありましたら：」

「その時はウリエルにやってもらおう。支配が無理なら力づくでね
：」

おそらく、先程の薄紫の髪の女性はスカリエッティによって造られた人造生命体： ウリエルと言う名なのだろう。
スカリエッティはクククツと笑い、部屋の中央まで行くと、堪えきれなくなった笑いが一気に吹き出した。

「ああ！！ 楽しみだよ！！ 待ちきれないねえ！！」

高らかに笑うスカリエッティを見た後に、ウーノは再び眠っている金髪の女性を見詰める。

「第二の天使： ミカエル：」

スカリエッティが名付けた金髪の女性、眠ったままのミカエルの名をウーノが呼んだ：

Episode: 33 Second Stage〈第二章開幕〉(後書き)

さあ、第二章が始まりましたー!!

やっと次回で色々話すみたいですが、やっぱり悪魔の血を引く二人にみんなは戸惑いますよね？

そして、ネロは何かとマイナス思考…

では、34話も宜しくお願いします！

Episode..34〈KY〈空気読めない〉〉

「へへ。ここが坊やの世話になってる…」

「私達の機動六課です」

ネロ達を乗せたヘリは機動六課のヘリポートに着陸。

あの後、会話したのはダンテとネロだけでみんな何も喋らずいた。

ネロは自分の世話になっている機動六課の事を軽く話し、現在はヘリから降りたダンテが辺りを見渡しながら言ったのにフェイトが応えた。

みんな何も言わずにダンテとネロを半分警戒、半分怯えたように距離を取っている。

ネロが一度スバル達を見るが、一瞬だけ彼女達がビクッと反応した。

「はやては？」

「こっちに向かってるみたいだけど…」

ネロがなのはに聞くが、彼女はカリムの所に行っていたのに大量のガジェットが出現した為にやむなく出動した。

カリムにある程度の魔力限定解除してガジェットを蹴散らしたのだが、なにやら六課の方に向かっていているらしい。

「誰だそいつ？」

「ここの部隊長だよ」

歩くダンテが振り返って聞くのにネロが軽く応える。

「なのは達と同年の19歳だとさ」

「へえ…」

何故か先陣を切って歩くダンテが屋上の扉のドアノブに手を掛けて開ける。

「男か？」

「いや、お…」

“女”と言いかけた所でネロの動きが止まった。後ろにいるのはやフェイト、スバル達にそのまま着いて来たギンガも止まる。

「どうしたの？」

（やべ…）

フェイトが顔を覗き込んで来たが、ネロの脳裏に不安が横切る。先程の様子から彼のせいで話がややこしくなり、下手をすればなのはやフェイトの時のようにいらない事を言うかもしれない。

だが、はやてがフェイトと比べれば体型の事など考えれば特に問題ないと思う…

「女だ」

と、応えた。

「また嬢ちゃんか？ 若いのによくやるな」

ダンテもネロが言うのに戸惑ったのを特に気にしないで言う。

「俺は入らないのかよ？」

「お前男だろ」

再開された他愛のない会話。

今の所は他の部隊員に遭遇していないが、ネロが少し右腕を庇う様に歩いているのになのはとフェイトが気に掛けていた。

「俺はそのくらいの頃にはもうとっくに便利屋やってたよ」

「学歴がないからか？」

「ああ」

「それより何処に行くつもりだ？」

「飯でも食いに……」

ネロが皮肉のつもりで言ったのも平然と言うダンテ。

さっきから先陣を切るダンテが気になり、一応は聞いた。

会議室に行こうとネロはヘリの中で言ったのにも関わらず、自分の前を歩く赤の男の目指す先は食堂。

流石にネロもダンテの肩を掴んで呼び止めた。

「何であんたが先に歩いてんのか気になってたけど、飯食う気か？」

「腹が減ってはなんとやらだろ？」

「飯より話が先だ」

「じゃあ飯でも食いながら話そう」

ネロの腕を払い、ダンテが歩き出した。流石に苛ついたネロが彼の前に出て道を塞ぐ。

「やる気あんのかよ!?!」

「俺がどんな奴か知ってるだろ?」

「知ってるつもりだよ!?!」

ダンテの激しい温度差にスバル達は狼狽え、今にもダンテに殴り掛かりそうなネロを止めになのはとフェイトが出て来た。

「落ち着いて!」

「ちょっと… はやてちゃんももうすぐ着くみたいだし、何なら食べながらでもいいから…!」

なのはとフェイトが二人係でネロを羽交い締めにする。

スバル達はネロとダンテの関係が気になりながらも言えず、そしてツツコミたいのにツツコめなかった。

しばらくネロが吠えていたが、

「美人に頼まれたらしょうがねえなー」

『頼んでない!』

『なんなのこの人…』

『また美人って言いましたよ!?!?』

ダンテがやれやれと言った感じにいるのに、スバルとティアナ、エリオは空気を読まないダンテの自由さに驚きつつ呆れる。

「で？ 何処で話すんだ。 一階の食堂か？」

「その先にある会議室だよ… つーか、食堂がどこかは分かんのかよ…」

「へりから見えたし、俺の鼻は誤魔化せない」

本当に何か食う気でいたのか呆れながらも、落ち着いた事でなのはとフェイトから手を離してもらったネロが指差す先、会議室をダンテが見る。

自分の視力と嗅覚をさりげなく自慢するダンテが我先に会議室入った。

「おー、結構広いな」

ダンテが会議室の中を見渡しながら、奥にある一番良い椅子を引き、腰を下ろすと…

「やっぱ… この体勢が一番落ち着くな」

本来なら部隊長であるはやてが座る椅子にダンテがいきなり座り、テーブルの上に足を乗つけた。

「おい…」

「その部隊長さんとやらはいつ来るんだ？」

「おい…」

「腹減ったし、手短にしてくれよ？」

「おいて…」

「これ良い椅子だな？」

ダンテの自由ぶり… それを超越した傍若無人ぶりにネロ以外の皆が言葉を失った。

ネロも居心地良さそうにしているダンテに沸々と怒りが込み上げ、言うことを聞かないダンテにその怒りが沸点に達すると…

「テーブルに足乗っけんじゃねえ！！」

テーブルに手を打ち付け、爆発した。

怒りを露にしたネロになのは達も驚きつつ見守る。

「ネロ？」

フェイトがオロオロしているが、割って入る隙がない。

「どうした坊や？ 穏やかじゃねえな？」

「そこははやての席なんだよ…」

「そのはやてって嬢ちゃんも美人か？」

「そういう問題じゃねえんだよ！！　いいから足下ろせ！！」

狼狽えるなのは達を尻目に会議室のドアが開いた。

「おまたせ」

入って来たのははやて。後ろには彼女の守護騎士であるシグナムと青い狼形態のザフィーラも付き添っていた。

「はやてちゃん！」

一触即発の空気に包まれた会議室にそれを吹き飛ばしてくれそうな希望が到来したのにシャルが歓喜の叫びを上げる。

「嬢ちゃんが部隊長さんか？」

ネロの体で壁になっている横からダンテが会議室のドアの方を覗く。それを同じくしてネロがどさくさ紛れにテーブルに乗ってあるダンテの足をどけさせた。

「そうです。機動六課部隊長の八神はやて言います」

「俺は便利屋やってるダンテだ」

道を開けるスバル達の間をはやてと共にシグナム達もダンテとネロの前に来た。

「ちゃんと見えよ。本業の方を」

はやての差し出して来た手に応えて握手しているダンテにネロは溜め息を吐きながら言う。

「本業？」

「デビルハンターの事だ！」

「ああ、そっちな」

はやての手を離れたダンテが合点の行ったように言う。自分の本業を言わないのに、またネロは苛立ちそうになっていた。

「そっちなだよ！」

「むやみやたらに言うのはどうかと思ったんだが…」

「さっき言ったら！ 悪魔を相手にしてるって！」

「言ったっけ？」

また掴み掛かろうとしていたネロの肩にシグナムが手を乗せる。

「やめろ、主の前だ」

「わりい…」

何とか抑えたネロがシグナムの後ろに下がり、椅子に座る。

「何だ？　ここは美人ぞろいか？」

「いいからこっち来い！」

やたらテンションの上がるダンテにネロが舌打ちし、頭を数回掻いた。

シグナムも少し顔をしかめ、赤くなっている。

「ネロ… この男は？」

「ああ、俺と同じデビルハンターの…」

「ダンテだ」

シグナムが聞いたのはネロなのに関わらず、ようやくダンテが椅子から立ち上がったかと思えばシグナムに握手を求めた。

「私はシグナムだ」

引きぎみにシグナムがダンテの握手に応えると、彼女の体をまじまじと見詰める。

「な… 何だ？」

なのは達から念話でダンテの事は聞いていたが、実際に対面するとシグナムでも呆気に取りられるばかり。

「いいねえ…」

「え？」

ダンテはシグナムの前から後ろに回り、まるで品定めでもするように彼女を見る。

手を顎に当て、何やら笑っているダンテにシグナムが… はやてやなのは達も声を漏らした。

「最高だ！」

沈黙に包まれた部屋にダンテの声が響き渡る。

はやて達はポカンとした顔、ネロとヴィータは額に青筋を浮かべていた。

「おい…」

「坊や！ 何だよここは？ パラダイスか？ お前こんな所で世話になってんのか？」

シグナムが言おうとした前にダンテはネロの隣まで移動。更にテンションを上げ、彼の肩に手を回し指で頬を突く。

「あの…」

「憎いやつだな。こんな所にいたんなら…」

はやてが何とかしようとしてダンテに声を掛けるが、彼はまだネロを突つつき回す。

「俺もあん時に来ておけば…」

言いかけたダンテの胸ぐらをいきなりネロが掴み、互いの額を打ち

付ける。

「いいから座れ…」

また危ないカンジになっていたのに置き去りにされたスバル達が狼狽し、はやても止めようとしたが、何やらダンテが小さく息を吐いたのに動きを止めた。

「あー… 分かったよ。そう怒りなさんなって」

ネロの手を払ったダンテが手で降参のポーズを取った。

ネロもそれを見ると、顔を背けて腕組みする。

『怖かった…』

『またマズイ事になると思ったわよ…』

立ったままのスバルとティアナの念話。

エリオとキャロ、ギンガも胸を撫で下ろす。

「主、それでは本題に」

いきなり喋った青い狼“ザフィーラ”にネロは目を見開き、ダンテのテンションが再び上がる。

「喋った…?」

「すげえ!! お喋りワンちゃんだ!!」

「私は犬ではな…」

ザフィーラが“犬”である事を否定しようとした瞬間、ダンテに前足を掴まれて二足で立っている状態に無理矢理させられる。

「誇り高き守護獣…」

「コンテスト出てみる！ 優勝間違いなしだ！」

ザフィーラがまだ話の途中だが、ダンテははしやいだまま、ネロは啞然とした顔でザフィーラを見ている。

「見ろよ、坊や！ 青いし喋ったぞ！」

「だから私は…」

（何だこの男は！？）

ダンテがザフィーラの前足を持ったまましゃがんだ状態でネロの方を振り向く。
ザフィーラも抵抗しているのだが、戸惑いとダンテの怪力で抗えない。

「犬が喋った…」

終いにはネロによるトドメの一言。

「私は犬ではない！！！」

雄叫びのような自分は犬ではないというザフィーラの叫びが会議室に木霊した。

その遠吠えは六課の隊舎全てに響いたという…

Episode..34(KY)〈空気読めない〉(後書き)

すみません… なんかこうなっちゃいました。

ダンテの傍若無人さと、ネロの普段はどうしているのか分からない
ばかりにああなりました…

自分の思い描くネロの人物像は不良ぼくてやる気がないけど、変な
所は真面目(椅子に足を乗せるダンテを怒ったり)なキャラなんで…
本当にすみませんでした。次回35話は真面目な話にします！

(よく考えればギンガも連れて来ちゃいました…)

E p i s o d e . : . 3 5 \ T r u t h **〈語られた真実〉** **（前書き）**

集いし者達…

若き騎士と狩人に問われたものは…

Episode..35 Truth〈語られた真実〉

会議室で一悶着あり、話を切り替えて皆が席に座っていた。レリックケースを足に繋がれていた幼女は医務室に運ばれ、今は六課の前線メンバー、隊長陣にシャルとザフィーラに別部隊のギンガもいる。

「さてと…」

皆の注目が集まる中でダンテは頭の後ろで手を組み、椅子の背もたれに体を任せた。

沈黙を破ったものの、隣に座るネロの顔は険しい。

「どこから話したらいい？」

緊張感の欠片も感じさせないような口振りで彼は仰け反った状態で天井を見上げる。

「全部だ」

次に注目が集まったのははやての隣に座る鉄槌の騎士ヴィータ。

ネロは目を細め、ダンテは未だに後頭部に手を当てたまま彼女を見詰める。

「あいつが…スカリエツティの言ってたのは本当なのか？」

今のヴィータの目は真剣そのものだった。
それにネロは少し顔を背け、ダンテは…

「事実だよ」

平然と口にする。

一瞬、スバル達は驚きの声を上げ、はやてやシグナム、ヴィータは僅かに反応しただけで何も言わなかった。

「俺と坊や… ネロには悪魔の血が流れている」

「そうか…」

聞かれた質問に応え、ダンテは隣のネロを見た。みんなに目を会わせようとせず、左手で右腕を強く握り締めている。ヴィータもダンテの返答を聞き、少し顔を俯かせた。

「みんなには悪魔の事をどのくらい話してあるんだ？」

「大体…」

ダンテは頭の後ろで手を組むのを止めると、今度は胸の前で腕組みし足を組む。

ネロは溜め息混じりに小さく声を発した。

「なんか坊やは自分で話すとか言ったくせに、話す気が失せてるみたいだから俺が代わりに話してやろう。質問とかあるか？」

ダンテが会議室の中にいる全員を見回す。

つかの間、また沈黙に包まれるが…

「あの…」

手を上げたのはフェイトだった。

他の何人かも挙手しようとしていたようだが、最初に手を上げたフェイトにダンテは目を向ける。

「どうぞ、美人の姉ちゃ…」

「フェイトです… フェイト・テストロッサ・ハラオウン」

「どうぞ、フェイト。美人の質問なら…」

また美人と言おうとしたが、すかさずフェイトは名前を名乗り、複雑な表情でにこやかに言う。

ダンテがまた余計な事を言おうとしていたが、ネロが小さな咳払いと一緒に肘で小突いた。

「で、なんだ？」

ダンテもネロを見て“やれやれ…”といったカンジで首を振りフェイトを見た。

「廃棄都市内の映像を見させてもらいましたが、あなたとスカリエッティは知り合いのようでしたけど…」

「まあ、知り合いと言えば知り合いだな」

フェイトはまるで相手を探るような様子でダンテを見ている。

フェイトはダンテの事を一応は信用しているのだが、彼女はスカリエッティに固執する理由があった。

「彼とはどいった関係で…」

「映像越しで話した間だ。ちなみに初めて話したのは4日前で…」

フェイトは搜索するようにダンテを探ろうとするが、彼女の視線に気付き、ダンテはそこで言葉を区切った。

フェイトもダンテがその先に何と言うのか待っているが…

「別に仲間とかじゃないぞ？」

表現と共に腕を広げるダンテ。

彼女もある程度の予想はついていたが、期待通りやはり仲間ではないと知ると少しホッとした顔になる。

「疑ってたのか？」

「いえ、そういうわけじゃ…！」

ダンテがテーブルに腕を掛けて前のめりにフェイトを見る。

彼女も焦って必死に否定していた。

「なんか知らねえけどよー、ムカつくやつだよなあ… 悪魔を寄越すは、人を試すは、何よりあのニヤケ面が気にいらねえ」

フェイトが席に着いたままダンテの話を聞いていたが、それを聞いた瞬間に彼女は… いや、会議室にいる皆が盛大に反応する。

「悪魔を寄越すって…」

「だから、あのスカリエッティってやつが俺の所に寄越したんだろ。それは最初の4日前の時だけだったんだけどよ、何かあいつの口振

りから考えりゃそうなんだろうし？」

聞いて来たなのはダンテは椅子にもたり掛かりながら気だるそうに話す。

「あ！ でも、悪魔を出してたのはあいつじゃねえな… 確か…」

話を再開したダンテが思い出したように閉じかけた口を開いた。頬を掻いているダンテの次の言葉をネロも顔を背けたままだが、耳は向けている。

「ルーテシアって嬢ちゃんだっけ。あの紫の髪して黒いやつと一緒にいた」

「召喚士の女の子ですか!？」

思わず席から立ち上がるエリオ。

ダンテは軽く目を向けただけで、大した反応はしない。

「4日前に俺は二回あの嬢ちゃんと会ったんだが… どっちもすぐに帰っちゃったよ。本人も否定しなかったし… 子供があんなボロいところで何やってるかと思っただら…」

「あゝ」

ダンテが数回頭を掻いて話していると、次に手を上げたのははやて。

「何だよ？ ちっこい部隊長の嬢ちゃん」

「八神はやてです。さっき言いましたよね？」

なのはとフェイト、シグナムは美人扱いだったのに対して、ダンテははやてをそう呼んでいた。

先程挨拶と握手したにも関わらず、ダンテの態度にはやてが顔をヒクつかせる。

『うゝ… この人、ウチには何でこんな言い方なん？』

『落ち着いて下さい、主』

はやてのを挟んでヴィータの反対側にいるシグナムが念話で話す。

『シグナムん時はムチャクチャはしゃいどったんに』

『いえ、私に言われましても…』

質問待ちしているダンテをソツチ退けしてはやてがシグナムを見る。額には青筋が浮かんでいるが、はやての様子にシグナムも困った。

「それで、ダンテさんがどうやってこの世界に来たのか知りたいんですけど」

はやてが我を抑え、質問に戻る。

ダンテは特に待っていたようには見えないが、

「気付いたら来ちゃってた」

平然と返す。

「それじゃあ、ネロさんと同じ次元漂流者って事になりますね」

はやての肩に乗るリインが付け足した。

ダンテも珍しいものを見る様子はなくリインに顔を向ける。

「そいつは何だよ？　可愛い妖精さん」

「わーい！　はやてちゃん、リインのこと可愛いって言うてくれたですう！」

はやての心中を知らずにリインが嬉しさではしゃぐ。

隣にいるシグナムは拳を握り締めるはやての姿…　後ろに見えるとす黒いオーラに気付き、恐怖していた。

「えーとですね、簡単に言えば次元空間を越えて違う世界に来てしまった人の事ですう」

「俺と坊やがそれか？」

「そおでーす」

ダンテの前ではしゃぐリインの後ろでは黒いオーラが広がり、近くにいるシグナムとヴィータ所か、なのは達の領域に届きそうだった。

「簡単に言えば迷子みたいなもんか？」

「はい！」

ダンテとリインの会話を聞きながらはやてのオーラは更に巨大になって行く。

「おい！ 迷子だってよ！」

「いや、それはあんたも同じ…」

ネロの肩を掴んで揺さぶるダンテ。

顔を背けていたネロも面倒そうに言おうとしたが、流石にはやての異常さに気付き、ダンテを肘で小突いた。

「おい…」

「何だ？ 話が盛り上がって来たトコなのに」

「はやてが…」

「ああ、知ってる」

思わずネロはダンテの方を振り向いた。何やら不敵に笑っているが、それはこの先にあるであろう展開を期待している邪悪な笑みにも感じた。

「話戻せよ…」

「いや、もう少し」

「いいから…！」

リインに手を伸ばすはやてを守護騎士達が必死で抑えているのをダンは何やら楽しみにしていたが、ネロは苛立ちとリインの身を案じながら話を戻させた。

「聞きそびれたけど、何であんたがこの世界にいるんだよ？」

「いや、何か悪魔を倒してたら急に」

話している最中に、ダンテはまた思い出したようにポケットの中に手を入れる。

「そう言えば悪魔の中からこんなもんが出て来たんだが…」

「レリックか…！」

取り出したのはロストロギア《レリック》

ネロは分かっていたように目だけを向け、はやて達は顔をしかめた。

「なんか危ないもんらしいな？ あっちの嬢ちゃんがやたら突っ掛かってきたんだけどよ…」

手の上でレリックをポンポンと扱うダンテをみんなが危なっかしく見詰め、ダンテの目を向けるギンガとティアナは慌てふためいていた。

だが、空中に放られたレリックをネロの右腕が掴み取る。

「おい！ 人のもん取るなよ！」

ダンテが大袈裟に少し大きな声を出す、取り返す気はないらしい。

「拾ったのはあんたでも、これはあんたのもんじゃ…」

話の途中でネロの右腕… 悪魔の右腕が目映い光を放ちながらレリ

ックを吸収した。

はやてやシグナムは分かっていたが、知らないスバルやティアナ達は目を見開き、それを見詰める。

「ネロ！」

「チッ、また入っちゃった……」

フェイトがネロに声を掛けるが、彼も早く右腕からレリックを出そうと意識を集中させる。

「まってる。今、出すから」

右腕が青白い光を放ちながら出て来たレリックをはやてに渡すと、ダンテは何やらコートのポケットに手を突っ込んでいた。

「もう一個あるん……」

「知ってる」

ダンテが言い終わるのより前にネロは左手をダンテの前に差し出した。

軽く上げている右腕からは呼応するように光を発している。

「なるほど。お見通しってわけか」

「早く出せ」

フツと笑うダンテに手を差し出すネロ。だが、彼はレリックを出そうとしない。

「早く出せよ。右腕だと一々出すのが面倒なんだ」

「出すのが嫌だって言ったら？」

ルーテシアが持っていた：それを確保したティアナからダンテがいつの間にか取り上げていたレリック。

中々レリックを渡さないダンテにイライラし始めていたが、ダンテは悪戯に笑いながらレリックをコートのポケットからゆくり出した。

ネロが左手で取ろうとするが、空を切り捕まえられない。

ダンテのじゃれあい、ネロのからかわれがしばらく続いていたが、フェイトが立ち上がりようやく事なきを得た。

「いやゝ、美人に頼まれちゃ参るよなゝ」

「「チッ！」」

フェイトは一言「やめて！」と言っただけなのだが、またダンテの台詞にネロとヴィータは同時に舌打ちした。

「おおっと！ 出たな、似た者同士！」

言うこと全てが余計な事ばかりにネロとヴィータが睨み付ける。

二人共ダンテに飛び掛かって来そうな勢いだった為に、ダンテもそれ以上は言わなかった。

いや、その気になれば言うだろう。

「ほらよ」

はやての前にダンテの持っていた二つのレリックが揃うと、はやてが封印処理を始めた。

「いや、何か瓦礫ばっかの所に出るわ、悪魔全滅させたと思ったら坊やが乗ってるへりが通り過ぎてくわ、それで坊やに再会するわ色々あったな」

「やっぱりあの時、廃棄都市にいたのかよ!？」

「銃、ぶっぱなしてでも乗せてもらえば良かったな。あんなひもじい思いはもう御免だぜ?」

ダンテがレリックの処理が済むまで待つのも何だからネロと話していたが、すぐに済むとダンテが前を向いた。

また、変な方向に行くのではないか心配だったが、

「さあて、話を戻すか。質問あるやついるか?」

「あの： はい!」

また質問待ちらしい。

どんな質問が来てもおかしくなるのは目に見えていたが、次に手を上げたのはキャロ。

最初の時点で手を上げようとしていたのだが、ようやく勇気を出して挙手出来たらしい。

「何でも来いよ? ピンク髪の嬢ちゃん」

「キャロだよ」

相変わらずのマイペースでいるダンテにネロがキャロの名前を教えるが、聞いているのか聞いていないのか、よく分からずに話は再開される。

「ネロさんとダンテさんは… 悪魔の血を引いているんですね…？」

「ああ」

「そうだよ…」

遠慮しながら目をちらつかせるキャロにダンテは堂々と、ネロはまた顔を背けてバツの悪い顔になる。

「その… 今日会った召喚士の子が言ってたのが私ずっと気になって…」

中々言いたい事を言い出せないキャロにダンテは不思議そうな顔、ネロは目を右腕に向ける。

『キャロ？』

『あんた、あの召喚士の子が言ってたの本気にしてんの！？』

『はい…』

『何の話？』

心配になってキャロと念話で話すスバルとティアナ。
気になってギンガも念話に加わる。

『ネロさんが前に話してくれた事なんですけど、あの人の世界のお
とき話に出て来る剣士の事です』

エリオも念話に加わり、ギンガに説明を始める。

キャロがずっと気になっていた事：

廃棄都市区画の下水路でルーテシアがダンテを呼ぶ“あの”肩書き：

『魔剣士スパード： 人間の為に戦った悪魔の名前だそうです』

キャロの念話はそこで途切れ、決意を固めて彼女はネロとダンテを
見た。

ダンテは相変わらずキャロを見詰めているが、ネロも彼女の視線：
自分とダンテに集まる視線に気付いて流し目でキャロを見る。

「その子が言っていましたよね： あなたの事を“魔剣士”って…」

キャロの言葉に彼女の保護責任者であるフェイトが、なのはやはや
て、シグナム達も目を丸くする。

「ああ、言ってたな」

ティアナは「言っちゃった…」と顔に表れ、スバル達もキャロと共
に彼の返事を待っていた。

「でも、俺は魔剣士じゃねえよ。ただのしがない便利屋やってる男
だ」

その返事を聞いたキャロは少し残念そうな顔になった。
隣のティアナは小さく息を吐く。

『だから言ったでしょ？ 気にしすぎよ』

『はい…』

『何か期待でもしてたみたいだけど』

『もしかしたらと思ったんですけど…』

考えすぎと言わんばかりのティアナにキャロはゆっくりと椅子に腰を下ろそうとした。

だが…

「それは親父の肩書きだよ」

まだダンテの話は途中。終わってはいなかった。

予想を遥かに越えるだけに、会議室にいる皆の注目がダンテに集まる。

「え!？」

「親父って事は…」

「お父さん…?」

なのは達の漏らした声にネロは更に顔を背け、目だけがダンテを見詰める。

「なんだ？ 親父の事は話したのか？」

「それも一応…」

ダンテは背中と微かにしか見えない目を自分に向けるネロを見た。
何やら酷く気分が乗らないらしい。

「みんなに改めて紹介するよ…」

首を振り、余計な考えを捨てたネロはみんなと向き合った。
先程の乗り気の感じられない様子は残っていたが、その瞳には決心
を決めた強さも感じられるものだった。

「こいつの名はダンテ…」

それは銀髪の男の名…

「最強の悪魔狩人^{デビルハンター}にして最強の男…」

それは大剣と二丁拳銃を携えた赤の男…

「伝説の魔剣士スパーダの息子だ…！」

それは嘗て人間を愛し、人間の為に戦った魔剣士の息子…

Episode..35 Truth〈語られた真実〉 (後書き)

うわ… すごい温度変化…

でも、次回ではネロが喋ると思います。

〈第36話予告〉

明かされる真実…

「息子って…」

「そのままの意味だ」

戸惑いと混乱…

「坊やにもスパイダの血が流れてる」

魔剣士の血族…

「それ、どお言う意味…」

「さあてね？」

それは二人の狩人…

Episode..36 魔剣へ託された形見 〱 (前書き)

魔剣士スパードに託されたのは“人”と“悪魔”の間にいる証…

魔剣…

それは持ち手の魔力を体現化したもの…

その形状は彼らの魂の具現化でもある…

Episode..36 魔剣へ託された形見

明かされた真実…

皆が言葉を失い、部屋中に沈黙が包まれた。

「息子…」

はやての口から不意に言葉が漏れた。
ネロも黙ってはやてを見詰めている。

「そうだ」

再び口を開いたネロは、はやてから隣にいるダンテに目線が移る。
隣にいるダンテは平然とした様子で何食わぬ顔でいた。

「こいつは…」

ネロはそこで区切り、少し顔を下に向け、もう一度顔を上げた。
はやてやフェイト達は何も言わずに二人を見詰めている。

「俺達は悪魔だ」

「おい、坊や」

ネロがまた自分を“悪魔”と言ったのにダンテはやる気を感じさせない声で言う。

だが、顔はネロに向けてはいない。

「何度も言わせるな。お前は人間だ」

「こんな腕したやつがか!？」

ダンテが呆れた顔で小さく溜め息を吐くが、ネロは右腕をダンテに見せ付ける。

人外の異形： “ 悪魔の右腕 ” からは絶えず青白い光が放ち続けられていた。

ネロの張り上げた声にスバル達がビクツと反応するが、顔は背けずに二人の話を聞いている。

「だから、お前は俺とはちょっと違うって前に言っただろ」

ダンテが頭を掻き、隣に立て掛けてある大剣を手取る。

身の丈近くある巨大な大剣：

柄と刀身の間には人間の上半身を模したどくろの装飾をしてある。

「そう良くない方に考えんなよ」

剣を地面に突き立てながらコマの様に回しながらようやくネロを見た。

彼はいつの間にか険しい顔付きで目を背けている。

目線を戻せば二人を見たまま何も言わない皆が： いや、フェイトは何か言いたげにしていた。

「何か？」

「え!？」

「言いたい事でもあるのか？」

ダンテが深く椅子に座ったままフェイトを見た。
突然指名された彼女も対処出来ずに驚いている。

「前にネロから話は聞いていたんですが… そのあ…」

フェイトの言葉がそこで途絶える。

“悪魔”…

彼女は今そう言いかけた。

ネロは右腕を押さえたまま誰にも目を会わせようとしていない。
フェイトもネロがどれだけ右腕を気にしているのか分からないが、
人に見られたくないものだというくらいは知っていた。

「…スパーダが実在したなんて思いもしなかったんで」

慌てて自分の言った言葉を修正する。

「聞いた話では人間の為に戦ったんだとか」

「らしいな？」

フェイトがぎこちない様子で話を続けるが当の本人、スパーダの息子であるダンテは真面目に応える気があるのか微妙だった。

「らしい…?」

「俺も親父の事は何でも知ってるわけじゃない。親父も昔の事はあんまり話してくれなかったからな」

まるで煙にまくように話すダンテに彼女も次の言葉を探すが、ダンテは手にしてあった大剣を片手で持ち上げた。

長さはネロの持っている“レッドクイーン”に並ぶ程のもの。
到底並の人間が扱えるようなものではない。

「だってそうだろ？ 普通子供が親の事、知ってるか？」

確かに正論だ。

「なあ、坊や？」

「そうだな…」

ダンテが隣に座るネロに突然話題をふった。

彼は目の前にある悪魔の右腕を見詰め、気だるそうに応える。

「まだ聞きたい事でもあるか？」

相変わらず聞かれてから話すという形で彼は話を続ける。

自分も自分の父親の事も自らは話そうとするわけではないらしい。

「お父さんは今でもいらっしゃるんですか？」

「さあ？」

今の所、スパイダの話になってから質問しているのはフェイトだけ。
“スパイダは存命しているのか”と言う話にやる気なくダンテは応える。

「さあって…」

「ガキの頃に突然消えちゃったんだよ。俺と兄貴と母親を置いて突

然な」

「お兄さんとお母様は…」

「そっちもない」

「え…」

「死んだよ。親父の行方は知らないが、こっちの二人は確実だ」

聞いた瞬間にフェイトは触れてはいけない質問をした事に気付き、焦って謝ろうとするが、ダンテは気にしている様子はない。

「ご… ごめんなさい… 私…」

「別に謝るなよ。人ってのはいつか死ぬもんだし。だろ？」

「…すみません…」

「だから謝るなよ」

相変わらず顔を背けたままのネロを尻目に話は続けられた。

「まだ聞きたい事あるやつ？」

ダンテは部屋中の人間を見回した。みんな聞きたい事があるのだろうが、言おうに言えない。

話はどれも信じ難いものばかり。

それも当然だ。自分達が悪魔の血を引いていると言われても信じられるものではない。

「よろしいですか？」

次に手を上げたのはティアナだった。

「どうぞ。名前は…」

「ティアナ・ランスターです」

「どうぞティアナ」

彼女も自己紹介を終えて質問に入った。

「私には信じられない話ばかりなんですけど… 話では2000年も前に人間の為に悪魔がだった一匹で戦ったとか、あなたとネロさんが悪魔の血を引いていると言う話も本当なんですか？」

「だからそうだって」

「証拠は？」

どうも話を信じらないティアナにスバルやエリオ達も戸惑っていた。

『ちょっとティア』

『何よ？』

『そこまで言う？』

『だって信じられないじゃない！ あんたは信じられるの？』

『そうだけど、ネロさんがさっきからあんなだしさ〜…』

ネロは顔を背けているが、目だけはティアナに向けられていた。思った以上に今の質問は彼に堪えたのかもしれない。

『ネロさんは右腕があんなだけど、ダンテさんは違うんだし』

『いや、そうだけど…』

「ちょっと待ってろ。今見せてやるから」

ティアナがスバルと念話で話していると、ダンテが立ち上がり手にしていた剣の刃を両手で挟むように持つと、切っ先を自分の胸に向けた。

「おい!!」

ダンテのやろうとしている事に気付いたネロが慌てて彼を止めた。ダンテがやろうとしていたのは実に単純。自分に剣を突き刺そうとしていただけ。

「何だ？」

「何する気だ!？」

問いかけに問いかけで返す。

一瞬、切っ先を自分に向けたダンテにティアナも驚いたが、ネロが突然椅子から立ち上がり彼を止める。

「何って、あの嬢ちゃんが証拠見せろって言うから…」

「だからって心臓に剣を刺そうとするなよ!!」

ネロが大剣の刃を右手で掴み、ダンテのやろうとしている事をやめられる。

「いや、ただ刺すだけだ。まあ、心臓に刺さってもちよっと痛いだけだし大して問題ない」

「こんな場所で、しかも人前でやるなって言ってるんだよ!!」

ネロが左手でダンテの胸ぐらを掴み、彼を睨み付ける。

確かに彼にとっては問題ない事でも、そこまでやるのはやり過ぎだ。

「分かったよ…」

やれやれと言ったカンジに首を振るダンテにネロはまだ睨み、ティアナは小さく息を吐いた。

『本気だったのかな…』

『そんなわけないでしょ。形だけよ、形だけ』

『でも、ティア慌てたよね?』

『うっさい!!』

「ほらよ」

ダンテのやろうとしていた事に慌てていたのを否定しながらもティアナとスバルが念話をしていたが、ダンテは剣を壁に立て掛けて腰のホルスターから出した拳銃をネロに手渡した。

「しっかり狙え…」

壁に立て掛けた剣が自分の真後ろにあるのを確認すると、ダンテはそのまま壁にもたれ掛かる。

「おい…」

「早く撃てよ」

またダンテの突飛な行動にネロは呆れつつも目の前にいる男を見た。どっしりと構え、いつ撃たれてもいい準備は出来ている。

「45口径だぞ？　いくら俺でも貫通しちまうからな。早く撃て…」

「断る」

準備は万端だったが、またしてもネロは断った。

「おい！」

今度はダンテが少し大きい声を出す、ネロは彼を無視して椅子に座る。

「何でもすぐにやろうとするな。子供もいるんだぞ？　トラウマでも植え付ける気か！？」

ネロの目線先にいるエリオとキャロは怯えていた。いつ刺そうが撃とうが目を瞑り、耳を塞ぐ準備は出来ていたのだから。

「おっと、わりいわりい。じゃあ場所でも移すか」

「だからやめろ」

壁に立て掛けてある剣を手にして会議室から出ようとするダンテをネロが呼び止めた。
場所を変えればいいと言うものではない。

「じゃあどうすんだ？ あの子ちゃんが証拠見せろとか言ったのに見せられないぞ」

「手でも軽く切って見せてやったらいいだろ」

大剣を肩に担ぎ、不満を漏らすダンテにネロは一番早く済む提案を持ち掛けた。

さっきからそうそうすればいいと考えていたのだが、すぐにとんでもない事をやろうとするダンテに言えずにいた。

ダンテも合点がいくと、言われた通りに剣で手を切った。切る瞬間に何人かは目を瞑り、顔を背ける。

ダンテは言われた通りに切った掌をティアナに見せ付けた。

「これでいいか？」

赤い血が切り口から流れる手にティアナは少し顔を背けてしまった。

「おい、何か見てくんねえんだけど」

「見たくないからだろ。血を拭いて見せてやれよ」

口調は残念そうだが、気にはしていない。

ネロに言われても血に染まる手を拭うと、再び手をティアナに見せた。

恐る恐る目を開けるティアナ。だが、ダンテの左手には切り傷など残っていない。

「え!？」

「これで気は済んだろ？」

ダンテは銃をホルスターに戻し、椅子に腰を下ろすと深く座る。

「まだ足りないか？」

「い… いえ…」

「他のやつは？」

「はい」

また剣を手にするダンテにティアナは丁重に断った。
しかし、次に手を上げたのは彼女の隣のスバル。

『ちょっと!』

「ネロさんも傷とかはすぐに治るんですか？」

慌ててティアナが念話を飛ばすが、もう遅い。
しかも話題を振ったのはダンテではなくネロ。

「こいつと違ってすぐには無理だよ」

「え… でも、肩が平気みたいだし…」

「デビルトリガーを使った」

取り敢えずはネロも質問に応えるが、スバルに疑問が浮かぶ。
ヴィータから受けた肩の傷が彼女達がヘリに來た時には癒えていた。
しかも平然と肩を回しながらだ。

「デビル… ト…」

「デビルトリガー。悪魔の引き金だ」

ネロの口にした単語に首を傾げながら復唱するが、彼は話は続く。

「使う事で身体能力が飛躍的に上昇、傷も癒す事が出来るがその分
魔力を消費する」

「いわゆる“切り札”ってやつだ」

ネロの説明にダンテが更に付け足す。

「この力はかなり強力だよ？ 俺は制御出来るんだが、坊やは下手
でな。上手くコントロール出来ないらしい」

「あれから一年も経ってるんだぞ。あの頃よりかはまだマシになっ

た」

「そいつは宜しい事で…」

ダンテが不敵に笑いネロを見た。彼はムスツとした顔で前よりかはマシになったと言っているが、完全にコントロールが効いているワケではない。

話を振ったスバルを見て、彼女そっちのけで喋っていたのに気付き、話を戻した。

何やらまだ何か言いたげでいる。

「まだ言いたい事あるか？」

「もう一つだけ…」

少し戸惑いながらスバルがネロを見る。

「ネロさんとダンテさんはどいった関係なんですか？」

正直、この話をしたら彼は怒ると思い、内容を変えた。

ダンテはふざけて“親子”みたいに言っていたが、ネロは即座に否定。やからと噛み付いていた。

「ネロさんとダンテさんはその…」

「悪魔だ…」

「いえ！ そうじゃなくて！」

またネロが“悪魔”と言ったが、スバルが聞きたいのはそこではな

かった。

ダンテがスパイダの息子と知ってから気になっていた事。

「親子… じゃなくて… その…」

「まあ、同じ血が流れているのは確かだな」

遠慮がちに聞くが、質問に応えたのはダンテ。

ネロとスバルに別れていた会議室にいる皆の注目がダンテ一人に注がれる。

「坊やにも俺と同じスパイダの血が流れている」

衝撃の事実に驚きの声が上がった。

それはそうだ。まさかスパイダの話を聞かせたネロもまたスパイダの血族である事を明かされたのだから。

「え!？」

「じゃあ二人は…」

「さっきは倅せがれとか言ったけど、親子じゃないぞ」

またネロがダンテを睨んでいたのに彼も察して今まで言っていた事を撤回する。

「同じ血が流れている…」

ネロが右腕を見詰めた後に目映い光を放ち、右手には《閻魔刀》が握られた。

「それだけだ…」

鞘から少しだけ抜き、刃に映る自分を見詰める。
再び鞘に戻すと、閻魔刀を胸の前に担いで黒い鞘の部分を握り締め
た。

「閻魔刀か…」

「やまと?」

ダンテの口にした言葉“閻魔刀”にシグナムが聞き返した。

「この刀の名前だ」

「これは親父の形見でね。閻を斬り裂き喰らい尽くす、自らの意思
を持つとか色々と言われ付きの魔剣だ。因みに俺の《リベリオン》も
元は親父のモンだ」

ダンテは閻魔刀の説明、そして自分の愛剣も紹介する。
リベリオン

「“反逆”の名を持つ剣。悪魔を裏切ったやつを持つ物にはお似合
いだろう?」

人のどくろをした方の反対には同じ様な装飾…
いや、口を開いて頭から天に向かって突き出す二本の角が生えてい
た。

「ちょっと貸してくれ」

リベリオンを壁に立て掛けると、ダンテはネロに手を差し出した。
どうやら閻魔刀を貸すように要求しているらしい。

「ほらよ…」

「どうも」

ネロは一度溜め息を吐いた後に閻魔刀をダンテに渡した。
受け取ったダンテの手の中で閻魔刀が微かな赤い魔力に包まれて形
状が変わる。

「ふん…」

ダンテは鞘から抜いて閻魔刀を天井の灯りにかざす。
ネロが持っていた時よりも若干刃渡りが短くなり、刃の幅が大き
くなっていった。

「人と魔を分かつ剣…か…」

小さく言ったのはやてとシグナムは互いの顔を見合わせる。
ダンテもフツと笑うと刀を鞘に納め、閻魔刀をネロに返した。

「どうかしたか？」

唐突に閻魔刀を貸してくれと言ったのにネロは首を傾げた。

「別に？　ちょっと見たかっただけだ」

だが、当のダンテはなに食わぬ顔。

ネロの受け取った閻魔刀がダンテの時と同様に微かな光…　青白い

光に包まれて形状を変える。

閻魔刀は刀で言う大刀：それを越える長さの“長刀”に部類する程長い剣になった。

（形はやっぱり“あいつ”のに似てるな…）

ネロの手にする閻魔刀を見て、ダンテの心中には一人の男性の姿があった：

ダンテが父であるスパイダから《リベリオン》を託されたように、《閻魔刀》もダンテの兄に託されたものだった。

だが、その兄ももういない。

今は閻魔刀はネロに託されていた。

彼がスパイダの血族という理由もあるが、もう一つの理由もあった。確信はないが、ネロはダンテに取って：

「ドコ行くんだ？」

ダンテが物思いにふけっていると、突然ネロが席から立ち上がり、ドアの方に向かって歩き出した。

「外の空気でも吸ってくる…」

ダンテに止める気はない。

ただ彼を見送るだけ。

「ネロ…」

「フェイトさん？」

フェイトが立ち上がり、彼の後を追いつけるべく椅子から立ち上が

る。

自分の隣を通り過ぎたフェイトにGINGAが声を掛けるが、彼女は止まらずに出て行った。

「あなたは行かないんですか…？」

GINGAが見ていただけのダンテに聞くが、彼は動こうとはしないで座ったまま。

「あなたは彼と血縁関係にあるんですよね。だったらあなたが行くべきなんじゃないんですか？」

「確かにそうだが… 何て声掛けりゃいいんだ？ “気にするなか？” “元気出せ” か？」

一向に行く気配を見せないダンテにGINGAが会議室から飛び出した。

「GINGA姉！」

彼女に続いて妹のスバルも飛び出しすが、やはりダンテは動かない。

「本当に行かないんですか…？」

「ああ」

聞いてきたはやてにダンテはテーブルに足を乗せながら応える。
ネロがいなくなった事でやっと念願が叶った。

「でも！」

「今のあいつに必要なのは“守るもの”と“戦う理由”だ」

はやてを見ずに天井を見上げて灯りに手をかざす。

「もとの世界にはまだ帰れないんだよな？」

「はい… 搜索中です…」

「だったら尚更だ」

灯りを掴むように手を握る。

はやてもダンテの言いたい事を聞きながらも席から立ち上がった。
だが、ダンテはそれでも動く気配はない。

「行ってやれよ。俺なんかより100倍いいだろ？」

はやてに続いてシグナムも会議室から出ようとしていた所で止まる。
残るのはやティアナ達も二人を見ている。

「本当に行かないんですね…」

「マジでヤバくならなきゃな」

「そうですか…」

「待て」

はやてが出て行こうとした時、シグナムの声に反応して彼女は立ち止まった。

何やら既にレヴァンティンがデバイスモードに戻され、構えは取つてある。

「お前も来い」

「シグナム!？」

はやてが彼女の取った行動に慌てるが、シグナムは構えを解かない。

「おいおい！　綺麗なもんには棘があるとか言ってたが、やっぱり…」

そこで言葉は切れた。

シグナムの放つただならぬ闘気にダンテがおもむろに立ち上がり、会議室のドアに向かう。

「勘違いするなよ？　嬢ちゃんの後ろにいるのが何か剣、抜こうとしてるから行くだだけだ。俺は女運も悪いしな」

歩くダンテははやてとシグナムを押し退けて会議室から出て行った。ダンテの後に続いてはやてとシグナムも彼を追う。

「ありがとうございます」

「いや、後ろの姉ちゃんがかなりヤバイカンジに…」

はやてが礼を言うが、背中から感じる闘気もとい、殺気にダンテはそれ以上言うのはやめた。

「やれやれだな…」

ダンテが溜め息を吐き、はやてが何やら笑っていた。

「素直じゃないんですね」

「もう、どうでもいいよ…」

気だるい声で言いながら、大きく背伸びを一度した。

自分はこの事をするのはガラじゃないと思いながら三人で歩き続ける。

「ところで…」

「何だ？」

「同じ血が流れとるって言ってましたけど… ホンマにネロさんとはどお言った関係なんですか？ 親子やないってのはハッキリしてましたけど…」

重すぎる空気の中で聞けなかった話題をはやてが切り出した。

突然歩くのを止めたダンテの背中にはやてがぶつかりそうになったが、彼は振り返ってはやてとシグナムを見た。

フツと不敵に笑ってみせた顔はどこかネロに似ていた…

「兄貴の忘れ形見だよ…」

「え…」

前を向いて歩き出したダンテ。

重い過去を背負う男に二人はこれ以上は聞けなかった…

E p i s o d e . . 3 6 〱 魔劍〈託された形見〉 〱 (後書き)

ああ… 小説の便乗ネタ…

それでネロは17歳に設定しているんですけど…

そして詰め込みすぎ…

これ、苦情来るだろうな…

Episode..37 求めた力へ青き魂を持つ二人◇（前書き）

亡き兄が必要とした力…

若き騎士が欲しかった力…

力を持っていた者と、力を持っていなかった者の違い…

Episode..37〈求めた力へ青き魂を持つ二人〉

会議室を出たネロが向かった先は階段を上ってすぐにあるヘリポート。

柵のない屋上から遠くを眺めていると、風が吹き抜けて頬を撫でる。

「スパードの血…か…」

会議室にいた時も彼の心情は複雑だった。

自ら話そうと思ったにも関わらず、彼には自分に悪魔の血が流れている事を話せなかった。

右腕を一度見たが、自嘲気味にフツと笑ってしまう。

――坊やにもスパードの血が流れている

（知らねえよ…）

一年前に知らされた真実…

自分に魔剣士スパードの血が流れていると知ったあの時、右腕が悪魔化したあの時…

自分のせいでキリエを巻き込んでしまったあの時…

ネロの脳裏に“一年前”の記憶が蘇る…

「ネロ！」

聞こえた声に振り向くと、そこにはフェイトが立っていた。
開けたドアからネロの方に近付き、彼の後ろに来る。

「あのさ…」

フェイトが何と言おうか迷っていたが言葉が見つからない。
彼女に右腕はとっくに見られていたのだが、またネロは右腕を庇う
様に押さえて隠す。

「気にする事…」

「別に気にしてねえよ」

何とか彼に声を掛けたが、ネロはすぐに素っ気ない返事をした。
気にしてないのは嘘だ。

本当に気にしてないのなら出て行ったりしない。

「言っただろ。ちよつと空気、吸いに行くって」

ネロはフェイト見ないまま話す。どう見ても居心地のない所から出
る為に考えた単純な口実だとみえみえだった。

「ちよつとだけな…」

ようやく振り返ってフェイトを見たが、彼の目は悲しかった。

フェイトは彼を放っておけず後を追って来たのだが、何を言おう
にもネロは話す気はないらしい。

（ネロ…）

ちよつとはどのくらいなのか…

フェイトは何とか励まそうと考えるが、思い浮かばない。

彼ならどうするだろうか…

ダンテなら…

（あの人なら…）

ダンテなら何と言ってネロを励ますのだろうか。

会ってからずっと自分らしくマイペースにやるダンテ。ふざけつつも、ネロの事を気遣っていた。

フェイトは真っ先にネロを追って出て行ったのだが、彼が追ってきたのならば、とっくにここにいるだろう。

（何か…）

ネロを励ます方法を見つけようと、フェイトは再び搜索する。

彼と出会ってまだ一週間足らず。何も彼の事を知らない。

だが、ふと彼女の頭に一つの言葉が浮かんだ。

おそらくは名前… 女性の名前だろう。

正直、これは言っているものか考えたが、フェイトは勇気を出してネロに聞いてみた。

「ネロ」

「何だよ…」

フェイトが前に出て来てネロの隣に並ぶ。

だが、彼はフェイトを見ずに遙か遠く… 海の方こう側にある水平線を見詰めて話す。

「私とはじめて会った時の事、覚えてる？」

「ああ…」

「あの時は次元漂流者って知らずに、レリックを持ってる犯罪者と勘違いしてたんだけど…」

「それはシグナムだろ。いきなり斬り掛かって来たし…」

何とか会話になっているが、相変わらずネロは素っ気ない返事を気だる氣に言う。

フェイトは時折ネロの顔を見るが、彼はフェイトを一度も見ないまま。

「まあ… そうだけど…」

あの時、フェイトは急激な事態に対処出来ず、ネロとシグナムの戦いを見ているしかなかった。

ふがない自分について笑ってしまうが、ネロは無表情のままだ。

「でも、嬉しかったんだ私。見ず知らずの人なのに悪魔から助けてくれたんだから。傷付いてまで… 自分を犠牲にしてまで…」

ネロはやっとフェイトを見た。顔は動かさないが、目だけは彼女を見詰めている。

反応を示したネロにフェイトは意を決して“彼女”の名前を出す…

「キリエ… って言う人、ネロの大切な人？」

「なっ!？」

“キリエ”の名前が出た事でネロの表情が変わった。思わず声を漏らし、目を見開く。

「やっぱりそうなんだね」

フェイトが微笑むが、ネロの顔が赤くなっている。
言うか言うべきか考えたが、フェイトが思ったよりも効果が大きかった。

「なんで…?」

「大切な人ならその人の為に戦えば…」

フェイトが話を続けるが、ネロの顔がますます赤くなる。
何故、彼女がキリエの事を知っているのか分からないが、ネロは堪らずフェイトの肩を掴んでしまった。

「なんで知ってる!!?」

ネロの思った以上の反応にフェイトは驚きつつも話を続けようとする。

が、その前に彼を落ち着かせるのが先だ。

「ちよっ…」

「なんで知ってるんだよ!?!」

「落ち着いて…」

ガクガクと肩を揺さぶられてネロは話を聞こうとしない。
更には顔ももっと赤くなっている。

「ずっと言っていたぞ」

また聞こえた声にネロとフェイトが向いた先にはシグナムが：

「寝言でな…」

いや、既にギンガ、スバル、ダンテとはやても来ていた。

「え…？」

「気を失って聖王教会に運ばれた時も、朝に起こしに行った時もだ」
ネロは思わず拍子抜けした声で言うが、シグナムがフェイトの代わりに話を続ける。

「お前がよほど想っている女性なのだろうな？　ずっと言っていたぞ」

シグナムが一步一步、歩み寄る。
ネロも肩の力が抜け、フェイトを掴んでいた手を放した。
そして顔は赤い。

「マジで…？」

「ああ。そうだ」

「ずっと…？」

「何度も言っていたぞ」

ネロの額から一筋の汗がつうつと伝う。

シグナムが淡々と言うが、後ろにいるギンガとスバルは入り込む様子はなくネロとシグナムの二人を見詰め、はやては何とも複雑に笑い、ダンテは腕組みしたままフツと笑っていた。

「ウソだろ…」

ネロが左手で顔を押さえてしまった。

指の間から見えたフェイトもニコッと笑っている。

「嘘ではない」

シグナムがネロとフェイトの前に来て事実を言う。
チラッと手で顔を押さえたままフェイトを見た。

「本当か？」

「うん」

フェイトまで認めてしまった。

それはそうだ。元々言い出したのは彼女である。

ネロがミッドチルダに来て、最初に出会った人間もフェイトとシグナム。

片方が知っていればもう片方も知っているだろう。

「ウチも知ってますよ？」

終いにははやてが付け足す。

ここまで来たら何かしらの嫌がらせではないのかと錯覚してしまいそう。

「カリムとシャツハも知ってます」

また付け足された。

言ったフェイトの方をネロは向くが、やっぱり嫌がらせなのだろうかと思ってしまう。

「その人の為にあなたは戦っている… そうでしょ？」

フェイトの言葉を耳に入れながらもネロは頭を数回搔いた。
ここまで来たら誤魔化せない。

「まあな…」

ネロは照れ隠しはしない。

まだ顔は赤いが、さっきよりは落ち着いていた。

「守りたいものの為に戦う。それでいいんじゃないかな？」

フェイトがそう言うが、またネロがそっぽを向いてしまい、遠くを眺めているので顔は見えない。

「みんな感謝してるんだよ。エリオもキャロも、スバルもティアナもみんな…」

「言っただろ？」

自分を見てくれないネロにフェイトは精一杯の感謝の言葉を送ろうとするが、ネロは振り返らないまま言った。

「礼が欲しくて助けたわけじゃない。そうしたかったからやっただ

けだ」

またネロは右腕を見詰めながら話す。
人差し指から順に指を折り曲げて…

（キリエの様な優しい人を守りたい…）

嘗て心に決めた誓いを胸にネロは拳を握った。

強く握り締める事によって悪魔の右腕からは青白い光が漏れ出す。

「あの日からだ…」

「え？」

突然ネロがフェイトを見て口を開いた。

先程のような悲しい目ではなく、強く決心を固めた目をしていた。

「一年前… あの日から俺の右腕には悪魔が宿った…」

ネロは目線を右腕に落とした。

右腕を左手で掴み、手を開いては握る繰り返し2〜3回。

茶色の外殻に覆われた青白い光を放つ異形の右腕…

フェイトは目を背けずに右腕を一度見た後にネロを見る。

「頭の中で声が響く。…いや…」

ネロが落とした目線を戻してフェイトを見た。

「俺の… 魂の叫び… なのかもしれない…」

少し顔付きが険しくなり、拳を握り締めた。
右腕からは、絶え間無く青白い光が漏れ出す：

「もっと力を…！」

ネロの言葉に呼応するかのように右腕がボウツと光った。
一年前にネロが願った思い。

“キリエを守る為の力”を求め、欲した結果。
それが“悪魔の右腕”だ。

「彼女を守る為の力が欲しかった…」

ネロがフェイトを見詰める。

銀と金の髪、碧と紅の瞳あお あかの男性と女性。

「だから俺は戦う…」

「あ…！」

「何処に行く？」

フェイトとシグナムを通り過ぎ、ネロがダンテやはやてのいるドア
の方に歩き出した。

フェイトが何か言おうとしたが、その前にシグナムに言われてしま
った。

「ちょっと空気、吸うだけって言っただろ？ 会議室に戻るんだよ」

振り返らないままドアノブに手を掛け、ネロが隊舎の中に入ってい
った。

「ハハッ…！」

「どないしたんですか？」

「いや…」

小さく笑ったダンテにはやては首を捻る。

ネロが少し元気を出したように思えたはやても一安心したが、ダンテの不敵に笑ってみせる姿には、どうも気になってしまった。

「相変わらず口の減らないやつだと思ってさ？」

「それ、あなたが言います？」

ダンテが顎の無精髭を触りながらはやてを見る。

減らず口ばかり叩いているのはダンテの方も同じ… いや、ネロよりダンテの方が多い。

はやてが呆れながらもネロの入っていったドアの後にダンテを見る。

「それに嬉しくてよ？」

「ネロさんが元気出したのがですか？」

「まあ、それもあるが…」

まだ笑っているダンテにはやてが聞くが、それ以上言わずにダンテも屋上から中に入って行った。

「行っちゃいましたね…」

「ああ」

フェイトとシグナムがネロとダンテが入って行った屋上のドアを、自分達が出て来たドアを見る。

「ウチらはいらんかったみたいやな」

「あはは…」

「まあ… そうなっちゃいますねー…」

はやてがにこやかに笑いながら言っているのにスバルは少し顔を引き吊った笑みを、ギンガも苦笑する。

「ほな、戻るか」

「はい」

ドアノブを掴んで扉を開けたはやてに続き、シグナム達も中に入った。

機動六課隊舎内の廊下…

ネロとダンテが一緒に歩いていた。

ふと、ダンテがネロを見るが、彼も視線に気付いてダンテを見る。

「何見てんだよ？」

「一匹狼気取りのはみ出し者が仲間の大切さを知ったってやつか？」

ダンテが相変わらず皮肉を言うのに、ネロがつい舌打ちしてしまった。

屋上にいた時は、ダンテはただ見ていただけなのだが、彼なりに心配ではあったらしい。

「ほっとけよ！」

ネロは歩くペースを上げるが、ダンテはまったりとマイペースに歩き続ける。

「お前は一人じゃない。みんながいる…あの嬢ちゃんもな。何でも抱え込むなよ？」

「分かったよ…」

フツと笑ってみせたダンテにネロも立ち止まり、振り返った。

一言だけ気だるそうに言うと、またネロが先に歩き出し、ダンテもその後を追う。

（力…か…）

何気なく右手を握るダンテ…

（“あいつ”もそんな事、言ってたな…）

ダンテの記憶がフラッシュバックし、若き日に記憶が呼び覚まされる…

——受け継ぐのは力じゃない！！ 誇り高き魂だ！！

嘗ての自分、まだ、ただの便利屋だった頃の事：

——俺の魂が叫んでる… あんたを止めろってな！！

ダンテの指差す先にいるのはもう一人のダンテ：

いや、違う。青い服を着て、銀色の髪を後ろに撫で付けた男がそこには立っていた。

——ハハハハハハハッ！

その男は嘲笑うかのように：

右手には柄尻に頭蓋骨のどくろの装飾を持つ両刃の大剣を。

左手には冷たい光を放つ抜き身の刀を持っていた。

——悪いが俺の魂はこう言っているぞ？

銀髪の男の目付きが鋭くなり、ダンテよりも低い声で言った。

——もっと力を。俺には力が必要だ…！

嘗て袂を分かった兄との戦い。

母を失い、自分の無力さを思い知ったダンテの兄は、半人半魔でありながら悪魔として生きる道を選んだ。

半身であるダンテに父の後継者^{スパーダ}は自分にこそ相応しいと考えた。激戦に次ぐ激戦…

——バカなっ！！

勝利したのは彼の双子の弟、ダンテだった。

——俺はここでいい： 親父の故郷の魔界で：

銀髪の男は人界と魔界の狭間にある場所で、崖から身を投げ出した。

（守る為の力：か：）

ダンテが前を歩くネロを見た。

姿こそ違うが、一瞬、その後ろ姿が死んだ兄と重なる：

（あんたの分もこいつがやってくれるさ：）

愛する者を守れなかった兄： 愛する者を守るネロ：

母を失い、スパイダの後継者になるべく力を必要とした兄の：
キリエを：彼女のような人を守ると決め、力を求めたネロの：
同じ魂を持つ者の叫び：

「どうした？」

「何でもないよ：」

ネロが突然振り返り、ダンテを見たが、彼は不敵に笑っただけ。

「気になるだろ？」

「そんなのいいから戻るぞ」

ネロは腑に落ちない様子だったが、ダンテが先に入った会議室の中に自分も入って行った。

Episode..37 求めた力へ青き魂を持つ二人◇◇ (後書き)

色々と話が急ですね。

フェイト以外はほとんど喋ってない…

そろそろ戦いとかやりたいけど、これはまだしばらくしんみりしたカンジになりますかね？

正直、自分の気持ち次第ですけど…

E p i s o d e . : 3 8 〽 決意 へ心に決めたもの〽 (前書き)

今の自分に出来ることを…
若き騎士は赤い狩人と共に…

Episode..38〈決意へ心に決めたもの〉

『ティアさん…』

会議室にいる誰もが喋らずに沈黙が包み込む。

いきなり現れたネロに続き、新たな次元漂流者“ダンテ”

『隊長たち、出てっちゃいましたけど…僕達も…』

『そう言ったってしょうがないでしょ。八神部隊長に来るなって言われたんだし』

キャロとエリオの二人と念話で話すティアナだが、彼女はどのような事もない。

一瞬、自分もはやて達を追って、会議室から出ようとしたのだが、はやてに止められてしまい、シャルやエリオ達と一緒に待機させられている。

（悪魔…か…）

物思いにふけていたヴィータがダンテの置いていった“リベリオン”に目を向ける。立ち上がると、“反逆の魔剣”に彼女は歩み寄った。

「ヴィータちゃん？」

同じく出て行ったはやてを待つラインが聞くが、ヴィータは応えずにリベリオンの前に無言で立つ。

「他人^{ひと}の物だぞ」

リベリオンに手を伸ばそうとしていたヴィータだが、ザフィーラの声に彼女も動きを止めた。

「わかってるよ…」

ヴィータも腕を下げ、ダンテの剣に触れずに、ただ眺め、立っているだけになった。

ヴィータはこんな行動に出たのか、自分でも分からなかった。気まぐれか、突発的な行動か、衝動か：

ただ、今の状況が飲み込めなかった自分の暇潰しなのかもしれない。

——親父の形見だ

ダンテの言葉が頭の中で響き、彼女は頭を俯かせると小さく息を吐く。

——今のあいつに必要なのは“守るもの”と“戦う理由”だ

守るものも、戦う理由も今のネロにはない。守るべき女性“キリエ”のいない世界、ミッドチルダ。

今の彼が戦えるのは、悪魔がいるからという事と、自分を信じてくれているはやてやフェイトへの義理。曰く、協力しているだけとの事。

「はあ…」

ヴィータがまた小さく息を吐いた。今度は溜め息である。

附せていた瞼を開け、元の席に戻ろうとした瞬間に会議室の扉が開

いた。

「なにしてんだ？」

ネロと一緒に入って来たダンテが言うが、聞かれたヴィータは何も言わずに二人を見ている。

自分を見ている赤い髪と青い瞳の少女が無言で見詰めているのにダンテも、

「なんだ？ そんなに見るなよ、照れるぜ」

と言う。相変わらずの調子で大袈裟な素振りをするが、ネロは何も言わずに隣のダンテを見た。

「俺に惚れたか？」

彼の何処からそんなセリフが出て来るのかとでも言いたげな顔をしている。

「あんたに惚れるようなやつ、いんのかよ？」

ヴィータがうんざりしたように言うが、ダンテは自信ありげに顎を触っていた。

「これだけイイ男がいるんだぜ？ いるに決まってる」

会議室にいる皆の顔が引き吊っていた。

無論、隣にいるネロもそうだ。

「むしろ、いない方がおかしいだろ。なんで誰も寄って来ないんだ

？ 美男子二人…」

言いかけた瞬間にダンテの脇腹にネロの肘うちがめり込む。

「痛って… おい！」

「バカやってないで座るぞ」

ダンテが右の脇腹を抑えながらネロを見た。
だが、彼は素っ気ない返事と共に歩き出す。

「人に喰らわせておいて…」

「いい歳してはしゃぐからだ」

ダンテを無視してネロは椅子に座った。
ダンテも愚痴を言いながら元の座っていた席に戻る。

「たく… これだから若いやつってのは…」

ダンテがぶつぶつ言っていると、再び会議室の扉が開き、はやて達が戻って来た。

無駄に大人数で出て行ったのだが、実質フェイト一人で事は足りていただけに、多勢に無勢。

ダンテも椅子に座ると、またテーブルに足を乗せたが、すぐにネロによって弾き落とされる。

『『フェイトさん！』』

『ただいま』

心配していたエリオとキャロだが、彼女は念話で話しながら二人に微笑む。

『ネロさんのほうは…』

『心配しなくても大丈夫だよ。落ち込んでたみたいだけど、落ち着きたみたいだから』

フェイトは妙に騒いでいるネロとダンテを見ていたが、今の彼を慰める為にとった方法も思っていたよりかは効果があったらしい。何度も繰り返される足をテーブルに乗せようとしているダンテと、それを阻止するべく動くネロ。

『スバル』

『なに？』

ティアナも自分の隣に座ったスバルと念話で話す。

『どうなったの？』

『見ての通りだよ』

同じくスバルの隣にギンガが座るが、会議室の中では軽い喧嘩になっている二人を見ていた。ダンテにとってはじゃれ合いでも、端から見れば喧嘩。

『見ての通りって…』

「フッ!!」

ティアナが怪訝そうな目でネロを見ているが、遂に躁り出された彼の拳は空を切る。

外で何があったのか彼女には理解出来なかった。

「よっと!」

遂にネロの右腕がダンテに捕まる。

彼はネロの右腕を腕一本で掴んでいるが…

「ううううーっ!」

悪魔の右腕からは強い光を放ち始め、ネロも唸り声を上げる。

『ちよっと…!!』

「ストーーーーップ!」

ティアナも慌てふためくが、声に反応してネロが振り向いた。

言ったのははやて。いつの間にかじゃれ合いと言う喧嘩をしていた二人の前に来て、二人を引き離す。

「喧嘩やったら外でやって下さい。ここは部屋中なんでみんなにも迷惑かかるし…」

「よし、それじゃあ外に…」

「本気にせんといして下さい!!」

部隊長として、人として仲裁に入るが、剣を手に取り外に出ようとしていたダンテを思わず呼び止める。

「嬢ちゃんが出ろって言ったんだろ？」

「いや、そう言いましたけど…」

肩で剣を担ぐダンテにはやてもタジタジ。
喧嘩を止めようと思って言ったのだが、彼は本気で出て行こうとしている。

「なあに、ちょっとばかり遊びに付き合ってやるだけだよ」

はやては、あれだけ巨大な剣を片手で扱っているダンテの腕に目が行ってしまうが、ここで行かせてしまう訳にはいかない。

「いや、遊びとかそう言うのじゃなくて…」

「遊びだと？」

今度の問題はネロ。

右腕からは妖しげな青白い光が漏れ出し、ゆっくりと拳をつくる。

「坊や相手に本気出すわけにはいかないだろ？」

その言葉を皮切りにネロがダンテに飛び掛かった。

「だったらさせてやるよ!!」

青白い魔力で形成されたデビルブリンガーがダンテを襲う。

だが、巨大な拳を剣で受け止められてしまった。

威力は凄まじいだけに、ダンテも勢いで少し後ろに後退してしまう。

「はああああっ!!」

「ハハッ!!」

指輪からデバイスモードに切り替えられたレッドクイーンを手にするネロと、大剣を振るうダンテ。

互いの剣は身の丈近い程の物であるにも関わらず、二人共片手で持っている。

『ねえ、スバル』

『なに？　ギン姉』

何気無く念話を使っている姉妹の横では会議室にいる大抵の人間がとんでもないことになっているネロとダンテを止めようとしているものの、入る隙がなく狼狽えている。

『彼、いつもあなの？』

『いゝやゝ。普段は冷めてるとか、やる気のないカンジだけど、模擬戦の時とかなら人が変わったみたいになってるよ』

彼とはネロの事だ。

ギンガがスバルから手早く聞かされた話では、最近来た六課の一員であり、人と話したがらない性格だと言っていた。

一員ではなく、ただの民間協力者であり、性格に関しては協調性もないからである。

テーブルの向こう側では吠える銀髪の青年がはやてや、シグナム達に取り押さえられていた。

『でも、あのネロさんをあしらうなんてね』

『“あの” って言われても分かんないんだけど』

スバルが少し苦笑しながらネロを見るが、ギンガにはそう言われても困る。

ダンテがはやて達に押さえられていたネロを馬鹿にしたように笑っていたが、一通り笑うと：

「あー、つまんねえ」

終いにはダメ出し。

椅子に腰を下ろし、深く座りながら自分の剣を見詰める。

『あれだけやっというて、あの人つまんないと言ったわよ!?!』

『だね…』

ギンガが驚きつつ呆れ、スバルは苦笑を持續させている。

『心配するだけ無駄ってことね』

さりげにティアナが入るが、今まで慌てていた彼女にスバルはキョトンとした顔で見っていた。

「ざっと一年ぶりの再会だったのによお」

「再会するなり、女にはしゃぐようなあんたのせいでこんな事にな
ってんだろぅが!!」

「まーまー」

ダンテが椅子にもたれ掛かり、天井を見上げるが、吠えるネロをは
やてがなだめる。

少し元気が出たのはいいが、また問題が増えたようだ。

「いいじゃねえか別に」

何やら楽しげにフツと笑っているダンテ。
みんなが何とも微妙な顔で彼を見ている。

：

「で、話は戻るけど…」

あれからしばらくして、何とか落ち着いたネロが言うが、みんなは
黙って彼の話を聞いている。

落ち込んでいた状態から少しは普段の自分に戻れたが、何とも気だ
るげな口調だ。

「はやて、悪魔の画像出してくれ。“あの”やつだ」

「ちょっと待ってて下さい…」

ネロの言われた通りにはやては悪魔の画像を映し出した。

「こいつは…」

【スパアアダアアアアアア！！！！！】

ダンテが出てきた映像… 悪魔のものと見ると、顔をしかめる。
2体の巨大な悪魔が叫びながら暴れ回り、自分の周囲を焼き尽くそうとしているものだった。

「見覚えあるだろ？」

「あー…」

ネロが不敵に笑いながら隣のダンテを見るが、彼は何と言おうか考えている。

「知ってるのか？」

「左の悪魔に似たやつは前に戦った事がある」

「な…！？」

シグナムが聞いて来るが、ネロの思ってもない言葉に驚いた。

「わりい、言うの忘れてた。そいつは一回ブッ飛ばしたし、もうこっち側には来れないと思ってたんだが、多分その時に戦った悪魔と同種のやつ…」

「多分そうだろ」

ネロが取り敢えずは話さなかった事を詫びていると、ダンテが付け足した。

「俺がブツ倒したんだし」

「倒した!？」

ダンテの発言には驚かせるばかりだが、口を開くはやての他のみんなも唾然としている。

「まあな。シヨボい花火だったぜ」

足を組み直しながら言うダンテをネロは何とも言えない顔で見ている。

「どうした、坊や？」

ダンテが気に掛けているとは到底言えない感じだが、ネロは小さく息を吐く。

「俺は仕留めそこなっちまったよ…」

「ハハハッ。ダセーな」

ダンテの小馬鹿にしながら言うが、今度は掴み掛からずにいる。

「しょうがねえだろ？ あの時閻魔刀も持ってなかったんだし」

「武器のせいにすんなよ」

「あー、そうかい…」

ネロとダンテの他愛ない話にはやて達も聞き耳を立てる。

「右のやつは？」

「あっちも戦ったことあるよ。とつくに死んでるはずだが、あいつも同じ種族の悪魔なんじゃねえのか？」

頭を掻いた後にネロは親指で“ベリアル”と同様に燃え盛る悪魔：周囲を焼き尽くさんはがりに体から炎を噴き出している巨大蜘蛛の悪魔を見ながらダンテも何気無く言う。

『あっちも戦ったことあるって！』

『いや、その前に死んでるとか言ってたんだけど…』

スバルとティアナが念話を使って話すが、映し出されたモニターに映る悪魔は絶え間無く叫び続けている。

「しつこいやつでな？ やたら追い掛け回して来やがってよ。終いには勝手に落っこちて串刺しになりやがった」

『さりげにすごい話なんだけど…』

『だねー』

自慢話ではないが、ダンテの経験談にティアナとスバルが顔を引き吊らせる。

向こう側では銀髪の男が二人で素っ気なく話しているが、内容は到底信じがたい話だ。

「ファントム!？」

「ああ」

燃え盛る蜘蛛の悪魔“ファントム”の名前を聞き、ネロがテーブルに乗り出した。

「魔帝の臣下で武将の“幽玄の火炎蜘蛛”か!？」

「あいつ、そんな大層な二つ名あったのかよ？」

「昔、書物で読んだんだよ」

「見掛けによらず勉強熱心だな」

ダンテが皮肉るが、そこでネロは乗り出した状態から下がり、ダンテと同じく椅子に深く座った。

ネロの様子を察してダンテも首を傾げる。

「クレドに無理矢理読まされたんだ…」

「…そうか…」

そこで再び会議室にいる誰も喋らずに沈黙… いや、映像の悪魔“ベリアル”と“ファントム”に酷似した悪魔の声が映像越しに伝わる。

「あの…」

はやてが躊躇いながらダンテとネロを見た。

「やっぱり悪魔はお父さんを怨んでらっしゃるんですか？」

「そりゃな。裏切り者だし」

ダンテが画像からはやてに顔を向けた。はやてはやはりマズイ事を聞いてしまったと思ったが、スパードの息子であるダンテ自身は話を続ける。

「最近はどうでもないけどよ、前は“同胞の仇”だの、“積年の怨み”だの言って息子の俺に突っ掛かって来やがった」

ダンテがやる気なく喋りながら立て掛けてあった大剣リベリオンを眺める。

「大変だぜ？ 親の尻拭いってのも」

リベリオンを杖代わりにして、ダンテはそのまま椅子から立ち上がる。

大剣を背負う姿をネロは勿論のこと、みんなも彼を見ているが、ダンテはそのままドアに向かって歩き出した。

「お前も気を付けろよ」

手をヒラつかせ、ダンテはそのまま会議室から出て行こうとするが…

「何処行きはるんです？」

「メシでも食いに行ってくる」

はやてが少し心配しながら聞くが、ダンテは六課に来た時に言っていた事を実行しようとしていた。
彼は心配するだけ無駄なのかと思いつつ、一応は気に掛ける。

「止めに行つて…」

「いや、今日は色々あったしご飯でも食べよ」

ネロがダンテを連れ戻そうとするが、はやてが悪魔の映像を消し、立ち上がりながら会議室のドアに向かうが、そこで立ち止まりネロの方を振り返った。

「頭ん中は切り替えた方がええんやろ？ 美味しいもん食べて湿つたれた事は忘れたほうがええし」

ダンテに続いて会議室を出たはやてを見送り、ネロはフェイトの方を見た。

「あれが部隊長の言うことか？」

「まあ… 今日には本当にいろんなことがありますきたからね」

「そうだな…」

フェイトがぎこちなく笑うが、ネロが溜め息混じりに言いながら会議室を出た。

「じゃあ、私達も行こうか」

「うん」

フェイトとなのはも立ち上がり、シグナム達も会議室を跡にする。

：

確かに今日一日の間に色々とありすぎたが、ネロは自分を宥めるように首を振り、廊下を歩いていた。

「親…か…」

ダンテの言っていた言葉にネロは右腕を見ながら呟く。

彼は自分の親の事を知らない。

家族同然だったキリエと彼女の兄であるクレドはいたが、そのクレドも一年前に：

「クレドの分まで戦うよ…」

新たな決意を胸にネロは歩き続ける。

兄同然だった亡きクレドの為にもキリエや優しい人を守ると決めて

：

E p i s o d e . . 3 8 〽決意へ心に決めたもの〽 (後書き)

激しい温度差だー！ ナニコレ？

ダンテには六課のみんなタジタジです。

次の話あたりでナンバーズの方とか書きたいですね。と言うより、
戦闘シーンやりたい：

E p i s o d e . : 3 9 異質な二人〈銀髪の男たち〉〈前書き〉

今回は別に大した話ではないです。

ダンテのマイペースがただひたすらに突き進む話になっています。

Episode..39〈異質な二人へ銀髪の男たち〉

会議室を出たネロがまず最初に向かった先は医務室。

悪魔の右腕を隠す為には包帯が必要だった。

幸い、会議室から医務室に着くまでの間に部隊員には誰にも会わずにすんだのだが、彼は黙々と慣れた手付きで右腕に包帯を巻いている。

「…よし」

包帯を巻き終わり、医務室を出ようとした時に、ふとベッドの方に彼は目を向けた。

そこにはレリックケースを足に鎖で繋がれていた少女が眠っている。ネロは黙って少女を見ていたが、何も言わずに医務室を出ようとした瞬間にドアが開いた。

「あ…」

「ここにいたか」

丁度開いたドアから鉢合わせになったのはシャルとザフィーラ。

「そりゃな」

ネロはシャルと向かい合っていたのだが、目線の低い位置にいるザフィーラに目を向ける。言うまでもないが、今のザフィーラは狼形態のままだ。

ネロはザフィーラを一度見て言った後にシャルに目線に戻して話を続ける。

「右腕を隠すには包帯がいるし、そんなもんがあるのはここぐらいだからな」

ネロは右手を腰にあてながら話す姿にシャルは何か言いたげに：ザフィーラは表情が分かりにくい、ただ目の前にいるネロを見ている。

「どうした？」

「あの： えっと：」

シャルの様子に気付いたネロが聞くが、彼女は何と言ったらいいか迷いつつ言葉を選んでいる。

「何だよ？ 言いたいことあるならはっきり言え」

「：右腕のこと： 気にしてるんですよね？ やっぱり：」

「まあな」

シャルが悩みながらネロの様子をうかがうように慎重に聞くが、彼は当たり前だと言わんばかりに平然と返す。

それを聞いたシャルが余計マズイというカンジの顔になる。

「：どうした？」

「その：」

「はっきり言えよ」

シャルに聞くんが、彼女はさっきからこの調子で言いたいことを言わない。

ネロはいい加減に苛つきそうにかかるが…

「右腕の事だが、六課の人間ならみんな知っているぞ」

痺れを切らしたザフィーラがシャルの代わりに本題に入った。

『ザフィーラ!!』

シャルが念話を飛ばすが、彼は止まることなく喋り続ける。

「先程の戦闘… 映像を通してだが、バックヤードの者達は愚か、スタッフの者も見ていた」

話を切り出し、余りにもはっきりと言うザフィーラにシャルは焦っている。それはそうだ。シャルもそうだが、右腕の話を聞いていたザフィーラもネロが右腕を見られなくなった事は知っていた。だが、その右腕を六課の部隊員に知られてしまった事をこのまま黙っておくことは出来ず、ザフィーラはネロの言った通りにはっきりと事実を知らせる。

『そんなに言わなくても…!』

『仕方あるまい。この者には教えてやったほうがいい』

『でも、もっと言い方が…』

「お前が腕の事を気にしているのは分かるが…」

はつきりと言うザフィーラにシャルが念話で話すが、彼の言っているのは正しい。一番手っ取り早く、簡潔に済むからだ。

シャルももっと良い言い方があるだろうにと思うが、ザフィーラ自身は話を続けた。

話を黙って聞いていたネロだったが、目を附せたままシャルとザフィーラの隣を通りすぎ、そのまま廊下に出る。

「先に食堂、行ってるぞ」

開いたままだったドアが閉まり、二人はネロの背中を見送る。

軽く言った、右腕に包帯を巻くネロは少しずつ遠ざかって行くが、

「今日のこと！」

突然声を上げたシャルに反応して立ち止まった。

ネロは振り返らず、ザフィーラは彼女を見る。

「守ってくれてありがとう」

自分に礼を言ったシャルを見ないネロ。

少しだけ振り向きそうになるが、何故か彼はシャルを見なかった。

「ヘリの中でもそうだけど、撃ち落とされなかったのも、あなたがいたから…」

「礼を言われるほどのもんじゃねえよ」

シャルの言葉に軽く返しながら、ネロは歩き始めた。

「ただ邪魔なもんを倒しただけだ」

徐々に遠ざかって行くネロがセリフを付け足すが、シャルはまだ言い足りなかった。

だが、言う前にネロの姿が見えなくなり、その場にはシャルとザフィーラだけが残る。

「あー… 飯だ、メシ」

会議室を出たダンテやはやて達は食堂に集まっていた。

なのはやフェイト達も後から来るが、時間が時間だけに他の部隊員達も多い。

「そないにお腹空いてはるんですか？」

「ああ。昼に一応食ったんだが…減っちゃってよ」

いきなり椅子を引くなり、横から滑るように椅子に腰掛けるとテールブルの上にダンテの足が乗った。

その場にいたシグナムの顔が引き吊るが、それに気付いたダンテも足を下ろす。

「おっとわりい。これは癖でな」

「でしょうね。今日だけでもう何回も見てます」

リベリオンを隣の椅子に立て掛けながら悪びれない様子で言うが、はやては笑っている。

「普段もメシを食うときはあの体勢のままなんだ」

「はあ…」

「気付いてたらなっちまってたんだよ。悪く思うな」

はやてが相づちを打ちながら言うが、ダンテは前のめりに頬杖をついている。

到底悪いとは思っていないだろう。

「まあ、話はこれくらいにしてメシだ。おっと、来た来た」

スバルとエリオが食事の盛られた大きな皿を持って来たのにダンテのテンションが上がる。

「うまそうだな… って、ピザないのかよ？」

食事が来たかと思えば、いきなり不満を漏らす。

エリオ達も何とも言いがたいカンジになるが、そこは気にせずに皿をテーブルに置いて座った。

「今日食べましたよね？」

「食わせてもらったが、普段から食ってる主食はピザだ。因みにオリーブ抜きのやつ」

「昼にあれだけ食べたのにまだ食べるんですか？」

「当たり前だ」

エリオが躊躇いつつ、呆れた顔で言うが、話しているダンテは平然

とした様子でいる。

「昼に食べたって？」

「スバルさん達と別れた後、助けてもらったお礼に食事に誘ったんです」

スバルが聞いて来るが、不満を言いつつも早速、皿に食事を取り分けているダンテにエリオは顔が引き吊りそうになっている。

「助けてもらった？」

「はい。ちょっとガラの悪そうな人達に絡まれていた所を」

「そのお礼にご馳走したんですけど…」

今度はティアナが聞くが、助けてもらった当の二人、エリオとキャロの向かいにいるダンテは我先に食べていた。

「…なんだ？」

やたらとがつつくダンテに皆が啞然としている。

テーブルを囲んでいるフォワードと隊長陣の前線メンバーが自分を見ているのにダンテが気付いた。

「え!？」

「いえ、何も」

スバルが戸惑いつつも、ティアナが即答するが、ダンテは一人納得

したように頷いている。

「惚れられても困るぜ？　いくら俺の守備範囲が広いっていつても嬢ちゃん、相手するわけにはいかないしな」

テーブルを囲む人間は顔をしかめ、時に呆氣にとられ、苦笑する。

「そういうので見てたわけじゃ…」

「まあ、来るものは拒まずって言うしな。特にそっちの姉ちゃん達なんかは…」

ティアナが相変わらずのマイペースぶりの調子で話していたダンテに言うが、彼は右隣にいるフェイトを指差している。

「べっぴんさん、べっぴんさん…」

フェイト、なのはを指差し…

「そんでもってべっぴんさん」

左隣のはやてを飛ばしてシグナムを指差す。

『ウチ入ったらん!!』

予想はしていたが、もしかしたらという期待を裏切られたはやてがショックを受ける。

『主!!』

はやての隣に座っているシグナムが念話で宥めるが、会議室にいた時からやたらと冷たいダンテに、はやてはふつふつと怒りが込み上げて来そうになる。

『なんなんこの人！？』

『気を確かに』

『シグナムとなのはちゃん、フェイトちゃんは範囲内なんにウチは入らんの？』

『落ち着いて下さい！』

拳を握り締め、なんとか我を保っているはやて。

シグナムもいつダンテにはやてが飛び掛かるかヒヤヒヤしていた。

「あ、いけねえ！」

ダンテが思い出したかのように声を上げる。

「もう一人いたな？ 危ねえ、忘れるトコだった」

フォークで料理を突き刺しながら、ダンテが“もう一人美人”がいたのに気付いた。

『え？ もしかしてウチ？』

『良かったですね。主』

期待しながらダンテの次の言葉を待つはやて。彼女の心が明るく染

まる。

シグナムが一安心しかけるが、彼女の脳裏にふと、不安がよぎった。ここまでの流れ、よく考えてみればはやてが出てくる事はない。

（まさか…）

彼女の脳裏に浮かんだのは、はやて以外の人物。会議室にいた者の内でダンテが美人に上げるもう一人がいるとすれば…

「あの白衣着た金髪の姉ちゃん」

（やはりシャルカ！）

シグナムの予想が的中した。

またしても期待に裏切られたはやてがショックに打ちひしがれる。

『シグナム…』

はやてがテーブルに俯せたままシグナムに念話を飛ばす。顔は見えないが、下手をしたら泣いているだろう。

『ウチ、魅力ないん？』

『いえ、そう言うワケでは…』

『そりゃ、スタイルもええワケやあらへんし、背も低いけどさ…これ、あんまりやん…』

コメントしづらい事ばかりだが、はやての体から徐々に負のオーラが滲み出てくる。

『なんなんこれ？ 差別なん？ ウチは美人にカウントされてへん上にガン無視？』

はやてが俯いたまま顔をシグナムに向けるが、その目付きは相手を呪うかのような異様さがあった。

一瞬、シグナムの隣にいるヴィータとテーブルに乗っているリインまでもが、ビクツと反応してしまう。

『この人、ネロさんと大違いやん！？ あの人、無愛想なトコとかあるけど、それでもこないなふうちゃうやろ？』

『まあ、そうですが… まだ会って間もないですし、これで判断すると言うのは…』

やたら心理的ダメージを受けてばかりのはやて。

シグナムに加わり、ヴィータとリインも彼女を慰めようとする。

『はやて、気にすんなよ』

『ファイトです、はやてちゃん！ まだのびしろはあります！』

『バカ！！』

リインが余計なことを言ったのにヴィータが慌てた。
が、時すでに遅く、更にははやてから負のオーラが増して行く。

「あー… 後は…」

『え！？』

また、口を開いたダンテに反応してはやてが反対方向に首を動かす。ダンテは考え込みながら顎の髭を触っているが、はやてを見てはいない。

「そっちの嬢ちゃんたちは… 後、5年… いや、3年ぐらいしたら…」

向かいにいるティアナとスバル、ギンガを見ながらダンテの目が細くなる。

掴みかけた希望も失い、はやてがまた塞ぎ込んでしまった。

『もう、あかん…』

『主!!』

『はやて!!』

『はやてちゃん、しっかりして下さい! まだ需要は…』

『『お前は喋るなっっ!!』』

また余計な事を言いそうになったリインにシグナムとヴィータが同時につつこむ。

『年下に負けた…』

負のオーラのどす黒さを増し、はやての周りが黒く染まっていくのにシグナム達が引き戻そうとするが、かなり重い。はやての周りの空気もだが、同時にその辺りだけがブラックホールとなりかけてい

た。

「何やってんだ」

聞こえて来た声と、何かを叩く音に顔を上げてみれば、はやてとダ
ンテの後ろにネロが立っていた。

「痛えな、叩くなよ」

「痛くなんかないだろ？」

ダンテが頭を押さえている事からネロに叩かれたのが分かった。

「一年ぶりに再会したってのに、人のことさんざん小突きやがって」

「御互い様だ」

「お前の方が強くやってんじゃねえか」

はやて達だけでなく、食堂にいる周りの部隊員達も二人の銀髪の男
に注目が注ぐ。

先程までは賑わっていたのに、気付けば誰も喋っていないかった。

Episode..39〈異質な二人〈銀髪の男たち〉〉（後書き）

焦って投稿しました…

〈第40話予告〉

「おい、なに一人で食おうとしてんだよ。寂しいやつだな」

その男、常に己の道を…

「あの悪魔…アンジェロは俺の所属していた組織が造り出した」

語られる一年前の記憶…

「悪魔が神になったってわけさ」

「頭のイカれた宗教団体だよ」

その男、常に孤独…

E p i s o d e . . 4 0 〽手荒なやり方〈粗野な男〉〽（前書き）

その男、己の道を…

Episode..40〈手荒なやり方へ粗野な男〉

「たく、やだねえ？　すぐに手の出るやつは」

ダンテがまた大袈裟な素振りをしているのにネロは冷やかな目で
見ている。

「はいはい」

言われた本人であるネロが小さく息を吐く。

そこで、感じる視線と静まった空気に気付き、辺りを見回した。
いや、ネロが来た時にはそうなっていたのだが、好奇の目に彼は居
心地の悪さしか感じない。

「ネロ、腕のことなんだけど…」

「みんな知ってるって言いたいんだろ。さっきシャルとザフィー
ラから聞いた」

フェイトがネロの顔色をうかがうようにして、言うのを躊躇ってい
たが、彼はファイトを見ないまま食堂の遠くを見ている。

「あれは、ああするしかなくて俺が自分でやった事だ」

「でも、私達がもっと早く駆け付けていれば…！」

自分を見てくれないネロに、フェイトは自分に責任があると主張し
ようとした。

しかし、ようやく見てくれたネロは何処か悲しそうな顔をしている。

「どうにかなったって言いたいのかよ？」

重苦しい空気に包まれる場にネロの声が響き渡る。

「それとも何か？ 腕を見られたくないから女に戦わせて、俺は黙って見てろって言いたいのか！？」

彼の冷たい言葉に思わずティアナやエリオが立ち上がりそうになってしまったが、フェイトが手で制した。彼女の隣に座っているなのも無言で首を振っているだけ。

『なのはさん！！』

『ダメだよ、ティアナ。堪えて』

『でも、フェイトさんが気遣ってくれてるのにあんなふうになんて言わなくても！！』

『エリオもだよ。彼の言い分も聞いてあげて』

フェイトの思いを無にしようとするネロに、怒りをおぼえるティアナとエリオだが、念話を通して自分達の上司でもあるなのはに止められた。

「何もしないでやられるなんてゴメンだな。しかも、他人まで巻き込むなんてよ」

眉を吊り上げつつ言う。

その言葉を聞いてフェイトも黙ってしまった。

「…なんだ？」

「メシ。自分で取れよ」

何やら自分の体に当たっている物があつたのでネロは目線を落とした。

ダンテが皿を持ち、後ろにいるネロに渡そうとしている。

一瞬、間が空いたが、その皿を受け取り、適当に料理を盛ると、ネロは何処かに歩き出した。

「何処いくんだ？」

「あっちだよ」

「あっちって、どっちだ？」

振り返らないままネロは歩くが、彼が何処に向かおうとしていたのかは、ダンテ以外の六課の部隊員なら知っている。

「多分、端の席だと思います」

「端っこ？」

遠ざかるネロを見ていたダンテだったが、知っているだけに、はやてやシグナムの顔が曇る。

「彼、いつもああなんです。食事をする時も、何にしても人から距離を置いているように…」

「知ってるさ」

歩くネロに部隊員達の注目が注ぐ。フェイトが椅子から立ち上がるうとした瞬間、その前にダンテが先に立った。

「嬢ちゃんたちは待ってな。俺が行ってくる」

「あの…」

ダンテがフツ、と笑いつつも歩き出した。フェイトは自分が行こうと思ったのだが、言う前に端のテーブルで食事を始めようとしているネロの所にダンテはスタスタと向かう。

「行っちゃった…」

ぽつりとなのはが呟く。見慣れない顔… と言っても、今日の廃棄都市区画内での戦闘映像を見ていた部隊員達の注目がダンテに集まる。

今はボロボロになっているやたら目立つ赤のラバーコートは着ていないが、190以上ある長身に黒い服、ネロと同様の銀髪はかなり目立っていた。

なに食わぬ顔で歩くダンテだが、一人食事をしようとしていたネロの所まで辿り着く。

「よお」

「…何しに来た」

軽快に挨拶するダンテにネロは素っ気ない返事を返す。

「なに、一人で食おうとしてんだよ？」

「いいだろ別に」

「カッコつけか？」

「そんなんじゃない！ ああいう大勢と一緒に食いたくないだけだ！」

人を茶化すダンテに声を荒げるネロ。その声は誰も喋っていない静寂の空間には十分すぎるほど響いた。

（トリツシュの言ってた通りだな…）

「はみ出し者の性…ってやつか？」

「うるせえ…」

ダンテの相棒である女性が、嘗てネロの所属していた組織に潜り込んだ際に集めた情報通りであった事に彼は小さく溜め息を吐く。ネロも凶星を言われてしまい、顔を背けてフォークを手にした。

「なんだってい…」

ネロが料理にフォークを刺そうとした瞬間、彼の前から料理が消えた。

いや、料理どころか皿も… テーブルまでが無くなっている。

「…い…だ……ろ…」

途切れ途切れに言っているが、ネロの顔を風が掠める。

「よくねえよ」

隣にいるダンテの脚が天井に向かって突き上げている事から、彼がテーブルごと料理を弾き飛ばしたのが伺えた。

「メシってのは大勢で食うから旨いんだ。分かってねえなあ」

ゆっくりと脚を降ろすと、宙を舞う皿がダンテの手に乗っかり、同じく飛ばされた料理も彼の絶妙な手の動き、さじ加減で皿にきれいに納まる。

「知らねえよ、そんなの……」

「だったら知る努力をしろ」

遅れて落ちて来たテーブルが地面にぶつかり、大きい音を立てると思われたが……それは起きなかった。弧を描いて落ちるテーブルは皿を持っていないダンテの左手で止められる。

皆が彼の突飛な行動と破天荒ぶりに啞然としているが、ダンテは気にも止めずに話し続ける。

「そんなんじゃ嫌われるぞ？」

「とっくに嫌われてるよ」

「そうかい。じゃあ、今からお前を嫌っているやつらと一緒にメシでも食おう」

ネロの言葉に軽く頷き、勝手に納得するとダンテは左手で持ってい

たテーブルを置き、なのは達のいるテーブルに歩き出した。
言わずとも分かるが、彼はネロの取り分である料理を盛った皿を手
にして。

「おい！ 勝手に決めんな！」

自分の食事を持って行かれ、ダンテが勝手に決めた“自分をなのは
やフェイト達と一緒に食事させる”というのを阻止するべく、ネロ
は彼の肩を掴む。

「返せよ！！！」

「やだね」

「テメー！！！」

ダンテは振り返らないまま言うが、ネロの左手に左肩を掴まれたま
ま止まっている。

ネロはダンテの体を揺さぶっているつもりで腕に力を込めるがビク
ともしない。

「ふざけてんのか！！！」

「ふざけてねえよ。俺はいつだって大真面目だ」

苛立つネロは声は張り上げてしまった。左肩にネロの指がくい込む
が、彼は何ともない様子でいる。

口ではふざけてないと言っているが、彼はいつだってこの調子だ。
ふざけていない試しがない。

「嘘つけ!!」

「ああ。嘘だ」

それを皮切りにネロの拳が繰り出された。包帯で隠された悪魔の右腕が彼の体に引き付けられ、そして即座にダンテ目掛けて打ち込もうとする。

だが、肩を掴まれたままとはいえ、ダンテは体を捻り拳をかわした。

「よっ、ハッハー!　ヘタクソ!」

凄まじい風切り音が、未だに続く静寂に包まれた食堂に聞こえた。今、聞こえているのは軽口を叩きながら挑発するダンテと…

「くっ!!」

苛立ちに捕らわれ拳を振るうネロの怒声だけ。

「ちよっ…!　なんかマズイことになってるよ!?　やっぱり止めたほうが…」

「そうだけど、あれじゃ入る隙もないし…!」

なのはとフェイトがダンテに任せたは良いが、完全にマズイことになってしまったのに焦る。離れた向こうでは入り込む隙などない事になり、拳どころが蹴りまで飛ばすネロだが、これもダンテは軽やかにかわしてしまった。

「みんなで止めれば…」

「えっ？」

「私達がですか!？」

フェイトが顔を向けた先にいたフォワード陣のスバルとティアナが自分達にも協力を要請されてしまったのに驚いてしまった。

「手伝ってくれる？」

「いや： でもあれ、入る隙なんかありませんよ!？」

「すごいことになってますね：」

白羽の矢はエリオとキャロにもたてられたが、止めようにも止められない。

ネロの猛攻は激しさを増し、ダンテも拳と蹴りをかわす為に動いているが、そのせいで止める機会など完全に失われていた。

「なんだ、この程度かよ？ 腹の減ってる俺に一発も入れられないのか？」

挑発により、完全にキレたネロがそこで動きを止める。

先程のラッシュが嘘のように静まり、彼の荒い呼吸だけが聞こえた。

「あれ？」

「止まってみたみたい：だね：」

仲裁の要員を集めていたのはとフェイトがいつの間にか沈静化されたダンテとネロに気付いた。

「よっしゃ！ シグナム、行こ…か… って、あら？」

同じく突撃準備を整え終わったはやてだが、食事を盛った皿を右手に持つダンテの背中と、此方もとい、ダンテを見ているネロの姿が目に入った。

「なんや？ 相変わらずワケの分からん二人やな。喧嘩しとったんに、もう仲直りか？」

「いえ、喧嘩ではなく食事の取り合い… ダンテと言う男は遊んでいただけのように思えますが…」

はやてが思いの外、急に争いが止んだのに気疲れした分の溜め息を小さく吐く。

シグナムも一安心しながら言った。

「まあ、これ以上暴れられても困るし、とりあえずは…」

——ギリッ…！

はやてが立ち上がっていた状態から椅子に腰掛け、安堵の息を漏らしつつ言おうとした瞬間に革が擦れる音が微かに聞こえた。

本来なら聞こえる筈のない小さな音だが、この広い食堂でも無音に近い今では十二分にはやて達の所まで聞こえる。

（来るな…）

確信を持ちつつ、ダンテは目の前にいるネロから、後方のはやて達がいるテーブルに目を向けた。

(えっと… このへんだな?)

——ギリ…

近くのテーブルにある椅子を引き、何やら車軸修整しているダンテ。ネロは作った拳とグローブの革が軋み、音を立てる。

(よし)

「坊や」

作業を終え、ダンテが振り返ると、そこには今か今かと彼を待っていたネロが完全に臨戦態勢に入っている。

いや、待っていたと言うより、極限まで集中力を高め、狩るべき一撃の準備を終えようとしていたのかもしれない。

「そろそろ… ここいらで終わらせるぞ」

皿を持ち代え、料理左手にひけらかすダンテにネロが飛び込んだ。
拳を引き付け、目標に狙い^{ターゲット}を定めて、後は拳を振り抜くだけ…

「!!」

だったが、ふと見えたダンテの口元が笑っていた。そして、そこで気付く。

「しまっ…!!」

ダンテが無防備に右腕を横に突き出した。周りから見れば、左手が塞がっているにも関わらず、自ら完全にノーガードの状態になった

彼の考えが理解出来ない。

この場でダンテのやろうとしている事が分かるのは：

「Royal!」
ロイヤル

嘗てこの技を受けた事のあるネロだけ。

咄嗟にネロの声が漏れたが、ダンテは右手の指を弾き、即座に防御態勢に入る。

ガードするには余りにもタイミングが遅すぎる筈だが、驚異的なスピードで右腕を盾にした。

彼の機敏な動作に皆が驚くが、ガードのタイミングは完璧。ネロの拳を受ける瞬間に右腕が体の前に割り込んだ。

「行くぜ？」

ネロの腕を掴むとそのまま振り回し、無理矢理ダンテが後ろに回る。呆気にとられたネロだが、椅子が自分の真後ろに來た所、そして、その先に何があるのか分かった。

「Release!」
リリース

「がっ…!!」

ほぼゼロ距離から放たれたダンテの掌底しょうていが胸にヒット。

ネロは勢いで椅子に座るような形になり、そのまま椅子ごと突き飛ばされる。

「ええっ!?!」

「ちょっと! こっち来る…」

一安心したかと思えば、凄まじいスピードでスバルとティアナ目掛けてネロが突っ込んで来た。

ネロも自分の行く先が分かった以上、慌てて足でブレーキを掛ける。

「ぐっ… おい！ テメエエっ！！」

何とかぶつからずに済んだものの、後ろにいるティアナとの距離は僅か30センチしかない。

あと少しでぶつかる所だが、余りにも手荒なマネをしたダンテにネロが叫んだ。

「これでよし。メシだ」

勝手に一人で納得しているダンテだが、食事を再開できるのにご機嫌な様子で元の座っていたテーブルに戻る。

「何しやが…」

「言うこと聞かない悪ガキをねじ伏せたのさ」

テーブルに皿を置きながらはやての隣に腰掛けるが、ネロが立ち上がりながらテーブルに乗り出した。

因みに、今のネロとダンテはテーブルの向かいの席にいる状態。

「あの程度で終わりじゃ…」

「もう止めて下さい」

「これ以上やられたらコッチも迷惑です」

ネロはダンテの所まで行こうとしたが、スバルとティアナに止められてしまった。

ネロがティアナを見るが、彼女もつい目を背けてしまう。

「迷惑だから止めろってさ」

囲むテーブルに沈黙が流れたが、早速食事を始めたダンテが料理を口に運びながらにやけ面言う。

「一人で寂しく食んでええやん。いつも思ってたけど、ああゆうの返って気を使ってしまいうし」

「…分かったよ」

ダンテの隣にいるはやてにも言われ、渋々了承してネロが椅子に座ったが、両隣のティアナとスバルがやけによそよそしく、やたらと彼の様子を伺っている。

「そっち行く…」

「あー、あの！　ここで構いませんから！」

再び立ち上がろうとしたスバルが咄嗟にネロの右腕を掴んだ。

ネロが黙ってスバルを見詰めるが、自分が彼の腕を掴んでしまったのに今、気付いたように放す。

「…すみません！」

「いや…」

ハツとしたスバルだが、ネロは気だるい口振り： 落ち込んでいるのか、やる気がないだけなのか分からないが、どう考えても気にしている右腕を他人に触られてしまったのを不快に思われたとスバルは感じた。

「ほら、メシだ。メシメシ。てかお前、フォーク持ったまま人に殴りかかるなよ」

ダンテがまた、やたらとがつついていたが、手を止めていたみんなに食事を再開するように促す。

一人でやっていたにも関わらず、何処までも傍若無人ぶりであるのにも悪いと感じたのだろうか。

いや、先程言ったように、食事とはみんなと食べた方が旨いとの考えを全うしてなのかもしれない。

「え？」

「お前が左手で持ってたんだろうが」

何を言われたのか分からずにいるネロだが、確かに彼の左手にはフォークが握られたままだった。

「たく、危ねえんだよ。そんなもん持ってブンブン振り回して来やがって…」

皆がキョトン顔でダンテを見ているが、ネロは未だに立ったままだ。

「ああ、わりい。でもあんたなら刺さっても問題ない…」

「俺は別にどおって事はない… て、そういう問題じゃねえだろうが！」

ダンテは流れに飲まれてしまいそうになったが、我に返ってつつこんでしまった。

「…どうぞ」

「ああ…」

やたらと激しい温度差に皆も飲まれそうになっていたが、立ったままでいたネロがスバルに言われて席に着く。

「おーおー、俺の言うことは聞かないくせに嬢ちゃんならOKか？」

「別にそんなんじゃない。あんたの方こそ女にだらしないだろうが」

「俺は紳士だからな」

茶化して来るダンテにネロはムツとしているが、自称“紳士”のダンテを見てネロは呆れている。

「紳士だったらそんなふうに食うなよ。それに、そんな服着ないし、姉ちゃん”だの“嬢ちゃん”だの言わないよ」

「じゃあ、紳士は撤回する。優しいお兄さんだ」

「そんな歳じゃないだろ？ いい歳した中年… しかも無精髭生やした“オッサン”だ」

「まあな」

引き吊った顔でいたネロだったが、どんな皮肉も流してしまうダンテに、また溜め息が出そうになる。

「まあ、それはいいとしてココは最高だな。メシはウマイし、女は多いし」

余計な事ばかり言うダンテだが、ネロの左手に握られたフォークが軋む。

「すまない… あいつ、いつもああだし6日も野宿してたみたいだけど、食事にありつけて上機嫌なんだ…」

「はい… あ、でも昼に…」

『スバル!!』

額に青筋を浮かべるネロにスバルはやたらとハイテンションなダンテから彼に顔を向ける。

だが、何か言おうとした瞬間にネロの向こうにいるティアナから念話が飛び込んで来た。

『なに、ティア?』

『あんたまさか、ダンテさんが昼間にエリオとキャロに奢ってもらったなんて言おうとしたんじゃないでしょうね!?!』

『そうだけど…』

『バカ!!』

喋るのを止めてしまったスバルをネロが見ていたが、突然ビクッと反応した彼女を見て、更に顔をしかめる。

『そんなこと言ってみなさいよ?』

『え?』

『今度こそ、マズイ事になるわよ…』

額から汗を流しているティアナの目線の先にある物にスバルも目を向ける。

ダンテが笑いながら話している中で、ネロの握り締めるフォークは軋み…

『あ! 曲がった!』

遂には折れてしまった。

スバルが驚きつつ、ティアナの口が開いてしまう。

『曲がったんじゃないかって折れたのよ…』

「なあ、食後のストロベリーサンデーないのか?」

ティアナが怪訝そうな顔になるが、テーブルの向こう側ではデザートまで要求して来たダンテに、ネロは再び立ち上がった。いい加減に堪忍袋の緒が切れたのだ。

「ネロさん!?!」

「ちょっと行ってくる…」

スバルが慌てるが、ネロは左手で持っていたフォークを置き、ダンテの所まで行こうとする。

「止めて下さい！」

ティアナも止めに入るが、彼は止まろうとしない。

「安心しろ… 外でやる…」

指輪からデバイスモードに切り替わったレッドクイーンを手にして歩くネロ。

ダンテは椅子の背もたれに凭れ掛かり調理場を見ているが為、ネロに気付かない。

彼の破天荒ぶりに呆れていたはやて達も、ダンテに近づくネロを見た。

「ネロさ…」

はやてが言い終わるのよりも前に大剣は降り下ろされた。
レッドクイーン

迫る刃に背を向けているダンテ。

気付いていないはずだが…

「ストロベリーサンデーないってさ…」

背を向けていた状態から右手を突きだし、レッドクイーンの刃は止められた。

皆が啞然とするが、ダンテはようやく振り返り、左手でテーブルの

上にあるフォークをネロに差し出す。

「ほらよ。ダメになったのの代わりのやつ」

ネロも左手に力を込めるが、びくともしない。

大剣を左手一本で持っているネロもそうだが、剣の刃をよそ見していたにも関わらず、片手で止めたダンテもダンテだ。

「物は大事に使えよ？」

「…あんたがそれ言えるのかよ」

ネロもレッドクイーンを引っ込め、ダンテからフォークを乱暴に奪う。

はやて達もだが、食堂にいる部隊員達も聞き耳を立てているだけに、ヒヤヒヤものだ。

「みんなお待ちせー… あれ？」

その場に遅れて来たシャマルとザフィーラが加わるが、目にしたのは明らかに異様な光景。

皆が空いた口が塞がらないか、目を瞑っていた状態から、恐る恐る目を開けようとしているようなものだった。

「何故、剣を持っている？」

ザフィーラが聞くが、ネロは応えずに元の席に向かいながらレッドクイーンを待機状態の指輪に戻した。

「主、遅れて申し訳ない」

ネロが右手にフォークを持っていたのが目に入るが、気にはせずに、ザフィーラとシャルがはやての前に来る。

「ええよ。それじゃ、みんなで食べよ？　よく考えたらダンテさんしか食べてへんし」

はやての目を向けた先にいるダンテは、なに食わぬ顔で椅子に深く座っている。その目線の先にいるネロがティアナとスバルの間に座るのを見ながら。

「いきなり後ろから斬りかかってくるなよ」

「あんたなら良いだろ」

聞いた瞬間にシャルの顔色が変わるが、はやては複雑な笑みを浮かべた。

「何があったんですか…？」

「あはは。ちょっとな」

シャルがはやての隣に、ザフィーラが地面に座る。

何があったのか検討もつかないだろう。

近くのダンテと遠くのネロは他愛のない会話が繰り返されていた。

「それじゃあ騎士失格だぞ？」

それを言った瞬間、ネロが料理を口に運びかけた手を止めた。

みんなもダンテが何を言っているのか分からずに二人を交互に見る。

「もう騎士じゃない…」

今までとは質の違う声…

一年前の忌まわしい記憶を振り払うかのような否定の言葉だった…

E p i s o d e . : 4 0 〽手荒なやり方〈粗野な男〉〽（後書き）

39話で書いた予告と違ってすみません。

41話でちゃんとしています。

Episode 41 The Order of the Sword 魔劍

嘗ての騎士、ネロ…

心には底知れぬ闇を持つからこそ、彼は光を知っている…

大剣^{レッドクイーン}を引き、自分の席に戻るネロを見詰めるダンテ。

「いきなり斬り掛かって来るなよ」

スバルとティアナが頭を数回掻いたネロを見るが、彼は小さな舌打ちをしてしまう。

彼はレッドクイーンを待機状態に戻すと椅子に座るが、向かいにいるダンテが腕組みしながら言った。

「あんたがメシ、食わせてもらってるくせに遠慮なくバクバク食うし、ありもしないメニューまで頼むから悪いんだろ」

「いや、あるだろ普通」

「ねえよ」

調子に乗っているとしか思えないダンテに苛つきは静まらず、まだ彼は不機嫌だ。

「ないのかよ。つまんねえな」

一々思った事を余りにもふてぶてしく口にするが、はやてやなのは何とも言い難い顔をしてしまう。

「すみません。ここはメニューも豊富やないし、それで我慢していただけたら…」

「謝る必要なんかねえぞ、こんな偏食野郎なんか」

はやてが困った様子でいるが、わざわざ詫びる彼女にネロがやる気のない声で冷たく言った。

「ずいぶん言ってくれるじゃねえか」

ダンテが不敵に笑ってみせる。

椅子の背凭れに身を任せると、ギッ！、と音を立てた。

「いい年してストロベリーサンデーなんか食べる大人が何処にいるんだよ」

「ここにいる」

ダンテから受け取ったフォークがまた軋むが、ネロは目の前にある料理にフォークを突き刺し、口に運ぶ。

「なに言ってるやがる… あんた、それでもスパードの息子かよ？
聞いて呆れるな！」

皮肉と嫌味を込めて、このやり処のない気持ちをダンテにぶつける。

「そこまで言わなくてもいいんじゃないですか？」

「いいんだよ、あんなバカなら」

スバルが少し躊躇いながら言った。

だが、彼女の隣にいるネロはムスツとした感じで、早く食事を済ませようと料理を口に含もうとしたが…

「俺のと言えるのか？ お前の方こそそんなんじゃないや騎士失格だぞ」

そこでネロの動きが止まった。

あと1センチで料理が口に入ると言うのに、彼は静かに…そしてゆっくりとフォークを皿の上に置く…

「え…」

「騎士？」

「ハンターじゃないんですか！？」

ダンテの言った“騎士”という言葉に反応し、はやてがダンテを見、フェイトも椅子にどっしりと座るダンテからネロに視線を移し、エリオも驚きの声を上げた。

「…違う」

険しい目付きでネロはダンテを見ていた。

静かに呟くような声は、皆と同様に事態が飲み込めずにいる隣のティアナ、同じくスバルと彼女の隣に座る姉のGINGAにしか聞こえなかった…

「あ…」

「…」

いや、エリオとフェイトにも聞こえていた。

ネロの顔は少し俯いていたが、銀色の髪の間から覗く瞳からは、全

てを否定するかのようなものを感じさせる。

「俺は…」

拳を固く握り、腕に力を込める事で体が震える…

「聞いていないぞ。騎士とはどう言う…」

「もう騎士じゃない…！」

シグナムが少し… ほんの少しだけ興味本意で聞こうとしたが、彼女が言い終わるのよりもネロの怒りと悲しみを込め… 忌まわしい過去を取り払うかのように小さな… だが、低いトーンの声が、つかの間賑わっていた食堂に沈黙を運ぶ。

「…」

ダンテは勿論はやて達は… 食堂にいる六課の部隊員達もネロが“騎士”であると聞き、ヒソヒソと話していたのを止めた。

「悪い… 忘れてくれ…」

「忘れられるワケねえだろ」

ネロが落ち着きを取り戻し、手に入っていた力を緩めるが、彼の気持ちを知ってか知らずかヴィータは言う。

『ヴィータちゃん…！』

『ヴィータ、なに考えてるの！』

思わずシャルとフェイトが念話を飛ばすが、彼女はネロを見据えたまま。

『こいつはまだ何か隠してる』

『さっき見たでしょ！？　ネロも話したくないんだよ！　そつとしておいたほうが…』

冷やかな態度でいるヴィータ。口調はいつも通り、不機嫌そうなものだ。

フェイトも深追いしない方が良いと考えるが…

『黙ってろ!!』

そこでヴィータは一方的に念話を切られてしまい、フェイトがビクッ、となってしまう。

『あかんよ。フェイトちゃんの言う通り、無理に聞かんほうがええ』

『止めろヴィータ。私も気にはなるが、これ以上は…』

はやてとシグナムも念話を使って止めようとするが、

『安心しろよ、悪いようには言わねえ』

「話せよ。“もう”騎士じゃないって、どう言うことだ？」

これも聞かずにヴィータはネロに問う。

聞かれたネロも少し眉間に皺を寄せるが、自分を見詰めるヴィータと目を合わせて喋った。

「∴そのままの意味だ」

「誤魔化さないでちゃんと話せよ」

見詰める視線から目を反らし、ネロはダンテを見る。

しかし、彼はしてやったり顔で“自分で話しな”とでも言っているようだった。

今まで話さなかった分、自分の事は自分で話せと言いたいのだろう。

「大した話じゃない∴」

「あたし達にだって知る権利はある」

ダンテからヴィータに視線を戻したネロだが、静かに言った声もヴィータの強い視線と芯の通った声に掻き消されてしまった。

「話せよ？」

あの瞳から目を背けてしまいそうになるが、ネロは一度頭を整理し、言うべきか考えるていると、ヴィータが再び口を開いた。

「これから一緒に戦って行かなくちゃなんねえんだ。お前もアタシらの事はなのはとテストロッサから聞いてるんだろ？ だったら隠しっこはなしだ」

聞いた瞬間にネロはなのはとフェイトに目を向ける。

いつの間に知っていたのかは知らないが、念話だろうが、つい先程だろうが、二人がネロに自分達の事を喋ってしまったと言う事をヴィータに話していてもおかしくはない。

なのはは苦笑し、フェイトは複雑な笑みを浮かべる。ヴィータがネロの事を悪く言わなかったのは良かったが、やり方が荒いだけに、心配だったのだろう。

「…分かった。話すよ」

ネロは小さく溜め息を吐き、ポケットの中に手を突っ込む。

「カランッ!、と音を立ててテーブルの上に置かれたのはネロの指輪である。」

「昼間の悪魔… アンジェロの事は知ってるよな」

「ああ、記録映像で見たけど…」

突然、持ち掛けられた話… “アンジェロ”の事を聞きながらも、ヴィータはテーブルの上の“指輪”を見詰めた。

今、ネロが左手の人差し指に填めている待機状態のデバイス、《レッドクイーン》と同じ形の指輪。

皆も何故、彼が指輪を出し、アンジェロの話をするのか分からなかったが、ダンテにだけは分かる。

彼は一年前、ネロと二度に渡って対峙し、刃を交えた事のある男だ。彼は知っている。ネロは嘗て“騎士”として悪魔と戦っていたと言う事を…

「あの悪魔は… 俺が所属していた組織が造り出したものだ」

「なっ!?!」

突然、切り出された話にヴィータに… はやて達に衝撃が走った。

「造ったやつの話じゃ、数多くの悪魔を実験し、その悪魔の魂を鎧に閉じ込めたものらしいが…」

「ちょ！ ちょっと待てよ！！」

彼女達は話が飲み込みないまま、ネロはお構い無しに話を続ける。
だが、流石にヴィータがネロに聞き返した。

それはそうだ。いきなり話し始めたかと思えば、自分が騎士であった事ではなく、悪魔を造り出した組織にいたというのだから。

「どう言うことだよ、それ！？ ワケが分かんねーけど、悪魔を造り出したトコにお前がいたなんて…」

「嬢ちゃん」

思わずテーブルに身を乗り出したヴィータだったが、すぐ近くにいるダンテが気だるげに言う。

ヴィータは感情に飲まれていたが、彼女も声に反応して、はやての隣にいるダンテを見た。

「話はちゃんと最後まで聞けよ。そんなせっかちじゃ、立派なレディになれねえぜ？」

さりげなく言うが、それにはやてとシグナムの顔が引き吊りそうになる。

「…わりい」

「分かればいい。よし坊や、続けな」

ヴィータが落ち着くのを確認し、ダンテがネロに話を続けるように促した。

「…その悪魔を造った技術者も勿論、俺のいた組織の一員だったんだが…」

ネロの脳裏に一年前の記憶が横切る…

忌まわしき記憶が… 自分の所属していた組織の裏の姿を知ったあの時… 自分の中に眠る“悪魔”が目覚めたあの日の事を…

「今はどうしてるかは分からない…」

「死んだよ」

ネロがヴィータを見ながら言ったが、唐突に口を開いたダンテに注目が集まる。

「あのモノクル着けた、吃音野郎だろ？ 俺が眉間に鉛丸ぶちこんどいた」

「…そうか」

「安心しろよ。ジーさんと違ってちゃんと確認したし、体の方も跡形なく消えちゃったからさ」

話を聞くネロだが、表情はどおも雲っている。

ダンテから、その技術者の死を見届けたと言ったのを聞き、彼もダンテからヴィータに視線を戻し、話を戻した。

「その指輪を見てくれ」

ネロがテーブルの上に置かれた指輪をフェイトが手に取り、彼女の隣にいるのはや、エリオとキャロも覗き込む。

ネロの隣にいるスバルやティアナも目を向けるが、小さくて見えな
い。

だがネロは左手を上げ、人差し指に填めた指輪レッドクイーンをみんなに見えるように見せつける。

「“魔剣教団”…」

「え…」

「教団？」

ネロが低い声で皆に聞こえるように言った。

彼が口にした言葉にはやとシグナムも反応し、聞き返す。

「一年前まで俺がいた組織の名前だ。俺はそこで“教団騎士”として悪魔と戦っていた」

遂に語られた真実に皆が驚いた。

フェイト達が見ていた指輪が… スバルとティアナが見ていたネロの指に填まる指輪が光で反射し、鈍い銀の光を放つ。

だが、ヴィータやシグナム、はやて達は比較的に冷静。ダンテに到っては語る原因を作った張本人であり、ただ黙って聞いている。

「もしかして… 前に悪魔とは三年前から戦ってるって話したのって…」

「騎士として戦ってたって事だ」

おもむろに喋るヴィータだが、ネロは指輪を見詰めながら触っている。

「魔剣教団：その名の通り俺の故郷、《城塞都市フォルトウナ》でスパーダが領主をしていたことから、彼を神と崇めてそれ以外の悪魔を憎み、悪魔を殲滅するのが何よりの信仰の証としている組織だ」
ネロの口から語られた事に皆が黙って耳を傾けていた。

「俺もその教団の一員として：“騎士”として一年前まで戦っていたんだが…」

“騎士”という言葉が若干強調されたが、ネロは途中で区切り、ダンテを見た。

彼も黙っているのだが、天井を見上げ、“一年前の教団との戦い”を思いだし、物思いに耽っている。

「…その教団は壊滅した」

「え？」

ネロの言った事にヴィータが身を乗り出したが、今度はダンテが口を開く。

「俺が潰したんだよ」

「な…！？　　どういう事だよ！」

ヴィータが次に目を向けた先にいるダンテは天井を見たまま、頭の

後ろで手を組んでいる。

「正確には俺とダンテでやった」

「なんでなん!!」

更に事実である事を付け足したネロだが、その瞬間、今まで黙って話を聞いていたはやてが声を上げた。

「主!」

「そりゃ、悪魔を造り出したとか分からん話やけど、なんで自分のいたトコなんに潰したん!!」

「教団の裏の姿を知ったからだ」

椅子から立ち上がり、声を張り上げるはやてをシグナムが落ち着かせようとするが、ネロは静かに： 冷静に言う。

「え…」

「あいつらは故意的に悪魔を呼び出し、それを実験、研究し…」

はやてが静かにはなったが、話していたネロがそこで喋るのを止めてしまう。

「どないしたん…?」

「ネロ?」

話すのを止め、右腕をきつく握り締めるネロ。
はやてとフェイトが心配して声を掛けるが、彼の腕には更に力が入る。

「…人間にまで手を出した」

包帯の間から青白い光が漏れ出すが、はやて達は気付いていなかった。ネロの話に夢中になっているからだ。

その青白い光に気付いていたのは、他の部隊員だけである。聞き耳を立てているとはいえ少し離れていたので、ネロの姿が全体的に見えていた。

「人間を… 実験したっていうこと…!?!」

「只の実験じゃない!!」

フェイトが事態を飲み込めないまま聞くが、ネロは声を荒げた。

「人間に悪魔の因子を植え付け、悪魔化させるというものだ…!」

聞かされた真実… 魔剣教団の裏の姿…

「その実験で教団の人間どころか関係のないやつまで巻き込まれ、大勢の人間が“救済”の犠牲で死んだ…」

「救済？」

「教皇のジーさんが言ってた、自分勝手な夢物語だよ」

ネロの目付きがどんどんきつくなって行くなかで、フェイトの頭に

疑問が浮かぶ。

ダンテが天井を見上げ、テーブルの上に脚を乗せたが、今ばかりはネロも咎めない。

「墮落した今の世の中を浄化するには一度世界を滅ぼし、新しく造り直す必要があると教皇は言っていた」

「まあ、俺と坊やで止めてやったけどな」

「“魔剣祭”という大祭の日にダンテが教皇を殺した… と思っていたんだが、その教皇も既に悪魔化… あいつら曰く《天使》になっていたから教皇も銃で撃たれたぐらいじゃ死んでいなかった」

語られる話に誰もが聞いている。

ネロとダンテの初めての出会い、ダンテ追撃の任務の中で知った教団の裏側…

…

「…その戦いの中で俺は《閻魔刀》を手に入れ、眠っている悪魔の力が目覚めたんだが…」

ネロが少しは冷静さを取り戻すが、呆気にとられているはやて達に気付く。

「なんだ？」

「え!？」

「質問とかあるなら受け付けるぞ」

はやてとヴィータがハツとしてしまいが、隣のスバルとティアナもポカンとした顔のままだ。

「さっきみたいに聞かないのか？」

「ええっ… と…」

「バカでかい悪魔と戦ったなんて信じられないとかさ？」

「う…」

「今なら特別に応えてやるよ」

スバルも何と言おうか考え、ティアナが先程図々しく聞いてしまったのを後悔していた。

「ちょっといいか？」

「なんだよ？」

聞いて来たのはヴィータ。

他にも何人か手を挙げかけていたが、躊躇いも微塵に感じさせないまま彼女はネロに問う。

「その指輪の模様もお前のいたその“魔剣教団”とかいうトコの紋章とか、悪魔や悪魔になっちまった教団のやつらを殺したってのは分かったけどよ… お前が悪魔の血を引いているってのもその実験で…」

「「違う」ぞ」

ヴィータが一応はネロの顔色を伺いながら言うが、ネロとダンテの二人が同時にネロも“実験”の犠牲者かと言う質問を否定する。

「…」

「なんだ？ 俺が言っちゃ悪いかよ」

「…言いたきゃ言えよ」

「なんだそれ…」

ネロが黙ってダンテを見詰めたあとに素っ気ない返事を返す。

ダンテも小さくフツと笑うが、ネロ以外のみんなの注目がダンテに集まっていた。

「話してるのはお前だろ。俺は茶々言わねえよ」

ネロが無言で見ていたダンテからヴィータに視線を戻し、取り敢えずは彼女の質問を返す。

「この右腕は… 前に医務室で言ったように突然なっちゃったものだ。実験によるものじゃない」

「そーいやそーうだったな…」

ネロが“医務室”と言った所で何故カリインを見る。ヴィータもはやての前でテーブルの上に乗っている小さなリインを見た。

「…じゃあ続けさせてもらおうよ。他に聞きたいやつは？」

「…いいかな？」

ヴィータの質問が終わり、次に手を挙げたのはフェイトだった。彼女もヴィータと同じことを聞こうとしたのだが、先に言われてしまい、別の質問をする。

「どうぞ…」

“ネロも《帰天》によって悪魔の力を得たのか？”とは聞かなくて済んだのに、彼女はまだ躊躇っている。

「ネロもスパイダの血を引いているって事は…もしかしてネロはダンテさんのおに…」

『フェイトちゃん、その質問はあかん!!』

突然、フェイトにはやてから念話が飛び込む。

『え?』

『とにかくあかん! 質問変えて!』

『なんで?』

『ええから!!』

はやてが何故、そこまで慌てているのかフェイトには分からなかった。

『テストロッサ、やつの事はこれ以上搜索するな』

『質問変えて!』

『う…うん』

「えっと… その…」

シグナムにも止められるが、急に違う質問をしろと言われても思い浮かばない。

「さっきの質問はどうした？」

「いや… 気にしないで。それで質問なんだけど…」

フェイトの頭の中では何か質問しなければと考えるが、聞いたかったのは全てネロにまつわる事ばかり。何も思い浮かばないままだ。

「…あ! ネロの持ってる剣もその教団で作ってもらったものなの?」

はやてとリインから聞かされた《レッドクイーン》はネロの為に作られたものだと言う情報が役に立った。

完全にパツと思い付いた質問だが、ネロは特に気にしていない。

「ああ。人間が悪魔に対抗する為に《イクシードシステム》を搭載した剣だよ」

「凄い剣だね。あんな大きいのに片手で持ってたし…」

フェイトはまだ焦ったままだが、ここまで来たらヤケクソになりつつある。

「他の騎士が使う剣は火力がショボすぎたから特注で作ってもらったんだよ。俺がまだ自分の事を“人間”だと思っていた時から使ってるんだ」

また場の空気が固まってしまう…

「作ってもらったやつを俺がカスタマイズしたり、マフラーの部分も外して、更に火力が上がってるから他のやつには使えないんだが… どうした？ 急に黙って」

自身の愛剣を得意気に自慢していたネロだが、フェイトの目が泳いでいる。

「あー… さっきの話の続きは？ どうなったの？」

「続き、か…」

フェイトが何とか話を戻すように言うが、ネロのテンションが若干下がってしまう…

「そうだな… その後は…」

ネロがダンテと同じように天井を見上げる。

椅子からキジツ、と音を立てた。

「また悪魔と戦いながらダンテを追うんだが…」

ネロが一年前の話を語り始めるが、フェイトは少し後悔している。
ネロが話したくないことにも関わらず、苦し紛れに話を再開させてしまったからだ…

…

「…その先で死んでなかった教皇に会うんだが、俺がヘマやらかして捕まっちゃったんだ」

ネロが椅子に凭れ掛かったままダンテを見る。

彼もようやくネロを見たが、“ここから先はお前が話せ”と目が言っていた為、溜め息を吐きながらテーブルから脚を下ろす。

「まあ、坊やはそこでガス欠になっちゃったんで俺が引き継いで頭のイカれたやつらを相手することになっちゃったんだよ」

テーブルに身を乗り出し、頬杖を突いたままのダンテ。何故か彼は得意気だ。

皆の注目がネロも含めてダンテに注ぐ。

「教皇のジーさんや悪魔になっちゃった自称“天使さん”を追いかけるながら坊やの仕留め損なった悪魔どもと戦ったよ」

ダンテの口から語られる“ネロが捕まっていた間”の教団と悪魔との戦い…

…

「…そんでさっき話した技術者をブツ殺して《閻魔刀》を奪い返した後にジーさんの所まで辿り着き…」

そこでダンテは話すのを止めてネロを見る。
ダンテが次に語る言葉に皆が息を飲むが：

「坊やを助けて、一緒にジーさんを倒した。終わり」

思ってもいない急な話の終了の仕方に空いた口が塞がらない。
いや、すっとんきょうな声を漏らすか、少し眉を吊り上げるかのど
ちらかだ。

「え？」

「だから終わりだよ」

「いや、ネロさんと比べたら随分短いんじゃない？」

「俺の方が坊やより腕がいいって事さ」

はやてが納得できないでいるが、彼女の隣にいるダンテはもう話す
事はないと言わんばかりの顔だ。

「本当なんですか？」

「ああ…」

ネロの隣にいるスバルも聞くが、彼も簡潔に応える。

「ダンテさんと二人で悪の道に走った人達を倒したって事ですよね
？」

「その戦いで“救済”はフォルトウナの中だけで最小限に止められたが、教団は壊滅： 街も半壊し、死傷者が何百人も出たよ」

ティアナの質問にも応えるが、ネロは椅子から立ち上がり、フェイトのもとへと向かう。

歩くネロに注目が集まるが、彼はフェイトの前に来るなり手を差し出した。

「…指輪」

「え？」

自分の前に来るなり指輪を返すように言われたフェイト。

「このこと？」

「そうだよ」

フェイトが持ったままだった魔剣教団の紋章が刻まれた指輪をネロに渡す。

ネロもそれを左手で受け取ると、ギュッと握り締めた。

「…大事なもののなの？」

「ああ…」

指輪を握ったままの左手を見詰めるネロをフェイトやなのはが見ていた。

なのはが様子を伺いつつもネロに聞くと、彼は短くも重くもあり、深い気持ちを込めた返事で返した。

「この指輪は教団の支給品なんだが…」

ネロが握っていた指を開き、掌の中にある指輪を見詰める…

「…一年前に俺のせいで死んだ兄貴分がくれたものなんだ」

指輪をポケットに仕舞い、なのはとフェイトを見るネロ。

二人は彼に一年前の自分が騎士だった頃の辛い事を無理に話させてしまった所か、死んでしまった兄同然だったクレドの事まで思い出させてしまった事に気付き、励まそうとするが…

「あ…！」

「ごめん、知らなくて…」

「いいよ。気にしてないから」

そこにあっただのはフツと笑ってみせる嘗ての騎士… 今は悪魔狩人として生きるネロの姿があった。

「確かに思い出さなかった事だが、もう過ぎた事なんだし…」

ネロが吹っ切れたかどうかは分からないが、まだ何か言いたげでいるのはとフェイトに言っていると突然、出動命令のアラームが鳴り響く。

【緊急事態です！ 廃棄都市区画内にアンノウンが出現】

「早速だな？」

六課の隊舎内に声が響き渡ると、ネロは不敵に笑いながらはやてを見た。

【映像来ます！】

食堂の空中に展開されたモニターには無数の悪魔が… 数えきれない程の悪魔が映っていた。

「多い…！」

「すごい数ですよ！」

【確認できる数で200、まだ増え続けいる模様です！】

思わずキャロとエリオが声を上げるが、

「総員、配置に着いて！」

ネロとダンテの話に聞き耳を立て、映し出された悪魔の映像に見とれていた隊員達がはやての指示により、急いで椅子から立ち上がる。

「ほら、行くぞ」

「言われなくても…」

ネロがダンテを見ながら言うと、彼も立ち上がり、一度背伸びすると…

「そのつもりだ…！」

立て掛けてあった大剣^{リベリオン}を背負い、ボロボロの赤いラバーコートを肩に担ぐ。

「食えなかったストロベリーサンデー代わりのデザートといくか」

「不味そうなデザートだぞ」

「だな？」

気だそうな口調のダンテにネロが呆れつつ言う。ダンテは自分て言ったくせに、何やら不敵に笑っていた。

だが、はやてやなのは、スバル達“フォワード陣”が見ていたのに気付き、二人は彼女達を見る。

「なに見てんだ？」

「いや、その〜…」

「なんて言うか…」

視線に気付いたダンテ。

貫禄と余裕を感じさせる最強の悪魔狩人にして、伝説の魔剣士の息子である男にエリオとキャロが何とも言えない微妙な顔で見ている。

「行っちゃ悪いか？」

「そうじゃなくて…」

「あの〜…」

ネロもスバル達を見る。

ダンテと同じく悪魔狩人にして、嘗ての騎士… 黒の名を持つ《黒騎士》に何と言おうか躊躇いを感じている。

「いやゝゝ… 二人の事を悪く見とるとか、そないな事やないんやけどな？」

「やはりそうだな」

「だからどうしたんだよ？」

はやてが微妙な顔で笑い、シグナムが目を閉じた。
ダンテが大袈裟にコートを持っていない右腕を広げる。

「早く行こう」

「まあ、そうなんだけどね…」

「うん…」

ネロがなのはとフェイトを見たが、彼女達も複雑な笑みを浮かべる。

「悪魔になっちまった人間を殺したようなやつと一緒にいたくないって事か？」

「いえ！ そうじゃなくて…！」

何故か笑ったままダンテが言うが、彼らのやった事は間違いではないと言うシャルマルが少し大きな声を出す。

「あの話によればその教団の方に非がある。お前達は正しい事をした」

「そいつはどうも。おしゃべりワンちゃん」

またダンテがザフィーラを犬呼ばわりしたが、今度は吠える盾の守護獣をスルーした。

「顔になんか着いてるか？」

「いえ、そう言うのじゃなくてですね…」

ネロがギンガに聞くが、彼女は隣にいる妹のスバルの顔を見た。

スバルもギンガを見て、何やら笑っている。

「似てます。ネロさんとダンテさんの二人」

ニコツと笑いながら言うスバルだが、言われた瞬間にネロが声を張り上げた。

「こんなやつと何処が似てんだよ!!」

「笑った時とか性格なんかが…」

「ちっとも似てねえよ!!」

スバルが… いや、スバル達が言うのを全力で否定するネロだが…

「お二人とも本当に親子じゃないんですか?」

「やっぱ似てるよな」

「だから違うし似てねえってば!!」

トドメにリインとヴィータの追撃。まだ残っていた僅かばかりの部隊員達が先程と一変したネロの様子に微妙な顔になってしまう。

ネロも更に叫びそうになるが…

「残念ながら親子じゃねえよ。さっき話した通り、“同じ血”が流れているだけだ」

ダンテの言葉にネロが振り返る。

掴み掛かるのであれば、いつでもネロを止める準備が出来ていたはやてやフェイト達も彼を見た。

「お前も一々突っ掛かるなよ。しかも相手はレディだぞ？」

コートを肩に掛けたまま腕組みするダンテをネロが黙って見ているのに、彼も少し気になって聞いてしまう。

「なんだ？」

「いや… あんたが止めるなんて珍しいと思って…」

「まあな？ もう少し見てたかったんだが、向こうのやつらがお呼びだし」

ネロがヴィータとリインに詰め寄るのを止めてダンテを見ると、彼は空間に浮かぶ巨大モニターを顎でさす。

映るアンノウン… 悪魔達は廃墟と化した場所を中心に群がっていた。

「行こうぜ。パーティの始まりだ」

「…了解」

ネロもフツと笑い、ダンテと共に駆け出した。

「じゃあ、私達も行くよ!!」

「」「はい!」「」

走り去って行く二人の男に続き、両隊長陣… 並びにスターズ、ライティング各分隊の四人も駆ける…

…

「なあ…」

「なんだよ?」

先を走るネロとダンテ。ネロが躊躇いつつ彼に話し掛ける。

「あの事は話さなくていいのか?」

「“神”の事か?」

「…ああ」

ダンテが“神”という言葉の口にした瞬間、ネロの表情が曇り、少し顔を俯かせた。

「話そうと思ったんだが… 話しても信じるか分からねえし、それに…」

ダンテが隣に並んでいるネロを見た。
彼の顔は少し暗いもの…

「…お前はあんまり思い出したくないんだろ？」

そう言うと、ネロの目付きがきつくなってしまった。

彼はダンテを見ず前だけ見ているが、脳裏では一年前の忌まわしい記憶が繰り返し流れていた。

「口では言わなかったが、目が言ってたよ。それに俺だって空気くらい読むさ」

「…そうかよ…」

ダンテがまた不敵に笑いながら言うと、ネロがボソリと小さな声で言う。

「ほら、頭切り替えていくぞ」

気付けは後ろから足音が聞こえて来ていた。ダンテに言われてしまったが、ネロも気持ちを整理して、憎むべき悪魔を狩るべく“狩人”としての自分になり、悪魔を殲滅するべく向かう…

Episode..41 The Order of the Sword 魔劍

ネロの脳内声優は森田成一さん。

ダンテの脳内声優は東地宏樹さんです。

バカですみません。

く第42話予告く

「ここは…？」

「お目覚めのようだね…」

甦りし狂気の科学者…

「君の力で“彼ら”を甦らせたいのだが…」

「…いいだろう」

その者… 神の子羊…

E p i s o d e . . 4 2 〱 H i d e 〰隠された真実〰 〱 (前書き)

語られぬ真実…

知ってしまったえば戻れないと言う事実と口上…

知らぬがその者の為なのか…

Episode..42 Hide〈隠された真実〉

薄暗い部屋の中…

一人の男が黄色い光を放つ生体ポッドの前に立っていた。

「ククッ…」

その男の名はジェイル・スカリエッティ。

目の前にあるポッドを見てみると自然と口元が歪み、笑わずにはいられない…

「さあ… 目覚めの時だよ…！」

光を放つ生体ポッドの中にいるのは人外の異形。体こそ人と同じ形をしているが、明らかに人ではない。

まるで“虫”… “昆虫”だ。

体は白く、ゴツゴツした様な感じで、手足には昆虫特有の節があり、背中に至っては“甲虫”の羽を仕舞う殻と腹の部分を模してある。

更には頭からは“羊”の角、自分を《天使》である事を主張するような輪があった。

：

「おい、大丈夫かよディエチ？」

スカリエッティのいるアジト…

太陽の光が射さない通路には照明が設けられ、その道を歩く水色の髪を肩ほどまで延ばしているセインの隣には、長い髪を後ろで結っているディエチがいた。

「うん、もう平気だから…」

彼女はセインを見るが、少し顔が暗い。元々、口数の少ない方ではあるが、今のディエチは普段よりも数段は無口だ。

（これ、絶対に平気じゃないよ…）

目線を前に移すディエチをセインは見ていたが、彼女の額からは一筋の汗が流れ落ちる。

——遡ること約3時間前——

「トーレ姉！」

ダンテの発砲した弾丸により、トーレの固有武装インパルスブレードの刃が一ヶ所、碎け散っていた。

「…まさか、あのハンターの実力がこれ程だったとはな…」

廃棄都市内での戦闘を終え、スカリエッティのアジトに辿り着いたトーレとセイン。

姉に担がれていたセインが下ろしてもらうと同時に彼女を心配しながら寄り添う。

「甘く見ていた…！」

破壊された紫の刃があった左肘を見ながら、トーレの顔付きがきつくなる。

「トーレ姉…」

「トーレ… 大丈夫？」

少し顔を俯かせるセインの後ろからは、彼女達と共に帰還したルーテシアとガリユーもいる。

ルーテシアは無表情であるが為に分かりづらいが、自分が協力しているスカリエッティの作品であり、娘でもあるトーレを気遣って声を掛けた。

「これしきの事、大したことありません」

「本当？」

「はい。お優しい心遣い、誠に恐縮です」

トーレが自分の事を気に掛けてくれるルーテシアに言う。

最後の言葉を言った時には彼女は目を閉じて、ルーテシアに軽く一礼。

「そう… 良かった…」

ルーテシアも自分に頭を下げているトーレを見ていたが、突然後ろを振り返った。

「ガリユー？」

ガリユーは何か言っているらしいが、その言葉はルーテシアにしか分からない。

「…うん…うん…」

彼女はガリユーの喋っているであろう言葉に相槌を打つ。
その様子をトーレとセインも黙って見ている。

「…そうだね…戻っていいよ…」

ある程度の会話を済ませるとガリユーの体は黒く染まり、縮小された後にルーテシアのアスクレピオスの中に戻った。

「ガリユーさんと何話してたんですか？」

「ちょっとね…」

セインが気になってしまいルーテシアに聞くが、彼女は小さく息を吐いた後に言う。

「お嬢様、どちらに？」

「お母さんのところ…」

自分の前を通り過ぎるルーテシアにトーレが声を掛けるが、彼女は小さく応え、聞いたトーレとセインはそれ以上、何も聞かずに歩き続ける少女を見送り、その姿は見えなくなった。

「行っちゃった…」

セインがポツリと呟く。

「…私もドクターに武装を何とかしてもらわねばならんな」

自分の肩を見ていたトーレだが、このままにしておくにはいかず、歩き出した。

「あ、待って！ 私も行く！」

着いて行こうと考えたセインだが、自分の横を歩く頭一つ分小さい妹にトーレが目を向ける。

「お前はメンテナンスの必要はないだろう？」

「まあ、そうなんだけどねえ」

高い位置から自分を見詰める金色の瞳に、セインはポリポリと頬を掻いた。

「ただなんとなく言うかさ…」

愛虚笑いしているセインだが、ようは何もする事がないのだ。

先の戦闘で彼女はルーテシアを救出するべく、固有技能ディレクティブを使い、地面から飛び出すも、ネロのデビルブリンガーに捕まってしまった。

地面を潜れる悪魔を相手にした事もあり、気配も完全に消せず、おまけに飛び出す際の地面が波打つ兆候が見られた為、彼に気付かれるには十分すぎる程の理由がある。

「それより、本当に大丈夫！？」

「だから平気だと言っているだろう。いい加減しつこいぞ」

自分の今の状況を誤魔化す為か、またトーレを心配するサイン。少しトーレの目が吊り上がってしまった。彼女が今、ここにいられるのは姉のお陰である。

「でも、私を助ける為にトーレ姉…」

「もう、その話はするな…」

トーレの目付きが険しくなってしまった。僅かばかり油断していたとはいえ、ダンテに遅れを取ったのだから。

トーレはスカリエッティから彼の実力を聞かされていたが、高速戦闘を得意とする自分が、まさか“あのような男”に…

その気になれば、ダンテはトーレを撃てただろう。

だが、彼はそうしなかった。何故か？

（クソッ…）

自分をなめているからか？ その気になれば、いつでも勝てると思っ
っているからか？

トーレが思考を巡らせるが…

（分からん…）

何故、彼は追撃せず、自分と戦おうとしなかったのか。

自分の周りに倒れている人間を助けるのが最優先だったからか？

いや、それも違う。あれ程凄まじい弾道と連射速度ならば、仕留められたのは一瞬だったはず。

弾切れか？

いや、自分に狙いを定めて発砲する前にカートリッジを装填していた。ならば違う。

（何故だ…）

一人物思いに耽るトーレだが、難しい顔で考え込んでいた自分をセインが見ていたのに気付いた。

「…何を見ている？」

「い、いや！」

鋭い眼孔に睨まれたと錯覚してしまうセインだが、彼女は体の前で手を振って、

「何か考え込んでたみたいだったから…」

何でもないとのアピールとは違い、気にはなっていたので聞いてしまった。

束の間、自分を見詰める視線が痛いと感じながらも、セインはトーレを見る。

「…大した事ではない」

「えゝ？ 気になるなゝ？」

最早、ふてぶてしい領域に差し掛かりつつある妹にトーレが苛立ち始めるが、二人はふと、足を止めた。

「あれ？ ルーお嬢様？」

「あれは…」

ルーテシアは立ち止まり、その前には踞ったティエチと、彼女といつも行動を共にしているクアットロがいた。セインとトーレもルーテシアの隣に並ぶ。

「お嬢様、お母様の所に…痛っ!!」

言い掛けた瞬間にトーレの肘打ちがセインの肩に当たる。

『バカ者!!』

『痛った…なにすんのさ』

飛び込んで来たトーレからの念話にセインは肩を擦りながら話す。

『一々聞くな! お母様の話はするべきではないし、ティエチが気になっているのではないか!』

『うう… 分かってるよお… 一応聞いただけじゃん…』

『だったら聞くな!!』

自分の隣で繰り広げられる事に、ルーテシアは何も言わずにトーレとセインを見ていたが、目線を踞ったままにいるティエチに戻す。

「クアットロ、どうした?」

「ティエチ? 大丈夫か?」

呆れた顔でティエチを見ているクアットロにトーレが声を掛ける。

セインも仲間であるティエチを心配してしゃがみ込むが、よく見れば彼女は小刻みに震え、何かブツブツ言っていた。

「聞いてくれますう？ ティエチちゃんったら、さっきからこれで私も困ってるんですよ？」

到底困っているとは思えない口振りにトーレが眉を吊り上げる。

彼女はいつもこうなのだが、トーレは一度小さく息を吐き、クアツトロに問う。

「さっきと言う事は、廃棄都市での戦闘の事か？」

「そおでゝす！ なんか？ 黒騎士とハンターにやられちゃったのが余程ショックだったみたいでえゝ？」

トーレが地面に踞るティエチに目線を下ろす。

そこには顔を附せているので見えないが、自分を標的に認めた狩人に怯える妹の姿があった。

「ティエチ、大丈夫……」

セインがティエチの肩に手を触れた瞬間、彼女の体がビクツと反応した。

「……じゃないよね…… やっぱり？」

セインが顔をしかめてしまう。

(……………怖い……)

ディエチの頭の中では一つの言葉で統一されていた。
自分の砲撃を打ち消し、反撃して来た黒い騎士が：

(……怖い………)

超遠距離と高速射撃を繰り出したあの赤い狩人^{ハンター}が：

(……怖い………)

彼女は堪らなく怖かった。忘れようにも忘れられない。
あの銀髪が… 碧眼が… 右腕が… “真紅”の瞳が…

「ディエチ…」

ルーテシアが怯え、震えるディエチの前に来るが、彼女は顔を上げない。

ただトーレ、セインとクアットロの注目が二人に集まる。

「…怖いのか？」

言われた事実。ディエチの体がまたビクツと動いた。

「そうなんだね…」

ディエチは顔を上げないが、ルーテシアは確信を持ったように少し目を細める。

「でも、怖くて当然だよ…？ 私だって怖いから…」

「お嬢様…」

ようやくディエチが少しだけ顔を上げるが、少し目が暗い。

「そうだよ！ あれでなんともないって言ってる方が、どうかしてるって！」

「あら、セインちゃん？ それは私達の事を言ってるのかしら？」

セインがディエチを励まそうとするが、クアットロが顔は笑っているものの、彼女の後ろにはドス黒いオーラが見える。

「その感情は大事なものだ。特に恐怖を知らないものは戦闘に置いて早く死ぬ。覚えておけ」

「…うん」

セインが言った事は気にも止めないトーレ。

二人の間では先程の発言を撤回すべきか考えながら、迫る姉と一定の距離を取っているセインだが、ディエチは小さく頷き、やっと立ち上がった。

「良かったね… ディエチ…」

「…はい」

自分を見詰めるルーテシアにディエチがぎこちなく言う。

…

『にしても： 上手くまとめましたねえ？ トーレ姉様あ？』

『本当の事を言っただけだ』

歩く四人とルーテシア。

先程の事をいつまでも言うクアットロにトーレはポーカーフェイスのまま念話で話している。

『でも、あれじゃあただの…』

『もう、切るぞ』

「ディエチ： 体の方は無事か？」

トーレが一方的に念話を切った。念話を使っている間もディエチの様子が気になったのもあるが、不敵な笑みばかり浮かべるクアットロに苛立ってしまったようになってしまったからでもある。

自分と同じで固有武装を壊されたディエチに聞くが、彼女は無言で頷いた。

「ドクターに新しいものをあしらってもらわねばならん…」

トーレは《インパルスブレード》の一角を砕かれたにすぎないが、ディエチに関しては《イノーマスカノン》を完全に破壊されてしまっている。

このままでは次の戦闘に参加出来ない。いや、正直、今の彼女のままでは戦闘に加わる事を無理だ。

「とにかく、今は…」

「おぉーい」

喋っていた途中のトーレだが声に反応し、その先を見る。
いたのはトーレ達と同じ格好をしている赤い髪と瞳の少女。長いであろう後ろ髪はまとめられ、上に向かって突き上げているような髪型。

「ウェンディ！」

「セイン、お疲れ。クア姉達もお疲れッス」

「あれ？ 相変わらず私は尊敬されてないのかな？」

「そんなことないッスよ」

今までの空気を吹き飛ばす： いや、ぶち壊しにする妹の到来により、トーレ達三人が何とも言えない顔になってしまう。
唯一、先程と同じなのはルーテシアだけだ。

「他の妹達は？」

「今、訓練中ッス」

聞いて来たトーレにウェンディは軽いノリで応える。

「新顔のセツテにオットーとデイド、チンク姉が帰って来たし、ノーヴェが張り切っちゃってるんスよ」

手振りで“やれやれ”と言ったカンジのウェンディ。

「ところでウェンディちゃん？」

「なんスか？ クア姉？」

「確か、あなたも武装の調整を兼ねて訓練してた筈だけど… なんとココにいるのかしらあ？」

クアットロの甘ったるい喋り方の裏にある“何か”にウエンディがしくじったと言わんばかりの様子。

「えっ！？ いや、その… 何て言うか？」

必死で言い訳を探すが見つからない。

「訓練が面倒臭くなって逃げてきたんじゃないかしらあ？」

「いや！ 休憩を兼ねて…！」

何とか誤魔化そうとするも、何も通じない。聞く耳を持ってくれない。

「…嘘ツス…」

最終的に訓練をサボってしまったのを認めてしまった。

「あゝらゝ… それはイケない子ねえ？」

「ウエンディ…」

クアットロが邪悪な笑みを… デイエチが呆れ…

「貴様！！ 私がお前の腐った根性を叩き治してやる！！」

激怒するトーレ。

「ちょっと、トーレ姉！ 勘弁してやっても…」

セインが助け舟を出す…

「…良くありません」

彼女の鋭い眼孔に黙ってしまった。

「ウエンディちゃん？ 精々頑張ってねえ？」

ずっと笑っていたクアットロをディエチとセインが怪訝そうな目で見ていた。

絶対に楽しんでいるとしか思えない。

結局、トーレが加わった訓練中のナンバーズにウエンディは攻められる、ヤジが飛ぶ、色々であった。

…

一方でルーテシアと別れ、歩くクアットロ、ディエチとセイン。

「あのさあ…」

「何かしら？」

「どうした？」

おもむろにディエチが口を開いた。取り敢えずはクアットロとセインが聞いてみるが、彼女は嫌な事を考えているように顔をしかめる。

「あいつら… 何者？」

突然の問いに二人はディエチが何を言っているのか分からなかったが、考えてみれば一つしかない。

「“魔剣士”の血族の事かしらあ？」

「…うん」

ディエチが何を言っているのか分かったクアットロが明るい声で聞くが、隣のディエチは躊躇いつつも応える。

「あ、そくだ！ 忘れてた！ あいつら本当に何者なの？ クア姉！？」

セインが完全に忘れていたようだが、デビルブリンガーで驚掴みにされた事を思い出し、ディエチと同じく聞く。

「ああ、その事ねえ。なるほど…」

クアットロが勿体ぶりつつ、指を頬に当てている。

ネロとダンテの事を詳しく聞かされていなかったディエチとセインが間を開けられた今… 次にクアットロが何と言うか待っているが…

「ヒミツ！」

「「え？」」

クアットロが完全に何も教える気はないらしい。
また、困る妹を見て楽しんでいた。

「なにそれ？ 教えてよ。あれ見たでしょ？ あの“腕”！！」

セインが左手の人差し指で、上げた右腕を指差した。
それを見ていたディエチが顔を背けてしまう。

「絶対にヤバイよ、あいつ！！ ハンターもハンターでヤバかったけどさ、黒騎士のあれなに！？ 右腕がなんか… こう…」

セインがジェスチャーでデビルブリンガーの事を伝えようとするが、その必要はない。クアットロとディエチも見ていたのだから。

「はいはい、分かったわよ。あなたはその“腕”に捕まっちゃったんでしょ？」

「なにその反応？ クア姉、冷たくない？ 教えてくれても…」

「そんなに知りたいの？」

二人が喋っているが、ディエチの脳裏にネロの姿が… 植え付けられた“恐怖”が再び芽生える。

ディエチが顔を曇らせ、その場から立ち去ろうとした時、自分達の後ろから聞こえた声に振り向いた。

「あ…」

「あゝらゝ… これはこれはウリエル様あ？ いつの間にいらして
たんですか？」

不意に声を漏らしたディエチ、まるで相手を持ち上げるように機嫌
を取ろうとするクアットロ。

いたのは廃棄都市内で悪魔アンジェロを操っていた女性“ウリエル”。壁に凭
れ掛かり、腕組みした状態から身を乗り出し、三人に歩み寄って来
た。

薄紫の髪が揺れ、来ていた白い服… まるで絵画に出てくる“天使
”が着ているような白いローブの間から出てきた手が…

「あの…」

「本当に知りたい…？」

セインの肩に触れた。

ウリエルの優しいような顔とは裏腹に、目はあまりにも冷たい…

「そりゃ、知りたいんですけど…」

「一つ、良いことを教えてあげる…」

白いローブから出てきた左手の指がディエチの頬に触れる。

そこで二人は気付く… 触れた瞬間にウリエルの体温が異常な程、
高い事に。

ディエチとセインは彼女に目が釘付けになってしまっていたが、ふ
と見たクアットロが腕を押さえて微かに震えているのが…

「知るって事はね… 罪なのよ？ 知れば後戻りは出来ないし、知
らない方が幸せって事もあるの…」

突然、クアットロに顔を向けるウリエル。その時、あのクアットロでさえビクつき、目を背けてしまった。

やっぱりクアットロは何か知っているが、それはウリエルの言う通り“魔剣士”の事を知っているからなのか、それとも別の理由か：いずれにしても、ウリエルはクアットロの事をよく思っていないのは事実だろう。

「…で？」

「「えっ!？」」

ウリエルに声を掛けられ、ハッとしたディエチとセインがクアットロから彼女に視線を戻した。

「本当に知りたい？」

またウリエルは聞くが、今度は二人に近付き、耳元で囁いた。

「いえ…」

「やっぱりいいです…」

聞くのを止めてしまったディエチとセイン。ウリエルの顔は見えなかったが、代わりに見えるクアットロの様子がどんどんおかしくなっているってしまった為、聞くのは止めた。

「そっか。じゃあね」

手をひらつかせて去って行くウリエル。彼女の姿が完全に見えなく

なると、クアットロがまるで息を止めていた様に深く息を吐いた。

「ああ… 生きた心地がしなかったわよ…」

「あと、もう一つ言い忘れてたわ」

クアットロが安堵の息を吐くが、また後ろを見ればウリエルがいた。

「え！？ ウリエルさ…ま…」

ウリエルがクアットロの首に腕を回し、彼女の耳元で何か囁いているが、デイエチとセインにも聞こえた。

「いつまでもそう、ベラベラ喋ってないで、あなたはスカリエツェイの言われた通りに動いてりゃいいのよ…」

ウリエルの腕に力が込められ、更にクアットロの首に食い込む。

「あと、その気になればあなたを燃やして消し炭にするのもワケないんだからね？」

ようやくウリエルがクアットロを解放するが、背中しか見えないデイエチとセインには、ウリエルがどんな顔をしているのか分からなかった。唯一、見えているのはクアットロだけ。

「は…はい…」

「じゃあ、いいわ」

またクアットロが震え始めるが、それを見たウリエルが一人納得し

て先程と同じ様に歩き出した。

今度こそは戻って来ないだろう。

完全に戻って来ないとの確信はないが、また厄介な事になる前にクアットロが何処かに向かつて早いペースで歩き出す。

「クア姉？」

「クアットロ、どこに…」

セインとディエチの呼び止めも聞かず、彼女は遂に走り出した。その姿が暗い通路の向こうに見えなくなるまでは…

——そして、現在に戻る——

結局、魔剣士の事は分からず、終いにはクアットロもおかしくなってしまう、ディエチとセインの謎は深まるばかりだった。

「結局、何者なのかな…？」

「さあねえ？」

ポツリと呟くディエチにセインが頭の後ろで手を組んだまま一緒にいた。

あの後、暇潰しに訓練場を見に行けば、案の定ウェンディがシゴかれていたり、予定よりも早く完成したノーヴェの武装、稼働が開始されたセツテ、オットー、デイド。

更には、最近スカリエッティが戦力に加えた新たな魔導生物“悪魔”…

二人は：特にディエチは気になる事ばかりだが、ウリエルの言葉を思い出す。

「知るのは罪…か…」

ポツリと言ったのにセインが見ている。

「なに？ ウリエルさんの真似？」

「うるさい…」

茶化してくるセインにムツとするディエチ。この場こそは問題なかったが、二人の知らない：いや、彼女達の知らない場所では、一つの“闇”が目覚めようとしていた：

「……ククククッ…」

スカリエッティのラボでは、あの“虫”のような悪魔が体を微かに動かしていた。ピクツと動くその様は、まるで蛹が成虫になるかの如く。

【…いよいよですね？】

「ああ…そうさ…」

絶え間無く笑い続けるスカリエッティ。彼の隣に浮かぶモニターにはウーノが映っていた。彼女は、“虫”の悪魔が蠢く様子を見て、顔を陰しくしてしまう。だが、スカリエッティはそれを知ってか知らずか、真正面にある“虫”を見ていた。

「さあ…」

スカリエッティが悪魔に向かって手を翳す…

「目覚めろ!!」

すると、収束されていた黄色い光が薄暗い部屋全体を包み込んだ。

【くっ…】

「クククククッ…」

ウーノが画面を通して伝わる眩しさに、手で目を隠し… スカリエッティはより一層、高らかな笑い声を上げた。

「…ここは？」

開いたポッドから転げ落ちるように地面に倒れ込んだ悪魔が辺りを見渡す。喋る言葉こそ人と同じだが、口の牙が動き、声もこもっているようだった。

「研究所か…？ しかし、私のものでは…」

「私の研究所だよ…!!」

悪魔は声に過敏に反応し、スカリエッティを見据える。

「だ、だ、誰だね！ き、き、き… 君は!？」

悪魔は舌が回っておらず、どうも吃音のようだ。

「そんなに警戒しなくてもいいよ… 私は君を生き返らせてあげたんじゃないか…」

「生き返らせた？」

スカリエッティが口元を歪めるが、自分が生き返った存在である事に気付き、悪魔はスカリエッティに詰め寄る。

「そうだ!! 私!!」

「思い出したかね？」

体長3メートルはある巨体がスカリエッティに迫るが、彼は微動だにしない。

【ドクター!!】

ウーノが声を上げるが、彼は軽く手を上げて制する。

「ダンテエエエエ!!」

虫の悪魔の咆哮が部屋中に木霊する。

「ククッ… 因みに、君が死んでから一年になるよ。どうだね? 気分のほうは？」

スカリエッティが問うが、悪魔は応えずに、荒くなった息を整えようとしている。

「…一年？」

「そうさ…」

悪魔は左目を覆う、赤い部分でスカリエッティを見る… いや、見えているのかどうか分からない。

「自分が誰だか分かるかね？」

スカリエッティが悪魔に近付くと、その悪魔は一度天井を見上げ、深く息を吸い込み…

「ああ…分かる。分かるとも…」

口の牙と、上げた手の節がゴキゴキと動いた。
そして…

「我が名はアグナス！！！！」

溜めた息を思いつきり吐き出しながらの名乗り…

「隻眼の魔剣士！！ アンジェロアグナスだ！！！！」

ここに復活したのは、禁忌に触れた、愚かな人間の末路…
魔剣士を名乗る偽りの天使…

【ドクター…】

ウーノが目を細め、スカリエッティを見たが、彼はより一層に笑みを歪めていた。

まるで、これから始まる出来事を今か今かと待ちわびるように…

E p i s o d e . . 4 2 〽 H i d e 〼隠された真実〽 〽 (後書き)

〽第43話予告〽

「さあて、始めるか！」

駆け出されたのは戦場…

「坊や！ 出番だぞ！」

我が道を行くのは彼の自由…

E p i s o d e . . 4 3 \ A p p e a r a n c e へ目に見える形へ (前書き)

人の心とは、目には見えない…
見えるのは“外見”だけ…

その者を知るには、心に触れ、見極めるしかないのだろう…

Episode..43 Appearance〈目に見える形〉

無数の悪魔が出現したという廃棄都市区画に向かうべくして、ダンテとネロ、隊長陣と別部隊のギンガを乗せたヘリが向かっていた。

「狭いな」

悠々に椅子に腰掛け、脚を組んでいるダンテ。

不満を漏らす彼に、壁に寄り掛かっているネロが睨む。

「贅沢言うな。乗せてもらってるだけ有難いと思えよ」

今のヘリの中は総勢11名。はやてと共にシヤマルとザファイラ、リインは六課に残る事になったのだが、この人数でヘリに乗るのはキツイ。

「やっぱり、お前のバイクで行きや良かったな」

ダンテは窓の外から景色を眺める。

悪魔の現れたのを聞いたネロが向かおうとしたのは、自分のバイクが保管されているガレージだったが、キーははやてが持っているうえに、勝手に行動してもらっては困るとシグナムに言われた為、こうしてヘリに乗っている。

「男、二人乗りもどうかと思うけどな？」

皮肉を込めて言ったネロ。

因みに、バイクのガソリンは尽きているままだしい。

「そう言うなよ。俺も二人乗りはした事ないけど、テクニクはかなりのもんだぜ？　まあ、壊すのも得意だけどな？」

何もない空間で、バイクのハンドルを握り、アクセルを噴かす仕草をするダンテ。

彼の突飛な発言にスバル達も黙って聞いているだけなのだが、何とも言えない顔になってしまう。

『やっぱりすごい人だね？　ダンテさんって』

『言うこと全部がトンデモ発言じゃない…』

ダンテとのスペースを少し開けて座っているティアナとスバルだが、壁際の二人は他愛ない会話を繰り返していた。

『しかも、壊すのも得意とか言ったわよ！？』

ティアナがダンテを見るが、彼は何故か不敵に笑いつつ話しているが、相手であるネロは苛ついたカンジでいる。

ダンテ曰く、一年ぶりの“感動の再会”らしいが、ネロは余り取り合いたくないらしい。

『お二人の話もすごい気になるんですけど…』

『やっぱり、聞きづらいですよね…』

彼女達の隣に座るエリオとキャロだが、先程もダンテとネロの話を聞いているだけで聞こうに聞けず、今も引きずっていた。

二人が魔剣士スパード…つまり、悪魔の血を引いていると言う事実には驚いたが、自分達が気付かぬ内に距離を置くようになってしま

っていた為、何も言えない。

『誰か声、掛けてみる？』

試しにスバルが提案するが、皆の表情が引き吊った。

『あんた、マジで言ってるの？』

ティアナが信じられないとでも言った顔をしているが、スバルは自信ありげだ。

『あたりまえじゃん！　だって、ネロさんは私達の仲間なんだし、ダンテさんもいい人みたいだし！』

『その自信、どこから来るのか知りたいわよ…』

ティアナを含め、エリオとキャロも未開の海域であるダンテとネロに踏み込むべく心の準備をしているスバルを心配する。

『スバルさん、本当にやるんですか？』

『うん』

『無理しないほうが…！』

『心配症だな？　大丈夫だってば！』

念話で話しつつもエリオとキャロに微笑むスバルだが、その顔をみてしまうと、どうも心配するだけ無駄に思えてしまう。

『エリオ君…』

『まあ、確かにスバルさんはさっきもネロさんと普通に話してたからから、話しやすいと思うけど…』

『ねえ？　そう言えば、なに聞く？』

『『え！？』』

案の定、予想通り。

心配は無駄に終わり、彼女は何を聞こうか考えていなかったらしい。

『あんたが言い出したくせに、何も考えてなかったの？』

『あはは。そうだね』

ティアナも呆れているが、スバルは頭を掻きつつ、照れていた。

『聞くんて言っても、そもそもこの状況で質問すること事態がおかしいんじゃない？　今更だけどね』

『え？　でも、このままじゃ二人の話、向こうから話してもらうしかなくなっちゃうじゃん？』

愚痴るスバルが膨れっ面になるが、ティアナが手を顔に当て、溜め息を吐いた。

『それでいいんじゃない？　根掘り葉掘り聞くじゃないにしろ、向こうが話してくれさえすれば』

『ティア、ネロさんが悪魔の血を引いてるって知ってから冷たくな
った?』

少し首を捻りながら聞いたスバルだが、言われた瞬間にティアナの
顔色が変わった。

『そ、そんなんじゃ!』

『やっぱり?』

『う…』

確信を突かれ、ティアナがそこで一度黙ってしまった。元々、念話
で話しているから、黙っているのには変わりないが、自分を見詰め
るのスバルの目から彼女は目を背けてしまう。

『ティアがそう言う反応するってのが、どういう時かってくらい分
かってるよ。パートナーだもん』

真っ直ぐな瞳で見詰めるスバル。

その目は、自分の正義を貫いた二人の狩人に僅かばかりの疑念を持
っていたティアナに向けられていた。

『…あんたはあの二人の話、信じてる…?』

『ネロさんとダンテさんが話してくれた教団の事?』

『それしかないでしょ…』

ティアナが目を向けたのはダンテとネロだが、相変わらず二人は自

分達には関係ないであろう話をしている。

狩りでいくら儲けたかと聞くダンテに、赤字続きだと返すネロ。それに彼は笑い飛ばしながら「お前もかよ!」と言っていた。

『信じるよ』

『嘘かもしれないのに?』

ティアナがスバルの方を振り向くが、彼女の目はどこまでも真っ直ぐだった。

『話をしてる時のネロさん… 嘘を言ってるようには見えなかった。それに、辛い事があったんだよ』

スバルもダンテと話しているネロを見た。

お前の所なら悪魔なんて毎日出てるだろ? と、聞くダンテだが、住民から金を取れるかよ! と、呆れて言うネロ。

『ネロさん、言ってたんだ…』

不意にスバルを見たティアナだが、彼女は自分の右手を見ていた。

『力が…』

握り締めた拳… そこからは己の皮が軋み、音を立てた。

『守る為の力が欲しかった… って…』

一年前、自分の右腕に悪魔が宿った時の事を僅かばかりだが話してくれたネロの想いをティアナに打ち明ける。

『私も守ってもらってばかりいるのが嫌だったから、強くなるって決めた…』

握り拳をほどこしたかと思ったが、嘗てなのはに助けられた弱かったあの頃を捨て、守る側にいる事を自覚しながら、決意を新たに拳を握り締めた。

『スバル…』

彼女の隣に座っているギンガがスバルを見たが、それに笑みで返し、話を続けた。

『それに、私達と似てるのかもね？』

『ネロさんが？』

『うん。それにダンテさんも』

スバルの言った事に顔をしかめるティアナだが、狭いヘリの中ではダンテとネロだけが… 厳密に言えばダンテだけが騒いでいた。

「狩りは儲からない仕事だからな。今の内に転職でもしたらいいんじゃないねえか？ 若いにこした事はないぞ？」

「誰がするかよ」

皮肉と冗談混じりで言った言葉に冷ややかに返したネロ。

『誰かを守るのに強くなりたくて力が欲しかったのも…』

ポケットから取り出した待機状態のマツハキヤリバーを見詰め、今度は“相棒”ごと両手で握り締める…

『人と違うのも…』

『スバル!!』

少し弱気になりつつあったスバルに念話を通して叫んだティアナ。

『あんたは人と少し違うだけで悪魔じゃ…!』

『じゃあ、ネロさん達も一緒だよね?』

彼女の瞳に映る自分はどこまでも疑り深く、人と“少し”違う存在であるスバルを信じ、悪魔という存在であるネロとダンテを警戒し続けている事に気付いた。

『違う存在でも、その人がちゃんと心を持って人間らしく生きる事は出来る。前にそう言ってくれたの、ティアだよ?』

降下地点が迫る中、はしゃぐダンテと、悪魔と戦う準備に備えるネロの知らぬ内に、スバルが彼らに対する想いがどれ程の物かティアナは思い知らされた。

『あの時に言ってくれたの、嘘だったの?』

『そんなワケないじゃない!! 嘘であんな事、言うワケないでしょ!!!』

『じゃあ、ネロさん達も一緒だね?』

その言葉を待っていたかのようにスバルがティアナに詰め寄る。
束の間、ティアナは何も言わなかったが…

『そうね…』

目を瞑り、小さく息を吐きながら観念したように言った。

『まあ… あんたの言う通り、あれが悪魔だなんて到底思えないけど…』

「おい、どおしたみんな!? 黙っちゃまって? ちゃんとメシ、食わなかったのか!?’」

目を向ければ、ダンテが大剣を両手で支え、スバル達を見ている。

「メシならあんたが余計な事、言ったせいで食ってないんだろ。俺もだけど…」

ネロが小さい舌打ちの後に苛つきながら言ったが、その瞬間にスバル達に空腹が襲った。

よく考えれば、夕食もダンテしか食べていない。

彼はネロが“騎士”であった事を明かした為、みんなその話を聞いていたのだが、その話が終わったかと思えば、今の出撃に駆り出されたに至る。

『人間らしい悪魔… って事… かな?』

『そうなんじゃない?』

スバルが微妙な顔をしていたのに対し、ティアナは素っ気ない。

「そう言えば、どおしたその服？ 前のコートはどうした？ ほら、紺のレザーコート！」

「ああ、駄目になっちゃったから貸してもらってる服なんだが…」
ダンテが思い出したように、そして気になっていたネロの服装を取り上げる。

『そう言えば…』

『ネロさんって、ずっと“あれ”よね…』

ティアナ達も気にはなっていたが、ネロは3日前から着ている訓練時の紺のズボンと半袖のままだ。

『陸士服を着てたのも最初の日だけだったわね…』

『そうだね…』

スバルが声なく笑っているが、よく考えてみれば、初日以降、朝の訓練からネロはあの服装のままだ。

「こいつらと同じ、ちゃんとした服を貸してもらってるんだが、こっちの方が動きやすいから着てる」

『本音が分かったわね…』

一瞬、ネロとティアナの目が合ったが、彼女は反射的に背けてしまった。

『主が直々に渡したと言うのに着ないと思っていれば…』

『どっち道、アタシが上着以外はダメにしたんじゃ無理ねーじゃねえか』

ハッチ付近のシグナムが呆れて溜め息を吐いたが、その陸士服を着れなくしてしまった張本人のヴィータは自嘲気味に目を閉じる。

『そうだが…』

『まあ、いいんじゃないの？』

ヴィータも窓から外を見た。

遠くに見える、蠢き奔めき合う悪魔の群れに眉を吊り上げ、首から待機状態のグラーファイゼンを外す。

『無駄話はこれくらいにして仕事だ』

『ヴァイス、降下ポイントまでどのくらいだ？』

【もうちょいですぜ】

ヴィータの前に浮かび上がったモニターのヴァイスが応えるが、

「やっと到着か？」

聞いたダンテに続き、ネロも椅子から立ち上がった。

彼らはスバル達と、隊長のなのはとフェイトの二人の間を通り、後

部ハッチの所まで来る。

「状況は？」

【あー： と、情報じゃアンノウンの数は確認出来る数でも、300と500はいるらしいんだが…】

「たったそれだけか？」

ヴァイスがバグヤードから送られて来た情報を教えるも、ダンテは拍子抜けしたように言った。

【た… たった！？】

「ザコなら群れようが、いくらいても変わんねえさ」

「あんたと普通の人間を比べるなよ。思ってる事、遠慮なしに言っ
て後で面倒になるから、もう喋るな。ヴァイス、ハッチ開けてくれ」

300を越える悪魔の群れに対して“ザコ”呼ばわりするダンテを
咎めるネロだったが、彼も即座に驚きの発言、ハッチを開けるよう
に要求して来た。

【おいおい： お前さん達には驚かされてばっかだが、敵のど真ん
中だぞ？ もう少し、安全に降りれる所まで…】

「ど真ん中だからいいんだよ」

ネロがハッチ部分に手を押し掛けた。このまま無理にこじ開ける事
はないだろうが、ヴァイスの頭に彼は昼間に壁を殴っただけでヘリ

の向きを無理矢理変えたのを思い出す。

【…マジで言ってるのか？】

「やれもしない事、言うわけないだろ」

「早くしな。一年前と比べれば坊やも丸くなったが、何しでかすか…」

ヴァイスが一度息を飲んだが、ネロは不敵に笑ってみせた。彼の隣に並ぶダンテが余計な事を言った為、またしてもネロの肘打ちが飛ぶ。

【…分かった。検討を祈るぜ】

「どうも…」

「ヴァイス陸曹!!」

半ば無理に了承したヴァイスだが、ティアナが声を上げた。

「隊長も二人に勝手な事、させていいんですか!？」

「いや…」

「なんて言うか…」

今まで黙っていた分と、押し込めていた気持ちが吹き溢れる。だが、なのはとフェイトも何と言おうか考えていると、互いに顔を会わせて苦笑してしまった。

「やってくれそうって言うか…」

「信じてるから…かな？」

二人は微妙な笑みを持續していた。

「期待になら応えるぜ？ 美人の…」

振り返り、腕組みしていた為、右腕の包帯を取る作業の途中だったネロの左肘がダンテの脇腹にめり込む。

『なんでみんな、そんな簡単に…』

『そう、言うなよ』

未だにティアナの心には疑念が残っていたが、彼女の頭にヴィータからの念話が飛び込んで来た。

『…ヴィータ副隊長は信じてるんですか？』

『いいや？』

『じゃあ何で!？』

思ってもみない人物に止められたティアナだったが、彼女から返ってきた返答は予想外のものだった。

『確かに、アタシも完全に信じてるわけじゃないけど、こいつらのやる事を全部見届けて、見極めてやるって決めた』

『見極め…ですか…?』

『そうだよ』

ヴィータの前にいるダンテが残り少ない銃の弾数を数え、ネロも待機状態のレッドクイーンとブルーローズを装備している。

『お前もこいつらがどんなやつなのか見極めればいいだろう?』

「…よし」

ネロが新しく受け取ったカートリッジをブルーローズのシリンダーに装填し、リボルバーを戻すと、ガチンッ! と、鈍い金属音が鳴った。

【隊長さん達、よろしいですかい?】

「お願いします」

ヴァイスがなのはの許可を取ると、先に降下するネロとダンテ、空戦が可能な隊長陣が前に出る。

「すごい数だね…」

「ああ…」

「これもスカリエッティの仕業なんでしょうか…?」

「確証はないが、恐らくは…」

ハッチから見えるヘリの外では、ガラス越しで見るものよりも、そのおぞましく、禍々しさが空気を通して肌で直に感じる。

その景色に、なのはが顔をしかめ、ヴィータは睨み、思案するフェイトをシグナムが待機状態のレヴァンティンを首から外しながら見ていた。

「よし、そうじゃ…」

後ろから聞こえて来たけたたましい金属音に振り向けば、丁度リベリオンを背負ったダンテがいた。柄から手を離し、なのはとフェイトを退かして外を眺める。

「始めるか… 坊や！」

「ああ…」

ネロも既にレッドクイーンは背負い、ブルーローズを指で回していた所から腰のホルスターに納め：

「こっちもOKだ…！」

拳を左手の掌に打ち付け、前に出てくる。

「映像で見た通り、ザコばかりだな」

「まあ、臭いは掃き溜めらしく、かなり強烈だけだな？」

ダンテが鼻を摘まんだのにネロが顔をしかめた。

「臭いは知らねえよ：俺は右腕が教えてくれるくらいしか分からないんだし：」

「とにかくザコしかいないって事さ」

「：まあな？」

上げた悪魔の右腕がボウツ、と光ったが、手を広げて一々、大袈裟な素振りをするダンテに、ネロは一瞬だけ間を開けて返答した。

「それじゃあ、俺と坊やで先に降りるから」

「あんたが仕切るのかよ：」

手をひらつかせ、飛び降りようとするダンテと並ぶネロに、ヴィータの顔が少し引き吊りながら額から汗が流れていた。

「問題あるか？」

ダンテがなのは達を見たが、彼女達は二人を先に行かせるべきか考えている。

今までの流れから行けば、確実にネロとダンテは無茶をやらかすだろう。

『どうする、なのは？』

『私は正直、迷ってるんだけど：フエイトちゃんは、どう思う？』

『：私は行かせてあげようと思う。言っても聞かないだろうし、あの二人ならやってくれそうな気がするんだ』

迷いを見せるのはだが、フェイトは信じているネロと、彼が信頼しているダンテを後押しして、微笑んでみせた。

『私もテストロッサに賛成だな』

『アタシもだ』

『シグナム副隊長： ヴィータちゃん：』

フェイトの考えにシグナムとヴィータも同意する。
最早、3対1では決まりだが、一応はなのはの返事をネロとダンテが待ちわびているらしく、今に飛び降りる準備をしている。

『そうだね。それで行こう！』

「二人とも！！」

「なんだ？」

「どうした、美人の姉ちゃん！ 告白か！？」

張り積めた緊張の糸を断ち切るように、空気を破壊するダンテにネロが拳を振るうが、いい加減に止められてしまった。

「いえ… そうじゃなくて…」

掴まれたネロの右腕からは眩い光が放たれるが、なのはは何とか話を進めさせる。

「二人が先に降下、それに続いて隊長陣の私達が空中から援護、最

後に安全が確保出来た所でフォワードメンバーを降ろすって言う作戦の第一段階なんですけど…」

「じゃあ、もう先に行っていていいよな？」

ダンテが掴んでいたネロの腕をパツと放した。

その瞬間、反射でシグナムはかわしたが、ネロは勢い余って壁にぶつかってしまった。

「ええ… でも、ネロが…」

「ああ。多分、大丈夫だろう？」

「多分!?!」

モロに背中を壁に打ち付けたネロにフェイトとシグナムが駆け寄るが、ダンテは屈伸運動をしつつ、準備は万端。

ダンテの適当なのか、ネロがあの程度では問題ないと言う発言なのは驚く。

「でも今、すごい音がしたし…!」

「痛ってえ…」

声に反応して振り向けば、案の定、無事でいたネロが腰を摩っている。

「ほらな?」

何食わぬ顔のダンテだが、ネロの顔は明らかに引き吊っていた。

「テメ…」

ネロがシグナムとフェイトを押し退け、ダンテの胸ぐらを掴もうとしたが、その手は空を切った…

ダンテは開いたハッチで背中から地面に飛び降りるようにダイブ…

「ちょっと…!!」

「ダンテさん!!」

「坊や!!」

慌てるフェイトとなのはだったが、彼女達の声搔き消すように、ダンテの張り上げた声が始まったばかりの夜の世界に響く…

「先に行ってるぞ!! 早く来ないとパーティーは終わっちゃうからな!!」

次第に見えなくなるダンテの姿。いつもの赤いコートを着ていれば、もう少しは見えなかったかもしれないが、今のダンテの服は黒だ。悪魔の中に飛び込むなり、その姿は目視出来なくなった。

「言われなくてもすぐ行くよ…」

ネロが両手を腰に当て、上半身を仰け反りながら外を眺める。

（改めて見ると高いな…）

今は地上100メートルはある位置にいるが、今のネロは恐れてな

どいない。

一年前の彼ならば、ここから飛び降りる事に戸惑いを見せたかもしれないが、今の彼にはこれしきで“恐怖”など感じない。

「…行くか!」

「あの… すみません!」

嘗ての自分に自嘲気味に小馬鹿にしながら小さく笑った。
呼吸を整え、飛ぼうとした瞬間、呼び止められてしまった。

「…何だよ?」

せつかく飛び降りようと思ったにも関わらず、ネロを呼び止めたのはスバルだった。

「あの…」

「早くしてくれないか? ダンテのやつが、もう派手にやり始めやがった」

言うのを躊躇っているスバルだが、ネロが壁に手を当て、ハッチから見える地上では、赤い魔力の衝撃波と斬撃が津波のように悪魔を薙ぎ払っている。

「宜しければいいんですけど、もっとネロさん達の話… 聞かせて頂けませんか?」

それにネロが目だけをスバルに向け、無言で彼女を見詰める。

『スバルさん、随分ストレートに聞きましたね…』

『いや… 手っ取り早いのは、これだと思ったんだけど…』

エリオがスバルを見たが、彼女なりに頑張ったものらしく、額の冷や汗を拭っていた。

『あ… でも、何だか飛び降りようとしてるみたいです』

キャロに言われて見れば、ネロはそっぽを向いて、ダンテと同様に飛ばうとしている。

『やっぱり、ダメか…』

「…応えられるくらいでなら…」

落ち込むスバルだが、ネロの声に顔を上げた。

彼は振り返らないが、背負うレッドクイーンの柄に手を掛ける…

「話してやってもいいよ…」

最後の方は唸りを上げるエンジン音で聞こえなかったが、イクシードの発動準備を済ませ、真っ赤に発熱している燃烧機関の熱がへりの中に伝わる。

それは、ネロの表面上は冷たくとも、内に秘めた心は熱くたぎっている事を教えるかのように…

「あ！」

「帰ってからな!!」

ネロが身を投げ出したが彼はダンテと違い、背中からではなく、ちゃんと正面からダイブ。

見えなくなる紺の影をなのは達が見送り、彼女達も出撃する。

「それじゃあ、私達も出るからスターズ、ライトニング分隊の四人とギンガは後に続いて！」

「はい！」

「了解です！」

キヤロとエリオが敬礼、スバルとギンガも同じく敬礼していたが、何処か腑に落ちないようであるティアナに気付いた。

「ティア…」

次々に降下しながらもバリアジャケットを纏って行くのは達をスバルが見送りながらもティアナに声を掛けるが、彼女は一度息を吐き、深く深呼吸をしたかと思えば顔を上げる。

「ほら！ 私達も行くわよ！」

先程とは切り替え、戦闘モードに入るティアナ。待機状態であるカード型のクロスミラージュを懷から取り出し、なのは達の後に続いて飛び降りた。

「ティアさん…」

「大丈夫よ…」

ティアナの身を按じながらも心配しているキャロとその隣を飛ぶフリード。

これから始まる戦いに不安と恐怖を感じながらも、仲間を気遣っている彼女の肩にギンガの手が触れる。

「きっと… ね？」

彼女の笑った顔をみれば、やはりスバルとは姉妹だと言う事を実感させられる。髪や瞳の色だけでなく、こういう所までそっくりだった。

それは、“同じ血”が流れているダンテとネロのように…

「はい！」

キャロの覇気の込められた返事を聞き、彼女を待っていたスバルとエリオ、フリードも出撃準備は万全。いつでも行ける。

【よし、お前ら！　しっかり蹴散らして来いよ！！　あの兄ちゃんの話は宜しく頼んだぜ！！】

「はい！」

「行って来ます！」

「キュー」

手を繋いで飛び降りるエリオとキャロにフリードが…

「墜ちなで下さいね？」

「ちょっと、スバル！」

【ハハハッ、安心しな。昼間みたいには行かねえからよ！】

普段なら言わない冗談をダンテに真似て言ってみせるスバル。ギンガが慌てているが、モニターに映った操縦席のヴァイスは笑っていた。

【早く行け。みんな、下で待ってるぜ？】

「はい！」

「すみません、私達も行ってきます」

相手がヴァイスで良かったが、もし悪ければと思うと、肝が冷えてしまうギンガ。

心配ばかりしてしまうのは妹を想ったの結果だが。

「さあてと… みんなが帰って来るまで俺も踏ん張るとしますか！」

モニターを切り、ネロやスバル達がヘリに無事、帰って来るのを祈りつつ、ヴァイスだけを乗せたヘリが悪魔に囲まれない為に距離を取るべく、その機体は大きく降下ポイントから離れていった…

Episode..43 Appearance〈目に見える形〉（後書き）

～第44話予告～

「あれがドクターの言ってたやつらか…」

動き出す、《無限の欲望》の少数精鋭…

「へえ～。やるツスねえ～？」

戦闘機人…《ナンバーズ》…

「あ、あ、あ、あ、あ、あれは！？」

狩人の知らない闇に潜む悪魔と彼と彼女達は共に…

E p i s o d e . : 4 4 (B l o o d o f S p a r d a 〈魔剣士の血族〉)

かの狩人…

『反逆』の大剣を持ち、二挺の拳銃を携えた《赤の男》…

かの騎士…

右腕に悪魔の力を宿し、その腕は『人と魔を分かつ』剣を納め、左手は『赤の女王』と『青い薔薇』を操る《黒き騎士》…

「ネロ！」

ヘリから降下したフェイトがバリアジャケットを纏い、先に飛び降りたネロと並ぶ。

「よく考えたら、ネロってバリアジャケット着てないけど、このまま降りて大丈夫なの…？」

「さあな？」

勢いに流されて忘れてしまっていたが、冷静に考えてみればダンテもネロもバリアジャケットは装着していない。ネロのデバイス《レツドクイーン》と《ブルーローズ》にバリアジャケットの構成機能は後日組み込む話だとシャーリーとリインから聞いていたが、フェイトはその事を思い出し、聞いてはみた。

だが、彼から返って来た返事は「さあな」。余りにも的外れな返答である。

「え… 大丈夫なの…？ ダンテさんは何ともないみたいだけど…」

地上をみれば、地上100メートルはある位置から飛び降りたとは思えないダンテが、悪魔の群れを次々に葬っていた。

「大丈夫じゃない… かもな？」

ネロが頭から地面に向かっていても関わらず、フツと笑ってみせた。

「俺はダンテと違って体は普通の人間と変わらないし、流石に死ぬんじゃないか？」

「ええっ!？」

ネロの発言にフェイトが驚きの声を上げる。

「ちょっと! 早く掴まって!」

「大丈夫だよ」

「全然大丈夫じゃないよ!! 早く私の手に!!」

「どうした？」

慌ててネロに手を差し伸べるフェイトだが、彼は応えずに地上の悪魔を睨み付けたままだ。

そこに丁度シグナムも合流し、フェイトの隣に並ぶ。

「シグナム!」

「なんかあったのか？」

「フェイトちゃん？」

フェイトがシグナムの名を呼んだ直後にヴィータとなのはもやって来る。

「よお」

ネロはシグナム達を見て、軽く挨拶したが、一度別れて数十秒しか経っていない。

フェイトと同じく、彼女達も既にバリアジャケットを装着していた。

「聞いて！ よく考えたら、ネロってバリアジャケット着てないでしょ！？ だからこのまま降りたら…」

「死ぬかもしれないと言う事か…」

慌てて説明を始めたフェイトだったが、いち早く気付き、冷静な反応をしたのはシグナムだった。彼女は左手で鞄に修まったままのレヴァンティンを持ち、右手で顎を触る。

「いや、かもしれないじゃなくて、絶対に死んじゃいますよ！！」

シグナムとは対照的な反応を取るなのは。彼女もネロが悪魔と戦う前に危険に晒されているのに気付き、慌てふためく。

「悪魔だったら大丈夫なんじゃねーのか？ あのダンテってやつは、なんともねーみてーだけど？」

「ヴィータ！」

「あー… はいはい。悪かったよ」

ヴィータがグラーフアイゼン右手に首を傾げて言うが、ネロを“悪魔”と言った瞬間にシグナムが低く、凜とした声で咎めた。

彼女も一度ネロを見た後に、シグナムに面倒そうに返す。

「それなんだけど、ネロって体の方は普通の人と変わらないらしくて…!」

「は？」

フェイトの言った事の意味が分からず、ヴィータがまた首を傾げながら言った。

「どういう意味だ、それ？」

「だから、俺はダンテみたいに頑丈じゃなくて、体の耐久性は普通の人間と変わらないって事だよ」

ヴィータがネロに聞くが、彼から知らされた新たな衝撃の真実に驚愕し、彼女達はここでようやく事の重大さに気付いた。

「…え？」

ヴィータの顔が少し引き吊り、思考が停止する。

今まで散々無茶をやらかしておいて、自分を“悪魔”だと言いつつも、体の耐久性は常人と変わらない。自分が渾身の力を込めて振った鉄槌を止めたのも、自分の気を静める為にわざと受けたのも、“人間”の体だったと言うのか。

ヴィータの脳裏にネロと出会ってから、ここ数日の記憶が流れる。

「ちょ、ちょっと待てよ!!　じゃあなにか!?　お前は悪魔で右腕もそんなだけど、体は人間って事かよ!？」

「ヴィータ!!」

「一々止めるなよ、シグナム？」

思考が追い付かず、急に混乱し始めたヴィータ。彼女がまた“悪魔”と言ったのでシグナムが声を張り上げたが、ネロが気だるそうに彼女に言う。

「まあ、身体能力は昔から高かったけどな？　それに、この一年の間で少しずつだけど、俺も…」

不敵に笑ってみせたネロだったが、そこで喋るのを中断し、ヴィータから地上の悪魔に視線を移す。

「…なんだ？」

「ネロ？」

突然、口を閉じてしまったネロをシグナムとなのはが見るが、彼は少し険しい顔でいる。

黙ってしまったネロに気付いたヴィータも騒ぐのを止めて、彼を見た。

「そうだ！」

風を切る音とレッドクイーンのエンジン音、ダンテに消されていく悪魔の断末魔しか聞こえない闇の世界にフェイトの声が響いた。

「ネロ！！　掴まって！！」

「ああ、そうだった！！」

フェイトがネロに手を差し出した事により、ネロがこのままでは死んでしまうという事を思い出し、なのはも再び慌て始める。

「遠慮しとくよ」

またしても不敵に笑ってみせたネロだが、フェイト達には彼の考えが理解出来なかった。

体は人間、このままでは自分は死ぬかもしれない言いながらも、彼は恐れてなどいない。

寧ろ、その目には強い光に満ちている。

「あんた達は自分の心配をしろよな!？」

ネロはレッドクイーンの柄に手を掛け、グリップを思いっきり捻った。

既に十分暖まった燃焼機関にエンジンが作動する事で、更なる熱を放ち、轟音が鳴り響く。

「あ!」

「ネロ!!」

なのはが声を漏らし、フェイトが手を伸ばしたが、その手は空を切る。

ネロはレバーを握り、《イクシード》を発動。

燃焼機関の後ろにある推進剤の噴出口からは真っ赤な炎を噴き出し…

「狩りの時間だああああ!!!」

悪魔との戦いを始めるべく、目を見開き、狩人の姿に切り替わった

“銀狼”が肺の中を限界まで満たした空気を吐き出しながら、遠吠えと言う名の“唸り声”を上げる…

「えっ!？」

「なに!？」

その咆哮は遅れて飛び降りたスバル達にも…

「…なんなの… 今のは？」

無論、彼女達よりも先に飛び降りたティアナにも聞こえていた。

「ううう…」

「すごい声だね…」

ネロの叫び声に鼓膜が突き破れるかと思っしてしまい、思わず耳を塞いでしまったのはとフェイト。

「…あの馬鹿…」

「急に大声だすなよ!!!!」

シグナムも耳に手を当てたまま額に青筋を浮かべ、ヴィータが耳鳴りを起こしてしまったのに激怒しつつ、涙目でネロに叫ぶが、彼には聞こえていなかった。

…

「…威勢の良いこったな…」

地上では悪魔を斬り捨てて行くダンテが、ふと空を見上げる。

暗闇の中でも、彼の視力ならばネロを見つける事は容易いだろう。

しかも、星と月明かり、ネロの叫び声と言うオマケが付いていれば尚更だ。

「若気の至りってやつか…な!!」

余所見をしていた所に下級悪魔《ヘルIIプライド》が斬り掛かろうとするが、ダンテは見なくとも分かっている。蹴り飛ばすなり、他の悪魔を2、3体巻き添えにして塵に返って行った。

…

「さてと…」

ネロはイクシードの加速によりフェイト達との距離が大分開いたが、その事と時間の経過により地面まで、後20メートルを切っている。だが、ここまで来ても彼は恐怖を感じない。

「始めるか…」

再び柄に思いつきり捻り、レッドクイーンから凄まじい轟音が響くと、レバーを握って《イクシード》を発動…

「はあああああああっ！！！！」

大剣の切っ先を地面に向け、推進力で更なる加速と共に、ネロは真紅の矢となった…

…

「あゝ… しんどかったッス」

「ウェンディ、お疲れ」

「お疲れ…」

若干、ボロボロになったウェンディがよたよたと歩きながら、大きい広間… もとい、椅子やテーブルのある休憩室にやって来た。

彼女を見るなり、軽快に挨拶するセインとディエチだが、二人は椅子に腰掛けている。

「マジでひどい目にあったッスよ」

「アハハハっ」

「笑い事じゃないッスからね！ これもセインが助けてくれないから…！」

「お前が訓練、サボるからだろ」

訓練をサボり、トーレを含む姉妹に攻められた事を溜め息を吐きな

がら愚痴るウエンディだが、セインは笑っていた。現にそのしごかれていた一部始終を見てきたのだから。

自分があんな目にあっただのはセインに責任があると言うウエンディだが、喋っている途中でディエチが静かに真の原因を彼女に言い放った。

「うっ…」

「他人のせいにして、自分を棚に上げるなよな」

「そんな冷たく言わなくても良いじゃん？ 妹なんだし、もっと優しくしてやれよう？」

ウエンディが押し黙ってしまったが、ディエチは更に畳み掛ける。セインがテーブルに身を乗り出し左手で頬杖を突いて、右手の人差し指を一定のリズムでテーブルに打ち付ける。

「セインはウエンディに甘いよ…」

「まあね？ 私は姉だし、一応ウエンディの教育担当だし？」

ディエチがムスツとした顔になるが、セインは歯を見せて笑っている。

「だから問題なんだよ…」

「なんか言った？」

「別に…」

小さな声で言ったが、セインには確実に聞こえただろう。セインがわざと聞こえていないふりをしているのか、本当に聞いていなかったのか分らないが、彼女はわりと明るめの声で聞くと、ディエチが目を閉じて短く返した。

「あれ？ 他のみんなは？」

「集団洗浄ッス」

ウェンディを見ると、彼女は案の定、落ち込んでいたが、セインが他の姉妹が見えないのでウェンディに聞くと、待ちわびていたかのように元気を取り戻して応える。

「あゝ、そうだね。訓練のあとなんだし、そりゃ当然か…」

「ウェンディは行かないの？」

セインが当たり前の事に納得し、他の姉妹と同様、汗をかいているである筈のウェンディが自分達の前にいるのが気になってディエチが聞いた。

「ああ、もう行って来たッスよ」

「…ふん…」

明るく言ったウェンディだが、ディエチは無表情で彼女を見詰める。

「あ！もしかして、疑ってるんスカ!？」

ウェンディが心外だと言わんばかりに詰め寄る。

「いや、別に…」

「ひどいツスよ、ディエチ！ 傷付いたツス！」

元より口数が少なく、寡黙であるディエチは特に弁論しようとしな
いが、対照的に激しく変化するウエンディ。

テーブルの所までやって来たのにセインは顔が引き吊り、額に汗を
浮かばせる。

「まーまー。落ち着きなよ」

「落ち着いてなんかいらんないツスよ！」

セインが椅子から立ち上がり、ウエンディを宥めようとするが、彼
女は一向に落ち着かない。

「あの目を見るツス！」

「目？」

椅子に座ったままポーカーフェイスでいるディエチの目をウエンデ
ィが指差した。

「あれは完全にアタシが洗淨に行っていないって疑ってる目ツスよ！」

「いや、ディエチの目付は元々あんなカンジだけど…」

何故、そこまでディエチを疑うのか理解出来ないセインだが、今疑
っているのはディエチではなく、ウエンディの方だ。

ディエチは素っ気なく返したただけだが、ウエンディの方は感情表現が激しすぎて最早鬱陶しいの領域に差し掛かっている。

「なんスカ！　ちゃんとして来たのに、人を疑うなんて！　そりゃ、はしゃぎすぎてノーヴェに怒鳴られたり、チンク姉やトーレ姉にも叱られたツスけど…」

「おい…」

「なんでいつもアタシだけ悪く言うんスカ！？　セツテ達の最後発組も白い目で見ろし…」

「ウエンディ…」

自分がいかにのけ者にされているか熱く語るウエンディだったが、何やらセインが呼んでいるのに気付く、彼女を見た。

「なんスカ！？」

「うしろ」

「うしろがどうかしたんスカ？」

セインに促され、彼女が指差す先、うしろをウエンディが見た。

「…あー、いつからいたんスカ？」

「ついさっきからだ」

そこには訓練を抜け出したウエンディを取り巻くように数人の女性

と少女が並んでいる。その中でも一際目立つのが、先ほどウェンディを連行した長身のトーレと、彼女と同じ程に背が高く、ピンクの長い髪の女性。頭には額当てのようなヘッドギアを着け、ただ何も言わずにトーレと並んでいる。

「つか： あれはテメーが湯槽に飛び込むから悪いんじゃないか」
その中でも比較的の小柄で赤い髪をショートカットにしている金色の瞳の少女が眉を吊り上げながら言った。
口調も若干苛ついているように思える。

「ノーヴェ、そういつまでも言うな」

ノーヴェと言う少女の隣にいる更に背の低い銀髪の少女が言った。
他の姉妹同様に同じスーツ、背が低く、別の意味で目立つ灰色のコートを着用していた。左目は金色の瞳、右目には眼帯がつけられている。

「チンク姉：」

「お前の方が姉なのだぞ？ 妹をそう責めるな」

「…ごめん」

銀髪の少女“チンク”に言われると、赤髪の少女“ノーヴェ”もシユンとしてしまった。

『ノーヴェもチンク姉には弱いッスね』

『まあ、自分を世話してくれた教育担当なんだし： てか、それを

本人に聞かれたらヤバイよ？」

二人を見ていると、つい笑ってしまったウエンディとセインが念話で話すが、その目線の先にあるのは、外見的にも身長的にも姉とは思えないチンクが、自分よりも外見も身長も上であるノーヴェに姉とは何たるかを教えている光景があった。

端から見れば、妹に説教されている姉だが、実際は逆である。

「いいか、ノーヴェ？　姉とはだな……」

『…チンク姉』

『説教始めちゃったツスね〜』

チンクが見た目とは合わない古風な口調で淡々とノーヴェに説教するが、その光景をセインは何とも言えない顔で、ウエンディは和みながら見ている。

他の姉妹であるトーレ達も黙っていたが、チンクの喋り終わると、

「さて、話はこれくらいにして休憩にでもするか……」

ぞろぞろと数人が進み、椅子に腰掛ける。

「チンク姉、何か飲む？」

「そうだな。紅茶でももらおうか……」

聞いて来たノーヴェに軽く応えようと、彼女も「わかった」と言い、尊敬しているチンクの為に準備を始める。

「トーレもどうだ？」

「ああ、私もそうしよう。セツテもいるか？」

「いえ、私は結構です」

聞いて来たチンクにトーレも応えたが、ついでに聞いたピンクの髪の女性“セツテ”は無表情のままわりと低いトーンの声で遠慮する。

「…そうか。まあ、立っているのもなんだ。取り敢えずは座れ」

「このままで構いません」

一瞬、間が空いたが、座るように言うトーレの言葉もセツテは拒む。

『うわゝ』

『出たよ…』

ウェンディとセインが念話で話しているが、彼女達の顔は引き吊り、額から一筋の汗が流れ落ちる。

「前にも言った筈だぞ。お前は機械的すぎる」

「はい。そうおっしゃいました」

トーレが微かに顔付きが険しくなるが、セツテは表情一つ変えずに話す。

その言動も文字通り“機械的に”…

『セツテ“達”の感情希薄なのってクア姉の案なんスよね？』

『なんかそうらしいよ』

ウエンディがセツテから離れた席にいる彼女と同じ最後発組のオットーとディードを見た。

二人も感情表現は乏しいが、セツテと比べればましである。

深いブラウンの髪の短髪のボーイッシュな外見で、スーツの上にジャケットとズボンを着こんでいるオットー。

“彼女”と同じく深いブラウンの長髪にカチューシャを着けているディードが二人静かに座っていた。

ディードはオットーと違い、外見も明らかに女性である。

『なにもしてないッスね…』

『まあ、そう見えるけど二人の中では結構盛り上がってるのかもよ？』

オットーとディードは何も喋らずに、ただ椅子に腰掛けているだけだが、もしかしたらセインとウエンディのように念話を使って話しているのかもしれない。

「それは命令ですか？」

声に反応して振り向けば、まだ立ったままのセツテがトーレとチンクが座っている席の前に立っていた。

「いや、命令ではなく…」

「セツテ。お前にも自分の意見があるだろう？　言ってみろ」

いつまでも繰り返されている事にトーレは言葉に詰まってしまった。
だが、彼女の向かいに座るチンクが静かに言う。

「私に権限はありません。ただ命令に従って動くだけです」

セツテから返って来た言葉にあまりにも分かっていたものであり、
期待には裏切られた応えだった。

『マジで機械ッスね…』

『まあ、私達が知ったのもつい先日だし… チンク姉は昨日帰って
来たばかりだから知らなくて当然でしょ…』

「なに、突っ立ってんだよ」

声に気付けば、カップとティーポットを盆に乗せたノーヴェエがセツ
テの後ろにいた。

「ノーヴェエ…」

「ほら、チンク姉。お待たせ」

「ああ、すまん」

トーレがポツリと呟いたが、彼女はセツテの隣を通り過ぎ、テーブ
ルの上に盆を置いた。

それにチンクも笑みを浮かべて軽く言う。

「お前も座れ」

「それは命令ですか？」

ノーヴェが立ったままセツテに言うが、彼女はノーヴェと向かい表情なく言った。

「そうだよ」

ノーヴェが若干苛つき始め、口調にも現れ始めるが、セツテは相変わらずのまま。それどころか：

「あなたに命令権はありません」

この有り様だ。

「私に命令が出来るのはドクターと司令塔のウーノ、トーレとクアットロの上位の方たちです」

「んだと！！」

淡々と“機械”らしく話すセツテにノーヴェは怒りを露にしてテーブルに手を打ち着けた。

「ノーヴェ！」

盛大な音が響き、危うくテーブルからトーレの分のカップが落ちそうになるが、チンクは手にカップとポットを持ったままノーヴェを止めようとする。

「でも、チンク姉！！ あいつが……！！」

「セツテ、私からの命令だ。座れ」

ノーヴェが片手をテーブルに当てたまま左手で向かいのセツテを指差したが、これ以上問題が起きてしまう前にトーレがセツテに座るよう命令する。

「了解です。トーレ」

言われるなり、トーレはすぐに椅子に腰を下ろした。

それを見たノーヴェが更に怒りを募らせるが、チンクに宥められ、彼女も座る。

「ちっ： アタシの言うことは聞かないくせに：」

「お前も飲むか？」

苛々を残しながらもノーヴェ頬杖を突きながらがぶつぶつ言っているが、唐突にチンクが紅茶の入ったカップを差し出した。

「いや： アタシは：」

「セツテ、お前もどうだ？」

「遠慮しておきます」

せっかくチンクが入れた紅茶だが、受け取りたいが、ガラでもなくそれを受け取れないノーヴェ。

テーブルの向こう側でもトーレがセツテに紅茶をすすめるが、彼女は丁重に断ってしまった。

「やっぱりいる！」

セツテを見ていると、なんだが自分も彼女と同じような事をしている気になってしまったノーヴェが即座にチンクからカップを受け取った。

「そうか…」

急にカップを受け取り、それを冷まそうとしているノーヴェを見て、チンクが微笑ましく小さな笑みを浮かべた。

「やっぱりノーヴェはチンク姉に頭が上がらないツスね…」

「まあ、セツテなんかはさっきからずっと断ってるよ？ あれ？
今なんか“水で十分”とか言った？」

念話から普通に喋る事に切り替えたウェンディとセインだが、またセインが機械的な返答しか繰り返さないのに仕方無くトーレが「何か飲め」と言ったところ、彼女はそそくさと何処かに行き、水の入ったグラス片手に元の席に着く。

「あちやゝゝ… やっちゃたツスねゝゝ…」

「水って… 水道の蛇口、捻っただけしかやってなくない？」

「でも、必要な栄養が取れば別に余計なもの食べたり飲んだりしなくても、いいんじゃない？」

ウェンディが顔を引き吊らせて手を額に当て、セインも呆れたよう

に力なく笑った。

彼女達と一緒に見てはいたが、今まで口を挟まなかったディエチが急に会話にまざるものの、そのポーカークフェイスから繰り出された台詞は思いの外、素っ気ないもの。

「ディエチも結構冷たいんスね？」

「そうかな…」

「そうッスよ！」

ウエンディがテーブルに身を乗り出し、項垂れているように頬をテーブルに押し当てながらディエチに顔を向けた。
下から向かってくる視線にディエチが引きぎみ。

ウエンディはテーブルに頬を当てたまま頷いた。

「だって暗いし、あんまり喋らないし、喋ってもすぐ会話が終わっちゃってつまらないッスよ！ そりゃ、オットー達と比べれば喋ってるッスけど…」

ウエンディがだらしない姿勢のまま、彼女から見た“ディエチ”を語り出す。

「でも、そんなんじゃないッスよ！ ノーヴェなんか良い手本ッス！」

「ん？」

ウエンディがテーブルにバンツ！と、両手を叩き付けて上体を起こした。

そして、そのまま離れた席でチンクと共に紅茶を飲んでいるノーヴェを指差す。彼女も熱烈に語るウエンディに気付いて彼女を見た。

「あんなにうるさくて、よく喋る動員はナンバーズの中でもノーヴェエしかないッス！」

「誰がなんだと!!?」

また怒りを露にするノーヴェだが、突然飛び出した影：“オットー”と“ディード”によって止められる。

「ほら！」

「いや： ノーヴェだけじゃなくて、実際はウエンディと：」

ウエンディがやたらハイテンションでいるが、ディエチが微妙な顔でノーヴェからウエンディに、そして：

「あれ？ 今、私見た？」

セインを見る。

「ウエンディイイ： テメエエエエ：!!！」

ノーヴェはオットーとディードにより、羽交い締めになれているが、彼女が睨み付けるその先にはセインと共にディエチに講義するウエンディがいた。

「ノーヴェ姉様、お止め下さい」

「姉は妹の手本をなるべくようにチンク姉さんから言われたんでしょ？」

「うっ…！」

ディードとオットーの冷静かつ、完璧なコンビネーションにより、ノーヴェは黙ってしまう。

「さっきのどう言う事ツスカ！？」

「ディイイイエエチイイイイイイ？」

ウエンディとセインに迫られ、ノーヴェとは違う意味で黙っている
ディエチが二人から目を背けていた。

「全く…」

「静かにしろ！！ みつともないぞ、お前達！！」

チンクがせつかくのティータイムを台無しにされてしまい、溜め息
を吐いた。

トーレも我慢の限界に来てしまい、椅子から立ち上がるとみんなを
止める為に声を張り上げる。

「…」

その瞬間、先程まで騒がしかった休憩室が静寂に変わった。

「我々はドクターの為に存在なのだぞ！！ はめを外すのは悪い
とは言わんが、それにも落ち度が…！！」

休憩室にいる姉妹達を見渡していたトーレが異変に気付いた。

「…クアットロはどこだ？」

「ああ、なんか何処かに行っちゃったよ？」

クアットロの行方をセインが応えるが、その返事にトーレは眉をピクッと反応させた。

「曖昧だな… 私はウェンディを連れて行ったから知らんが、あいつと一緒にいたのはお前達だろうが？」

「いや… そう言われても… ねえ？」

「ウリエルさんに会った後に、すぐ何処か行っちゃったんだけど…」

厳格な態度でいるトーレにビクつくセインが隣のディエチを見たが、彼女はさっきと打って変わっての態度に素っ気ない。

気にしているのか、それとも気にも止めていないのか分からないが、ディエチはセインを見ないままトーレに返す。

「ウリエルに…だと…？」

“ウリエル”の名が出た瞬間にトーレの表情が変わった。

分かりづらいが、恐らく動揺している。

金色の瞳の瞳孔が開き、微かに聞こえる呼吸音が短いリズムで刻まれているのが聞こえる…

「トーレ姉？」

「ウーノ！！ クアットロはどうしている！？」

セインがトーレの顔を除き込むが、彼女は声を張り上げてウーノを呼んだ。

トーレの様子にセイン達が首を傾げるが、ただ事ではないというのは分かる。

【クアットロなら自室に隠ってるわ】

「なら、ウリエルは！？」

【彼女はラボよ】

冷静に応えるウーノ。

クアットロがどうしているかという事に関しては分かったが、今度の問題はウリエルの方だ。

【ラボだと！？ 何故、研究室に…】

「ドクターが呼んだからよ」

薄暗い部屋の中でも緑色の半透明のキーボードを叩くウーノ。

彼女はトーレが映るモニターから研究室の映像が映っているモニターに目を向けた。

そこには、スカリエッティとアグナスと名乗った虫の悪魔、そしてウリエルが映っている。

【ドクターが直々にやつを！？】

「そうよ」

目線を戻せば、今度のトーレには明らかに動揺が見られた。

【何故だ!?!】

「それはドクターが彼女を必要としたからよ。忙しいから、もう切るわ…」

モニターの中のトーレが叫ぶが、ウーノは少し鬱陶しそうに通信を切ろうとした。

だが、彼女のISが“魔力”フローレス・セクレタリーを感知し、彼女の顔色が変わる。

「おい、ウーノ!!」

【文句なら後で聞くわ。それより、あなた達に見せたいものがあるのよ】

「見せたいもの?」

トーレが声を荒げるが、彼女は受け流してキーボードを叩き始める。セインも首を捻っている。

【そうよ。ドクターが適当にばらまかせた下級悪魔なんだけど…その悪魔達が故意か偶然か“群れ”をなしたみたいで…】

遂にキーボードを叩き終わり、最後に“転送”のキーをウーノが叩いた。

【この有り様よ】

「うひゃ〜…」

「すごい数ッスねえ？」

トーレやセイン達が集まる休憩室には巨大なモニターが浮かび上がった。

彼女達も悪魔の映像を見て、驚きや嫌悪を込めた声を漏らす。

「あれが最近、ドクターが戦力に加えた魔導生物か？」

「そうだよ…」

チンクがオットーとディードの二人に捕まったままのノーヴェを見るが、彼女はモニターを睨みながら侮蔑の眼差しでいる。

「言いたい事はそれだけか？」

【まさか？】

トーレの目付きが鋭くなるが、彼女の前に浮かび上がっている小さなモニターに映るウーノは目を閉じ、首を横に振った。

【この付近から強力な魔力が感知されたのよ。恐らくは…】

「魔剣士の血族か!？」

【その通り】

ウーノの目が何を言いたかったのか察したトーレがハッとしたように目を見開く。

ウーノも彼女の言葉を聞くと、静かに頷いた。

「えっ…」

「マジで？」

次に驚きの声を上げたのはディエチとセイン。

「何の話をしている？」

「ドクターが最近、目をつけてるやつらだよ」

「二人の男ッス」

急に収集が掛かり、昨日戻って来たばかりのチンクが聞くと、傍に
いるノーヴェが、離れた所にいるウエンディが教えた。

「一人は赤のコートを纏った男で、大剣を背負い、二挺拳銃を扱う
ハンター狩人です」

「もう一人は深い紺色… と、言うよりも黒いコートを纏った男。
こちらは剣と銃のデバイスを使います。新しい情報では片刃の剣を
使うとか。それに…」

【ほら、どうした!!】

チンクにハンターであるダンテと黒騎士のネロの事を説明していた
ディードとオットー。

オットーはネロの説明の途中だったが、突然モニターから聞こえて
来た声に説明を中断した。

【デカイのは図体だけかよ!?!】

ダンテの周りには無数の悪魔の死体が元の塵に戻るか、消え去って行くが、今の彼は10体に及ぶ“サイクロプス”と言う蜘蛛の悪魔に囲まれていた。

いや、もったいたのかもしれない。彼の口振り、足元にある悪魔の残骸には“サイクロプス”と思われる悪魔の体の一部があったのだから。

「あれがハンターです。チンク姉様」

「ハンター…」

デイドがチンクの隣まで来るが、二人の身長差は結構大きい事が判明。

【Cut!!!】
カット

いきなりダンテは正面にいるサイクロプスに飛び上がりながらの斬りつけ《ハイタイム》を食らわせる。

「…セツテ… よく見ておけ…」

「はい」

トーレは隣にいるセツテを見たが、彼女はトーレを見ず、言われた通りにモニターを見続けていた。

モニターのダンテは、更には悪魔の背中に乗って滅多斬りに… 他の悪魔に飛び乗っては剣を頭と胴体、又は胴体と腹の間の部分に突

き刺した。

…

「…うわ…」

顔を引き吊らせているのはウエンディ。彼女の隣にいるセインも同様である。

「…魔剣士…」

ディエチが胸を抑えながらモニターに映るダンテを睨むか、時折目を反らすかのどちらがだった。

先程から僅か10秒も経過していない。文字通り“秒殺”。彼女はその戦いぶりを見て、不意に口から“その肩書き”が漏れた。

【なんだなんだ？ 弱っちいのはいつも通りかよ？】

ダンテが大剣を片手で持ったまま、大袈裟に腕を広げる。

だが、土塊に戻ったと思われた《サイクロプス》の破片が集まり、10体… いや、やはり10体以上いたであろうサイクロプスの集合体が完成した。

【ハハッ！ こいつは新しいパターンだな！】

モニターに映るダンテは微塵にも恐れていない。むしろ喜んでいる。

「笑ってるツスね…」

「うん…」

一緒にテーブルにいるウェンディとセインが目を釘付けにしているが、ディエチだけは時折目が合わせられなくなっていた。

「只の強がりだろ！」

「いや…」

ノーヴェが腕を組んでそっぽを向くが、チンクは冷静な目でダンテを見る。

「あの自信… 態度もふざけているように見えるが、かなりの経験と実力を持つからこそ出来るものだ…！」

「よく知ってるさ…」

チンクから見たダンテの評価はかなり高い… が、実際にその通りのものであった。
彼女のダンテに対する評価にトーレも賛同する。

「私もやつにしてやられた…」

トーレは左肘の部分だけ固有武装の《インパルスブレード》を発動し、チンクに見せた。

それを見た彼女も言葉を失ってしまう。無理もないだろう。空戦オバーSランクの実力を持つトーレが油断したとは言え、ダンテに武装の一角を破壊されたのだから。

「お前ほどの者が…？」

「…ああ」

チンクが砕けた紫の刃からトーレに目を戻すが、彼女も真剣な顔でチンクを見ている。

「確かに、あの男の剣技はかなりのものだが…」

【よっと！ どうした？ このウスノロ！！】

モニターを見れば、ダンテは巨大なサイクロプスの体当たりや、口から吐き出される土塊をかわしつつ移動… いや、何処かに“誘導”している。

「いや、私は銃でやられた」

「銃！？」

「…私も」

「ディエチもか！？」

次々に明かされる事に驚きを隠せないチンク。

「魔力で形成された刃を破壊するとは…」

「肉眼では確認出来ない程の遠距離からの射撃も可能のようだが…」

思案しながら考え込むチンクとトーレだが：

「チンク姉！！」

「どうした、ウェンディ？」

ウェンディに呼ばれて顔を向けるチンク。

「ハンターが観念したみたいだよ」

ノーヴェもムスツとした様子でいる。

「あれ程の男が幕切れか？」

「だから、チンク姉は買い被りすぎたんだよ。あんなやつ、大したことねえってば」

モニターに映るダンテは剣を背負い、腕組みしている。

「でも、なんか言ってたよね？ “お前を倒すのは俺じゃない”とか、“鬼ごっこは止めだー”とか？」

「だから、それを強がりって言うんだよ！」

セインが言うが、ノーヴェは鼻で笑っていた。

（“俺”じゃない…？）

チンクの頭の中でその言葉が引っ掛かった。
そして、オットーの説明の途中だった話を思い出す。

——もう一人は：

その言葉が決定打になった。

「オットー！」

「はい」

チンクが後ろにいるオットーの方を振り向きながら名前を呼んだ。
それにオットーも静かだが、すぐに応える。

「もう一人いると言ったが： その男はハンターと共に行動しているのでは：」

【あばよ！】

チンクがそう考えたが、モニター越しにダンテの声が伝わる。
彼は腕を組み、不敵に笑いながら、この蜘蛛の悪魔を地獄に導くであろう“もう一人”の狩人の到来を待ちわび：

【Double ダブルダウン down!!!】

それは実った。

「なに！？」

「ええっっ！？」

画面を通して聞こえて来たのは若い男の声だ。

何が起こったのか分からないが、サイクロプスの体に亀裂が走って行き、事態が飲み込めないノーヴェとウェンディが大きな声を出す。

「今の声って…」

「ああ、間違いない…」

「黒騎士…」

セインがトーレを見ると、彼女はモニターから目を離さずにセインと同じ考えを…そして、ディエチも“あの声”の主は黒騎士^{ネロ}のものだと確信する。

「黒騎士？」

「はい。ドクターが目をつけたもう一人の人物であり、右腕に異形の力を宿した若き騎士…」

【遅かったな？ 遅刻だぞ？】

【あんたが早すぎるんだよ】

チンクに先程の説明の続きを始めるオットー。

モニターの中ではダンテが見上げるようにして、サイクロプスの背中に乗っているネロを見ていた。

「“黒”の名を持つ者…」

【まあ、安心しな。遅れた分はちゃんと働くからさ？】

続くネロの話を黙って聞くチンク： いや、ディエチやセインも、ノーヴェとウエンディも聞いていた。聞いていないのは既に知っているトーレくらいだ。セツテも聞きながらモニターを見ている。ネロもサイクロプスの背中に乗ったまま、突き刺したレッドクイーンを抜くと、それを肩で担いだ。

「それが…」

【それに…】

オットーとネロの言葉が重なり掛けた。コンマ数秒の誤差でオットーの方が先に喋れたのだろう。

【塵と灰に返すのなら得意だぜ？】

顔の前まで上げた《悪魔の右腕》がネロの言葉に呼応するかのよう
に、一瞬、ボウツと青白く光った。

彼の姿に時に見とれ、時には獣を見るかの様な眼差しが向けられていた。

「オットー？」

チンクに呼ばれてハツとしたオットー。我に変えるなり、話を再開する。

「すみません。彼は“黒”の名を持つ者、《黒騎士》なのです」

【さてと…】

【二丁始めるか？】

ネロはレッドクイーンを担いだまま、ダンテはフツと笑ってみせ、
無数の悪魔の群れの中に飛び込んだ…

Episode..44 **Blood of Sparda** **〈魔剣士の血族〉**

うわゝ… 夢中で書いてたら、なんだか長くなっちゃいましたね…
すこいゃ…

〈第45話予告〉

高き空からの視察者…

「あれがスカリエッティの言っていたハンターと騎士か…」

「旦那あゝ…」

その者、槍騎士と、烈火の剣精…

「一度手合わせしてみたいものだ…」

彼の瞳は何を写す…

E p i s o d e . . 4 5 〱 交渉と約束 〱 気まぐれと義理 〱 〱 (前書き)

交わしたものは口約束…

気まぐれか、彼なりの正義か…

義理か、彼なりの誠意か…

Episode..45〈交渉と約束へ気まぐれと義理〉

「スターズ、ライトニング、共に降下しました」

「状況は？」

ダンテ達が舞い降りた廃棄都市の戦闘状況を部隊長補佐であるグリフィスに知らせるルキノ。

「先に突入した隊長四名と…」

【うおらああっ!!】

彼女の隣で状況を知らせようとするアルトだったが、巨大モニターから聞こえて来た声にキーボードを叩く手を止め、複数いるロングヤードの皆と同様に顔を上げた。

【こっちだよ!】

モニターには空から砲撃を放つのはや、金色の魔力刃をバルディシュから放つフェイトが、バリアジャケットを纏ったスバル達が映っている中で一際目立っていたのはダンテの映像。

「ダンテさん!？」

【どうした、ウスノロ!】

はやての隣にいるリインが声を上げるが、彼は巨大な蜘蛛の悪魔の攻撃をかわしつつ、一定の距離を取っていた。

「部隊長!!」

グリフィスははやてに指示を出すように促すが、彼女は黙ってモニターのダンテを…

【はあああああっ!!!!】

いや、ダンテとネロを見ている。

「ネロさん!?!」

「そう言えば、彼バリアジャケットを着ていないんじゃない?」

同じくロングヤードの中にいたシャーリーがネロの映し出されたモニターを見て声を上げる。

彼はレッドクイーンの切っ先を地面に向け、更に《イクシード》を発動していた。ネロのデバイスにバリアジャケットの装着機能を組み込んでいないのをシャーリーから聞いていたグリフィスが慌てるが、はやては動じず、モニターを見つめていた。

(あのダンテさんの動き…)

「シャーリー!!」　ダンテさんとネロさんの現在地、モニターに出して!!」

今まで沈黙が続いていたはやてが、突然大きな声を出した。

「え!?!」

「早く!」

【さてと…】

自分に指示されたのに呆氣に取られてしまったシャーリー。はやてが急かすが、ネロが地面にこのまま激突するまで目前。彼の雄叫びがモニター越しで伝わる中で、違うモニターに映るダンテが集合体サイクロプスから逃げるのを止めた。

「は、はい！」

【鬼ごっこもここいらで止めだ…】

シャーリーは急いではやての指示通りに動き始め、モニターのダンテは剣を背負い、目の前にいる巨大蜘蛛を見上げている。

【…お前は俺を殺したいんだろうが…】

モニターの中のダンテは腕を組み、何故か不敵に笑っていた。グリフィス達には彼がどうしてこんなに呑気でいられるのか理解出来ない。

だが、ダンテは剣を仕舞い、迫り来る悪魔に悠々と話し掛けていた。

【お前はお前を殺せないし、お前を倒すのも俺じゃない…】

「ダンテさん！！」

「出ました！」

集合体サイクロプスが元の体ほどある巨大な前足を空高く振り上げた。

しかし、それでもダンテは動かずに、空を見上げている。
流石にこのままでは不味いと考えたグリフィスが声を張り上げたが、
ダンテの映るモニターの横に、シャーリーが解析したデータが出て
来た。

「部隊長!？ これは？」

「やっぱりな…」

【そおら… 来たぜ？】

出て来たものは、はやてが指示した廃棄都市内にいるダンテとネロ
の現在地を表すもの。

ダンテを表す赤い点と、ネロを表す青い点はほぼ密着していた。

ダンテの口元が吊り上がり、皆の注目がモニターに集まる。

【お前に不吉を届けに来た…】

【あああーーーーー!!!!!!】

ネロのレッドクイーンから更なる炎が噴き出し、真紅の矢となり…

【黒猫がな？】

【Double down!!!!】
ダブルダウン

「なっ!!!？」

「流石や…」

サイクロプスの背中に突き刺さった。

レッドクイーンが食い込んだ場所から亀裂が走り、それを見たグリフィスに驚愕を、はやてに微かな笑みが浮かぶ。

「すごい…！」

「アンノウン、沈黙しました！」

驚きの声を静かに上げるルキノ、そして状況を伝えるアルト。

「分かってたんですか…？」

「もしかしたら思うたんやけどな？」

振り返り、聞いてきたシャーリーに微笑みながら応えたはやて。

「部隊長…」

「まあ、昼間の二人の戦いを見とったし、それに…」

グリフィスの額から一筋の冷や汗が流れた。

『あなたって人は…』

グリフィスはそう言いたかったが、彼の前にいるはやての話は続く。

「あの二人なら…って思うたし？」

「はあ…」

はにかむはやてだが、それを聞いたグリフィスが困った顔で相槌を打った。

それは二人を信じているからか： 二人には同じ血が流れているからか： それとも：

「：イス君」

：二人が“悪魔”だからか： 悪魔なら簡単にやってのけると部隊長は考えているのか：

「グリフィス君！」

「え？ はい！」

思案していたグリフィスだったが、聞こえて来た声に我に返る。

「戦闘中やで。あかんよ？ 部隊長補佐なんに、ボーツとしたりったら？」

「すみません：」

彼を呼んでいたのははやてだった。心なしか睨んでいるようにも思える彼女を見たグリフィスが、申し訳なさそうに言う。

【よし、坊や！ 始めるか！】

【ああ：】

「部隊長：」

モニターのダンテとネロは二人並び、300を軽く越える悪魔の群れと向かい合っていた。

それを見たグリフィスが不意にはやてを呼ぶ。

「なに？」

それにはやてもグリフィスを見た。

彼女は椅子に座ってグリフィスの方に顔を向けるが、彼は立ったままモニターを見ている。

「部隊長は彼らを信頼してるんですね… やっぱり…」

「まあな？」

心無しか躊躇しているようにも思えるグリフィスに当たり前かのように応えたはやて。

「彼らが…」

そこで彼は一度区切り、息を飲んだ。はやての顔付きも変わり、グリフィスを見詰める。

「…悪魔なのに…」

「グリフィス君！」

「ですが!!」

慎重に言葉を選びながらも彼が口にした事を少し険しい顔で咎めるはやて。

だが、それでもグリフィスはまだ言いたい事はあった。
彼の声に反応し、皆の視線がグリフィスに集まる。

「あかんよ？ それ以上ダンテさんとネロさんを悪く言うたら、ウチも怒るで？」

何か言いかけたグリフィスだったが、はやての言葉に止められてしまう。

「…申し訳ありません」

少し腑に落ちないグリフィスが静かに言うが、モニターに映るダンテとネロ、そして前線メンバー達が制圧するべく悪魔と戦っていた。

「グリフィス准陸尉？」

「…なんですか、リイン曹長…？」

リインが少し悲しい顔をした後に、決意を固めてグリフィスの隣まで飛んで来た。

グリフィスは彼女を一度見たが、目をモニターに戻して少し暗い返事で言う。

「グリフィス准陸尉は、ネロさんとダンテさんの事が信じられないんですか？」

リインの言葉に一緒動揺が見られたが、彼は応えずにモニターを見ている。

「駄目ですよ。信じてあげなくちゃ！ あの二人を悪く言う人はリ

インが許しません！」

小さい体で精一杯胸を張りるリイン。それにはやてが何とも言えない微妙な顔で見ている。

「リイン曹長は信じてらっしゃるんですか…？」

「当たり前です！」

「二人が…」

グリフィスがリインを見た。

彼が躊躇いつつも言う事に全力で応える彼女だが、またグリフィスがはやてを見た。

彼はまた“悪魔”と言おうとしている。

が、はやての鋭い眼孔が光っていた。

「あの人達は“人間”です！ 誰よりも“人間”らしい人達です！」

今日、ダンテがネロに向けて言った言葉。リインはそれを聞いているのだが、不信を抱くグリフィスに向け、彼女はその台詞を口にする。

「人間…」

「そうです！」

【ネロさん！】

指令室にいた全員の注目が注がれていたリインとグリフィスだが、

巨大モニターから聞こえて来た声に、彼女達は振り向いた。

【スバル！】

悪魔と戦っていたネロとダンテの元にスバル達が駆け寄る。

【よお！ 未来が楽しみの嬢ちゃん！ どうした、そんなに慌てて？】

ダンテの言葉に一々、気が抜けてしまいそうになるが、言われたスバルが少し照れて頬を掻き、彼女の姉のギンガとパートナーのティアナは何とも言えない様子。そしてエリエとキャロは慌て、フリードが溜め息を吐いた。

【いや： 悪魔が全然減らないから、みんなで倒す作戦をティアが考えたんですけど：】

ネロの振るった拳を軽くかわしたダンテに顔が引き吊りそうになってしまうスバル。

【へえ： こっちの将来楽しみな嬢ちゃんが：】

【一々、変な事を言うな！】

ティアナを見たダンテ。その隙を突いて下段蹴りを繰り出すネロだが、これも軽く跳んでかわされてしまった。

「私も、はやてちゃん： マイスターも彼らを信じます！」

【で？ 作戦ってなんだよ？】

【あんたを見てたら、こっちが恥ずかしいんだよ!!】

全力でダンテとネロを信じている事を語るリイン。

モニターの向こう側ではネロの拳を全て捌くダンテがいた。

「たとえ人と違う所があっても、彼らには心があります!!」

【それで、作戦なんですけど…】

【おおっと！ 中でも特に期待出来る嬢ちゃん！】

【一々、言うなって言っただろ!!】

熱く語るリイン。

モニターでは前に出て来たギンガを見て、はしゃぐダンテに拳が空を切るネロ。

「誰よりも気高く、誇り高い魂を持っています！」

【あの…】

【悪いな？ 気の短いやつでさ？】

【あんたのせいだよ!!】

握った拳を胸に打ち付けるリイン。

顔を引き吊らせたティアナが出て来たが、ダンテがネロにベッドロックスをキメていた。

「だから、私は信じます！ それでもあなたは彼らを信じられないんですか！」

「リイン曹長……」

【作戦なんですけど……】

【おおっと！ そうだった！】

胸に当てた拳をほどき、振り払ったリインと、口から言葉を漏らすグリフィス。

モニターのティアナに気付いたダンテがネロを解放した。放してもらい、ダンテを見たネロが舌打ちする。

「……分かりました」

グリフィスが静かに言う。

ふとモニターを見たはやてやシャーリーが目にしたのは、空を舞いつつ悪魔を倒して行くのはとフェイト、斬り捨て、討ち滅ぼすシグナムとヴィータ達が…… 作戦を聞いているフォワードメンバーとダンテとネロが映っていた。

雰囲気は飲まれていた為、モニターの様子に、指令室にいた誰もが気付いていない。

「僕も自分なりに彼らを信じます」

少し暗さは残っていたが、モニターに顔を向けたグリフィスを見たリインがはやてを見る。

彼女は半分、何とも言えない様子で笑っていた。

「さすが、ウチの自慢の子やな。リイン？」

「はいです！」

はやてとリインを見たグリフィスが、微笑ましい二人を見て小さく笑った。

そして、顔付きを変えて指示を促す。

「現状はどうなっている！？」

「アンノウンの数は確認出来る数でも387。内、大きいのは135。小さいものでも252。その他複数！」

「すぐに隊長陣とフォワードに知らせろ！」

即座に応えたシャーリー、それを聞いたグリフィスがデータを送るように言った。

「さあ… こっからが正念場や！」

「はい！」

はやてとリインの二人も士気を高め、喝を入れる。

…

【通信です】

「はやてから？」

「レイジングハート！」

【出します】

背中合わせのフェイトとなのはが互いのデバイスに送られて来た情報
報を聞き出す。

「レヴァンティン！」

【了解】

「今の所のアンノウンの数と反応が集まってる場所か？」

【はい】

シグナムとヴィータのレヴァンティンとグラーフアイゼンが彼女達
に知らせた。

「…と言うものなんですが…」

【ロングアーチからの情報です】

集まっているフォワードメンバー、ギンガ、ダンテとネロに作戦の
説明を終えたばかりのティアナ。

丁度そこに、クロスミラージュが悪魔の情報を送られて来た事を彼
女に知らせる。

「なんかその銃、喋らなかったか？」

「喋ったよ」

高い位置から顔を覗かせるダンテにネロが面倒臭そうに教えた。

「インテリジェントデバイスのクロスミラージュです。出して」

両手に持つクロスミラージュの内の一挺を上げるティアナ。

【確認された数は387。アンノウンの大きい反応が135、小さい反応が252】

「すごい数だね…」

クロスミラージュから放たれる電子音と共にクリスタルがオレンジ色に点滅する。

聞いたスバルが悪魔の数に呟く。

【まだ増えているようです】

「らしいな？」

付け足したクロスミラージュだが、それにネロも腰のホルスターからブルーローズを抜いた。

「え？」

「呼んでるやつがいれば、増える一方だし」

収束された青白い魔力弾をネロが撃ち出した。

一瞬の出来事にギンガがその先を見る。悪魔《ヘルⅡグリード》の頭が吹き飛び、手にしていた巨大な棺が他の《セブンⅡヘルズ》の頭上に落ち、塵に返した。

ダンテもそれに不敵な笑みを浮かべる。

「掃き溜めが387ね…」

「ようはザコの集まりだな」

ダンテがエボニーとアイボリーのカートリッジの中の銃弾を見るが、各銃にそれぞれ10発程度。弾切れは目前だ。ネロはブルーローズを左手に持ったまま鼻を掻く。

「掃き溜め…」

「ザコって…」

ダンテの言葉をスバルが、ネロの言葉はティアナが復唱する。彼女達の前にいる銀髪の男二人は自分達の周りで悲鳴、雄叫び、奇声を放つ悪魔達を見回していた。

「オレンジ髪の嬢ちゃん」

「ティアナだって言いましたよね？」

「ティアナ。さっきの作戦だけだな…」

ダンテが銃を腰のホルスターに突っ込み、背負っているリベリオンの柄に手を伸ばした。名乗ったにも関わらず、ダンテが名前で呼ばないのに不服を言うティアナ。

そしてダンテは…

「却下だ！」

飛び掛かって来た悪魔を斬り捨て、残った下半身を蹴り飛ばした。

「え？」

「面倒だから嫌だって言ったんだよ」

ダンテの言っている事の意味が分からずにいるティアナだが、彼は自分の言っている事が分かってもらえないのに溜め息を吐き、リベリオンを杖代わりに突いてティアナ達の方を見る。

「そんな回りくどい事なんかしないで、潰しやいいんだよ」

「おい…」

ダンテが悪魔達を顎でさすが、彼の様子にスバルやティアナ達と同様に顔を引き吊らせていたネロが口を開いた。

「時間掛けてたら増えてくんだからよ？」

「せっかく考えてくれた作戦なんだし…」

「お前はやるか？」

ダンテの言う通り、空間から、地面から次々に悪魔が出現して来ていた。

ネロがダンテに歩み寄るが、彼は突然、ティアナからネロの方を向いた。

「そりゃ…」

「本音は？」

「言われた通りに…」

「正直な気持ちは？」

一応ティアナの作戦“固まって行動し、反応の大きい場所から潰して行く”ものに乗ろうとするネロにしつこく詰め寄るダンテ。

「で？ 本当はどうしたい？」

ネロが押し黙ってしまうが、言われた通りに動く筈のない“本当のネロ”を知っているダンテが彼を誘導して行く。

「首輪に繋がれてるのは嫌だろ？」

それにネロもティアナを見た。

「ティアナ… 悪いんだが、さっきの作戦… 俺は乗れない」

「ちょっと…！」

「悪い…」

バツの悪そうに言うネロに声を上げるティアナ。

それはそうだろう。民間協力者であり、次元漂流者にして悪魔の血を引く二人に好き勝手されたものでは堪ったものではない。

してやったり顔のダンテとは違い、本当に悪いと思っているネロは彼女に目を合わせられなかった。

「よし、そんじゃ…」

「待って下さい!!」

「勝手に行動させるワケには行きません!!」

リベリオンを手に、早速動こうとしたダンテをキャロとエリオが呼び止めようとするが…

「心配ならいらねえよ」

「ダンテさんだけの問題じゃないんです!!」

「ネロさん!!」

軽く手をヒラつかせるダンテの前に、槍を持つ小さき騎士が両腕を広げて止めようとする。

そしてキャロも動こうとしないネロに考えを改めさせる為に呼び掛けた。

「俺は言う事、聞くなんて言っていないぞ」

「ダンテさん!!」

「ネロさんも何か言って下さい!!」

リベリオンを肩で担ぐダンテに大きな声を出すエリオ。キャロも哀願するが、ネロも本能に従うか、理性で止めるか迷っている。

「止めろ…」

静かに言ったネロにスバル達の注目が集まった。

「なっ!？」

「ネロさ…」

突然、ネロがしゃがみ込み、エリオとキャロの肩を掴んで引き寄せる。

「あいつに下手な事を言うな…」

フリードが唸り声を上げるが、すぐにキャロが止めた。

ネロは真面目に言うが、彼の行動と光を放つ右腕がエリオの顔の前にある。

異形の右腕にしか目が行かないエリオとは対照的にキャロはネロの話聞いていた。

「認めたくないが、あいつは俺よりも強い。人に手は出さないが気まぐれだから、やるつもりだった事も頼まれたりしたらやる気をなくしちまう…」

「よく分かってるじゃねえか」

ネロは小声で話していたにも関わらず、ダンテには筒抜けだった。エリオとキャロを放し、一々口を出すダンテを彼は見た。

「分かるさ…」

ネロが少し苛立っているが、もめている場合ではない。

「ティアナ…」

深い溜め息を一度吐き、ティアナの方を向いた。

ネロの傍にいるエリオとキャロ、フリードを抜いたスバル、ティアナ、ギンガの三人が彼の言葉を待っている。

彼の口にする言葉は「作戦に乗る」ではなく、「好きにやらせてもらおう」だろう。

『ティア…』

『ティアナ…』

彼女はネロを見届けたかった。だが、彼らは言う事を聞かない。檻の中にも納まらず、首輪も鎖も必要とはしない“銀狼”だ。

スバルとギンガが念話を飛ばすが、彼女はただ黙ってネロを見詰めている。

「すまないが…」

「俺達の好き勝手にやらせてくれ」

ネロが躊躇いながらも言おうとしていたが、痺れを切らしたダンテが割り込んだ。

食堂では「茶々を入れない」と言っていたが、悪魔を目の前にして、これ以上時間を掛けさせるのは耐えられないようだ。

「お前と嬢ちゃんが話してる間にどんどん増えてんだぜ？」

「マッハキャリバー？」

【最新の情報ではアンノウンの数は411です】

ダンテが剣の切っ先を向ける先では、無数の悪魔が蠢いていた。スバルがマッハキャリバーに訪ねてみれば、数は既に400を越えている。

「だったら!!」

【ティアナ!】

「言う通りにして欲しい」。そう言いたかった。だが、それを言う前に彼女達の前に浮かび上がったモニターと声によって遮断されてしまう。

「八神部隊長…」

【ダンテさん…】

「なんだ？」

モニターに映っていたのははやてだった。彼女はモニターを通して見えるダンテの…

【ネロさん…】

「…」

ネロの名を呼んだ。ダンテははやてに軽く応えるが、ネロは合わせる顔がないようで、目を背けて何も言わない。

【二人が自由に動きたいと考えてる事は分かってます】

「いいよな？」

「…おい…」

モニターを通して画像と共にはやての音声が伝わる。

ふてぶてしいダンテにネロが小声で言うが、ダンテは剣を持ったまま両腕を広げてみせた。

【ダンテさんは正式に民間協力者になってませんが… ネロさんは正式に本人の了承を得た上で認められています。ですから…】

はやてはそこで言葉を区切った。彼女が次に言う言葉を皆がただ待っている。

【ダンテさんに勝手に動いてもらうわけには行きません】

「おいおい！」

はやての言った事に対してダンテが愚痴を漏らした。

好きに動けない上に、自分は動けない。このことを聞いたダンテが空を扇いだ。

「部隊長の嬢ちゃんよ…」

【ただし！】

空を見上げた状態でいたダンテだったが、はやての言葉にすぐ、モ

ニターを見た。

【正式に民間協力者として機動六課に手を貸してくれると言うのなら、お二人の自由行動を許可します】

「そんな!?!」

「部隊長?」

はやての言った事が理解出来ないティアナとスバルが驚きの声を上げた。

「八神部隊長!!」

ロングアーチのメンバーの注目が集まり、グリフィスが異議を唱えるが彼女はモニターに映っているネロとダンテを見ている。

「了承するのですしたら自由に動き回れますが、こちらの言う事と指示は聞いてもらいます」

【動きたけりゃ、言う事は聞けってワケか…】

ダンテが左手で顎の無精髭を触り、少し考えているが…

【メシにピザとストロベリーサンデー、着けてくれるか?】

考えていた時間は精々2秒。

彼は食堂のメニューに自分の好物を加えるよう、要求して来た。

「え…」

【食堂のメニューにピザとストロベリーサンデー、入れろって言うてるんだよ！ あ、ピザはオリーブ抜きな！】

ダンテの言っている事が分からないグリフィスだが、ダンテがモニターの前まで来たらしく、画面は彼で制圧された。

「…分かりました」

「部隊長！」

はやてが小さく笑っていた。グリフィスは言いたい事が山ほどあるが、彼女もダンテも聞かない。

「それじゃあ…」

【決まりですね？】

ダンテがモニターから離れ、彼の後ろにいたネロがモニターに映っているはやてを見たが、彼女は笑っていた。

【それじゃあ、ダンテさんも民間協力者として動いてもらいますよ？】

「はやて…」

嬉しそうにしているはやてだが、ネロは浮かない顔をしている。

【ネロさんは嬉しくないん？】

「いいのかよ…」

【ええに決まっとるやん！　ウチが言うとるんやで？】

モニターの中のはやてが胸を張って言うがネロは気になって障害ない。

「六課の中では一番偉くても、もっと上とかいるんだろ？」

彼女達がいつも言う事…

“機動六課”の部隊員である事の前に言う事…

「時空管理局とか言うのが…」

【気にしてくれとるん？】

「まあな…」

自由に動けるのは嬉しいが、どうも乗り気がしないネロ。

「俺が叱られるとかなら言いが…　俺達のせいで君が上から言われるってのは…」

【なんや、そんな事か…】

ネロが少し顔を俯かせてしまうが、モニターから聞こえて来た声に顔を上げた。

「そんなん気にせんでええよ。思いつきり暴れて来て」

【だけど…】

はやてが軽く手を降るが、モニターのネロは何か言いたそうにしていた。

「言っとくけど、六課ってのはな？ 元々、上の方から嫌われとる部隊なんやで？」

はやてが数回頭を掻き、ネロに六課の事情を打ち明けた。

「え…」

【せやから、気にせんでええ！ 問題事ならいつもの事や！】

不意に口から漏らしたネロだが、はやての言葉を聞いて、スバル達を見た。

「まあ… そうですね…」

「…上からは嫌われてます」

スバルが何とも言えないように頬を掻いたが、ティアナはまだ納得行かないでいた。

「六課が上層部からよく思われてないのって、結構有名な話なんですよ？」

スバルの隣にいるギンガも加わる。

「本当か？」

「はい…」

「本当です…」

ダンテの問い掛けにエリオとキャロが困った様子で応えた。

「知ってたか？」

「キュク」

ついでにフリードにまで聞くが、頷く白い飛竜の鳴き声を聞き…

「なるほどね…」

ダンテがただ頷いている。

「せやから、ほら！」

【…本当に好きに動いていいんだな？】

はやてが早く動くように椅子から立ち上がってまで促すが、モニターの向こうにいるネロは動こうとしない。

「アンノウン、450を突破!!」

「ネロさん！」

【掃き溜めが450だよ。妖精さんも言ってくれてるぜ？】

増え続ける悪魔の数を知らせるシャーリーとネロの名を呼びイン。皆が焦る中で、後ろに下がったダンテはリベリオンを地面に突き刺し、屈伸運動をしていた。

【はやて…】

「約束して下さい！」

ダンテの代わりに前に出て来たネロだが、はやてが真顔で言う。

「こちらの指示に従い、無茶はしないと言う事を…！」

はやての言葉は一言ずつ重い…

彼女の台詞をモニターの向こうにいるネロは黙って聞いていた…

「分かった… 約束するよ…」

ネロがモニターを背に、悪魔に向かって歩き出した。

「あ…」

「ネロさん…」

エリオとキャロの前を通り過ぎ、既に準備運動を終えているダンテの所まで歩き出したネロ。

「待ちくたびれたぞ？」

「すまない…」

リベリオンを背負い、腕組みしているダンテの隣に並ぶネロ。

…

【はやてちゃん…】

【本当に良かったの？】

ネロとダンテが映っているモニターの隣には隊長陣、各四名の映像が出ていた。

なのはとフェイトが浮かない顔をしている。

【主…】

【まあ、嫌われてるなは本当だしな。でも、良いのかよ？】

シグナムとヴィータのものもあるが、彼女達の言っている事を聞いてもはやての考えは変わらないらしい。

「あの二人ならきつとやってくれる。みんなも信じてくれとるんやろ？」

それに、束の間の沈黙が続くが…

【うん！】

【まあね？】

【はい】

【いや、あたしは…】

なのはが縦に首を振り、フェイトが笑みを。シグナムが瞼を閉じ、ヴィータだけは表情を変えていなかった。

「よっしゃあ！ それじゃあ、取り直して行くで！」

【認めてるんじゃないくて、見極め…】

改めて渴を入れるはやてだが、ヴィータのモニターが強制的に切れた。

「あー… アンノウンの数はもう500に行っちゃうし… アルト！ ルキノ！」

「は、はい！」

「何でしょうか！？」

はやてが少し考えた後、ロングアーチの一員であるアルトとルキノを呼ぶ。

「ネロさんとダンテさんに通信入れて、指示と状況、教える役やってくれる？」

はやてどころか、ロングアーチ全員の視線が二人に集まった。

「え…」

「私達が… ですか？」

抜擢されたので、思わず自分を指差すルキノ。

「ほら、ネロさんはデバイス持つとるけど簡易ストレージやし、ダ
ンテさんなんか質量兵器やん？」

はやての言った事に昼間の廃棄都市の戦闘を思い出した二人だが、
モニターに映るダンテは銃を仕舞っているままだ。
無論、腰のホルスターに納めているのだが、弾の温存か、今は必要
としていないだけか…

「せやから…」

つまり指示や呼び掛けをしようにも、このままでは不味い。

「…了解です！」

「私達が受け持ちます！」

アルトとルキノの返事を聞いたはやてが一瞬、キョトンとした。
無理もない、心無しか二人の目が輝いているように見えたのだから…

「…ほんならお願い！ 頼んだで！」

「「はい！」」

…

廃棄都市区画の遙か空高く… 雲よりも上空に人影があつた…

「あれがそうか…」

「旦那…」

深い茶色の布をコートのように着こんでいる大柄な人物… 声は低い。フードから覗いた顔も男性だ。手にした槍の刃に埋め込まれた黄色のクリスタルが月明かりで輝き… 彼の傍にはユニゾンデバイス、ルーテシアと共にいた“アギト”がいた。

「スカリエッティの言っていた魔剣士の血族…」

彼の前のモニターに映る二人の銀髪の男…

「ハンター…」

アギトがモニターのダンテを睨み…

「そして黒騎士…」

モニターのダンテとネロが二手に別れた。
男性はモニターでネロをズームに…

「荒削りだが、良い腕をしている…」

「敵を誉めてどうすんだよ、旦那あゝ！」

モニターのネロはレッドクイーンを抜き、群がる悪魔を次々に斬り捨てて行く…

「若き騎士…か…」

吹いた夜風が男性のフードを取らせ、姿を露にさせた。

「一度… 手合わせしてみたいものだ…」

その男性の名はゼスト・グランガイツ… ベルカの騎士にして、空戦Sランクの実力を持つ男である…

「旦那…」

彼の傍にいるアギトはただ、彼の身を按じていた…

Episode..45）交渉と約束へ気まぐれと義理＜）（後書き）

長いよ～… あれ、なんだかややこしくなって来たな…
でも、挫けずに描きます！

～第46話予告～

「じゃあ、坊やはあっちで…」

「あんたはそっちを頼む」

捨て去られし地を駆ける二匹の銀狼…

「イケてる嬢ちゃんのナビ付きだ」

突き進む銀色の狼…

「後で殴っていいぞ…」

【あはは…】

彼に取ってみれば、若き騎士はただの“黒猫”なのだろうか…

E p i s o d e . : 4 6 \ N a v i g a t o r 〈導く者〉 (前書き)

朽ち果てし地を駆ける二匹の獣…

彼らの研ぎ澄まされた感覚でも見つけられないものはある…

Episode..46 Navigator〈導く者〉

「さてと…」

「行くか？」

はやてから単独での自由行動が許可されたネロとダンテ。彼らは歩を進めながら、500に差し掛かろうとしている無数の悪魔と向き合う。

二人の後ろではスバル達が、空ではなのは達が悪魔と対峙しつつも彼らから意識を移し、目の前の敵に集中しようとしていた。

「反応がデカイやつもいるとか言ってたな…」

ネロが意識を集中し、瞼を閉じた。彼の視界は全て闇に閉ざされ、感じるのは下級悪魔の気配ばかり。更に意識を深くまで沈めようとしたが…

【失礼します】

聞こえて来た声により、彼は目を開けた。

【通信士のルキノ・リリエ二等陸士であります。この度、あなたのナビゲーターを勤める事になりました】

ネロの隣に浮かび上がったモニターには、六課のロングアーチの一員であるルキノが映っていた。

そして、同様にダンテの隣にも…

【同じく通信士のアルト・クラエツタです。私がダンテさんに指示と状況を伝える役を…】

「おおっと！ これまた将来が楽しみな嬢ちゃんだな？」

ルキノとアルトは画面の中で敬礼していたにも関わらず、ネロはただ無言で目だけを向け、ダンテはこのような事態でもテンションが高い。

【あの…】

「さっきの嬢ちゃん達もだが、君も…」

「おい!!」

モニターの中のアルトが困った顔で何か言いたそうにしているが、苛ついているネロが無駄に喋るダンテを止めた。

「…いい感じ…」

「目の前に集中しろ！」

ダンテがネロの方を向くと、彼は右手の人差し指で正面の悪魔達を指差している。

「ああ、そうだった」

何やら忘れていたように振る舞っているが、只のふざけか、彼だからその余裕か…

いずれにせよ、今の相手はモニターの少女ではなく悪魔である事を

認め、ダンテはりべリオンを抜いた。

「わりいな嬢ちゃん？ お喋りは後でな？」

【えと…】

不敵に笑ってみせるダンテだが、ルキノが何とも微妙な顔をしている。

「後もしだよ！」

ネロが眉を吊り上げているが、飛び掛かって来た悪魔に向けて蹴りを放ち、一瞬で塵に返す。

「たく… なに、考えてんだか… で？」

【え！？】

溜め息を吐くネロだが、彼は唐突にモニターに映るルキノを見た。彼の態度や行動に看取れ、呆気にとられていたのだが、いきなり聞いて来た事によって彼女も聞き返してしまった。

「状況だよ。悪魔の数とか、反応がデカイとか言ってたやつは？」

左手の親指で悪魔を指すネロ。彼らの前にいる悪魔は全て下級悪魔。簡単に言えば“掃き溜め”又は“ザコ”である。

【あ… はい！】

我に返ったルキノがすぐにデータを転送。モニターの隣には地形と

悪魔の位置を示す分布図が出て来た。

【一番近くのポイントはそこから北前方100メートルの地点。次に北西200メートルの地点です】

「真ん前か…？」

ネロは目を細め、右腕に意識を集中させるが大した反応は見られない。

「臭いもよく分かんねえな…」

【どうします？】

ダンテも自慢の鼻で臭いを嗅ぎ取ろうとするが、ネロと同じで下級悪魔のものしか感じ取れない。

彼の行動に少し首を傾げそうになっているアルトだが、彼女の声に反応し、彼は即座に顔をモニターに向ける。

【お二人で行きますか？】

「馬鹿言っちゃいけねえな。嬢ちゃん？」

聞いて来たアルトに呆れた顔をするダンテ。

「せっかく許可が出たんだ。一人に決まってんだろ？」

ダンテはリベリオンを持ったまま大袈裟に腕を広げた。

あれほど巨大な剣をよく片手で持てるものだと思っただと彼女は思っているが…

【宜しいんですか…？】

「ああ」

ネロの様子を伺うように聞くルキノだが、ネロはモニターを見ないまま頷く。

「一緒にやるより、一人で動いて数を減らした方がいいだろ？」

当たり前のように言っただけのネロの考えが理解できないが、彼女達はやってから出された指示を伝達し、状況を伝える事だけ。

「宜しいですか… 部隊長？」

「ええよ」

部隊長であるはやての方を振り向くルキノ。そして彼女と同様にはやてを見ているアルトだが、はやては椅子に腰掛けたまま指令室の後部で巨大モニターを見詰め、ネロとダンテの単独行動を許可した。

【もう行っているいいよな？】

アルトの前に浮かんでいるモニターの中のダンテが何やらそわそわしている。早く悪魔と戦いたいのだろう。

【どっちに行く？】

現地ではダンテの隣にいるネロがダンテの方を向いている為、彼はルキノのモニターを見ていない。

「坊やは近い方に行きな。俺は遠くの方に行く」

「なんであんたの言われた通りに…」

やたらと仕切るダンテにネロはうんざりしているが、彼の喋っている最中にダンテは速効で駆け出した。

「おい!!」

ネロが叫ぶが、ダンテは聞く耳を持たない。好きに暴れる事が出来なかった分、もう縛る物が無くなった以上はやりたい事をやるだけだ。

「年長者の言うことは聞けよ。坊やはそっちを頼むぜ?」

走りながらも軽卒に手をヒラつかせるダンテが悪魔の群れに飛び込んだ。

「年長者ならもう少しは自重しろよ…」

ネロが一度舌打ちした後、仕方なく前方100メートル地点の反応が大きいと言われる場所に向けて走り出した。

…

「あー… なんかもう疲れた…」

「まだ始まったばかりだよ?」

二人を見ていると無駄に神経を磨り減らしてしまう事に、椅子の背凭れに身を任せながら言うルキノだが、彼女のすぐ隣にいるアルトは小さく笑いながら言う。

「よくアルトは平気だね… まあ、私がダンテさんじゃなくて良かったんだろうけど…」

「ルキノがダンテさんだったら、ろくに話せないでしょ？」

キーボードを叩きながらも後ろのはやてに聞こえないように小声で話している二人だが、アルト自身が内向的なルキノを気遣い、自らダンテのナビゲーターを志願した。二人はどちらに通信を入れるかに関してアイコンタクトを取った時間は僅か2秒。

結果として社交的なアルトがダンテを、内向的なルキノがネロの通信士をしているのだが…

「まあ…ね…」

今は苦笑いしか出来そうにないルキノ。確かにあのダンテと話すなど彼女には無理だろう。

「話はこれくらいにして戻るよ？ 残りのアンノウン、数は…」

「390!？」

アルトとルキノが目にしたものは信じがたいものだった。

「何だって！ 誤作動か!？」

少し慌てるグリフィスだが、機械は正常。

「いえ、何処も異常ありません！」

「アンノウンの反応が次々に減ってます！」

巨大モニターには悪魔と戦っている六課の前線メンバーが映っているが、彼女達の動きから見てもそれは有り得ない。

「あれは…」

事態に気付いたのはシャーリー。モニターに出ている悪魔の魔力反応を表す分布図から次々に反応が消えて行っているのは二ヶ所。つまり…

「さっそく二人がやっとするみたいやな？」

はやても予想以上だったのか、少し呆氣に取られている。彼女の隣にいるラインもモニターに映るシグナムやなのは達の事を按じつつ、ネロとダンテの事を気にかけていた。

「モニターに出せ！」

「了解！」

すぐに察しが着いたグリフィスと、キーボードを叩くシャーリーだが、悪魔の反応が消えて行く中で、巨大な反応を出していたポイントの所で止まった。

「あれは!?!」

【ああああー！！！！】

不意に声を上げたグリフィス。モニターの中に映るネロの隣には巨大な青白い右腕が出現している。

彼は周囲の悪魔を薙ぎ払い、斬り捨てながらも反応が強いポイントに到達していた。

「もう!？」

「早い！」

驚きを隠せないルキノとアルト。跳躍と重力の掛け合わさったものに腕力が加わり……振り抜かれたデビルブリンガーが悪魔“ヘルⅡヴァンガード”に……

【寝てろ!!!】

いや、“セブンⅡヘルズ”と“ヘルⅡヴァンガード”が混ざり合った巨大な悪魔の眉間に打ち付けられた。

サイクロプスの時と同様に、倒した筈の悪魔達が組み合わさった事で出来た集合体悪魔の体が大きく仰け反るが、これくらいでは終わるそうにない。

「アンノウン、健在です！」

「あれでも効かない……！」

モニターの中の巨大悪魔は上体を戻そうとしている。
事態を知らせるルキノの声が指令室に響き、呟くように言ったアル

トだが…

【しぶといんだよ!!】

空中で無防備な体勢からレッドクイーンを抜き、《イクシード》を発動。真っ赤な炎を噴き出しながらも推進力と遠心力を組み合わせながらの《ルーレットスピン》…

【オネンネしてな!!】

渾身の力を込めた斬撃が、悪魔の頭から股に掛けて真っ二つに斬り裂いた。

「すごい…」

「アンノウン、完全に沈黙！」

不意に声を漏らしたルキノだが、彼女と同じように呆気に取られていたアルトがハツとして状況を知らせる。

モニターに映るネロは地面に埋まったレッドクイーンの切っ先を抜いて土と塵、そして血を振り払った。

「…ダンテさんは？」

「あ！」

ルキノに言われて気付いたアルトだが、分布図の反応が次々に消えているものが反応の大きい場所で止まっている。おそらくは…

「こっちも!?!」

「まだ別れて一分も経ってないのに…!」

慌ててキーボードを叩くアルトとルキノ。そして映し出されたものは…

【はああああああっ!!!】

悪魔達が無秩序に混ざる集合体に神速の突き《ミリオンスタップ》を繰り出すダンテの姿。

人間離れした彼の身体能力と驚異的な速度の剣技によってなせるもの… 決して相手に休ませる隙など与えない。悪魔は悲鳴を上げ、何も出来ないまま体を削られて行く。

【B l a s t o f f (吹っ飛べ)!!!!】

最後の強烈な突きにより、悪魔の巨体が後方に大きい吹き飛ばされた。

「あんなに大きなものを!?!」

「でも、まだ反応は…!」

【T r i c k ! !
トリック】

吹き飛びこしたものの、悪魔はまだ死んではいなかった。

その巨体を蠢かせ、立ち上がろうとしている。

驚いてばかりのルキノとは比較的冷静なアルトだが、ダンテの声に反応してモニターを見るが、彼の姿がない。

「消えた!?!」

「え?」

アルトよりも見るのが早かったからか、ルキノにはダンテの姿が消える瞬間が見えていた。

「いや… 消えたんやない…」

モニターをずっと見ていたはやての少し低い声で喋るが、それは近くにいるグリフィスとリインにしか聞こえていない。

「目で追いつけへんくらいの速さで動いたんや…」

「はやてちゃ…」

昼間に廃棄都市での戦闘を見たものの、今のダンテの戦いぶりはやての予想を遥かに上回るものだった。

モニターを見るはやてにリインが声を掛けようとした瞬間…

【うらあああああああっ!?!!】

聞こえて来たのは紛れもなくダンテの声だ。

彼は高速移動により、一瞬で悪魔の頭上まで跳び上がり、両手で持った大剣を大きく振りかぶっている。

【Slash!?!!】

渾身の兜割り《ヘルムブレイカー》で文字通り頭を叩き斬られた悪

魔の巨体が揺らめき… そして倒れた…

「アンノウン… 反応がロストしました…」

「こちらも沈黙…」

ポツリポツリと言うルキノとアルト。モニターの中のダンテも剣を背負い、辺りを見回している。

彼の周りに悪魔の姿はない。

【おい、嬢ちゃん？ 見てるんなら返事しろよ？】

「え？」

どうやらダンテはアルトの通信を待っているらしい。

悪魔を倒そうにも反応は感じられるがどれも小さいものばかり。今の彼が頼りにしているのはロングアーチからの情報だ。

…

「聞ってるか？」

【はい】

辺りを見回していたダンテの前にアルトの映っているモニターが出て来た。

「来たか… イイ男を待たせるもんじゃないぞ？ 頼りにしてんだ

からな？」

【すみません… お待たせしてしまったようで…】

腕を組み、小さく溜め息を吐いたダンテに取り敢えず謝るアルト。ルキノだったら彼との接し方に戸惑っていたのだろうと思いつつ、話に戻る。

「まず聞くが、悪魔の数は？」

ダンテが最初に聞いて来たものは残りの悪魔の数だった。

【ダンテさんとネロさんの活躍で大分減ったようですが… 残りは大体370。大きい反応が147、小さい反応が223以上です】

「坊やと嬢ちゃん達の方はどうなってる？」

僅か一分でダンテとネロの倒した悪魔の数は100近くに及ぶ。彼らの戦いには感服するが、減っても増えて行く悪魔に微かに顔をしかめるアルト。情報を伝えてもらいながらも、モニターの隣に出ている廃棄都市内の悪魔の分布図を見ながら走っているダンテの姿と、彼から出された次の質問と名前で呼ばない事に疑問が浮かぶが、今はそれどころではないので問い掛けに応えた。

【ネロさんの方も反応の大きいアンノウンを倒しました。フォワードメンバーと隊長陣も交戦中です】

「坊やも？」

ネロ“も”反応の大きい悪魔を倒したとの話を聞き、ダンテがアル

トを見た。

【はい。先程ダンテさんが倒した反応の大きいアンノウンですが：どうやら反応が密集する事で大きくなっているようで、ダンテの倒したもので大きい反応がまとめて28：ネロさんの倒した大きい反応が32です】

「坊やの方が多いのか？」

アルトからの伝達にダンテは眉を吊り上げた。

【因みに、ネロさんが最初に倒したアンノウンなんですが、まとめて大きい反応が12減りました】

「なんだ：」

ネロが倒した悪魔“サイクロプス”が魔力の大きい部類に入ってしまう事にダンテはフツと笑ってしまう。

「あれでデカイうちに入るのかよ：」

【え：】

それはそうだ。サイクロプスなどの悪魔など他愛のない相手なのだから：あのような悪魔と自分が倒した悪魔が“大きい反応”と聞けば、笑わずにはいられない。

：

【失礼します】

「一々堅苦しい挨拶しなくていいよ… どうした？」

出てくるなり、畏まっているルキノを見たネロが呆れている。

彼は先程の悪魔を倒し、右腕の反応と己の勘を頼りに走っていたのだが、彼は足を止めずに話を続けるように言った。

【現在の状況とアンノウンの数をお知らせします】

ルキノの映っているモニターの隣には廃棄都市内の地形図と悪魔の反応を表す分布図がくみ合わさったもの、そしてフェイトやスバル達が悪魔と戦っている画面が出て来た。

【戦況はこちらの方が優勢。残りのアンノウンの数も330を切りました】

状況を伝えるルキノの隣のモニターに目を向けるネロ。
その中では自分と同様に戦う前線メンバーの姿があった。

【残りの反応の内、大きいものが119、小さいものが211…】

喋っている最中だったルキノだが、彼女は目線を移し、何やら下の方を見ている。

ネロも彼女の様子に首を傾げたが、その理由はすぐに分かった。

【いえ、大きい反応が98！】

彼の前に浮かび上がっている小さなモニターには、集合体の悪魔が

スバルとギンガのコンビネーション、ティアナの撃ち出した魔力弾、エリオのストラーダによる一閃とフリードの火球により悪魔を葬る姿がある。

【小さい反応197。その他にもいますが、残り300程です!】

「まだこれからってワケだな…」

ふと空を見上げるネロ。黒に染まり、月と星の光しかない筈の夜空には桜色の光と金色の雷、紫電と炎が見え、何かを叩き潰す轟音が聞こえていた。

「反応のデカイ場所は？」

【そのまま進んで下さい。あなたの現在地から前方500メートルの地点です】

「よし…」

どうやら自分の勘が当たっていたらしいと思うネロだったが、確認を取ると、更に走る速度を上げて廃棄都市の中を駆け抜けて行った…

…

「ヴィータ!」

「アイゼン!!」

【G i g a n t F o r m】

ヴィータの指示に呼応し、グラーフアイゼンのハンマー下の部分がコッキングし二発のカートリッジを排棄… ギガントフォルムに切り替わる。

「ぶちぬけええー！ー！ー！っ！ー！！！！！」

レヴァンティンの紫電一閃による熱で体を取り巻く血を蒸発させられた“ブラッドゴイル”が本体を晒され、人の体程ある鳥の石像と化した悪魔に巨大なハンマー《ギガントフォルム》のグラーフアイゼンによる一撃のもと、跡形もなく叩き潰された。

「なんだ… 悪魔もチョロいもんだな…」

小さな体で大きな槌を肩に担ぐ姿は異様なものだが、そのヴィータの姿に見慣れているシグナムが彼女の隣に並び、声を掛ける。

「そう言うな。これもネロの教えてくれた事だぞ？」

「分かってるよ…」

ヴィータはこれが悪魔との初めての戦闘になる。

思ったよりも呆気ない悪魔に拍子抜けしているが、ネロのもたらしてくれた情報である事がシグナムとヴィータの脳裏に横切る。

——汚れた血を媒介にする悪魔がいるんだが… そいつは斬っても叩いてもキリがない。体が分裂… 返って数が増えるだけだから…

「ほら。次だ」

「ああ」

シグナムに言われるまでもなく、次のブラッドゴイルの群れが鳥と言うよりも“蝙蝠”のように翼を羽ばたかせ、二人に向かって来ていた。

——銃弾や熱を帯びてゐるもので体の血を蒸発させてから叩く……!

「レヴァンティン！」

【nachladen】(装填)【

レヴァンティンも刀身と柄の部分がコッキングし、カートリッジを排莖…

「紫電……」

炎を刀身に纏い：

「閃!!!」

血を滴らせる異形に向け、その剣は振り抜かれた……

•
•
•

Haken Form

「はああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！つ！！！！」

バルディッシュのリボルバーが高速の回転の後にコッキング、カー

トリツジロードし、形状も斧の部分が展開して魔力で形成された金色の鎌に切り替わる。
ハーケンフォーム

「レイジングハート！ 援護お願い！」

【Y e r m y m a s t e r】

悪魔の群れに飛び込んで行くフェイトの援護射撃に無数の桜色の光弾が放たれた。
シューター
アクセル

【H a r k e n S a b e r】

「行けっ！！」

頭を撃ち抜かれた“シン サイズ”と“シン シザース”達の間を縫い、フェイトが狙いを定めて30体余りが集まった集合体悪魔に向けてバルディッシュから金色の鎌をブーメランのように振り飛ばす。

狙いも完璧。途中で《ハーケンセイバー》の軌道に飛び込んで来た悪魔を物ともせず巨大な悪魔の頭に刃が突き刺さり、断末魔を上げて体が崩れて行く。

「残りは？」

【全部で114。大きい反応が68で二ヶ所に別れています】

【一つがフォワードメンバー、もう一つが民間協力者の元騎士が交戦中です】

「ネロが！？」

戦闘開始から僅か数分しか経過してないにも関わらず、残りの悪魔の数は100と少し。完全になのは達、六課のメンバーの方が優勢にある。

バルディッシュとレイジングハートからの情報では残っている大きい魔力反応の感知される二ヶ所にはフォワードのスバル達とネロがいるようだ。

「じゃあ残りは46:」

【フォワードの援護に回りますか?】

単純計算で小さい魔力反応の数を出したフェイトにバルディッシュが提案を持ち掛けるが、彼女は首を横に振った。

「あの子達なら大丈夫:」

口ではそう言うものの、フェイトの表情は曇っていた。信頼はしていても、心配にはなる。

「私達は: 残りを叩いてから合流しよう?」

なのはがフェイトの肩に手を置き、今の自分達がするべき事を口にしながらフェイトを見た後、遠くに見えるフリードの炎とスバル達の魔力光を見据えた。

「:うん!」

僅かな間が空いたがフェイトは顔を上げ、バルディッシュを両手で持ち変える。

「残りももう少し。気を引き締めて行こう!」

「そうだね:」

足元に魔方阵を展開させるなのは隣のフェイトが静かに：

「私達も頑張らないと…！」

確かにそう言った：

：

「スバルさん！！」

「スバル！！」

巨大な悪魔の攻撃をかわしつつ散開。フォワードの中でも特に集中的に襲われているスバルにエリオとギンガの声が飛ぶが、彼女も攻撃を掻い潜り、一時後退。建物の影に隠れているティアナとキャロの所に駆け寄る。

「スバルさん…」

「スバル、前に出すぎよ！」

戻るなり心配していたキャロとティアナの罵声が飛んで来た。

「ごめん…」

心配してくれていたのは嬉しいが、フォーメーションを崩しかけていた事に関しては全く別。案の定スバルはティアナに叱られてしまった。

「焦って怪我でもされたんじゃない、こっちも堪ったもんじゃないんだからね？」

「ううう…」

クロスミラージュの銃身部分を外し、新しいカートリッジを込めながらも愚痴るティアナに何も言えないスバル。

「ほら、さっさと配置に戻って」

クロスミラージュから“リロード”の電子音が鳴り響き、促されるままにスバルがウイングロードを展開。水色の道をマツハキヤリバ―で駆けて行った。

『クロスシフトB、やるわよ！？』

『おおっ！！』

ティアナの射撃によって攪乱、その隙を突いてスバルが強力な一撃を叩き込むもフォーメーションがクロスシフトB。

因みに、先程は二人同時に攻撃を仕掛けるクロスシフトだったが、危なっかしくてスバルを囫に使い、ティアナが射撃魔法を使うクロスシフトAは使えない。

その為、ティアナはクロスシフトBを指示したのだが、スバルは素直に彼女に従い、違う場所で待機しているギンガとエリオの所まで駆けて行った。

「ギン姉！ エリオ！」

「スバル！ 作戦は！？」

駆け寄り、違う建物の影に隠れていたエリオとギンガの所まで行くスバル。

「クロスシフトBで行くって。エリオも準備いい？」

「はい！」

スバルに応えるエリオの両手にはストラダーがあった。

「クロスファイアアアアア……！！」

「アルケミックチェーン！！」

ティアナの周囲にはオレンジの無数の魔力スフィアが展開、悪魔の足元からはピンクの光を放つ鎖が飛び出し、悪魔の足……体にまで絡み付く。

「シューーーーーーッ！！！！」

ティアナの誘導射撃魔法が悪魔に着弾。
クロスファイアシフト

「行くわよ！！」

「マツハキヤリバー！」

「ストラダー！ カートリッジロード！！」

青のウィングロードを展開させるギンガ、後に続くスバルとエリオ

が爆煙に包まれ、悲鳴を上げる悪魔に向かって飛び込んで行った：

：

「残りは…」

倒した悪魔の体が朽ち果てて行くのには目もくれないネロ。彼は右腕の反応と遠くに見える悪魔の巨体を交互に見た。

【大きい反応が31、小さい反応が24です】

「大分減ったな…」

ネロの隣に出てきたルキノが現在の状況を知らせると、彼は指で回していたブルーローズを腰のホルスターに納め、スバル達が戦っている悪魔の方に向かって走り出す。

「フォワードメンバーが交戦中のアンノウンが大きい魔力反応の中では最後のようなです」

【最後？】

六課の指令室にいるルキノの前に浮かび上がっているモニターのネロが聞いた。

「はい。他に反応の大きかったものも消えましたし、空にいる残りのアンノウンは隊長陣が交戦しています」

【フェイトちゃん！】

【うりい　いいやあああああっっ！！！！】

巨大モニターの画面にはフェイトと共に戦うなのはの姿が。シグナムの飛竜一閃から免れた悪魔に向けてグラーファイゼンを振り抜くヴィータが映っていた。

「ダンテさん！」

【今度はそっちからお呼びか？】

アルトの前に出て来たモニターにはダンテが映っているが、どうも背景がおかしい。

「部隊長からの伝達でフォワードと合流するようにとの事なんです
が…」

【嬢ちゃんと少年の所にか？】

「はい…」

【待ってな。ここが片付いたら行く…よ！！】

どうもおかしい。ダンテは今、何かを踏みつけたようだったが…

「あの…　ダンテさん？」

【なんだ？】

「今、どこに…」

【ボロい街の中…さ…!】

またダンテが何か踏みつけた。その度に奇声が画面越しに聞こえてくる。

「いや、そうじゃなくて! …もしかして…」

そこでアルトは一度、息を飲んだ。

「“空”にいるんじゃない?」

【当たり】

まさかとは思って聞いたのだが、ダンテは平然と言っている。

【よく分かったな、嬢ちゃん? あ、ずっと見てたんだっけ?】

「ダンテさんの反応が消えたんで、まさかと思って探したら、そうだったんですよ!」

またしても悪魔を踏み台にして跳躍するダンテに突っ込まずにはいられないアルト。

「ちょっと待って下さい! そこって地上50メートルはありますよね? どうやったんですか!」

【ビルに登ったんだよ】

思わず手を机に打ち付けてしまうアルトだが、彼女の動揺しぶりに他の部隊員達も狼狽えずにはいられない。

【あいつ、そんな所にいるのか？】

「驚かないんですか!？」

モニターに映っているネロが走りながら聞くが、特に慌ててもいない彼を見たルキノが驚く。

【別に…】

「でも50メートルですよ!？ 廃棄都市区画にあるビルの高さなんか軽く越えてますし…!」

【いや、あいつなら普通にやるだろ】

ネロの“あいつなら当たり前”と言っている姿に呆氣に取られてしまうルキノ。

「その普通じゃない事が起こってるんですけど…」

【F i n i s h ! ! !
フイニッシュ】

巨大モニターに映し出されていたダンテの声が響いた。

顔を引き吊らせていたアルトが顔を上げれば、空にいる下級悪魔を踏み台に跳び上がったダンテが大剣を手に、最後のシン サイズの仮面を斬り裂いた。

【よし！ 終わった！】

そのままダンテは地上に難なく着地。消え行く悪魔の残骸に向けて不敵に笑っている。

【残りはどうなった？ イケてる嬢ちゃん？】

【なに、変なこと言ってんだよ！！】

悪魔を倒すなり、一々言うダンテだが、彼の声がモニターを通して聞こえてくるのに走りながら苛つくネロ。

「イケてる…」

「あはは…」

ダンテの言った事に少し顔を赤くしてしまうアルトと、彼女を見て半分苦笑の笑みを浮かべるルキノ。

【おい、坊やの方の嬢ちゃんもイケてんのか？ 俺の方には声しか聞こえないんだが…】

悠々に歩くダンテから隣のルキノに顔を向けるアルト。

「イケて…ますかね？」

【真に受けるなよ、アルト】

困った顔でいるアルトにネロが言う。

【そのバカの言う事は全部無視しろ】

「そう言うワケには行かないんですが…」

ダンテには余りにも冷たいネロに額から汗が流れ落ちるルキノ。

【あんたも早くスバル達の方に向かえよな】

【ああ、勿論だ。行けば将来が期待できる嬢ちゃん達に会えるし、美人の姉ちゃんもいるだろうからな】

ルキノにはネロの舌打ちが聞こえたような気がしたが、彼女が見た頃にはネロはただひたすら走っている姿しかない。
ダンテが顎の無精髭を触りながら言うが、ネロには彼の声しか聞こえない。

ネロの隣にダンテの映るモニターを出そうかとルキノは考えたのだが、今の彼の姿を見たら余計にマズイ事になるだろう。
何故なら先程の食堂で視聴済みだからだ。

【チッ！】

今度は完全に聞こえる程大きな舌打ち。

【おい、ルキノ…】

「あ！ はい」

取り敢えずは応えてみるが、どうもネロの様子がおかしい…

【ムカついたなら後で俺が殴っとくぞ…】

「え？」

完全にキレる寸前… 声もかなりドスが効いたものだ…
ルキノとアルトの気持ちよりも完全に私情…

【そっちがやりたいんなら武器を持て…】

「え？ あ…」

【そいつは簡単には死なないからさ…】

「え！？ ちょっと！」

微かに見えたネロの瞳が赤く染まり、右腕からは青白い光が炎のよう
に揺らめいたようにも見えたが、狼狽えるルキノは全く気付いて
いなかった…

Episode..46 **Navigator**〈導く者〉 (後書き)

〜第47話予告〜

「スバルさん!!」

「あっ…!」

少女が閉ざされし世界…

「俺が行く」

《悪夢》の世界に最強の銀狼が飛び込む…

「大丈夫か…?」

「ネロ…さん?」

その力は守る為の力…

「「テメエみたいなやつに使うとはな…」」

人の心と悪魔の力が生み出した姿…

「「俺が消してやるよ!!」」

故に《魔人》…

E p i s o d e . : 4 7 \ D e v i l T r i g g e r 〈悪魔への引き金〉 (前)

その力は、何の為にあるのか…

破壊か、殺戮か…

それとも…

Episode..47 Devil Trigger〈悪魔への引き金〉

倒された悪魔達の体が溶け、その中心には黒い水溜まりが…

“それ”は色こそ黒いが、形は確かに《レリック》…

その黒いレリックが禍々しく光だし、周囲の溶けた悪魔達と共に地面に吸収された…

…

廃棄都市区画内での戦闘が始まり10分に差し掛かろうとしていた。

「あれは…」

ルキノからの指示でスバル達と合流しようと走るネロの目に入ってきたもの…

「はああああ……!!」

30体あまりが組み合わせった巨大な悪魔にオレンジの魔力弾が着弾。空を飛ぶ白い飛竜の吐き出す炎の中を突き進む青い閃光。

ウイングロードを駆けるギンガの左腕に装着された白い籠手型のアームドデバイス《リボルバーナックル》の二つのスピナーが唸り、火花を散らす。

引き寄せた拳を固く握り、彼女はそれを振り抜いた。

「ああああっ！！！！」

ギンガの左拳が悪魔の右頬を打ち抜き、巨大な異形は苦悶の声を漏らしながら体を後退させる。

「スバル！！」

ウイングロードから飛び上がり、リボルバーナックルからカートリッジロードしながらも彼女は後ろを振り返る。

「ううううー！！！！」

ギンガの少し後ろには水色の閃光が…

「行くよ、ストラーダ！！」

【Ja】

ウイングロードを駆けるスバルの真下では、ストラーダのブースターから推進剤を噴き出し、更に加速するエリオが。

「カートリッジロード！！」

地表すれすれを飛ぶエリオのストラーダからカートリッジを排莖：《スピーア・アングリフ》を発動させる。

「でえええやああああっ！！」

黄色い稲妻と化したエリオは一直線に進む。そして、彼の手にする槍の刃が悪魔の無防備な足に突き刺さった。

「ギヤアアアアアアアアアア！！！！」

「今です!!」

「……りい
いいい
あああ
あつっ
!!」

足に走る激痛で只でさえ醜い顔を更に歪める悪魔。

エリオは気を逸らさず、攻撃に集中したまま声を上げる。

念話を使わず、悪魔の甲高い悲鳴にも負けないように彼が精一杯、張り上げた声に応えるようにスバルの声も夜の世界に響いていた。

「リボルバアアアアアアアアアア……！」

スバルの右腕に装着された黒いリボルバーナックルがカートリッジロード：

「シューシューシューシューッ！！！！」

軌道を変えたギンガが地面に向かい、垂直に悪魔の頭上から。スバルが正面から悪魔の顎に向けて拳を振り抜いた。

激しい金属音が更なる唸りと共に衝撃を飛ばし、二ヶ所から同時に悪魔の頭部に直撃。

「終わりだな……」

走るのを止め、足を止めたネロが呟いた。

「ガ ア」

脳天と顎が消し飛び、体をふらつかせる悪魔の体からスバルとギン

ガ、エリオが離れる。

「…やっ…た…?」

【アンノウン、沈黙】

若干、呼吸の荒いエリオが不意に呟いた言葉にストラーダの電子音が鳴り響いた。

「やったよ！ マッハキャリバー！」

【はい。やりましたね、相棒】

空に展開されたウイングロードに乗ったままスバルは足に装着されている《マッハキャリバー》を見た。

二度目の悪魔の戦闘を終え、ハシヤグ彼女に相棒であるインテリジエントデバイスも応える。

【ターゲット、反応は全てロスト】

「終わったみたいね…」

クロスミラージュからの情報を聞き、ティアナが辺りを見渡す。

——ネロさん、悪魔を効率よく倒すには、どうしたらいいんですか？

ティアナの頭には3日前に会議室でネロに聞いた言葉が残っていた。

——頭を潰せば死ぬだろ

当たり前の事だが、平然と言ってのける彼の姿を思い出すと、何故か溜め息が出てしまう。

——それがダメだったら、適当に攻撃して弱点を探せばいい

「すごいんだか、どうなんだか…」

医務室で何があったのか、乱れた髪を気にしていじっているネロにティアナはただ「はあ…」と応えるしかなかった。

「俺は必要なし…か…」

【ご報告です】

フツと笑ってみせ、ただ歩いているネロの隣に出てきたモニターにはルキノが映っている。

【アンノウン、反応は全てありません】

「知ってるさ…」

数分前までいた無数の悪魔の姿はどこにもなく、静寂に包まれている夜の世界には風が吹き抜け、数百メートル先にいるスバル達がいしゃいでいる声が微かに聞こえて来ている。

ネロは言われずとも分かるとも言わんばかりにルキノを見ず、軽く上げた自身の右腕を見ていた。

《悪魔の右腕》からはこの暗い空間にもう一つの光をもたらすかのように、絶えずぼんやりとした青白い光が発している。

…

【失礼します】

「よお、イケてる嬢ちゃん」

モニターのアルトがダンテの隣に出てくるが、彼は相変わらずマイペースに歩きながら声を掛けた。

【えっと… 現状の報告ですが、アンノウンは…】

「全部くたばったろ？」

いつ聞いても慣れそうにはないが、頬を少し赤くしたアルトが戦闘が終了した事を伝えようとしたが、ダンテは不敵に笑いながら言う。

【……はい…】

アルトは隣にいるルキノを一度見た後に目の前にあるモニターに顔を戻した。

【戦闘も終了しましたので、そのまま隊員達と合流して下さい】

「言われなくても… 分かってるよ…」

ノロノロと歩きつつ、ダンテな背伸びをした後に溜めていた息を吐き出しながら応えた。

「それではネロさんも」

【ああ】

ルキノの前にあるモニターの中のネロは左手で頭を掻きながら歩いている。

【早く帰ってメシの続きにしようぜ】

【食うことと戦うこと以外は考えてないのかよ!?!】

ネロの隣にはルキノが映るモニターと廃棄都市の地図しか浮かんでいないが、ルキノが隣を気にしているうえにダンテの声がモニター越しに聞こえてくる。

【考えてるよ。今後の事とか】

【嘘つけ。聞いてるぞ? 腕は確かにだが、事務所の経営も危うい便利屋だって】

【へえ… 誰の事だ?】

【あんたの話しかしてないだろ】

ネロとダンテは互いに声しか聞こえていないのだが、自分達の前を通って話されているのにアルトとルキノが一気に疲れたような顔をしている。

【ツケでピザばかり食ってるらしいな】

【オリーブ抜きのやつな?】

ダンテと比べればペースは速く歩くネロ。

それでも歩く速さだ。

「あの…」

【なんでそんなもんばかり食うんだよ。病気になりたいのか？】

「ダンテさん…」

【病気なんて一度もなった事なんかねえよ。風邪ならガキの頃にひいた事があるけどよ】

世間話ならしないで欲しいと思いつつ、声を掛けようとするアルトとルキノだが、二人の銀髪の男は気付いていない。

【へえ… 馬鹿も風邪をひくんだな】

「ちょっと！ ネロさん！」

【あれは迷信だろ。お前、そんなの信じてんのか？ 大体、ガキの頃って言ったろ？】

「あの、戦闘も終わりましたんで、早く帰還を…」

目の前にはダンテがいないが、あたかもそこに彼がいるかのように見下した目をして、鼻で笑うネロの姿に焦るルキノ。

モニターに映るダンテがネロの代わりに自分に向けて指を差してあるのに微妙な顔をするアルト。

【…うるさい】

「…」

一度舌打ちが聞こえたが、これ以上話すのは疲れるだけと悟ったネロが冷たく言い放ち、自分達に向けて言われた錯覚をおぼえるルキノが… モニターの中のダンテがニヤニヤ笑っているのに『この人に勝てる人はいない』と考えていた。

「あの… 早く帰還を…」

小さな溜め息を吐き、話をもどそうとするルキノだが、モニターに映るネロはバツ！ と、後ろを振り返った。

「ネロさん…」

【…】

声を掛けようとするルキノだが、彼は目もくれずに辺りを見回す。

【…この臭いは…】

「どうかしましたか!?!」

アルトの前にあるモニターのダンテも鼻で“何か”の臭いを嗅ぎ付けていた。

【チッ!!】

突然ネロが走り出した。
彼の行動が理解できないルキノ。

「どうしたんですか!?!」

【悪魔だ!?!】

「え? でも、反応は全部…」

【よく分からないが、ヤバイカンジがする!?!】

急に全速力で走り出したネロの右腕は“何か”の気配を感じ取っていた。

ルキノの言う通り、悪魔の魔力反応は全て消えているが、ネロの第六感と右腕はただならぬものがある事を教えている。

「ダンテさ…」

ネロが映るモニターに看取れていたアルトが顔を戻すが、彼女の前にあるモニターにダンテの姿はない…

「…え?」

【坊や! 急げ!】

いや、頭上から聞こえて来た声に顔を上げれば、先程とうって変わって廃棄都市を走り抜けるダンテの姿がある。
だが、明らかにおかしい…

「早い!」

不意に声を上げたシャーリーの前にある画面には、廃棄都市内にい

るネロとダンテの位置を示すものがある。

「なんて速さだ！」

「あれ、100メートル10秒なんか、軽く切つとるやろ……」

驚きの声を上げるグリフィスの隣で椅子に座ったままのはやてが込み上げてくる笑みが引き吊ってしまう。

ネロを表す青い点の移動速度も速いが、ダンテを表す赤い点が驚異的な速度で移動しているのだから、無理もない。

「……待って下さい！」

「魔力反応、増大！！　一ヶ所に集まって行きます！！」

突如モニターに出現した黄色い点は悪魔の魔力反応を示すもの。

急な事態に慌ててキーボードを叩き始める二人とバークヤード達。

「なに！？」

その巨大モニターに出ている黄色い点はダンテが走る速さをも上回るほど。

声を上げたグリフィスにも焦りが見える。

「あれは！」

ラインが目にしたものは、フォワードメンバーを映す一番大きなモニター。そこには倒した筈の悪魔が起き上がり、地を這うように蠢く姿があった。

【な、なに？】

【みんな散って！！】

何が起きているのか分からないスバルが巨大な腕を振り回す悪魔の攻撃をかわし、ティアナがクロスミラージュから魔力弾を撃ち出しながらも悪魔から距離を取り、指示を出していた。

：

「どうなってるのよ！」

【アンノウンの反応が再び出て来ました】

右手に持つクロスミラージュからオレンジの魔力弾を撃ちつつ、左手に持つもう一丁のクロスミラージュの銃身を取り替え、カートリッジを装填するティアナ。

「そうみたい…ね！」

2発分のカートリッジの魔力を込めた魔力弾を撃ちつつ、彼女の顔が険しくなる。

『ティアナ！ 大丈夫！？』

ティアナの頭に聞こえて来たのはなのはの声。

『分かりません。倒した筈のアンノウンが動きだして…』

体が崩れ、爛れている巨大な悪魔から距離を取りつつも念話で応えるティアナ。

『待ってろ。今、あたしとシグナムがそっちに向かってる』

『悪魔と戦ってる間に距離が離れすぎたが、持ちこたえろ!』

空を駆ける赤い騎士と桜色の髪と甲冑を纏った騎士が前を見詰めていた。

「どうなってるの…」

遙か前方には、夜の暗い所でもはっきりと分かる程の巨大を蠢かせる悪魔が…

『急ごう、フェイトちゃん!』

『うん…』

一度離れたなのはとフェイトが同じ目的地を目指し、白い魔導士と黒い魔導士が閃光となった…

…

「フリード! ブラストレイ!」

空を飛ぶフリードの背には手綱を手に指示を出すキャロが…

「くっ!!」

悪魔の体に刃が突き刺さった方がいいが、異様な粘着力により抜けず離れられないエリオに向けて悪魔の手が振り落とされようとしていた。

だが、その悪魔の右腕にフリードの火炎がモロに直撃し、先程とは異なる悲鳴を放つ。

「待ってて。今、助けるから」

キャロの手の甲にあるケリュケイオンのクリスタルから光が放たれ、《シューティングレイ》の発動準備に取り掛かる。

「シューティングレイ!」

射出されたピンク色の光の矢がエリオのストラダーダが突き刺さっている部分に向けて飛ぶ。

だが…

「キィィィアアアアアアア!!!」

空を見上げ耳まで裂けた口を広げた悪魔の雄叫びと共に、悪魔の体から複数の突起が飛び出して来た。

その内の一つがエリオを救おうとしていたシューティングレイの行く手を阻み、光の矢が悪魔の体に吸収されてしまう。

「こっちに来る!!」

「くっ…!」

そのおぞましい突起もウイングロードを駆け巡っていたスバルとギンガの所にまで届き、彼女達も回避行動を取り、時にはプロテクションを発動する。

「スバル!!　ギンガさん!!」

比較的に安全な位置から攻撃していたティアナだが、予想外の事態に焦りが生じる。

隊長達の到着までまだ時間が掛かる。自分達がここで持ちこたえないしかない。

「うわあああああ!!」

声に気づけば、飛び出した突起が悪魔の体に戻りつつもエリオの体を取り込もうとしていた。

「エリオ!!」

「エリオ君!!」

声を張り上げるティアナとキャロだが、エリオの体はストラーダを含め、左腕は飲み込まれつつある。

彼も必死に抗っているが、次第にその粘着質な体がエリオの肩にまで差し掛かっていた。

「フェイトさん!!　エリオ君が!!」

口にしつつも念話を飛ばすキャロ。

彼女のパートナーにして、自分とも友であるエリオが悪魔に飲まれつつある事にフリードが急速に地面に向かって降下し始める。

「エリオ!!」

悪魔の侵食がエリオの胴体にまで差し掛かりつつあった。飲まれつつあるエリオに向けて走りだそうとするティアナ。

だが、彼女の隣を風が吹き抜けた…

彼女の目に入っただのは銀色の髪…

「……………ああああああ…」

異形の右腕から青白い光を放つ者…

「……………ああああああああ…」

叫びながらも、その右腕からは眩い光が放たれた…

「あああああああつつつ!!!!!!」

《閻魔刀》を手にしたネロは勢いを殺さず、悪魔の体に向けて突き立てる。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!」

悪魔が悲鳴を上げ… その異形の絶叫は、二つの月に向けて叫ぶかのように…

「うらあああああっ!!」

突き刺した刃を反転し、一気に切り上げつつもエリオを悪魔から引き剥がして後退する。

「あ…」

エリオが何か言おうとしていたが、ネロは彼を左脇に抱えたまま悪魔を睨む。

その碧眼が一瞬、赤く染まったようにも見えたが、エリオは何も言えずにティアナの所まで連れて行かれた。

「体は平気か？」

抱えていたエリオを下ろすと、彼は唐突に聞いて来た。

「え…」

「悪魔に飲まれかけただろ？ どこもなんともないかって聞いているんだよ」

右腕に持った闇魔刀を肩に担ぎ、完全に振り返らないままネロがエリオに聞いた。

「……平気です…」

エリオの目はネロの右腕にばかり行ってしまうが、ティアナもネロとエリオを交互にみる。

「そうか…」

ネロの素っ気ない返事で返しながら、巨大な悪魔から目を逸らして周囲を見渡す。

「あの…」

エリオはまだ言い足りない事があった。前ならば言えた礼の言葉が口からなかなか出て来ない。

「…」

ネロはまるで何かを探すかのように周囲を警戒し、神経を集中させる。

「来やがったな…」

閻魔刀を持っている右腕からは呼応するかのように光を放ち始めた。

「離れるぞ」

「え？」

肩に担いだ刀を振り下ろし、ネロは険しい目付きのまま悪魔からは反対方向に歩き始める。

彼の言動に不意に口から言葉が漏れたエリオだが、ネロの前にテイアナが出て来た。

「待って下さい！」

「早く離れるぞ」

ネロは行く手を阻むティアナの前で止まろうとせず、彼女を無視して歩き続ける。

「まだ悪魔は…」

「その悪魔を倒す為に離れるんだ」

まだ悪魔は死んでなどいない。スバル達も一定のきよりを取り、離れているが、ティアナはどうしても腑に落ちない。

「なんであなたの言われた通りにしなくちゃいけないんですか!？」

それを言われた瞬間にネロの足が止まる。

「部隊長がどうしてあそこまでやるのか分かりませんが、あなたに自由行動は許されても命令の権限はありません」

「ティアさん!!」

疑念と不信の感情が組み合わさったティアナの言葉にエリオが声を上げた。

「あなたは私達に保護されてる身であって…」

「そうだったな…」

ネロが振り返しながら気だるげに言うと、空からキャロを背に乘せたフリードが着陸して来た。

キヤロが一度エリオを見るが、彼は少し顔を俯かせてしまう。

「まあ、食わせてもらってるうえに寝床まで頂いてるんだし…」

ネロは再び闇魔刀を肩に担ぎ、トントンと肩に打ち付ける。

「ちゃんとその分は…」

一定のリズムで打ち付けるのを止め、刀を握り締めるのと共に右腕からはぼんやりと青白い光を放ち…

「働くよ!!」

その光が刀全体にまで達した瞬間、体を反転させる勢いを加えて刀を振り抜いた。

「え…」

放たれた青白い斬撃が“何か”に直撃し、凄まじい爆発を起こす。

「な… なにを…!」

「悪魔だ」

爆風と熱風が止み、顔をおおっていた腕をどけながら目を開いティアナ。

ネロは炎を立ち上げる先を睨み付けながら短く応える。

【バークヤードからの新たな情報です。こちらに近付く複数の魔力反応あり】

クロスミラージュが伝えるが、彼女達に向かって来る黒い影は、この暗い場所では把握できない。

「なんですって!？」

【来ます】

ティアナが目を見開き、前方を睨むが、何も分からない。

【距離はあと50】

「早い!!」

先ほどネロの攻撃が着弾したのは200メートルは先だったが、僅かな時間で得たいの知れない“何か”は一気に距離を詰めていた。

「来る!？」

「いや…」

フリードが凄まじい唸り声を上げ、エリオがストラーダを両手で構えるが、ネロは小さく息を吐きながらも目を細める。

「…もう通りすぎた」

【目標は後方のアンノウンのようです】

「あれに!？」

ネロが振り返るながら言うと、彼が睨むその先にある集合体の悪魔にティアナ達も目を向けた。

：

「なに… あれ…？」

念話でエリオの安否を聞き、空からネロ達と合流しようとしていたフェイトの目には、闇夜でも明るく照らす白い光が見えていた。

：

「ギン姉…」

「…」

ウイングロードを展開させ、眩い光を放つ悪魔の集合体を見詰めたままスバルは口を開くが、ギンガは何も言わず、ただ睨み付けている。

【魔力反応、増大】

今までとは比べものにならない程の巨大が脈打ち、光を点滅させる。次第に魔力も高まって行く中でギンガの足に装着されている《ブリッツキヤリバー》が…

【安定していきます】

スバルの《マツハキヤリバー》が電子音で互いの相棒が喋り終える

と共に光はおさまり、悪魔の体も小さくなって行く。

「あれは…」

十分に距離は取ってあるが、ギンガはただならぬ不安を感じていた。悪魔の体が活動を停止し、白い光を放つ球体に変わる。大きさは高さが2メートル、全長が5メートルほどの白い光をはっする“卵”のようなものがあった。

「なんですか… あれ…?」

「さあね…」

地上にいるエリオが眉を吊り上げると、彼の隣にいるティアナもできるだけ距離を取ったまま“卵”には近付こうとしない。

「とにかく、隊長達が来るまで私達は待機よ」

指示を促すティアナに連れられ、エリオ達が“卵”に背を向ける。

「…行きますよ」

ティアナが立ったまま動こうとしないネロに言うが、彼は険しい目で“卵”を睨み付けていた…

（なんだ… あれは…）

無言でいるネロの目にはその“卵”しか入らない。

（悪魔… なのか…?）

あの“卵”は悪魔が組み合わさった事で出来たもの。ならば悪魔と変わらないだろうが。

彼の“何か”がああ“卵”を破壊する事を躊躇わせていた。

ふと、右腕を見れば何の兆候もなく、悪魔の気配は感じ取れない。だが、あれは…

「ネロさん…」

いつまでも動こうとしないネロに業を煮やしたティアナが近寄ろうとした瞬間、ネロの右腕からは強い光を放ち始めた。

「え！　ちょ…　ちょっと！」

「ネロさん！？」

ネロは“卵”に向けて一気に走り出した。

彼の突然の様子に慌てるティアナとエリオだが、ネロは止まりなどしない。

…

「どうなっている！！」

機動六課の指令室にはアラームが鳴り響いていた。

緊急事態に大きな声を出すグリフィスに焦るバークヤード陣…

「それが…　あのアンノウンの集合体からまた強力な魔力が感知さ

れて…!」

「どんどん大きくなっていきます…!」

ルキノとアルトが現在の状況を報告しようとするが、予想の更の上
を行く事態に陥ってしまう。

「シャーリー! どないなっとるん!？」

「今、解析中です…」

部隊長であるはやてが聞くが、シャーリーもひたすらにキーボード
を打ち続けていた。

「はやてちゃん! あれ!」

はやての前にいるリインが上げた声に反応し、巨大モニターに皆が
目を向ける。

「なんや…」

そこには、再び鼓動を打ち始めた“卵”が強い光を放ち、次第に大
きくなり始めていた。

「…そんな…!」

シャーリーも一度モニターを見たあと、再び作業に集中してキーボ
ードを打ち続けるが…

「……………うそでしょ…」

難解な赤い文字が並ぶ彼女の前にあるモニターに書かれていた解析の結果は…

：

廃棄都市にいるギンガの背筋に強烈な悪寒が走った…

（マズイ！！）

「スバル！！！！」

『ここにいてはいけない』。彼女の経験と直感がそう教えていた。ギンガが咄嗟に妹の名を叫ぶが…

「え？」

彼女はギンガではなく、地上を走るネロを見ていた。声に気付き、ようやく姉であるギンガを見るが、そこでただ事でない様子だと分かった。

「ギン姉、どうしたの…」

【危険です】

ウイングロードを駆け出し、ギンガがスバルに近寄よ中でマツハキヤリバーが警告する。

その瞬間、マツハキヤリバーが独自に行動して回避行動を取った。

「うわあああっ！！」

変則的な回避にスバルもなんとか着いて行くが、ギンガと同様に先程いた場所に無数の槍が降り注いだ。

「な、なに!?!」

「あのアンノウンよ…」

風を切る音を放ちながら落下して行く槍に目が行くスバルに眩くように言ったギンガ。

(一瞬でここまで…)

地上にあった“卵”は溶け出し、まるで“スライム”のような粘性を持った悪魔へと変じていた。

その体の中央にある直径も2メートルはあろうかと言う球体から瞬く間に槍を射出し、地上数十メートルの地点にいるスバルとギンガの所にまで辿り着いていた。

【来ます】

「また!?!」

マッハキャリバーが知らせると、その“スライム”の悪魔の球体が光を放ち、またしても無数の槍が飛ばされた。

「くっ!!」

(さっきより早い!?!?)

必死で回避するギンガだが、その悪魔の射出速度が先程よりも明らかに早い。

だが、無数に撃ち出される槍の弾丸が急に止んだ。

「あれは…」

「ネロさん!？」

地上には球体に向かってデビルブリンガーを打ち付けるネロがいた。

「はあああああああっ!!!」

巨大な青白い右腕は球体を削り取り、その破損箇所に向けて左手に持ち変えていた閻魔刀を突き立てる。

柄に右手も添えて更に力を込めるが、その球体から禍々しい黒い光が収束されはじめ、ネロが刀を抜いて後方に跳んだ。

「やっぱり悪魔か…」

何故、早く倒そうとしなかったのだろうと思いつつ、ネロは立ち塞がる異形を睨み付ける。

「早いところ倒すか…」

【待って下さい!】

頬に着いた土を拭い、閻魔刀を一度振ったあとに歩き出そうとしたネロの隣にルキノの映るモニターが出て来た。

「なんだよ? 今、忙しいんだが…」

【下手に攻撃してはいけません!!】

人の話は聞かずに歩き続けるネロに向けて放たれたルキノの言葉だが、明らかに焦りが見える。

「…どうした？」

【あれは…】

流石に察したネロが足を止めるた…

そして彼女が映るモニターの隣に出て来た画像は…

【あのアンノウンからはロストロギア… レリックの反応が感知されました】

「なに…」

真剣な顔で話すルキノから悪魔に顔を向けたネロ。

【ですから、下手に攻撃しては…】

ルキノが喋っている最中に、またしてもネロの右腕が疼きはじめた。

「そう言われてもな…」

（ヤバいな…）

閻魔刀を持っている右腕からは強い光を放ち…

「向こうはやりたい放題にやるだろ…」

（ちよっと待てよ…）

悪魔の体からは砲撃の銃身のようなものが突きだし、あの黒い光が収束されはじめていた。

しかも、先程とは比べ物にならないほどに強力なものが…

【魔力値、増大していきます!!】

「見りゃ分かるよ…」

こんな時に限って笑いが込み上げてくるが、ネロも流石にマズイ。急いで後退しようとする。

「推定魔力値… えええっ!？」

キーボードを叩くシャーリーは、我が目を疑った。

「どうした、シャーリー!？」

「…魔力……………」

聞いて来たグリフィスに伝えてなのか、それとも口から漏れたものなのか分からないが、シャーリーのモニターに出ているものは…

「……測定不能……………」

「なっ!？」

シャーリーの前にあるモニターには“エラー”の文字が。聞いたグリフィスも不意に声を出す。

：

【全員、回避行動を取って下さい！！】

「言われなくても…」

ルキノが緊急事態の通信を入れるが、その瞬間に悪魔から凶悪な魔力砲撃が撃ち放たれた。
すぐに離れて走り抜けるネロ。

「なによ、あのデタラメな魔力…」

建物をただ破壊する砲撃から距離を取り、エリオ達と共に隠れているティアナ。

「あれで下手に攻撃できないんじゃないか…」

その“破壊”の為にある力に顔を険しくしていたが、その砲撃を撃ち出しながらも悪魔の異変に気付いた。
体が波打ち、微かだが動いている。

「あれ…」

「…なんだか動いてませんか？」

異変にはキャロとエリオも気付いた。
彼女達の傍では、大きな体を縮込ませているフリードが唸り声を上げ、一気に咆哮を放たれた。

「うわっ!!」

「フリード!？」

「ちょっと、どうしたのよ!!」

慌てて耳を塞ぐ三人だが、エリオはふと思い出した。前に廃棄都市での戦闘でフリードは悪魔が現れるのを察知していた。何よりも悪魔の存在に敏感なフリードの反応と言う事は：

「まさか!!」

ハッとしたエリオだが、その瞬間に悪魔の砲撃の向きが変わり、周囲の方向、角度共に無茶苦茶に魔力砲を撒き散らしはじめた。

「うわあああああああ!!!!」

「キャアアアアアアア!!!!」

爆風に見舞われ、目を瞑るエリオ達を庇うようにフリードが自身の翼を盾にして三人の前に出て来た：

：

「スバル!!」

悪魔の砲撃をかわしながらも尽きる事のなり槍に襲われるギンガとスバル。

「大丈夫!!　ギン姉も…」

スバルが攻撃を回避しつつも、ギンガの方を振り向くが…

「うしろよ!!」

「うりいああああっ!!」

向かって来た巨大なブーメランのようなものにスバルが拳を叩き付けた。

最初こそ火花が散ったが全体にヒビが入り、そのブーメランも呆気なく崩れ…

「…え……………」

スバルの体にまとわり着くように付着した。

「スバルッッ!!」

「…………ギン…………ね…………え……………」

ギンガが手を伸ばすが、飛び散った悪魔の肉片がスバルの体を飲み込んでしまった。

その侵食の速さは先程のエリオの時とは比べ物ならず、スバルの体は重力に身を任せた自由落下により…

「スバルウー……………!!」

そのまま巨大な悪魔の体に取り込まれた…

ギンガの叫びに気づき、感じ取ったティアナ：

「…スバル……！」

前に出ようにも自分達が危うい。この盾にしている建物が崩れるのも時間の問題だ。

「スバル！！」

ティアナが叫んだ瞬間、三人の前を風が：

「え…」

吹いた：

「ダンテさん！！」

「危険です！！ 戻って下さい！！」

キャロとエリオが叫ぶが、彼は振り向かずに悪魔に向かって一気に駆け抜ける。

「くそっ！！」

悪魔の槍が降り注ぐ中でも手の施しようのないネロが拳を壁に叩き付ける。

先程悪魔に取り込まれたスバルが彼には見えていた。だが、助ける事は叶わずに今に至る：

「どうすれば…」

「坊や!!」

齒を食い縛るネロの耳に入って来た声… 彼はその声に反応し、顔を上げる。

「ダンテ？」

建物の陰から見れば確かにダンテの姿が…
だが、彼が今いるのは…

「嬢ちゃんを助けに行ってくるから、精々そっちも頑張れよ！」

ダンテは自ら悪魔の体の上に乗し、取り込まれようとしていた。

「おい!!」

「下手に攻撃するなよ! あと、出る時には合図するからな！」

ネロの言うことは聞かずに、ダンテもスバルと同様に悪魔に飲み込まれてしまった。

「勝手に決めんなよな…」

舌打ちの後に壊れかけの建物から建物に移動するネロ。

（あれは…）

空を掛ける青い閃光がとある建物の影に降りた。

：

「ティアナ、落ち着いて！」

「何で落ち着いてられるんですか！！」

冷静さが欠けてしまっているティアナの周りにはエリオとキャロ、二人から念話が入ったギンガがいた。

「スバルが… スバルがあの中に…！！」

「落ち着いて！！ ティアナ！！」

ギンガに取り押さえられるティアナだが、今のままではマズイ。悪魔との戦闘中にこのままでは…

だが、そう考えている矢先に建物に振動が走った。

【魔力反応です】

【アンノウンにロックされました】

ストラーダとケリュケイオンが警告するが、フリードが凄まじい唸り声を上げて見えない建物の向こう側に向けて吠える。

「フリード？」

フリードは身を縮め、四人を庇うようにして体を屈めた瞬間… 建物の向こうでは激しい音が鳴り響き、建物の周囲に向けて黒い砲撃

が四散して行く…

「……止んだ…」

四人の中では一番年長にあたるギンガが顔を上げると、フリードが先程と比べれば静かだが、確かな唸り声を上げていた。

「フリー……ド？」

【外から別の魔力反応】

不意に呟いたキャロだが、ケリュケイオンから発せられた声にハツとする。

「別の？」

【映像を出します】

ギンガも突然の事態に首を捻るが、ブリッツキャリバーの言葉に少し考え込んだが…

「…出して」

一度ティアナを見た後に指示する。そして、彼女達の前に浮かび上がるモニターに映し出されたものは…

【……まさかテメエなんかを使うとはな…】

「え…」

「この声って…」

画像は若干荒れているが、土煙が次第に晴れて行く中で聞こえて来たのはネロの声。

だが、声は二重に重なり、エコーの掛かったようなものだ…

「音声の故障かしら…」

【いえ、そちらは正常です】

ギンガの口から漏れた言葉を返すブリッツキヤリバー。
そして、晴れたその先にいたのは…

【ダンテも勝手なこと言いやがって…】

瞳は真紅に染まり、体からは絶えず青白いオーラを放つネロの姿が…

【厄介なのばかり俺じゃねえかよ…】

彼の背後には青白い魔力で形成された《悪魔》の姿が…

【結局下手には攻撃出来ないしよ…】

地面に蹴りを入れた瞬間、ネロの足元にあるコンクリートが叩き割れた。

「…ネロ……さん………」

モニターを見ていたエリオの目には彼の姿が飛び込んで来た…

Episode: 47 Devil Trigger 〈悪魔への引き金〉 〈後

ああ…

焦りすぎ…

〈第48話予告〉

「ここは…」

狩人が着きしは“悪夢”の世界…

「もっと力を…」

込み上げる力…

「ネロ!!」

彼は人か、悪魔か…

E p i s o d e . : 4 8 \ N i g h t m a r e 〈悪夢〉 \ (前書き)

夢とは、人が眠りにつく頃に見るもの：

それはひとの“精神”に感化し、時には地獄の世界と化す：

だが、今の《黒き騎士》が携えし“悪魔”も、少女の囚われた世界も夢などではない：

Episode..48(Nightmare〈悪夢〉)

「チイツ!!」

悪魔の槍の雨をかわしつつも後ろに跳び、ネロは距離を取る。だが、その瞬間に悪魔の体から何か放たれるのが彼の目に入った。

「なんだ!？」

一瞬、空を見上げるが悪魔は体からは凄まじい砲撃を放ち、彼も更に距離を取る。

「クソッ!」

(下手に攻撃できねえんじゃない…)

悪態をつきながら闇魔刀を振るうが、彼の耳に風を切る音が聞こえて来た。

ネロはふと空を見上げる。

それは…

「…スバル……」

悪魔の体の一部に包み込まれたスバルが落下して来ている。その落下地点は彼と対峙する悪魔が…

「スバル!!」

ネロは一気に駆け出し、スバルを助けようと手を伸ばした。出現した《デビルプリンガー》でスバルをキャッチしようとするが、

「…うっ！……ああっ！！」

悪魔の体から飛び出した突起が行く手を阻む。
触手と化した突起はデビルブリンガーがスバルまで辿り着く前にネロの腹と右肩に直撃、頬を掠める。

「スバ…！」

ネロがスバルの名を叫ぼうとした瞬間、彼女は悪魔の体に取り込まれた。

「…」

ネロの口は開いたまま何か言おうとしたが、彼は歯を食い縛り、悪魔に突き飛ばされるまま建物に激突。

（……………まただ…………）

ネロは声を上げないまま地面に膝を突いた。

（……………また俺は…………）

口の端からは一筋の血がつうつ…と流れ、右手に握る閻魔刀の柄を握り締める。

「クソッ！！！！」

彼はそのまま右拳を地面に叩き付けた。
地面に亀裂が走り、微かに彼の周囲は揺れる。

(俺は…!!)

悪魔の右腕が疼き、彼も我に返りながらも飛び上がった。

「スバル…」

デタラメに撃ち出す砲撃からも身を守る為に建物の影に隠れたネロだが、彼はふと右手を見た。

そこにあるのは《閻魔刀》…

「…」

悪魔への怒りとスバルを救えなかった自分の不甲斐なさに刈られていた顔から、ネロは決意を固めた目付きに変わる…

…

「うわぁ…」

「滅茶苦茶ッスね」

スカリエッティのアジトでは廃棄都市の戦闘を見ているナンバーズの一員達。

その中にいるセインとウエンディがモニターに映る悪魔の暴れざまに顔を引き吊らせている。

【本来なら結界の中で活動する悪魔なんだけど… 今回、それはな

いからかしら…】

悪魔のモニターの隣にはウーノが映っている小さめのモニターがある。

彼女は自分の前に展開されているモニターを見ているのか、一度視線を下ろした。

「本当に戦力として使えるのか？」

チンクが眉を片方吊り上げながら言うが、ウーノは顔色一つ変えない。

【そうね。精々、破壊活動くらいかしら】

「破壊…か…」

ポツリと言った後にモニターに目を戻すチンク。

「あれもドクターの指示？」

チンクと同じテーブルに座るノーヴェが苛ついた口調と侮蔑の目で悪魔を見ている。

【おそろく違うわね】

「おそろく？」

モニターの中にいりウーノがキーボードを叩いているが、ノーヴェは悪魔からウーノに目を向ける。

【悪魔はまだ未知の部分が多いから、何を起こすか分からないのよ】

「ふ〜ん…」

ウーノの説明を聞くと、ノーヴェは特に興味もないようだ。

「…」

【キイイイイイイイイイツッ！！！！】

再び沈黙に包まれ、部屋には悪魔の奇声が響く。

「ねえ、何か喋ろ…」

「ああっ！！！」

絶えきれなくなったセインだが、彼女の前にいるウエンディが大きい声を上げ、目を見開く。

「ちよっ！ ウエンディ…！」

「黒騎士ッス！！！」

セインが手をテーブルに打ち付けるが、ウエンディがモニターを指差している。

「え！？」

聞いた瞬間にディエチの体がビクツと反応する。

「ウソ？ どこどこ!？」

「あそこッス！」

「あそこじゃ分かんないよ！」

慌てて探すセインに分かるようにウェンディがモニターを指差すが、指を振り回している為、何処か分からない。

「「走ってます」」

オットーとデイドが同時に言うが、セインは全く聞いてなどない。

「ウーノ、音量を上げろ」

【ちょっと待って…】

無言を貫き、じっとモニターを見ていたトーレとセツテの二人。二人ともネロが何処にいるのか分かっているだろうが、トーレの要望により音量が上がり、更にはネロの姿がズームになる。

「あっ！ いた！」

【はぁぁぁあっ!!!】

セインがネロを見つけた瞬間、ネロは足でブレーキを掛けつつも右手に握る閻魔刀を振るい、青白い魔力刃を飛ばす。

【なにっ!?!】

彼の放った斬撃は黒い魔力砲撃を射出しようとしている悪魔の砲台に直撃するが、掻き消されてしまう。

「うひゃゝ… ディエチのベヴィバレルと相殺した魔力刃なのに…」

「セイン!!」

自分の隣にいるディエチの事をすっかり忘れてしまっているセインに、トーレが発した激が飛ぶ。

「あ… ごめん…」

頭を抑えながらも申し訳なさそうに言うセイン。

しかし、ディエチはモニターに目が釘付けになっていて気付いていない。

「まったく… ディエチ、セインの言った事は気にするな」

トーレが溜め息を吐いた後にディエチを見るが、

「…おいしい」

「…」

彼女は完全に聞いていない。

近くにいるセインが声を掛けても尚、彼女はモニターに顔と目を向けている。

「ディエチ…?」

「…え!？」

彼女の顔の前で手をヒラつかせる事でようやく気付いてもらえたが、何故か間が空いてからディエチはセインを見た。

「いや、呼んでただけど…」

額から一筋の汗を流しながら顔を引き吊らせるセインをディエチはキョトンとした顔で見ている。

「…ごめん…」

「いや、別にいいけどさ？」

キョトン顔を保ったままディエチが何気なく言うと、セインも気にしていない為、手を軽くヒラつかせた。

(まあ、またさつきみたいになったらコッチが困るだけだし…)

【キイイイイアアアアアアア!!!】

微笑みに若干、苦笑が混じっている。

セインは気付かれないように小さく溜め息を吐くが、悪魔の甲高い奇声に顔を上げる。

「え? なに？」

【ぐうつつ!!!!】

急かしいセインが顔を上げた頃には悪魔から黒い魔力砲が放たれ、ネロは右腕を突きだしてデビルブリンガーで迎え打つ姿が。

「なにになに？ 何があったの？」

「黒騎士が悪魔とぶつかってるんスよ」

セインに肩を揺さぶられているのを鬱陶しそうにしているウエンデイが教える。

「いや、なんでそうなったのか知りたいんだけど…」

「観念でもしたんじゃないの？」

肩をガクガクと揺すられるウエンディの代わりにノーヴェが冷たく言い放った。

「ノーヴェって、そればっかだよね…」

「観念したのではなく、逃げるのを止めたようだな。いや…」

悪魔と敵には冷たいノーヴェに向けてセインが静かに言うと、彼女の声が聞こえたのか、チンクが正しい情報を教えようとする。だが、彼女はモニターから目線を外してセインを見た。

「覚悟を決めた… と言うべきか…」

【うおああああああ…！】

ネロがデビルブリンガーを突き出す前に後ろを振り返った事は、モ

ニターをずっと見ていなかったセインだけは気付いていない。
無論、チンク達は彼の背後にある建物の影にギンガやティアナ達が
隠れているのは知らない…

「覚悟？」

「死ぬ覚悟だろ」

首を傾げるセインと鼻で笑いながら言うノーヴェ。

「ノーヴェ！」

【…ああああああ……！！】

態度の悪い妹を叱ろうとするチンクに… いや、彼女達の耳にはネ
ロの叫び声しか聞こえない。

右腕に力を込め、体を震わせるネロ…

【…あああああああ……！！】

右腕が悲鳴を上げ、踏ん張りながらも少しずつ後退するネロ…

「ありゃ、死んだッスね」

「ウエンディ！」

ノーヴェに引き続き、ネロの呆気ない最後を見据えるように言うウ
エンディにもチンクが金色の左目を細める。

「なんだよ、チンク姉…」

「敵なんだからいいじゃないッスか…」

少し落ち込んでいるノーヴェとつまらなそうに言うウェンディ。

「確かにそうだが…」

手の掛かる妹に溜め息ばかりのチンクだったが、異変に気付く。
不意にモニターを見れば完全にフリーズしたうえ、音も止まっているのだから。

「ちょっと、ウー姉！」

【故障かしら…】

椅子から立ち上がったセインが声を上げるが、モニターの中にいる
ウーノは冷静にキーボードを叩いていた。

「今、いいところだったのに！」

【今、原因を解析中よ】

意義を唱えるセインに皆が冷たい視線を注いでいるのに彼女は気付
いていない。

「黒騎士がどうなったのか気になるじゃん…」

「ディエチ？」

騒ぐセインだったが、彼女と同じテーブルにいるウェンディの声に

反応する。

「え… あ！」

ハッとするセインがディエチを見た。

彼女は先程と同様にモニターにしか目がいつていないが、様子がかしい。

「……あ……」

目の瞳孔が開き、微かに体を震わせているディエチは… 確かにあの時の怯えている姿だった…

「ディエチ！！」

腕を抱えて掠れた声を漏らす彼女にセインが駆け寄る…

「どうした！？」

「ディエチ！！」

チンク達がディエチの異変に集まる中でただ動かない人物が一人…

「…」

その女性こそ“セツテ”。彼女は無言でフリーズしたモニターを見詰めている。

トーレでさえディエチに駆け寄っているが、セツテは機械的な性格で無口な為、何を考えているのかは分からない…

「……はあ……あ………」

「ディエチー!!」

体を震わせ、呼吸の荒いディエチの姿も… 彼女の名を叫ぶセインの姿も彼女の目には入らない。

「…」

彼女の目には、自分と同じ“赤い瞳”の黒き騎士の姿しか写らなかった…

…

「映像はまだか!!」

「もう少しです!!」

機動六課の指令室でも同様に…

「シャーリー!!」

「今、やってる…」

【……はあ………はあ………】

いや、こちらの方がましだ。

画像こそは乱れているが、音声は微かながらも聞こえている。

指示を出すグリフィスとはやてに、急いで情報処理しようとするルキノとシャーリー。

映像は乱れていても、男性の声が… 荒い呼吸音が聞こえている。

「……よし！」

「来ます!!」

キーボードを叩き終え、処理が終わったシャーリーと声を上げて知らせるアルト。

【……はぁ……】

「この声は…」

画像も正常に戻ると、そこには大量の土埃が巻き上げられたものしか映っていなかった。

聞こえる途切れどぎれの声に気付いたグリフィスだが、彼は顔をしかめる。

「ネロさん… ですよね？」

「でも、音声が…」

少し首を捻ったルキノがアルトを見るが、彼女も異変には気付いていた。

「いや… どこも異常ないみたいだけど…」

【………はぁ………】

シャーリーもキーボードを打っているが、どこにも機械の異常は見られない。

「あの光…」

「え？」

次第に晴れて行く土埃から立ち昇っている青白い光にはやては見覚えがある。グリフィスが声を漏らす、あの光は…

【……はぁ……はぁ………】

ネロの右腕から絶えず漏れている魔力の光だ。だが、今は違う。

「…」

【……はぁ………】

青白い光は右腕だけではなく、ネロの体全体から立ち昇っていた。彼の荒い呼吸音も間隔が開きはじめ、沈黙に包まれている指令室にはネロの声しか聞こえない…

【……ちっ！！】

ネロは舌打ちしながら地面に蹴りを入れた。

彼の背後に浮かぶ《悪魔》も同じ動きをしている。

（ネロさん…）

真紅の瞳と体に青白い魔力を纏うネロの姿は見たことはあったが、彼の《悪魔》は見たことのないはやてはただ、無言でバックヤードの皆と共にモニターを見詰めて…

…

「おい…」

悪魔の場所までもう少して辿り着くヴィータの目には、巨大な白い光を放つ悪魔と、青白い悪魔と共にいるネロの姿が目に入っていた。

「あれって…」

ヴィータは隣にいるシグナムを見るが、彼女は何も言わずに前を…ニ体の《悪魔》だけを見詰めている。

「…」

シグナムの目が陰しくなっているのを察したヴィータも、それ以上は何も言わない…言えなかった…

…

「フェイトちゃん!!」

「なのは…」

一度は別れたのはがネロの遙か上空にいるフェイトの所に到着、合流を果たす。

「あれ… ネロだよ…ね…?」

少し悲しい顔をしているフェイトの様子を伺いつつ、躊躇いながらも聞いてきたなのはに、フェイトは無言で頷いた。

「とにかく降りよう…」

ネロの事を何かと気にかけていたフェイトを知っているのはが何とか声を掛けようとするが、彼女はボソリと言いながら降下して行く。

(フェイトちゃん…)

彼女に続き、舞い降りるなのはの目には、ネロの背後に出現させた悪魔が消えて行くさまが見えていた…

…

「「…」」

ネロは口も開かず、前方にいる悪魔を睨み続けている。すると、彼の背後にいた悪魔が突如として消え、瞳から放っていた赤い光も静まる。

「ギンガさん…」

ネロの背後にある建物には隠れていたエリオとキャロ、ティアナとギンガがいた。

先程まで激しい叩なり声を上げていたフリードもなんとか落ち着きを取り戻したのでキャロがギンガに声を掛けてみたが…

「あの…」

彼女とエリオはモニターに映るネロを見詰めている。

だが、そのネロの背後にいた悪魔が消えたと同時にキャロに呼ばれた瞬間、彼女はキャロに顔を向けた。

「ティアナをお願い」

突然、ギンガはティアナをエリオとキャロに預けようとする。

「え…」

「ギンガさんは…」

彼女の行動に不意に声を漏らしたキャロと建物の前に出ようとするギンガに問い掛けたエリオ。

「隊長達もこっちに向かってるみたいだし… 私も戦うわ」

「危険です!!」

「それなら私達も!」

立ち止まり、振り返るギンガ。悪魔の攻撃は止んでいるが、また動き出すのは目に見えている。

“行くのならば自分達も”と言いたいキャラと、クロスミラージュを握ったまま項垂れているティアナを抱いているエリオ。

「ダメよ」

一瞬ギンガが困った顔をするが、顔付きが変わり、真顔でそう言い放つ。

「大丈夫です、さっきみたいな足手まといには…！」

「そうじゃないわ…」

一度は悪魔に飲み込まれかけたエリオが声を上げるが、ギンガは首を横に振った後に二人に近付いてしゃがみこむ。

「今のティアナを放っておくワケには行かないし、お願い出来るのはあなた達しかないの」

エリオとキャラと同じ目線にいるギンガが優しく微笑む。

「あ…」

そして、彼女は両手をエリオとキャラの頭に乗せた。
エリオの口から声が漏れる。

「お願い出来る？」

その青い髪が、緑の瞳は仲間であるスバルと同じ…

束の間、沈黙が続き、フリードが微かに鳴き声を出したが：

「…はい！」

「分かりました！」

嘗てネロに彼女と似たような事をされたが、気付いているのは白い飛竜だけ。

「…そう」

ギンガがまた優しく笑い、立ち上がった。

「じゃあ、お願いね？」

「任せて下さい！」

「お氣をつけて！」

左を一度見た後に拳を握り、二人とティアナを見たギンガに元気よく言うエリオとキャロ。

「ええ…」

その言葉にギンガも頷き、建物の影から外へと出た：

：

(どうする…)

先程と比べれば、今は大人しくなっている悪魔を睨むネロ。

(下手にはやれないんだし…)

彼は一度、閻魔刀を見た。

あの悪魔の中にはスバルとダンテがいる。更にレリックの反応があると云う事は、下手に攻撃すれば何が起こるか分からない。暴発か、それとも…

「ちっ…」

いずれにせよ、今の彼には何も出来ない。

——ヒーロー役はくれてやるよ！

ネロの頭の中には一年前の記憶が蘇っていた。

「楽しめるかよ…」

「ネロさん」

小さく舌打ちした後、呟くように言うと、彼は何気なく頭を数回掻く。

やり場のない気持ちに包まれているネロだったが、後ろから聞こえてきた声に彼は振り向いた。

「…確かスバルの…」

「ギンガです。ギンガ・ナカジマ」

昼間のへりの中でシャルに話は聞いていたが、スバルの姉であるギンガがそこには立っている。

「出て来ないほうがいい…」

「分かっています」

ネロはそっぽを向き、右腕を左手で握り締める。

彼の気だるい喋り方に割り込むギンガがゆっくりとネロに近寄る。

「先程はあなたが守ってくれたと言う事も…」

その言葉にネロは微かながら反応した。

「あなたがスバルを助けようとしてくれた事も…」

静まり返っている空間に聞こえていたブリツツキヤリバーのローラーの音が止まった。

「ありがとうございました…」

「礼なんかいらない!!」

音が止まった位置から察するにネロのすぐ後ろだろう。

ギンガの少し暗い声で言った礼の言葉も彼女が喋り終わる前にネロが声を荒げてしまった。

「俺は助けてやれなかったんだぞ…!」

闇魔刀の柄を握り締め、彼の言葉を… 感情を表すように… 悪魔の右腕と刀からは青白い魔力が炎のように揺らめく…

「君の妹を…！」

途中まで振り向いたネロの髪の間から見えた瞳からは、微かにだが赤い光も放っていた…

「彼女を…！」

「助かる見込みはあるんですね？」

今度はネロが喋り終える前にギンガの声が割り込む。

「スバルは… まだ…！」

「…死んじやいないさ…」

妹が悪魔に取り込まれて何とも思わない者など、仲間が得体の知れないものに飲み込まれて心配しない者などいない。

ギンガの叫びに静かだが低く、確実に聞こえる声で言うネロ。

「多分だな…」

「ネロ…！」

スバルを助けられなかったネロは、これ以上ギンガの顔と目を見て話す事は出来なかった。

責められて当然の自分を… 恐らくは自分の《魔人》の姿を見たで

あろう彼女を：

再び悪魔の方に顔を向けたネロだったが、自分の名を呼ぶ者がいた為、ネロとギンガは頭上を見上げる。

「フェイトさん！」

「ギンガ：」

「ネロ： スバルとダンテさんは！？」

舞い降りたフェイトとなのは。

スバルとダンテが悪魔の体内に飲み込まれてしまったのは知っている為、フェイトは少し顔を附せてしまう。

「悪魔の中だ：」

聞かれた質問には取り敢えず応えるネロだが、彼は振り向かず到低いトーンでなのはに返した。

「あの中に二人は：」

フェイトが一度ネロを見た後に悪魔に目を向ける。

「今は静かになってるみたいだけど： レリックの反応があるらしいし、これじゃあ、どうしようもないね：」

「なのは！」

フェイトとギンガに続き、悪魔の方を見たなのはが顔をしかめた。悪魔に飲まれた少女と男の身を按じながら言うと、彼女達の傍に二

つの影が舞い降りる。

「ヴィータちゃん…」

「わりい。スバルはあの中なんだよな？」

「うん…」

着地したヴィータとシグナムの二人にネロ以外の三人の注目が集まる。

遅れた事を詫びながらもヴィータは一度ネロの背中を見た後に悪魔を見詰めた。

なのはも言いながら、また顔を俯かせてしまう。

「シグナム…」

「遅れてすまん。テストロッサ… ギンガも…」

シグナムはネロのすぐ隣に舞い降り、フェイトとギンガを見る。

フェイトもギンガも浮かない顔をしていたが、彼女は僅かに眉をひそめた後にネロの隣に並んだ。

「…ネロ」

彼女は目の前にいる、悪魔を睨む銀髪の男の名を呼ぶが、彼は微動だにせずになんの反応もない。

髪に隠れて見えない目の部分からは赤い光が…

「気にする必要はない。お前のせいでは…」

「俺のせいだ」

確実に責任を感じているネロに向けて励まそうとするシグナムだったが、その言葉も彼の口から発せられた短い台詞によって遮断されてしまう。

「俺がしくじったせいで助けられなかった…」

口調は冷静だが、感情までは隠せていない。その証拠にネロの瞳からは赤い光が… 右腕からは強い光を放っていた。

「…」

沈黙に包まれた6人の間には、夜風が吹き抜ける音だけが聞こえる。その風は冷たいようにも、生暖かいようにも感じられた。

「……なあ…」

だが、その沈黙もすぐに破られる。長いようにも感じた時間だったが、実際は僅か数秒しかなかったとは、分からないだろう。

「さっきのお前の後ろにいた“あれ”…」

「ヴィータ！」

「いいよ。シグナム…」

頭にどうしても引っ掛かっている、気になっていた事を聞こうとするヴィータを咎めようとするシグナム。

ネロの背後にいたもの：

それをどうしても聞いてしまったヴィータに鋭い眼孔を向けるシグナムにネロは振り返らないまま言った。

「見られたんならしかない事なんだし： 六課にいるみんなも見てたんだろ？」

平静を装いつつも彼は振り返えない。振り返えない。

「……おそらくそうだ：」

「気休めはよせよ」

自分を氣遣つての言葉だと思い、あまりに素っ気ない返事で返すネロ。

「どうせ見てるんだろ？ おい、ルキノ：」

小さく自嘲気味にフツと笑った後にルキノを呼ぼうとしたネロだったが、彼は唐突にそれを中断。口を閉ざしてしまう。

「…て： 悪魔と話したがるやつなんていないか：」

【失礼します】

【お待たせしてすみません】

また自嘲しながら笑っていたが、ネロの後ろ： なのは達の前にはルキノとアルトの映っているモニターが出現した。

…

『…うつ……』

悪魔の体内いるスバルが意識を取り戻し、ゆっくりと目を開けた。

『…くうつ……うつ……』

彼女は俯せに倒れていた状態から徐々に体を起こして辺りを見渡す。
そこは…

『…こつて…』

彼女の辺り一面は全てが火の海。炎の檻に取り囲まれている。

『あの時の…』

それは忘れもしない4年前に彼女が巻き込まれた空港火災の現場だ。
ふと見上げれば、彼女の前には女神を模した巨大な石像がある。

『なんでここに…』

スバルは一人思案する。

自分は機動六課の一員として悪魔と戦っていた筈。その証拠に彼女の着ているのは間違いなくバリアジャケットであり、右腕にはリボルバーナックルが… 両足にはマッハキャリバーが装着されている。

『あ！』

そこで、スバルは思い出した。自分が悪魔に飲み込まれたという事に気づき、ハツとする。

『そうだ… 私は…』

辺りを再び見渡すが、燃え盛る炎に囲まれ、どうしようもない。

『出口を探さない… マツハキヤリバー… うわあああっ!!』

相棒の名を呼びながら、動こうとした瞬間、スバルがつまづいてしまう。

『痛った…』

打ち付けた膝を擦るスバルだが、身体能力が高い彼女がなんの凹凸も障害のない地面でこけるなど有り得ない。

『ちよつと、マツハキヤリバー…』

痛む膝に手を当てながらもぼやくスバルが言うが、マツハキヤリバーからはなんの応答もない。

『マツハキヤリバー?』

AIの搭載されているマツハキヤリバーが返事を返さないのを不思議に思ったスバルが首を捻るが、やはり応答はないまま。

『ちよつと、どうしたの…』

いくら言っても何も言わないマツハキヤリバーに更に首を捻るスバル。

しかし、その瞬間に地面が激しく揺れだした。

『え！？ なに？』

地響きとも地震とも取れる現状に焦るスバル。その瞬間、地面に固い何かを叩き付けるような轟音が響く。

『え…』

彼女が音と聞こえ、振動を発せられた方向を見れば、そこには巨大な石像が台座から外れ、地面に着地。片膝を着いている状態でいた。今の自分がどうなっているのか、急に動き出した石像に頭が着いて行けないスバルはゆっくり立ち上がる石像に目が釘付けになっている。

しかし、その体長20メートルはあろうかと言う女神の石像は、スバル目掛けて拳を突き付けて来た。

『くっ！』

マツハキヤリバーに魔力を注ぎ込むが、応答のないどころか動きもせず、ウインググロードも展開されない。

『え！？ うわあああああっ！！』

彼女に一瞬の動揺が見られたが、咄嗟に自力での跳躍により後方に飛んだ。

石像の力は凄まじく、拳の叩き付けられた地面は割れるどころか大穴が空く。

『くっ…!』

(すごい威力…!! あんなのをまともに受けたら…)

ようやく“この空間”では魔法は使えないと察しが着いたスバルの顔が険しくなる。

だが、距離を取ったとはいえ、僅かに20メートル四方の空間ではこの石像には… しかも魔法なしでは勝てるワケがない。

(どうする…)

焦りは次第に大きくなって行く中でもなんとか冷静に対処しようとするスバル。

そして、彼女はふと気が付いた。

魔法“は”使えないという事に。

『……あ…!』

何かに気付いたスバルは自分の右手の掌を見詰めた。

『…でも、あれは……』

リボルバーナックルを装着したまま拳を握り締めようとしたが、微かにピクツと動かしただけで迫る石像に目を向ける。

その瞬間、石像の背中から翼が展開。

『…え!?!?』

突如、無数の羽が撃ち放たれ、スバルを襲う。

『ちょっ…!』

数えきれはしないが、数はざっと300はあるだろう羽を跳躍力でかわし、回避。更には腕と脚で捌き、なんとか対応する。

『うっ…!』

その羽の内、捌ききれなかった羽がバリアジャケットを纏っていないスバルの右頬と右脇腹、左太ももを掠め…

『あっ…!』

バリアジャケットでカバーされている左腕にまでも突き刺さった。

『くっ!………ああっ………!』

刺さった瞬間に腕に焼けた鉄を押し当てられたような感覚が走る。しかし、それも情景反射ですぐに抜き、左手を押さえながらも彼女は苦悶の声を漏らす。

『くそっ…!』

白いバリアジャケットが赤い鮮血で滲む。
若干スバルの息が荒いが、“女神さま”から目を離さない。

…

『さてと…』

スバルの後を追ひ、悪魔の体内にいるダンテが辿り着いたのは…

『嬢ちゃんはどこだ？』

彼がいまいるのは“普通の家の庭”。わりかし庭も広く、木も植えられていた。

…

「ルキノ…」

「アルト、状況は？」

【ご報告があります】

【あのアンノウンについて分かった事がいくつか】

ポツリと呟くように言ったフェイトと頭を切り替えるなのは。通信士のルキノとアルトが一度顔を見合わせた。

【失礼します。なのは隊長、フェイト隊長】

二人は一度ネロのいる方を見たような気がするが、彼女達のとなりにシャーリーが映っているモニターが浮かび上がる。

「シャーリー…」

「分かった事があるって言ったな？」

【あ、はい】

振り返りもしないネロとは違い、彼の一番近くにいるシグナムとヴィータはシャーリーの映るモニターの方を向く。

【お分かりでしょうが、アンノウンはいまだに健在。レリックの反応は消えていません】

淡々と解説するシャーリーの話に誰もが耳を傾けた。

【二つ目に、正確な数は不明ですが、アンノウンから感知されたレリックの反応は最低でも6つ】

「そんなに!？」

【はい】

悪魔から感知されるレリックの反応の多さに驚くのはに向けて、シャーリーの話は続く。

【それとこれは推測なんです、先ほどの戦闘でアンノウンが放っていた強い魔力反応の正体もレリックかと…】

「さっきまであたしらが戦ってたデカイやつがか？」

ヴィータがグラーフアイゼンを肩に担ぎ上げると、シャーリーがヴ

イータの方を向いた。

【すみません： 魔力の反応もレリックとは異なりましたが、一度消えた反応が復活し： あんなことになるなんて：】

「仕方ないよ」

「お前は悪くない」

話の最後の方はシャーリーも少し顔を俯かせてしまうが、責任を感じている彼女を励まそうとフェイトとシグナムが声を掛ける。

「それと最後にもう一つ：」

【まだあるのか？】

六課の指令室にいるシャーリーが再びキーボードを叩き始める。巨大モニターには一番大きなものに今は静まっている悪魔が、他にはなのはやフェイト、建物の影に隠れているエリオ達のもが：

「これなんですが：」

前線メンバーの皆が同様に証明を向いている画像にも関わらず、ネロだけは上空から映しているようなもの。

シャーリーが最後のキーを打ち込んだ瞬間に、“赤い瞳”のネロが映っているモニターの隣に出てきた画像は、背後に悪魔を出現させているネロの画像だった。

「これ：」

「さっきのやつか…」

なのはとヴィータが… 更にはギンガ、シグナムとフェイトがネロの背中を見る。

彼もなんの画像が出てきたのか見なくても予想はついている。

二人の声と集まる視線に苛立ち、一度舌打ちした。

【罵りたきゃ、好きなだけ罵れよ】

【シャーリー、画像を消せ】

「いや… あの…」

モニターに映るネロが瞼を閉じる事で、その真紅の瞳は閉ざされた。目付きが少しきつくなるシグナムに焦りを感じ、シャーリーが再びキーボードを叩く作業を再開する。

【要件なんです…】

シグナム達の注目がシャーリーに集まっていると、彼女の隣に出ているネロの画像の隣に何かのバイタルを示すものが出てきた。

【その姿になっている間のネロさんから、ロストログアと同じ反応が感知されました】

「なに!?!」

「ロストログアの!?!」

【更にあのアンノウンと同じで、測定不能の強大な魔力もです】

衝撃の事実の声が上がったシグナムとフェイト。
そして再び、ネロに注目が注ぐ。

：

『……うつ……！』

悪魔の中ではスバルと石像の戦いが続いていた。
彼女の体は所々に傷を負い、痛む左腕を握り締める。

『…また？』

体が削り取られ、ヒビが入っていた石像が修復。元の傷一つない石像へと戻る。

地面には滴る血溜まり… 迫る巨大な拳をかわそうとしたが…

『うわぁあっつ！！』

今は魔法の使えないスバルが自分の血で足を滑らせてしまう。

（しまっ…！！）

——ギイイイイイイイイイイインツッ！！！！

手を地に突き、咄嗟に目を閉じてしまうが…

（あれ…？）

石像の拳は来ない。

代わりにけたたましい金属音が鳴り響いていたのにスバルは恐る恐る目を開けた。

『ギリギリ間に合ったな…』

彼女の前にいるのは“赤い悪魔”…

『大丈夫か？ 嬢ちゃん？』

『え…』

束の間、思考が止まってしまうが、その悪魔に声を掛けられてしまい、スバルは声を漏らした。

『ちょっと待ってな。すぐに片付ける』

『あ…』

なぜ、自分を助けてくれたのか分からなかったスバルだが、声を二重に重なってこそいるものの、声と口調…

『はああああああっ…！！！！』

その手にする剣の形からその悪魔が“ダンテ”である事に気が付いた。

『…ダンテさ…！！！！』

魔法の使えない筈の空間で、剣の刀身に真紅の光が纏うさまにスバルは看取れていたが、石像が拳を振り上げているのにハツとし、ダシテに叫ぼうとするが…

『『イイイイイツツ…!!』』

彼はスバルの制止も聞かずに悪魔に向かって神速の跳躍で間合いを詰めた…

『『…ヤアアアアアアアアッ!!!!!!』』

振り抜いた剣には、無慈悲な悪魔を滅する力を…

弱き者を救う為に、その“誇り高き魂”を《反逆の魔剣》に込めて…

Episode: 48 **Nightmare** 〈悪夢〉 (後書き)

〜第49話予告〜

「あれは!?!」

【アンノウンの魔力反応が増大していきます!!】

ここにいるは、赤き瞳…

「もう、行っているいな…」

その瞳は、彼の燃え盛る怒りの感情を表すかのよう…

Episode..49〈覚めぬ夢へ終わらなき悪夢〉（前書き）

赤き狩人に眠る力は、全てに抗う力…

黒き騎士に眠る力は…

Episode..49〈覚めぬ夢へ終わりなき悪夢〉

『ううつ…!』

魔法なしで石像と戦う疲弊したスバル：

流石の彼女も無理がありすぎたのか、石像の手に捕まり、苦悶の声を漏らしていた。

『…』

一方で、ダンテがいる場所は霊園。

彼の前にある地面に埋められた墓石には、英字らしき文字で亡くなった人の名前が彫られている。

『あああ…!』

掴まれたスバルの体が軋み、掠れ声の悲鳴を…
彼女の命が奪われようとした、その時だった。

『ううつうつ…!!』

歯を食い縛り、スバルの瞳が緑から金色に変わる…

『…なんだ?』

何かを感じ取ったダンテが、不意に辺りを見回す。

『ああああああっ…!!』

りに赤い《魔人》は駆ける…
彼がいた、“クイント”と名前の彫られた墓石のある場所には、三つの花束が添えられていた…

…

「ロストログア反応がネロから…?」

【はい】

悪魔の外にいるフェイトが口を開く。

彼女達の前にいるネロは、フェイト達もモニターに映るルキノとアルト、シャーリーを見てくださいはしない。

「しかし、何故だ？」

【分かりません。ですが、ロストログアの反応も、測定不能の魔力反応も間違いではないようで…】

「この刀が原因かな？」

今度はシグナムが聞く。シャーリーのモニターの隣には赤い瞳…

青白い悪魔と共にいるネロの画像の隣に測定データを出した。

赤い字で書かれているデータこそが、ロストログア反応。

そして、その下に書かれているものが悪魔の魔力を表すものである。

モニターのシャーリーがキーボードを叩いていると、ネロが声を掛けてきた。

「その剣が… ですか？」

【ああ】

六課の指令室にある巨大モニターに映るネロは未だに目を閉じているまま。

彼の“赤い瞳”は瞼の向こうにあるのだろうか、軽く上げた右手に持っている閻魔刀に皆の注目が集まる。

【一つ聞いておくけど… 俺から関知された反応はレリックじゃないんだよね？】

「え？ あ、はい！」

どうしてそんな事を聞くのかシャーリーは分からなかったが、取り敢えずはネロの問いに応える。

【じゃあ、閻魔刀だろ】

「ですが… その剣がロストロギアなら、もっと前に分かっていたでしょうし…」

「今のネロさんからも、その剣からもロストロギア反応はありません」

やたら目をちらつかせるルキノとアルト。

食堂の話は聞いていたが、まさかネロの背後に《悪魔》が出現するとは思ってもみなかった。

【右腕の中にレリックが二回、入っちゃった事があるが… それは出したんだし、これくらいしか…】

「ええっ!？」

上げていた右腕を下ろすネロ。

彼の右手に握られている魔剣に目が行くが、ネロの何気なく話した事実にシャーリーが驚きの声を…

「レリックを!？」

「二回？」

【大袈裟に騒ぐなよ…】

いや、ルキノとアルトだ。

騒がしい彼女達にネロが目を瞑ったまま、やるせないカンジになる。

【レリックもヤバいものらしいが… コイツもかなりヤバいだろうな…】

目を開けないまま話すネロがフツと笑っている。

【なんでも、スパーダが人界と魔界を切り離す為に使った剣らしいし…】

だが、途中でネロは話すのを止めて…

【…俺、いま何か言ってた?】

「え？」

「なになって…」

「その剣がロストログアなんじゃないのかって、ご自分から…」

突然ネロが聞いてきた事に首を傾げるが、

【…またかよ…】

彼は“しくじった”と言わんばかりに左手で頭を押さえる。

「あの…？」

「どうかなさいましたか？」

【…別に】

少し躊躇いながら聞いているルキノとアルトだが、小さく息を吐いた後に素っ気ない返事で返すネロが手で押さえられていない右目を開く。

その瞳は“赤”ではなく、“青”に戻っていた。

「はあ…」

（いらない事、喋っちまった…）

溜め息を吐きつつも、目を瞑っている間に制限的なデビルトリガーを解除出来なかった事を気にする。

【…ネロさん？】

「……はやて…」

彼の隣にははやてが映るモニターが出てきた。
ネロはポツリと彼女の名を口にする。

【“また” やってしもうたってカンジやな？】

彼女には筒抜けだった。

「何がだ？」

【思ってる事、全部口にしてしまうやつ。前にもありましたやん？】

しらを切ろうとするが、はやてはニコツと笑う。

「…あつたつけ？」

【初めてお会いした時に教会で】

ネロの顔が若干引き吊ってしまった。

あの時にネロは、悪魔を憎む気持ちから衝動的にデビルトリガーを
発動。

口から発せられた言葉は全て、彼の魂の叫び…

「……ああ…」

またしてもネロの表情がやるせなくなってしまうが、はやての話は
続く。

「“あの力”を使つとる間は思つてゐる事、ポンポン言つてまうみた
いやな？」

【いや… まあ…】

ネロも頭を押さえていた手を放し、彼が映っているモニターも頭上
からではなく横からのものに変わる。

「あれやろ？ その剣がロストロギアやつて分かつてもうたら、取
り上げられるとか思つとるワケやん？」

ズバリ言うはやて。

彼女の回りにいるロングアーチが淡々と話している彼女に目を向け
ていた。

【それ言うかよ…】

「はつきり言わへんネロさんの為を思つてこそその事や！」

部隊長、ここに極まると言つたものか。

さっきからうだつの上がないネロにはやてがモニターに向かつて
指を突き立てる。

「私がなんとかするから気にせんでええよ」

「八神部隊長！！」

指を差したまま微笑みを浮かべる彼女の隣にいるグリフィスが声を
上げるが、

「それ、大切なもんなんやろ？」

はやてが手で制し、話を続ける。

「やったら、取り上げたりせえへんよ。最初に言うたやん」

はやてがゆっくりと手を下ろし、モニターを見詰める。

彼女の姿に皆が口を閉ざし、見ていた。

「それに、その剣はネロさんの…」

「大変です！！」

はやてが少し顔を俯かせそうになっていると、シャーリーの声が割り込む。

「魔力反応、増大！！」

【動き出したか…】

モニターに映るネロも右腕の疼きを感じ取り、活動を停止していた悪魔に目を向けた。

…

『はあ、はあ、はあ…』

肩で息をしているのは“金色の瞳”のスバル。

『くう…うつ…!』

彼女の前にはいくら破壊しようとしても高速再生によって復活を遂げる石像がいた。

左手と体は悲鳴を上げ、彼女の瞳が揺れ… 瞳の色も金から緑に戻る…

『『音が止んだ…』』

暗黒の世界を駆け抜ける《魔人》と化したダンテ。

その胸には亀裂が走り、ネロの《悪魔の右腕》と同様に光を発している。

『『早くしないと…!』』

ただ、色はネロと違い、黄色。

力尽きようとしている少女を救うべく、その脚に力を込めて地を強く蹴った。

…

「おい、マジかよ…」

「またか…」

悪魔が強い光を発し、更に体が大きくなろうとしている。

その様子にヴィータの顔が引き吊り、シグナムが眉をひそめる。

「マズイね… どんどん大きくなって…」

「また何をやるか分かりませんよ!」

白い光を放つ異形の悪魔ナイトメアを睨み、レイジングハートを両手で持つのはと構えを取るギンガ。

「シャーリー! どうしたらいいの?」

【いま、解析の途中なんですが…】

打つ手なしの状況の中でも、何もせずにはいられない。

展開されているモニターを見たフェイトの目には、必死で悪魔を分析しようとキーボードを叩いていた。

「でも、レリックもあるし… 純粹魔力で破壊してもエネルギーが大きすぎるから、暴発の恐れも…」

【…なあ】

焦りを感じ、手と目を忙しく動かしていたシャーリーが聞こえてきた声に反応し、顔を上げる。

「俺の… 閻魔刀の攻撃も効かないのか?」

【え…】

ネロはいつの間にか振り向き、シャーリーの映っているモニターを見詰めている。

「それは… やっぱりダメだと思いますが…」

【解析してくれ】

モニターに映るネロが一度閻魔刀を見た。

彼が何を言いたいのかわからないシャーリーに向けて、ネロは彼女が喋り終える前に解析するように求める。

【“思う”じゃなくて、はっきりした結論が欲しいんだ】

「わ、わかりました！」

まだネロに対する抵抗がシャーリーにあるのかどうかは分からないが、彼女は慌てて解析を始める。

「ネロ？」

「どうかしたの？」

悪魔をこのまま倒せない事に苛立っているのか、スバルを救えなかった自分を責めているのか…

（やれるはずだ…）

彼の耳にはシグナムとなのはの言葉が聞こえていない。

彼はただ黙っているだけ…

（この閻魔刀なら…）

堪らずに石像が悲鳴を上げる。

だが、ダンテは決して手を止めたりなどしない。

この少女の“悪夢”を拭い去る為に、ダンテは戦う…

：

「あのさあ…」

廃棄都市にいるのは達は無言を貫き、バックヤードからの情報を待ちつつも悪魔を睨んでいた。

だが、その沈黙もヴィータによって破られてしまう。

「お前がさっき使ってた力ってのが、もしかして…」

「デビルトリガー…」

ヴィータはグラーフアイゼンを肩に担ぐ。

彼女は今いる位置から動こうとはしないが、聞かれた問いにネロも静かに応えた。

「“悪魔への引き金”だ…」

ネロが振り返りつつ、フツと笑ってみせる。

それは不敵な笑みにも、自嘲しているようにも見えた。

「会議室で聞いた話じゃ身体能力が上がるとか、傷が回復するとか言ってたけど… あれじゃあ完全に…」

「ヴィータ、止めろ」

小さく息を吐き出すヴィータの隣にいたシグナムがこれから彼女が言おうとしている事を咎めようとするが…

「悪魔…」

ネロが完全に振り返り、ヴィータと同様に閻魔刀を肩に担いだ。

「まあ、ちゃんと話してなかったが、悪魔だって事は言っているんだし…」

「ネロ!!」

振り返った彼の姿を見て、フェイトが声を上げる。

今までは背中しか見えていなかったが彼の服は腹と肩の部分が破け、そこが紺色の服でも分かるように血が固まり、黒くなっている事に気が付く。

「もしかして、あの時に！」

「怪我してたの!？」

ギンガには、上空からネロが悪魔の攻撃で建物に叩き付けられるのが見えていた。

だが、あの時は彼に駆け寄ろうにも悪魔の攻撃に阻まれ、助けに行く事は叶わなかった。

「ああ、大丈夫だよ。大した事ないし、もう治ったから」

慌ててネロに駆け寄るフェイトだが、彼は発言すると共に服を捲り上げて、腹の傷がある筈の部分を見せる。

「え…」

「傷が… ない？」

立ち止まるフェイトと、驚きの声を上げたのは。

「あと、ココとココもな？」

ネロは服から手を放し、右肩の部分を捲った後に左頬を指差す。

「前に… 私達を庇って受けた肩の傷が治っていたのも、その力か…」

「いや、あれは違うな…」

ネロの何ともない様子に、一人納得しているシグナム。

だが、彼女の発言をネロは否定すると、頬に当てていた指を下ろした。

「あれは俺自身の治癒能力で回復したんだ」

「え…？」

「なに？」

ネロの衝撃の言葉にすこし戸惑うフェイトと、眉をひそめるシグナム。

「一年前に俺の中に眠っている悪魔が目覚めてから手に入れた力だ。あの時は、悪魔を倒す為にペース配分も考えずにデビルトリガーを使っちゃったから、完全に回復する事が出来なかったんだよ…」

「そう言えば…！」

「聖王教会に運んだ時には、肩の傷があったな…」

確かに、デビルトリガーを使う事で傷が癒えるのならば、聖王教会に運ばれた時にネロの肩に傷はなかった筈。

だが、彼は悪魔を倒す為にデビルトリガーを発動。

攻撃の方に魔力を使ってしまった為、傷は治せていなかった。

「なるほど… 私と戦ったせいで疲弊し、さらにその力を悪魔を倒す為に使ってしまったから傷を癒せなかったと言うワケか…」

納得が行き、ネロに少し申し訳なさそうにしているシグナムだが…

「いや、あの時は腹が減ってただけだから…」

ネロが何気無く言った言葉に皆がフリーズし、夜風が吹き抜ける音と、悪魔の呻き声が聞こえる。

「え…」

「お腹が減ってた…？」

「ああ」

フェイトとなのはの言葉も平然と…

「シグナム副隊長と戦ったからじゃ…」

「そうだけど、まる2日はロクにメシを食ってなかったからさ？」

ギンガも呆気にとられているが、これも当たり前に応える。

「いや、俺の体ってダンテと違って普通の人間と変わらないし…」

頬を数回掻きつつも話すネロが右腕を上げる。

その瞬間に激しい金属音が鳴り響き、火花が散った。

「貴様…」

レヴァンティンを鞘から抜き、降り下ろしたシグナムが…

「人がせつかく心配していたと言うのに…」

彼女の額には青筋が浮かび、顔をヒクつかせている…

「シグナム！？」

「ちよっ！ シグナムさん！」

「今は戦闘中ですよ！！」

体には負のオーラが纏っているシグナムに慌て、狼狽えるフェイト

となのは、ギンガ。

「貴様は私を侮辱しているのか!!!」

「いや…」

怒り心頭の烈火の将、剣の騎士に、特に反応のないネロ。そんな二人と慌てる三人を尻目にヴィータが口を開いた。

「お前、本当にダンテの息子じゃねえのか？」

「違うって言っただろ」

「でも似てるぞ？」

「似てない」

レヴァンティンを両手で持っているシグナムと、闇魔刀を片手で持ち、彼女とぶつかりながらも話すネロ。

だが、彼のポーカーフェイスから繰り出される言葉は全て冷ややか。

「ヴィータちゃんも見えてないで手伝って！」

「シグナム落ち着いて!!!」

「シグナム副隊長!!!」

案の定、バインドで縛られたシグナムがなのは達によって取り押さえられるが、結局ヴィータは手伝わず、ネロもシグナムから悪魔に目移す。

「なあ…」

「まだあるのか？」

今度は振り向かずに関くネロ。

右腕の疼きも大きくなり、いつ悪魔に何が起きてもおかしくない。早く倒そうにも、今のままでは…

「お前がさっきまで目が赤かったのって、スバルを助けようとした時の傷を治す為にそのデビルトリガーとか言うのを使っ…」

【失礼します】

ヴィータの話している最中、ネロの目付きが若干険しくなっていたのに彼女は気付いていないが、背後から聞こえてきた声にヴィータが反応する。

【解析の結果ができました】

「どうなんだ？」

モニターに映るシャリーの方をネロは決して振り向きはしないで、蠢き続けているナイトメアを睨み付けていた。

【はい。結論から言いますと、“ネロさんの持っている剣”の攻撃が有効であると発覚しました】

「じゃあ、行っているいいよな？」

【いえ、ここから先が重要です】

闇魔刀の攻撃ならば倒せると言うのにネロは振り返らないまま喋るが、シャーリーの話は終わっていないかった。

【効果的なのはあなたの剣による直接的なダメージのみで、魔力を込めたダメージではアンノウンの体内にあるレリックが暴発を起こすの可能性があります】

更に展開されたモニターには先ほどネロがナイトメアの球体に闇魔刀を突き刺した画像と、デビルブリンガーで殴り付けた画像が。闇魔刀のものには何も書かれていないが、デビルブリンガーのものには赤字で何か書かれている。

【しかし、剣で直接攻撃するとなれば、アンノウンの攻撃をかわしながら懷に飛び込まなければなりません】

「なるほどな…」

シャーリーの説明を終え、シグナムが静かに言う。彼女の後ろには、息の荒いフェイト達がいた。

「それともう一つ。ティアナ」

【はい…】

シャーリーが巨大モニターに映るフォワードメンバーの内のティアナを見たが、彼女の表情は暗く、浮かないカンジ。

【アンノウンの体内から生命反応が二つ感知されたの。つまり…】

「スバルが生きてるって事ですか!？」

ティアナの周りにいるエリオとキャロが互いに顔を見合せ、表情が少し明るくなった。

「無事かどうかまでは分からないけどね…」

【もう一つの反応はダンテだろ？】

シャーリーが苦笑しつつも首を捻っていると、今度はネロが声を掛けてくる。

「はい。そうでしょうが…… ええっ!？」

【どうした!？】

【シャーリー?】

再びキーボードを叩き始めたシャーリーが驚きの声を上げた。
彼女の様子にヴィータとフェイトが声を掛ける。

「何かあったのか、シャーリー!？」

「それが…」

六課の指令室にいるグリフィスが問うが、彼女は目も向けずにキーボードを必死で叩いている。

「アンノウンから膨大な魔力反応が!！」

「また動き始めたからか!？」

アルトも慌てている。ふとモニターを見上げるグリフィスの目には、蠢きながらも体がスライムのように溶け始めたナイトメアが写っていた。

「いえ!! アンノウンからではなく、アンノウンの“体内”からです!!」

「なんだって!？」

同じく、急いで状況を把握しようとするルキノ。

「シャーリー!!」

「これは…」

指示を促すはやてが顔を向けた先には、信じられないものを目にしたとでも言いたいシャーリーが：

「アンノウンから微弱な魔力反応です!! でも、これって…」

巨大モニターには、ナイトメアの体から周囲に掛けて小さな魔力反応が無数に展開されている。

「またかよ…」

廃棄都市にいるネロは呆れた様子で、小さく息を吐きながら言った。

「そんな！」

「倒したはずなのに……！」

建物の影に隠れているエリオとキャロの顔には動揺の色が走る。

「……」

ただ、ティアナだけは無言でモニターを見詰めている。

そこには、スライムのように体が溶けているナイトメアの体から次々に悪魔が飛び出してくると言う、最悪のものだった。

「グルル……」

そのモニターから目を背けたフリードが建物の壁……向こう側にいる悪魔を感じ取り、卯なり声を上げる……

「シャーリー……あのザコ共からレリックの反応はあるか？」

【い……いえ！　レリックの反応は一番大きなアンノウンのみから感知されます！】

「そうか……」

突然モニターを見た事と、悪魔をザコ呼ばわりするネロに、一瞬驚いたシャーリーだったが、レリックの反応は悪魔からナイトメア。

他の悪魔からは感知されない。

「じゃあ、心置き無く戦え……」

【待って下さい！！ アンノウンから強力な魔力反応が…！！】

フツと笑いつつ、腕を組むネロ。

だが、それは割り込んできたシャーリーの声によって遮断されてしまう。

「魔力反応！？」

「まさか、また！」

【でも、これって…】

慌てて構えるフェイトとギンガ。

モニターの中のシャーリーが呟くように言っていたが…

「「うあっ！！？」」

ネロが声を上げて《魔人》の姿に…

「えっ！？」

「ネロ！！」

声を上げるフェイトとシグナムの目には体から青白い魔力を立ち昇らせるネロの姿が…

「ちょっと！ どうしたの！？」

「あ…」

同じく慌てるのはと、不意に声を漏らすギンガ。
そこには瞳から赤い光を放つネロが…

「「……どうなってやがる!!」」

「…どうした？」

自分の両腕と体を見回すネロが焦りながらも声を上げた。
その様子にヴィータは比較的に冷静に… 少し間が空いてから問い
掛ける。

「「デビルトリガーが解除出来ない!!」」

彼の背後には《悪魔》が出現こそしていないが、その真紅の瞳をヴ
ィータはただ黙って見詰めていた…

…

「ネロさん…」

【チッ!!】

ネロの名を静かに口にするはやて。彼女が見詰めるモニターには戸
惑いながらも苛つくネロの姿が…

彼ははやてに気付いていないが、急な事態と焦りに舌打ちする。

「これって…」

「何か分かったですか！？ シャーリー？」

何かの解析をしていたシャーリーの手が止まる。
彼女の様子にリインが問い掛けると…

「見て下さい！！」

巨大モニターに映っている魔力反応の分布図にはネロを表す巨大な青い点と、アンノウンを表す黄色点。更にナイトメアの巨大な黄色点に…

「あれは？」

ナイトメアと重なっている“一番大きな赤い点”。

「詳しくは分かりませんが、ネロさんと同種の魔力反応がアンノウンの中から感知されました。つまり…」

「あれが原因ってワケやな…」

声を上げるグリフィスに続くシャーリー。

“赤い巨大な魔力反応”がネロに強制的にデビルトリガーを発動させたものであるとはやては推測する。

…

「「…まさか…」」

ネロはふと、ナイトメアのいる方角に顔を向けた。
そこには無数の悪魔が次々に出現し、ナイトメアも溶けた状態から
元の大きく隆起した状態に戻ろうとしている。

「ネロ…?」

彼の青白い魔力を纏った背中に声を掛けるフェイトだが…

「フリード止めて!!」

「フリード!!」

聞こえてきた声に反応して振り向いた。

「キャロ…」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!!!」

二人の名を呼ぼうとした瞬間、フリードが凄まじい雄叫びを上げた。

「「…」」

その鳴き声は、遙か向こうにいる悪魔に向けてではなく目の前にい
る青き光を纏った黒き騎士に向けて放たれたものだった。

闇夜を照らす白に混ざった黒の光… 青の光とフリードの火球が加
わる。

「どうした!! 何故、フリードが?」

キャロの制止も聞かず、火球が収束されていく中でネロは無言で見詰め… シグナムが狼狽える。

「止めるんだフリード!!」

「フリード!!」

必死で呼び止めようとするエリオとキャロ。

だが、その白き飛竜の赤眼にはネロしか写っていない。

「「…：そいつにとっちゃ…」」

口を開いたネロの声が二重に重なりつつ…

「「俺は主人を殺そうとするアイツらと一緒に…」」

自嘲気味にフツと笑うネロが右腕を見詰めた。

「「いや…」」

右腕から目を移し、巨体を誇るフリードを見る…

「「みんなもそうか…」」

「…」

首を横に数回振るとネロを無言で見詰めるヴィータ。

彼女の目には、ネロが自分達の事を言っているのか… それとも、違う人達の事を言っているのか分からなかった。

：

「フリードが…！」

モニターに映っているのは、荒々しい炎を吐き出そうとしているフリードがいた。

その姿を目にしたルキノが不意に声を出し、

「制御出来ていた筈じゃないのか!？」

焦りが生じるグリフィス。

「出来ています!! フリードのバイタルには何処も異常ありません!!」

「もしかして…」

キーボードを叩くアルトが振り返った。

そして、それと同じくシャーリーが弦きに等しい声を出す。

「フリード自身の意味なの…?」

【フリード!!】

【オオオオツツ!!!!!!】

彼女が顔を上げた先には、必死でフリードを止めようとするキャロと、心を通わせた召喚士を守るべく立つフリードが。

「フリード、止めるです!!」

リインが叫んだ瞬間、その炎は放たれた…

…

「散って!!」

叫ぶのはだが、彼女の前に飛び込む影が…

「え…」

「ネロ…」

通り過ぎる銀髪の男… 青白い光が炎のように揺れながらも、彼は右腕を振り抜いた。

「「はああああああっ!!!!」」

デビルブリンガーも出現させるまでもなく彼の拳は火球を弾き飛ばし、後方に着弾。爆炎を上げてナイトメアから出てきた悪魔を焼き尽くす。

「「はやて!!」」

後方に跳び、ネロが叫んだ。

自分に向かって火球を吐き出した飛竜には目もくれずに、彼が睨む

のは真の敵…

…

【俺はもう行くぞ!!　ここでぐずぐずしてなんかいらねえからな!!】

「ちよつとネロさん!!」

背負う大剣を抜き、自分に向けて放たれる火球を弾くネロに向けてルキノが声を上げる。

【早く悪魔を倒さないといけないし、この姿も…!!】

【ネロ!!】

【早く行け!!】

喋っている最中のネロの動きが止まった。

彼の前にシグナムとヴィータが立ち塞がり、フリードの火球を切り裂き… 弾く。

【お前はテストロッサ達と共に悪魔の所に向かえ!　フリードは私達が止める】

【キャロ!!　フリードを落ち着かせろ!!】

剣を構えるシグナムとキャロにフリードを静めるように促すヴィー

夕だが：

【俺がここから離れれば大人しくなるってはっきり言えよ】

思っている事を言い放つネロにシャーリーが顔を引き吊らせる。

「本当にあの姿の時は、なんでも言っちゃうんですね…」

「シャーリー、ネロさんと回線繋いで！」

はやてが先程言った事を思い出す。

元々皮肉屋だが、遠慮なく言い放つ彼の姿はいつものネロ以上のよ
うな気がした。

何とも言えない顔でいたシャーリーもはやての声に反応し、我に返
る。

Episode..49〈覚めぬ夢へ終わりなき悪夢〉（後書き）

〈第50話予告〉

「ネロさんお願いします!!」

「「分かってるよ…」」

願いを聞きしは、捕らわれの少女の相棒…

「「助けるのはダンテで、俺は手伝うくらいしかないんだけど…」」

覚めぬ悪夢を終わらせる為に…

E p i s o d e : 5 0 〽 D e v i l 〽 魔人 〽 (前書き)

人の心と悪魔の力が生み出した姿…

それは《魔人》…

人にして人にあらず…

悪魔にして悪魔にあらず…

Episode..50 Devil 魔人◇

「フリード!!」

無数の悪魔が蔓延る廃棄都市の中では、キャロの必死の叫びが響き渡った。

彼女の声も届かずフリードは雄叫びを上げ、その口を開けたまま強力な火球を収束させ始める。

「止めろフリード!! お前の相手はこいつじゃねえ!!」

「行け!!」

グラーフアイゼンを構えるヴィータと、鞆に納めたままのレヴァンティンを持つシグナム。

ヴィータはフリードから目を離さずに… シグナムは振り返って言う。

「…」

体に青白い魔力を纏い、絶え間無く立ち昇るその光は… 赤い光を瞳から放つネロ。

彼は口も開かず、ただ黙っていた。

「ネロ!!」

いつ火球が放たれてもおかしくない状況にあるが、シグナムの呼び掛けによって彼はフリードから悪魔に目を向ける。

「…ざつと100か…」

発動したデビルトリガーによってもたらされた悪魔の力… 通常よりも強化された感覚で悪魔の気配、数、音を聞き分ける。

右手には閻魔刀を、左手にはレッドクイーンを持つネロが歩を進めようとした瞬間… 彼の右腕から強い光を放ち始めた。
ふとネロが振り向いた先にいるのはフリード…

「テストロッサ！ お前も共に…」

——ビュンッ！！！！

シグナムがフェイトにネロと共に行くように促そうとしたが、彼女とヴィータの間を風が吹き抜けた。

「え…」

不意に声を漏らしたのはヴィータ。

自分の真横を通りすぎた鈍い銀色の物体に続き…

「ネ…」

燃え盛る炎に向かって突き進む輝く銀色の髪…

「…ロ…」

青白い炎が… 赤い瞳が通りすぎた後に、風が吹き抜けた。

彼女が振り向いたかと思えば、すぐに振り返る。

ネロの先にヴィータとシグナムの間を通った物の正体はレッドクイーン。

その証拠に彼の左手に剣はない。あるのは右腕……《悪魔の右腕》と《閻魔刀》だけ……

「フリード！！」

「止めてフリード！！」

[才才才才才才才才一一一一一!!!!]

一方で必死に呼び掛けているエリオとキャロの目にはフリードが、火球を吐き出すとするフリードの目にはネロしか写っていないかった。

だが、フリードの目に巨大な剣が飛び込み、瞬く間に真横を通りすぎる。

怒りに捕らわれ、ネロの姿しか見えていなかったフリード。
そして、レッドクイーンに続いてネロがフリードに向かって飛び込んでくる。

大剣が通りすぎた一瞬こそフリードの意識は逸れたが、《悪魔の力》を解放したネロが迫り、再び火球は燃え盛る。

いや、先程よりも激しくだ。

「フリード！！」

「ネ口！！」

キャロの叫びとシグナムの叫びが飛んだ瞬間…… フリードの口から
凄まじい炎が吐き出された。

「ガアアツツ！！！！」

ネロはかわしもせずにその火球を：

「「シッ！！」」

いや、その先を見据えている。

振り抜いた閻魔刀の一閃。

切り裂かれた火球はシグナムとヴィータの頭上を通り、後方に着弾。背後にいる悪魔達が悲鳴を上げる。

「ネロさ…！」

——ドンッッ！！！！

おもむろにキャロが顔を向けた瞬間、彼女の顔一つ分隣にレッドクイーンが飛び込んで来た。

建物の壁にレッドクイーンが突き刺さり、微かにだが剣も振動している。

「オオオオオオオッッ！！！！」

一度キャロの方を見たフリードが更に怒りを募らせて雄叫びを上げた。

迫るネロに噛み付こうとするが、彼は跳躍してかわし、フリードの頭上で腰のホルスターからブルーローズを抜く。

「……ん…」

ようやくネロの名を呼び終わったキャロの目に飛び込んで来たものは、ブルーローズの銃口に魔力弾を収束させ、周囲に二本の幻影刀

を展開しているネロが。

撃ち出された魔力弾に続き、後になってから飛ばされた幻影刀がキヤロに…

「ギャアアアアッッ!!」

その赤い瞳が睨んでいた“壁に潜んでいた悪魔”に命中する。

その悪魔は体こそ《セブンⅡヘルズ》に酷似しているが、体色は灰色。

背中にレッドクイーンが刺さったまま壁から削り飛ばされ、空中で無防備な体勢のところに幻影刀が突き刺さる。

「「フンッ!!」」

「アッ…!」

立て続けに闇魔刀による一閃。

悪魔は胴体と首から真っ二つにされ、断末魔が途切れる。

「あの…」

塵へと帰って行く悪魔に続き、地面にレッドクイーンが突き刺さった。

難なく着地したネロに声を掛けようとするキヤロだが、彼女の目に絶えず魔力を纏い、赤い瞳のネロが飛び込む。

「「お前は何かしたいんだ…」」

振り返った途端、ネロが見詰める先にいたのはフリードだった。

「「本当の敵も分からないのか…？」」

目付きが厳しくなるネロは左手に握りるブルーローズを捨て、次に閻魔刀を…

「「…」」

いや、地面に突き刺しこしたものの、まるで離れる事を拒むように閻魔刀がネロの右手に飛び込んで来る。

彼もその刀を暫し見詰めた後に右腕に吸収。

啞然とし、火球の収束を止めたフリードに向けて歩を進める。

「「まあ… 得体の知れない俺なんか信用出来るワケねえだろうが…」」

一応は“丸腰”になっているネロが目を瞑り、フツと笑い…

「「何がしてえんだ…！」」

赤い瞳が銀色の髪の間から覗き、ノーモーションで飛ばしたデビルブリンガーでフリードを引き寄せる。

巨体とそれに伴う重量があるフリードだが、守るべき主人から目を離し、ネロにしか注意が行っていなかった飛竜の頭が青白い右腕に掴まれ、振じ伏せられている。

「「熱くなりすぎて周りが見えずに、大切な人も守れなきゃ意味がねえんだぞ…！！！」」

もがくフリードの目には、ネロが今まで以上の感情を露にした姿が写っていた。

「ネロ…」

「「相手がして欲しけりゃ、後でいくらでもやってやるよ…!!」」

激情したネロの姿に啞然とし、狼狽える皆の中でフェイトが声を掛けようとしたが、フリードの頭を掴んでデビルブリンガーが消え、

「「フェイト。こいつらを下がらせろ」」

一度フェイトに目を向け、左手の親指でフリードとキャロ、エリオを指差す。

「え…」

「「一年前よりは制御出来ているが、デビルトリガーの力は強力だ」」

駆け寄るのを止めたフェイトと、歩くのを止めないネロ。

「「巻き込まない自信までは…」」

「あの…!」

地面に落ちているブルーローズを拾い、続いてレッドクイーンのところに向かおうとしていたネロに誰かが声を掛けた。

「ネロさん…」

ティアナだ。

彼女はネロを直視出来ずにいる。

「これから… 行くんですよね？」

「「悪魔のところにな」」

戸惑いつつ聞くティアナに即答するネロ。

先程、彼の背後に青白い悪魔が出現していた姿をティアナも映像で見っていたのが、今のネロの背後に悪魔はいない。

しかし、体に纏った強力な魔力と赤い光を放つ瞳ならある。

「スバルを助けに…」

「「助けるのはダンテで、俺はザコを倒したり、二人が出てくるのを手伝ってやるくらいしか出来ねえ…よ!!」」

ティアナの問い掛けに応えるネロが地面に突き刺さったままのレッドクイーンを蹴った。

「「まあ、安心しろ。必ず助ける」」

宙を舞うレッドクイーンがネロの背中に綺麗に収まる。

「「だから待ってろ…」」

「ネロさん!!」

振り返り、悪魔に向けて歩き出すネロ。

彼に向けてティアナが勇気を振り絞った声を張り上げる。

「スバルを…！」

そこでネロも立ち止まりティアナの方を見た。
彼女とネロに皆の視線が集まる中で…

「…お願いします…！」

「…ああ」

一礼するティアナの姿にフツと微笑むネロ。

「ネロ…」

「おい…」

彼の身体中から立ち昇る魔力が更に激しさを増して行き、その真紅の瞳には悪魔の姿しかない。

ネロの耳にはシグナムの声も、ヴィータの呼び掛けも入って来ない。

【ネロさん…！】

青白い魔力が炎のように揺らめく中で、ネロの隣にはやてが映るモニターが展開される。

【今から行くんやな！？】

「「そうだよ」」

慌てるはやてを一度見るが、ネロは素っ気なく短い返事で応えた。

「部隊長！」

「簡単に説明するけどよく聞いてや？ 一番大きな悪魔の体内から巨大な測定不能の魔力が感知されされたんやけど…」

【ダンテ…】

事態は急用を強いていることを知らせるシャーリーとはやて。だが、モニターのネロはポツリと呟くように言う。

【あいつが中でデビルトリガーを使ったか…】

見上げるネロの先には蠢くナイトメアが。

「分かるん！？」

【そんな気がする…】

既に分かっていたような口振りのネロの姿に呆気にとられるはやてたち一同。

「デビルトリガーって事は…」

「ダンテさんもネロさんみたいに…」

知ったばかりの言葉^{デビルトリガー}を口にするアルトとルキノ。彼女達の脳裏に先程のネロの姿が浮かぶ。

「話は戻るんやけど… 悪魔の体内にあるレリックとダンテさんの魔力、ネロさんの魔力が共鳴してるみたいなんや」

【へえ…】

知らされる事に大した反応を見せないネロ。

「それが原因でネロさんは…」

【話は終わりか？】

悪魔の体内でデビルトリガーを発動したダンテ、悪魔の体内にあるレリック。

それが原因でネロの中に眠る悪魔の力も共鳴し、デビルトリガーが強制的に発動されてしまったのだが、ネロは面倒臭そうに頭を掻いていた。

「え…」

【終わりだったらもう行くぞ。この姿も長く持たねえんだからな】

モニターに映っているネロの体から魔力が溢れだし、彼を中心に暴風が吹き荒れる。

「…終わりです」

【そうか…】

聞くだけ聞き、ネロが呟いた瞬間、その真紅の瞳から凄まじい光を放ち、映像が乱れた。

…

「はあああああああ…！」

「ネロ…！」

吹き荒れる暴風はまるで嵐…

青白い魔力が風と混ざり、砂嵐を巻き起こす。

叫ぶフェイトが手で顔を覆い隠し…

「Do It…！」

その声を皮切りに嵐は止んだ。

彼女の目に入ったのは天に向かって右腕を突き上げていたネロ。

そしてその背後には青白い悪魔が…

…

一方で機動六課の指令室にあるモニターの乱れも止み、《魔人》と化したネロの姿が映っている。

【始めるか…】

そう言いながら、ネロは背負う大剣の柄に手を延ばした。
レッドクイーン

彼と同様に背後の悪魔も左腕と一体化した鞘に納まっている刀《闇魔刀》の柄を握る。

——カチャ…！

——スッ……！

抜かれた剣の音……

悪魔に背を向けるような格好になりつつ、地面に振れた剣が擦れて火花を散らす。

そこで看取れていたはやてはハッとし、我に返った。

……

「あの技って……」

「まさかあの時の……!?」

ネロのあの姿に見覚えのあるフェイトとシグナム。

あの構えは嘗てネロが使った技“マキシマムベツト”に間違いない。フィウストを一瞬で消滅させたほどの技である。

「知ってるんですか……!?」

フェイトの傍にいるエリオが驚きつつ聞く。

「前に一度だけ……」

「「Dance dumb（踊れマヌケ）……!!」」

青白い悪魔と共にいるネロから目を離さなかったフェイトには、あの時よりも短いチャージで剣を振りかぶるネロと悪魔の姿が。

「Catch this（これでも喰らいな）！！！」

レッドクイーンと閻魔刀の刃が交差し、フィウストを倒した時よりも小さな斬撃が飛ぶ。

サイズこそ小さいものの、強力な攻撃に変わりはない。

驚異的なスピードで飛ばされた青白い刃は無数の悪魔を蹴散らし、道を作った。

「フッ！！」

その中にネロも飛び込む。

長くは持たない不安定なデビルトリガーが解除されてしまうか、己が力尽きてしまう前に…

…

【うらあああっ！！】

六課の指令室のモニターに映るネロ。

彼の振るうレッドクイーンの斬撃に続き、背後の悪魔も閻魔刀を振るう。

「あれが…」

【はあああああっ…！！】

不意に呟くルキノ。

彼女の目に写るのは、剣の柄を捻り、燃焼機関から真紅の炎を噴き出させるネロ。

「悪魔の力…」

【あああああああっっ！！！！】

声を漏らすアルト。

クラッチレバーを握り、留められていた炎が推進剤と共に噴出。

レッドクイーンを左手一本で持つネロと、閻魔刀を右手一本で持つ青白い悪魔が悪魔を薙ぎ払う。

「シャーリー。状況は？」

同じくモニターを見詰めていたはやてが聞くが、シャーリーもネロの戦いぶりに呆氣に取られていた。

「シャーリー！」

「え！？」

「今の状況はどないなっとなるん？」

「す、すみません！　すぐに…！」

はやての渴が入り、ようやく我に返ったシャーリーが情報処理を始める。

「残りのアンノウンの反応は64。巨大アンノウンからのレリック反応、“そのアンノウンの体内”とネロさんからのロストログリア反

応も健在です」

「そか…」

慌ててキーボードを叩くシャーリーだが、すぐに解析を終え、はやてに状況を知らせる。

【Is これでもか this!!】

「あの… 八神部隊長…」

「なに？」

静まり返っている指令室にはネロの声しか聞こえていなかったが、それにシャーリーとはやての声も加わる。

「部隊長は… 彼の“あの姿”を知ってらっしゃったんですか？」

躊躇いつつも、シャーリーはそう聞く。

はやての先程の口ぶりからすれば、“ネロが悪魔である”と言うことも、“ネロの魔人の姿”も知っていたと彼女は考えた。

「……うん…」

はやてが少し考え込む。

彼女の素振りに皆の注目が注いだ。

「なんて言うかな？」

頬を掻きながらも首を捻るはやて。

彼女の隣にいるグリフィスと、宙に浮いているリインも次の言葉を待つ。

「話はフェイトちゃんとシグナムから聞いてたんやけど… まさか、あれほどとはな…」

【おおおおおおおっ！！！！】

苦笑とも微笑みとも取れる顔のはやて。

声に振り返ってみれば、彼はレッドクイーンを背負い、背後の悪魔も左腕と一体化した鞘に闇魔刀を納めていた。

そして、脚を開き、深く構えているネロの周囲に体から立ち昇る青白い魔力が集まり…

「あれは…」

展開された六本の《幻影刀》

この湾曲した刃にシャーリーは見覚えがある。嘗てネロが模擬戦でガジェットを撃墜する際に使った技だ。

「あの時の…！」

だが後に聞いた話では、あの時のネロは気付かずに使ったと彼女は聞いていた。

不意に呟き… 不意に使ったと…

【六本なんてケチくせえ事言うなよ…】

髪の間から覗く赤い瞳が…

【もっと行けるだろ…？】

開いた口から発せられる言葉が…

【……なあ…！】

彼に呼応するかのように、右腕からは強い光が放たれた。

ネロの両掌と、背後の悪魔の両掌に凄まじい暴風が吹き荒れ、魔力で形成された幻影刀が出現する。

「え…」

展開された六本の幻影刀…そしてネロの掌にある二本の幻影刀と悪魔の掌にある二本の幻影刀…

計十本の幻影刀を目にしたシャーリーの脳裏に3日前の記憶が蘇る。

——何してるんですか？

訓練場に佇むネロに彼女は声を掛けた。

——いや… ちょっとな…

包帯を巻いた右腕に意識を集中させ、目を瞑っていたネロがシャーリーの方を振り向く。

——どうやったのか気になって…

今思えば、あの時のネロは幻影刀一本すら出現させられなかったが…

——よし…！

つい先日のこと… 隊舎裏にネロがいたのをシャーリーは偶然目撃していた。

彼は眉間に皺を寄せ、左手で右腕を掴んでいる。

そして、包帯を巻いている右手の上には“あの”湾曲した青白い刃…《幻影刀》が…

――ネロさん？

首を傾げるシャーリーにネロは気付いていない。

幻影刀一本出現させるのには、それほどまでの集中力が必要だからか… それとも、その幻影刀を出現させたのが嬉しいのか… この時のシャーリーは知らなかった。

嘗てのネロならば“デビルトリガー無し”で幻影刀を出現させる事が出来なかったとも… 彼が悪魔の血を引いているとも…

【…Are you ready（行くぜ）？】

画面を通して伝わるネロの声にハツとする。

そして彼女の前にあるモニターには廃棄都市内にいる悪魔の魔力とレリックの魔力反応と…

「まさか!？」

ネロを表す青い魔力反応の点が先程よりも大きくなっている。

慌ててキーボードを叩き、目を急かしく動かすシャーリーが解析を始めたのはネロの魔力についてだ。

【Blistering Swords（急襲幻影刀）…!】

巨大モニターのなかでは、ネロ目掛け悪魔達が飛び掛かるが、彼の周囲と掌にある幻影刀が高速で回転を始める。
順に飛ぶ湾曲刃に続き…

【Fire（行け）！！！！】

振り抜いた両手から飛ばされた湾曲刃…

「やっぱり…」

「どないした？」

青白い幻影刀は次々に悪魔に命中。突き刺さるところか切り裂き、残りの悪魔の数を減らして行く。

「見て下さい」

ネロの解析を終えたシャーリー。
はやてが声を掛けると、巨大モニターにネロの魔力値を表すバイタルとデータが出てきた。

「これ…」

「ネロさんのものです」

表すデータは“測定不能”と書かれている。

「さっぱりなんやけど…」

巨大モニターの半分は空いた道を駆け抜け、背負うレッドクイーン

の柄に手を掛けるネロが。
もう半分はネロの魔力値を示すデータが。

「これが先程… と、言うよりも先日のものです」

“今”と“以前”を表すネロのデータの違いは歴然。
魔力値が格段に伸びている。

デビルトリガーを使っているとは言え、明らかに異常だ。

「先日までの魔力値がA Aだと過程すれば、現在はSランクを遥かに凌駕しています」

【どけえええっ!!!】

高い魔力と身体能力… それでさえ目を見張るものだったが、今のネロは通常時とは比べ物にならない程だ。
レッドクイーンを抜き、両手で持つ柄を限界まで“三回”捻る。

「ダメ!!!」

衝撃の事実の皆が言葉を失うが、シャーリーの解説を聞き終えたはやて達とバックヤード一同。
だが…

「今、イクシードを使ったら!!!」

【ああああああああああっっっ!!!】

突如として大きな声を上げたシャーリー。
真紅を超える“紅蓮”の炎を噴き出しつつ、背後の悪魔と共に剣を

振るうネロ。

そして：

【うあっ!!?】

レッドクイーンが悲鳴を上げた。

燃焼機関が爆発し、悪魔を薙ぎ払いながらも勢いが止まったネロはレッドクイーンを地面に突き立てる。

「…まさか!?!」

急な事態を飲み込んだはやて。

しかし、すぐに思考回路を切り替えてシャーリーを見る。

「レッドクイーンは簡易デバイスです。刀身フレイムは強化してありますが、燃焼機関部分がネロさんの魔力に…」

「…今までとは桁違いの魔力による負荷に耐えられなくなったんですね…?」

「…はい」

再びキーボードを打ち込むシャーリーをリインは見ていた。

彼の身を按じるリインの問いは、聞くまでもない。

だが、聞かずにはいられなかった。

シャーリーも自分の前にあるモニターを見たまま応える。

：

「ネロ!!」

「レッドクイーンが…!」

ネロがいる場所から遙か後方にいるシグナムとフェイトが声を上げる。

【おいおい…】

最早ネロの独壇場と化しているここで、彼女達は見ているしかないのだが、浮かび上がっているモニターには燃焼機関部分がショートした大剣を見詰めるネロが映っていた。

「ネロさん、今の調子でブルーローズも使えば、レッドクイーンと同様に…!」

【分かってるよ…】

【シャーリー… さっきの話、本当なの?】

「…はい」

シャーリーに言われるまでもないと言いたいネロ。壊れてしまったレッドクイーンは待機状態にも戻せないらしく、彼は一度舌打ちした。ネロの凄まじい戦いぶりに看取れていたなのはがシャーリーに聞くフェイトとシグナムから、《悪魔の右腕》を持つ男、背後に悪魔を出現させる事が出来る男だと聞かされていたが、まさかこれほどとは…

【彼が“その力”を使っているとは言え、今の魔力値は明らかに異常です】

「確かにな…」

シャーリーの話に賛同するシグナム。

彼女の見詰める先には、壊れたレッドクイーンを背負い、悪魔に飛び込むネロがいた。

「以前は短時間で解除されたようだが、今は継続時間も伸びている…」

「まだ、使いはじめてから1分くらいしか経ってねえぞ？」

シグナムと同様に遠くのネロを見詰めるヴィータ。

「前に私とテストロッサを助けてくれた時は、ものの10秒もせずに倒れた」

【うおらっ！！！！】

彼女達の背後からは、なのはやフェイトの前に展開されているモニターからの音声聞こえてくる。

「ネロ…」

声を漏らすフェイトの周りになのはやティアナ、ギンガもいる。

【Crash（壊れる）！！！！】

モニターの中のネロはデビルブリンガーで悪魔をまとめて4〜5体
掴み取り、数回に渡って地面に叩き付ける映像が映っていた。

「フェイトさん…」

彼の姿を見て、フェイトはエリオとキャロを抱き締める力が強くなる。

自分に注ぐエリオとキャロの視線に気付くと、彼女は悲しい顔をしていた。

【はああっ!!!】

そして悶絶する悪魔と、飛び掛かって来た悪魔を蹴り飛ばして跳躍。
“ナイトメア”の頭上に舞い上がる…

…

「キイイイイイイイツッ!!!!!!」

「「…あああああ…!」」

待ち構えていたようにナイトメアの砲台が飛び出し、禍々しいまでの白と黒の魔力が収束…

ネロも頭上で両腕を振りかぶっていると、背後の悪魔が持っていた閻魔刀が青白い光を発して消え、ネロの手に握られる。

「「…ああああああああっっ!!!!!!」」

凶暴な魔力砲撃と凄まじい剣がぶつかり合う。

「全員散れ！！」

青白い悪魔の周囲から白と黒の混ざった光が四散し、所構わず廃棄都市に降り注ぐ。

エリオとキャロを連れて、建物の影に隠れるフェイト。彼女達と共に建物に隠れるフリードとギンガ。空に飛び立つなのは。障壁を展開しながら距離を取るヴィータと、叫んだシグナム。

：

「「あああああああああ…！」」

依然として砲撃とぶつかるネロは雄叫びを上げていた。

「「…あああああああ…！」」

凄まじいぶつかり合いの中、背後に出現していた悪魔が眩い光を放ちながら消え…。ネロの握る閻魔刀に光が集まる。

「「……もつとだ…！」」

その目は諦めず、まだ強い光を放っている…

「「…もつと力を…！」」

歯を食い縛り、右腕…。両腕に力を込める…

「…俺に！……………もつと力をくれ！！！！」

その瞳は真紅の光を…

右腕からは強烈な光を放ち、ネロは突き進む…

…

『『さてと…』』

石像は無惨にも砕け散り、魔人の姿でいるダンテが辺りの燃え盛る炎を見回した。

『『どうやって出るかな…』』

『あの…』

大剣を肩に担ぐダンテにスバルが声を掛けた。
リベリオン

『『どうした嬢ちゃん？』』

ダンテも振り向くが、彼の《魔人》の姿を目にしたスバルが左腕を押さえながら立ち上がろうとする。

だが、力が入らずに転けてしまうが…

『『おっと。大丈夫か？ 無理すんなよ？』』

即座にダンテが駆け寄り、スバルの体を左腕一本で受け止める。

『あ…』

『『待ってな。すぐに出れる筈なんだが…』』

ダンテの姿を間近で見たスバルが声を漏らしたが、ダンテはお構い無しに剣を背負い、スバルを抱き上げる。

『『おかしいな…』』

スバルを抱いたまま、不思議そうに辺りを見回すダンテ。
だが、事態は一変する。

急に地響きが始まり、周囲の空間が崩れ始めたのだ。

『え!?! な、なに!?!』

崩れ行く中で、慌てるスバルを尻目にダンテは一気に跳躍する。

『『しっかり捕まって、口閉じてな。派手なドライブになるぜ?』』

『え?』

ダンテの顔を見上げた瞬間、スバルの体に強力な重力が掛かる。

『ちょ… うううつ…!』

魔人と化したダンテによる跳躍。

一跳びでも先ほどの場所から数十メートル… いや、100メートルは跳んだのだろう。

ダンテは崩れて行く“空間”を足場にしながら、更に跳び上がる。

(…暖か…い…)

スバルはその中で、意識が薄れて行く…
彼女が顔を当てているダンテの胸からは、絶え間無く光を放ち続け
ていた。

ネロの右腕と同じ、亀裂の走った部分から、強くもあり… 優しい
光を…

…

そして、外にいるシグナム達の中には、

「ミギヤアアアッ！！！」

悪魔“ナイトメア”が悲鳴を上げる甲高い声が聞こえて来た。

「ネロ！？」

「やったか！？」

空に浮かぶシグナムとヴィータが見る先には、ナイトメアの砲撃が
真っ二つに斬り裂かれ、その光が夜空を妖しく照らしていた。
そして…

——ギイイイイイイインッ！！！！

けたたましい金属音が鳴り響く。

「な、なんだ!？」

——ヴォンツ…!

凄まじい金属音に驚きの声を上げるヴィータ。

突如として聞こえて来た音に続き、ナイトメアの周囲の空間が歪む。球体状に歪んだ空間からは、又してもけたたましい音が響き、ナイトメアの体を斬り刻む。

「どうなっている!？」

【それが…】

シグナムの問い掛けに慌ててキーボードを打っているルキノが…

【一瞬ですが、ネロさんの魔力値が増大したようで…】

「また？」

建物の影に隠れるフェイト達の前にあるモニターのアルトも解析しているようだった。

「シャーリー、今のは!？」

「分からない!!」

六課の指令室にいるグリフィスもシャーリーに問うが、彼女も完全にお手上げ状態だった。

「さっきの一瞬だけ、彼の魔力値が爆発的に上昇したとしか…」

更に展開されたモニターには、ナイトメアを斬り裂いた時のネロのデータが…

「なんだこれは…!」

それは、今までで一番高い魔力の測定結果を表すものが。相変わらず“測定不能”の文字は消えていないが、推定される魔力でも先ほどの《デビルトリガー》を使っていた時とは段違い。

「ネロさん…」

胸の前で拳を強く握り締めるリインが一度はやてを見た。

彼女はリインを見ず、黙ってモニターを見続けている。

彼女の脳裏には、先ほどのネロが繰り出したであろう斬撃が刻まれていた。

まるで… “空間” も… “次元” すらも斬り裂くほどの斬撃が…

…

(鋭い太刀筋だった…)

シグナムの目には、もがき苦しむナイトメアから距離を取り、一度、闇魔刀を振り払うネロの姿が写っていた。

（あれが… あの刀とネロの…）

そう思案していたシグナムの隣を赤い影が通り過ぎる。

「な…!?!」

彼女が振り向いた先は虚空…

「…あれは…」

彼女から少し離れた場所にいたヴィータも空を見上げた。

二つの月と重なる影…

赤い悪魔…

銀色の髪に…

「悪魔…か？」

「おい！ シグナム!!」

その異形は難なく着地。後方にいるネロとナイトメアを見ている。だが、その悪魔がスバルを抱いていた事に気付いたヴィータが声を上げながら“赤い悪魔”に向かって飛び込んだ。

そこでシグナムもハツとし、地上にいる“悪魔”目掛けて一直線に飛び込む。

「ギガントハンマアアアーーーーーッッ!!!!!!」

カートリッジを排莢し、《ギガントフォーム》に切り替わるグラーフアイゼン…

「…はあああああああっ！！！！！」

シグナムのレヴァンティンも鞘に納まったままカートリッジを排莖。
《紫電一閃》の構えを取り…

「「あああああああああっ！！！！！」」

二人の声が重なる。

その“赤い悪魔”はスバルをそっと下ろし…

「「……H u h …？」」

素手でギガントハンマーと紫電一閃を受け止める。

「なに！？」

「そんな！！！」

狼狽えるシグナムとヴィータだが、

「「やっぱり、女運は悪いらしいな……」」

その悪魔は少し首を傾げた。

「え……」

「この声……」

攻撃の意思は見せないその悪魔の声…背負う剣の形にヴィータとシ

グナムは気付いた。

「「パワフルな嬢ちゃん… 美人には棘のある姉ちゃん…か…」

その悪魔はフツと笑う。

「まさか…」

ヴィータが驚愕し、

「ダンテ… なのか…？」

シグナムもレヴァンティンを握る手の力を緩める。

「「おっと… この姿のままだったな？」」

“赤い悪魔”ダンテはそう言うと、自分の体を見回し、受け止めていたレヴァンティンとグラーフアイゼンから手を離してシグナムとヴィータ、寝かせてあるスバルから距離を取る。

「「…」」

彼は一度、空を見上げた。

数秒の間、静寂に包まれるが…

「…よお」

落雷が直撃し、《魔人》から人間の姿に戻る。
人間の姿に戻るなり、ダンテは軽快に挨拶した。

「マジかよ…」

ヴィータの顔がヒクつくが、ダンテはまた空を見上げる。

「さっきのやつと、妖精ちゃんはいねえな…」

ダンテがボソリと言った事の意味が分からないが、彼はしゃがんでスバルを抱き上げる。

そして、彼が顔を向けた先にいるのは、死に物狂いで暴れるナイトメアと戦うネロが…

「坊や!!」

ダンテはスバルを抱いたまま、ネロに向けて叫ぶ。

「ダンテ…さ…」

「キメろ!!」

建物の影から出てきたフェイト達や、空から舞い降りたなのはに目もくれず、ダンテの張り上げた声が響き渡った。

Episode..50 Devil 魔人◇◇（後書き）

◇第51話予告◇

t a l k i n g ..ダンテ

あれは忘れもしない、今からざっと15年前… まだ俺が22の頃だ。

まだすこし肌寒い春先で、ちゃんとした便利屋をはじめようとしてたんだが… いきなり事務所は壊されるわ、兄貴と戦うわ…

まだ、事務所に名前もつけていなかったんだが…

その戦いの中で俺の中の悪魔が目覚めた。あの時は本当に色々あったな…

まあ、それはいいとして… そろそろ腹が減ったな。

坊や！ さっさと終わらせろよ！

E p i s o d e . : 5 1 \ R e s o n a n c e 〈共鳴〉 (前書き)

魂は共鳴する…

黒き騎士の中で目覚めつつあるその力、それは彼の真の力なのか…

それとも…

Episode..51(Resonance〈共鳴〉)

ナイトメアの体内にいるダンテ。

彼は《魔人》の姿のままスバルを抱き抱え、崩れ行く空間を足場にして跳躍する。

『…なんだ?』

だが、突如として暗闇の空間に亀裂が走る。
そこからは白い光が照らし、外から声が聞こえて来た。

――スラッシュSlash…!!

二重にエコーの掛かった声だった。

『『坊や…?』』

確かに声はネロのものだが、その独特のイントネーションにダンテは少し首を傾げる。

『『…まあ、出口が出来ただけいいかな』』

一人納得すると、ダンテはその空間の裂け目にリベリオンを突き刺し…

『『フンッ!!』』

おもいっきり横薙ぎに切り払う。

：

（やっと出れたな…）

白に包まれた空間から、澄んだ空気が漂う夜の空間にダンテとスバルは飛び出した。

そして、彼の通りすぎた真横には両手で閻魔刀を持つネロが…

（坊…）

黄色い光を胸に走る亀裂から… 2つの目からダンテは放っていた。彼の黄眼がネロを見詰めるが、髪で隠れているであろうネロの目は見えない。

だが、彼にはネロが違う人物に見えた。

その構えに… 佇まいに…

触れれば斬り刻まれそうになる程の研ぎ澄まされた“魔力”に…

：

「なんだよ、あれ…」

空からネロの戦いを… 飛び出して来たダンテの姿にアギトの顔が強張る。

「悪魔か： いや、ただの悪魔ではないな」

驚愕するアギトとは裏腹に冷静なゼスト。

彼が動揺していないと言えは嘘になるが、背後に悪魔を出現させ、荒々しいまでに戦うネロの戦いぶりを黙って見ていた。

「また変なのが…！」

「此方に気付いたか…」

気絶し、白いバリアジャケットを血で染めているスバルをそつと地面に寝かせ、ヴィータとシグナムの攻撃を受け止めた赤い悪魔が自分達の方を見詰めている。

「え？」

アギトがゼストの方に顔を向ける。

展開されているモニターを見れば、確かに赤い悪魔は遥か雲の上にいるアギトとゼストを見詰めている。

「こっちにつて… 見える筈ないじゃん、旦那。だってここ…」

——バチィツッ！！！！

二人がいるのは雲の上。

肉眼で見える筈がない。

流石にそれはないと考えるアギトだったが、真下にある雲に凄まじい雷鳴が轟き、稲妻が走る。

「な、なんだ!？」

「アギト。帰るぞ」

夜の世界すらも、一瞬だが明るく照らす光に目を覆うアギト。
そんな事態に慌てるアギトを手で抱え、ゼストは空を舞う。

「ちょっ！ 旦那…！」

夜風が体に当たる中でアギトは顔を上げるが、ゼストの瞳を見た瞬間に黙ってしまった。

彼は何を考えているのか…

アギトには分からない。いや、分かるのかもしれない。

「旦那…」

短い余命の中でも己のやるべき事を… 友の応えを知る事を悲願とし…

「あの悪魔…」

「え…」

“狩人”と“黒騎士”と戦いたいと思い…

ゼストの前に展開されているモニターが先程まで乱れていたが、雷鳴が止むと共に画像も正常に戻る。

「…ハンター……?」

モニターに映るダンテがどうやら口を動かしているが、音声までは

届かない。

「黒騎士に続き… ハンターもか…」

ネロがデビルトリガーを発動した瞬間、強力な魔力の影響で画像が乱れた。

そして《魔人》の姿に…

「なんなんだよ…」

ダンテもそれは同じである。

悪魔がもたらす異質な力に歯を食い縛り、拳を握り締めるアギト。

「なんなんだよ！ あいつら！！」

いつの間にか体が小刻みに震えていたのに気付いたアギトが腕を掴む。

「魔剣士の血族…か…」

モニターを消し、困惑とやり場のない気持ちしかないアギトを彼は抱き寄せ、一度目を向けた。

…

そして、ネロは一度、閻魔刀に付着したナイトメアの体液と血を振り払った。

髪の間から覗くその目付きは、彼が手にする閻魔刀と同様に鋭い。

しかし、その真紅の瞳が静まり、元の碧の瞳に戻ると…

「はぁ…はぁ…」

右腕の青白い光も落ち着き、彼の荒い呼吸音だけが聞こえて来た。先程と打って変わって息が荒いが、突如として彼の右腕に電流が駆け巡る。

「くっ！…うつ、ああっ！！！」

その電流は右腕だけにとどまらず、ネロの右半身… 右目元、頬に続き、右脚にまでも及ぶ。

「うあっ！！？」

強烈な電流により、ネロの右腕から閻魔刀が零れ落ちた。

「…ぐっ… うっ…」

（どうなってやがる…！）

後方からはダンテの声が聞こえるが、彼はワケの分からないまま左手で落とした閻魔刀を拾い、まだ死んでいないナイトメアから距離を取った。

「…くそっ！！！」

右脚に力が入らない分、片脚だけの跳躍力を使うしかないが、死にもの狂いで暴れるナイトメアに向けてネロは一気に距離を詰める。ダンテや他のみんなに助けを求めるなど、彼のプライドが許さない…

この悪魔を倒すと近い…

約束を守ると誓い…

…

【この…！ うわっ…！？】

「ネロさん…！」

「シャーリー…！」

六課の指令室にある巨大モニターにはナイトメアと戦うネロの姿がある。

だが、彼は右腕を使っていない。それどころか右脚も引き摺り、右目を瞑っている。

距離を詰めたものの、戦闘能力が半減… いや、それ以下になってしまったネロの姿にラインが叫び、はやてが声を上げる。

「何があったんや…！」

「分かりません！ ただ…！」

【テメエ…エエ…】

ネロ自身も自分に何が起こったのか分かっていない。

新たに展開されたモニターには現在のネロの魔力値とバイタルが…

「魔力を使い果たしたとしか…」

【はぁ…はぁ…はぁ…はぁ… クソが…!】

ネロは疲弊し、先程放った“斬撃”が原因で魔力も底を尽きかけていた。

モニターに映るネロは左手に閻魔刀を握ったまま、額の汗を拭う。

「魔力エンプティ!?」

「そのようです…」

猛攻を止めてしまったネロの姿を目にしたグリフィスに応えるアルト。

「ダンテさん… アルト! ダンテさんはどうしてるんですか!?’」

リインがアルトに呼び掛けるが彼女はビクツと反応し、恐る恐る振り向く。

「えっ…と… ダンテさん… ですか?’」

「そうです!’」

アルトがやたらと目をチラつかせている。彼女は隣にいるルキノを見るが、彼女は真上にあるモニターを見上げていた。

巨大モニターの半分には黙って腕組みしているダンテが映し出される。

彼の服は所々破れ、彼の後ろには距離を置いているシグナムやフェイト達が…

——時は遡り、ダンテがナイトメアの体内から出て来たばかり…

「うそ…」

モニターにはグラーフアイゼンの“ギガントハンマー”、レヴァンティンの“紫電一閃”を素手で受け止めた“赤い悪魔”が映っていた。

「副隊長の攻撃を片手で…？」

信じられないものを目にしたアルトとルキノが不意に声を漏らす。いくらリミッターが着いているとはいえ、有り得ないだろうが、その悪魔は少し首を捻り、何か言った。

そのセリフを聞いたシグナムとヴィータが手を緩めると、赤い悪魔は二人と寝かせているスバルから離れ、暫し空を見上げる。

「え…」

皆がモニターに注目する中で、シャーリーはふと自分の前にあるモニターに目を向けた。

「もしかして…」

彼女の前には、ロストログアの魔力反応を表すモニターがある。そして、位置からしてあの“赤い悪魔”は先程ナイトメアの体内にいた悪魔…

つまり…

「ダンテさ…」

ハッとした瞬間、凄まじい轟音と共に落雷が赤い悪魔に直撃した。それに伴い、指令室にあるモニターも乱れる。

「またか！」

「はい！」

今日で三度目になるシュチュレーション。
慌てるグリフィスと応えるルキノ。

「でも、これって…」

「…ダンテさんです」

二度も見覚えのある展開に呟くように言うリイン。
そこへすかさずシャーリーが言う。

「え…」

「さっきの“赤い悪魔”…」

先程は落雷の音とみんなが騒ぐ声で聞かれていなかったからか、シャーリーが再度言う。

不意にシャーリーの方を見るリインだが、彼女は再びキーボードを叩き始める。

「あれは…」

巨大モニターには“赤い魔力反応”、“ナイトメアの体内から感知されたロストログリア反応”のデータが映し出される。

「ダンテさんです…！」

【坊や！ キメちまいな！】

その魔力反応は完全に一致していた。

落雷の影響で乱れていたが、それも静まり、廃棄都市の方の映像も正常に戻る。

モニターには《魔人》から人の姿に戻ったダンテが気を失っているスバルを抱き抱え、高らかに叫んでいた。

「ダンテさん…？」

「はい」

思考が追いつかないが、宙に浮くリインの問いにシャーリーは振り向いて言う。

「さっさと終わらせろ！ 腹が減って仕方ねえし…！」

「あの…」

「…お前がそいつを倒せばゲームセットだ！」

「ダンテさ…」

スバルを抱き抱えたまま淡々と言うダンテの後ろから声が聞こえて来た。

彼も一通り喋り終えると、声のした方を振り返る。

「よお。美人の姉ちゃ…」

何食わぬ様子でフェイトに近付くダンテ。

皆の視線に気付き、彼は周りにいる全員を見た後に…

「…フェイト」

ようやくフェイトの名を呼ぶ。

「わりいな。俺が辿り着いた時にはもう…」

「スバル!!」

体の所々が裂傷… 特に左腕の出血が酷いスバルを抱いたままダンテはフェイトに近寄る。

ダンテの《魔人》の姿と、ヴィータとシグナムの攻撃を素手で止めた彼に近寄り難い空気の中で、ティアナが真っ先に駆け出した。

「スバル!! スバル!!」

「死んじやいないが… こりゃ、出血が酷いな…」

ダンテがスバルを下ろし、気を失っている彼女の身をティアナに預ける。

スバルの白いバリアジャケットを“朱”に染める左腕。

「おい、ハンマー持ってる嬢ちゃんと剣持ってる姉ちゃん!」

彼は気だるい口調で言っていると、背後から感じる気配の先にいるヴィータとシグナムに向けて言った。

「そんなに警戒すんなよ」

ダンテは立ち上がり、頭を掻きながら振り返った。

『こいつ…!』

『完全に気づいていた…だと?』

二人の前にいるダンテは不敵に笑っているが、神経を尖らせているヴィータとシグナムに…

『さっきのが…』

『ダンテさんの…』

念話を飛ばすフェイトとなのは。

『あの人の…』

『悪魔の姿…』

ギンガとエリオ…

「魔剣士…」

ティアナがスバルに呼び掛けているが、キャロはその言葉を口にする。

ダンテの《魔人》の姿を目にした彼女達は、啞然とし、呆気を取られ、動揺と困惑、恐怖が混ざりあっていた。

だが、キャロの目にはその強さに、佇まいに違うものを感じていた。二千年の時を越え、目の前にスパイダがいたのならば、彼のようなものののだろうか：

「別に襲わねえよ。俺は坊やと違って気が長い方だし」

人の姿でいるダンテに警戒を止めないシグナムとヴィータ。

彼が“悪魔”だと聞いていたが、ネロのデビルトリガーと違い、彼は自分自身が完全な悪魔の姿になれる事を知らなかったのが理由だ。

「て言うか： 坊やの様子が変だな」

「なに：？」

「感じねえか？」

突然、切り出した話にレヴァンティンを構えたまま問うシグナム。警戒を続ける彼女の方を振り向き、ダンテはネロのいる方を親指で指差した。

「あいつの魔力が極端に落ちてる」

「え：」

ダンテの言っている通りだった。ティアナと共にスバルを懐抱していたフェイトが顔を上げれば、ネロの方が防戦一方になっている。

「ネロさん…！」

キャラがそう言いかけた瞬間、フリードが前に飛び出した。

フリードの目に映るのは、“人の姿をした悪魔” ダンテ。

先程の“魔人”の姿が彼の本当の姿に違いないと察したフリードは、地面スレスレを羽ばたき、瞬発力で一気にダンテとの間合いを詰める。

「フリード…！」

「フリード、ダメ…！」

エリオとキャラが叫ぶが、もう遅い。

「ガアアアッ…！」

フリードは大きく口を開き… その牙でダンテに噛み付いた。

「ダンテ…！」

「おい…！」

自分の目の前で起きた事にシグナムとヴィータは信じられなかった。先程、自身の渾身の一撃を止められてしまった事も衝撃的だったが、フリードが噛み付こうとした瞬間、彼は逃げようとしなかった。そればかりか、腕を広げ、歓迎しているかのように…

「フリード止める…！」

「オオオオオオッ！！！！」

シグナムの制止も聞かず、フリードはダンテに噛み付いたまま、彼の体が引きちぎれんばかりに振り回す。
それに伴い、辺りにはダンテの鮮血が飛んだ。

ダンテの… “赤い” 血が…

一向に抗おうとしないダンテを見ていられなくなったキャロが荒れ狂うフリードに近付き、必死で呼び掛ける。

「止めてフリード！！　ダンテさんが死んじゃ…！！」

「呼んだか？」

聞こえて来た声に反応し、フリードが振り回すのを止める。

「え…」

「嬢ちゃん、今、呼んだろ？」

キャロが目にしたものは、ダンテの《魔人》の姿以上に衝撃的なものだった。

彼はフリードに噛み付かれているまま、平然としているのだから。

「どうかしたか？」

フリードの口からダンテの胸から上と脚がはみ出しているのだが、牙が食い込んでいる部分からは出血し、血が滴り落ちながら赤い水溜まりが出来ている。

「あの…」

「なんだよ？」

またフリードが振り回し始めるが、ダンテは相変わらずの口調で話し続ける。

「平気… なんですか？」

「いや、ちょっと痛えな」

先程よりも激しく振り回されているが、ダンテは体から血が飛び散りつつも頬を掻く。

「このドラゴン… フリードって名前だっけ？ 坊やから話は聞いてたが、あのパタパタ飛んでたちっこい竜らしいな？」

周囲に血を飛び散りつつ、ダンテの話は続く。

「悪魔じゃねえんだし… リトルレディのペットをぶちのめすワケにはいかねえしな…」

ダンテはそう言うのと、フリードの上顎と下顎に手を掛けた。

「ダンテさん！！」

「ガッ…！」

強力な力で顎を挟み開けられようとしているのにフリードも振り回

すのを止める。
そして：

「よつと。ハハハッ！ なかなか楽しいロデオだったぜ」

出てくるなり軽口。

彼の黒い服には穴が開き、胸と太股の部分から血が滴り、濡れていた。

血は顔と銀髪にも付着し、彼は一度髪を掻き上げる。

「ダンテさん…」

「次はジェットコースター頼むぜ？ なんだ？」

啞然としているフリードに向けて不敵に笑い、指で作った銃で撃つマネをした後にキャラを見るダンテ。

彼の血だらけの姿に一瞬、ビクッと反応するが、顔を上げる。

「フリードに噛まれた傷は…」

「ああ、とつくに治ってるよ」

ようやくダンテは顔の血を拭うが、彼の服はフリードの牙が食い込んだ部分が破れ、そこからは血が滴っている。

「え… でも…」

キャラが言い終わる前にダンテは服の止め金を外し、胸を見せた。そこには出血した血こそあるが、傷はない。

「あんなの大したことねえよ。しかも、心臓刺されてもちよつと痛いだけって言ったよな？」

止め金を止めると、ダンテはまた不敵に笑ってみせる。

「言いましたけど…」

「まあ、俺達は観戦でもしてようぜ」

そう言い、ダンテは腕を組むとネロとナイトメアとの戦いを観戦し始めた。

キヤロは腑に落ちないまま彼の背中を見た後に、フリードを連れて気を失ったままのスバルの所に駆けて行く。

「あいつ…」

シグナムと並び、ダンテの背中を見詰めるヴィータが口を開いた。彼女の頭の中では様々な思考が繰り返される。

ここで仕留めるべきか…

声を掛けるべきか…

「ダンテ…」

彼女の隣にいるシグナムも不意にダンテの名を口にする。

彼女も言いたい事は山程あった。

あれほどの腕を持ちながら、どうしてかわさなかったのか…倒さないにしろ、他にも手があった筈…

二人は何も言えないまま、スバルの元へと歩み寄り、ダンテと距離を置いていた…

——そして現在…

【がぁぁあっ！！】

「ネロさん！！！」

ナイトメアの触手に捕まり、体を締め上げられつつもネロは飲み込まれようとしていた。

彼の窮地にはやてが声を上げる。

「ダンテさん！！　ネロさんを…　早く！！」

ダンテの《魔人》の姿、フリードに噛みつかれても平然とし、傷が瞬く間に治してしまった事に困惑していたアルトに痺れを切らしたはやてが直接ダンテとネロの二人と話しているのだが…

【ダメだ！！！！】

二人の声が重なる。

【こいつは俺が倒す…！！】

「ネロさん！！！」

息の荒いネロが悪魔に右半身を飲み込まれつつも叫ぶ。

【これはあいつの戦いだ。俺が手出しするわけにはいかねえよ】

「そんな!!」

ダンテも気だるそうに言う。

ネロの意地： 端から見ればダンテの“無関心”な様子に声をあげるはやて。

「どうした坊や! ギブアップか!」

廃棄都市では声を張り上げるダンテの背中を皆が見詰めている。

「“また”、ああなっちまうのかよ!？」

「また：？」

ダンテの言っている事が分からないフェイトが声を漏らす。

「一年前より成長したんだろ!？」

「ぐ… ううつ…!」

ナイトメアに飲み込まれようとしているネロも必死で抗っていた。左手に握る閻魔刀を突き刺すも、“コア”に届かなければ意味がない。

右腕どころか顔の半分も飲み込まれかけている。

「お前の底力を見せてみるよ!!」

ダンテが叫んだ瞬間だった…

「う… おああああああっ！！！」

「キイイイイイイイイイイイイッ！！！！！！！」

ネロが雄叫びを、ナイトメアの甲高い悲鳴を上げる。

「フンッ！！！」

ネロは勢いのままに右腕をナイトメアから引き抜く。

まだ腕の自由がきかないのだろうが、彼の右手に握られているのは…

「レリックです！ 反応は9つ！」

「そんなに！？」

「はい！」

指令室にいるシャーリーの知らせに驚きの声を上げるはやて。

「ギアアアアアアアアアアッ！！！！！！！」

「はあ…はあ… ざまあみろ…」

ネロの右手に握られているのは、複数のレリックが組み合わさり、巨大な黒い結晶体になっていた。

レリックを引き抜かれたナイトメアの悲鳴が夜の世界に響くが…

「うお!?!」

そのレリックが黒の眩い光を発してネロの右腕に吸収される。

「またか…!! うっ!!!!」

呼吸の荒いままのネロが痺れている右腕を見詰めるが、彼の瞳の瞳孔が開き、左手に閻魔刀を持ったまま地面に跪く。

「はあ… ううつ!!」

閻魔刀を地面に突き刺した状態で片膝を着くネロ。

「が… あああっ!!!!」

ネロが左手で右腕を押さえこむが…

「がああああああっ!!!!」

右腕からは青と黒の混ざった禍々しい光が放たれ、親指と小指の付け根にある棘と… 肘の部分が鋭利に尖り始める。

…

「Huh?」

それは遠くから見ていたダンテの目にも…

「ネロ!?!」

「ちょっと、あれ…!」

フェイトとなのはの目にも…

「おいおい…」

「なんだ… あれは…」

ヴィータとシグナムにも…

「ネロさんの右腕にレリックが…!」

「ネロさん…!」

エリオとキャロにも…

「あの人…!」

ギンガと…

「……ネロさん…」

ティアナの目にも写っていた。

【ダン…テ…さ…】

モニターにははやてが映っているが、ネロとレリックの魔力の影響のせいか、画像が乱れ、音声も途切れ途切れになっている。

「今なら悪魔の体内にレリックがあらへんから、物理攻撃とか魔法で倒せる!!」

一方では六課の指令室にいるはやてが喋っているが、こちらのモニターも画像が酷く乱れていた。

「せやから、早くネロさんを助けて、みんなで…!」

だが、彼女が喋っている最中で完全にモニターは映らなくなってしまった。

「…やれ…ば…」

「部隊長!! 通信が途絶えました!!」

「状況把握、確認共に不可能です!!」

通信士のルキノとアルトの声がノイズに満たされた空間に響いた…

…

そして…

——バチッ!!!

ダンテの体に赤い電流が走り抜け、凄まじい魔力が迸る。

「えっ!？」

「ダンテさ…ん？」

腕組みしたまま“人”と“悪魔”の姿を交互に入れ替えるダンテ。彼の突然の様子に慌てふためくフェイトとなのは。

「「すごい魔力だな…」」

《魔人》の姿になる度に衝撃が放たれ、《人間》の姿に戻る度にデビルトリガーを解除される。

驚きつつ、少し首を傾げる彼の姿に皆は目を奪われ、

「…終わったか…」

“人”の姿に戻る事で落ち着く。

…

「はぁ…はぁ…」

ナイトメアの“コア”を《悪魔の右腕》で貫いたネロが立ち尽くしていた。

彼は左手に持つ閻魔刀を杖代わりに使って立ち上がり、電流と激痛の走る右腕をナイトメアの体ごと“コア”を打ち抜いたのである。

「…はぁ…はぁ…はぁ… うっ…!」

まだ右腕の痺れと痛みは消えていないが、指の付け根の棘と肘の部分も通常時に戻っていた。

そして彼の掌には“緑の光を放つ星”のような物が握られている。

《バイタルスター》：

悪魔の体液が結晶化したものを更に圧縮。刹那の中、ナイトメアの強力な魔力を練り込んでネロが作ったものである。

「はあ…はあ…」

ネロは右手に“バイタルスター”を、左手に閻魔刀を握って歩き出した。

：

「ネロ…」

ナイトメアの体が溶け、蒸発して行く中で、ネロは一步一步ダンテとフェイト達がいる方に歩み寄る。

強力な魔力の影響でモニターは見られなくなっていたが、近付くにつれて彼の姿がよく分かった。

上着は着ている意味もないほどボロボロになり、ズボンも太股や膝の部分が破れている。

フェイトはスバルを懷抱していた為、座っているが、彼は荒い呼吸のままダンテの隣を横切ってフェイトの前に来る。

「ネロ… それ…？」

——バキンッ！

ネロの右手に握られていた物が何か聞こうとするが、彼は応えずに“バイタルスター”を握り潰す。

「ネロさん、何を…！？」

彼の手の中で碎かれたバイタルスターが液体に変わり、それをスバルが怪我をしている部分にかけ始める。
彼の奇行にティアナが驚くが…

「え…」

「傷が… 治った？」

スバルの怪我が完全に治り、服にある血だけが残った。
今日だけで信じられないものばかり目にし、聞いて来たが、ティアナとなのはが声を漏らす。

「う…」

スバルが微かに動き、ゆっくりと瞼を開けた。

「スバル！」

「ティ…ア…？」

寝たきりだったスバルが首を動かし、真上にいるティアナの顔を見詰める。

「スバル！」

「スバルさん！」

意識を取り戻したスバルにギンガやエリオ達が集まる。
だが、隊長陣とダンテはネロを見ていた。

「バイタルスターか…」

「バイタルスター？」

ダンテはフツと笑った後に言うと、ヴィータが復唱する。

「錬金術で作りに出された代物さ。俺も仕事の最中に見付けたり、手に入れたりした事があるよ」

まだ警戒を止めないヴィータとシグナム。

その話をフェイトやティアナ達も聞いているが、ネロの右腕から眩い光が放たれた。

「こ…れ…」

「え…」

ネロは未だに呼吸が荒いまま。

闇魔刀を地面に突き刺し、左手で右腕を持ち上げながらも掌に出現した“赤いレリック”をフェイトに渡そうとする。

形こそ先程の“9つが組み合わせあったレリック”だが、色は元の赤色に戻っていた。

「う、うん」

フェイトはそれを受け取ると、ネロは突き刺していた閻魔刀を抜き、右脚を引き摺りながらもダンテに近寄る。

「途中でエライ事になっちまったが… やるな。流星は…」

「行くぞ…」

ダンテがその先に言おうとしていた言葉は“騎士^{ナイト}”である。だが、ネロは閻魔刀を逆手に持ち変えてダンテの肩に一度触れた。

「ネロ…さん…」

スバルが上体を起こすが、ネロは彼女に気付いているのに目もくれないのか… 気付いていないのか話を続ける。

「…世話になった……」

「え!？」

ネロがまた口を開くが、フェイトは不意に声を漏らした。

「行くぞ…」

「おい、坊…」

「待って!!」

先に進もうと、何処かに向けて歩くのを再開するネロ。

ダンテが呆れた様子で声を掛けようとするが、喋り終わる前にフェイトが割り込む。

Episode..51 Resonance〈共鳴〉（後書き）

〈第52話予告〉

t a l k i n g ..ネロ

一年前のあの日… 俺の中に眠る悪魔が目覚めた。
頭の中で声が響く…

“もっと力を”、と…

だが、俺はみんなに全て話せなかった…

まだ、俺の魂は叫び続けていると…

一年前から少しずつ俺の中の悪魔が出て来ようとしているとも…

だが、最近はいくらなんでもおかしい。デビルトリガー無しでの幻
影刀… 意識も飛ぶし…

結局… 俺の居場所は何処にもないんだな…

この世界にも… 元の世界… フォルトウナにも…

闇魔刀…

その《鋭き刃》は触れるもの全てを切り裂く…

だが、その“真の力”は物体を斬るにあらず…

“次元”を斬るもの…

Episode..52\Slash Dimension〈次元斬〉\

「待ってっば!!」

疲弊した身であるネロをフェイトが呼び止めた。

彼女はダンテの前を通り、ネロの前に出て来て道を塞ぐ。

「どうしたの、急に!? 世話になったってどう言うつもり!?」

「そのままの意味だ…」

フェイトの問い掛けにも彼は荒い息のまま応える。

「俺達は悪魔だ… もう、あそこにはいられない…」

フェイトはネロの姿を間近で見て、絶句した。

彼の服は完全にボロボロになっているのは分かっていたが、所々裂傷し、覗いている肌は血で赤く染まっている。

「そう言っても、はやてとの約束通り… 悪魔は倒す… 何処かで野宿でもするよ… じゃあな…」

「待ってよ!!」

ネロは無理に笑ってみせたが、また歩き出そうとしていた彼の右肩をフェイトが掴んだ。

その瞬間にネロも進めようとしていた歩を止める。

「なんでそうやって勝手に決めるの!?!」

フェイトの手にはネロの肩の感触…… “人間” の肌の感触が伝わって来ていた。

「ネロとダンテさんの事なら大丈夫だから。急すぎてみんな少し戸惑ってるだけだよ」

フェイトの言葉を聞き、ネロは中途半端に振り向く。

無論、今の彼の瞳は“青”に戻っていた。

その碧眼が若干距離を置いているシグナム達を見詰める。

（“あいつら”と同じ目だ……）

ネロの瞳に写る六課の前線メンバーの姿に、彼は違う人達の姿を重ねていた……

（フォルトゥナにいるやつらと同じ……）

ネロの脳裏には自分と、自分と一緒に暮らしているキリエを良く思っていない人間達が見る時の目だと感じた。

自分を“悪魔”だと呼び、一緒にいるとの理由だけでキリエを“悪魔の手先”呼ばわりする人間と同じ目だと。

恐怖、動揺、困惑、疑念……

それらを抱いている目だと。

フォルトゥナにいる全ての人間がネロとキリエを悪く思っているワケではないが、彼の目にはその人達と同じ目だと感じた。

「やっぱりみんな一緒だな……」

「え…」

自嘲気味に笑ってみせたが、彼の目は悲しいもの。
ネロの呟いた言葉の意味が分からずにフェイトは声を漏らす。

「じゃあ…」

「待ちな」

フェイトの手の力が弱まったのを頃合いに再び歩き出そうとした瞬間、今度はダンテが声を掛ける。

「仕事を途中で放り出すつもりか？」

「言ったら。悪魔は全部倒す…」

彼は話を続けるが、ネロは振り返らずに喋る。

「自分の都合が悪くなったから勝手な事をするのを放り出すって言うんだよ」

「あんたが言えるのかよ」

「言えるな」

ネロは肩で息をしているのが分かるが、ダンテは相変わらずの口調で喋り続ける。

「俺は真面目じゃないが、仕事はちゃんとするよ。まあ、普段は週休6日主義だけどな」

ダンテは不敵に笑ってみせる。

彼の服はネロほど酷くはなっていないが、既にフリードに噛まれた傷も塞がり、得意気に話していた。

「部隊長！ 映像、回復します！」

一方で六課の指令室のモニターも回復しつつあった。

ネロの強力な魔力の影響により遮断された映像も正常に戻り、廃棄都市の映像が映し出される。

【…色々があるが…】

「戦闘： 終わっちゃったみたい… ですね？」

巨大モニターには集まっている隊長陣やフォワードメンバー、少し距離を置いてダンテ、ネロの傍にフェイトがいる。

情報処理を終えたアルトとルキノがモニターを見上げ、他にもいるバックヤード陣はやて達もモニターを見た。

【まだ、こっから本番なんだし…】

映っているダンテは一々大袈裟な所作をする。

【一人じゃどうにも出来ない事だって…】

【クククク…】

現地との映像が途切れている間に何があったのか分からないはやて達は黙ってダンテの話を聞いていたが、突然聞こえて来た声にハッ

とした。

「この声って…」

「ああ… 間違いない…」

リインが傍にいるはやての方を見れば、彼女は顔を陰しくしていた。

…

【実に面白いものを見させてもらったよ…】

「デメエは…！」

「スカリエッツィ…！」

聞き覚えのある声にネロ達は頭上を見上げた。
そこには浮かび上がっているモニターが一つ。

「この前と昼間以来だな。ビビリ野郎」

昼間にアルトアンジェロを通して話をしたネロ、廃棄都市での戦闘をモニターで見ていたフェイトが声を荒げたのに対してダンテは直に姿を現さないスカリエッツィを鼻で笑いながら言う。

【そんな言い方はないだろう？ 私と君の仲じゃないか】

「おかしいなと言うんじゃないよ。あいつらが誤解するだろうが」

歪んだ笑みと金眼がダンテを見下ろしているが、ダンテは顔をしかめ、少し眉を吊り上げる。

【悪魔である君と… そこにいる騎士ネロを彼等は良く思わないのは当然だが…】

「おい…！」

スカリエッティの言葉を聞き、ネロは静かに口を開いた。

「今、なんて言った…？」

「ネロ？」

スカリエッティが映るモニターをフェイトも睨み付けていたのだが、ネロの声に反応して顔を向ける。

【何がだい？ 騎士ネ…】

スカリエッティがしてやったり顔でいた事と、また“騎士”と呼んだ事にネロの感情が爆発した。

「騎士だと…？」

「ちょっと… ネロ！」

彼は魔力を使い果たしていた筈だが、その瞳は真紅の光を放ち、右腕からは強い光を放ち始める…

：

「そんな… 魔力はもう無い筈なのに！」

六課の指令室にいるシャーリーは急かしくキーボードを打っていた。

「魔力エンプティじゃなかったのか！？」

「その筈なんです…！」

「どういうワケかさっぱりです！」

分からない事ばかり起きているのに慌てるグリフィスと、ネロの魔力値やデータの処理を続けるアルトとルキノ。

モニターに映っているネロは青白い光を全身に纏い、左手で握っていた閻魔刀を右手に近付ける。

【俺を…】

まだ痺れている右手を柄に添え、左手で包むように無理矢理握り締める。

その瞬間、閻魔刀にも青白い魔力が纏われ、彼は刃を地面に着けるように構え…

【騎士って言うんじゃないねえーーーーっ！！！！！】

「ネロさん…！」

デビルトリガーを使っている時ほど魔力は強力ではない為か、モニターの映像は乱れていない。

忌まわしい過去を振り払うように、ネロは下段から閻魔刀を振り抜いた。

青白い斬撃が閻魔刀から放たれようとした瞬間、はやてが椅子から立ち上がりながら叫ぶが：

【坊やを刺激すんなよ。こいつがマジでキレたら大変なんだぜ？】

その魔力刃はスカリエッティが映っているモニターに向けて飛ばされる事はなかった。

斬撃が飛ばされる前にダンテがフェイトの前に回り込み、閻魔刀の刃を素手で掴んだのである。

「ダンテさん…？」

【俺でも本気にならなきゃいけないんだし…】

【何しやる！！】

ネロの体に纏っていた青白い光と瞳の光は静まるが、閻魔刀の刀身にダンテの“赤い血”が滴る。

彼の唐突な行動はワケが分からない事ばかり。

はやてが声を漏らしたのに続き、ダンテに向けてネロが声を荒げる。

「はあ…」

ダンテはネロの姿を見て、呆れたように溜め息を吐く。

その右手は閻魔刀の刃を素手で掴んだままだが、空いている左手で面倒臭そうに頭を掻き、

「がっ!!」

即座にネロの服の胸ぐらを掴んだ。

穴が空いている為か掴みやすく、素早く頭突きを咬まし…

「ネロ!!」

「ダンテさん!! 何を!?!」

背後にいるのはやシグナムがいる方に向けて放り投げた。

ネロの漏らした苦悶の声も、自分の前を通りすぎたネロの名を呼んだフェイトや、彼の行動が理解できないなのはの問いも彼は応えず…

「怪我人に無理は良くないからな」

引き千切れたネロの上着で閻魔刀の刃に付着した血と、自身の右手の血を拭き取る。

「テメ…」

「…ネロ!!」

「ネロさん!!」

今のネロは上着を着ていない状態だが、飛んできた彼を受け止めたシグナムに続き、スバル達は気付いた。

彼の腹が削がれている事に…

「ネロ!!」

事態を理解したフェイトもシグナムによって寝かされたネロにすぐに駆け寄る。

【相変わらず… 随分と手荒いね…】

「まあな？」

スカリエッティの映っているモニターを見ずに、ダンテはネロの千切れた血だらけの上着を持って歩き出す。

「ネロ!! しっかりして!!」

「こんなの掠り傷… ぐっ!!」

起き上がろうとするネロはフェイトの言葉に“大したことない”と返すが、出血こそ少ないが傷は酷い。内臓まで達していないだろうが、事態は又しても急変した。

「ヴァイス陸曹!! すぐに着陸して準備を!!」

【分かった】

「はやて!! ネロが…!!」

「何処か近くの医療センターか病院に手配を!!」

ヴァイスに通信を入れるのはや焦るフェイトに、治療の要求を出すシグナム。

展開されているモニターに映るはやてが口を開いたが：

「掠り傷だって言っただろ…!!」

ネロの声によって割り込まれる。

彼は叫んでいるつもりのようなだが、呼吸が先程よりも荒い。

先程から隠していたらしいが、今になって痛みが大きくなって来たのだろう。

「俺が… この程度で…!」

【ネロさん、無理せんで…】

「ほらよ」

力を入れるほど体と腹の傷、右腕は痛むが、彼は無理矢理起き上がろうとする。

ちょうど上体を起こしたところではやてに続き、ダンテが声を掛けながら見る影もない上着を放った。

「大人しくしてないと、もう一発喰らわすぞ？」

ダンテの顔をネロは見上げる。

彼は抜き身の閻魔刀を肩に担ぎ、左手で顎の無精髭を触っていた。

「だからなんだよ… それより閻魔刀、返せよ…」

「おい！ スカリエッティ！」

ネロが顔を引き吊らせたまま、ますます荒い息を吐きながら左手を

差し出すが、彼はスルーしてモニターのスカリエッティの方を向く。

「色々知ってるみたいだな？」

【何がだい？】

「とぼけんなよ」

ダンテは右手に握る閻魔刀の切っ先をスカリエッティが映っているモニターにむける。

スカリエッティはダンテの行動を観察するように： 次になんと言うのか、どう動くのか楽しみにしているようだった。

「悪魔の事や俺と坊やのこと： 坊やが“元”騎士だったこと：とにかく全部だ！ 知ってること話せ！」

ダンテの気迫にスバル達は言葉を失うが、モニターのスカリエッティは更に口元を吊り上げる。

【嫌だと言ったら？】

「貴様！！」

酷く歪んだ笑みを浮かべるスカリエッティに向けてフェイトが叫んだ。

だが、ダンテは澄まし顔になり：

「テメエをぶちのめして全部吐かせる」

閻魔刀の刃を下ろし、杖代わりにしながら柄尻に両手をあてがう。

【ほう… そうするかい…】

「テメエも俺がどんなヤツか知ってるんだろ？ 調べてるみたいだし…」

繰り返される会話にフェイトも押し黙り、ネロも耳を傾ける。

「それと聞きたいんだが…」

ダンテは閻魔刀の柄から左手を離し、首を擦る。
そして…

「俺と坊やをこの世界に呼んだのはテメエか？」

確信を突いた話… 今までもそう考えていた話をダンテは切り出す。

【どうしてそう思うんだい？】

「聞く話じゃ… あのレリックってのは謎が多いらしいが、俺も坊やもそのレリックってのが原因でこの世界に來ちまったらしいし… テメエはレリックを集めてるらしいな？」

ダンテはそこで首から手を離し、閻魔刀の柄尻に置いてある右手の甲に左手を当てる。

【悪魔みたいに、なんか細工でもしたのか？】

「どうだろうねえ…」

アジトにいるスカリエッティはモニターに映るダンテや、彼の後ろにいるネロを見下ろす形のままとぼけたように言う。
そこでスカリエッティは手元にあるキーボードを叩き…

【…君の推測に任せるよ…】

音声が変わり、スカリエッティとは全く別人の… かなり低い男性の声が発せられる。

その声を聞き、

「やっぱりか…」

ダンテは確信し…

「この声…！」

ネロは目を見開き、動揺する。

「どうしたの!？」

「電話して来たやつの声だ…!! 悪魔が現れたからって… “合言葉”を使って…!!！」

右脚に力が入らないネロは、精一杯左脚に力を込める。
彼が無理に動かないようにシグナムやフェイト達が止めているのだが、動く度にネロの腹から血が溢れる。

「坊やにもか… て言うか、お前も“合言葉”使ってるのかよ」

ダンテは噂で“悪魔狩りを専門にしている若い男がいる”“その男がとある便利屋を営んでいる”とは聞いていた。

それがネロだとは察しがついていたが、まさか自分と同様に“合言葉”を使つてとは思ひもなかった。

「悪いかよ…」

一方でネロも便利屋を始めてからダンテの事を色々と知った。

彼は裏の世界ではかなり名の知れている男だと… その世界ではダンテが《魔剣士スパーダ》の息子だと知られていると…

「別にいいぞ。真似したってな」

「真似じゃない…」

事務所の兼営も危うく、借金まみれ。食事はデリバリーのピザばかり。

そんな男だと一年前に戦った時は知らなかったが、今のネロは知っている。

ダンテが軽く振り向きながら言ったのにもネロは苛立ちながら返した。

「とにかく早いところ話した方がいいぞ。坊やがキレたら俺よりヤバいからな」

【こんなふうにかい？】

ダンテのセリフを待っていたようにスカリエッティはまた何かしらの操作をし、新たなモニターが展開される。

そこには…

【うらああああああっ！！！！！！】

【はああああああっ！！！！！！】

何処かの室内で戦うネロとダンテの姿が映っていた。

ネロの手にするレッドクイーンとダンテの手にするリベリオンがぶつかり、凄まじい火花を散らしている。

「あれって…」

「ネロ…？」

なのはとフェイトはモニターともがきつつ、立ち上がろうとしているネロを交互に見た。

「デメエエ…！！」

「教団の本部で戦った時のやつか… 覗き見かよ」

ネロはモニターのスカリエッティを睨み付け、ダンテは溜め息を吐く。

そして六課でも同様に…

【そこをどけえええーっ！！！！！！】

“デビルトリガー”を発動し、背後に青白い悪魔を出現させたネロが…

チェンジ
【Change!!】

右腕を突き上げ、周囲の壁に電流が走り、雷の名残を振り払いながらリベリオンを突き立てる“赤い魔人”ダンテが映っていた。

「これ…」

「ネロさんと… ダンテさん…?」

巨大モニターに映る二人の戦いに目を疑うアルトとルキノ。

来て間もなく、ネロとダンテの事をよくは知らないのだが、“殺し合い”としか言い様のない戦いをしている二人にロングアーチメンバーは目を奪われる。

周囲の壁には凄まじい亀裂が走り、部屋の中央にあった台座が…

【くたばれええええっ!!!!!!】

ネロと背後の悪魔が放った斬撃と…

【頭冷やせ、坊やっっ!!!!!!】

魔人と化したダンテの放った斬撃により、碎け散る。

「なんだこれは…」

記録映像の中でなおも凄まじい激戦を繰り広げるダンテとネロの姿にグリフィスに衝撃が走った。

「おい! そんなもん見せるなよ。少年と嬢ちゃんには影響が悪すぎるだろうが!」

廃棄都市にいるダンテ達の所にも同じ映像が流れているが、ダンテは一度後ろを振り返り、エリオとキャロを見た。

二人と同様にスバル達もその映像を見て、言葉を失う。

「ネロ： あれって？」

「一年前にダンテと戦った時のやつだよ： 昼間の時もどうして知ってるのか引っ掛かってたが： 完全に決まりだな：」

フェイトの問いにネロは腹の傷を押さえながらも応える。

それはまさしく一年前にネロとダンテが“二回目”に戦った時のものだった。

射出された幻影刀を《チャージショット》で撃ち落とすダンテ：

「あいつが：」

【おおおおおおおっっ！！！！！！！】

出現させた《デビルブリンガー》で殴り掛かるネロ：

「俺達をこの世界に呼んだ：！！」

【しかし残念だなあ：】

【あああああっっっ！！！！！！！！】

地面が割れるほど強く蹴り、神速の跳躍で《スティングー》を繰り出すダンテ。

その映像を見ているスカリエッツィは少しつまらなそうにし…

【私は… 君達の“本気”が見たかったんだがねえ…】

「俺と坊やが本気出したら、こんなトコ吹き飛ばしちゃうよ」

再びモニター越しにダンテとネロを見下ろすスカリエッツィ。だが、ダンテは後ろを振り返る。

「いや…」

疲弊し、顔の見えないネロを彼は束の間、見詰める。

「見たトコ… “今日”の坊やはどうも…」

【今は“不調”の騎士ネロ… そして、“本気”を出さないハンター・ダンテ…】

「おい、消せて言ってるだろ！ 子供にR指定ライブは早すぎる！ てか、完全にお前知ってやがったな！？」

未だにネロとダンテの戦っているモニターを消さない事と、ネロが“不調”である事を知っていたスカリエッツィに対し、ダンテが声を上げる。

「不調…？」

スカリエッツィの言葉にフェイト達は耳を疑った。

今のネロは、本来の力を出せていないと言う話に…

ダンテが少しイライラしながら閻魔刀をトントンと肩に打ち付ける。そんな彼の姿を見ながら、スカリエッティの言ったダンテの話も耳を疑った…

“本気”を出していない…

確かに昼と先程の戦闘を比べれば、映像のダンテは“本気”を出しているのだろう。

ただでさえ強いと言うのに、本気を出し、《魔人》になったネロとダンテの強さはオーバーSランクすらも驚愕する程の戦いだった。

【あああああっ！！！！！！】

巻き上げられた埃を突き破り、デビルトリガーを解除したネロが閻魔刀を無茶苦茶に振るい、ダンテのリベリオンに叩き付ける。そんな二人の激戦に目を奪われていたフェイト達だったが…

——ギイイイイイイイインッ！！！！！！

突如として空間に網目状の白い亀裂が走り…

「消せて言ったろ…」

目を向ければダンテは腰を落とし、閻魔刀を振るったようだった。

「お喋り野郎…！」

——ヴォンッ！！

後になって空間に走る亀裂と同じ数： ダンテが閻魔刀を振るった
“10”の剣風が吹き：

けたたましい金属音を鳴り響かせながらもスカリエッティと“一年
前のネロとダンテの映るモニター”が砕け散る。

「え…」

「この技って…」

甲高い音に耳を塞ぎたくなるが、ダンテの繰り出した剣技にキヤロ
とエリオ：

「さっき…」

「ネロさんが使った…」

「え…？」

ギンガとティアナが口を開く。

しかし、みんなが何を言っているのかナイトメアの体内にいたうえ
に、気絶していたスバルは何の事だか分からなかった。

「はやてちゃん…」

「似てる…」

“空間”も“次元”すらも斬り裂く閻魔刀の力を目にしたりインが
はやてを見た。

彼女の目にも次元が斬り裂かれる様が写っている。

先程のネロが使ったものと…

「うそ…」

ダンテがいま使ったものが…

だが、比較的冷静な者ははやての他にもいた。

「ネロさんが膨大な魔力を使ったのに…」

シャーリーである。

彼女の前にはスカリエッティが映し出したダンテとネロの戦いを記録した映像が無数にあるが、一番手前にあるのはダンテの魔力値データ…

「ダンテさんは魔力なしで…」

悪魔のもたらす異質な魔力に“測定不能”の文字は消えないが、魔力反応はない。

「あれほど強力な技を…？」

昼間の戦闘で真紅の斬撃^{ドライヴ}を飛ばし、デビルトリガーを使っている時は魔力反応はあった。

だが、ダンテがいま放った剣技に魔力反応はない。

つまり、ネロですら膨大な魔力を使用したのに対し、ダンテは魔力なしで“あの技”を使ったと言う事になる。

…

【スラッシュ デイメンジョン… 次元斬か…】

砕け散るモニターの中でスカリエッティは喋り続ける…

【君の亡き兄… 黒い天使に身を落とし… 闇をさ迷う剣士が得意とした技…】

「黙ってろ!!」

これ以上好き勝手に喋られる事が堪に触ったのか、ダンテは常人が肉眼では確認出来ない程の剣技… 先程と同じ“スラッシュ デイメンジョン”で次元ごと残っているモニターを斬り裂く。

【実に素晴らしい力だ…!】

そして空間には再び無数の亀裂が…
けたたましい金属音と共に次元の狭間が斬られ、スカリエッティが映っていたモニターが消え行く中で…

【とても半魔とは思えないよ…】

——ヴォンツ…!

最後のセリフを口にする。

「え…」

「半…魔…?」

構えを解き、小さく息を吐いたダンテの背中になのはとフェイト達は目を奪われていた。

「よし。終わったことだし、帰ってメシの続きにしようぜ」

『なあ、シグナム…』

『…なんだ？』

振り返るなり、食事を再開しようと言い出すダンテを見ながらヴィータとシグナムが念話で話す。

『あいつの動き… 見えたか？』

「おーい、坊や」

腹を押さえ、未だに息の荒いネロにダンテは近付く。

『いや…』

「生きてるか？」

踞っている状態に近く、顔の見えないネロに向けて、ダンテは到底心配しているとは思えない言葉を掛ける。

『見えなかつ…』

「ネロ？」

剣風が吹き、ダンテがいた地面が削り取られている様にヴィータとシグナムは看取れていたが、フェイトの声に反応し、ネロを見た。

「ネロ!!」

「ネロさん!!」

呼吸が更に荒くなり、意識が朦朧としているネロに皆が駆け寄る…

…

『ここは… 何処だ…?』

暗闇の中に俺はいた…

光も何もない闇の世界に。

『前にも…』

そうだ。俺は前にもここに來た事がある。

そんな気がした。

だが、背後から感じた気配にハッとして、俺は振り返った。

そこには…

『あんたは…』

銀髪の男が立っていた。歳は20代前半程の若い男が…

青いロングコートを羽織り、銀髪を後ろに撫で着けた髪型をしている。

『誰だ…？』

その男は鋭い目をしていた。

触れるもの全てを斬り裂き、切り刻むほどの殺気を発しながら…
だけど、俺はその男の目を見て違うものを感じた。
どこか… 悲しさも秘めているような…

『いや… 待て…』

その男に俺は近付こうとしたが、歩を止めてしまった。

『あんた… 前にもあった事がある…！』

そうだ。俺は前にこの男に会った事がある。
あれは確か…

『一年前に…』

俺の右腕が《悪魔の右腕》になってしまった頃だ。
あの時に一度…

『いや…』

俺は右腕から男に目を移し、記憶から呼び覚まそうとする。
この男に会ったのはこれが2度目じゃない。

『何度も会ってる…？』

その男は一向に口を閉ざしたまま、何も喋ろうとしない。

いや、口を開いた。

『…え?』

その男は確かに何か言っていた。
だが、俺の耳には聞こえない。
こんなに近くににいるのに…

『なに言ってるか聞こえねえよ…』

俺はそう言い、更に男に近付いた。右手で頭を掻きながら。
でも、その男には俺の声が聞こえているんだろう。
手で顔を押さえ、苛立ったように舌打ちをした。
声は聞こえないのに舌打ちは聞こえるんだな…

『つーか… あんた誰…』

その男は指の間から俺を睨んでいるようだった。
そんなふうに見られても困るだけなんだが… 俺は辺りの空間を見
渡しながら言うが…

『おい…』

その男は光を発しながら闇の空間に消えて行く…

『おい!!』

俺はその男に向けて手を伸ばした。
そいつは消えて行く中で、必死に何か言おうとしていたが、声まで
はどうしても届かない… 聞こえなかった…

…

「…え…？」

「よお…」

ネロは気が付いた。

先程の闇の世界ではない。今いるのはへりの中…
そして…

「お目覚めか、坊や？」

ネロの右手はダンテの首を絞め上げていた。

「ダン…テ…？」

「ネロ…！」

隣から聞こえて来た声と共に、ネロの腕はフェイトに引っ張られる。

「たく… 世話のやけるやつだな…」

ダンテは呆れて溜め息を吐くが、彼の胸や腹、肩に10本以上の幻影刀が突き刺さり、貫通していた…

——ネロやダンテ達を乗せたへりが飛び立ったばかりの頃…

「ネロ!!」

「ネロさん!!」

「そこに寝かせて!!」

着陸されたヘリの座席に意識はほぼ無いに等しいネロが寝かせられる。

「大変だねえ…」

ヘリの後部ハッチが閉まり、その部分にダンテは凭れ掛かる。

「まったく…」

閻魔刀はダンテの手にある。

彼の発言にネロの傍にいるフェイトが一度目を向けた。

彼の自由奔放、傍若無人かつ、何処までもマイペースでいる考えを彼女達は全く理解出来なかったが、今はそれどころではないので構っている暇はない。

「なあ、“さっきのあれ”は？」

狭い空間に気まずい空気が漂っているが、ダンテはまるで空気を読むつもりもないように言う。

「“あれ”…ですか？」

「そうだよ」

なのはがダンテを見るが、彼は閻魔刀を地面に突き立てないようにして持っていた。

無論、切っ先は地面に向いている。

「…どうぞ」

「どうもな。美人の姉ちゃ…」

なのはが待機状態のレイジングハートに指示を出し、ダンテの前にモニターが展開される。

彼は画面を触ろうとするが、手を止め…

「…なのは」

ちゃんとなのはの名前を呼び、映像を再生する。

それは…

【D u s t t o d u s t（塵は塵に）…！】

【ぐあっ！？】

「見えにくいな…」

閻魔刀でレヴァンティンを弾き飛ばすネロの姿が。

画像が横になっている為、ダンテが首を捻りながら見るが、面倒になったので次に飛ばす。

【うらああっ！！】

次は廃棄都市での映像。

無数のヘルⅡプライドに囲まれたネロが拳で殴り飛ばし、時には蹴り、鎌を奪って切り裂く。

こちらは頭上から映されている映像。

「へえ…」

ネロの姿を見たダンテは納得し…

【C r y o u t n o w (泣き叫べ)!!】

「…やっぱりな」

画像を全て消す。

スバル達はまだ見たかったようだが、ダンテは一人納得していた。

「何がやっぱりなんですか？」

「坊やに“個人的”に聞きたかった事だ」

ダンテが見ていたものは、ヘリに乗る直前にスカリエッティから六課に向けて送られた映像らしい。

ロングアーチからなのは達にも伝送されて来たのだが、その映像を見たダンテは、昼に100体に及ぶアンジェロと戦った時からネロに感じていた考えが間違いではなかった事を確信する。

「腕が落ちてるワケがないだろうし… スランプってのも違う…」

なのはの問いにも彼は気だるそうに応え、

「本当に“不調”みたいだな」

ボロボロの上着を掛けられているネロを見た。

「マジかよ…？」

「ああ」

ヴィータの問いもダンテは軽く応える。

「いつからだ…」

その中でシグナムは静かに…

「いつからだったんだ…！！」

彼女の声にスバル達の体がビクッと反応する。

「いつからって…」

凄まじい気迫が放たれているが、ダンテはまるで気にもせず頬を掻き…

「最初からじゃねえか？」

「なに！？」

燃焼機関部分が壊れてしまったレッドクイーンは彼女が持っていたが、ダンテの言葉を聞き、シグナムに動揺が走った。

それはそうだ。体調が万全ではなく、不調のうえに使い慣れた剣を使っていない男に負けたのだから。

こんな重い剣を“愛剣”と呼び、左腕一本で持っていた“不調”の男に…

「言っておくけどな、俺が見た感想がだぞ？　俺は坊やとずっと一緒にいたワケじゃないんだし…」

「ネロ…?」

スカリエッティから送られて来た映像はネロが森の中でシグナム、ファウストと戦っているものと、廃棄都市における“野外”で戦っているもの、そしてダンテが廃棄都市で戦っているものの3つだった。

ダンテは自分の知っているネロの実力はこんなものではないと言いたいようだが、フェイトの声に反応して寝たきりのネロを見た。

「……あ…!」

彼は意識がないのだが、左手で服の掛かっている腹を押さえ、右手からはぼんやりとした光を灯している。

「ネロさん!」

スバル達も集まるが、彼の呼吸の間隔が短くなりつつ、激しく脈を打つ。

「…い……」

「え?」

ネロが浅い呼吸のまま、何か言った。

彼の言葉を聞こうとフェイトが耳を近付けるが…

「どけ!!」

ダンテが一気に距離を詰め、フェイトを押し退ける。

「フェイトさん!!」

「テストロッサ!!」

突き飛ばされる形に近いフェイトをエリオとシグナムが受け止め…

「貴様、何を…!」

ダンテを見た瞬間、彼女の顔に何かが飛んで来た。

「え…」

彼女達の前には、腹の傷が完全に塞がり、瞳から真紅の光を放ち、ダンテの首を絞めながら壁に叩き付けているネロの姿が飛び込んで来た。

「「…もつとだ…!」」

ネロはダンテの首を絞めたまま、周囲に幻影刀を出現させていた…

「「……俺に……………!」」

「ネロ…?」

いや、既に幻影刀を射出したのだろう。

ダンテの胸や腹には6本の幻影刀が突き刺さっている。

「痛って…」

フェイトやエリオの顔に飛び散ったものは、ダンテの“赤い血”だった。

彼は幻影刀で壁に礫にされつつ、ネロに首を絞められていた。

ダンテは若干顔を引き吊らせながらも少し吐血する。

「「……もつと力を…!!」」

とつくに魔力は使い果たしている筈だが、ネロの周囲に6本の幻影刀が展開し…

「「俺にキリエを守る力をくれ!!」」

左手に凄まじい暴風が吹き荒れ、7本目の幻影刀が出現する。

「ネロ!!」

「ちいっ!」

フェイトが声を張り上げ… 幻影刀を突き刺されながらもダンテは閻魔刀をネロの右腕に当てた…

――そして…

「たく… 痛えんだよ…」

壁から離れ、口と幻影刀が突き刺さっている部分から血を流すダンテがネロを見下ろしていた。

「今日は厄日みたいだな…」

ダンテはそう言いながら胸に突き刺さっている幻影刀の刃を掴み…

「俺は服が台無しにされるし…！ そっちのドラゴンと坊やにもやられるし…！」

一本一本抜く度に血が飛び、ダンテは苦悶の声を漏らす。

「お前も…！ 右腕がばれちゃったみたいだし…！ ……よ…！」

幻影刀は碎け散らずに足元に突き刺さり、それを見たダンテは顔をしかめる。

「…体の方はともかく… 魔力のコントロールは前より上達したみたいだな…」

腹に突き刺さっている幻影刀に手を掛けるが、なかなか抜けない。

「おい、坊や！ 手伝え」

「え…」

唐突にダンテに呼ばれたネロはワケが分からなかった。

意識を取り戻したと思えばヘリの中で、更にダンテの首を絞め、1
3本もの幻影刀を突き刺していたのだから。

「この真ん中のフックの部分が腹中で引っ掛かってるみたいなんだよ。背中から抜いた方が早いみたいだから、やってくれ」

特に深く刺さっている幻影刀を背中から抜くようにダンテは要求して来た。

ネロの右手はフェイトが掴んでいたが、そこで彼は気付いた。

右腕の痺れが消え、腹の傷も癒えている事に。

「早く手伝えよ」

ダンテは他の抜けやすそうな幻影刀を手探りで探しながら、背中をネロに向ける。

そこで彼は立ち上がり、ダンテの腹を貫通している幻影刀に手を掛け……

「フッ！」

「痛えっ!!」

思いつき引き抜いた。

思いの外、血が飛び散り、返り血がネロの体やズボンに付着する。

「痛って……おい！ もっと優しくやれよ！　すぐに治るからって、簡単に考えやがって！」

ダンテの服もボロボロになってしまっているが、その破れた部分か

ら下の肌が覗いた。

血で赤く染まってはいるが、普通の人間なら即死する程の傷が瞬く間に癒える様子が…

「お前、分かってんのか？ 普通の人間なら即効で死んでるレベルだぞ？ これ見ろ、これ！」

ダンテは幻影刀の突き刺さった後や、まだ抜いていない幻影刀を指差す。

「これ、肺が潰れてるよな。それに腎臓とか肝臓とか胃とかも刺さってるよな。それに、極めつけが…」

「どのくらい時間がたった…」

ダンテがこれよがしに見せ付けていたが、ネロは無視して喋る。

「え…」

「俺が気を失ってから、どのくらい時間が経ったんだ…！」

ネロの言っている意味をようやく理解したフェイト。

【one minute forty-four seconds
(1分44秒です)】

「なに…？」

バルディッシュからの情報を聞き、ネロの瞳が揺れる。

「…ネロ？」

（たったの2分足らずで…？）

フェイトの問いかけにも応えず、彼は心中で狼狽える。

「おい、聞いてんのかよ？ これなんかモロに心臓だし… お前に心臓潰されたのって、これで2回目…」

（この前までなら掠り傷を治すのに一晩掛かったのに…）

ダンテがぼやいているのも耳に入らない…

（さっきよりも速くなって…）

彼は恐怖していた…

（あの傷が短時間で…？）

一年前から少しずつ目覚めようとしている自分の中に眠る悪魔の力が… 自分が悪魔に飲み込まれる事を恐れ… 自分と戦いながら…

…

「ククク…」

一方では酷く楽しそうに笑っているスカリエッティが薄暗いラボにいた。

彼の前には無数の悪魔が黄色い光を放つ巨大な試験管の中にいる。

「言われた通りにしたわよ」

「ご苦労だったね： ウリエル：」

影の中に出現した黒い渦からウリエルが出てくる。
彼女の白いローブには所々血で赤に染まっていた。

「失礼したね：」

そして、ウーノの首に巨大な剣： 《グラディウス》と言う名の人造悪魔が変形した剣を突き付けていた男が彼女から距離を取る。

その男は長身を窮屈に押し込むようにし、左目にモノクルを着けている：

「ドクター、失礼します。ディエチが軽い錯乱状態でして：」

【ああ。入りたまえ：】

ディエチに肩を貸しているトーレがスカリエッティのいるラボの中に入って行った。

〈第53話予告〉

t a l k i n g . : フ ェ イ ト

私達は彼らの全てを知ってるワケじゃない。
それはネロとダンテさんも同じ：

彼が最初に出身世界を話してくれた時は97管理外世界の出身かと思っただけど： 母さんやお兄ちゃんに調べてもらってそんな地名はないって言われちゃったし： ユーノが仕事の合間を縫って調べてくれてるみたいなんだけど：

とにかく： 早く見付けてあげよう。

ネロは： よっばどキリエさんの事が：

E p i s o d e . : 5 3 \ S t a r t へ本当の始まりへ (前書き)

闇の軍勢との戦いに一時の休息を得た狩人達は、己の信じた道を歩み続ける…

なのは役の田村ゆかりさんが歌う『星空のSpica』にのせて読んで下さい。

Episode：53〈Start へ本当の始まり〉

「来ました！」

機動六課の部隊舎屋上には、ネロ達を乗せたヘリの到着を出迎えに待っていたはやて、リイン、シャマルとザフィーラがいた。

遠くから見えるヘリのライトと、プロペラの音を聞き、リインが声を上げ、遠くを見詰める。

「やけど、ネロさん… ホンマに大丈夫なんかな？」

「シグナムからの通信だと、もう怪我は治ったらしいですけど…」

ヘリを見詰めたまま話すはやてにシャマルが心配そうに顔を向ける。

「奴自身は少し複雑なようだが」

ヘリが着陸するにつれ、ザフィーラが話に加わる。

「あ、出て来た！ ネロさ…」

ヘリの後部ハッチが開き、ネロとダンテの二人が外にゆっくりと歩を進め、出た瞬間に…

「ああああっ！！」

「ハハッ！」

拳を突き出したネロの攻撃をダンテがリベリオンで受け止める。

「え!？」

はやて達は何が起きているかわけが分からなかった。
帰還するなり、ネロとダンテの二人が戦い始めたのだから。

「フンッ!!」

「はっ!!」

ネロが右腕から閻魔刀を出現させ、ダンテとぶつかり合う。
ネロはボロボロの上着を右肩に巻き付け、ダンテもボロボロになっ
てしまった傲慢の赤いラバーコートを羽織った服装で戦っていた。

「ちよっ! 二人とも!」

「ネロ!!」

「ダンテさん!!」

慌てるはやてだが、フェイトとなのは達もヘリから出て来る。

「何があつたん!? なんで二人が戦つとるん!？」

「いや… こっちもよく分からないんだけど…」

何故戦いを始めたのか分からないはやてになのはが応える。

「ダンテさんがスカリエッティの送って来た記録映像を見て“調子でも悪いのか?”、ってネロに言ったら…」

「ううううーっっっっ！！」

「どうした坊や！！ この程度か！？」

止めようにも止められない状況下で、二人はぶつかり合う。
互いの剣からは火花が散り…

「突然…」

「うわっ！！？」

「ネロ！！」

ネロの手から閻魔刀が弾き飛ばされた。
はやてに経緯を説明していたフェイトが声を上げる。
そして、胴ががら空きになったネロの腹にダンテの蹴りが飛び、彼は勢いのままに転げ、膝立ちの状態でダンテを睨んだ。

「こんなもんか？」

ダンテはつまらなそうにリベリオンを杖代わりにして喋る。

「はっきり言って… 最初に戦った時のお前の方が強かったぞ？」

「デメエエ…」

閻魔刀はダンテの後方に突き刺さっている。
レッドクイーンはシグナムが持っているが、彼は取りに行こうとはせず、立ち上がりながら拳を握り締めた。

「判定としちゃ… 40点ってトコだな」

それはダンテが勝手に決めた基準だが、聞いた瞬間にネロの右腕からは強い光が放たれ始める。

「40…？」

「ちなみに…」

聞いたネロは歯を食い縛る。
だが、ダンテは話を続け…

「お前と最初に戦った時が45、2回目に戦った時が70だ」

気だるそうに喋るダンテだが、ネロは更に拳を固く握る。

「え…」

「今ので40点…？」

ダンテのネロに対する評価を聞き、スバルとティアナは耳を疑った。

「2回目が70点って事は…」

「さっきの映像の事だよね？」

エリオとキャロも信じられなかった。

今のネロが本来の実力を出せていないと言う話だけでも驚いたのに、ダンテから先程の映像はネロと“2回目”に戦った時のものだと言

いたが、あれでさえ“70点”だったのだから。

「そうかよ…!!」

瞬く間に青白い右腕デビルブリンガーを出現させ、ダンテに向かって突き出される。
だが…

「え？」

「消えた!？」

ダンテもリベリオンを構えていた直前でデビルブリンガーが消える。
声を上げるスバルとギンガ。
ダンテも一瞬、狼狽する。

そして…

「フッ!!」

「おっと!」

デビルブリンガーを囷に使い、神速の跳躍で間合いを詰めたネロが拳を振るった。

それでも攻撃は当たらず、ダンテは軽く首を捻ってかわす。

「なるほど…」

「あっ…!」

「ネロ!!」

「ネロさん!!」

ダンテは一人納得したようだったが、ネロの腹には彼の膝蹴りが食い込んでいた。

カウンターの応用でネロのスピードは利用され、ダメージは彼に直接返ってくる。

地面に手を着けるネロにフェイト達が駆け寄ろうとする…

「間違いだったな。やっぱり45点…」

——ピッ…!

突如としてダンテの右頬から血が飛ぶ。

彼はその血を拭い…

「いや…」

もう一度ネロを見た。

彼は起き上がろうとしない。

「ガッツを足して50点だ」

瞬く間に頬の傷は塞がる。

「坊や、そんなに焦んなよ。苛つくのは仕方ないが…」

ダンテがしゃがみ、ネロの目線に近付けようとする。

だが、彼は這いつくばる形に近い体勢の為、顔は見えない。

「ネロ…」

フェイトが声を掛けようとした瞬間だった。

彼は右腕を振り上げ、地面に拳を打ち付けようとするが…

「……クソッ…！」

叩き付ける直前で寸止めし、舌打ちと悪態をついた後に立ち上がる。

「…どうしたか知らないけど…」

闇魔刀を拾い、右腕に吸収しながらもシグナムの元へ歩くネロを見ながらダンテは喋り続ける。

「…」

シグナムが何か言いたそうにしていたが、ネロは一度彼女と目が合っただけで、レッドクイーンを受け取るなり何処かに言ってしまった。

「ネロさん…」

「どうした？ いい男の裸に看取れたか、嬢ちゃん？」

屋上のドアを開け、この場にはいないネロの名を呼ぶはやての隣にダンテがやって来る。

「いや、違…！」

「照れるなよ。まあ、あいつみたいな年頃のやつは難しいって言うし？」

長身のダンテを見上げるはやて。
場の空気を読むつもりは微塵にも感じさせない発言を否定しようとする彼女の視線に気付き、ダンテは言葉を付け足した。

：

（まだだ…）

シャワーを浴びているネロは壁に両手を着き、“頭の中”で響き続けていた声に歯を食い縛っていた。

（また聞こえる…）

それは、一年前に彼の中に眠る悪魔が目覚めてから聞こえるようになった声。

しかし、その声は時々聞こえていた程度だったのだが、最近では頻繁に聞こえるようになっていた。

「もっと… 力を…！」

顔を上げるネロ。

その魂の叫びは、彼がこのミッドチルダに来てから聞こえる事が多くなっていた。

「力をくれ…！」

眩くネロ…

その彼の右腕： 悪魔の右腕からは、彼の発した言葉に呼応するようにボウツ、と光が灯る：

：

「よし、メシ再開だ」

早速食堂に戻ったダンテは、椅子を蹴り上げた。
宙を舞う椅子が地面に戻るなり、タイミング良く彼は腰掛け、テーブルの上に足を乗せる。

「おっと： ワリイ、またやっちゃった」

「いや、あの：」

テーブルから足を下ろし、後ろにいるはやてを振り返りながらダンテは悪びれない様子で言う。

「どうした？」

「ダンテさん： その服はちょっと：」

「これか？」

ダンテのボロボロになってしまった服は悲惨だ。
昼の戦闘でコートは破れ、先程の戦闘ではフリードに噛まれ、ネロの幻影刀に貫かれてしまったのだから。

「ああ、台無しにされちゃったんだったな」

「すみません…」

慌てた様子もなく自分の格好を見るダンテ。
そんな彼の後ろから声が聞こえて来た。

「フリードが… ダンテさんを…」

「気にすんなよ、嬢ちゃん。傷ならとくに治ってるし、そっちに
いるちっこい竜の事なら仕方ないだろ」

謝って来たキャロに対してダンテは軽く手をヒラつかせる。

「あらかた… ご主人サマを守る為に必死だったんだろうし…」

彼はそう言いながらフォークを手に取り食事を始める。

「俺の“魔人”の姿は坊やと違って完全に悪魔の姿だしよ？」

彼は皿にめい一杯の料理を盛っている。

「それよりメシ、食おうぜ。あれ？ ピザは？」

…

「すいー…」

【はあああああっ!!】

一方では、指令室に残っていたシャーリーはモニターに映る映像に夢中だった。

スカリエッティから六課に向けて贈られた“餞別”のものらしい。そこには大剣リベリオンを背負い、凄まじい回し蹴りを繰り出すダントの姿が映っていた。

【うらああっ!!!!】

勢いを利用しての左右の脚を交互に入れ替えながら4発の回し蹴りを群がる悪魔に喰らわし、

【シッ!!】

トドメに右足を振り上げ、強烈な蹴りを繰り出す。

【ショボいな… 掃き溜めのテメエ等なら“ギルガメス”無しで十分だ】

「ギルガメス…?」

…

そしてスカリエッティのアジトでは…

「ままま、まったく… あの男も何を考えているのやら…」

ウーノの首に悪魔が変形した大剣を突きつけていた男が廊下を歩いているが、彼の手には何もない。

左目にモロクルを着け、白いローブを纏い、ブツブツ言いながらスカリエッティのいるラボに戻ろうと歩いているだけ。

だが、彼はふと足を止める。

「あの女は…」

廊下の向こうにあるスカリエッティのラボの前では、二人の女性がいた。

「先程の…」

モロクルを着けた男は声を漏らしながら左手首を擦る。

「ウリエル…！！ 貴様っ！！」

「調子に乗らないでくれる？」

女性の内の一人はトーレだった。

彼女はウリエルに押さえつけられ、壁に顔を押しあてられている。

「鬱陶しいのよね。いつも突っ掛かって来てさ？」

「ぐあっ！！？」

腕を捻り上げられるトーレが苦悶の声を漏らすが、ウリエルは見下すような目で彼女を見る。

「偉そうにしないでくれない？ たかがオーバーS程度の实力で」

ウリエルはそう言うと、出現した黒い渦の中に手を突っ込み、荒々しい刃の刀身を持つ剣を取り出した。

「“帰天”する事も出来なかった…」

ゴウツ！！ と刀身に炎が纏われ…

「人形の癖に？」

ウリエルは手にする剣をトーレの顔前に突き刺した。

「…！！」

「消し炭にするわよ？」

顔前で燃え盛る炎にトーレは目を見開いた。

ウリエルが剣の柄を握り締めた瞬間、炎による超高温で壁が溶解する。

「…あらあ…」

背後に感じた気配に炎は弱まり、ウリエルは背後を振り向いた。

「ラファエルじゃない」

ウリエルはモロクルを着けている男を“ラファエル”と呼んだ。その声に反応し、トーレは押さえつけられたまま目を向けようとする。

「い、いや、私の名は…」

“ラファエル”と言う名をその男は否定しようとするが…

「…ラファエルだ…！」

何かを思い出したようにその名前を肯定し、トーレとウリエルに向けて舞台役者のように盛大に礼をする。

「また、新しい人造…」

「天使よ…！」

トーレが何か言おうとするが、彼女が言い終わる前にウリエルが皿にトーレの腕を捻り上げ、耳元で囁く。

「まあ、あなた達からしたら“悪魔”なんでしょうけど？」

口調は明るいが、ただならぬ威圧感に寒気を感じるトーレ。そして、ここでもうやく彼女は開放された。

「そそそ、それは…！」

「新しい固有武装かしら？」

理由はスカリエッティのラボからディエチが出てきたからであった。彼女が巨大な狙撃砲を持っていたのにラファエルは言葉がつかえるが、そんな彼にウリエルは肘打ちを喰らわし、白々しく聞いてみる。

「はい。ドクターが使えって」

「良かったわね」

その巨大な狙撃砲を少女が持つのは余りにも異様な光景だったが：『それは黒く、パーツの間からは移動するように白い光を放ち、“何か”を抑え込む鎖が所々に巻かれていた。

：

「うーん…」

ダンテとネロが映るモニターを見詰めているシャーリーは眼鏡を外し、目を擦る。

（やっぱり、ネロさんもそうだけど… ダンテさんにもバリアジャケツトは必要だよね…）

二人が傷を負うなど滅多にある事ではないが、今日のような事になったのでは堪ったものではない。

はやてから色々と仕事を頼まれてしまった彼女は一度背伸びした。

（でも、ネロさんの魔力もダンテさんの魔力も桁違いに高いし…）

デビルトリガーを使わないにしても、あれ程の魔力に簡易デバイスが耐えられる筈がない。

壊れてしまったレッドクイーン修理に、ブルーローズの強化。

デバイスを持っていないダンテの事でシャーリーは頭を悩ませる。

【Time to go to work, guys（仕事の時間だ、相棒）！！】

声に反応し、シャーリーはモニターに目を向けた。

「ええ！？」

見れば、モニターの中にいるダンテの腕は真紅の魔力を纏い、二挺拳銃から凄まじい連射をしている。

「あの連射速度だけじゃなくてこの魔力…！」

【ハハッ！】

昼間の戦闘でも見たが、秒間十数発の高速連射は通常の弾丸だけでなく、魔力を込めたチャージショットにも使われていた。

（もしかしたら… この人なら…）

…

トーレとディエチが去った後には、ウリエルと言う女性とラファエルと言う男性だけが廊下に残っていた。

「あ、あ、あの娘が持っていたのは…！」

ディエチが持っていた新しい固有武装に狼狽するラファエル。

そんな彼の姿を見たウリエルが今まで見せた事のない程、邪惡な笑みを浮かべた。

「あなたは気にしなくていいの。深く考えない方がいいわよ……？」

そう言うとうリエルは黒い渦の中に剣をしまい、腕組みする。

「隻眼の魔劍士…… アンジェロアグナス改め……」

ウリエルとラファエルの身長差は大きい。

そして、ラファエルの左手首には火傷のような痕が……

「第三の天使…… ラファエル」

ラファエルと言う名に名前を変えたアグナスは、楽しそうに笑うウリエルの姿を無言で見詰め、スカリエッティのラボの中に入ってしまった。

……

「……よお」

六課の食堂では、椅子に座る隊長陣にフォワードメンバーがいた。軽快に挨拶したのはダンテ。そして彼の後ろには新しいトレーニングウェアに着替えたネロがいた。

彼の腰には普段着ていた服に着けていたホルスターに納まるブルーローズが。左手には燃焼機関が壊れてしまっているレッドクイーンがある。

「お前もメシ…」

「はやて。デバイスルームを使わせてくれ」

ダンテが言い終わるよりも前にネロははやてに言う。

「え？」

「レッドクイーンが“また”壊れちゃったし、ブルーローズも改造したい」

ネロが言っている意味が分からなかったが、彼は自らの手で武器を修理したいらしい。

「いや… ネロさん…」

「デバイスの構造なら大体分かってる」

椅子から立ち上がろうとするはやてだが、彼はただ喋り続けた。

「暇だったからこの2日の間にブルーローズを弄ってみたし、昼間にヘリに乗ってる時にレッドクイーンの方も…」

そう言いながら、ネロはレッドクイーンの刀身部分と、燃焼機関と柄が一緒になっている部分を外した。

燃焼機関部分は融解していた為、外す時に派手な音を立てる。

「…一通り見たし、シャーリーにも聞いたりしたんだから…」

《悪魔の右腕》に包帯を巻き、右手にもグローブを着けているが、巨大な刀身を右手に、柄と壊れた燃焼機関部分を持つネロが背後に感じた気配と皆が集まる視線に振り返った。

「あの… えっと…」

見れば、ネロの後ろにシャーリーがいた。

彼女は任務の処理で少し人数の少なくっている食堂で他の部隊員から集まる視線に言葉を選んでいる。

「ネロさんのデバイスの件なんですけど…」

「あの部屋、使わせてくれ」

一度シャーリーを見た後にはやてを見るネロ。

「すぐに直したいし、なんなら見張りでも着ければ…」

「坊や、メシの続き…」

「いない」

はやてにデバイスルームの使用許可を求めるネロ。

そんな彼にダンテは食事の続きをしようと言いたいが、ネロは冷たく断った。

…

「スス： スカリエッティ：！」

「なんだい？」

ラファエルと言う名に変えたアグナスは黄色い光を放つ巨大な試験管の中に眠る悪魔を楽しそうに見ているスカリエッティに詰め寄る。

「な、な、な、なんだではない！！ 何を考えている！？」

なおもアグナスはスカリエッティに詰め寄るが、彼は振り返らない。

「ウ、ウ、ウリエルと言う女が持っていたのもそうだが： あ、あ、あ： あの娘に渡したのは： まさか！？」

「ああ： “魔具”の事かい？」

ディエチの持っていた新しい固有武装にアグナスは見覚えがあった。一向に振り向かないスカリエッティの顔は彼には見えないが： 酷く歪み： 実に楽しそうだった：

：

そして、六課のデバイスルーム。

そこにはレッドクイーンの修復と強化、ブルーローズの改造に勤しんでいるネロがいた。

違うテーブルの所にはシャーリーが。

（八神部隊長が許可を出してくれたけど： まさか本当に自分で修

理したいだなんて…)

シャーリーの脳裏に先程の事が蘇る。

——あの… でしたらこれを機会にダンテさんの銃の方も…

——俺のはダメだ。

はやてが一向に引かないネロに何を思ったのかデバイスルームの使用許可をくれたが、シャーリーも付き添う事になった。

彼女としては構わなかった。

デバイスのメンテナンスに纏わる仕事はシャーリーの仕事なのだから。

その時にダンテにも二挺拳銃《エボニー&アイボリー》の改造プランを持ち掛けるが、彼は即座に断った。

——坊やは自分のだからいいかもしれないが… コイツを改造なんてさせるワケにはいかない…

ダンテの雰囲気“ただの戦いの為だけじゃない”銃だと察し、シャーリーは無理強いしなかった。

(まあ、それはいいとして私は…)

シャーリーの前にあるモニターにはブルーローズとレッドクイーン
の強化だけでなく、他のデータがある。

(“こっち”を仕上げないといけないし…)

「分からない所や手伝って欲しい所があったら言って下さい」

「…ああ」

シャーリーの言葉に反応し、ネロは静かに応える。

…

「嬢ちゃんも太っ腹だな」

「おおきに」

【フッ!!】

食堂にいるダンテははやてと話していたが、彼の前にはネロが初日に六課に来たときの廃棄都市での戦闘映像が流れていた。

巻き上げられた土埃の中で、ネロはキレのある蹴り、爆天で回避しながらも地面に片手を着いてセブンⅡヘルズを蹴り飛ばし、更には鎌を奪って戦っている。

「でも、ダンテさんの話だとネロさんは…」

「実力を出しきれていないとの事です」

【Wake up!!】

はやての言葉に即座に応えるシグナム。

ダンテはネロがミッドチルダに来た翌日のファウストとの戦闘映像を見ていた。

ネロがデビルトリガーを発動した瞬間、強力な魔力の影響で映像が

一瞬乱れる。

フェイト曰く“おそらくネロに破壊されたガジェットが記録したものの”らしいので映像は横になっていた。

「別に： この程度の相手なら本気を出す必要はないだろうけどよ：」

【Get lost!!!】

首を捻っていたダンテ。

彼は首が疲れたのか映像を切り替える。

「昼間とかさっきの時は： なんて言うか動きが悪かったしよ？」

ダンテは不敵に笑ってみせるが、そんなボロボロになっている服で言われても彼女達からは苦笑いと引き吊った笑みしか返って来ない。

「坊や自身は気付いていたみたいだけど：」

「なに!？」

【はああああっ：!】

「おい、見ろ！ いい男が映ってるぞ！」

ネロは自分でも“不調”である事に気付いていたと言った瞬間にシグナムが立ち上がった。

だが、ダンテはミッドチルダに来た日のセブンⅡヘルズとヘルⅡヴァンガードとの戦闘映像に切り替え、自分が映っている映像にはしやぐ。

「…まあ、カリカリすんなよ。あいつは苛ついてるみたいだが…」

【C·m·o·n!】

自分が映っている映像を消し、ダンテは腑に落ちないシグナムを見た。

「焦らずにいこうぜ？」

またしても彼は不敵に笑ってみせる。

「…よし。ピザも出て来ない事だし、シャワーでも浴びに行くか」

「す、すみません！」

要望したピザが出て来ないのを囁し立てるようにダンテは席を立つとする。

そんな彼が何を言いたいのか察したはやては謝ってしまった。

「いいよ。どうせ急には無理だったんだろうし、明日からで」

ダンテは手をヒラつかせ、何処かに行ってしまう。

「…あかん！　ダンテさんシャワールームとか分からん筈や！」

「主!？」

「はやてちゃん？」

ハッとしたはやてを皆が見詰め、シグナムとシャマルが声を上げる。

…

「ままま… まったく…」

アグナスはスカリエッティから与えられた自分専用の研究所にいる。

「ほ、ほ、本当に… と、とんでもないやつだな…」

彼の前には無数の悪魔が眠る巨大な試験管のようなものがあるが、テーブルの上には過剰なまでに鎖の巻き付けられている『物』があった。

「スカリエッティと言う男は…」

それはディエチの持っていた狙撃砲と同様に、“何か”を抑え込む為の鎖が巻かれ、そこから根を張り巡らされた『物』が5つ。

「だが…」

アグナスはククク… と笑い、体から眩い光と衝撃を放ちながら“天使”の姿へと変わる…

「面白い!! 実に面白いよ!!」

高らかに笑う“虫”のような天使を、“二つ”の物は見ていた。いや、見ているかさえ分からない。

「アハハハハハッ!!」

他の物とは違い、形が見えない程の鎖で巻かれていた『長い何か』と『二つの物が組み合さった何か』は、アグナスが気付かない程の弱々しい“青”と“赤”の光を鎖の間から漏らす：

：

「次元斬？」

廊下を歩くダンテとはやて。二人の後ろにはシャルとザフィーラ、宙を浮くりインがいる。

「ああ」

廃棄都市でスカリエッティが映っていたモニターを斬り裂いた技は“スラッシュ デイメンジョン”と言う次元の狭間を斬るものである事をダンテははやてに話していた。

「あのムカつくスカリエッティが言ってた通り、死んだ兄貴の得意技だよ」

「すみません…」

“死んだ”と言う言葉が発せられた瞬間、はやての表情が曇った。

「こんな話… させてしもうて…」

「別にいいよ。スカリエッティがべらべら喋るのが嫌だったただけだ。それより、何だっけ？」

ダンテにとって辛い話をさせてしまったと思うはやてだが、ダンテは特に気にした様子はない。それより彼が聞きたいのは…

「坊やも“次元斬”を使ったって？」

…

「じゃあね、ギンガ」

「失礼します、フェイトさん。スバルも元気だね」

「バイバイ。ギン姉」

六課の隊舎外では、108部隊に帰るギンガを見送るフェイトとスバルがいた。

「じゃあ、私達も戻ろうか」

「はい」

一時間前に起きた悪魔との戦闘が頭から離れてはいないが、歩くフェイトの脳裏に帰還するヘリの中で意識のないネロが言いかけた言葉を思い出す。

（あの時… なんて言おうとしてたんだろう…）

「フェイトさん？」

考え込むフェイトの顔をスバルが覗き込むが、彼女はハツとして「なんでもない」とだけ応えた。

：

「はあ…」

（坊やがねえ…）

シャワーを浴びているダンテははやてから見せられた映像を思いだし、物思いにふける。

「「ジャッジメント カット」…」

シャワーを頭から浴びるダンテは亡き兄が使う次元斬の技名をぼつりと呟く。

（あそこまで似なくていいだろ…）

真っ直ぐすぎる思い、魂の叫び、見据える瞳、“幻影剣”と“幻影刀”、更には“次元斬”…

あまりにも共通点が多い二人にダンテはシャワーを止め、タオルを取り…

「とんだ“置き土産”を作ってくれたもんだな…」

フツと笑った。

：

『まずいな…』

暗闇の世界にいる銀髪の男はそう言い、左手を差し出した。
そこからは青い光を放ち、山吹色の帯が付いている鞘に納まった闇
魔刀が握られる。

：

「ネロ、食事はここに置いていけど。シャーリーの分も」

「ありがとうございます。シグナム副隊長」

デバイスルームに二人分の夕食を持ってきたシグナムにシャーリー
は一礼するが、ネロは何も応えずに黙々とレッドクイーンのエンジ
ンを弄っている。

内燃機関は完全に使い物にならなくなっているが、それを直そうと
する彼の手付きは慣れたものだった。

「ネロ… その… なんだ…」

シグナムが何か言おうとするが、彼は目もくれずに作業を進める。

「体の調子が悪いのなら、主が明日にでも診察を、と…」

「他に言いたい事があるんじゃないのか？」

ようやく返答するが、彼は手を止めず、目も向けない。

「手合わせしろとかさ？」

本調子が出せていない事を知られたネロが嫌味たらしき言い、ようやく作業を止める。

その言葉を聞き、シグナムは一瞬何か言おうと口を開いた。だが、再び押し黙り、

「いや… 止めておこう」

そう言いながらドアに向かう。

「お前が本当の力を取り戻した時に取っておく」

開いたドアが閉まり、シグナムの姿をネロとシャーリーは見送るしか出来なかった。

…

『チツ…!』

暗闇の世界にいる銀髪を後方に撫で付けた男が右手に抜き身の閻魔刀を、左手に鞘を握り締めて舌打ちする。

『まだ… 俺の声は届かないのか…!』

彼の声が“ある男”に届いたのは一度だけ。

『同じ魂の叫びでなければ…!』

“もっと力を…!”

彼の声が届いたのはこれ一つしかなかった。

『うおっ!!?』

突如としてその男の体に電流が走り、跪きながらも荒い息のまま顔を上げる。

『…ない…!』

その男はゆっくりと立ち上がり…

『“時間がないぞ”!!!』

凄まじい青い風を纏いながらも…

『『ネロ!!!』』

左腕と鞘が一体化した“青い魔人”へと変じ、閻魔刀を闇の空間に向けて振り抜いた…

Episode.:53)Start〈本当の始まり〉(後書き)

〈予告〉

t a l k i n g .. はやて

ネロさんとダンテさんの話やったら、二人の出身世界は私らの出身世界： 第97管理外世界“地球”に酷似した世界って事になるなあ。

管理外世界もいっぱいあるし、見付かってない世界もあるんやし、そら当然か：

それより： あの映像でネロさんとダンテさんが戦ったけど：

驚いたわ：

ダンテさん、あれで「結構本気」とか言うんやもん。

ホンマに底の知れん人や：

二人にこれ以上、怪我されても困るし：

シャーリー！ バリアジャケットの方はなんとかしてな？

ダンテさんの方はツテがあるから、リンディ提督とかカリムに：

え？ 新しい“予言”？

ゝ予告へ後幕へゝゝ(前書き)

逃れられぬ運命、宿命…
それは偶然ではなく必然…

〽予告へ後幕へ〽

物語は第二章後幕へ…

「出撃だとさ」

「了解…」

二人の狩人は狩りを始める…

「別にデビルトリガーを使うから本気を出すってワケじゃねえよ」

「ええっ!?!」

底知れぬ力…

「そんなんじゃ赤点だぞ、坊や」

「そうかよ…」

狩人は狩りの時に“100%の実力を出す”と言うが、彼らにそれは通用しない…

物語は進展する…

「悪魔か!?!」

「天使よ」

本当の幕開けへ…

「これ… まさか、“魔具”か!？」

動き出す…

「テメエが博物館開こうが勝手だがな… エンツォになにしやがった!!!!」

「さあ? 今ごろ死んでるかもね?」

魔に魅入られしもの…

「いい目をしている… 私を殺したいようだね…」

込み上げるもの…

「よく言うわね… “不調”なんてカワイイものじゃないんでしょ?」

囚われしもの…

『これ程とはな…』

黒き騎士は…

「もっと力が必要だ…!」

赤き狩人は…

「坊や!!」

新たな戦いに身を投じる…

Devil May Cry《stories
MID-CHIL
DA》

新たな戦いに、“魔法の引き金”は引かれる…

〽予告へ後幕へ〽 (後書き)

え、と言うワケで新しい小説を立てて続きを書きます。

理由は“Magical Trigger”だとデビルメイクライともリリカルなのはとも分かってもらえないし、話がややこしくな
って来ましたし、このままだと100話超えちゃいそうです。

でも、書くのは止めません。往生際は悪くてすみません。

怒られるかもしれませんが、続きも宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6531h/>

Magical Trigger

2010年10月13日12時10分発行